PL
700
.M41
no.13-15

UNIVERSITY OF ILLINOIS-URBANA
3 0112 071411778

LIBRARY OF THE
UNIVERSITY OF ILLINOIS
AT URBANA-CHAMPAIGN

PL
700
.M41
no.13-15

明治文庫

短篇小説

博文館發行

明治文庫第拾三編

目次

吉野拾遺名歌譽　依田學海

未開紅　幽芳女史作　南翠外史補

垣の中　嵯峨の家おむろ

明治文庫第十三編目次

吉野拾遺名歌譽……一

世の中……一一九

未開紅……一四九

以上

耕雨小史評　先把舊史本文。鋪張一番。以襯染下文。

短篇小說　明治文庫第拾三編

◉吉野拾遺名歌譽

依田學海居士著

序幕　吉野行在所惣門外の場　辨の内侍曹司の場
　　　假陣營正行居間の場　皇居長廊下の場
同返し　大和國六田川原の場　同山手の場
　　　吉野山續き山中の場

本舞臺ズット上へ寄せて。檜わだ葺の四ッ足門を斜に見せ。上下一間ヅヽ御所風の練塀正面より下手へ所々樹木のあしらい。向ふ一面山々に樹木の茂りたる遠見。此樹木の間より行在所の庇。練塀の續を遠く見たる書割。物すごきもやうよろしく。すべて吉野行在所惣門外の体。

爰に守護の武士。伊賀平次國枝。飛坂兵衛忠基。烏帽子直垂小具足附太刀にて床几にかゝり。下手に仕丁三人棒を持ちひかへ居る山おろしにて幕明く。

平次　先帝此吉野山へ御幸在し〳〵てより。數へて見れば早や十餘年。新田楠の兩將を始め。名あ

懦弱兵士。言語自如レ此。

先將ニ正行ニ一點。蓄男主先見。乃文法。

歴史本文。點綴得好。

る智勇の人〻は次第に戰場に討死し。殘る忠義の者共は心は鐵石にかたむれど。或ハ討死或は病死。日に增し軍威の衰ふるは。未だ時の至らざるか。但しハ御運の末なるか、賴み少なき今の有樣。御身如何思はるゝや。

兵衛 いかにも和どのゝいはるゝ如く。畏くも先帝には。かゝるいぶせき假宮にて。日夜叡慮を惱まし給ひ。朝敵誅伐の御志しも果し玉はず。終には崩御在しまして。朝家に屬する者共は。闇夜に燈を失ふ心地。勇氣もくだけ心もよわり。歎きに沈むの外はなし。

平次 夫のみならず諸國の官軍。開かぬ御運を見限りて過半は賊徒に心をかたむけ。さしも普天卒土王土と云ふは。大和を始め河内和泉の三ヶ國おところへ果し御ありさま。

兵衛 されど一ツの賴と云ふは。先年湊川にて討死ありし。楠 正成公の嫡子正行朝臣。年はやう〳〵二十三四なれども。智略は故中將におとらず。衆にすぐれし勇膽義烈。

平次 和田恩地を始めとして。義を金鐵にかためたる一騎當千の勇臣。多く當新帝を補佐し奉り。尊氏が强敵にあたり。未だ一度の敗を取らず。戰ふ毎に每度の勝利。

兵衛 既に去月河内の國譽田林。又藤井寺の合戰に。賊將細川陸奥守顯氏を散々に打敗り。さすがの高の師直も。恐れて軍サを止めしは。偏へに楠の武功によれり。

平次 まことに稀れなる名將軍。此人かくてればさんには。吉野皇居は無事安泰。

兵衛　頓て賊徒を討亡し。再び君の御運を開く。時こそ有らめと存ずれば。
平次　是ぞ味方の一ッの頼み。
兵衛　いよ〳〵粉骨碎身なし。
平次　忠義の二字を。
兩人　磨き申さん。
平次　イヤナニ其方共も。輕き身分とは申乍ら。君の御爲忘れまいぞ。
○仕丁　へイ〳〵私共は武家と違ひ。年が年中箒を持て。御掃除を致し居れば。
△　何の御役に立申ぬが。忠義に二ッはござり升ねば。
□　楯のかはりに先へ出て。命を限りに働き升て。御恩報じを致し升る。
平次　ヲヽ出かした〳〵よく申した。かく下々の者迄も。忠義に一命惜まぬは。偏に聖德の及ぶ處。
兵衛　頓て榮を見るでござろう○イヤナニ其方共もかゝる時節のことあれば。若し敵の間者のもの入込まんもはかられず。あやしきものと見たならば必ず共に心を付けよ。
○　畏してまりてござり升る。怪しき者と見た時は。
△　寄てかゝつて引捕へ。
□　すぐにひきづッて參ります。

古語云。爲ニ君御楯一以當レ敵。亦是等語。

此一語。引ニ出下文。

平次　ヲヽ必ず共に油斷いたすな。さき程より余程のひま入り。イザ一ト廻り見廻り申さん。
兵衛　イザ御同道致し申さん。
ト各の鳴物にて兩人上手へはいる。
○　今のれ二人りの咄しの通り。楠樣が御座るさかひ。なんでも軍サは勝に相違ひなひ。
△　とかく云ふ内に敵方の間者のやつでも。つかまへて立身出世をしたいものじや。
□　アレ〳〵向ふからなんじやヽら。希体なやつがあゆみくるぞよ。
○　キヨロ〳〵してくるからは。何でも間者にちがひなひ。たヽきのめして手柄に仕やうせ。
△　油斷をするなよ。
□　合點じや。
ト三人身がまへをする事よろしく有。山おろし合方にて。向ふり鷺野の郎等關伴吾。きりわらかづら胴服小袴一本指。草鞋旅形りにて出て來り花道にて。
伴吾　ヤレ〳〵くたびれた。どうぞ早く御主人に御目に懸りたいものじや。
ト直に本舞臺へ直る。上手へゆきかける。仕丁三人上下より取りまき。
○　怪しいもの。
□△　そこうごくな。

口中形ニ容模樣一來妙。

是自ニ京師一還來語。

未説出主人姓名。自覺尷尬處。妙絶。

ト是にて。伴吾思入有て。

伴吾　アヽイヤ拙者は。是なる吉野に御奉公をつとむる者。決して怪しい者では御座り升ぬ。

○　イヽヤいくら言ひぬけても。なみ〳〵ならぬつら魂。

△　殊にこゝには見なれぬやつ。いはずとしれた京方の。

□　間者のものに相違ない。サア尋常に名乘て仕まへ。

伴吾　イヤ決して左樣な者では御座らぬ。主人の使に旅行なし。只今歸りて參りし者。どふぞ爰をお通し被下。

○　其名も名乘らず通らんとは。

△　いよ〳〵もつて。怪しいやつ。

□　ひつくヽつて。詮議なさん。

伴吾　さりとては迷惑千萬。どうぞ疑ひはらして被下。

○　エヽめんどうな。ソレ。

ト早目たる合方にて。三人一度にかヽる。一寸立廻つて。きつとなる。此時上手の奥より。鷺野平内左衞門時景。鎧直垂烏帽子附太刀にて。草履をはき出て來り。

平内　ものどもひかへイ。

不怒罵處。自有些蹺蹊。

密使不說破。反覺妙。

ト是にて四人下手へひかへる。

夫なるものは身共が郎黨。必ず怪しい者ではないぞ。

○　そんならあなたの御家來で御座り升たか。

△　一圖に間者と思ひ込み。

□　とつけもないそゝぶを致し升た。

○　御めん被成て。

三人　被下ませ。

平内　是と申すも其方共警固におろそかならざるゆゑ。決て咎むる處はない。用事はないゆけ〳〵。

○　へイ〳〵有りがとふ御座ります。おゆるしの出た上からは。

△　私どもは是よりすぐに。

□　部屋へ參るで御座り升ふ。

○　へイ有難ふ御座り升る。

ト仕丁三人下手へはいる。跡合方に山おろしをかすめて鷺野あたりへ思入有て。

平内　兼て多田の院の別當と示し合せし。密事のつかひ太義で有た近ふ〳〵。

伴吾　ハヽ他聞を憚る大事のお使ひ。首尾よくいたして。彼方よりお返事が參り升た。

放二一箇一去。即迎二一箇一來。

不下直入二密事一來上。下二一蹶一。

ト懐中より密書を出して渡す。平内受取りて。

平内 シテ別の仰はなかりしか。

伴吾 お返事の其外に。仰を受けたる機密の大事。其仰の子細と申すは。

平内 アヽコレ。

ト耳を示す。伴吾さゝやく。平内一〻うなづく事よろしく。

ヲヽよし〳〵承知致した。まだ申付る用事もあれば。汝は是より陣所へ参り。ひとまづ休足致すがよい。

伴吾 左様なれば。拙者めは。休足致すで御座り升ふ。

平内 ヲヽ太義で有た。

伴吾 ハヽア。

ト前の鳴ものにて。伴吾下手へは入る。鷺野跡を見送り。あたりへ思入有てこの密書の封を切り。読み下す。此時上手の門の内より。多田の院法橋鎧直垂坊主かづら。烏帽子附太刀草履にて出て来り。

多田院 鷺野との。

ト是にて。鷺野びつくり密書をかくす。

是に御座つたか。

師直事。不説出一字。使看者不能猜着。

不自説者説出。自聴者説出來。乃妙。

兩國二字。遙照篇首。

平内　たれかと思へば。千島どの。びつくり致した。
多田院　申合せし一義に付。御身の居どこを尋ておつた。
平内　兼て御身と申合せし一義。上首尾で御座る。
多田院　ナニ上首尾とな。
平内　彼方よりして送し書翰御覧被成。
ト此密書を出して見せる。多田院取てよむ事有て。
多田院　何さま此文ていでは大丈夫。ナレ𪜈是なる文中に。達て頼とするしあれど。其次第の御座らぬは。如何なる事か御存じなるや。
平内　其義は郎黨伴吾より。事つまびらかに申しこされた。
多田院　シテ其頼みの次第と云ふは。
平内　其頼みと申すは。
ト耳に口をよせさゝやく。
かうで御座る。
多田院　スリヤ當御所の女官の内。美人ときこへの辨の内侍を。
平内　夫さへ首尾よく渡したなら。望みの通り両國を與へんとある此文てい。

向二多田院口中一。補二叙前事一。於レ文爲二省筆一。於レ事爲レ避レ板。

又向二平内口裏一。補二内侍及。伊賀局平素一。何等輕捷。

多田院 いまだ都にありしとき。嵯峨の花見の其折に。見そめられたといふ事は。人の噂に聞き居しが左程に熱心召さるゝか。イヤ夫なれは安き事。たかゞかよわひ女のひとり。拙者家來に申付。今宵の内にぬすみ出し。彼方へ渡し申さん。

平内 イヤ〳〵それは覺束なし。たかゞ女とは申せども。アノ辨の内侍は先つとし。北條高時の爲めに。あへなくうたれし右中辨俊基の娘にて。先帝の御時より此宮中に勤仕して。人にとつぐ事を願はず。忠義一圖の義烈の女。夫のみならず此程より。辨の内侍が妹と爲し。部屋に養ふ。伊賀の局は。新田の勇臣篠塚伊賀守が娘にて。容貌美麗の女に似合ず。壯士も及ばぬ無双の怪力。かゝるものがつきそひ居ればうかつに事ははかられず。計略を以てだますに手なし。此義に付ては某が一工夫致すで御座らふ。

多田院 イヤ〳〵夫れは餘り思慮に過ぎたり。和どのゝ器量に引くらべ彼が勢をますと申もの。何程の事かあらんや。其義は拙者にお任せ被成。

平内 和どのは左樣に仰あれども。あなどり難き二人りの女。此義はひらに。某が思案御座ればお任せ被下。

多田院 日比の勇氣にふさはしからぬ。要心すぎた和どのゝ思案。歯がゆひやふには存れど。左程までに仰ある事。まづは和どのにお任せ申さん。

平内 細工は流〻仕上の程を。

此一句。反現出一段文字。

密書須着眼。

看不慣三字。後段爲伊賀局殺賊。不知其爲何人線索。

多田院　首をのばして。お待申そふ。

ト少し不平の氣味にて言ふ。

何はともあれ。是なる書翰。

ト密書を渡す。鷺野受取て懷中する。上手より多田院の若黨横川丹下。胴服小袴一本指にて出て來り。

丹下　御主人是にお出有しか。只今飛坂兵衛どの。何かお談事の筋有とて。おこしに御座り升す。

多田院　然らば。直樣參るで有ふ。

平内　ついに見似ぬ御從者は。

多田院　今日かゝへし。新參もの。

ト丹下を見て思入有て。

てふど幸ひ。

ト平内と顏見合せ。

鷺野氏お先へ參る。

トづか〳〵とゆきかける。

平内　アヽイヤ千鳥どの。かへす〴〵も只今の一義。必ず拙者にお任せあれ。

小人爭レ功情狀。任レ力寫出。反不レ見二痕跡一。

多田院　いかにも。承知いたして御座る。

平内　然らバいよ〳〵御承知とな。

多田院　武士の言葉に。二言ハ御座らぬ。

平内　どうやら心に。

多田院　ヤ。

平内　しかとことばを。

兩人　つがへ申した。

ト是の鳴物にて。多田院よろしく思入有て。丹下付て上手へはいる。跡合方。

平内　多田の院が今のうぶり。何とも以て心がゝり。われを出しぬき。ひとりして。事を成んも計られず。破れとならぬ其先に。よい計略が有りうふなもの。

ト向ふを見て。

ムゝあれへ參るは。此程まで辨の内侍に仕へし女。品によつたら。

○　ムゝ。

トきつと思入れ。早き合方にて平内早足に上手の奥へは入る。山おろし合方に成り。向ふより侍女梅ケ枝さげ髮かづら。古代の衣裳。ちいさき包ヲ持出て來り。花道にて。

梅枝情事。不レ始ニ於此一。只此一句便見。老僕於レ此始見。一篇文字以ニ老僕一爲レ結。反如レ不レ經レ意者上乃好。

梅ヶ枝　いつものよふに主計殿が。あそこに居て下さんすりやよいが。どうぞ早ふ逢ひたいものじや。

ト此鳴物にて本舞臺へ來る。上手を見込で。頻にうかゞふ事よろしく有。下手の奥より。楠家の老僕安達藤六。白髮かづらキリワラ。胴服小袴一本指にて出て來り。

藤六　コレ娘。

ト梅ヶ枝うつかり。上手の奥を見て居る。

コレ娘。

ト脊中をたゝく。是にて梅ヶ枝びつくりする。

何をして居るのじや。

梅ヶ枝　お前はとゝさんびつくりしたわいナア。

藤六　何も其やうに。びつくりする事が有もので。そうしてけふはどこへゆきやる。

梅ヶ枝　アノけふは。急ぎのすゝぎものを頼まれました。とゝさん一寸いつて來升ぞへ。

トゆかふとする。

藤六　アゝコレまちや。少しそなたに咄しがある。マアこゝへ來や。

梅ヶ枝　夫でも急きの頼れもの故。一寸わたしやいつて來ます。

藤六　そふでも有ふが。用が有。マアこゝへ來ひといふに。

トきつといふ。

梅ケ枝　ハーイ。

ト梅ケ枝ふせう〴〵。藤六のそばへ來り。兩人捨石に腰をかける。

藤六　そうしてそのすゝぎものは。どなたの頼みじや。

梅ケ枝　ハイアノコレハ。里見殿。イヽエアノ須田殿に頼れ升たわいナア。

藤六　須田殿の。御陣所なら。是より北へとつてゆくはづじやが。

梅ケ枝　エヽ。

藤六　わりや親に。うそをつくな。

梅ケ枝　イエ〳〵。そふでは御座んせぬ。けふは此御所内に來て居れば。詰處へとゞけて呉との事故。夫でこちへ來たのじやのわいナア。

藤六　なんじややら。そは〳〵と。前後揃はぬ言葉のやうす。わりや未だ心が直らぬなコレ此間親父がくれ〴〵いふて聞せた事。よもや忘れはせまひがな。

ト合方さつぱりとなる。

改めていふではなけれども。もとおれは河内の國。赤坂在の百姓で。正成公に召出され。何の御用にもたゝぬものを。只正直なものと有て。正行様のれもり役。極れちいさい時分から。ぢいよ〳〵とおつ

後段伏案。

梅枝圖是。内侍使婢。於此處叙出。

しやて。少しもそばをおはなしなさらす。主従やら友達やら。わからぬやうにおなじみ申し。とふ〳〵此吉野までお供して。おれはふもとへ家をつくり朝夕上りて御奉公。そなたは辨の内侍様へ。お宮仕へに上つてから。月日を送る其内に。先帝には崩御まし〳〵。宮方は次第におとろへ。敵は日増に威勢つよく。いつなん時此御所へ。押寄せて來よふも知れねば。お上を始め宮方では。夜の目もあわぬ御心配御苦労なさる其中で。有ふ事かそなたには。里見様の御家來主計殿と不義徒ら。若ひうちは有うちの事とはいへど。きびしひ軍令。法度を犯せば重罪ゆへ。死刑はのがれぬ二人りが身の上。それといわずに内侍様が。そなたに暇を下されたは。お情である御計らひ。御恩を仇にいつまでも。阿漕が浦の度重り。事顯れた其時は。大事に思ふ主計様の。お命にかゝわる事。あなたを大事と思ふなら。此間もいふた通りふッつり思ひ切てしまや。そうない時は是迄の。わが身の忠義も水となり。そなたゆへに此親迄どの面下げて人様に。顔向けがならふと思ふ。いかに年がゆかぬといふて。是程の道理がわからぬか。見下ゲはてたおのれはナア。

トうれひの思入よろしく異見する。梅ヶ枝じつと思入有て。

梅ヶ枝　とゝさんかんにんして下さんせ。わたしがわるふ御座んした。今おまへのいふ事は。よふききわけて居る程に。もう〳〵決して案事て下さんすな。主計殿にも咄しをしてけふこそふッつり。二人りが中は。わかれる事にしてある故。どうぞ安心して下さんせや。

老人語氣。自絮繁却見其溺愛。

不得不留一句。不然這箇老人。豈不耄甚。何以有末段奮勇氣象。

藤六　イヤ／＼どふもおのれは呑込ぬ。それはそなたの一寸のがれ。夫とも又本まに思ひ切たなら。おれと一處に内へ歸へれ。

梅ケ枝　それじやといふて。今日ハ急ぎの屆物を持て居れバ一寸とゞけて直に内へかへる程に。先へいつて待て居て下さんせ。直に跡から内へゆき。もふどつこへもゆかずに居るのが。わかれたといふしやうてで御ざんすハいナア。

藤六　なる程。夫程にいふ事なら。さきへ歸つて待て居やうわへ。

梅ケ枝　すぐに跡からかへるはいナア。

藤六　そんならおれは。一足さきへゆかう。あとでとつくり。

梅ケ枝　エ。

藤六　娘待て居るぞよ。

ト山れろしになり。藤六よろしく思入有て下手へは入る。

梅ケ枝跡を見送りて。

梅ケ枝　コリヤマア。困つた事になつて來たわいナア。

トよろしく思入。なまめきたる合方になる。上手の門の内より淺川主計總髮キリワラ、　胴服小袴附太刀草履にて出て來る。

此一句。省二却多少言語一。

主計　梅ケ枝。
梅ケ枝　ヤ主計さん。逢とふ御座んしたわいナア。
主計　我とてもそなたに逢たく。先刻是へ來合せて。藤六殿が段々と事をわけたるそなたへ異見。出るに出られず門内に委細の樣子を聞て居たはへ。
梅ケ枝　とゝさんが今の異見。身にしみ〴〵ときゝわけれど。どふしたわけかおまへの事。思ひ切られぬわたしの因果。どうしたらよふ御座んせう。
主計　一日逢ねば千秋の思ひは。われも同じ事かゝる時節の其中にて。女に魂を奪はるゝ。武士の身にはあるまじき所業と知れば。いく度か心で心を戒むれど。思ひ切られぬ心の煩惱。といつてわかれぬ其時は。君へは不忠先祖へ不孝。
梅ケ枝　もし主計どの。
主計　コリヤなんとしたら。
兩人　よからうナア。
ト兩人よろしく思ひ入有。
梅ケ枝　もし主計さん。さう考へて計り居ずと。けふにつゞまるわたしが身の上。よい思案して下さんせいナア。

一頓折。

主計　今藤六殿のいわれし事。いち〳〵尤至極の道理。殊更是が露顯なさば。此身斗かりか。御主人の御身の上にもかゝわる仕義。どふ思ひ直してもわかれるより外。思案はないわへ。

梅ヶ枝　そんならお前はわたしをば。今更見捨る心かいナア。

主計　なんの今更見捨るどころか。今もそなたにいふ通り。思ひそめては中〳〵に。わかれる心はさら〳〵ない。切るに切られぬ煩惱の。きづなをたつも御主の爲め。おれは思ひ切て居る程に。そなたも思ひ切てくりやれ。

梅ヶ枝　ソリヤ情ない主計さん。親のことばに背くとも。わたしやわかれる心は御座んせぬ。そんな事いわずとよい思案して下さんせ。

ト主計じつとうつむいて居る。

もし主計さん。どうぞ思案しかへて下さんせ。もし〳〵是程いふに返事のないハ。どうでもいやになつたのかいナア。今さらおまへに捨られて。わたしが身ハなんとせふ。所詮そはれぬ事なればそうじや

ト主計の小刀へ手をかける。主計これをとめて。

主計　是ハ又短慮千万。早まつた事致すまいぞ。

梅ヶ枝　はなして。殺して下さんせ。

主計　どふしてこれがはなされやうぞ。此主計へのつら當に。死る心か知らねども。大恩ある藤六殿へ。

そなたは不孝にならうがや。

梅ヶ枝　たとへ不孝にならうとも。おまへにわかれて何たのしみ。わたしやいきては居升ぬわいナア。

トなく主計じつと思入有て。

主計　夫程までに此主計を。

梅ヶ枝　わたしの因果で。御座すわいナア。

主計　か程に慕ふてくれるものを。なんと是が捨られやう。いかにも二人り。夫婦にならふ。

梅ヶ枝　エヽそんならわたしの願ひをば。

主計　叶へひでなんとせふ。

梅ヶ枝　うれしう御座んす。とはいへ。今の二人りが身の上。よい思案が御座んすかへ。

主計　外の思案もなけれども。是より二人り爰を立ちのき。弓矢を捨て土民となり。山野の住居をしてなりと。そなたと二人りくらす所存。

梅ヶ枝　そういふ事なら少しも早ふ。つれてのいて下さんせ。そうして二人りが行く先ハ。

主計　どこといつてゐてハなけれど。爰に居れぬ互の身の上。思へば是迄。大恩を。うけし主人をよそになし。此身を退く不忠不義。

梅ヶ枝　内侍様のお情を。仇に此儘身をかくせば。お主人へ不忠。親へハ不孝。

無レ所レ往乃。所レ以レ爲ニ間諜一。

只是在二頃刻一。

兩人分說。忠孝自然節奏。

主計　敵をおそれてにげかくれし。腰ぬけ武士とわらはゞわらへ。

梅ヶ枝　さぞや後にてとゝさんが。にくいやつめとお腹立。

主計　其天罰のむくひ來て。

梅ヶ枝　頓てうき目を見る事も。

主計　知りつゝ犯す身の大罪。

梅ヶ枝　切るに切られぬ二人が惡緣。

主計　思へばはかなひ。

兩人　身の上ぢやナア。

ト兩人よろしく有て。

主計　不義を犯せし不忠の大罪。

梅ヶ枝　親にそむける不孝のつみ。

主計　おゆるし被成て。

兩人　下さりませ。

トよろしくわび入る事有て。

主計　人目にかゝらぬ其內に。

行在。自有行在摸樣。不是帥々。撿非違使句著眼。

罪止其身。不敢輕々爲他人間諜。獨奈連累主人。逼來爲之。自有此等情實。

梅ヶ枝　少しも早ふ。

主計　サア來やれ。

ト兩人手を取りゆきかける。此時上手の奥より。以前の鷺野出て來り。

平内　不義の兩人そこうごくな。

ト　ずつと前へ出る。兩人びつくり。

主計　ヤヽあなたは鷺野。

梅ヶ枝　時景様。

平内　かゝる時節も辨へなく。不義をはたらく不屆きもの。我目にかゝる上からは。見のがしにハ相成らぬ。是より直に汝ら兩人。撿非違使の官人へ引渡し。きつと軍令正さにやならぬ。

主計　ハヽ。かく御目にとまる上からは。今さらなにと身のいひわけ。申解くべき言葉とては候はず。如何にも我〱兩人は。いか成る重き刑罰に。行はるゝも此身のさび。

梅ヶ枝　軍令犯せし不義の咎。こゝで命をめさるゝとも。さら〱いとひハ御座りませぬ。

主計　只情なきは。撿非違使の手に渡る其時は。我ゝばかりか覺へなき。主人主税助が身の上にも。かかればつらある兼ての軍令。何卒主人の身の上に。かゝわる事のこれなきやう。

梅ヶ枝　どうぞ二人りを此場にて。あなたのお手にかけられて。

主計 御成ばいを遊ばされ。主人の身の上つゝがなきやう。弓矢の道の御なさけ。

梅ヶ枝 どふぞお慈悲に時景様。

主計 偏へに願ひ。

兩人 上げ升る。

平内 ムゝハゝ。汝ら不義をはたらくからは。事顯れた其時は。主人の身にかゝわる事は。素より承知で爲したる罪。今さら何程申そふとも。軍法は破られぬ。

主計 スリヤいかやうに願ひ升しても。

平内 頓て主人の主税の助も。多分は切腹致すで有ふ。

主計 ヱゝ我〻が科よりして。何御存なき御主人に。

梅ヶ枝 御切腹をさせ升せねば。ならぬ事になつたるか。

主計 コリヤもふいつろ。ムゝ。

平内 ヤゝ大罪犯せし身をもつて。私しに死をとげんなんどゝ。叶わぬ事だ。

主計 スリヤ。どふあつても此儘には。

平内 是より陣所へ引立ゆき。二人りは素より主税之助も。軍法通りに行ひくれる。サア身と一處におゆみおれ。

時景以梅
枝爲間
諜事省得
好只此一
句全身呈
露一張一
弛操縱自
在

主計　めぐりは早き小車の。
梅ヶ枝　ひくよひかれぬ。
主計　絶たい絶命。
平内　其身に重き罪咎も。魚心あれば水でゝろ。
主計　なんとれつしやる。
平内　身共が陣所へ。
　ト　やさしく云て。顔見合一寸氣をかへるを。道具かわりのしらせ。
さり〳〵うせふ。
　ト　平内きつとなり。兩人是非なきこなし。此もやう山おろし合方にて。道具まわる。
本舞臺三間の間中足の二重家体。三方折まわして。檜皮葺の庇。椽側高欄付。金襖の古びたるもやう。上の方一間奥へ下げて。續き家体同じく庇椽側高欄付。古びたる御簾を下げ下手に三尺の廊下口。上の方大樹の立木にて見切り。下の方破れたる網代垣。樹木のあしらひよろしく。同じく立木にて見切り此道具皇居の摸樣。一切ふるびて物さびたるてい。誂へあり。すべて皇居内。辨の内侍曹司のてい。爰に二重の上の方に。辨の内侍さけ髮かづら白小袖うち着緋の袴にて褥に座し。古今集をよみ居る。二重の下手に伊賀の局さげ髮かづら白小袖緋の袴にて。長刀の身をふき居る。

把古歌來。做箇冐頭。詠香二字主眼。
語中。自有荒涼凄慘之意。此是一篇詠懷賦。

此もやう遠く笙の音をかすめたる誂への合方に。わづかに虫笛をあしらひ道具とまる。

辨内侍　流れては。いもせの山の中におつる。よしの丶川のよしや世の中。貫之朝臣がゑらまれし。昔しはいもせの中にれつるも。今は都のかよひ路の。中をへだつる吉野川か丶る深山の假宮に。うきは身にしむ木がらしの。風も敵かと驚かれ。便りにきくは修羅道の。外にはなにの音傳さへ。なく虫の音を友として。あるに甲斐なき皇居の有さま。

伊賀局　月卿雲客の人〻も。雲の上とは名のみにて。軒もる雨もふせぎかね。こけの筵のおきふしに。御身になれぬ賤のわざ。都の方を詠めては。昔しゆかしき懷舊の。情に袂をひたしたまひ。

辨内侍　朝夕木の下岩影に。清水を結ひ渇を凌ぎ。ひまゆく駒をいたづらに。たゞ九宵の雲を望み。

伊賀局　時を侍間の夜あらしに。落る木の葉も身の上と。心にひゞく遠寺の鐘。

辨内侍　是非もなき世の。

兩人　ありさまじやナア。

ト兩人よろしく此のせりふの内。伊賀の局ハ長刀の身をふき。さやをかけてかたへ丶押やる事有。

伊賀局　内侍樣。けふハお上のおひけも早く。こふいふ時に少しなと。お氣をれなぐさみ遊しませ。世が世の時で有るならば多くの人にかしづかせ。蘭奢の薫りのその中に。襖の風さへいとふ御身が。か丶るいぶせき假御殿。なれもならハぬ深山の御住居ひ。さぞお氣うつに御座り升ふ。

同志相恤。義見ニ乎言一。是豈尋常婦子。

謙遜辭讓自見ニ其性情一。

語氣溫順。自然有ニ命婦氣象一。

末一句是着眼。極有ニ力量一。是女丈夫口氣。

辨内侍　わらはよりはそなたこそ。上なき君にれ仕へ申す。其身の果報は有ながら。女官といふも名のみにて。部屋に在ては侍女同樣。賤の手わざもいとわずに。わらはを助すくるそなたの深切。忘れおかぬうれしゐぞや。

伊賀局　内侍樣とした事が。改まつた其お言葉。御存の通りわらはが。身は石山寺のかたほとり。母と二人で世を忍び。賤が伏やに落ぶれて。埋れ果る身の上を。隆資公に召し出され。おはけなくも官仕へ。なれぬ雲井の式令節會。あなたのおかげでやう／＼と。女官の内にかずまへらるゝ。御恩れくりの万分一。どふぞ御心れかれずに。おつかひ被成て被下ませ。

辨内侍　其やうにはいやれども。もとそなたの身はたれ有ふ。左中將義貞朝臣の御内にて。武勇すぐれしますらをと。世にひゞきたる篠塚伊賀守殿の娘なれば。御宮仕へに何憚らぬ氏素性殊に長刀兵法も。武士に勝る勇力武藝。かゝる器量を持ながら。卑しき賤のわざまでも。いとふ心の無きそなた。心の内が思ひやられてあらぬわいのう。

伊賀局　ナンノマアそのやうな。御心遣ひに及びましやうぞ。久しく深山の住居をなせば。おのずとなれし賤の手わざ。何とも思ひは致しませねど。あなた樣には右中辨。俊基朝臣の御息女にて。やんごとなき御身に有りながら。時代とはいひながら。此朝夕の御不自由。御門の爲に御心をお盡し遊ばす御辛勞。お察し申し上げ升る。

漸入蔗境。一塲慷慨悲憤。不流麁暴。自是女流語氣。

篠塚去。不知所之。故云。

内侍一味溫柔中。自有慷慨意旨。局一肚勇烈。自有含蓄摸㨾。一雙美人。兩㨾美質。

至此吐出心腸。語不絮繁。反好。

辨内侍　其辛勞は此身ばかりか。皇后皇妃の御身にさへ。夜の目もあわぬ御心遣ひ。是といふのも朝家の御運。爰にかたむく時なるか。かゞへて見れば早十九年。我父俊基朝臣には。執權北條高時が暴逆を打亡し。叡慮を安め奉らんと。被成し事も果さずして。むざんの刄に世を去り玉ひ。其後新田楠の忠臣出て。高時を討亡し。一度君の御世となし。父が忠義は貫しが。又もや賊臣尊氏が。逆意の爲にせばめられ。今は是成よしの山に。わづかに皇居をたて玉ひ。

伊賀局　正成卿を始めとし。義貞卿も。無念の御最期とげ給ひ。父にて侍る伊賀守も出てゆくへは白波の跡とふすべもなき世となりしハ。皆反賊尊氏が爲せるわざ。

辨内侍　いかでわれとは思へどもかよわき女の悲しさハ。打物とりて出るにも出られず。軍議の席へつらなるさへ。ならぬ此身のふがひなさ。

伊賀局　今此儘に日を送らば。忠義を思ふ人〻も。次第に賊の手に降り。日に増しせまる朝家の成行。何卒賊を討ちしづめ。叡慮を安んじ奉らんと。思ふに甲斐なき女の身。

辨内侍　女子同士でかたらふとも。所詮及ばぬ天下の大事。兼てわらはが心中に。秘して今までいはざりしが。實は天下の豪傑に此身をまかせて因を結び。内外ともに力を合せ。思ふ忠義を貫ぬかんと。心を決して居るわいのう。

伊賀局　わりふを合すそのお詞。わらはも忠義の勇將に。縁を求めて力をたのみ。盡さんものと兼てよ

悲壯慘澹與朽簷破簾相映帶有一段光景

り思ひ定めし心の操。

辨内侍　そんならそなたも其心か。そうとは知らずけうまでも。いはぞかたらぬ互の心。

伊賀局　あかして見ればあなたにも。思ひは同じ忠義の道。

辨内侍　女ながらも身を粉にして。

伊賀局　かたむく御代をとりもどし。

辨内侍　再び開くうどん華の。

伊賀局　花咲春は願へども。

辨内侍　御運の末となるときは。

伊賀局　かくごは兼て修羅道の。

辨内侍　ちまたにさらす互のかばね。

伊賀局　吉野の山の雪霜と。

辨内侍　はかなくきゆる身のなる果。

伊賀局　それぞ氣運の至れる時節。

辨内侍　頼みなき世の。

兩人　なりゆきじやナア。

與前面藤六語相應不漏一絲。

梅枝爲間諜實出不得已此一句寫出左思右想光景。妙極。

ト兩人憂ひのこなしよろしく有。下手の廊下口より侍女一人出て來り。

侍女　內侍樣へ申上げます。三位樣の北の方の御使ひとして。此程御暇になり升たる。梅ヶ枝がお文箱を持參いたし。御目通りを願ひ升るが。いかゞ斗ひ升ふや。

辨內侍　ナニ。二階堂の叔母上よりのお使に。梅ヶ枝が來りしとや。御程暇は遣したれど。別に罪なきあの梅ヶ枝。殊に常〻なつかしう。思ひ申せし叔母上のお使ひとあれば。苦しうない是へ通ふしや。

侍女　畏り升た。

ト侍女もとの廊下口へは入る。

辨內侍　暇をあたへし其後は。便りもきかぬ梅ヶ枝が。二階堂にまします叔母上に。おつかへ申て居やるとや。

梅ヶ枝　お暇をいたゞき升てより。今は當國高市郡二階堂にまします。三位樣の北の方に御奉公をいたし升る。

辨內侍　ヲヽそうで有たか。シテ叔母上にもおかはりあらざるか。

梅ヶ枝　ハヽ

トうつむいて居る。

辨內侍　コレものいわぬは子細が知れぬ。叔母上にはつゝがなくわたらせ給ふか。早ふ樣子をきかせて

語氣婉柔。與ニ響語一自別。見ニ婦人至性一。

哀痛悱惻。妙動ニ人心一。

たも。

梅ヶ枝　委細の事は此お文に。くわしう書て御座り升る。

ト文箱を出す伊賀局とりついで內侍へ渡す內侍封を切り文を出して

辨內侍　ハテ心得ぬ餘人の手跡。

ト心ならぬ思入にて。文をひらきよむ毎に驚き。うれひの思入。

ヲヽ此文のやうにては。叔母上には此程より。御いたつきにて。いともあつしくおはしますよし。梅ヶ枝御ありさまはいかゞなるや。

梅ヶ枝　そのお文にも。くわしう書て御座り升るはづ。御病氣におなり遊してより。日に增し御樣子わるく。此四五日はお食もすゝます。御大切な御樣子に御座り升る。

辨內侍　ヱヽ。夫程の御ありさまとや。うみの父上母上には。御恩も贈らずおわかれ申し。たよりに思ふは叔母上ひとり。此吉野へこもりてより。お目にかゝるもまゝならず。お顔を見ねばことさらに。おなつかしさもなほまさり。思はぬ日とてはなきものを。是程の御いたつきに。ならせ給ふも露しらず。お側に付そふ事さへも。心にまかせぬ仕への身。幸なきものは我身じやナア。

トよろしくうれへの思入。

伊賀局　內侍殿常〻御慕ひ遊ばした。北の方。御大病さぞ。御苦勞で御座り升ふ。お察し申上升る。

梅ヶ枝　御奉公に上り升てより。お側に御つかへ申うちも。内侍様のお噂計り。たゞなつかしく思召て。朝夕のおものがたり。殊更今の御大病。たつた一ト目逢たひと。其事ばかり被仰てゝ御座り升る。もはやけふあすにも。頼みすくなひ。みありまさに御座り升る。

辨内侍　かくさく上はかたときも。うち捨てられぬ今わのきわ。はやくお上へお願ひ申し。今宵直に御暇給はり。せめては一と夜お側にて。御みとり申上げふ。コレ梅ヶ枝。そなたは早ふさきへかへり。口上を申そふには。上よりお暇給はらば。直に跡より参り升ると。よふ叔母上に申してたもや。

ト文箱を出す。伊賀の局とりつぎて。梅ヶ枝に渡す。梅ヶ枝受取て。

梅ヶ枝　畏り升て御座り升る。此事申上げ升たら。さぞおよろこびに御座り升ふ左様なれば。私は。早やお暇致し升る。

辨内侍　ヲゝ大義で有た。

梅ヶ枝　ハゝア。

ト合方にて。梅ヶ枝式禮して。よろしく下手へは入る。跡内侍氣遣ひの思入よろしく。

辨内侍　是より直にお上へ往て。今宵一ト夜のお暇を。お願申して來やふわいのう。

伊賀局　わらはもそこまで。御つき申さん。

辨内侍　少しも早ふ行き升ふ。

議論醇正言不レ過レ激貞是儒將氣象

ト琴唄に成り。兩人立上り。ゑとやかに奥へは入る。唄切れる。時の鐘風の音に成り。下手の立樹の影より。以前の横山丹下。烏帽子に覆面忍びのこしらへよろしく。刀を帶て出で來りあたりを伺ひ。

丹下　御主人への奉公始め暮てしまりのつかぬうちと。爰までは忍び入しが。まだ暮るにはよほど間もあり。〇ム丶。

ト丹下よろしく緣の下へ忍ぶ。知らせに付風の音にて。此道具まはる。

本舞臺少し上へ寄せて。二間常足の二重家体三方折まはして茅葺の庇。同じく丸木の緣側眞中にくつぬぎの石、向ふ古びたる唐紙上の方奥へ下げて。一間のつゞき家体。圓相など。下手三尺の廊下口つゞいてふるき練塀の袖を見せ。上の方樹木をあしらひ。古びたる練塀にて見切り。下の方同斷。向ふ山〻遠見の書わり。吉野山麓のもやうすべて　楠正行居間の体。

爰に二重の上の方に。楠正行烏帽子鎧直垂小刀を指し。見臺にむかひ。兵書を讀み居る。うしろに太刀かけへ太刀をかけ。鎧櫃へ鎧をかざり。鎗弓矢等よろしくたてかけ。

時の鐘合方に風の音をかすめて道具とまる。

正行　傳へきく。唐の玄宗は安祿山が謀叛により。その身を巴蜀に避け給ひ。又我朝の淨見原のすめらぎは。近江の朝廷に襲はれて。此吉野山に隱れ給ふ。皆下尅上の患にして。一度天下の亂となる。されども邪は正に敵しがたく。終には聖主の德化に歸す。是天道の順理なり。殊に當今總明叡智にまし〳〵

伊賀局佳婿早既來レ此

此一句。占ニ正儀身分一。

兩心相照。以見ニ兄弟相愛一。

蜀の昭烈皇帝が英略にも。れさ〳〵れとり給はねば再びかへす君が御代。などかその時なかるべき。とは思へども衆寡てきせず。よき計略も。ハテムム。

ト よろしく思入。下手の廊下口より。郎等一人小具足にて出て來り。

郎等 ハッ申上升。只今御本國より。何か密〻の御用とて。御舍弟正儀樣。御出に御坐り升る。

正行 ナニ正儀が參りしとや。

ト 不審の思入よろしく。

是へと申せ。

郎等 ハッ。

ト 引かへしては入る。

正行 彼は本國千早の守。大切の身をかろ〴〵しく。うかつに出るものならず。城を離れて遥〴〵と。是へ來るは心得ず。定めて子細の有る事ならん。

ト 合方になり。下手の廊下口より。楠小次郎正儀。烏帽子鎧直垂。太刀を下げ。出て來り下手にすまふ。

正行 めづらしや正儀。亂れたる世の習ひとて。常にあひ見る事なければ。互に心に思ふのみ。まづれ汝もかわる事なく。重疊〳〵。

言出二意外一故妙。

層々説入。無レ可レ奈二何一有レ波二瀾一有レ抑二揚一。

正儀　この上にも御かわりもなく。うるわしき御顔を見奉り。大慶至極に存じ升る。
正行　シテ母上松榮尼公にも。かわらせ給ふ事はなきや。
正儀　母上にも御すこやかにて。異議なくお渡りに御座り升る。
正行　夫は何よりよろこばし。何はさて置其方は。城を離れて遙〳〵と。此吉野まで來りしは。定めて子細の有事ならん。是にて具サに申きかせよ。
正儀　某是へ參りしは餘の義に非ず。今一度この上の御顔を拜し。今生のお暇乞を申さん爲め。母上とひそかにはかり。是まで參上致して御座り升る。
正行　ナニ今生の暇乞とは。シテ其子細は。
正儀　只今申のぶるで御座り升る。
ト鳴もの入り誂への合方。
先年このかみ正時主ともろともに。當行在へ御越し有しより。諸國の官軍爰に集り再び朝家の威勢をふるひ。賊軍しばしば攻寄しも、このかみ小勢を以て之にあたり。百戰百勝の功を奏し給へば。賊主尊氏おぢおそれ。暫く軍サを止るに至る。既に藤井寺のたゞかひ。まつた住吉の合戰に。賊の先鋒師直顯氏が膽をひやし。賊軍都へ迯かへりしと。注進により承はれり。サレドモ虎狼の尊氏。此儘に止むべきならず。某つら〳〵賊軍の擧動を察し見るに。今尊氏恐るゝものは。偏に楠家の一族のみ。其餘の諸將

一緊一慢。毫髪無レ間。

常山蛇勢。正儀知レ兵如レ此。

は追〳〵に。或は戰死し或は降り。朝家にしたがふもの共は。日増に人數減少して。賊徒はいよ〳〵多人數加はり。勢ひ破竹の如くにして。遠からぬ内大擧なし。是成吉野へ攻寄んずる時寡は衆に敵しがたく。このかみいか成謀略ありとも。施す所あるべからず。其節に至りては楠一家の手勢をまとめ。一擧に事を決し給はん。

正行　ヤ。

正儀　さある時にはこの上にも。早計死の御覺悟と。某推し奉れば。これ今生の御わかれ。今一度御顔を見まほしく存る故。近頃めゝしき事ながら。推參致して御座り升る。

正行　さすがは弟。此正行が肺肝を鏡にかけて見る如く。かゝる思慮なる其方が。大切なる本國の守りを離れ。はる〳〵と此吉野までは來りしぞ。敵に空虚をおそわれなば。ゆゝしき大事に及ぶべし。其時汝は如何致すぞ。

正儀　其儀に付ては。思慮なくしてうかつに居城を明け申さんや。某敵の擧動をはかるに。今赤坂を攻る時は。この上吉野を討て出で。さしはさんで攻めうたれん。是尊氏の恐るゝ處。容易に河内へ軍勢をさしむくる事有るべからず。たゞ心にかゝるはこの上の御身の上と存る故。母上とひそかに計り。和田正武に謀事をさづけ。赤坂城を守らしめ。吉野へ使者を立るといつはり。十四五人の郎等に打交。城をぬけ出間道より。是まで參上致して。御座り升る。

亦是一策。

數年時日四字。是所ニ以不ニ可レ待。

斟酌較量。出ニ萬不レ得レ已之一計ー。英雄苦心。是吐ニ露肺肝ー語。

正行　ホヽヲあつぱれなる汝が智略。其才幹を見る上は。正行討死なすとても。跡にて君を守護なすもの。其方あれは氣遣ひなし。頓て大軍寄せ來らば。勝負を時の一擧に決し。花〳〵しく一戰なさん。

正儀　其御決心と存る故。わさ〳〵參上致せしなり。去ながら唯只管に討死を決し給ふは心得ず。抑〳〵當時諸國の武士ども尊氏に屬するヽ彼れに忠義を存ずるならず。かれが威勢をかりそめに。己れが欲を遂んとするのみ。さればその心全く盜賊の所業なれば。今四五年を過ずして。高上杉等を始めとして。各私欲增長し。確執不和の內亂を生ぜん事疑なし。其虛にのりて攻討給へば。これ第一の良策ならずや。この上の御賢慮如何に御座り升る。

正行　わりふを合す汝が意見。いかにも數年の時日を待たば。賊軍に內亂の生ぜん事。われも疾より見ぬきたり。

正儀　左程に先見おわしながら。時の至るも待給はで。こたびの軍さに討死と。御心を定められしは。正儀更に心を得ず何の故にかこの上には。只討死をいそぎ給ふや。正しく忠義の爲ならず。無益に一命捨給ふか。思慮なき事には候へずや。

正行　汝の意見。一わたりはとわりなれど。是には深き子細あり。正行平生身よわくして。やヽもすれば病に侵され。年つき枕に臥すこと多し。されば神心日〻に衰へ、今より數年の生命を保たん事覺束なし。迚も死すべき命なり。われ戰場に屍を曝し。あまねく天下に示しなば。諸國にひそむ忠臣勇士。

これが爲に義氣を振ひ。正行一人死すといふとも。百万人の忠臣あられ。恢復の功を奏すべし。女わらべに介抱せられ。病の床に死するにハ。いくばくか増すよしあらん又二ッには敵の大軍よせさし時。我小勢をもつて牛角の勝負は爲しがたし。我れ手勢を引ゐ。まつしくらにつくならバ。かの大將を討取らん。さらずバかれと刺しちがへ。その場にこの身は死すといふとも。味方その機に乗ずるならば。などか勝利を得ざらんや。是我死を決せしところなるぞ。吾心すでに決せり。後の事は汝に委ぬる。再び諫むる事なかれ。

正儀　ハヽかく御決心有る上ハ。正儀何をか申上べき。今にも大軍攻寄せなバ。思のまヽに一戰あれ。萬一この上討死あらば。其時こそは某　赤坂に在て。時機を量り。皇居を安泰に守護し奉れば。御心安く思召れよ。

正行　それにてわれも心安し。いかなれば。當今には聖慮かしこくましませど。次第にかたぶく時運の末。

正儀　今は諸國の官軍も。過半尊氏の手に屬し。

正行　六十餘州大方は。賊軍ならざる處もなく。

正儀　吉水院の山房を。假の皇居となし給ひ。

正行　わずかに照らす天が下。

正儀　世のうき雲を吹拂ひ。

正行　再び君の御ひかり。

正儀　かゞやく時のなかる可き。

正行　見よ／＼今に尊氏兄弟。

正儀　朝家にそむく反賊ども。

正行　頓て天罰。

正儀　思しらせん。

ト時の鐘を打込み。

正行　實に冬の日の暮早く。もはやたそかれ。

ト正行なることをならす。廊下口より以前の郎等出で。

郎等　ふッ御用に御座り升るか。

正行　暮なば早ゝ麓なる。陣所／＼を見まはりなせば。乗馬を引すえ用意いたせ。

ト郎等廊下口へは入る。

正行　頓てのちほど歸陣なし。今宵は夜とゝも酒宴のひらき。もる／＼互ひの名殘を惜まん。

正儀　某とても明日は早う。本國へ立歸れは。今宵一ト夜が兄弟の。長きわかれにくみかわす。

一個是獰惡男子。一個是纖弱女子。男子裝是束甲短衣。女子裝是白綾緋裙。一場好鬪。凡演戲。不可無此等趣絶光

正行 其盃の數よりもめぐりハ早き光陰の。

正儀 れしみても倘おしまるゝは。

正行 弓矢とる身の。

ト兩人顔を見合せるを。道具かわりのしらせ。

兩人 ほまれじやナア。

ト此もやうよろしく。時の鐘合方にて道具廻る。

本舞臺通し高足の二重。檜わだぶきのひさし高欄付。緣の下を一面に見せ。長廊下のもやう。上の方一間のつゞき屋体。同じく高欄付。前へ御簾を下げ折廻して白木の遣戸。明け立ある。下の方同じく遣戸にて見切り。平舞臺。上の方大樹の立木にて見切り。下の方立樹人の登る事有。上下の方芝垣の見切。向ふ一面御所内廣庭遠見の出割。夜のもやう。すべて皇居内長廊下の体。風の音時の鐘にて道具とまる。

トしめりたる合方に成り。正面の緣の下より。以前の丹下伺ひ出で。下手の立木より二重へ上り。あたりを伺ひ上手へゆきかける。人音する心にて。一寸下手のすみへ身をひそめる。上手の遣戸を靜に明け。內より伊賀の局小うち着緋の袴にて。雪洞を持出で下手へゆく。丹下身をすりぬけて上手へゆく。伊賀の局是に目をつけ。つか〳〵とゆきて丹下の帶きわを取て引もとす。丹下此力に驚く。思入よろしく。すかしみて女と知る事有て。ふりはなし雪洞をたゝきおとす。是にてわかりきへる。伊

景。況欠ニ此一節。何以見下此女子有二勇力一處上

賀の局小うち着を脱ぎ白小袖にて丹下を引とめるくらやみの立廻り。此内すべて丹下は伊賀の局に叶わぬ事よろしく有。トヽ伊賀の局は丹下のむなぐら取てしめ上る丹下是にて血を吐き落入る伊賀の局是をしらず。

伊賀局　とのゐの人達おわするや。怪きものを組とめたり。出合給へ〳〵。

ト大音によぶ。バタ〳〵に成。下手の遣戸より。里見主税之助義遠烏帽子直垂小具足附太刀にて走り出る。是と一處に。平舞臺上下より軍兵六人。各松明に棒を持出で來り。上下へわかれて。松明を二重へ向けてさし出す。

わどのは里見義遠どの。

主税助　シテ怪しきものと仰有しは。

伊賀局　則これに。

ト手をはなす。丹下バッタリたほれる。

主税助　イデ繩打て引申さん。

ト丹下を引おこし見て。

ヤヽいつの間にやら絶命して。

伊賀局　ナニ息絶へたりとか。

自己反喫ニ一驚ニ處好。

見ニ婦人裊娜情態ニ處。最不レ可レ少。

ト丹下を見て。

ヤヽさては只今しめたるとき。力あまつて命をたちしか。

主税助　兼て噂さに聞及びしが。驚入たる局の怪力。

伊賀局　無益の力に一命たち。詮議の手づるを失ひしは。コリヤ思はぬあやまち。

ト一寸ゑしやくすること。木のかしら。

いたしました。

トはづかしきこなし。皆〻局の力に感心する。此もやう風の音早めたる合方にて幕。引付ると。山おろしにて直に引かへす。

本舞臺通し。常足の二重。砂地の張もの。舞臺一面浪布。所〻蛇籠を置き。上下水除けの杭。上手へ大和國六田川と印たる傍示杭。向ふ一面。吉野山を遠く見たる。夜の遠見の書割。上下樹木の張もの(誂へあり)にて見切り。すべて六田川原の体。爰に百姓三人簑笠。竹棒松明を持。立かゝり居る。水の音にて幕明く。

○　時に此ごろのやうに。度〻の軍さわぎでは。こまりきるでは御ざらぬか。

△　其おかげでわしらまで。夜まはりをいひつけられ。かうして廻てあるかにやならぬ。

□　怪しい者と見たならば。ずぐに見廻りのお役人へ。知らせよとソレハ〳〵嚴しいひつけ。

○なんにしろ此吉野には。天子様が御座るゆゑ。九分のつよみといふものだ。

△そのうへ楠様といふ。とひようもない名將が。ついて御座れば軍さにハ。

□なんでも負る氣遣かひはない。早う軍さが勝になり。

○世間か静かに成てノウ。農業がでける樣にならにや。枕を高うしてねる事も。どふもかふも仕樣がない。

△どうぞ軍が早うやんで。

□むかしばなしにしたいものだ。

○サア〳〵精出して早ふ廻つて仕まをかい。

□△そうしよう〳〵。

ト水の音にて三人上手へはいる。ヤハリ水の音にて。向ふより雜色一人烏帽子素袍高もゝ立附太刀わらじにて。松明を持出る。跡より白木の板輿に翠簾を下げたるを。仕丁四人にてこれを舁出る。此内に辨の内侍乘て居る。跡ゟ侍女二人。下げ髪かづら古代の衣裝。かづきを被り草履にて出る。跡より雜色二人。先の一人と同じ樣にて。松明を持出て。直に本舞臺へ來る。バタ〳〵に成り上下より。鷺野の郎等伴吾先に六人。キリワラかづら小具足附太刀にて出て來り。双方よりよろしくとりまき。

伴吾　辨の内侍をおむかひの爲め。

四五個兵士。乘レ夜持レ兵來。何等蹺蹊。只是朦朧看做ミ尋常件當。殆是不ニ人情。不レ知此是後文揬子。

郎等○ 我〻是まで參上いたした。
同△ 各々には是よりして。
同□ 御歸りあつて然るべし。
同⊠ 是から先は我〻が。
同× 慥に路次の警衛なせば。
伴吾 早く此場を。
六人 かへられよ。
侍女)•(二階堂よりのお迎ひとは。御苦勞千萬。
同◎ わらはどもは内侍樣の。御側の御用をつとむるもの。
雜色〔〕 我〻とても仰を受け。御供に立し上からは。
同〔〕 二階堂へお入り有まで。
同▲ 御供なして立かへらん。
同〔〕 いざ御同道致すで御座らふ。
伴吾 イヤ〳〵夫は無益な事。我〻内侍を守護すれば。心置きなく。
六人 かへられよ。

至レ此悟得。不ニ是尋常伴當一。

把ニ炬火一。一齊打落來。是暗号妙。

雜色不レ拔レ刀。甚妙。若拔レ刀格鬪。只過ニ粲繁一。

〔〕たとへなんと申さるゝとも。二階堂まで御供なすが。我〻どもが役目で御座る。
〔〕おつきそひ申て。
▲參るで御座らふ。
伴吾　コリヤ是程に申ても。各〻にはかへられぬとな。
〔〕いづれにしてもお供なせば。道をいそいでおこしを早く。
ト仕丁に差圖する。
伴吾　是非に及ばぬ。〇ソレ。
ト水の音はやめたる合方に成り。双方一度に雜色の松明をたゝき落す。上下より軍兵大勢出て。雜色三人と侍女二人へ一度にかゝる。
〔〕こりやりふじんな。
侍女二人　アレエ。
ト雜色太刀をぬかふとするを。大勢おりかさなつてこの五人に繩をかけて引すへる。此時輿の翠簾を内より上げて。辨の内侍顔を出し。
内侍　合點のゆかぬ此塲の樣子、供につれたる者共を。手ごめになすは心得ず。若し二階堂の迎ひといふれ。

内侍不叫救。若呼此是留身分處。

伴吾 いかにも内侍を大内より。引出すの掵らへごと。
内侍
侍女 雑 ヱヽ、
〔〕 さては汝等ハ盗賊よな。
内侍 乘もの早ふもとへもどしや、
ト是にて仕丁もどりかける。
伴吾 ヤヽ逃るとてにがさうか。
ト郎等皆〻太刀をぬき。
サア此輿を少しも早く住吉まで。
内侍 ナニ住吉とは。
伴吾 サア早くいろげ。ゆかずば己れらまつ二ッたぞ。
○ サアゆけ。
六人 サアゆけ早くいろげ。
ト伴吾始め郎等四人付て輿をかゝせ。せき立て上手へはいる。軍兵これに付ては入る跡供の五人と。
郎等二人軍兵四人のこる。
侍女㊂ アヽコレたれぞ來て下されい。

一厭以出下文。

不救内侍得。反救侍女雑色得。此是小波瀾。

同×　内侍樣を助けて下され。

郎○　エヽやかましい。聲を立ると命がねへぞ。

雜〔〕　二階堂の迎ひと思ひ。

同〔〕　油斷なしたるばつかりに。

同▲　手込に逢しは口惜い。

郎○　もうかう成ては叶はぬ處だ。

△　いかして置ては後ちの邪魔。

○　不便ながらも五人もろとも。

△　いでそつ首をはねてくれん。

ト兩人太刀をかざし立かゝる。此時向ふバタ〳〵に成る。楠の郎等。南宮八郎。鳴尾七郎。キリワラかづら。鉢卷小具足附太刀手鎗を持ち走り出る。跡より楠の郎等同じ拵にて四人走り出で來り。直に本舞臺へ來り。此内へは入り皆〻を追ひちらす。一寸立廻り有て。鷺野の郎等叶はずして。皆〻上下へ逃げては入る。是にて五人の繩をとくこと有て。

八郎　百姓どもの知らせに寄り。狼籍ありと承はり。

七郎　直樣是へはせ付しが。シテ〳〵此塲の樣子はいかに。

應ニ前段。

雑色〔〕シテ各〻には何れの御方。
八郎 楠が郎等にて。今宵陣〻を見まはる途中。
七郎 狼籍有りとの訴へに。直樣是へかけつけ申た。
侍女㊤ わらはどもより内侍樣の。
同 ◎ 御身の上こそ氣づかわし。
八郎 ナニ内侍樣の御身の上とは。
侍女㊤ 二階堂にまします。叔母御ぜんの御病氣と。れきゝなされ。
同 ◎ 偽りごとゝは御存なく。御上へ願ひお暇給はり。
雑 〔〕我〻五人御供なし。此所まで參りし處。
同 〔〕何者の仕わざなるか。兼て手筈のあると見へ。
同 ▲ 多人數にておつとりまき。辨の内侍のめさせたる。
同 〔〕おこしの儘に奪ひ取り。立ち去りました。
八郎 ヤア〱シテ〱お輿はいづれの方へ。
雑 〔〕たつた今山手の方へ。
八郎 ムゝ遠くはゆくまい。跡追つかけ。

此一賑。寫ニ婦女一。亦是少不レ得。

七郎　内侍の君を。お救ひ申さん。

八郎　少しもはやく。

七郎　いづれも御座れ。

ト八郎先に郎等六人。皆々いそいで上手へ走り。は入る。

雑　〔〕　我々ども跡よりつゞいて。

侍女　内侍様のおせんどを。

雑色◎　少しも早く。

ト立かへつて。

侍女二人　アイタヽヽ。

ト身うちのいたむこなし。

雑　〔〕　どふなされた。

侍女　こゝかまわずと。

同　◎　早ふおわとを。

雑　〔〕　ムヽお身たちふたりは。

ト立上り上手を見込を道具かわりのしらせ。

老奸口氣妙。

跡よりでされ。

ト雜色三人いつさんに上手へはいる。此もやう水の音早き合方にて道具まはる。

本舞臺中眞に大なる松の立木。上下山の張もの。向ふ一面山〻の遠見。すべて六田川つゞき山手のもよう。是に以前の楠の郎等六人。鷺野の郎等三人と。軍兵大勢を相手に立廻り。此うしろに内侍の乘て居る。以前の輿を舁すへてある。はげしき禪のつとめにて道具まはる。

ト どさくさの立廻りよろしく有て。トゞ鷺野の郎等叶はずして上下へ迯げてい入る。楠の郎等六人是を追てはいる。跡山おろしに成り。向ふよき處へがらす張の月を出す。しつとりした合方に成り。

輿の内より辨の内侍小うち着緋の袴にて出來りはつと思入。

辨内侍 思ひがけない狼籍に。西も東もわからねど。幸ひさえし月影を。道のしるべにそふじや。

ト下手へ行きかける。此時上手の奥より鷺野平内左衛門。鎧直垂烏帽子附太刀好の拵へにて出來り。

平内 氣づかひあるな辨の内侍。身共がおくつてつかわそふ。

辨内侍 そういふ聲は。

平内 鷺野平内左衛門時景で御座る。

辨平侍 まことに和どのは時景殿どふしてこゝへ。

猶不説出來。

女丈夫。自然應如此。

平内　先刻より此所に。御身の來るを待ておつた。

辨内侍　ナニ待つて居つたとは。もしや今の狼籍ものは。

平内　いかにも身共が家來のもの。

内侍　エヽ。

トびくりとうとなる合方かわつて。

平内　其驚きハことはりなれど素より意趣も意恨も無けれど。其うつくしい容貌に。ぞつこんほれた其人から。御身をぬすんで呉れよとある。餘義なひ頼みを受けし故。行氏卿の北の方が。病氣なりといひ拵へ。まんまと是まで引出したが。御身を慕ふ其主は。住吉にて待ち給へば。身ともと一處に參られよ。

辨内侍　スリヤ叔母上の御大病は。僞りごとで有つたるか。そふきく上はこふしては。

ト立上つて行ふとする。時景袴の裾をしつかりふまへて。

平内　逃るとも逃ろふか。もうかふなつたら是非がなひ。のがれぬ所と悟覺めされ。

辨内侍　もう此上は。

ト内侍懷劍をぬいて。切りかける。一寸立廻り。時景その手をきつと取り。

平内　ちよこざいなはむかいだて。もふ此上ハ手籠になしてつれゆかん。

ト内侍の刀を打落し。引立ゆかふとする。此時上下より以前の八郎七郎出て來り。内侍をかばひき

看者至レ此謂。楠公不ニ自下一レ手。救ニ内侍一了。不レ知更一轉。生ニ下文一來。

二人纔能敵ニ平内一。以見ニ平内身分一。不是見ニ平内身分一。是憧ニ擧正行身分一。

つとなる。

八郎 ヤア汝は鷺野時景よな。

七郎 内侍をとらへて此狼籍。

八郎 イデ繩打て。

七郎 引立ゆかん。

平内 何やつなるか我に向ひ。手むかい立は無禮なやつ。

八郎 ヤア無禮とは汝が事。かく云ふ我は楠家の郎等南宮八郎。

七郎 鳴尾七郎。底意知れざる汝がふるまひ。

八郎 サア尋常に。

兩人 繩にかゝれ。

平内 何をこしやくな。

ト詠への鳴ものに成り。平内左衛門は二人を相手に立廻りよろしく有。よき時分に上下より。鷺野の郎等二人出て來り。

○郎 ヤア御主人是に。

△ おわたり有りしか。

平内　よい處へ。兩人加勢いたせ。

兩人　心得ました。

ト兩人双方へかゝる。立廻りの內平內は內侍を引立て上手へはいる。

八郞　われをやつては。

〇郞　何を。

ト又立廻つて。きつと見へ。知らせに付。六田川原山〳〵を見たる遠見の道具幕をふりおとす。禪のつとめに成り。上手より以前の雜色三人。軍兵三人と立廻りながら出で來り。いろ〳〵おかしみの立廻り有て。

ドヾ軍兵叶わず下手へ逃ては入る。雜色三人是を追ては入る。山おろしに成り知らせにつき。道具幕切て落す。

本舞臺一面通し高足の二重。岩山の張もの。嶮岨のもやう誂へあり。二重上の方大なる岩山の張ものに奥の方へダラ〳〵登り口。下の方同じく岩山の張ものを。二重にたて此間中途山道のもやう。諸々樹木のあしらひ。向ふ一面山々遠見がらす張の月。すべて山添への中段細道のてい。山おろしにて道具廻る。

ト二重下手の岩山の間奥より。辨の內侍緋の袴のまゝ逃て出て。二重よき處にてころぶ。後より平

正行隨兵。縱橫奮鬪。拯其熱鬧。至叙正行則只此一箭。詳略極好。

救婦人。何煩名將。手有懷貳。二字偏妙。

内左衛門追かけ出て。是をとらへる。一寸立廻り有て。ドヽ内侍を引立。上手の上り口へ。は入る。
鳴もの打上る。

大「それ巖石峩々たる山壑は。名におふ吉野の山つゞき。隈なき月も影くらく。谷間をつとふ山道のいとものすごき山中に。あはれ内侍はくせものゝ。してふにかゝるうきなんぎ。すでに危き時しもあれ。駿馬に鞭打ち走せ來るは。今南朝の柱石と。人も知たる楠左金吾正行が。直垂烏帽子優美のすがた。そびらに負なす白羽の征箭。あたりを拂て見へたるは。めざましくもまたいさまし。

ト大小入り誂への鳴ものに成り。向ふバタ〳〵にて。楠正行鎧直垂烏帽子附太刀ゑびらを脊おひ弓を持乘馬にて走り出る。後より郎等三人。手鎗を持附そひ走り出て。花道よき處にとまり。向ふをきつと見て。

正行　辨の内侍が危難の知らせ。きくと其儘走付しが。アレ〳〵夜目にそれとはわからねど。遙の山の岨づたひ。女をいとむ曲ものこそ。まさしく鷺野平内左衛門。兼て足利尊氏に。二心をいたく反賊時景。いでや一矢に射とりくれん。

トよろしく弓に矢をつがひ。切てはなし給ふを見て。

それ

ト誂への鳴ものにて。正行馬乘のまゝ。むちを打て一ツさんに本舞臺より。上手へは入る。郎等二

時景中レ箭。如レ此敘去不レ費レ力。

人付ては入る知らせに付。此道具しづかに半分廻す。

（作者自評）　正行馬上にて弓を射るの一條は。中昔の武士がよく射を用ふるのかたちをみせんとの旨趣なり。弓も眞物を用る箙その餘のものまで盡く其様を摸し。矢をぬき出す仕方。又馬上にて放つ仕方等。よくその古實を正して。昔の武士のさまは。かくあらんと推察せしむるの意なり。故に舞臺に此時人を居らしめずして。矢を十分に放たしめ。矢聲ならびに絃走りの音まできかしむる旨向なり。又云當時戯れに弓を射て的に中るをよしとするからに。その容体をいふものなし。又箙のからみやう。矢を抜出す等の伎は。學者にして古を好むものは識れども。世の中總て見るものなければ知るものもなかるべし。弓箭の器械は博覽場にてこれを見れどもいかにして。用ふるものにや知りがたきもの多し。よりてこれ等の体を演しそのかたちを見せしめむとするも。亦無益の事にあらさるへし。

本舞臺前のつゝき道具。上の方にタラ〳〵に。平舞臺へおりる山道のもやう。山中のもやう種々誂へあり向ふ遠見のよき處へ。がらす張の月。すべき此道具誂へあり。爰に二重の下の方に辨の内侍。胸に手を當て動氣を惱むてい。正行歩立にて是を介抱して居る。二重上の方に。以前の平内左衛門矢の立つたる儘にたほれ死して居る。平舞臺上の方に。以前郎等二人正行の乘馬を引すへ。ひかへて居る。山おろしにて道具とまる。

思慮詳密。言語溫籍。其人可レ和。

此一句。見ニ梅枝爲レ人。又是怪訝語。

省得好。

省筆又好。

正行　某是へ參りしからは。早お氣づかひは候はす。心をたしかに持給へ。

内侍　おもひがけずも。賊徒の辱をまぬかれしは。全く和君の御恩による。何をもて報ずべき。ありがたき惠みにこそ。

正行　コハ思ひよらざるそのお言葉。たとひ見もしらぬ人なりともかゝる狼籍に出逢ふからに。など打捨ておかるへき。ましてや御身は宮中に。事へ給へる女官なるに。萬が一賊徒にれかし辱められんには。御身の恥辱のみならず。朝家の恥辱此上あらじ。かく申す正行等。守護の役めにおこたりし。其罪なしと申されず。折よく道に出合しは御身の幸なるのみかは。此正行もおもてを起すと申もの。さるにてもにくむべきは鷺野時景。賊徒に內應するよしを。風聞に知るものから。かゝる狼籍に及ぶ事必ず子細有る事ならん。此よしつぶさに奏聞して。與黨の詮議に及び申さん。

内侍　夫に付ても心得ぬハ。日頃やさしき梅ヶ枝が。何故かれらに一味せしか。

正行　ナニ梅ヶ枝とは。

内侍　後にてゆる〳〵かたり申さん。

ト山おろしにて。平舞臺上手より。以前の郎等八郎七郎出て來り。

八郎　我君これにれわたり有しか。

七郎　曲ものどもは一人のこらぞ。

雜色侍女。一齊了結。此等處。非老手不能。

八郎　からめとり升て。
兩人　御坐り升る。
正行　ヲヽ太義〳〵。是成る時景が死骸もろとも。とらへしものとも。一同に行在所へ引立よ。
八郎　ハ畏て御坐り升る。
　ト八郎づか〳〵と二重へ上り。鷺野平内か矢をぬきとる事有り。
八郎　胸さか箆深に射ぬかれて。唯一矢に即時の落命。
七郎　吾君の御手だれ。今にはじめぬ事ながら。
兩人　畏れ入て御座り升。
正行　生どらんと思ひしかど。内侍にあやまちわらんをおそれ。やむ事を得ず討取たり。
内侍　きゝ傳へし八幡どの。筑紫の八郎にも。おさ〳〵おとらぬ此弓勢。わらはも感じ入ました。
　平舞臺上下より。以前の雜色三人侍女二人仕丁四人輿を舁出て。
侍　内侍殿には御無難にて。
◎侍　これにおわたり遊しましたか。
〔〕雜　まづはおかわりなきていを拜し。
〔〕同　我〳〵一同いか斗りか。

英雄美人。兩々相對。多少心情。宜レ在二無言之間一。是作者苦心處。果有下名俳優得二此意一者上。其妙不レ可レ言也。

▲同　大慶至極に。

五人　存じ奉り升る。

内侍　正行ぬしの助けにより。はからず危難をのがれしぞや。

正行　某路じの警衛なせば。内侍にはイザあれなる輿へ。

内侍　それではあまり。

正行　其斟酌は無益な事。きみにつかふる御身なれば。我身にして我身にあらず。夜のふけぬ間に少しも早ふ。

内侍　然らば仰に隨がハん。

ト立上り正行と顔を見合するを木のかしら。

正行少し身をへり下つて。

正行　まづ〳〵。

ト一禮する。内侍ハ正行を見てあつぱれ豪傑いと頼母しと云ふ氣味あひ十分ある平舞臺の一同。平伏する。此もやう双方ひつぱりよろしく山おろし。

大小入り誂の鳴ものにて幕。

(作者自評)　内侍が正行の弓勢をほむる所は。もつともこの役をつとむるものゝ注意すべき所に

して。その武勇を感じ。自らその人品をも慕ふ所を言語の外に示して。見るものをして。何となく慕はしく思はする仕打。十分ありたし。たゞその武勇をほむるのみにして。さらに色合なきやうにては。作者の用心にそむくもの也。

二幕目　楠正行假陣營の場

本舞臺四間通し。中足の二重。茅葺の庇縁側付。上の方一間はすにぬり骨の障子にて見切り。向ふ一面古びたる唐紙。眞中に上り段。軒先へ菊水の幕を張り。上の方一間の練塀へ同じ幕を張り。紅葉の立木。下の方ずつと奥へはすにつゞき家体。廊下もやう。ヤリ戸にて見切り。平舞臺下手ちいさなる樹木。菊水の幕を張り。上下同じ幕にて見切り。二重の正面に鎧櫃鎗長刀弓矢等よろしく。立ならべすべて吉野の麓假陣營のてい。爰に二重の上に。楠の郎等和田新發智源秀。坊主かづら鎧直垂附太刀好のみ拵へにて住ふ。二重の下手に。同じく和田新兵衛正朝。キリワラかづら鎧直垂附太刀。好みの拵へにて住ふ。平舞臺上の方に。前幕の南宮八郎正直。鳴尾七郎正道。以前の形にてひかへ居る。平舞臺下の方に。前幕の鷺野の郎等件吾始め。六人繩付にて座して居る。うしろに軍兵四人棒を持ひかへる時の太鼓にて幕明く。

源秀　コリヤ鷺野時景が家來。關件吾其外五人の者共。よく承はれ。今此處へ呼出せしハ余の義でなひ。

時景叛狀。把二前段丹下帶來密書一證來。不三多費二筆墨一妙。

是楠氏仁慈家法。

楠氏家法。寫得詳當。其後正儀

汝等が主人時景事敵將高の武藏守師直に心を通じ。みかどを傾けんとはかりし條。則時景が懷中より出たる密書にて事明白なり。また辨の內侍を奪はんとせしも。是又師直が賴みにより。計略を以てわざむき出せし事。昨夜汝等が白狀によつて顯然たり。之に依て時景が首級軍門にかけて諸人に示す。また其餘の者共もいち〳〵罪狀を糺すべき朝議なりしが。吾君正行朝臣こたびの功にかへ。汝等始め一同の一命は申請けたり。去るに依て今日只今。繩目をゆるし追放なせば。いづれへなりとも勝手次第。ソレ彼らが繩目をといてつかはせ。

軍兵 ハヽ。

ト軍兵立かゝり。六人の繩を解く。六人顏を見合せ。互に難有涙にくれる事よろしく。

伴吾 ハヽ存寄らざる御仁惠。我〻主人の命を受け。內侍を奪ひとらんとせしも。

○ 敵將高の師直へ。降參なすべき爲なればゞ。

△ いふまでもなき不忠の大罪。死刑に逢ふはのがれぬ處。

□ 所詮命はなきものと。覺悟きわめておつたるに。

● 思ひもかけず。正行公の功にかへ我〻が。

▲ 一命お助け下さるとは。生〻世〻の御洪恩。

伴吾 身を粉にくだきつかふるとも。いかでか報ひ奉るべき。此上のお願ひに。今日よりして改めて。

破二細川氏兵一。勞二其捕虜一。遣レ之。事見二太平記一。即是箇榜樣。

只爲二一頓一耳。

當家の御家人と被成下雜兵の列に加へられ。
○　御出陣の其時に。
△　先陣なして君の御楯と。
□　討死なして今日の。
●　御洪恩ゐ報ひたく。
▲　何卒此義を御兩所より。
伴吾　御大將へ御取なし被成下るゝやう。偏へに願ひ。
六人　奉る。
正朝　神妙なる願ひなれど。罪あるものを此儘に。旗下につくるは。上へのきこえ。其義は決して相叶はぬ。
伴吾　スリヤ我〻がお願ひは。
正賴　叶はぬ處とあきらめて。早く此場を退散いたせ。
伴吾　ハヽ不忠の罪ある我〻ども。みゆるしなきは是當然。是非もなき次第なり。今さらかへらぬ事ながら。主人に不忠の行ひあるを。
○　いさめも入れず。

△ 惡事と知つて與せしは。
□ 是我〻が一生の不覺。
○ かく情けある大將の。
▲ みもとをはなれ今さらに。

伴吾 いづくをさして退るべき。とはいへ御許容なき上は。是非に及ばぬいづれもと。ともに此場を退散いたさん。

トよろしく手をつかへ。

重〻厚き御情け。いづれいつかば今日の。御恩に報ひ奉らん仰に隨ひ此所を。一同退散。

六人 仕り升る。

ト六人よろしく式禮して。すご〳〵立かゝる。

源秀 アヽコレまて〳〵。

ト是にて六人もとの如く住ひ。手をついてひかへる。

汝等が赤心某とくと承知せり。まこと汝等悔悟して。忠義を盡す心ならバ。こゝに一ッの功を立てよ。某よしなにとりなし得させん。

伴吾 スリヤ一ッの功を立るなら。我〻が身の願ひをば。お叶へ被成て被下るとな。

千島法橋。無レ處ニ安放一。特借ニ放免士卒一結了去。是作者狡獪處。

正行謀畧。正朝處分。一切省筆簡。

○　たとへいか成る事ありと。

△　一命かけてつとむる所存。

□　何事にもあれ我〻が。

◉　つとむる御用これあらば。

伴吾　一つの功の立升るやう。偏へに願ひ。

六人　奉り升る。

源秀　然らば其次第申聞かさん。既に昨夜御所内へ盗賊忍び。伊賀の局の勇力にて。其塲に於て落命なせば。詮議の手づるを失ふたり。なれども此者ゝもなみ〳〵の盗賊にてもこれ有まじ。あやしむべきは。多田院法橋。此程よりの彼が擧動。疑はしき事ども少からぞ。もしや彼が所爲なるか。今より彼が方に至り得と實否を正し得て。申上る事ならば。夫を一つの功と爲し。御大將へ推擧なさん。此事汝等なし得んや。

伴吾　ハヽ驚入たる御眼力。我〻ども慥には。存せぬ程の事なれど。多田院法橋は。主人時景もろともに。敵に心を通ずる事うす〳〵承知致し居る。其義なればいと安し。彼に隨ふていになし。實否を正しお知らせ申さん。

正朝　ムヽ其義に於ては此正朝。兼て君命うけ居れば。密に謀を授くべし。直樣身共が詰所へ參れ。

淨。是斷二葛藤一法。

陣營門前。現二出一箇婦女一點。綴得異樣。

是老父語。是慈父言。

滿腹悲痛。說得淋漓。

伴吾　ハヽ委細畏て御座り升る。

正朝　左樣御座らば源秀殿。

源秀　萬事ハ和殿にゆだね申す。

正朝　然らば後刻御意得申さん。

ト正朝一禮してよろしく立て下手の廊下口へは入る。是と一處に。平舞臺の六人よろしく。源秀に一禮して。下手の奧へハ入る。軍兵殘らず下手へは入る。源秀のこる。本つりがねを打込。床の淨瑠理になる。

上「吹風に遠寺の鐘のこふ〳〵と。ひゞく麓のひとかまへ。楠左金吾正行が。威儀嚴重なる陣屋の外。老の一てつ藤六が。不便や娘梅ケ枝を。高手小手に戒めて。引立てころあゆみくれ。

ト下手より前幕の藤六。胴服小袴一本ざし。娘を引立出る。前幕の梅ケ枝繩にかゝり。藤六に引立られて出て。平舞臺よき處にて。

藤六　つみとが重き此娘。只今途中に見かけしゆゑ。召連れ升て御座り升る。コレ下に居よ。

上「引すへられて梅ケ枝は。今さらなんといひわけの。きへも入たきうき思ひ。せつなき胸は娘より。親の心はなほ百倍。忠と義理とにせめからむ。血筋の繩も恩愛に。ゆるむ心をはげまして。

ト梅ケ枝よろしくさしうつむく。藤六よろしく有て。

怒得有レ理。

楠氏家法。

コリヤ己れ〳〵は日比の心に似もやらず。大悪人の手について。あらふ事か大恩ある。内侍様を敵の手に。渡さふとした不忠不義。人の皮きた畜生め。うぬどふしたら腹がいよふ。

上「情用捨もあらけなく。ゑりがみとつて引すへて。拳をかためてう〳〵。慈悲も情もわきまへし。血筋の親のせつかんは。骨にこたへて梅ケ枝が。

梅ケ枝　とゝさん。かんにんして被下ませ。

上「かんにんしてと斗りにて。跡は涙にむせかへる。不便の者と源秀が。

源秀　藤六どのゝ心のうち。源秀さぞと察し入る。コリヤ梅ケ枝其方は不らちなものじやな。不忠不義の時景に一味なし。女の身にて大膽にも。二階堂の使といつはり辨の內侍をあざむきし事。不屈至極な女め。

上「するどき言葉に梅ケ枝は。なんと答へも今更に。身の罪科のおそろしく。

梅ケ枝　ハアゝ。

上「わつと斗りになきふせば。藤六またもさし寄て。

藤六　コリヤヤイ。泣て見せてもその手じやゆかぬ。どふしてわれは悪人に一味した。そうして主計殿は。いづれに居る。サアまつすぐにいふてしまへ。コレだまつてゐてはわけがわからぬ。めろ〳〵ぬかずと早ふぬかせ。いはぬか。いはぬか。よし〳〵いはずは親がしよふがある。

老夫敲撃女子。殆難爲體面。有此一救。纔能成文理。

サア是じや。いはぬとこれて打のめすぞ。サアいへ。いはぬか。いはずばこうして。いはせて見せふ。

上「棒おつとつて立かゝる。折からうしろの一間より。立出る大和守。

ト藤六捧ふり上げ打んとする。奥より楠大和守正時。烏帽子鎧直垂附太刀。好の拵へにて出て來り。

正時 藤六まて。

藤六 ヤあなたは御舍弟正時様。

正時 時景か巧みのいち〳〵。事明白に相わかれば。最早詮議を致すに及ばぬ。

藤六 でハ御座り升ふか。餘りと云へばにくい女め。

ト又立かゝるを。

正時 ハテさしづもまたで。自儘の詮議ひかへて居よ。

藤六 ハヽ。

上「はつとばかりにひかゆれば。正時靜かに座よついて。

ト正時二重上手に住ひ。

正時 藤六。彼がいましめをときつかはせ。

藤六 ハッ。

LIBRARY U. OF I. URBANA-CHAMPAIGN

トもぢ〳〵する。

正時　ときつかはせと申すに。

藤六　へーイ。

ト藤六よろしく思入有て。梅ヶ枝の繩をとく。

正時　藤六。其方にはこのかみが。何か御用の筋ありとて。先刻よりお尋ありし。少しも早く奥へ參れ。

藤六　御尋とあれバ親父めは。

正時　そちは早く參るがよい。

上「いわれて藤六立上り。

藤六　これ娘。けふからしては勘當じやぞ。

梅ヶ枝　エヽ。

藤六　顏を見るも是限りじや。

上「きつてはあせし一言に。娘はかなしくマアまつてと。いふにいわれぬ身のつみとが。わつと斗りになきしづむ。氣づよくいへどこなたにも。思ひは同じ親子の恩愛。きづなにひかるヽ愛別離苦。心殘して入りにけり。

撤二開藤六一去好。

ト兩人よろしく有て藤六奥へは入る。
上「正時あとを見送りて。源秀にうちむかひ。
正時　もはや用なき此女。早く追放いたされよ。
源秀　アイヤお言葉では御座れども。彼がみそかを淺川主計。昨夜よりして行方知れねば。詮議の手づるは是成女。
正時　夫とても詮議に及ばず。女に魂しひ奪はるゝ。腰ぬけ武士の五人十人。敵に隨身なしたりとて。味方の害となるにあらねば。其儘にさし置れよ。
上「寛仁大度の一言を。きく梅ケ枝がせつなさつらさ。
梅ケ枝　是まで軍さのそのたびゞ。あつぱれ手がらもした者を。腰ぬけ武士とはお情なひ。といへぬ事にくみせしからはいひとくよしもなけれども。
上「夫と定めかしづくぬし。腰ぬけ武士とのおさげすみ。どふマアきひて居られ升ふ。みんな此身がなせるわざ。世にはづかしい身のいひわけ。おさゝ被成て被下ませ。
ト下坐の合方。
御法にそむき主計ぬしと。あの世をかけていひかわし。親の意見もうはのそら。不忠不孝は知りながら。きのふ二人りで。爰を立退き。身をかくさんとせし處、時景樣に見咎められ。軍令犯せし不義の咎。

LIBRARY U. OF I. URBANA-CHAMPAIGN

時景計策。自ニ梅枝口中ニ說來。以補ニ前文。老錬手段。

又自ニ梅枝口中。寫ニ出主計行徑ニ來。

二人りは素より御主人の。里見樣にも御切腹と。きいた時の身の悲しさ。我が身は覺悟のことなれど。何に科もなき御主人の。御身にかゝる御難儀を。助けてたべと手を合せ。

上「すがりなげゝば時景樣。世に恐ろしい惡事のたくみ。此事首尾よくつとめたら。主稅助の身も安泰。事おんびんにすました上。二人りを夫婦にしてやらふと。のつぴきさせぬ手づめのなんぎ。

上「れ主樣の御身の大事。またふたつには二人りして。夫婦になつてそひたいばつかり。ついわるい事を致し升た。わたしは文の使の役。主計ぬしハ敵方へ。都をさして行かしやんしたが。今はどうして御座るやら。事の露顯と云ひたなら。定めし生ては御座んすまい。敵に降參するよふな。主計ぬしでは御座りませぬ。疑ひはらして被下ませ。もしお願ひで御座り升る。

上「さすが女の一筋に。夫を思ふ眞實の。まことは詞にあらはれたり。正時とつくと聞終り。

正時 夫を思ふそちが心底。正時篤ト聞屆けた。早謀主たる時景の。罪科分明なる上からは。其餘の者は一同に。このかみ己が功にかへ。助命の義をゆるさるれば。再び主計かへり來るも。一命助け追放なさん。其方とても科は同じ。此地に居ると相成らぬ。いづくへなりと。勝手次第に立去るべし〇ヤア〳〵ものども。是成女を門外より追放いたせ。

下手にて。

藤六　ハヽア。

上「はつと答へて軍兵ども。手に〳〵竹棒携へ出で。

ト下手より軍兵四人。わり竹棒を持出て來りよろしくならぶ。

きり〳〵たて。

上「いわれてなく〳〵梅ヶ枝は。

梅ヶ枝　左樣なれば。お暇致すで御座り升う。

上「兼てかくごはしながらも。どふかまいちど主計ぬしに。此世の名殘たゞひとめと。心を定めて梅ヶ枝は。引立られて出てゆく。

ト梅ヶ枝よろしく。軍兵ついて下手へは入る。

上「折からこゝへあわたゞしく。郎等一人走り出て。

ト下手のヤリ戸より郎等一人出て來り。

郎等　ハツ申上ます。何か御内勅を蒙らせられし趣にて。四條大納言資隆卿。辨の内侍もろともに。只今俄に御入に御座り升る。

トいひ捨てもとの。下手へは入る。

正時　四條大納言隆資卿。内勅を奉じ入來とは。何事なるか。何はともあれ入來の趣。この上へ申上

ん。

上「いひつゝ立て正時は、一ト間へこそは入にけれ。

ト正時よろしく奥へは入る。

上「知らせによつて。楠家の棟梁楠左金吾正行は。烏帽子直垂れごろかに。威儀を正して出で向ふ。

ト奥より楠正行。烏帽子直垂附太刀。好の拵へにて出て來り。二重下の方によろしく住ふ。源秀は少しうしろへひかへる。

上「待間程なくこなたのかた。かしこき勅をうけ奉り。四條大納言隆資卿。辨の内侍をともなふて。しづ〳〵として入り來る。

下り葉になり

ト下手の廊下口より四條大納言隆資卿。立烏帽子直垂。好の拵にて出る。跡より辨の内侍。五ッ衣緋の袴檜扇を持ちしとやかに出て來り。よろしく下手に立身。

正行　隆資卿には俄かの入來。假陣營にてお席を設くるひまもなく。失禮の段おゆるしあれ。いざまづ是へお通り下され。

隆資　然らばゆるさせられよ。

勅旨懇到周切。眞聖主心情。

上「靜づ〳〵と打とほる。

ト隆資。二重眞中スコシ上手へよろしく仕ふ。辨の内侍は。隆資の上手へはすに仕ふ。正行は眞中スコシ下手へ仕ふ源秀その下へ仕ふ。

正行　俄の勅使。いかなる子細か。何卒仰せきけられよ。

隆資　只今申のぶるで御座らふ。

ト管絃に成り。

皇居警衛の武士。鷺野平内左衛門。兼て京方に心を通じ。昨夜辨の内侍を盗み取り。高の師直に贈らんとせしを。汝正行參り合。時景を即時に討取り。内侍が危急を救し事。叡聞に達し深く御感在らせらる。其折内侍を奪はれなば。朝家の瑕瑾と深く恥思召處なるを。其事に至らざりしは。偏へに正行が忠節による處と。淺からぬ御感あり。しかるに主上正行が定れる妻なきよしきこしめされ。内侍のすけ藤原氏は。故右中辨俊基の娘にして。文才すぐれ。忠義の志も又男子におとらず。これを正行に女合しなバ。一對の夫婦たるべしと思召し。即ち隆資に内勅あり。内侍を正行に下し給る。隆資これをうけたまはり。内侍を只今召しつれたり。謹で勅答せられよ。

正行　ハヽ御内勅の趣。謹で承る。そも君の御爲に。身をいたすは是臣たるの道にして。めづらしからず。然るに昨夜いさゝか微功ありしを。かくまでにめでさせ給ひ。殊更に官女をゑらみ臣正行に下

不必辭不得辭。不欲辭。數意含蓄。左思右想。出此曖昧摸稜言。正行苦心在於此。

獨淩於心。何等勇斷。是所以為豪傑。

し置るゝの條。君恩身にあまり。如何斗りか難有存じ奉る。

隆資　然らば内侍を給はるとも。さゝはりの義はこれなきよな。

正行　何とてさはりこれあるべき。辨の内侍は系圖正しく。殊更忠義の志は。男子も及ばぬあつぱれ烈女と。常々心に感稱し罷在る。今正行が妻にせよとの御事。最も望む處にして某がよろこび此上ハ候はず。叡慮のれもむきありがたきまで辱なく存じ奉る。此義よろしく奏問願しくこそ候へ。

隆資　然かあらば勅旨を奉じ妻となし。婚姻を整へ給ふよな。

正行　アゝイヤ。只今も申せし如く。身にあまりたる寵命は辱けなく存奉れど正行深く思ふ處あり。妻と定むるに至りては。何とも勅答申上難し。綸言に違ふに恐れあれど。只いくゑにも御免を蒙り奉る。

上「思ひがけなき正行が。詞に隆資不審はれず。

隆資　君の叡慮を辱なくぞんじ奉りながら。反て婚姻をこばまるゝは。定めし深き子細ぞあらん。委細具さに申きかされよ。

上「承はらんとのたまへば。

正行　ハゝ君の叡慮を。辱く存じ奉りながら。婚姻の義を。辭し奉る正行が苦心の程。ハテ何をかな。

上「何か思案の胸の中。ひとりうなづき正行が。

千緒万端。盡於此數句。

正行曲折心事、不一言其所以然。以和歌出之。隆資内侍一唱三歎。深知其所以然。此是主客非常人物。非常襟懷。并隱見在不言之中矣。

源秀文臺を是へ。

源秀　ハヽア。

上「ハット答て奥の間より。懐紙をのせし文臺を。正行が前へにさしをけば。

ト源秀奥より。文臺に筆硯ト懐紙をのせ持出し。正行の前へ直す。

上「正行つくへに打むかひ。筆とり上げてさら〳〵と。こゝに染なす水ぐきの。跡やゆかしき大和歌。さすがにたけきものゝふの。かくとは誰かしらま弓。矢竹心の其のなかに。なさけの道も辨へし。優にやさしき大將と。後の世までも知られけり。

ト正行大鷹の紙へ。一首の歌をかく事よろしく有て。隆資の前へ差出し。

正行　是正行か勅答の心をこめし一首の和歌。御内見被下よ。

上「とさし出せば。隆資手にとりあげ。

ト隆資この懐紙を手にとり上る。内侍もともにこれを見る。

隆資　迚も世にながらふべくもあらぬ身の。假の契りをいかでむすばん。

内侍　とても世に。ながらふ可くもあらぬ身の。

隆資　假の契りを。いかでむすばん。

上「くりかへし。吟する内に隆資卿。扨は討死の覺悟かと。思ひは同じ辨の内侍。互ひに顔を見合せ

內侍不レ發二一言一。隆資先道レ之。

不三敢多言一妙。

正行不レ知二內侍之心一妙。

內侍初不レ發二一言一。至レ此吐二露胸襟一。一毫不レ遺。自是女丈夫意。

て。暫し詞はなかけり。

ト兩人正行の心に感ずる思入よろしく有。

上「ヤヽ有て隆資卿。ふさがる胸のといきをつぎ。此よみ歌を見る上ハ。何といふべき詞もなし。たゞ感歎の外わらず。內勅の御使もはや是迄。

上「件の懷紙まき納め。座を改めてこなたにむかひ。いかに朝臣。御身が忠義の眞心ハ。隆資まことに感佩せり。去にても內侍には。望を起せし英雄の。ゑにしも爰におだとなり。さぞやほいなくおぼされん。せめて御身がこれまでの。忠義の素志を此なべに。正行朝臣に打明し。かたりてうきをなぐさまれよ。

上「いはれて內侍ははりつめし。忠義も今は水ぐきの。中をへだつるうす氷。とけぬ心の奧底を。それと知らねば正行が。

正行　辨內侍もきかるゝ如く。其こしをれにて正行が。心の程は推し給はん。いともかしき勅定を。いなみ奉るも忠義のため。御身をいとふに非れば。必らずあしうおぼされな。

上「さとす詞をきくからに。內侍はかたちを改めて。

內侍　何とて惡しく思ひましやう。かく申さば淺き女子の嗚呼なることぞと。笑はせ給はんか知らねども。むかし下野の形名の妻は。夫を助けて蝦夷のあだをうちやぶり。又左馬頭義仲朝臣のをもひもの。

氣。不是含羞掩面痴果女子。

有情有識是德是才英雄心情畫出妙。

雨中將爲楔子。伊賀局現出妙。

從不用意中。出伊賀局。來反作後文一段光景。

巴御前は君の馬前に先驅して。平家の軍をうちしと聞く。わらはも同じ女子なり。甲斐ある身とはいはるゝとも。やはかこの人〻におとるべき。いかでよき大將とちなみを結び。夫は外にあだをなびけ。妻は內に士卒をはげまし。夫婦心を一ッにして。君の御爲國の爲命をすてんと思ひしに。楠どのにはかゝる御覺悟。これも忠義の爲なれば。今さら何と申すべき。

正行 ハヽアあつぱれなる女丈夫かな。そら飛ぶ鳥地を走しるけもの。男女の情を知らぬはなし。正行木石の身にあらず。苦樂を共にし。生死を誓はんとある。內侍の眞心。かゝる言を聞くうへは。たとへ婚姻は結ばずとも。今より心を一ッにして。忠臣烈婦の名を殘さん。必ず心おかるゝな。

隆資 げに一對の名將賢婦。かゝる良緣はありながら。結ぶにかたき妹と脊の。誓を爲さぬぞ怨みなる。御使に立し隆資は。申すもさらなり。主上も左こそ本意なく思召すらめ。さりながら。その勅諚を辭し奉るも。必死をきはめし忠義の眞心。いかでおろかに思し召さんや。隆資よしなに奏聞せん。

內侍 事をわけたる。正行朝臣の御詞。是にすぎたるよろこびなし。それにつきてわらはが一つの願あり。きかせ給ふか知らねども。君の御父中將殿と。日頃むつまじき新田左中將ぬしの家臣にて。武勇拔群の聞えある。篠塚伊賀守がむすめ。父の受領をそのまゝに。伊賀の局と申なる。常〻心をあかしあふ。妹となせしそのおなご。今日供に召連れたれバ。かゝる次手に對面をゆるし給はらバ。この身のよろこび。これをもきかせ給はんや。

一場畢而。一場始。有段落。有照應。

有此謙遜。美人之美益見。

正行　さゝ及びたる武勇の女官。何にくるしかるべき。いざこなたへ。

内侍　しからばこれへ呼出さん。○いかに伊賀の局。正行ぬしが對面せんと仰なり。はやうこなたへ御出あれや。

下手の奥にて伊賀の局　ハア。

上「ハット答へてかなたなる。妻戸を開き立出る。伊賀の局は。怪力の名には似氣なき容貌美麗いともやさきしその姿。折目正しく座になほる。

ト下手の遣戸より。伊賀の局小うち着緋の袴。好の拵へにて出て來り上の方辨の内侍の上手へすこし前へ斜に住ふ。

正行　常は内外隔つれば。親しくものを申せし事はなけれども。局の勇力膽略は。兼て噂にさゝ及ぶ。既に昨夜曲ものが。御身の力あまりありて。忽その場に息絶へしは。昔の巴板額にも。おさ〳〵おとらぬ局の勇力。正行感心いたして候。

伊賀局　女子の身にて及ばぬわざ。御恥かしう存まする。

正行　尚此上も朝家の御爲め。辨の内侍と力を合せ。互ひに節義を守られよ。

伊賀局　女ながらも命をかけて。盡す心に御座り升れば。何卒よきに正行樣。

正行　其義は氣遣ひいたされな。内外力を添るで御座らふ。

三人自有二三様憂一。正行是憂レ國。兼憂二佳人一。隆資以レ失二名目一為レ憂、内侍憂レ失二良偶一。只是一齊下レ涙。

此一段。是補二天地鈌陷一手段。斷不レ可レ欠。

上「互に心打とけて。よろこび合ふぞ頼母しき。隆資卿は三人の。やうすにつく〴〵たんそくなし。

隆資 揃ひも揃ひし忠臣烈婦。此眞心を見るにつけ。正行朝臣が勅答の。和歌を叡覽これあらば。さぞや本意なく思召されん。出てかへらぬ綸言を。かへし申すも君の御爲。是非なき事とはいひながら。偏に時運のいたす所。聖慮さこそと思やられて。いとゞかしこし。

上「あといひさして口ごもり。一滴浮む涙の色。正行始めあり合ふ人〻。顔を見合て。是非もあみだの雨もよひ。霜に露おく風情なり。

ト皆〻うれいのこなしよろしく有。

上「正行きつと心付き。

正行 かくまであつき勅命を。我一身の節を守り。却て叡慮を煩はし奉る事。是又臣が本心にあらず。幸なるかな。我弟正儀は。未だ年若には候へども。その義心兄にもまされり。伊賀の局を妻になし。婚姻の義を取結び。一人は外にあつて大軍にあたり。一人は内にあつて君を助け奉らば。正行婚義を辭し奉るとも。いさゝか叡慮をなぐさむる端ともならんか。隆資卿には如何思召さるゝ。

隆資 ホヽヲ。夫こそは望む處。よくこそ心付かれたれ。此事叡聞に達しなば。君にもさぞかし御滿足勅旨を奉ぜし隆資もおもてを起すと申もの。

正行 シテ伊賀の局は。別に子細のあらざるや。内侍は何と思召るゝ。

女丈夫亦。至レ此不レ得レ不ニ含羞一。便是人情。

一句。無レ窮情致。

伊賀不ニ多出レ言。内侍代言レ之。

内侍 兼て心に願ひし事。別にいなやハ有るまじと。わらはゝ思ひ侍れども。

上「問かけられ。思がけなき妻定め。ハットばかりにあからむ顔。

伊賀局 なんのいなが御座り升ふ。

上「あとは得いハずうれしさの。もりてあまれる顔に袖。いと恥かしげにさしうつむく。

内侍 局が心もわらはと一つ。殊に夫はたぐひまれなる、正行朝臣の弟御の。妻と定まる身の果報さぞや御身は嬉しかろ。わらはもうしれう思ひ升る。さうして御舍弟正儀主は。本國河内にましますとの事。もしやお氣にそまぬ時は。

正行 アイヤ。正儀事は故あつて。當陣中に參り居れば。此處へよび出し。彼が心中承ハらん。ヤア〳〵正儀是へ參れ。

正儀 ハヽア。

上「こなたの障子押開き。楠小次郎正儀が。威あつてたけからざる大將の。容儀備はる其有樣。しとやかに座になはる。

ト上手の障子の内より。小次郎正儀烏帽子鎧直垂好のなりにて出で來り。正行の下手へ住ふ。

正行 隆資卿を始め内侍にも。是こそ某が令弟小次郎正儀。お見知りおかれ被下よ。

隆資 兼て其名ハ聞及べど。面會なすは今日始めて。きゝしにまさるあつぱれこつがら。末頼母しく存

又借二隆資語一。并二兩人一贊。

將レ捕レ賊一節。隔斷使二人不一レ倦妙。

時景早已結了。獨有二多田院。至レ是從二言語中一了レ之妙。

申す。

正行　正儀汝をよび出せし事。改て申聞ずとも。定めて其方聞つらん。

正儀　かしこの一ト間にまかりあり。委細のこらずうけ給りましてござります。

正行　さもあらんとおしはかれり。其方違背は有ましきよな。

正儀　このかみの御はからひ。何しに違背仕らん。いかにも局は某が。妻に申受るで御座りましやう。

隆資　故中將の胤といひながら。かくも揃ひしおとゞひが。互ひに通ずる心と心。まことに國の柱石じやナア。

正行　さらば此場に於て。婚姻の儀式を假に取行ん盃事の用意いたせ。

源秀　ハヽア。畏つてござります。

ト源秀よろしく奥へは入る。下手はバタ〳〵に成り。以前の和田新兵衛正朝甲冑にて出て來り。

正朝　ハツ。御注進申上升る。

正行　待兼し正朝シテ〳〵樣子は如何成ぞ。

正朝　ハツ。かねて仰示されし如く。鷺野時景が家來の者共を。多田院が陣處に遣し。窃にかれが謀をさくらせしに。その奸謀に相違なし。即ち謀計を以て途中におびき出し。某手勢を伏せて搦めとり。陣所へ引つれ拷問せしにかたき師直へ通せし事。また昨夜家來の者を御所へ忍ばせ。内侍を奪ひ師直に送

LIBRARY U. OF I. URBANA-CHAMPAIGN

此段變ニ悲愴慘澹ノ光景ヲ。作ニ勇壯奮迅ノ摸樣ヲ。在ニ劇塲ニ亦是不レ可レ欠者。

史載ニ正行戰死四條畷ニ。正儀拒ニ師泰於石河ニ。却レ之。師直進襲ニ吉野ニ。帝逃ニ之賀名生ニ。師直乃退。即是也。此篇以ニ正行赴ニ役為レ結。不レ及。

らんとせしも。彼が所為なるよし。逐一白状致して御座ります。

正行　ムヽ。大義で有た。其由逐一奏聞なし。本人法橋は刑に處し。其餘の者は助命なさん。まづ夫迄はひとやにつなぎ。嚴重に警固いたせ。

正朝　畏つて御座り升る。

ト新兵衛下手へは入る。

上「正行きつと威儀を改め。

正行　いかに正儀。遠からぬ内師直兄弟。大軍を催し攻來らん其時こそは正行が。誓つて彼ら兄弟が。首ひつさげて立歸らんが。もし又此身の運つたなく。我々兄弟其塲にて。萬一討死なしたらん時。汝本國千早ゑ有て。君を守護なす計畧は。

正儀　ハツ。

ト正儀よろしく居なほつて。

其時こそは正儀が一トまづきみを吉野の奧。賀名生へ遷幸なし奉り。紀州大和の將卒に吉野の皇居を守らしめ。某赤坂に在て敵をさゝへ。たとへ何萬騎よするとも。

上「天にそむきし逆賊ども。さきへ進まばうしろを襲ひ。千變萬化にかけなやまし。或は打取或は退ぞけ。

叙ニ後事一。乃備ニ此一節一。遙為ニ事後結局一。是作者苦心處。

伊賀局負レ后過レ澗事。見ニ吉野拾遺原本一。即正行死後事。反預叙在レ此妙甚。

皇居間近く敵勢の至らぬさきに追くづし。君の御坐所を安泰に宸襟を安んじ奉る事。某が手の裏にあり。

上「智勇兼備の名將が。詞に局もいさみたつ。

伊賀局　女ながらも其時は。君に付そひ奉り。吉野の山の山深く。天の河の嶮岨をふみわけ。岩根を傳ひ雲をわけ。道なき谷間に出たる時は。

上「岩間ょ生へる松杉の。手ごろの古木を根もとより。引ぬき〳〵かけわたし。君を始めつきそふ人〻。なんなくわたし奉り。賀名生の御所へ御供致せば。氣遣ひあるな兄上樣。

正行　ホヽウ。いさまし〳〵。我もこたびの戰ひに。時運に叶ひ世にあらば。共に凱歌を謠ふべし。まづそれまでは正儀には。本國の守り奸要ぞや。

上「まさりおとらぬ兄弟が。割符を合す互ひの智略。忠義の程こそ頼母しゝ。折から爰に持はこぶ。てふしかわらけのしこんぶ。折目正しくすへ置きて。

ト奥より源秀さきに郎等三人。祧子瓦盃それ〳〵持出て。二重の前よろしき處へすへ。郎等三人は奥へは入る。

源秀　仰付られ升たる品〻。調へ升て御坐ります。

正行　イデヤ。是にて互ひのかため。婚姻の儀式取結はん。

各人有二各人心情一。有二各人言語一。此等文字雖レ屬二常套一。作者自有二分寸一。

隆資　少しも早く取行はれよ。

正行　目出たく一獻開くで御坐らふ。

此杯は局より。

ト源秀とりつぎ。かわらけを局の前へ持ゆく。下坐の謠に成り局と正儀と盃事よろしく有て。

正行　其盃ハ辨の内侍へ。因を結ぶかためのしるし。

ト内侍　盃をうけて飲む事。

隆資　さし當りたる此場の媒妁。其盃を隆資が目出たく納め申可し。

ト隆資　盃をうける。

正行　是にて互ひのかためもすみ。

内侍　さはる事なき三々九度。

隆資　君にもさぞかし御滿足。

伊賀局　是で此身の願ひも叶ひ。

正儀　互ひにつくす忠義の操。

源秀　松の常盤の末長く。

正儀　いのるは君の御よはひ。

内侍　内と外とは隔つとも。
伊賀局　心は常にあいれひの。
正儀　頓て凱歌の時至らは。
正行　兄弟夫婦打集ひ。今この如くよろこびうたはん。
上「口にはいへと正行が覺悟はそれと正儀も。是そ此世のわかれかと。一滴こほす勇士の涙。
ト正行正儀よろしく有て。
目出たひ。
上「いわすかたらぬ心と心。義を金鐵のおとゞひが。みさをは千歳末代に。楠三代の忠臣と。其名は世〳〵に輝やけり。
ト三重。皆々よろしく有。隆資 盃 をのみほして。
隆資　目出度婚姻調ふ上は。我れ是より參内なし。此よし奏聞申可し。
正行　某も卿ともろとも。是より直に參内なし。多田の院が罪狀奏聞致さん。
隆資　かゝる目出たき折なれは。一トさし祝して御立あれ。
正行　然らバ御免。
ト正行よろしく立上り。

LIBRARY U. OF I. URBANA-CHAMPAIGN

一曲演古句。來吐滿心熱腸。如附如離。意趣透徹。

普天の下卒土の中。いづく王地にあらざるや。

ト下座の拍子に相成り。

頓てなにしおふ關の。戸ざゝであふ坂の。山をこゆれば。うら波の粟津の森やかげろふの。

トよろしく田村を舞ふ。此内隆資以前の懐紙をひらきつくづく見る事よろしくありて。正行と顔見合せ。一寸氣をかへるを。木のかしら。

石山寺をふしおがみ。是も清水の一佛と。賴みはあひに近江路や。勢田の長橋ふみならし。駒も足なみいさむらん。

ト正行よろしく舞。隆資懐紙を卷ながらうれひの思入。皆〻正行の舞を見込む。此もやう双方ひつぱりよろしく。

舞の拍子にて幕。

(作者自評) 伊賀局正儀にはじめて對面する處。はづかしき思入ありて何となく色合見ゆる所あるべし。はじめ武勇をあらはせしに似ざるたほやかなる所を見すること簡要なり。後にものがたりに至りて。れのづゝら武勇の氣色見ゆる處あるべし。物語終りて正儀と目を見合せ。又はづかしきこなしあるべし。

三幕目　吉野皇居階下の場

吉野山谷間地蔵堂の場

同返し大詰　吉野の奥如意輪堂の場

本舞臺一面皇居の練塀を遠く見せたる道具幕。爰に軍兵三人びんぼう徳利にて茶わん酒をのみ。焚火をしてゐる。山おろしにて幕明く。

○ コレおまへがたばつかり飲で居ずと。その茶わんをちつとはこちらへ。まわしてもよいではないか。

△ ヲヽさうとも〳〵。サア〳〵さすぞ。

□ どれ〳〵おれが酌をしてやらう。

ト酒を呑わふ事よろしく有。

○ なんでもナ今の間に。おもひ入れ酒でものんでおかぬといふと。それはモウやがてのこと。どうなるかしれたものじやないテ。

△ ナルホド。どうなるか知れぬといや。今度京がたからいよ〳〵大軍で押てくるといふのは。ほんとうの事であらふか。

LIBRARY U. OF I. URBANA-CHAMPAIGN

故演ニ出部俚言語。以下文整々堂々議論。

小々口鬪。自成ニ波瀾。

□　これがほんとうのことで。噂のとうりであつた日にや。おたがひに中〳〵もつて落ついて。とてもかふして居られんノフ。

○　まだ御觸はまはりはせんが。例のみんなが知つて居る。高の師直と弟の師泰が十萬斗りの軍勢で。此吉野山へおしてくるといふ事は。慥にそれにちがひはあるまい。まだ〳〵それから。京方の大軍がくり出すといふ事じやによつて。何十万になるか知れんし。其大軍で一時に押してこられたら。此吉野はひとたまりもあるまひテヤ。

△　イヽヤ。たとへ何十万押て來たとて。こつちには楠殿といふつよい大將が付てござるから。容易にまける事ではなひわへ。

□　ヲヽ〳〵。そふとも〳〵。藤井寺や住吉の戰で。大概知れたものじや。其上一人りでも弱いものはないさかい。こつちは大丈夫なものじやナ。

○　イヤ〳〵。そふじやない〳〵。今度は京方でもきかぬ氣になつて。これまでよりハ十倍もました大軍で。一度に攻つぶす氣でやつてくるゆゑ。なんぼ楠勢が強ふても。ソコハ多勢に無勢。とても〳〵叶ふことじやない。そこで己がれもふにば。いつまでも爰にぐずついて居たら。皆殺しにあふかもしれぬ。それよりやすぐとかたをかへ。おれは京がたへはいこむ積りじや。

△　夫じやア。おぬしやは宮方をすてヽ。敵に降參する了簡か。

不レ了レ局反好。

帶ニ一種慘澹氣一。是將レ及レ戰光景。

○おまへ達もそふせぬとナ。今に命がなくなつてしまふぞや。
□夫ではァ。いよ〳〵アノおぬしは。
○おらア。是からかけおちじや。
△そふきくからは仲間でも。
□うつちやつちやァ置かれぬぞ。
○ナニうつちやつては置かれぬとは。
△ひつくゝつて本陣へ。おぬしを引てゆくのじやワへ。
○そふ聞てはもふこゝに。まご〳〵しては居られぬ。

ト早めたる禪のつとめに成り。三人おかしみの立廻りよろしく有て。トゞ追駈あつて上手へは入る。すぐに。床の淨瑠璃に成る。

上「都とは名のみ吉野の假皇居。木々の梢も冬がれて。木だまにひゞく猿猴の。聲物すごきおさふしも。さすが一天万乘の。上なき君の行在所とて。月卿雲客きらびやかに。列を正して居ならびし。威儀おごそかに見えたりけり。

ト管絃に成り。しらせに付道具幕切て落す。

本舞臺三間の間。中足の二重。三方折廻して檜ハだ葺の庇縁側。白木の高欄。眞中に高欄付の階。

LIBRARY U. OF I. URBANA-CHAMPAIGN

此三名正史無其人。今權選出來。蓋三名議論。不盡事理。若供大人用之原誣。作者所不敢也。

語氣壯重。自然得体。

不多費語。慇有力。

向ふ一面に御簾を下げ。上の方三尺程はなして一間の高足の二重屋体。同じく庇椽側。高欄付。椽側の内奥へ折廻して御簾を下け。此家体より中足の家体へ横に高欄付の階。上手大樹の立木にて見切り。下の方奥へ下げて。一間のつゞき屋体。廊下の摸様。同じく庇高欄付。向ふへ御簾を下げ。下手白木の遣戸にて見切り。平舞臺立樹のあしらひ。すべて吉野皇居階下のてい。爰に二重の上の方に前幕の隆資。冠装束好の拵へ檜扇を持よろしく住ふ。下手に左大將早俊。右大將道順。權中納言兼明。同じく冠装束にてよろしく住ひ。うしろに公家三人居ならび。下の方に同じく三人上手をむきてよろしく居ならぶ。管絃にて道具治まる。やはりこの鳴物にて。

隆資　今日關白左大臣殿。所勞によりて參内に及ばれず。隆資勅定をうけ奉り。諸卿參集の義を相觸し所。火急の參内神妙に存る。今日の參集は餘の義には候はず。京都より次第の注進。諸卿も大方はきかれつらん。足利尊氏此の吉野殿に向ひ。關西關東の兵士十餘万騎を起し。執事高武藏守師直を惣大將として。日ならず攻よするとの事。察するに。去年の秋より官軍しば〳〵勝にのり。楠河内守正行が河内國處々の合戰に。敵勢をうちなやませしをもつて。彼等これを無念とし。こたびは一擧に事を決せんと謀ると覺たり。これよの常の合戰にあらず。君の御大事この時に在り。いかなる計略をもつて。これを打やぶるべきや。各所存をのこさず。詮議あらまほしうこそ候へ。

早俊　これ隆資卿の御言葉とも覺えず。普天率土王土王臣にあらずといふことなし。敵何十万騎よする

明治初年景見宛然想ㇾ況ㇾ之。此言亦或有ㇾ理。

層々辯駁。利害透徹。又是好議論。

是亦正理。

ども。なでふの事かあるべき。錦の御旗を眞先にさゝげ。みかどに敵對奉るやつばら。天の誅伐いかでかまぬがるべき。命惜くば降參せよと。呼はり〳〵進みなば。賊兵その勢に辟易し。戰はずして勝を得ん掌をさしてみるが如し。計略などゝはまはり遠き御言葉。諸卿いかゞ思はるゝ。

道順　早俊卿は。いまだ御年若なれば。軍陣の事になれ玉はず。たゞ本朝の書籍をそらんじ。議論の上にこそ長け給はめ。利害得失をさとり給はぬと覺えたり。いぬる承久の合戰より天下武家の手に歸すること百餘年。君臣の大義をわきまふるもの幾人かあるべき。先帝一たび朝權を復させ給へども。やかてまた武家の爲にせばめられ給ふ。聖德のうすきにあらず。ひとへに時勢のしからしむる所に候はずや。今鎭西奥羽の國には。官軍少なからずとは申せども。この吉野の行在所には。其勢甚だわづかにして。賴母しきものとては楠一家のものどものみ。今此小勢を以てかの大敵にあたらんは。石をいだひてふちに投ずる如く。危きともいと危し。道順が存ずる所は。敵いまだよせざる先に。はやく御使をつかわされて。御和睦の義を計らわせ給ふに。しく事あらじと存じ候へ。御合戰の御用意あらん事。ゆめ〳〵しかるべからず。

早俊　道順卿ものに狂ひ給ふか。先帝の御遺詔御身の耳には入せ給はぬか。いともかしこき神みたま。此吉野とゞまらせ給へば。賊徒退治の御事は。九泉のもとゝわすれさせ給はずと。仰せのこされしを忘れ給ふか。たとへ身をひしびしほにせらるゝとも。和睦などゝは申さるへき。以ての外の事で御座る。

兼明之言。比二早俊一較爲レ有レ策。

講和之說。如レ此論來。又大爲レ有レ理。不レ如何以破レ之。

兼明　早俊卿の仰の如く。我々二代のみかどに事へ奉り。此山中にありと申せども。賊徒退治の事は。一日片時もわするゝ事は候はず。敵よするこそ幸なれ。近國の兵を駈催ふし。要害に取手をかまへ。小勢なれども案内はよく知たり。敵近よらば大石大木を投下し。矢玉を惜まず射立なば。よもたやすくは攻落されじ。かくする事二三十日に及ぶ時は。諸國の官軍馳せ集り。敵のうしろを襲ふべし。味方此勢にのり。命かぎりにきつて出んに。勝ずといふ事あるべからず。兼明の所存かくの如くに御座る。

○我々どもゝ。兼明卿早俊卿の仰の如く。この吉野に楯籠り。敵を引受け防戰し。

△命にかけて君を守護し。奉らんとの所存に御座る。

道順　イヤ〳〵寡はもつて衆に敵すべからず。弱はもつて強に敵すべからず。小敵のかたき大敵のとりこなりと孫子の本文。かゝる味方の小勢をもて。大敵にあたらんには。たとひ諸卿身を粉にして戰はるゝとも。勝利は決して覺束なし。道順先帝の御遺詔を存じ知らざるにあらず。又賊徒と和睦するの非なることを心得ざるには候はず。無謀の合戰にやぶれを取らば。我々どもの生死は論ずるに足らず。我君を危ふきにおとし入れ奉り。人民を塗炭に苦しむるは。忠臣の所爲にあらず。恥を忍び時を待ち。計畧をめぐらし。御運を開かれんこゝろ社稷の臣たるものゝ爲す所。唯いたづらに死を輕んじて危きにのぞむをのみ。忠臣と爲すべきや。一旦の和睦に敵をおごらせ。敵引かへしなば。しづかに官軍の銳氣を養ひ。諸國の義兵を調じ合せ。四方より起りてこれを擊たば。その時こそは味方の勝利。疑ひなしと存ず

一唱退主戰者。殆似不能破者。

不倚不偏。自有大臣体。

議論出意外。使人喫一驚。妙甚。

るなれ。諸卿の御議論いさましきに似たれども勇餘りありて謀略に乏し。隆資卿にはいかゞ思召さるゝ。

隆資　諸卿の所存。同じからずと申せども。君の御爲國の爲。忠誠ことばにあらはれたり。されども軍馬のかけ引は武臣の職。當時この吉野においては。河内守正行にしくものなし。故三位中將が家法をつぎ。智勇逞ましきは人の知る所。軍議の席に招き出して。その謀略をきゝ候ればやと存ずるが。諸卿に御意見はこれなきや。

早俊兼明　いかにも御尤なるその仰せ。其儀然るべく存じ候なり。

トいふ所に藏人走り來り。

藏人　楠河内守正行朝臣。軍事の義によりて奏聞を願ふよしにて。參内致されて御座ります。

隆資　正行參内せらるゝよな。いそぎこれへ。

トこれにて藏人その席より出で正行つゞきて出來る。五位の衣冠扇を持ちて座につく。

隆資　正行朝臣。軍事の義を奏聞願はるゝよし。かねて風聞にも知られつらん。兇徒の大軍よせ來るにより。勅諚により軍議に及ぶ所。臨時の參内折よく候へ。只今評議兩途にわかれ和議を計るべしと申もあり。又この吉野にたてこもり。防戰すべしと申すもありて。未だいづれとも決し申さず。和殿の計略きかまほし。

正行　されば候。敵は師直父子を大將として。その勢十餘萬。目にあまる大軍なり。味方は河内和泉と

LIBRARY U. OF I. URBANA

道順得意語。

反蹤出ニ一勺句ニ來シ

先説ニ和議利害得失ヲ分明如レ畫シ

攝津の半國のみ。とても對應の軍にあらず。又この吉野の嶮岨により。戰ふべしとハ申せども。大軍には嶮岨なし。諸方より手分をなしてよせられなバ。味方鬼神の勇ありとも。よくこれを防がんや。防戰の御事はいかにも叶ひ候まじ。

道順　かた〴〵あれをきかれしか。流石ハ正行朝臣ハ楠家の棟梁朝家のかため。深謀遠慮感じ入る。しからばはやく京部へ御使をさしつかわされ。御和睦の義簡要と存じ申す。

一同あきれたる有様。ヤヽありて。

正行　イヤ。しバらく御待候へ道順卿。貴卿御和睦の利害つまびらかに御承知候か。

道順　ソリヤ。申までもなし。漢土にも南北兩朝ならび立たるためしもあり。敵將の心をなだめられんには。軍兵を引てかへらん事相違あるべうも候はず。

正行　イヤ左にあらず。天に二つの日なく。土に二人の王なし。若御和睦あらんには。北朝いかでそのまゝやみ申さんや。主上を都にかへし入れ。御位を廢し奉り。諸國の官軍に倫旨をなし。足利に從ふべきよし强て命ずるのみならず。もしこれに從はざれば。兇徒賊徒といひなして。誅伐に及ぶべし。しからんには。諸國の人民うたがひ迷ひ。忠臣義士立どころに戰死して。かへりてその名をのちにけがし。天下は賊のものとならん。こゝに御心つかれずや。かへす〴〵も不覺の至り。いかゞに候道順卿。

隆資　あつぱれ候正行朝臣。今にはじめぬ明智の一言。されば和睦の事は。今更申までも無き事ながら。

防禦無救。攻撃無援。出萬不得已之一計。然從容區畫。以期一死。是正行苦節。説出溫藉。不見奮迅激厲之色。何等妙絕。

防戦かなひがたしとあらば。和戦の二事何れに決すべき。朝臣の所存承らん。

正行　凡そ戦ひ萬全の計を定めてのち戦ふべしとは。兵法のいふ所なれども。こもまた時のよろしきによるべき事か。今もし敵の寄るをまちて。要害によりて防ぎ戦ふとも。味方はもとより小勢なり。敵の爲にみすかされて。いかなる堅固の備わりとも。攻ぬかれん事必定なり。正行このたびの戦ひに。生きてかへる所存にあらず。敵よせぬ先一手の勢を引まとめ。こなたより馳せむかひ。北軍の不意に出で。敵の多勢を目にかけず。無二無三に中軍にかけ入て。大將師直をばうちとりなば。その餘の諸將はかねて一致せずと承れば。その勢ひに辟易して。うらくづれして敗走せん。その機に乗じ後陣より。味方の諸軍押よせなんには。一擧にして勝利を得ん事疑ひなし。正行志を得ずして討死するとも。天下の義士これが爲に忠憤の心をおこし。後日正行が志をつぎ。忠戦を勵まんもの。吾一族のみならず。君を助け一たび京都を攻落し。尊氏等が膽を冷さんこと。この數年をすぐべからず。御心やすくおぼしめされよ。

隆資　いかにもいみじきその計略。さりながら。此一戦に命をすてんと思はるゝは。そはまたいかなるゆゑなるや。

正行　正行が死を決せしは。これ今日に起りしにあらず。父にて候贈三位中將正成。湊川出陣のみぎり。正行を櫻井の驛にまねき。沒後を託し。君の御爲身命をなげうつべきよし申ふくめ。東西に別れし

LIBRARY U. OF I. URBANA-CHAMPAIGN

是一字一涙。滿腔熱血吐出來。

據太平記。正行決死上奏。係見後村上帝時事。此演劇難於直叙。故借一場議論出之耳

が。終に湊川に戰死に及べり。正行其時十三歳。おしからぬ命を今にながらへしハ。かゝる御大事の時に至り。命をすてゝ上は吾すめらぎの。山なす御恩にむくひ奉り。下は亡父が敎訓を守り。海より深きめぐみに報ぜんとの心にて候なり。今日こゝに死を決せずは。君には不忠の臣となり。父には不孝の子とあらん。正行が一心此外には候はず。各亮察願ひ奉る。

隆資　左程決心ある上ハ。今さら何をか申べき。此上は君前にて。叡慮を伺ひ奉らん。

早俊　某等一同席につらなり。

正行　然らば是より君前へ。

隆資　一同伺候致されよ。

上「いざや御前にまゐらんと。列坐の公卿一同に打ち連れ立て。

ト隆資さきに皆〻立て。上手の階を上り。廊下を靜に上手へゆく此もやう。

管絃三重にて道具廻る。

(作者自評)　此段は中古朝廷の公卿。大事を議するときは。大方かくあるべしと推せらるゝやうに。宮殿のさま又列座のさま。又衣冠のさまを見すると簡要とす。議論の詞もまゝ。太平記ならびに當時の古書によりて。これをつゞり。後世の言語と大に異なる所あり。されは全く古き語をのみ用ひてハ。みるものに解しがたきをもて。その中間を折衷したり。

前段一場軍議。何等雄壯。一變出此光景。亦何等悲壯。此是同時事。可見人間境界有幾樣。

主計歸後。與梅枝相見事補出。

此段似不與本文相涉者。然正行內侍。既已以義不婚。正儀婚伊賀雖未合。一篇演劇。殊嫌於枯燥。作者借此節。

本舞臺通し。平臺舞眞中に。大なる櫻の立木。上下樹木のあらしひ。上の方大なる山の張物。下の方一間。古びたる堀立柱の地藏堂を斜に見せ。下手の方扉あけ立あり。眞中に上り段。舞臺をむけて古ひたる板羽目。所々くづれたるもやう。此側に古びたる石の手水鉢。正面山の張物に春水の流れを見せ。向ふ谷合の流れ遠見の書割。下の方山の張物にて見切り。すべて吉野の奥谷合のてい。水の音に雨車をかすめて道具とまる。

トすぐに下座の獨吟に成る。

上「ゆく雲のひとしきりふる村時雨。ぬれて岩間の袖雫。寐もせで夢をみよしのゝ。花に宿かる下ぶしも。あしたをまたぬ冬の日の。落てゆく方は西の空。

ト本つり鐘を打込。雨車水の音をかすめて。向ふより序幕の淺川主計。衣流しジン〳〵端折一本差。素足簑を着て。片手に竹笠をかざし。出て來り花道にて。

主計　夕べはからす。梅ケ枝に逢ふて。くわしい咄しをきけは。時景殿の其外は。正行公の情にて。助命ありしときくからハ。尚々我身の恥かしく。御主君始め人々にも。活て面を合されぬ。淺川主計が身の成る果。かへらぬものは迷ひじやナア。

唄「谷間の風の肌寒く。梢を傳ふ鐘の音は。諸行無常をつげわたる。

ト主計よろしく本舞台へ來り。あたりを伺ふ事有。合方に成り。

故反映之。又見楠氏兄弟夫婦義正。獨梅枝等以不義不能終其完也。但晩節亦爲過悔所薰楠氏以死償陶罪。所謂曲終奏雅者也。

此亦補叙。

尋常戲場。將此等題目布演來。做一場痛哭。此反淡々點綴便好。

此一句。省却多少間話。

幾度思ひ直しても。たゞ恨めしきはわが心。いろに溺れしばつかりに。あらぬ惡事に一味なし。心にもなき不忠の所業。身のいひわけに切服と。此身の覺悟はきわめしが。われ相果しときくならば。アノ梅ヶ枝もきいては居まい。夫のみ心にかゝりしが。夕べ逢ふてそれとなく。短慮をとゞめれきたれば。もはや思ひ置事なし。

ト下手の地藏を見て。

今は此身の冥闇を。たのむ木陰の地藏堂。爰にて清く最後を遂ん。

唄「死出の田長の道すぐに。わけ迷ひゆく戀のやみ。人の昔は身の上と。

ト雨車やむ。主計よろしく簑をぬぎ。下へしひて其下へ座し。肌をぬぎ。刀をぬきよろしく觀念する。

唄「岩にせかるゝ瀧浪の。おはやくだけてちる玉も。流れは早き谷の川。

ト此唄一ぱいに。主計刀を腹につき立んとする。下手バタ〳〵にて前幕の梅ヶ枝。好のやつし形りにて。走り出で來り。これを止めて。

梅ヶ枝　主計さん。マア〳〵待て下さんせいナア。

主計　梅ヶ枝か。そこはなせ。

梅ヶ枝　イゝエ。はなさぬ。はなしませぬ。けさわかるゝ時おまへのやうす。合點ゆかぬと思ふたゆゑ。

正行以レ死辭レ婚。梅枝勸レ死雪レ恥。一是言發ニ於男子一。一是言發ニ於女子一。是遙々反映處。

一歩々。不レ脫レ溺レ色。

跡を慕ふてさいぜんから。あそこにかくれて居たわいナア。

主計　ムヽそんなら。そなたは始から。此身の覺悟を知つたりしか。

梅ヶ枝　大事の夫の命の際。知らいでなんとせふぞいナア。おまへはひとり腹切て。犬死をするお心か。

主計　犬死なりといはゞいへ。世に淺間しい惡事にくみし。なんといきて居られやう。せめて今はにいさぎよく。悔悟の切腹なす所存。武士の最期のさまたげいたすな。

梅ヶ枝　サアどの道捨る命なら。時節を待て汚名をすゝぎ。立派に死んでは下さんせぬカ。

主計　時節を待て。立派に死ねとは。

梅ヶ枝　サアおまへも兼て知る通り。もふ近〳〵に京方から。押てくるのが知れてあれば。その時人數にくはゝりて。立派な討死しなさんせ。今死ぬ場所では御ざんすまいが。

ト云にて主計じつと思入有て。

主計　ハヽ。我ながら誤つたり。一度色に溺るゝ時は。かふも心の亂るゝものか。今のそなたの一言にて。さつぱり夢の覺たる心地。

梅ヶ枝　そんならわたしの異見に付。思ひとまつて下さんすか。

主計　いかにも今の死をとゞまり。今にも京軍よせ來らば。先陣なして討死なさん。

LIBRARY, U. OF I. URBANA-CHAMPAIGN

吹替是戯場語。謂替人也。此戯隆資藤六欲用一徘優。故有此語。盖兩場轉換不得俄更裝也。

藤六滿腹忠誠。見乎此。與首段相應。以起結局一場文字。此一句不是等閑下得語。

前文是雨中光景。至此雨止。只是一涙字寫得妙。

ト　いひながら刀をさやへ納める。

梅ケ枝　よふきいて下さんした。嬉しう御坐ざんす。

ト手を合せおがむ此時下手より藤六。のふさかへ簑笠にて出で來り。そつと下手の地藏堂へかくれる。兩人これをしらず。

主計　負ふた子に敎へられ。淺瀬をわたる此主計。夫につけても女の身でよくぞ心づいたるぞ。あつぱれ見上しそなたの魂。

梅ケ枝　イヱ〳〵。わたしじやござんせぬ。表向は勘當して。内へよせぬといひこしらへ。おまへに逢て此事を。呉ゝいへとと丶さんのいひつけ。

主計　ム丶そんなら親の藤六殿。が夫程までに此主計ゑ。心を添て下さる丶か。忝ふ御座るぞよ。

トよろしく禮をいふ事有。

梅ケ枝　今わかれては又いつか。逢事ならぬあの世の旅。暇乞やら二ッには。わたしの心のこらぬやう盃していつて下さんせ。

主計　ヲ丶いかにも。此世の縁は薄くとも。未來へむすぶ水盃。

唄「涙の雨のはれ間時。あの世をかけし縁のはし。むすぶ谷間のこけ清水。互ひの心くみかわし。

ト主計肌をいれて竹笠にて。うしろの清水をくみとり。兩人水盃をすることよろしく有て。

寫二痴情一。只是一筆。有二無窮情致一。

梅ヶ枝　これでわたしが心の安堵。
ト梅ヶ枝よろしく懐劍をぬき。髪を切つて主計に出し。これをとつて下さんせ。
主計　そんならそなたも。覺悟して。
梅ヶ枝　未來の縁をたのしみに。おまへの跡を弔ひ升る。
主計　なんにもいわぬ。
ト手を合ておがむ。
唄「みさほをうつす谷川の水。
ト唄切れる。主計髪の毛を取て懐中する。
梅ヶ枝　今が互ひの顔の見をさめ。
主計　梅ヶ枝。
梅ヶ枝　もしよふ顔を見せて。
ト主計にとりつくを。道具かはりのしらせ。
下さんせいナア。
ト兩人手をとりあふて。名殘のもやうよろしく。下手の堂の羽目の破れより。ふきがへの藤六白髪
あたまを出してふしおがむ。此もやう水の音にて。此道具逆まはりに廻す。

LIBRARY U. OF I. URBANA-CHAMPAIGN

前段把主計梅枝一節。隔斷以省帝前軍議處好。

跼蹐不忍光景。是併優最宜用意處。

兩人相視。兩心相照。呑吐不發。如聞嗚咽之聲。

本舞臺もとの階下の道具になる。

管絃にて道具とまる。すぐに床の浄留理になる。

上「時うつり時去れば。軍議も既に事果て。勅を奉じて正行は。早御暇賜はりて。

ト上手の廊下より。以前の正行靜かに出て來たり。階を下りて正面の。家体へ段〻にあゆみくる。

上「御前をたつか弓取い。矢竹心も龍顏の。是今生の見納めと。悲歎を忍び靜〻と。あゆむ宮殿樓閣もけふを名殘と見かへり〳〵。たちもとをれるうしろの方。

ト正行よろしく有上手の奥にて。

隆資　アイヤ。正行朝臣しばし〳〵。

上「しばしと聲をかけまくも。かしこき君の勅をうけ。四條大納言隆資卿。立出給へば正行も。席を正してさしむかふ。

ト上手の奥より。以前の隆資出て來り。正面の家体上手に住ふ。正行よろしく下手に住ふ。

君前の軍議一決なし。御身出陣の蒙に付て。隆資思ふ處あれば。一言を申のべん爲。扨こそ御身をとゞめたれ。

正行　様子有げなその仰。今出陣の際に望み。思召さるゝ處ありとは。如何なる義にて候や。

隆資　申までにはあらざれど。すべて戰場に望みてハ。進む可きによくすゝみ。退く可きに退くは。是

隆資在前段。不過聽諸卿議論。絶無一出色處。自此一節。始能見其機敏。是擡擧隆資處。即是擡擧倂優扮本人者處。

名將のなす處。されども進む可きを見て進む事は。士卒も是を能すれど。退く可きを見て退く事は。勇將といへどもかたんずる處。御身こたびの戰ひに。進退其度を失はざるやう。何卒駈引これ有たし。

上「それといはねど正行が。底意を悟る一言に。

正行 ハヽ心盡しのその仰。正行慥かに服膺仕る。

隆資 即座の答へ祝着に存る。

正行 我は是より手勢を引具し。四條繩手へ出張致さん。

隆資 君の爲に身を思ふと。返す〴〵も心にしかと。

正行 變に應じて。駈引致さん。

隆資 然らば朝臣。

正行 隆資卿。

隆資 心ならざる。

正行 ヤ。

隆資 勝利の知らせを相待申す。

上「さらばとばかり文武の兩臣。右と左へ立わかれ。これが名殘と隆資卿。思ひは同じ正行が。心の内の暇乞。

LIBRARY U. OF I. URBANA-CHAMPAIGN

欲寫出正行一族主從。先寫降卒報恩致死。以襯起下段。雖是閑言語。亦大有關係。

累世臣隷。死事不足異。顧此降卒致死。反是妙絕。

ト兩人立上り上下へわかれて。名殘のもやうよろしく。兩人一度にふりかへり。顔見合せ一寸氣をかへるを木のかしら。

上「わかれ〳〵て。

ト隆資は上手。正行は下手へ靜かにあゆむ。此もやう双方よろしく。鳴物なし三重にて幕。引付るど。すぐに山おろしにて引返す。

本舞臺一面の山幕。爰に二幕目の關の伴吾。甲冑手鎗を持立身。外に二幕目の鷺野郎等五人。皆〻甲冑手鎗を持。立かゝり居る。陣太皷にて幕明く。

伴吾 いかに各〻此度の戰ひ。敵は大軍味方は小勢。尋常のはたらきにては。所詮勝利は覺束なし。すは合戰といふ時は。一番に切て出。討死なして正行公の。恩義を報ふは此一戰。

○ 我〻とても同じ事。當時名將の聞え有。正行公の先降なして。命を捨るは。もとより武士ののぞむ處。

△ 今日爰に命を捨ねば。いつか恩義に報ふべき。一ト足もひく所存はござらぬ。

□ 殊更一旦犯したる。不忠の罪ある我〻が。汚名をすゝぐは今日此時。

▲ たとひ何程大軍なりとも。何恐るゝ事あらん。鋒先を揃へ討て出。

◐ 花〻しく討死なし。名を後世にかゞやかさんと。我等は決心致してござる。

不寫先帝陵廟。寫如意輪堂。是在戯場不得不然者。旗幟齊整。鎧冑鮮明。一場結局使觀者肅然。此是本篇一種出色處。

伴吾 いさまし〱。大將正行公には。恩顧の人〻召つれられ。いま先帝の御廟所へ御出あれば。

○ 頓て麓へ御越しならん。

△ 御出陣に間も有まじ。

□ 是よりすぐに我〻は。

▲ 麓へ参りて人數を揃へ。

伴吾 大將の御出をお待申さん。ソレいづれも御つゞきなされ。

ト山おろしにて伴吾先に。此人數皆〻上手へはいる。すぐに床の淨瑠理に成る。

上「爰ハ所も吉野の奥。巖石峨〻たる山中に木々の梢も色深く。如意輪堂の伽羅の前。けふ討死の出陣と。楠左金吾正行が。きざす鎧は緋おどしの。あたりかゞやく其いで立。つゞいて舎弟大和守。和田兄弟を始とし。死を極めたる楠家の一族。一世のはれと花やかに。列を正して居ならびたり。

ト山おろし小皷のあしらひにて。正面の山幕切て落す。本舞臺少し前へ出して中足の二重。岩山の張もの。下の方ダラ〱の下り口。二重ずつと上へよせて。二間中足の二重。朱塗の堂。三方折まわして瓦屋根の庇。朱ぬりの縁がわ。朱ぬりの上り段。金かなもの付の扉を左右へひらき。翠簾を半分捲上る。此中黒ぬり金もの付の須彌檀の摸様軒口へ。如意輪堂と記したる額を懸け。正面大なる櫻の立木。枝のはびこりしもやう誂へあり。上下樹木を立ならべ。下の方茅屋根付石の手水鉢。向ふ一面

LIBRARY U. OF I. URBANA-CHAMPAIGN

勇氣凛然。毛髮爲竪。辭陵一句。黯然魂消。

先說敵軍形勢。

不是揚敵威。即是示我勇。次說我軍勇威。

正朝智士。自有智士口氣。

正虎猛士。自有猛士口氣。

深山遠見の景。上下山の張物にて見切り。すべて吉野の奥。如意輪堂のてい。爰に上手に楠正行緋威の鎧附太刀。甲下烏帽子。箙を脊負。好の拵へにて軍扇を持。床几にかゝる。背に郎等一人甲冑にて。正行の龍頭の兜盔をかぶりひかへる。少しうしろに大和守正時。緋おどしの鎧。楠將監和田新發意同じく新兵衞の四人。銘々甲冑好の拵へにて床几にかゝり。下の方に和田紀六左衞門。關良圓。南宮八郎。鳴尾七郎の四人。各〻甲冑にて座し。此前へ大なる板へ銘〻の名をしるしたるを置。ずつと下手に鷺池平九郎正虎。甲冑好の拵へにて鐵の棒を持ひかへる。同うしろに楠の郎等大勢。皆〻甲冑にてひかへ。菊水の旗鎗等よろしく立連ね。山おろし小皷のあしらひにて道具治る。

正時　いかに各〻此度の出陣は。十死一生の戰ひにして。いきて再びかへらじと。只今先帝の御廟に參り。誓ひを立て銘〻の。御暇申上たれば。今は大空一點の。心にかゝる雲もなし。

將監　仰の如く。賊將尊氏。毎度の敗を恥辱に思ひ。此度こそは一擧にして。攻落さんと軍議を決し。

源秀　師直兄弟細川赤松。仁木六角武田の諸將。合て其勢十萬餘騎大軍一時に押出す。

正朝　楠一手の人數をまとめ。敵勢吉野へよせざるさき。四條繩手へ打て出で。目ざすは中軍師直兄弟。

平九郎　不意におこつて討てかゝり。賊のわらぎもとりひしぎ。あたるを幸ひなぎまわし。刀の目くぎのつゞくだけ。切て〳〵切まくり。

紀六　先へすゝんで一ト足も。あとへはひかぬ楠勢。

終說誓必死。部下諸將發數言。皆是出奮勇之餘。而正行不輙出一言。至後從容而言。此等處最見其人品。可以補正史之所不及矣。

熟視二字。有多少感慨。

不爲奮躍之色。從容自如。所以爲大將。

忠孝二字。緊應前段。

亘圓 此百四十余人のものは。いづれも必死の誓ひを立。

八郎 是成御堂の壁板を。過去帳となし大將始め。

七郎 一同姓名書記し。いきて再びかへらぬけいやく。

紀六 御堂へ納る其過去帳は。大將へ御覽に入よ。

八郎 心得申した。

ト八郎右の大板を正行の前へ持ゆき。ひざまづきて是を見せる。正行つく〴〵見る事ありて。

正行 人は死して名をとゞむ。豹は死して皮をとゞむと。王彥章が最後の一言。かく姓名をとゞめ置くは。再びかへらぬ即ちしるし。直樣アレなる堂内へ。

八郎 畏つてござります。

ト八郎この大板を持て上手の堂内に入り。須彌檀の前へよろしく立かけ出て來り。もとの處へ住ふ。

正行ふりむいて見て。

正行 ムヽ忠孝二ツを全ふなせば。死すとも今は恨みなし。頓て冥府へかへる身の上。正行が此世の思ひ出。

上「靜〻立てかたへなる。御堂の戶板に打むかひ。中ざしの征矢ぬき出し。かたみに遺す言の葉の。跡は淚のかたり草。實に忠臣のいさほしを。末世に傳へ彫のこす。文字も亂れぞさら〳〵と。鏑に顯

LIBRARY U. OF I. URBANA-CHAMPAIGN

一軍肅然。呑レ聲二字寫盡。

據二太平記一。隆資爲二後援一。事在二於前一。今叙在二此處一。不レ然。嫌レ於レ決レ死無レ力。

す。辭世の一首。

ト正行堂の縁へ上り。脊負たる矢をぬきとり。矢の根にて扉へ。一首の歌を書く事よろしく有。

かへらじと兼て思へば梓弓。なき數にいる名をぞとゞむる。

上「吟じ給へば。有おふ人ゝ。心を感じ顔見合せ。聲をのんでぞ居たりける。折から爰へ走來るは。里見主税之助義遠。夫と見るより立とゞまり。

ト山おろしに成り。向ふより序幕の里見主税。烏帽子鎧直垂。附太刀草履にて出て來り。花道にて。

主税　正行朝臣には。是におわたりわられしか。

正行　御身は里見義遠どの。何用有て此處へ。

主税　某是へ參りし次第。夫へ參りて申のべん。

ト大小入の鳴ものにて。主税之助本舞臺へ來り。下手よき所へ床几にかゝり。

四條大納言隆資卿より。申入るゝ事有て。是まで參上致してござる。

主税　されば御身が出陣氣づかわしく。朝廷再び詮議あり。即ち四條大納言を惣大將として。和泉紀州のものども一萬餘人をさしろへられともに出陣これ有事に。朝議一決致したる旨。御心得これあるやう。隆資卿の仰をうけ。是まで參上致したり。

正行　スリヤ。隆資卿にも御出陣とな。委細承知仕る。

不必煩内侍一行。然結局光景。一味殺氣。

正時　隆資卿中軍に御座ある上は。いよ〳〵もつて心やすし。無二無三に討入て。思ひのまゝに一戰致さん。

正行　頓て御出張これあらば。陣中にて拜謁なし。共に軍議を示し申さん。

上「いさみ立たる其處へ。北面の侍走り來り。

ト向ふより侍一人。烏帽子素袍高股立附太刀にて。走り出で花道にて。

侍　ハツ申上升る。御上より御內勅を蒙らせられ。辨の內侍。只今是へお出にござりまする。

上「いひ捨ててこそひつかへせ。

ト侍向ふへは入る。

正行　勅使とあれば。出迎ひなさん。

上「大將始め一同に。列を正して出むかふ。遙かあなたの山影より。辨の內侍のめさせたる。白木の輿をかきになひ。路次の警衞おごそかに。いと靜やかにあゆみよる。

ト山おろし大小のあしらひにて。向ふより仕丁四人。白木の輿を舁出る。跡より侍女一人仕丁二人つきそひ出て。直に本舞臺へ。そつと上手へ輿をすへ。其前へ莚をしく事有。

上「內侍は君の內命を。自からこひし御使。因を結ぶその人に。此の世の名殘をおしまんと。しとやかに立出給ひ。上座にこそはおしなほれ。

LIBRARY U. OF I. URBANA-CHAMPAIGN

做得甚麼摸樣。介冑雄壯羅綺艶麗。互相映帶。成此一壯觀。便能終局全篇來。

勢至此然。忠臣義士自然不能無顧慮之心。便是人情。便是事理。

ト辨の内侍小うち着緋の袴にて。輿より出で筵の上へ床几にかゝる。正行よろしく手をつかへ。

正行　内勅と有て。内侍には。思ひよらざる只今の入來。勅諚の趣逐一に仰せ聞られ候へ。

内侍　内命の趣外ならず。今日正行出陣につき。ことなふ叡慮をなやまさせられ。四條大納言隆資を。さしそへらるゝと申せども。今度正行が決心。朕よく知れば。さらに安き心もなし。只幾重にも正行を股肱と頼み思召せば。進退その度を失はず。つゝしんで命を全ふすべしと。此よし呉〻も傳へよとの。勅をうけ給はり參りしわらはは。叡慮を安んじ奉る。勅答の程わらまほし。

上「ひとへに頼むのみことのり。正行は身ひとつに。叡慮さこそと押れうり。默然として居たりけり。主税之助さしよつて。

主税　今官軍の人〻が。擧つて頼むは御身一人。君の叡慮もさぞかしと。某推察仕る。何卒君命を奉じ給ひ。宜しく勅答これあるやう。願はしう存ずる。

正行　ハヽ。數ならぬ身をかくまでも。御心にかけさせ給ふ事。臣が身にとりいかゝ斗りか。冥加至極に存じ奉る。

内侍　そふして御身が進退駈引。

主税　勅を奉ずるお心か。

正行　戰場の義はいくへにも。勅答申上げ難し。正行が心中あれを見られよ。

絶命詞至是再唱。嫌於重複。然勢不得不如此。前示之士卒以發敵愾。後示之使者以告訣別。一首和歌自是兩用。不是重複。

藤六一節以結前局。或有其嫌使文氣緩慢者。然有首無尾。文理不順。是作者不得已處。

上「かたへの和歌をさし示せば。

ト兩人御堂の扉を見て。

内侍　ナニ。かへらじと。兼て思へば梓弓。

主税　なきかずにいる。名をぞとゞむる。

内侍　ヤヽ。そんならどうでも。

主税　決心有てか。

正行　このよしくはしく。奏聞せられよ。

上「意氣決然たる一言に。二人は顔を見合せて。とりつくしまもなかりけり。

ト兩人よろしく有。

上「折から爰へ藤六が。甲冑に身をかため。いきせきとしてはせ來り。

ト下手より前幕の藤六。甲冑帶刀にて出で來り。よろしく下手に住ひ。

藤六　いつの間にやら。御出陣と承はつて。親父めも。われあとを慕ふてまゐりました。

正行　ムヽ。たれかと思へば安達藤六。見れば甲冑に身をかため。其方いづれへ參る心じや。

藤六　ヘイ。御出陣のれ供をいたし升。

正行　ナニ。出陣の供をいたす。我に於ては其方へ。申聞せし覺へはなきが。何者が申せしぞ。

決死之心。在不言妙。

骨直老人言語。寫得好。

藤六　どこからも申さかせれござりませぬが。頼ふた御人の御出陣ゑ。家來が御供をいたし升のは。コリヤあたりまへの事でござりまする。
正行　イヤ其義は相成らぬ。此度は供にはつれぬぞ。
藤六　是まで度〻の御出陣に。大ていはお供して居り升のに。ナゼ此度はなりませぬナ。
正行　其方にはことわけて。申付る事あるぞ。
藤六　ソリヤどんな御用か存じませぬが。此度ばかりは此親父。ぜひともお供をいたしまする。
正行　如何心得て居るかは知らねども。此度に限り其方に。申付ることが有るのじや。
藤六　どふで相應な。ろくな御用ではござり升まひ。そんな事なら。此親父きゝたくもござりせまぬわへ。
正行　れろかな事をいふやつかな。大事の使なればこそ。申付る事なるに。其事がらもきゝわけず。とかく申は不禮ならん。
藤六　なるほど。こりや。親父がわるふござりました。左樣ならどんな御用か。おつしやつて下さりませ。
正行　只今申聞るで有ふ。
上「いひつゝ頓て懷中より。とり出す二ッの髻。
ト正行鎧の間より。二ッのもとゞりに。紙札をつけたるを出して。

正行忠誠决レ死。因當レ然。然若無二母子之恩一。兄弟之愛。夫婦之情一。何以知レ非二鹵莽男子一。不レ可下以爲二絶世之英雄一也。此段文字斷不レ可レ少。

語益俚意益誠。

亦用二俚語一慰二藉之一。以見二正行周密一。

いかに藤六。こは我々兄弟。如意輪堂へ納めたる。半を分し此もとゞり。そも此度の出陣は。十死一生の戰ひにして。生死の程も知りがたし。萬一兄弟運きはまり。戰場に討死なす時は。千早にまします母松榮尼公の御なげきもいか斗り。是成ふたりのもとゞりを。汝本國へ持參なし。形身に御覧あれかしと。申傳へて其方は。われにかはつて母上の。御先途を見屆けくりやれ。

上「さし出せば見むきもせず。

藤六 大かたそんな事で有ふとぞんじました。あなたがお討死なさるのを。なんでおめ／＼本國へ此親父が參られましようぞ。其使はたれにでも。餘人におつしやり付て被下ませ。

正行 藤六いしくも申たり。されども死する計りが忠義にあらず。此使つとむるが。死に勝る我々への忠義何卒此事つとめてくりやれ。

藤六 イヱ／＼なんとおつしやりましても。是ばつかりはいやでござりまする。

正行 おさなき時より正行を。手しほにかけて育てし其方。ヤンチャをいふては其方に。しかられた事もいく度か。其小言をいふた事がある故。さやうに剛情を申が。これ正行が一生の頼みじや。親父どうぞきいてくれよ。

藤六 イヱ／＼いけませぬ。あなたのおつしやる事。外の事ならなんなりと。仰は背きは致しませぬか此事計りは此親父。きつとお斷り申ます。

益妙。

語氣益急益便。

正行 汝は主のことばを背くか。

藤六 ヘイそむき升。老さらぼひし此藤六。役に立ぬとあなたさまに見くびられた上からは。お氣に入らふが入るまいが。戰場に出てむちやくちやに。命を捨ておわびをすれば。なんのかまふ事がござりませぬ。

正時 コリヤ藤六。常はともあれ。今日は惣大將たる。兄上の詞に背くは。軍令のゆるさゞる所。何やうに申とも。軍の供ハ叶わねばすなほに。古郷に參るがよい。

藤六 そんならどうでも此親父は。アノれ供は叶ひませぬか。

正時 軍令そむくは大罪なるぞ。

上「いひはなされて藤六は。物をもいはずうは帶とき。手早く鎧ぬぎ捨てゝ。さしろへに手をかくる

。ト藤六じつと思入有て。手早く鎧をぬぎ。死ふとする。

正行 コリヤ藤六何をいたす。

藤六 軍令を背く此藤六。どこで死ぬのも同じ事。こゝで死んでしまひます。

正行 其方われにだゞを申な。

藤六 ヘイ。おちいさい時あなたさまがわたくしに。だゞをおつしやいましたから。今日は私があなたにだゞを申ます。

一頓挫。

事出二意外一妙。

此一段。殊嫌レ出二作意一。然只是寫二正虎勇一

正行　コリヤどふ有ても其方は。

藤六　どふぞ死せて被下ませ。

上「思ひ込だる老の一てつ。正行思案の胸を定め。

正行　コリヤ身がわるかつた。軍の供にめしつるれば。必ずともに早まるな。

藤六　スリヤ。れつれ被成て被下升るか。

正行　ヲヽサ。

藤六　ヘイ夫で親父も落付ました。

正行　コリヤ鷺池平九郎是へ出よ。

平九郎　ハヽア。

トづか〳〵と正行の前へ出る。

正行　是成もとゞり本國へ持參致せ。

平九郎　コハ存寄らざるその仰。拙者は平に御免を蒙る。

正行　定めし左樣申さんなれど。正行が申付る。きつと其方相つとめよ。

平九郎　いかやうに仰あつても。此儀斗りハ。

正行　主將の一言は是軍令。幼稚の折から恩のある藤六とは違ふぞよ。汝正行が言葉をそむかば。軍

猛。以襯染藤六。使不寂寞耳。

六爲此一句。

令にそむくなり。達て申さバ出陣の血祭り。討てすつるぞ。

平九郎　軍令にそむくとも。何しに爰をうごきましよふや。サアすつぱりと遊ばせ。

正行　ヲヽよい覺悟だ觀念いたせ。

ト太刀に手をかけ立かゝる。

主税　アイヤ。こは御身にも似合ざる。あまりといへば無法のふるまひ。

正行　必らずともにおかまひあるな。此後に及び一人たりとも。むざと味方を失ふ事。無念には存ずれど。軍法なれば已を得ませぬ。

主税　スリヤ。どふ有ても此ものを。

正行　軍法に處せざれバ。何をもて諸軍をつかはん。とゞめ給ふな。

主税　ハテナア。

上「さしひかゆれば平九郎。それと察して座をすゝめ。

平九郎　お手おろさるゝまでもなし。君に一命さゝけ申さん。

上「すでにこふよと見へければ。藤六はかけよつて。

ト平九郎小刀をぬき死ふとする。此時藤六づか〳〵とゆき其手にすがり。

藤六　またつしやれ。思ひ切て此親父。お使に立ましよふ。

愴然以悲。泣然以泣。不レ費二多言一處甚好。

幼時戲。作二戰鬪狀一。却是正史本文。使三用得二自在一。

平九郎　スリヤ。そこもとが此れつかひを。

藤六　こなたハ血氣さかんの身の上。いつかどの御用に立ものを。どふ見殺しになりましよふ。

正行　そんなら其方得心して。

藤六　參りまするでござりましよふ。

正行　それにて我も安堵せり。コリヤ藤六此二品を持參なし。我々兄弟其外の。郎等どもが後世の吊ひ。逆縁ながら母上に。其方よきに申上げよ。

ト「いひきかすれば藤六は。なんとかへす詞もなく。涙の外はなかりけり。

正行　藤六そちやなんでなく。

藤六　是がなかずに居られましよふか。

ト床の合方。

餘人と違ひ此親父は。おもり役ゆゑあなたさまの。ちいさい時からおつき申。れ弓のおけいこ馬場のれ供。いくさごつこのお相手まで。ぢいよ〱とおつしやつて。おなじみ申ぜし若さまが。けふ討死の御出陣。

上「老さきのない身をもつて。死出の御供をする事の。ならぬ此身の腑甲斐なさ。此まゝ直に本國へおわかれ申。此親父が心の内の悲しさを。御推量被成て被下ませ。

LIBRARY U. OF I. URBANA-CHAMPAIGN

引至櫻井訣別。周匝同環。毫釐無憾。

不下以忠義死節論上之。反擧佛語曉之。極好。

上「すいりやうわれやわか様と。老の涙のやるせなく。人目もはぢぞ聲をあげ。わつと計りになきふせば。心を察して正行が。

正行　その志しはわれとても。おさなき時よりなれなしみ。一ト方ならぬ養育の。恩わる汝にわかるゝは。すきし昔の櫻井にての悲しみと。思ひは同じ正行が。心の内を推量せよ。今忠孝を全ふして。死すとも心に恥なきは。又これ汝か養育の力なしとすべからず。正行謹で禮を言ふぞよ。

藤六　勿体なひ事おつしやりませ。なんの御用にも立ぬものを。此年頃のおいつくしみ。御恩もおくらず此まゝに。わかれ申もよぎなき御使。御本國へ参つてから。此悲しみより又一倍。御母公様のおなげきが。今見るよしに思はれて。

上「あとは得いはずくひしばる。涙の雨のやるせなきはてしなければ正行が。

正行　愛別離苦は人の身ののがれぬ所。殊更に弓矢とる身の常にして。兼て覺悟のあるべき事。歎きをとゞめ本國へ。少しも早く立かへれ。

上「件のもとゞりさし出せば。藤六なく〳〵さしよつて。是今生のわかれぞと見あげ見をろす主従が。心を察して辨の内侍。有あふ人々顔見合せ。涙のみこむ其所へ。

ト正行藤六皆〻よろしく有て。

上「いきせき走くる辻風藤馬。

重作ニ氣勢一。語有ニ雷擊電擊之勢一。

ト山おろしに成り。向ふバタ〳〵にて。辻風藤馬小具足帶刀にて走り出で。直に本舞臺へ來り。

藤馬　ハツ申上升す兼て仰を蒙りて。都のやうす伺がひしに。高の師直師泰兄弟。大軍を卒し都を立。早淀八幡まで出張なし。師直にハこれなる吉野。又師泰には赤坂へ。二手にわかれて攻寄る。敵の手筈に俟へば。此儀御注進申上升る。

正行　敵淀八幡まで出しとあれバ。もはや猶豫すべきにあらず。イデヤ是より馳せ向はん。それものども乘馬をひけ。

奥かた 軍兵　ハヽア。

ト大小入り誂への鳴ものになり。下手の奥より軍兵大勢正行の乘馬を引來る。正行兜をきて此馬に乘る事有る正時始め楠の郎等皆々平舞臺へ下りて上手より順に立ならぶ。内侍主稅藤六二重へのこる。

正行　みよ〳〵賊將師直兄弟。今にひと泡ふかせてくれん。

正時　これよりすぐに河内なる。往生院の陣所に至り。隆資卿と軍議を示し。

將監　敵八方よりよするとも。目ざすは中軍高の師直。

源秀　備へを立ざる其先に。不意に起て横合より。

正朝　兼て手なみは知りつらん。楠家の一族是にありと。名のりかけ〳〵。

LIBRARY U OF ILLINOIS

一句足矣。

四個人物。自有四樣心情。不寫出一言。獨以心情相照。此等妙處。最在俳優得其入。

まつしくらに切り入て。
八郎　狼狽なすを追立追つめ。
七郎　切立なぎ立おいまくり。
平九郎　多勢をたのむ葉武者ども。さんらんなすを追ちらせば。勝どき上るはまたゝくうち。
主税　いさましゝ〳〵。其吉左右を相待申す。
正行　イデヤ出陣。
内侍　そんならこれが。
トよろしく有る。
藤六　もし。
トこれをへだてる。
正行　方ゝさらば。
上「いさみすゝんで。
ト正行は軍扇をとつて。花道つけぎはに至る。向ふを見込できつと見へ。内侍藤六名残りおしさこなし。主税感じる思入。此もやう大小入り誂への鳴もの。三重にて拍子幕。
此幕。平舞臺一同のものをのこして。引上け。内侍主税藤六の三人を消す。是より誂の鳴ものにて

正行馬上にて。ゑづ〳〵と向ふへ入る。跡正時始め順〻に旗馬印等列を正して順々に向ふへは入る。一番跡に平九郎鐵の棒を以て。大踏歩しては入る。跡シャギリ。

(作者自評) 藤六たぶさをもたせかへす一節は。これも會員外山菊池兩君の說に。餘りくだ〳〵しくして。又正行最後の決心の意を。何となくゆるまするに近く。俗にいふだれるといふものなるべし。この一節を削り去るべしとの說あり。この說は實に卓說にして。從ふべきとなり。のちさらに修正すべし。

(作者惣評) 演劇は遊戲に出たりといへども。即ち一の美術なり。正史實傳をのみ主とすべきにあらず。或は君臣の情義を演し。或ハ父子夫婦のありさまをつまびらかにして。その善惡邪正をのべ。見るものをして。感を起さしむるにあり。必しも勸善懲惡の意を。あらはに示さずして。自から心に感ずる所あらしむるを妙とす。又は滑稽諧謔を以て。規諷を寫すこと有べし。されば今余が作る所は。これ改良演劇の一部にして。これをもて演劇を盡く槩するゝはあらず。ゑかはあれども。此戲は男女の情體を描き出して。情義ふたつながら得さしむるを主とし。かたはら弓馬衣冠の古實を示し。又言語をのぶるにも。雅にして耳に遠からず。俗にして野鄙猥褻に入らざるをむねとす。又殺伐慘酷なるかたちを示さず。又悲痛哀歎にすぎて。衰弱狼狽の狀をあらはさず。哀むといへども、勇壯憤烈の意を寓し。武勇を示すといへども。酷薄粗暴の所爲を見することなし。正行

LIBRARY U. OF I. URBANA

が一箭よく時景を射て。その黨與をゆるし。内侍伊賀局が別を惜むことをのべて。悲歎に沈むといへども。尙ほ慷慨の英氣をあらはすがごとき是なり。作者の用意こゝにあり。又梅か枝主計の色情も。時景が家臣等も。正行の恩義に感じ。戰死を決するに至るなど。また然り。

◉世の中

其一

嵯峨のや主人作

妾が無心の産聲を此世にあげ、無想の眼もて家尊家母の御顔を見擧し時にハ、御二方は如何斗の喜を以て妾の身を祝し、如何斗の望をかけて妾の行末を契りたまひけん、匍匐バ立て、立てば歩めの親心、荒き風にも吹かせず、寒き雨にも當ず、手裡の玉、簪の花と育てたまはりしものを、情なや、夜半の嵐無常をさそひて、妾が十八といふ年の秋、御二方共に此世を辭して永久の眠に就たまひぬ、嗚呼其時の妾の心の裡、如何ありしと思ひたまふぞや、昨日までも今日までも浮世の海の鹹の味、甘さ辛さハ露斗も知らず、溫なる恩愛の懷の中にいとほし可愛とはぐゝまれし身が、俄に父そばの父を失ひ、母そばの母その森陰を離れて、樫の實の一人者となり果ては、其心細さは如何斗なりしぞや、妾は不幸にして兄弟姉妹とては一人もなく、又祖父様祖母様、さては伯父様伯母様といふ様な親しきゆかりの人は一個も無りしにぞ、御二方のみまかり給し後は、廣き浮世に寄る方もなく唯一人の孤子とぞなりける。嗚呼ゆふべ〳〵の鐘の音の諸行無常と響く頃は、如何に過し日の忍ばれて家尊家母の戀しく懷しく、堪ぬ思ひに空しく心をかき亂せしぞや、あるは又在明の月の影細き朝、葎閉せる窓の下に霞める空を眺めやりつゝ、如何に越方行末の想に沈みて、小やかなる胸を波立せしぞや、嗚呼此時の妾の身は、宛然破船

LIBRARY U. OF I. URBANA-CHAMPAIGN

の乗組が唯一人さゝやかなる一葉の舟に乗りて、万里の海原に漂ひ出て、打あげ打れろす波のまに〳〵其身の運命を任せたらん如く、胸にも寄する荒磯波の靜まる時はあらざりき。さりながら此に妾の幸なりしは祖先以來の家祿の公債證書となりしもの若干、家尊家母が節儉の御陰に據りて、其儘妾の財產として殘りし一事と、又御二方の御惠に據りて女子のすべき事一通は習ひ覺えてありし一事とにして、是は妾が生涯の幸なるのみならず、殊に此時に於て最力強く思はれたり、何となれば妾にして節儉と注意とを過まらざれば、衣食住には事かゝぬ丈の收入此金より有るべければなり、去ながら今が今まで父母の懷にありて、浮世の海の荒波を漕ゆく船を見てのみ有しに、俄に自ら小舟に打のりて海原遠く漂ひ出ぬるなれは、如何に小舟の楫をとり、如何に櫓櫂を使ひなばよき歟、嗚呼今が今まで此浮世を、窓前をゆきかふ路上の人を見るの思、何の考もなく眺てありし身が、俄に自ら其中に飛び入りて、其務に當る身となりては、如何で不可言の心配の其心を波立せざるべき、「是から先を如何したらば？」といふ浮世の問題は重やかに妾の胸へ落かゝり來りぬ。然ながら妾は妾の浮世物語を爲すに先だち、其發端として物語を妾の家庭より始めなん。

妾は封建時代の人の如く、若くは儀式國の英吉利人の如く、我家の系圖を說きて、如何計妾の先祖の誰彼は國家に功勞が有る歟と誇るものに非ず、故に彼等の功勞を說きて他人の退屈を買ふことはせざるべし、唯妾の家は淸和源氏の末葉にして家の定紋には綸籐を用ゆるといふを以て滿足せん、姓は瀨川と云

ひて三河以來德川家の旗本たり、革命の際には家尊ハ常に公武の間に周旋して。屢白刄の間を侵し、或は權門の怒に觸れて牢舍の苦を受し事もありしが、惜からぬ命生延びて王制維新となりし曉、住居を神田一ッ橋に移して塾舍を開きて世を送れり、妾は實に此所にて産れしにて、其時は恰も明治二年にてありき。

家は元より貧しからぬに母は勤勉節儉家政を整理するの道に明なれば、妾が幼時は極めて秩序あり極めて平和なる樂しき春にて圍れて有りしなり、嗚呼妾は心に當時の我家と兩親とを想像する毎に幼かりし古の忍ばれて、再びあどけなき昔に還る心のするなり。妾は妾が愛する母に就ては一言も言はざりしが、母の家は姓を山川と云ひて同じく德川家の旗本なりき、母ハ最も嚴格なる家庭に於て養はれたまひしが、其爲人は最もやさしくして深く妾を愛したまへり、妾は兩親の中の獨子なりしを以て、兩親の愛情は妾の上にのみ集りたれば、此身に着たる情の露は如何に豊に妾の心を慰めけるよ、昔は彼等の愛情は其胸より胸へ通ひしなれども、妾の出來てより以來は總て妾を通じて通ひける、彼等の喜びも、彼等の樂も、彼等の笑も、一ッとして妾と關係を持ざるは無りき、彼等は等しく妾の健に成人する事を願ひたまへり、彼等は等しく妾の小やかなる喜怒哀樂に同感したまへり、彼等は等しく妾の教育に注意したまへり、嗚呼如何に父母の恩愛の廣大なるよ。

父樣は其後塾舍の門を閉てれ勤の身となりたまひたるが、お役所の歸には妾の爲めに必ずミルク入の

LIBRARY U. OF I. URBANA-CHAMPAIGN

パンを買ふて歸るを常としたまへり、妾は又之を貰はんが爲め、其お歸の頃を計りて、必ず遊びより歸りて家に待てり、何となれば妾には父様のお顏を見るが嬉しく、父様には妾の顏を見るが樂かりし故なり、嗚呼如何に妾は明に父様のお顏を記憶するよ、妾は父様がお座敷に這入ながら、まだお袴も脱ぬ中さも樂し氣に妾の顏を見て、さも樂しげに莞爾〱と笑ひつゝパンの袋を袂より取出したまふ時のお顏を今尙見るが如く記憶するなり、嗚呼如何に父様は善人にて在けるよ。

其二

妾はまた獨子の癖とて折々わやくをいふて母様を困らせし事有ける、ある日の事なりき、折しも客の在りしにも管はず、些細なる事よりわやくを言ひ出して大あばれに暴ばれ散せしが、其果長きふりの袂が過て母様のお頭にふれて、端なく大事の櫛を飛ばして障子へばッたり、當ると其儘三ッに折れて悔れど甲斐なき有樣なり妾は忽ち靜りぬ、母様は、それ御覽なさい、と怨ずる樣に妾を睨みたまひしが、客有ば叱もしたまはざりき、妾は喫驚してあゝ惡き事をしてけりと思ひながら小さくなりて靜此室をすべり出ぬ、されど心には是にては濟むまじと恐れける、果せる哉客の歸るや否や妾を呼びたまひぬ、妾は恐る〱其膝元へ坐り、先づ窃む樣に其御樣子を見るに、常の母様には似もやらず、何となく冷かに何となく嚴かに見えたまひければ、妾は小やかなる胸に大なる波を波立たせつゝ小さくなりて御小言を待ける、母様は最も眞地目なるお顏をしていと嚴に、まあお前の樣な兒はない、さうわやくでは母様に

はお世話は出來ません、お客のあるのに彼暴れて、さう暴れると棄て仕舞ふからと言ひたまひぬ、妾は是を聞くや否や電の如く母樣に飛び付き、其お頸へ妾の細き腕をまき、其お胸へ妾の顏をおし當て、わッと斗に泣出しぬ、妾は實に何故に泣し歟は知らざるなり、何となれば母樣には決して〳〵妾を棄ることの出來ざるを知ばなり、妾を棄ることの難さは其身の命を棄るより難きことを知ればなり、母親の愛情の如何斗深き歟は智慧ある大人よりは無心の稚兒の方が遙に深く感じ遙に深く知居ればなり、然らば何が悲しかりしぞや其御小言が悲しかりし歟、母樣の御小言を言はるゝは折々の事にて、其時に限りしにはあらざるを、然らば何が悲かりしぞや、何が悲しかりしかは知らざれども、譯も道理もなく悲かりし故に妾は唯泣に泣しなり、母樣は實に驚けり、唯僅なる其身の言葉が斯まで激しく妾を感動さすべしとは思寄らざるべければ、妾が擧動の餘りに激しかりしと、妾が不意の淚慟とを見ていふべき小言をも何も蚊も打忘れて、唯悲母の愛情の深きを以てしッかりと妾をかき抱きぬ、恰も其抱ける力に據りて妾が胸の驚きを靜め、妾が心の悲を慰めんとする如く、然して其身の頰を妾の頰に押當て、さも心配氣に妾のすゝり泣を眺めたまひぬ、妾は忽ち此やさしき心づかひと、やさしき情とに慰められて其淚を止めぬ、されど貌を擧て母樣を見ることの耻かりし故、其儘じッとして貌も擧ざりき、母樣は妾の泣止みしを見て少し安心し給ふ樣なりき、其は妾が貌を擧て見ずとも胸より胸へ感じられしなり、然して又母樣は其身が今しも言ひし言葉が如何に激しく有し歟、如何に母親たるものゝ、慈愛を失へる言葉なりし歟

を悔ひ如何に稚兒の淡しき心を驚せし歟を悔て、其を妾に謝る如く、やさしき恩愛の手して妾の頭を撫始めぬ、然るも尚妾が頭を擧さるを見るや掻抱く手の先のみを動かして、子守歌の調子よて赤兒を眠かす時の如くそろ〳〵と叩き始ぬ、妾は是に據りていつか眠くなりてついうと〳〵も眠りし事もありしが、嗚呼如何に慈母の愛情の深きものなるよ、妾は母樣を記憶する毎に心は常に波打るなり、妾が心の鏡の面に深く彫付られし母の姿は妾が心の寶よして何人も奪ひ去ること能はさるなり、嗚呼戀し懷しの尊家家母よ！

妾は七歳の春小學校へあがりしが、小學校にては妾は餘りよき生徒にては無かりき、何となれば餘り行儀のよき方にても有らざりし故、されども科業はさのみ苦にもならざりし、何故に此先生の左の肩は彼樣に高くあがりて居るのかしらぬ、骨が如何歟なりて居るには有らぬ歟、などゝ益なき心配の内に算術を習ッたり、或は御本の講釋を聞ながら、あら校長先生の耳たぶの大きい事、耳たぶの大きい人は福性だと母樣が被仰しが、校長先生は福性かしらぬ、とジッと眺めて居る中に忽ち右の耳たぶのなみなみなるを見出し、否少し小さき位なるを見出して、おや何故右の耳たぶは小さいのかしらぬ、と疑ひ、よく〳〵見れば左も耳たぶの大きいのにはあらで、最小やかなる瘤が耳たぶに接してあるのなるを知りておかしく思ッたり、斯る間に習ひ覺ゆる程の事なりき、されど妾は敏捷なる生徒と聞えて、席順は何時も一二三の間を昇降して其より降りし事はなかりき、嗚呼其も是も皆御兩親の御蔭に據る所なり、何

となれば母樣は妾が學校へゆき始し頃より、最も妾の家庭教育に注意したまひて、是までの甘やかしの原素を減し、務て妾の心に善き果を結ぶべき種を蒔き、惡しき果を結ぶべき種を刈除きたまひたればなり。妾は十四歲の暮小學全科を卒業したるが、是よりさき十三歲の春より家庭に於て、蟹文字の英吉利語を父上より習ひ、御國の大和詞を母樣より習ひける、然して學校卒業後は之に加ふるに漢學、裁縫、編物、活花、茶湯、女禮式、琴三味線をも習ひ始ぬ、此の如くなれば當時妾の身は實に寸分の閑も無りき、されど斯まで愛いつくしみて育てたまはりし家尊家母は、妾の成人を見るに及ばず空しく冥府の人となりたまひしこそ是非なけれ。

嗚呼思へば明治十九年、此年は是如何なる不幸の年なりしぞや、日本國中に於て日に幾千の人が、或は最愛の妻子を殘して、或ハ大事の父母を後におきて非命の死を遂るぞや、嗚呼虎列羅、虎列羅、惡の味方、善の敵よ、汝は禍の皷打て此年此時幾千万の同胞を冥の府へは誘ひゆきしぞや、妾の家尊家母も實に其一人にて在せしなり、嗚呼當時を思ひ出す每に妾は幾度歟此胸を打ち、幾度歟紅の淚に袂を絞りけるぞや、誠に昨宵までも今朝までも娘よ家尊家母よと呼び呼ばれて在りしものが、瞬間と言はん歟、僅一日の中に幽明道を異にするに至らんとは、神ならずして誰歟思ひ寄るべき、妾ハ實に夢と思ふの外の想は無りき、實に夢なるべしと思ひたり、されど何時までたつも覺ず、何時までたつも破れざる夢なりしこそ是非なけれ、妾は淚の中に葬送を濟し、淚の中に晝と夜とを送れり。されど何事にも度の有る

LIBRARY U. OF I. URBANA-CHAMPAIGN

ものなり、妾は終に心を取直せり、雄々しき氣をふり起せり、然して自ら問へり。今より妾は此家の主人なり、故に第一に此家の家政を知らざるべからずと、然れども今まで何事も預知らざりし妾、何に據りて我家の家政を知らん歟、何に據りて之を調べなば宜い歟、唯茫然として暫時は途法にくるゝのみなりき。

其三

妾ハ途法に暮て當所もなく室内を見舞はしぬ、此時ふと箪笥の釘に懸られし小遣帳目に入る、是も參考になるべしと取おろして見れば母上のお筆の跡、宵々毎に其日〳〵の入費を手から記されしもの、見れバ思へば涙の種ながら、輕く來て吹け春の風、妾は涙にあきしものを、湧來る思を無理に心の底に葬りて、偖何歟參考に、おゝ忘れけり皮文庫、あの中には大節の書類を入れて置くぞと聞けるを、取おろして見れば錠前附、鍵なければ開かざりけり、何處に鍵やあらん、母上の巾着の裡にいつぞや有りし樣見てしを、即坐に巾着を取出して多くの鍵の中、此錠のも有ば宜がと目分料にて大きさを計りて、當て見れども當て見れども、長し短し、大きし小さし、合ふのは一ッも無りけり、何處にや仕舞ひてあらん、用箪笥にやあらん、箪笥の小引出にやあらんと其處此處さぐりまわして漸やく見附出しぬ、偖此他に入用のものは? おゝそれ〳〵酒屋の通帳、米屋の通帳、地代の通帳と、夫々取まとめて、扨何處にて歟調べなん、父上の書齋、彼處が最も靜なれば其内へ入りける。

父上の書齋へ入りて見れば、此頃の混雜に誰も此室へ入るものも無ればゝ、在せし時の儘にて殘れり、窓の下なる机の上には塵一面に積りて、年頃手馴たまひし硯、筆立、文枕、等も皆其まゝ据へられてあるに、日頃好みて讀たまひしミルトンの詩集と蘇子文集とが取交てのせてあり、又歿なり給ふ日の朝御朋友の元へ書狀を出さるゝとて用ひたまひし、卷紙の殘も其儘にて置れて有り、又引裂棄しと覺しき紙片二枚三枚散亂れて有り、又謝蕪村が得意の筆をふるひて描し莊村大嵐の大幅畫の床に懸れてあるなど一ツとして元の儘ならぬは無ければ。今も尚父上の在せる樣な心地して、尚此一間を隔てし奥の室には母上も居たまふ樣な心地して、夢に馬鹿さるゝ樣な心地して、嬉しさと悲しさとを取交し樣な心地して、阿呆の如く室内を見舞はせしが、花瓶の中なる投花の二本三本、花も散亂れ葉も凋みて枯々に哀なるを見るより、俄然として夢の覺し樣な心地して、此書齋の主も此花の如く散りて元の土に歸れるを想出、我身の現在を覺悟すればまたも、悲しくなりゆく秋の空、時雨は松の葉風のみかは。

妾は重やかなる胸を兩手にかゝへ、倒れるが如くゆら〳〵椅子に腰を落し、暫く机に突伏して有しが、斯心弱はくては叶はじ、と屹度思ひ直して、窓を開きて淸らかなる庭前の空氣を吸ひ、疲れし胸に自由なる呼吸を許して天を見擧れば、晴渡る秋の天、最澄て我身を照す如くなるに、四五羽の雀の木より木に飛かふ姿愛らしく、面を吹く風の稍冷かなるに心も淸々しくなりぬれば、其より皮文庫の蓋を開きて靜に取調にかゝりけり、妾は半日餘りにて一切の書類を盡く取調べ終りぬ、又此取調に據りて是まで

の家政の有樣、即ち月の收入支出が幾何程なりし歟、また我家全躰の有樣、即ち某の家とは如何なる關係に於てあり、何の某とは如何なる關係に於て有る歟といふ事、總てを知終りぬ、然して又此取調の結果として是までの如き生活は今より以後三月も續くることの出來ざることを知りぬ、又兩親の四十九日が濟たらんには此家は人に賣渡し、召使には暇を出し、妾は小さなる家に借家住居せざるべからずといふ事をも知りぬ。然して又思へり、妾は世事に疎き一少女なれば篤實にして且ツ世に經驗ある人の世話を受るこそ宜からめ、然らざれば萬事に就て不都合なるべく、又此身を過る樣の事有るも知るべからず、思へば猶豫成難し、さるにても誰を歟力に賴むべき。

此に昔妾が家の用人をしける戸村孝平と言へる者、維新の後父の世話にて蕎麥屋の店を神田神保町に出せしが、運能取續きて店も立派に、身代は總領に讓りて其身は樂隱居で暮す者ありけり、彼昔の恩を忘れずして常に出入をなし、此度の變にも第一番に走付來て、葬禮の事より、屆の事より、初七日の事より、家督相續の事より、內々の事萬事萬端、四方に眼を配り、八方に奔走して、信切に世話してくれたればこそ、當事氣抜のしたる如き妾、何事も人任にして置て濟みたるなれ、今妾は妾にかへりて自ら此困難に處する道を考ふるの時、爭で此人の事を思ひ出さゝるべき、將來に於ては、一身上の事ハ姑く置き、家政上の事は何事も此老人に打明て、其注意と了見とを借こそ宜けれ、必ず然なさんと決心せり、さるにても此家を賣拂ひて借家せんには家財什物餘りに多過るなり、書籍と衣類と日用品とを除く

の外、大概は賣拂ふこそ宜らめ、其に附ても妾の家の財物の中には抑如何なる物の有にや、日用必需の品としては如何なる物の備へて有り來客待遇の品としては如何なるもの、貯へて有り、裝飾品としては如何なるもの、用意有る歟、又此書齋の如きも和漢洋の書籍の如何なる物を歟藏し在る、總て是等の事をも調べねばなるまじと思ひつき、先づ書籍より調べ始めぬ、嗚呼此取調妾の爲めには實に善仕事にて有き、何となれば此事に氣のまぐれて忘るゝひまなき悲みも暫時忘れて日を送りたれば、妾は書籍の調に殆んど五日間を費せり、其代り門を和漢洋に分ち、類を歷史、文學、敎育、經濟等の各種に分ちて小目錄を作れり、父上は最も歷史、文學、敎育、政治の事を好みたまひたれば、此種の書最も少からざりき、妾は書籍の調を終てよりは掛物、置物、額を始めとしていろ〱の修飾品、又衣類調度を始めとして家具一切を調ゑが、此等に又兩三日を費せり、妾は是等の調べに少し疲勞を覺えたれば、其夜は常よりも早く床へ入たるが、此時下女の舌の聲として。

おいお鍋どん、如何だいお孃樣は、年もゆかない癖に家中の物をわらいざらい調べてさ、妾等でもちよろまかすかとでも思てからに、中々くへる代物ぢやないねへ、お孃樣も無者だ、丸で蹈張だ。

さうね、今の若者は違つたものだよ。

妾は是を聞て、嗚呼淺ましき事哉、奉公人根性とは言ひながら、人の心も知らずに彼樣邪推して、と腹立しくも悲しくも思ひしが、又思ひ直して、否々二人ともつい此頃來た者で馴染なければ彼樣思ふも

無理の無事、明日は何歟やりて能働て貰はん、あゝ人を使ふは使はるゝだ、と母樣が度々被仰りしが、眞にさうだ、是が浮世なるべし、何事も身の修行と此世悲しく覺えず歎息して寐返をすれば、寐る時心を細めし丸暗燈の光薄暗く、天井に幽なるまん丸の月を描きて哀なるに、隣の室にて單調に響く時計の音も物寂しく、家の内恰も火の消しやうなれバ四方見らるゝ思なるに、不意にがた〳〵と鼠の天井を走廻る音の激しきに驚かされて、あゝ兩親がないと思つて鼠までが馬鹿にして歟、彼音は憎らしいと何歟に付て父母戀しく、又種々の事思ひ出して夢も結ばず、九時も聞き、十時も聞き、十一時も聞しが、いつか又思疲れて寐るともなしに眠りつきける。

其四

翌日は鴉のしば鳴に目を覺し、枕を擧て見れば日は餘程高しと見えて、雨戸の隙よりきら〳〵とさし入る光、植籠の影を朧に障子にうつせり、耳を欹れば女中室はまだ目覺ずと見えて靜なりき。あゝ未起もせぬな、今までは元の習慣失せず、彼等に對してもつい父母の在せし時の樣に此家の娘の心地で在しが、斯ては一家の規律に取締なく、家の秩序を亂すべし、今日よりは妾自ら主婦なりと思ひて彼等に對すべし、先づ人を使ふは使はるゝなれば、妾第一に起るべし、と斯思ひて衣服を改め、雨戸をがら〳〵繰開れバ、彼等も此音にや目を覺しけん、とばくさと起て働き始めける、此日朝御飯も濟み、拭掃除も終りし時、妾はりんと鍋とを呼びて襦袢の半襟を一ッ宛やり、扨二人に向ひて。

お前達二人は此頃來たので先の事は御存じ無ろうがね、私は是まで親がゝりて居たの、其が俄に御両親に別れたので、是からは何も蚊も自分で切盛をしなければならぬのだが、何をいふにも世馴れぬ身故、何事も氣の附ないだらけで有らうに因て、何卒氣の着た事はお前達二人でさう言ておくれ。而して能働いておくれ、左様すれバ其様に又氣を着ませうから。

と言へばお鍋はハイ〳〵と返事するのみなりしが、おりんは少し膝進ませて、

ほんにお氣の毒様で何共申上やうがございませんねへ、否ね貴孃、お鍋どんとも始終左様申して居るのでございますよ、此方のお孃さん程お可哀相な方は無らうッてね孃様、何だッて昨夜までも今朝までもお孃様〳〵でお育ちの者が、俄に御両親が御隱になッたのだから、如何様にお心細からうッてねへ貴孃、否もう、其ハもう、被仰らひでも御氣を附申しますとも、眞成にねへお可哀相に、ですけれども何でございませうよ、お孃様は御器量が宜から直に好いお婿様がお出來遊ばして、此様事は今にお忘になる様になりますよ、ヲホヽヽヽ

と笑ひける、妾は少しいまわしく思ひしが苦笑ひして濟しける、やがて二人は立ちて自分達の室へ退ぞきたれば、妾は長火鉢の向ふへ曾て母上の座りて在せし如く、其日の新聞を讀んで居りける、暫くしてりん又入り來りて、

お孃様八百屋が參りましたが如何致しませう?

と問ふ、常なれば、あゝ如何でも宜様にれ前達見つくろひて何なりと買て置てといふ所なれど、今日は左様言はざりし。

左様ねへ、如何しやうねへ、まあ何が有る歟聞て來ておくれ。

と言ひぬ、りんはハイと言ひて退きしが直に又一枚の附木を持ちて入り來りぬ、妾は其附木を受取りて見れば、折釘流の文字にて、野菜の名いろ〳〵それに書附て有りけり妾は一通ずうと目を通せしが、それは學校の生徒が書物を見る時の樣な心にて讀しものにて、此中の何を買はん歟などゝいふことゝは思ひ到らざりき。

何を取ませうね?、

りんに言れて心づき、再び目をとほして、

さうねへ、何だ歟種々の物が有るが、まあ、里芋に、胡蘿蔔に、牛蒡に、蒟蒻に、大根も要るかね、

其位にして置かう、

幾錢程買ておきませう?

さうねへ、十錢も取て置う歟、足まい歟?

りんは訝しさうに

何です歟、けんちんでもなさるのです歟?

否、左樣ではないがお總菜にさ、
お總菜ならお孃樣其樣に要はしません、人數が少ないのですもの、其樣にいろ〳〵のものを一度にれ
取遊ばすと、凋びたものを喫なければなりませんわ、
其より歟、どうせ毎日來る八百屋ですから、毎日少し宛お買になる方が宜ございますわ、
成程ねへ、其は左樣だねへ、其ではお芋と大根でも買て置う、五錢斗、
ハイ、其方が宜しうございませうよ。
と立てゆく、
どら私も往て見やう、
と妾も其後ゟ附てゆき、障子の陰より見て居れば、りんと鍋とは後をふり向いて見てくす〳〵と笑ひ
ながら、
おい八百屋さん此大根ハ一本何錢だい?
八百屋は妾の居るを知らねば、
左樣だねへ、其奴は六厘のだが、いゝやお前の事だから五厘にまけて置かう。
ヱ、五厘に? 此樣大根をいやなのではないか? 馬鹿の事を言ッてらあ、冬ではあるめへし、當期
此大根が惡いなんて言ては好大根は有はしねへ、まあ喫て御覽よ、お前の二の腕よりは餘程甘いから。

りんハ笑ひながら
おや馬鹿の事を私の二の腕の方が幾ら甘い歟、其では此大根二本お買ひだ、其から其里芋は一升幾
何だい？
四錢五厘だ。
高いねへ、が、お前の事だ、稱價で買て置う、其代り量をよくおしよ。
心得た、して置う、
言ひながら八百屋は升に山盛盛るを、りんは目籠へあけさせながら、
わるい盛様だねへ、もッと負てお置よ、お前は全體高いといふ評判だよ、
迂詐斗言て居らあ、其では儲る所は有はしねへ、よし其では損だけれど、
と又二ッ三ッ入れながら、
さあ、其から後は？
まあ今日は是で宜よ、
エ、もッと何か買ておくれな。宜え？さう。
と言ひながら腰の煙草入を抜取りて、マッチを出して一吹吸付て、さもおいしさうにふうと息を長々として、煙の雲を天に立るを、つくづく見て居りし鍋は重くるしき調子で、

左様八百屋様の様に毎日稼いだら定めしお金が澤山溜るだらうねへ？
所が左様でないので困るよ、貧乏閑無でね、
と八百屋もお鍋には眞地目にいふを、りんハお錢を手渡しながら、
甘く言てるよ、倉の一ツも拵らへて居るだらうに。
アハ〳〵〳〵違へねへ、大きにさ。
如何だへ、お上様に成に行かう歟？
有難いねへ、來て貰はう。
邪見にしては厭だよ。
どうして、神棚へあげて拜み奉て置くれ。
わら、其も厭だね、お雛様の様に寐る時ハ離れ離れの箱の裡、其様契ハ私はきつい厭さ。
とりん打笑へば、八百屋も笑ひながら、
へム、違ひねへ、いや大きに、有難うおざい、又明日願ひます。
大きな聲で叫びながら出てゆく、妾は此樣子、此輕口、此ざれごとを見聞して。
あゝ浮世だ！
と覺ゑず口より洩しける、りんハ上へあがりながら妾の顔を見て面白さうに笑ひ居る、鍋も呆れたも

のだと云へる顔にてにこりにこりと笑ひながらりんの顔を見て居る、妾も覺えずおかしく思へり、父母に別れて以來今既始めて心の底より笑へり、室へ戻りて後も彼等の樣子を思ひ出ておかしく、再びあゝ是が浮世だと思ひける。

其五

斯る間に三七日も過ぎ四七日も過ぎて早くも三十五日になりたり、此日饅頭を諸方へ配りたるが、是等皆前日より孝平老人が妻のかのと二人で來て世話してくれたれば、何事も手落なく事濟たり、其夜妾は酒食を出して二人をねぎらひながら總ての事を打明て、是々斯々の有樣なれば迚も此家に長うは住居難しいづれ、借家住居をする歟、其でなければ何れへ歟同居でもする歟、二つに一つの中なれど、何に付ても世なれぬ妾、外に是といふて眞身に世話のしてもないから、何分二人をお賴み申すが、如何したもので有らう、考へて見ておくれ、と相談をしかくれば、老人は左樣でございますねへ、私等も內々其事に就ては心を傷めて居りましたが、如何したものだらうなう婆樣、とかのに相談をしかくる、かのは左樣さねへ、と言ひしがやがて妾にいふとも付ず、夫に言ふとも附かぬ調子にて、私の考ては是がお孃樣が十や十一といふのではなし、もう十八にもなッてお居での事だから、寧此お家もお賣にならず、此儘此處にお居でになつて居て、お婿樣をお貰ひ遊ばす方が宜歟と思ひ升が、如何でせうねへあなたと、夫にいふ、幸平は左樣だなうと言ひしが、如何歟腑に落ぬ所あるにや、思案有氣に考へて有しが

其も一理だの、然しお孃樣のお考も伺ッて見なければと、膨聲で言ひて妾に向ひ、如何お考でございます歟と問ひぬ、妾は赤らむ貌を笑に散らして、『あら厭な夫なんぞを。私は其樣……まだなんだは……』言ひかけしが後は言得ざりき。かのは笑ひながら。早いと被仰るの歟、何の早い事がござりませうぞ、私なぞは此人の所へ嫁に來たのが恰度十七の時でございました、孃樣のお母上樣とて矢張お十八の時此方へお嫁入でございました、少しも早いことはござりません、左樣遊ばせ、此方なぞは御兩親はなし、御厄介はなし、御夫婦切ですもの、來る人は幾人も有ます、左樣遊ばせ、左樣すれば瀨川のお家も萬々歲ですし、第一御兩親が草葉の蔭でお喜びですと、言ひける、然れど有樣の所、妾は今日此時夫を迎へんなぞとは夢聊も思はざりき、妾は默して答へざりき、其時幸平は口元に善良なる微笑の波を打たせながら、其も一理だがの、さな探すとなると長し短し左樣急にはないものでの、又うつかりした人を貰ふと其こそ大變、飛だ不幸に陷るから、世間には幾らも左樣いふ例が有るからのと、言へばかのも點頭て、其も左樣だねへと口をつぐめぬ、此に至りて妾も耻らうてのみ居ては濟まじと氣を激して、皆が種々心配しておくれのを戻くは誠に濟ないがね、夫を迎へるの丈は御免しておくれ、まだ一年の御兩親の忌服も濟ぬ中夫を迎へるのは、如何も子たるの道に反むく譯だから、何卒是丈は御免しておくれ、と言へば孝平は快氣に打笑て、御尤でございます、其は其方が宜しうございませう、此處をお引移になつて先づ小さく借家住居をなすッて、居て、其から後ゆつくりの事になさいまし、いづれ山野（是は妾の表

向の後見人となりし人にて亡父の從弟なり）の旦那とも御相談申しませうから、と其夜は此話是まて廢めしが、妾の心の中にてハ中々此にては止まざりき。

如何なる男子も妻を持つには其妻の爲人に於て多少の好のある如く、如何なる女子も夫を持つにハ其夫の爲人に多少の好はあるなるべし。妾も實に此好を持てりしなり、妾は父母の膝元に於て家庭の敎育のみを受居たれば、父母の感化を被むりし事他人に比しては深かるべしと思ふなり、父は常に慨歎して語りたまへり、日本國民は義俠の精神は有れども堅忍不拔の精神に乏し、堅志力行持重の精神に乏しと、我國民は優美の思想には富めども偉大の思想には乏し、我國民は感情的人民にして意志的人民に非ず、我國民は花を愛するの人民にして果を愛するの人民に非ず、我國民ハ詩歌の人民にして事業の人民に非ず、我國民は何事も思ッて而して後感ずるに非ず、感而して後思ふなり、思而して後行ふに非ず、思て而して後亦思ふなりと一言以て之を總ぶれば我國民ハ少年にして壯年に非ず、故に明治の文明は此少年國民を導て壯年國民とならしめざるべからず、我々日本人は常に此心を以て進まざるべからず、我々の努力は此少國民をして大國民とならしめざるべからず學問も、宗敎も、法律も、政治も、官吏も、商人も、農夫も、工夫も總て一切の一切が皆此心を以て國民の發達を計らざるべからずと、是父上の精神なりき、妾も全然其說に同意せり、故に妾の夫も亦此精神なかるべからず、此精神なきものは妾之を夫にすることを好まざるなりとは曾て妾が我心に向ひて言ひ聞かせ說聞せし所なりき、されバ妾は今日

此時夫を迎へんなどとは夢にも思ひ寄らざりき、唯妾の思ふ所は、今より以後何を爲さん歟？當時日本の社會は去年明治十八年より今年明治十九年にかけて、女子敎育、女子改良の論の盛になり、女學校の設立せらるものは日に益多き時なりし故、妾も又思へり、妾は未だ敎育を終りしに非ず、其半途に於て父母に別れしなれば、人の妻となり人の母となりて家庭を組織するには缺點甚だ多かるべし、第一未だ充内普通學も修めざれば、是よりは學校へ通ひて先づ我身の敎育を終へなん餘は此事の後にありと一意に通學の事思ひ込みたり、嗚呼此時の妾の身は一方には家の主婦でありしと共に、他の一方に於ては實踐家政學を習ふの思なりき、妾は日記も附ぬ、小遣帳も附ぬ、客あれば之に應對しぬ、座敷の飾、床の軸、置物は何が宜けん、花は何々を活けん、と心を配り、又客の種類に據て其待遇のいろ〳〵を女中に命じ、其外女中のいふ事を聞き、買物の撰擇を爲し、晝には自ら料理法の稽古、閑あればテニズン、清少納言、紫式部を讀む、其他いろ〳〵なすべき事多かりし故中々多忙に日を送り居たり。

其六

斯の如く多忙に日を送る樣になりしは、妾の爲めには却て幸なりし、何となれば妾は之に依りて父母の事を思ひ出す暇なく、忘るゝともなく心の悲を忘れたれば、其間に父母の四十九日も過にたり、兼て此日が過なば、家は勿論、家財調度も皆賣拂ひて、何れに歟借家住居せんと思ひ居たるなれば、戸村の老夫婦とも相談なして、猶豫なく其準備に取かゝりたり、老夫婦は當分我家へ泊る事となりぬ、家

には賣家の札張られぬ、家財調度器具一式の中、賣る物賣らぬ物は區別しられぬ、道具屋は呼ばれぬ、家財調度は賣拂はれぬ、殘るは父母の形身の衣裳、並びに遺愛の器具調度と、其書籍の全部とのみ、餘は奇麗に賣拂はれたり、下女には暇出されたり、程よき家は戸村の裏に見附られたり、室は四疊半に六疊のみなれども、妾一人の爲めには澤山なり、庭は猫の額の如く小さけれども、手を入れなば面白くも見らるべし、井戸は近し、町は近し、何よりは戸村の家近ければ、便利なりとて、愈其處に轉居と定めぬ、嗚呼父母の家、父母の家、戀しき懷かしき父母の家、妾の小さき蕎麥殼枕を圍める幼き記憶と、離るべからざる愛情を分つ父母の家、有りし種々の事柄より父母の記憶と深きちなみのある此家、庭前の梅樹、軒の呉竹、垣の傍の五葉松、總て父の愛して、自ら手を入れ、鋏を入れて、土かひ水かひし給ひしものを見るに附け、悲喜哀歡の胸に起りて、いとゞ戀しき懷しき父母の家、其家に離れて他に借家住居せんは、如何に妾の心に悲しかりし歟、されど如何にせん此家に住む事は、妾が家の經濟の許さゞる所なるを、妾は餘儀なく此家を離れて、他に移轉せざるべからざるなり、妾は飛鳥川の歌を心に忍びて戸村の裏へ引うつりぬ、扨引移りて見れば、昨日の家の大きく、今日の家の小さき、鼻のつかゆる斗なり、其日は地主差配を始め、長屋中へ細く長くお附合下されかしと蕎麥の盛籠を配りぬ、又夜に入りて後、戸村の老婆に誘はれて、長屋中を近附に打廻りぬ、斯て夜もおそくなりて後、今宵は我家にてゆッくり休まんとて、戸村の老夫婦も歸り去りぬ、後には妾一人のみとなりたり妾は裏表の戸閉をして火

鉢の傍へ坐りぬ、此火鉢ハ母上が、朝夕手をかけて拭ひたまひしものなれバ、顏の照る斗輝けり、昔は父母が此火鉢を中に相對坐しつゝ、親しき物語を爲すこと常なりしが、今は過し日の一夢となり果て、此妾一人異なる家にて之を見る坐ろになき父母の忍ばれて戀しさ忘れ難く、空しく太き息に洩すのみ、時小夜も更渡りて、流石繁花の小川町通も、往來絶えてか物音もせす、唯折々車の走る音の聞ゆるのみ、四隣寂寞として簀子の下なる蟋蟀の音いと哀なり、見るともなしにふり仰向けば、洋燈はまん丸の影を天井にうつして、四下に朦朧たる光を落して、室内も薄暗く、何となく後の見らるゝ心地せり、深夜といひ、寂寞といひ、孤獨といひ、懷舊といひ、一ッとして悲哀の媒ならぬはなければ、妾は臥もやらず、一人孤燈に對して長く、越方行末の思ひに沈みぬ、嗚呼越方越方、妾の越方は父母に對するの愛念のみ、父母を追想するの一事は、妾の爲めには一種いふべからざる悲哀の快感なりき、されど妾の行末は、嗚呼行末は茫として知るへからず、霧の如く、霞の如し、如何になりゆく事ならん、學校へ通學せんと思ふも、抑何の學校へ行んか、東京市内、女學校も數多し、先づ番町に明治女學校あり、永田町に華族女學校あり、虎の門に東京女學館あり、築地に東京府高等女學校あり、一ッ橋に東京高等女學校あり、其他成立學舍の女子部を始めとして、其數枚擧に暇あらず、そも妾何の學校へゆかんか、是又教科目錄を集めて、自ら判定をなさゞるべからぞ、然り妾は空しく父母を慕ふて、過去の追想に貴重の日月を送るべきの時に非ず、妾は自ら立ちて自分自身を敎育せざるべからざるの時なり、嗚呼追想追

想、汝は妾の胸より立去れと、過去の追想を追ひ拂ひて、妾は其想像を未來に向て走らせり、

其七

若老人は過去を追想する事を好み、若き人は未來を想像する事を喜ぶを常となさば、妾にも又自由に未來を想像する事を得せしめよ。妾が日ならずして學校へ入りて自分自身を敎育する事は、既に決定せるの考あり、然れども其相應の敎育を受し後の運命は如何に、妾は相當の夫を持ちて夫婦相愛し、恩愛の懷に愛兒幾人を擧て、其子の敎育を爲しつゝ一家樂しく世を送る、是が妾の運命なるべき歟、若此の如くなれば妾の運命は、實に平易快樂幸福の運命なり、然れども其のみにては妾何歟物足らぬ如き思ひのするなり、何歟まだ其外に天の命ずる責任のある如く思ふあり、此の如き生活を爲すは、妾一身の爲めには幸福なれども、天の明命に反むきて世の義務を果さぬ人の如き思ひするなり、空中に聞ゑぬ聲ありて、妾に尙何事を歟なすべき務のある事を呫く如く思ふなり、然らば其務とは何ぞや、曰く日本婦人の特性及美德の開發是なり、然り〳〵妾が婦人たるの道は家庭を作りて、家庭の經濟を整へて、善良なる一家の母となり、善良なる一家の妻とならば足れり、さりながら妾が國民の一人として世に對するの勤は、決して是にて終れるに非ず、妾は更に國恩に報ゆるの勤として、是非共婦人の美德を開發せざるべからず、是妾の務なり、見よ日本婦人の美德は、闇き世の闇きにかくれて其光を發せざるを、之を發揮し、之を顯揚して、勤儉質實温和貞淑の女子を作ること、是今の世の婦人の任なり、故に妾も又

是を以て任となさん、と斯妾は思ひたり、妾は又當夜熟々思へり、抑我國には家庭にこそ婦人はあれ、世間には婦人のなき事を、否世間に婦人のなきに非ず、只其力の働なきなり、蓋し天が男女の兩性を生や、其數をして相等しからしめしは、決して偶然の事に非ず、是一夫一婦の道を守りて、善良なる家庭を組織せよと敎へたまふにぞある、故に男女兩性の力の一家に有りて、等しく一家を組織するの要素たるは、疑もなく天の定めたまふ所なり、既に此力一家に有りて一家を組織するの要素たる以上は、世間に有りて世間を組織するの要素たるも、又疑ひもなき事實なり、然れど世間の婦人即ち社會上の婦人を作ることは、其は來世紀の事業にして、妾等が兒孫の爲すべき事なり、されば世間の婦人を作るの利害は、妾等の預り知る所に非ず、妾等が將に爲すべきの仕事は、一意家庭の婦人を作るにあり、妻としては家庭を組織して夫と感を分ち、母としてハ兒孫を敎育して一家を整理するに足る、文質相備ふるの婦人を造るにあるなり、何となれバ家庭に婦人の在るは有れど、其も又物質的の婦人にして、精神的の婦人にあらざればなり、斯る婦人の手に日本將來の繼續者なる童男童女、國力の發達、國權の擴張、文明の進歩に手腕を揮ふべき責任ある童男童女の敎育を一任し置くは最も危ければなり。其も昔の如く、鎖國の小天地に安ずる時あれバいざ知らず、各國互に威力を爭ふ今日、斯る婦人の手に兒孫の敎育を一任し置くハ最も危き事なればなり、

其八

然れば物質的の婦人を開發して、精神的の婦人となさゞるべからず、是妾等の任なり、斯妾は思ひたり、然して此事を成就せしむる、如何にせば宜からん歟。女大學は教えぬ、女は眉目容より心の美を第一とすれば和き順ッて貞信に情深かるべし、とされど和順貞信の因て來る所以を養ふことは教えざるなり、又說きぬ、男女の別を正しくして、苟にも手より手に物を渡すとも、其心を亂さゞる所以の源は養はざるなり、又舅姑を敬ひて何事も其心に逆はざるは、其身の德なりと教えぬ、されど舅姑を愛する心の温和の何處より來る歟、其由て來る所の源は教えざるなり、其他女大學的の教育は其說く所盡く皮想的なり、世間的なり、儀式的なり、故に此の如き教育が、婦人の美德を開發するに足らざるは又疑ふに及ばざるなり、されど妾が最も歎息と失望とを爲したるは、女大學的の教育ゝ非ずして、寧ろ近時婦人改良の意見に據りて設立せられし幾多の女學校に有しなり、是等の女學校の教育は、其趣意こそ大層に立派なれ、其教育の實際を見れば、孰も器械的儀式的にして、女大學的と一般なることを認めたればなり、尤も是等の女學校の中には、唯神論者の基督教徒が設けし女學校の如き、精神的教育を施せしもの有りと雖も、其は最も少數にして、然も是等學校の教育は、多くは日本の事よりは西洋の事を尚び、然も往々一躍して世間的婦人を作るの方向を取りて、家庭婦人を作るの方向を取らざりし、妾の意見に據れば、是ぞ之等學校の缺點なりき、此他唯心論の佛教徒の立てし女學校も有りて、稍精神的教育を吹入れんとするものゝ如くなれども、常に消極的の方向を取る佛教なれば、其教育の結果は女性の開

發とならずして、女性の枯槁となるの傾ありき。彼等は日月の盈虚、草木の花の開落を見て、歌をよみ文を作りて世の無常を感じ、人生の敢果なきを歎くことを知るのみ、三春の花の盛の時、既に老の來るを待ちて、又世の務に當ることを欲せざるに至る、此如き教育の世を利すること能はざるは明けし、其他の學校に至りては、唯物論の先進者が立てしもの歟、然らざれば漠然たる世間の道德を標準とするもの歟、然らざれば日本神道者の立てしもの歟、其數の多きに關せず、滔々たる幾多の女學校、孰も其教育の方向は儀式的附接的のものにして、女大學的と一般なりき、唯其異なる處は、外形のみ、女大學は極めて古風なる、と改良教育は和洋折衷の當世風なるとのみ、女大學は儀式的附加的教育の簡單なるものにして、當世教育は其緻密なるものといふに過ぎさるのみ、其精神に至りては二者殆んど同一なりき。

其九

故に是等學校の教育は、未だ嘗て生徒に向て、宇宙間に人間以上の力、極大極微の大有力者有りて、天地萬有を支配するといふ事を教えざるなり、天の命德は如何に至高至明に、其命力は如何に正大無限なる歟を教えて、唯天の信仰を吹入るゝことをせざるなり、天を敬し人を愛するは人間の道にして、如何に古の聖人も此道を踏みし歟を說きて、唯天の信仰を明めさせざるなり、嗚呼芥子の信仰は能く大地をも擧ぐ、教育に必要なるは信仰にあり、道德に必要なるは信仰にあり、然れども是等の學校は、未

だ曾て生徒に向ひて信仰の精神を吹入るゝことをせざるなり、孔子曰く、唯天を大なりとす、唯堯之に則る、蕩々乎として、民能名くることなしと嗚呼天の德は至德といふべき哉、其威怒は雷霆より裂しく、其恩愛は日月より大なり、能く萬有を活するの力もあり、又之を殺すの力もある、能高天大地を捧ぐるの力もあり、又微塵に破碎するの力もある、然れども是等の學校は、未だ曾て生徒に向ひて其の信仰を吹入れざるなり、是等の學校は未だ曾つて生徒に向ひて燦然たる天の光榮を示して、其の心に天を信ぜしめざるなり、未だ曾つて天の至善至美至明至高を發揮して、之れを其の心に感發せざるなり、未だ曾つて天の大威德と大仁德とを說きて其の絕大絕微の大慈愛の、如何に尊く、親しく、戀しく、懷かしき歟を敎えざるなり、又是等の學校は、未だ曾つて宇宙間には大有力の惡魔、闇を好み、禍を喜び、復讐怨恨を生命として、人の血を啜り、人の肉を食ふを樂む惡魔、ありて、常に人を誘ふて魔界に墮落せしめんとするものなれば、如何に人は天の仁惠に據りて、心を正し意を誠にせざるべからざる歟は敎えざるなり故に是等學校の敎育は、其標準低く世間的なれば、其說く所の道德も、勘定的、儀式的、皮相的にして、絕ゐて高潔正大至善至明のものには非ざるなり、彼等の善を說き、美を說き、義を說き、孝を說き、忠を說き、信を說き、愛を說くや、散々ばら〳〵のものとして說くあり、彼等は仁義五常をも人間のものとして說くなり、故に彼等の道德は天上より來るに非ずして、人間界、組織の約束の上より來るなり、故に彼等の道德は、現世、先天、後天の三世過現未を有せず、唯現世に始まりて現

世に終るなり、故に又彼等の道徳には絶無限の權、と絶無量の力とは有らざるなり、如何なる大善を爲すも天下是れを賞するのみ、如何なる大惡を爲すも天下是れを罰するのみ、彼等が道徳の賞罰には人間以上の力あらざるなり、是れ實に勘定的、世間的、皮相的の道徳なり、彼等は天の威の如何に恐るべく、天の恩の如何に親しむべき歟を知らざるなり、彼等ハ昭々として下土を照らす天の光明は、日月の光より明かに、愛々として萬物を育する天の高徳は、春日春風より大なるを知らざるなり、彼等は眞理其自身も天の命徳にして、善に天賞あり、惡に天罰ありと知らざるなり、一言以て是を言へば、彼等の道徳にハ上天の信仰あらざるなり、故に其敎育は流れて物質的となり、器械的となり、儀式的となり、勘定的となりて、絶へて高尙なる道徳を女子の精神に吹込む事能はざるなり嗚呼之を如何にせん。

此に於て妾が想像の糸は更に延びて、高等女學校の設立となりぬ、妾は考へぬ、妾は同志の婦人を集めて高等女學校を設立し、女子に精神的敎育を與へなん。又我校の生徒及び卒業生、並びに校友の力に據りて、婦人雜誌を發兌せん、然して其雜誌は、學術的、文學的、敎育的のものにして、以て敎育界及ひ文學界の同感を呼び起し、以て精神的敎育の輿論を文字ある社會に作り、以て廣く婦人の開發を計りなん、更に進んで女子職業學校を設立しては、幾多の女子に自營の道を與へなん、又傍に一ッの商店を設けて、其處にては最も廉に我校の生徒に需用品を賣り、又世間に向ひては我校製作の品を賣らしめん、然して又更に我校婦人の力を集めて、一ッの婦人新聞を發兌せん、其は必ず世の新聞と同じく世間的の

ものにして、新聞普通の性質を備ふるハ勿論なれば、尚ほ之に加ふるに敎化的、文化的、矯風的の要素あるものなるべく、然して又此新聞に依りて、精神的敎育の輿論を廣く天下に求め得べく、又之に據りて女德の發揚を圖り得べく、尙務めなば幾多の女子に保護と利益とを與ふる事を得べし、若し斯の如くなれば、妾等の高等女學校は、中等以上の姉妹を敎ゆるに足るべく、妾等の職業學校は中等以下の姉妹を敎ゆるに足るべしなど、其計畫冀望は、次第〲に大きくなりたり。其と同時に俄然として自身の無學に思ひ至りぬ、嗚呼敎育、敎育、先づ自身の敎育が何より先なりとは、當夜妾が獨り孤燈に對しての考なりき。

斯て翌日は四方に走りて多くの學校の敎科目錄を集め、其を一々對照して、其中最も敎科の整頓せる、某學校へ通學することゝなしたり、是は妾が十八歲の秋にして、其入學の素望は實に右の如きものなりしなり、嗚呼されど人生不如意のこと多し、月明かならんと欲すれば、村雲は來りて之を蔽ひ、花開かんと欲すれば風雨至りて之を打つ、世は塞翁が馬なるぞ是非なき……。

世の中の自傳記者、妾なる人の筆、如何なる故にや此に絕して其先なし、思ふに彼女は當世得易からざるの婦人なり、其學成業遂くるに至りては、必ずや世に消息を傳へ來らん、されど今日に至る迄其名の聞えざるは如何に、蓋し「世は塞翁の馬なるぞ是非なき」の彼女の文に據るときは、知らず彼女の身の上に不祥の事のありしもの歟、天外の消息未だ來らず、其後の有樣知るに由なし、讀者請ふ之をゆるせ

嵯峨のや主人附記

◉末開紅

幽芳女史著述
南翠外史删潤

第一節　わか枝

世の憂をこゝにのみこそ聚めたれとしも見ゆめる賤が伏屋に處狹しと匍匐たるまゝ煙草の烟りを環に吹きて蒼々として昔し懷かしき娥眉の名殘をうち顰めしは是れが家の主婦にてお春てふ手弱女なりとぞ、達摩返といふ頭に白き寸絹をそへて束ねしが其の髮ハ濃くして厚う、亂竪の雙糸織の布子に博多の男帯をまき帯して山糸の藍鼠の小辨慶に毛繻子の襟つきたる寢子といふものをはをりたる夫れが八口の邊より紅絹の裏袖の見ゆるさま若がりても見ねばまだ三十路が上を超えぬなるべし、片肱つきて少しく身を起し荒々しく煙管をはたきて『コレ何處を今まで遊び歩行て居たンだモウ何時だと思ッて居るヨ、エーオイ言ッても〳〵性の着ない頑童ぢやアないかネー、如何すればマア爾うづぶ〳〵しく出來るものだらう眞個に呆れ返ッて小言も言へやしないヨ、今に爺の歸ッて來る事は知てるだらう、人の氣も知らねへで……イヽヤ今日はモウ阿母は知らないヨ覺えて居やアがれ爺が歸ッたら何も彼も言ッ告けて酷い目に遭して遣るから、其の時に吠面アかわきやアがッても阿母は知らねへヨー』母が恐しき景色に畏れて出居の閾に頭を擦かめてうち慄へるは今茲十三の小童にて德四郎と稱るゝものなるが物哀れなる聲態にて『御免下さいまし何卒御免なさいモウ此の次からは遊びは致しません、ヘイ決して遊びは致しませ

ん、阿母さん予が惡うございましたから何卒御免なさい阿父さんに言告けるのは何卒御免なすツて下さいまし、エ、阿母さんモウ次からは——』お春は正しく坐をなほして息をも繼さず『此の次から此の次からツて今度でマア幾度だヨ、幾度の事だと思ツて居るンだエ、一體マア汝は何處へ行て居たンだ、只だ御免なさいぢやア解らねへ、何處を今まで彷徨て來たンだヨ、ヨーオイ、何處をうろ〳〵遊び歩いて來アがツたンだ』德四郎はさも言ひ苦さうに疊の毛を捻りながら『アノー祥隆寺樣へ參りました』お春は聽きも了らず白き光りを眼より放ちて『馬鹿野郎、また葬式の赤飯を貰ひに行たンだらう、惡い癖だ』德四郎は迷惑さうに母の面を纔かに瞻望げ『イヽエお葬式なンかア存じませんが和尚樣に御本を敎はツて居りましたのでございます、ヘイ』是れにてお春は色良や釋たれとも、尚は幾干かの怒色を帶て烟なきまで喫ひ唆したる吹売をポンとはたき『御本を敎はツて居た?、誰が其樣な事を吩附けたヨ、誰が汝に本を稽古をしろとツて祥隆寺樣へ上げて遣たヨ、怪しからねへ兒だ、今度ツから何があツても祥隆寺樣へは遣ねへから爾う思ひな』德四郎は淚もつ目に母の顏をキツと凝視て『夫でも阿母さん夫でも人間が明盲目では仕樣がございませんもの——皆なは彼の通り學校へ行てお手習をしたり御本を敎はツたりするぢやア有りませんか、予しだツて——予しだツて人並に——戶長樣の御觸や町入費の書附位は讀める樣になりたうございます、祥隆寺樣の和尚樣の被仰るには『人と生れて人の道を知らんものは人とは言はれない人の道を知るには學問と云ツて字を書たり本を讀だりすれば自然と其の道が判る程に、德も

學問をして人の道を知らんでは成らん今までの様に走り使ひや野良遊びばかりして居ないで間を見てチッと稽古に來い』と言ッしやいましたから——』びく〳〵と二たび三たびお春が眦にひゞきし電氣は忽ち白き額に青き筋を染出して凄まじきまでに德四郎を疾視へ『ナヽ何だとエ、今汝何と言たエ、祥隆寺の坊主が屹と爾う言ッたンだナ、後の糞僧奴入らざる世話を燒きやアがる、汝の役目をチャンと守ッて佛の番をすりやアいゝ癖に、人の餓鬼の世話まで餘計な事たア、人の道もヘッタクレも入たものか、モウ決して祥隆寺へ行ンぢやアねへヨ今度の次から後處へ行くと酷いヨ、サア今日の處は汝が惡いンぢやアねへ彼の糞坊主が惡いンだから爺には內所にして遣る……ナニアノ德や、爺がモウ今に歸ッて來るだらうからノ、アノソラ何が無かッた酒が、お酒を買て來な』德四郎は少しく心の落付たりと覺しく夥多たび頭をすり埋めて母が革財布のうちより取出す銅貨を受取り『夫れでは何卒今日の處は御免なすッて下さいまし、エ、阿母さん御免なさいヨ、直とお酒を買ッて來ますから子』『いゝッてば諄ッこい、例時の通り夫丈け詰て貰うンだ、彼ン畜生は此の節惡く量りが辛へからノ餘ッ程桝目を嚴ましく言なくッちやアならねへヨ、いゝかい』『ハイ』と答へて德四郎といへる少年は戸棚の隅より備前德利を取出し流し元にて兩三度水に灌漑つ右手に銅貨を掟と握り左手に德利を携へながら我が家の閾を越すと等しく酒屋をさして一散に駈け行きたり。

お春は渠が出行きたる後を斜視に目送りて何事をかうち呟きながら立たる膝に杖つきて漸くに起上り

諸手を伸して背伸しつゝ軈て片手を懷中にしたるまゝ障子をはたと締切りて爐の火をかき起し彼の革財布を把上げて自から笑みを含み中なる金を改ためて莞爾としながら重ね簞笥の小抽斗に聢と納めてまた元の爐の前に座を占めつ炭を加へて火勢を添へながら火箸を其處に投出しそことはなしに顧視たり。

かへりみたる時しも西窓の障子に鳥影映して納屋の潜りの繩暖簾をかい分けつゝ入來れる男あり年の頃は四十路にもや及びけん黑き色も何處やらに垢拔して鼻筋の凛々しきに口元のひき締りたる眼ざしの涼しく眉毛の濃く太き無髯に賤しき相も見えず腮の瘠尖りたるに廣き額の皺多きは多少の艱苦を嘗め來りし歟、身に雙糸縞の衣服を纏ひ千草の股引を穿ちて首に些細なる袱裹と紋羽の耄碌頭巾とを纏ひしが、つと進みて上框にどッかりと腰をかけ『アー草臥た〳〵、お春や今歸ッたヨ、アー寒い〳〵空ッ風がピユーピユー吹やアがるもんだから何處も彼處も砂ッ芥りで――何うだエからッきしモウ――』口小言を言ひながら手拭ひにて手足を掃ひ胸より肩をうち搏きて尚は兩袖もて羽ばたきをなすにお春も障子をうち開けて『御前さん嘸ぞ寒かッたらうネー晝過から大變な北風に成たから何樣なにか寒いだらうと思ッてネ、サア此處へお出ヨ今火を起して置たからネ、夫れから今日は德の野郎が祥隆寺樣へ行て御說敎を聽いて居たッてネ晩く歸ッて來アッがッたから今しがた漸とお酒を買に遣たンだヨ……何うだエ今日は商賣は何樣な鹽梅しきだネ』此の主人は人來酉松といへる者にて綽名を法華經とよばれて兩の腕に七字の題目を刺繡したる者なるが爐の前に高胡坐をくみて片手に袖をかゝげ互迭りに腕を伸し彼の題目

の邊りまで火に翳したる末首にかけたる袱裏をどッかりと投げ出し『空ッきしモウ法のついた話しぢやアねへ、エーコウ、馬鹿にして居やアがるじアねへか、今日はナ、オイ、宿の春木屋で女馬が一匹死ばッたから來て呉ろといふからヨ、エーオイ、毛艶の容子ぢやア履さうだからヨ、何うだいコウ、五兩といふ血の出る樣な資本を出してマア引取たと思ひねへ、夫からナ德の爺……歸りやアしねへか』お春は不肖不性に坐を起て幽かに表の方をうち瞰了つ再び元の處に來りて立膝をしながら煙管を片手に取り上るより直ちに片手は煙草函に入れ『大丈夫だヨ……ムウ夫れから何うだエ』酉松は翳したる温かさ手もて我が顏をブル〳〵と撫廻し『彼ン畜生も人を馬鹿にして居やアがらア己はナ安くも十圓ヨおッ嵌る積りで高へ輕子を出してヨ持込んで行くとナ、エーオイ、笑かしやアがらア六圓よりア買ねへてーから、能く眼を明て見やアがれ蹄だッて此樣なだア鬣だッて尾だッて立派な物だ、櫛笄にしたッて――巣を賣ッたッて――此の皮で太鼓を貼つて見ろ幾個取れるか知れやアしねへッてナ威張を極めて遣たンだ、するとナ、此の馬は老馬てるのに久しい病氣で死だンだから皮も蹄も方が附ねへッて、アハヽア向ふの方が苦勞人だから仕方がねへ己の事た諄々ハ言ハねへモウ五十錢で手を拍うッて輕子を拂ッて一圓三十錢ヨ』お春は良人の顏を眺めて長く烟りを吹きながら『夫れでもわぶれるから見りやアいゝやな、寐て居ちアや一圓だッて取れやしねへ……藏ッとかう夫れをお出し』『ソーラ是れだけわらア大事にかけて收ッときナ』斯くいふうちに金財布を投げ出して何故か微笑まれしがお春は之れをしも見やらずして財

布を把上げその中を改ためさて愕然として良人の顔をうち瞰了りぬ酉松は『然もこそ』と言はぬばかりに白き眼もて妻を視つ笑みを含みて頤の髭をかい撫ながら『何でエ、何で己の面ァ見るンだエ、お祭りでも通るのか、フヽム』お春は財布を良人の眼先へさしつけて『フヽムぢやないや子、御前さん此の結好な夾嚢は何うしたンだエ、今まで竟ぞ見馴ない夾嚢だが……』『紫痴な聲をしねへで其の中を見や』『ドレ』とてお春は手速く其の夾嚢を開き見て面上忽ち幾多の喜びの色を帶び來り中なる金の員數を改め『オヤ五圓――五圓紙幣が七枚だネ――……オヤ〳〵一圓紙幣が十五枚――五、五、五十圓あるぢやないかネ』酉松は得たり氣にもニタリとうち笑へり『何うだエ大した働らき者だらうッ……だがノ中に何だか書附があるぢやアねへか』『オヽホンニ澤山あるヨ、是れは何だらう假名の樣だから御前さんチヨイと讀でお見な』『ヘン盲目の眼鏡だ見ねッこは有りやアしねへ』『マア何うしたと言ふンだエ』『拾ッたンだ』『何處で――』といふ折しも生憎なるかな跫然として履聲の近きつ我が家の門を開きしかば二人は蒼皇狼狽て色を失ひ遽だしく抽斗より以前の皮財布を取出して手の觸るゝまゝに夫れよ是よと中へ押込み元の通りに收め果て頓に落付たる假聲して『エヘン、誰れだエ、德チヤンかへ』『ヘイ阿母さん唯今歸りました』『イヤ德坊、寒かッたらう、大層早かッたな、サア此處へ來て暖れ〳〵』德四郎は父の聲音を聽くよりも恐る〳〵障子のうちに進みて『阿父さんお歸ンなさいまし嘸ぞ今日はお寒うございましたらう、ヘイ御酒を此處へ置ますヨ阿母さん』『アイヨ、今日は大層量りが宜さゝうだナ』『エ

ー、餘り吝々するから爾う言ッて遣りました』斯く言ひながら父が邊りに座を占めんとして忽ち彼の鼻紙のひとひらの遺りたるを手に把り上げ『うぐひすの谷の戸いづる聲なくば春くるとを誰か知らまじ』讀むは歌か、さりとは心着ねども酉松はちをチラリと見て氣色だちつゝ其の一片を奪ひ取り『馬鹿野郎……其樣な物を小兒が見るもンぢやアねへ』

第二節　葭だて

蘋生二洲渚一微風起。梅熟二園林一細雨來。呎尺柴門常懶レ出。不レ敎下二柱杖一損中綠苔上。と陸放翁は吟じけん竹の籬を隔でたる閣樓に我れを訪ふらし琴の音は一と聲響きし杜鵑に爪音を駐められ耳に應ふるものとては蕭々たる雨の音、點々たる簷の玉水、只だ小池に喧ましき蛙の聲を誘ふに過ぎす綠陰暗うして黃梅の姿を幽め輕雲近う垂れて暮烟渺かなる梅霖の夕は目に視るものも影薄らかにて訪ふ人罕なる靜院に閉ざゝれ身は啼く鳥の病ふに疲れ獨り自ら愁ふる人とてそいかばかり鬱さを重ね哀れを添へてうら悲しきものとてあらざめれ。

こゝ蓬生の宿ならねとも都大路を纔かにも離れつる南葛飾の郡　柳島村といへる處の堤に濱みて稍や奥まりたる別業ありけり誰が雅びたる好みにや建仁寺の垣ふかう結繞らし太き朽木もて柱になしゝ門には舟板を接きて扉をつくり屋根には厚き茅を葺きて棟竹いかめしう一たび之れを望めるだも趣きの深かるに其が內部のさまを透し見れば庭園には四時に絕せぬ花卉を栽ゑこれに對して萬種の喬木のときはに

彩れるあり池は廣うして巖も苔のころもに包まれ山は高うして芝生に徑を埋めたり奔湍潭を爲すところに小榭を設て釣を垂るゝに自在なるべく、綠陰深きところに孤亭を營みて茗を煎るにも自由なるべし其のあらましは園を專らとして家居さまでに廣からねども數寄を好みし構造にして便利にもいと富めりかいなでに評さんには閑靜幽逸の趣きとして一も此のうちに備へられざるものいあらじと言はん。

そが一間どころに閉籠りて今昔の物語を友としつ病ひを養なふ佳人こそ在したりけれ妙齡はなは三五ばかりにして花憎み月妬める色をさへ具へぬ富める身の隨意なる褥の重きを厭ひてや眞紅の紐もて吊り夜具となし八反の敷物に淺黃縮緬の小蒲團を重ねて輕く此の上に臥し轉びつ護謨枕に倚はフランネルの布片を纒ひたる上に白き嫋やかなる肱をもたせ雪を欺く顏のあたりにこぼれかゝれる亂れ髮をかい上げつゝ書に對して何となく物おもはし氣なるは心に晴れやらぬ雨をもちてや淚の泉に富せ給ふ婦人の胸のうちこそ聞まほしけれ。

此のあてやかなる婦人を何者にて在するぞと繹ぬるに今の世に時めける紳商とかいふものゝ數に算へられし富める商人にして其の名を香月淺影となんいへる人の二女匂子にてぞおはしける。

物足らじといふ事なき身にしあれば何煩はしき事とてもあるまじきに匂子が病ひは物思ひのいたく嵩じて勞とかいふものになりけるとぞさては妙齡の處女心に秋の夕の淋しさに紅葉かり暮して道を尋ねし少年を戀ふるにや、然らずは春の花見にゆくりなくも狼藉人に駭かされて今は斯よと思ひけるを情ふか

くて助け給はりし壯年の忘れがたきにや、あるはまた妙なる俳優人の美しき打扮したるを戀わびて果は病ひを得たまひしにや孰れにもあれ心得がたき痼着よと噂するも少なからずかくと洩聞んには自らいかに口惜う悲しからん。

匂子は愛らしき小女なり妍き少女なり麗はしき少女なり美くしき少女なり獨り姿容のみならで心ざま優しく物讀む事の好きなれば常に極美の婦人を身の摸範として健氣なる心さへ富めりき人と爭ふとは好まねども敢てまた服さんともせず眞の理よと認めたらましかは人の心の鎭りし時を待ちて靜かに前言ひしことを說きて人を服さしめんとはするなりかく內に剛に外に柔らかなれは花やかなる事とてはあらねども何事にもあれ總て內に修めぬはあらで讀書の道いものかは裁縫にも精しく遊藝さへもさ〳〵嗜み淺からず物數こそ言はね義理にも敏くして善く心に之れを分別しまた和歌をもはか〴〵しう讀み出てをもしろき物なきにあらず只だ今樣の英語なんどには疎けれども去れバとてこを卑しむ心もなく自らも暇あらば修めて見まほしとは望めるなり一概に柔順しきとのみにはあらで餘りに多くは得易からぬ處女なりけり。

之れに從ふ女の童にお幹といふ今歲十四なるが能く老實て匂子に事へぬお幹は母親に蚤く別れて難面き父の手一つに育られしを或る時匂子が無慘にも責はたかるゝを見て自ら惻隱に忍びやらず還りてのち母に請ふて救ひ取らせたる者とて顏こそ圓く赤らみて疱瘡の痕あり丈低く醜くけれど心は姿をも麗はし

うするまでに淸く愛らしければ匂子は善き仁を施したれとて愛慈くしみ養ひけり。
匂子が今しも讀みさした物の本の上にはら〱と梅雨の雫を灌ぎて取落したる態の尋常ならねば次の間より徐かに見てゐりしお幹は得も堪えられず其の側らに進み來りて『アノ何う遊ばした、何をむづかるの？』匂子ハ急に涙を拭ひて我が顏をうち反向ながら『何うもしやアしないョ、只だ本を見て居たばかりなの』とは言ひ拂へども包めぬものは涙なり自らはお幹の敏き目に見られて他所の心をいためさせまじと思へば勉めて笑へりし積りなりしもお幹の目に映ずるに至りては其の笑ひは只だ唇の上りにうち通りて眦には猶は愁ひの凝て散りやらぬのを認めたり、されどもお幹は怜悧き少女なれば強ては之れを問ハず『御覽じやッた御本には何か哀れな事がありますの？』匂子は酸鼻める聲を聽かせじとて勉めて聲をつくり『アー有るよ、だけれども可笑くッて笑ふのは其の時限だけれども悲しい方は面白くッていつまでも忘れる事は出來ないョ、お幹は疑ハしげに匂子の面をまもりしが堪えやらずして『何でございますエ、其の御本は？』匂子はもはや面も反向ず涙を拭ひて霞める目に其の表題を見て『此れかエ、これは「皿山奇談」といふのだよ紅皿缺皿のある……お幹は忽ちにして其の意を得たりけん眼角に忍びやらぬ怒りを帶り然れどもまた思ひ返してや苦々しげなる笑ひを洩して『へー、ぢやアソラ何かお話しを伺ましたアノ繼子苛めですネ、さうだ片貝といふ奴だ、彼奴が連子をして後妻に押入をして―― チョツ眞個に神樣のやうな缺皿樣を苛い目に遭せ申して――眞個に御本とは思はれませんのネー、憎らしく

ッて腹が立ッて──喰ひついて遣りたいやうでございますョ』恰も目前に其の人あり書中の人物に訴へて之れを面責するやうなる口氣なり匂子が心には如何感じたりけん淚には霽間見えしが然りとてまた之れを悦べる色もなく斜視にお幹を見やりて『夫れは「皿々鄉談」の方だよ同じ缺皿でも此の方は播州皿屋敷が書入れてあッて此の方には椎拾ひやなにかゞあるの、而て仁王樣はないけれども鹿の祟りがあつてネ、紅皿の淫奔をして居るのを鸚鵡の鳥が聞て饒舌たり紅皿の鍋かぶりがあッたりしてネ彼方程にゝ缺皿が苦勞をしないョ』お幹は此の說明しを聽きて未だ其の心に落ずや『へー、夫れぢやア何でございますか缺皿は繼子ぢやアないんですか』匂子は徐かにお幹の方に向ひ『同じ馬琴といふ人が書たのだけれどもネ「皿々鄉談」の方ゝ此間も話した通りの情由だけれども「皿山奇談」の方は缺皿の慈母は本妻で紅皿の阿母が妾、而て紅皿の阿母が缺皿の阿母を井戶の中へ衝落して殺すの、今讀だのはネ妾が本妻を殺して缺皿を欺す處なの餘り可憐さうで我れ知らず淚の留處がなかつたのョ』かく言ひて匂子はまた淚にくれぬ此たびは包まんともせず瀧なす淚をおほやけに手巾もてうちぬぐひうちかみぬ。

れ幹は圓らなる眼を許す限り瞬りたるが夫れには露の玉つらぬきて睫毛に水晶の光りをうちぬき、やがて口を開きて何事をか言はまほしけに見ゑつるも又唇に閉ぢられて詞はなし閉ぢたる唇はひたぶるにうち戰きて將に衝て出なんづ言の葉よは如何なる花やある如何なる香やなる、お幹は匂子の憂きに泣く心の底きよくも知れる者にはあらねとも匂子が此處に出養生を名として蠣殼町なる本宅より退けられた

る顛末を知らぬ者にはあらじ然ればこそ大方は其の心を推すを得て只だ一と筋に匂子を便なしと思ふものにはあらず匂子を憐れむべき主よと思ふとゝもに「憎し」と思ふもの伴ひて出ぬお幹は箇様に思へるなり『人の上といふものは種々なもの御娘樣なんぞこそ何御不自由もなくつて御氣樂でもあらうし御兩親も揃つてお出なさる夫れに御兄弟も皆な柔順ないゝ方なり誠にお樂しみな事、同じ人間に生れても此方人はマア一人娘といへば大層もないけれど阿母アには小さい時に死れてしまう阿父彼の通りの我が儘もので稼がないから貧乏して居る夫れを予の故かなんぞの樣に箸の上下しにも手前の樣な化物が生れて來やがアつたから阿父が始終貧乏するのだ最と何うかした面なら罷り間違へば娼妓に敲き賣るから稼にも張合が出るが其の顏色ぢやア現在の親でさへ愛想が盡ると言ての毆打擲、餘りだと恨んでも親は親——難有い彼の御娘樣が通りかゝりて御覧なすつて親にさへ愛想を盡されたものをマア斯うしてお世話をして下さる持つべきものは情だ夫れにお金だ、お金があつて樂な御身分なればこそ此方人の樣なものにも惠んで下さる、だに夫れも情があるからこそ、畢竟はといへば御自分に御氣苦勞がないから人の不幸を救つて下さるのであらうと誠にお羨ましい御身分だと思つて居たのに——此方へ——眞個に解らない此方へ出養生にお出なすつてからは人さへ居ないとアゝして泣て——ハテ彼も御病氣の故かしらん、アノお千代どんに聞たのには慥か阿母さんが違つて居るといふ事だから夫れで斯だキッと夫れで斯だと思つて勿體ないけれども御新造は面が憎くつて〳〵今も今アノ繼母の片貝の事にして言て見たのにお娘

樣は更りお感じがないやうだが爾うして見るとアレもお千代どんが欺したのか知らん――泣きたいのが御病氣だらう――か、だが夫れでも訝しい、依然繼母――だけれども御新造樣い一番お娘樣にお優しい、御病氣の故だらう御氣苦勞のあらう筈はなし、戀煩ひ――オホヽヽヽまだれ十六で、裏店の娘ぢやアあるまいし、御病氣〳〵爾うだ餘り御本に一心になつて被爲入るから氣が鬱いて――アヽ何とか言た病氣だ夫れなら其の樣に悲しい事や何かのお話しをしないで思ふ樣陽氣にれ笑はせ申すのが一番だらう爾うだ〳〵ソレ〳〵』尙ほも淚にうち濕りて物案じなる匂子が前の讀本に手をかくるはお幹なり、匂子も霞める目ながら夫れと見て押止めつ『幹やお前これを御覽のかエ』お幹は其の語をも聽かず顏にて無理に夫れを引き攫ひ『いけません〳〵、此樣なものを御病人樣が見るものぢやございませんモウ〳〵明日貸本屋が來たら返して後はモウお出入留です、ハイ何と被仰つても不可ません、イヽエ予しが一旦申しましたかられ、御主樣でも何樣でも、何う致しまして不可ませんと申しましたら不可ませんヨ！』匂子には其の深意の知れ得べきやうはなけれども常にもあらぬお幹が擧作いぶかしさに其の顏を見れば正しく此方にうち向ひて圓き目を瞬きもせず厚き唇を押反してキッと見たる面の可笑さ匂子は思はず反噴して護謨枕に面を押當て忍び笑ひに堪へやらぬをお幹は見て得意になれり『サア〳〵其のお笑ひが出た處で先づお藥を召上りまし、エヽお口直しは何に致しませう飴ばッかりもお口に付きましたらう、薩摩芋？オホヽヽヽ夫れぢやア全でお幹樣の御病氣のやうだ、ピスケット？何だか牛臭ッて嫌ぢやア有ま

せんか……エーット……カウット……太き腕を拱き薄き眉を顰めて沈思默考する面のをかしさに匂子は此方を忍び見て笑はんとする耳許にて『オヽ爾うだ、練羊羹！』と濁たる高き調子もて呼はりしかば匂子はうち驚かれて『アラマア吃驚するヨ、頓興な聲だ事ネ！』去りながら匂子は遂に笑ひを禁め得ざりしなりお幹はいと得意になりて是れよりは只だ興をのみ添へんと力めしなり。

煩はしき梅雨の雨はまた一しきり降り來りて匂子が臥せる便室へもしぶきの霧となりて風のまに〱吹き入るれば今は美しき前栽の景氣をも賞ると能はずして障子ふかく閉したり聞ゆるものとては檐の玉水の今は瀑布なすと巖に當る奔湍の髣々として響きをなすのみ蛙の聲も消おされて匂子はいとゞ濕り勝ちなり。

活潑なる心は朝暾のさし出る頃に定まり迷ひの念は夕暉の傾ふきて後に縺るゝとは西國の人の常にいへる事なり尚は入相には早けれども降來る雨のいと急なれば濛々として四面小闇く垂籠めたる一間のうちには雨の音に奪はれて世の物音は絶えて聞えず見やる彼方は隅の方より暗くなり來つ果は手許の物なども見えぬやうに覺えられ闃として寥しきにつけ念ひの心をすらも昏々として闇きには導びけり匂子は病ひの床に在りてうちしめりたる枕に杖つき考ふれば考ふるほど悲しみといふ魔法使ひ忍びやかに心に潜みぬ。

今までは物騷がしき蠣売町の本宅に在りて兄弟とゝもに起伏しゝ母が宵の物語り奴婢等がをかしき浮

世話しに賑かにて過つる身なり物に不足は知らぬ身とて物見遊山にも心倦み芝居をさへ忙しきやうに覺えぬる匂子のかく物淋しき別業に世に避けし事なれば如何ばかりかは心淋しく哀しさをも添へがてなるべし然るを匂子は淋しとせず却りて人の茂く問へるを物憂きとには想へるなり此の梅雨の日の淋しさも人訪はぬ宿に垂れ籠むるも匂子か爲めには結句自適の境遇なるべし匂子ハ麗ハしき處女なり今を蕾の稚木の花なり愛らしさと蝶の如く美くしさと薔薇の如き處女なり此の處女にして何を想ひ何を病める歟、お幹がいへりし如く彼の涙は夫の病ひが促がし催ほさしむる涙なるにや。

匂子は今その室の昏くなり行くにつけて迷ひは漸次に深くなりぬ物哀れなる閨のうちにも一しきり梅雨の下りて雨戸の外は晴るゝとも晴れ間はあらじと思はれしが乍ちにして涙を拭ひはッと吻く息とゝもに疲衰へし手をつきて苦しげにも身を起しつまた其の膝を杖として辛くも其處に立ち上れば蹣々として足定まらず、あなや、隔の唐紙に身を衝き當て轉んかと見えたるも夫れさへ辛うじて踏留まりぬ、さて胸の邊を撫下して手を頭に加へたるまゝ姑しが程は目をふさぎて肩もて息をもらしたり、漸くにして目をひらき覺束なげに歩みを運びて彼方の唐紙の方に辿り着き細目に開きて次の間に目を配るに老實なるお幹も今は在らで何處へとては趣きしぞ、渠も他愛なき少女なれば了得に淋しさに堪えやらで廚の方には行きしならん。

一件り見極めたる匂子は倘ほ其の場を去りやらずして散れかゝれる亂髪をかい上げつ耳を欹てゝ廚

の物音を伺ひしがお幹が辭音はいと冴て笑ひ興ずるを聽き得たり匂子はにこ〳〵と笑みを帶びつまた淋しげなる眼を閉ぢて靜かに鎖したる唐紙に身をもたせ誰れ憚からぬ袖の雨………ガタガタといふ彼方の物音……匂子は驚きて涙を拭ひ疾く我が寢床に急げり。

第三節　黄梅

匂子が父ありけるは元と衣手の常陸なる太田町の分限にてありけり始めは玄米問屋にて手廣く商ひをなしけるが匂子の父なる淺影はよし億萬の黄金を積みて世にある限りの富を身に集めたればとて田舍にありて朽果なんは好ましき業にあらず貧しく活計まふとても都にて艱難せんこと身にとりて本懷なりとて少かりしより斯く心がけ筑波の峰の彼方、利根の流の彼方にこそ我が身を埋むる墳墓はあれ疾くこゝろざしを得て我が太田を故郷とし見んとのみ思ひけり、幸ひにして淺影に一人の妹こそありけれ當時はなほ幼なかりしが眉目も麗しう心態も怜悧かりければ此の妹の妙齡になりてんには良き聟がねを迎へ取りて家を讓り我れは吾が素ての願ひを爲し遂げばやと思ひ定めて手足もて引延すやうに疾く身材の伸よかし年の積れよかしとぞねがひける。

待つ身には菅の根のいと長々しき心地すなれど經つには早き年の瀬や流るゝ如き日子を過し昨日までも鞠を弄そびて餘念なかりし少女の今日は初娘まうけて母となりぬと驚かさるゝぞ常なる、淺影が妹も兄の目よりは稚しとも見ゆ曆の數は名のみにあらず心をも年とらして今は十七とぞなりにける、され

ば我れ先づ心のこゝに及ばざれども他人には善く知られて我が子の嫁にたべ我が孫の嫁にもと望める人に心づけられ始めて聟よ養子よと人にも頼み自らも索めしが同じ香月を姓とする親戚に二個の男子あり一個は家を譲るべき者なれば他家へとては出されねど弟なる方は分家にても爲さばやと思ひて玄米商賣の道を修めさせたる事なれば誠に屈竟の養子なりけり素より同姓縁類の間なれば云々の素願ありて今より己れは隱居なし家をも株をも妹に讓らんとは思ふなり就ては足下の二男にて在するを申し受けて渠に娶せ足下後見したまはんには我が香月の暖簾も幾久しき時つ風に靡き榮えんとは思ふかし此の事承引ては給はらずやと語り出けり親族にても淺影の決心を覺束なく思ひて先さま〴〵に諫め試みたれども昨日今日より染に思ひ立ちたる事にしあらねば如何詞を盡すともなか〳〵に肯ふべくもあらず然らば我が弟子を差進ずべし去りながら過分の財寶をさへ讓られんは心安からず其内幾分を分ち與へて餘は御身の資本としまたへといふ、匂子が父は只だ宜き程に承ひて緣邊の事を果しつ愈よ總ての事調ひて聟取も滞はりなく了り商ひかけ引にも熟したれば匂子が父は身に千金を帯たるまゝ飄然として出去りぬ、何國に赴き如何なる活着をせんともなしに。

淺影は後に人に物語りぬ、我が思ふ事の支ふるものもなくして成就したる程清く快よきものはなき予が曾て國を出る時は家を念ふ心もなく家人の袂に縋りて別れを惜むものもなく腰に一千の金を帯つるまま眉を拂ふ朝風に送られて旅立つるが寔に此の時は萬金にも代へ難き心地しけるなりと、淺影は是れよ

り江戸に來りて思ふまに〳〵商ひに手を出しけるが身は田舍にありて朝夕の營々も寛かなるに別て多く田畑より送り來る物ありて食ふまれ心を勞せず時の相場はありといへ老舗たる株とて商ひには心を勞する事もなく餘んの財寶を藏に貯へて物足ぬといふ事知らぬ身に玄ありければ石の上に住むとぞいふなる劇しき都會の商ひには目くらみ心騷しくして損失のみぞ多かりける、さしもに事のつらさは覺えけれども兼て期したる事なりければ辛さを忍び苦しさに堪えて兩替商ひを始めしが時は王政維新の創時なり世は人心の惑ひに惑へる折なり政府より發する紙幣とても信用薄くして商業世界には自ら相庭を定め多くは半錢の直のみなりしを淺影は何の見る處ありてや人の忌み嫌ふを幸ひに其相場もて人々の請ふがまゝに兩替し與へたりければ或る日の朝には殆ど兩替すべき資本とてもなきに至れり然りながら富たる家の人あれば人の用ひも厚くして彼號此號より借來たり夕までに兩替せる高は其の幾千といふを知らず信用惡しき紙幣のみは積で山を爲すに至りしが其の夜に及びて一條の法令出きたり一兩は一兩に通用し銀は六十匁錢は一百錢との直定りしをもて先の程までゝ無用の長物のごとく見做したる紙幣の忽ちに其直を得て淺影が身には一倍二倍の富を增してけり、然る後はまた弗に兩替を廢めて是よりは玄米問屋を開き傍ら相場所に出入してありけるが一年饑歲ありて米穀の價頓みに騰昂しかば此時始めて淺影は其の故鄕に赴き多くの玄米を回漕して藏に蓄へ其の價の最高點に達したる時を待つて一時に糶糴したりければ是にても亦鉅萬の富を爲せしといふ。

淺影また人に對ひて語れり、予が生涯に於て心に屑からざりしは饑饉の年に際して田舍人を欺き廉價に多くの米を買貯へて草を咬み土を食ふ慘狀を視つゝ其の價の最頂點に達せるをもて始めて人に賣渡したる一事なりき固商ひの爲めといへ人の不幸を奇貨として不時の利を狙ひしは餘りに不仁不德にして常に思ひの茲に及ぶ每に肌に粟を生せざることなしと、然ればにや爾りし後は絕えて然ることも爲ず店は支配人を置きて之にうち委せ身は諸般の興業に心を委ねまた時を見ては米商會所に出入し恐しき投機の業にはさして心を傾けぬには至りけり。

匂子が母人にて在するは固と某藩の屬役たりし龍木經三といへる人の長女にして名をれ香とぞ稱れける維新の刻み父は軍旅に赴きて還らず家ハ兵燹に燒かれて亡び纔かの知音を心あてに東京に來りて一家三人身を全ふすることを得たりしが父なる經三は幸ひにして官軍のうちに生捕られ護送せられて東京に來れり若し重き役目を申し被りたる身にてありたらんには即坐にも刎らるべかりしを身の程の輕くして走卒の伍長を承はりしに過ず固より藩論に與りて勢力ありしにあらずまた軍議に關はりて籌算を獻つりしにもあらねば戰ひの事果るとそのまゝに免さるゝことを得たりけり、始めの不幸は今の幸ひとなりて夫より武士の恐しき道を棄て少しばかり賜りたる黄金を資本となして是より商賣の道に就けるが若し昔者祿あまた賜りたる者ならんには算盤もつ術も知らず物の相庭にとても踈かりけんを經三は中士の分にこそ數へられたれ足輕と相距ることてあらぬ卑官にてありければ家に在りては常に提灯を張り傘を張り

て身の活着を補ひ妻ハ洗張洗濯なんどをもて內職とし年は倘は往かざりしかどもお香は刺子縫ふとを覺えて之を職とし君主より賜る祿は非時の貯へとする程なりしをもて世にいふ士族の商法の如く迂濶なる事のみにはあらざりけり、さりけれども身は四民の上に位し武門の家に成長して君に對し上官に對して慇懃ある禮節作法には慣れたれども商人となりて客を繫き其氣に愜ふやうに艶辭もて欵待す事には、いと拙かりければ店は兎角に繁昌せざりける經三固と物に忍び耐ふる心ある者なりけるゆゑ此の寥しき店をも疊まんとはせず比隣より幾干かの價を減じて薄利に商ひを始めけるより少しく店にも客の出入するを見るに至りしかば愈よ精を勵し氣を配りて商ひに務めける甲斐には今は先づ並々の商人となり遂せぬ、商人となりては是迄の如くお香とても徒らに禮節作法を習熟せしめんが爲めに奥殿の宮仕へをのみ冀がふは無益なり商人の家に嫁きて其の道の便を計るこそ勝らめと思へば自ら請ふて奉公に出んといへり兩親もよしと思へば人に賴みて慥かなる方を求むるに丁度近き巷なる蠣殼町に好き口ありといふ他に奉公人もあれども小間使なれば然までに面倒なる事もなしとの事なるにさらば試みに目見さすべしとて世話する者に伴はれて行きて見れば其の家は今の世に豪家との聞えある香月淺影が方にぞありける淺影かほどに世に成出けれども未だ定まれる妻てふものは非ぞ田舍より賴み來りし叔母何某が總ての世帶を取賄ひて奴婢多く召仕ふなり、お香始めて此處に來りし時いづれが我が使はるゝ內室にやと見るに絕て然るべき人も見えぞ主人てふものは淺影一人なりければ妻もなき家にあらんとは思ひけれども了得にま

た思ひ慮れば箇程の家にして内室のなきは仔細ぞあらん主人は尚ほ壯く見ゆれば今にも何方よりか嫁き來る人のあらんも知れず然なくば近き程に見沒り給ひて今は其の後妻を求めつゝ在するにもやと思へば年老し人も在するに始めて奉公して彼是いはんも餘りに蓮葉なりと見られやせんなど省みて遂に其のまま香月が方に止りけるが是ぞ身の成出る緒にこそ。

在斯しのちお香はよく老實て仕ふるに叔母なる人も太く心に叶ひて何事にもお香〳〵と親しくす、淺影も渠は誠に貞實なるものなり殊には粧はねども自からに色あり窶々しくすとも別に崇めらるゝ品格あるさへ健氣なるに起居動作の尋常なる爪外れ裾捌きの優美なる來る客も〳〵渠を褒めぬ者ぞなき誠に好き者を置き當たりと賞すると同じ雇人さへも主の影言はよしいふともお香を譏る者とてはなくお香は忽ちの程に香月が家の尊信を受くる女神とはなりにけるなり。

一夜の事とぞ、叔母なりける人縫事に氣を凝して肩の太う張りたればとて中二階に趣きお香を招きて少しく肩を揉和らげてはたもらずやといふお香は力かよはき我が身にて苦からずばいと易き事なりとて後へ廻り脊を撫で肩を揉み試むるに更に凝りたる樣子ともなし怪しきことを宣ふものかなとは思ひつゝも柔かに揉みてありけるに叔母なる人は數ば言はんとして控へまた言んとしては控ゆるとの五たび六たびにまた笑をかたむけながら漸く心を定めて和女前は商人なりと宣ひしが何方にて如何なる商ひをし給ふにかと問ひ給ひぬお香は更に包み隱さんとする心もなくて自らは此の邊なる濱町といへるに住みて小

間物を商ふ家の娘なりとぞ答へける、叔母重ねて小間物とは美しき商ひなり殊には婦人にても商ひの出來るものなれば樂しき事よ御身は家を繼ぎ給ふかと問ふ否よ自らは一人の弟あれば何方へか嫁ぐべき身にこそと答ふ叔母なる人重ねて斯く言ふはいと憚りある事あれども御身は腹からの商人にては在さぬとぞ覺えける何故に身を商人となして此家へ奉公までし給ひしぞと問ふお香も了得にかく言れては昔者の事の戀しからぬにあらず若し昔者のまゝにて在らんには身を墜して人の家に召仕はるゝにも及ぶまじ小身なれども士なれば今頃は願ひを上げて奥殿に宮仕へする身なるものを裲襠姿に引替て襟着し衣前垂姿襷を肩にしての奉公は時世ならでは得こそせまじけれと思ひ出ては父が心の奥母が懐ひの程をさへ押計りまた弟が譯知らで弓矢劍を怖恐るゝ者としならんと憐れに思ひ答へも頓には口に上らず叔母なる人は夫と推して寔に世は如何變るものぞ昨日まで鎗一筋の主に在して我々の土下座したる方さまが今はまた我々に手を束ねて店の用をさせてよと賴み給ふ此處の主人は世に義俠の心ある者あれば召仕ふは餘りに畏し些の資本は進ずべし商ひして見給へとて救ひ參らせしも少からず然りとて是非にと請ふ方を然解に辭ふも心ならねばとて然までの用もなき刀禰原を召仕ひ參らする者七八人あり店に在る某々も厨を手傳ふ何々も元は由緒ある方々が若刀自姫樣さても無慙なる世の成行きかなとて老の身の涙脆くいとしめりてぞ見えにけるお香は思はずも涙を袖に宿せしが心着きて笑ひを含み昔者の事は夢にぞあらん人には才智の差別こそあるものを落れバ同じ谷川の炊婢となるも今の分とかくに分といふとを知らば悲しみ

もなし懐ひもなし左ハ思し給はぞやと巧みに慰むる其の賢き身の程は弗にも語らず人の上をのみ憐れみけるに叔母なる人も尤く其の才に感じて其後は忘れても斯る事ハ言はざりけり。

併しながら今夜の事は直ちに主人香月の耳に入りければ夫より其身元を尋ぬるに全く云々の者なるよしを聞き得つ淺影は其人の心の程を賞でけるが果はまた戀しく床しく懐かしき心さへ出で來ぬ。お香もまた叔母なる人より淺影の心義に荒みて我と同じき世に零落たる人を幾人も惠み救ひまた家にも養ふよしを聞きては其人の尊く思はるゝに婦人の約やかなる目ハ朝夕の其人の身の行ひにさへ附纒へ見れば見る程男らしき氣性なり驕らず慢らず善く人を懐けて我が召仕ふ者にさへ詞を卑うし憐れみを先にすれば甲も乙も此の主人が爲めならばと褒ぬものとてなかりけるお香の初々しき心には此の義侠といふ事の頼母しくて我から果敢なき戀よはに知りながら高嶺の花を探らまほしき心とてもなきにあらず。

さて淺影は思ひかねてや心易き人を賴みて云々の旨を現ハに龍木へ申し通じぬ龍木にても事大方ならず喜びて兎にも角にも娘が心の程を探り見んとて呼に遣ハしけるお香はさる事を知らねバ何事にやと思ひ訝かりて歸り來つさて斯と聞きては新に喜びの心跳りてまた羞かしさの先だれけるが固より稲船のいなにはあらず津にかゝる船なれば此の縁談は頓に熟しつ、されども經三は物堅き人にてありけれバ小間使に手を附けて本妻に直したると言はれんは快よからずとて直ちに暇を乞ひ受け一年のゝち改めて參らせんと約せり香月よりは仕度其外には御心配あるべからぞ此方にて如何やうにも賄はんとありけれぞ

も經三は之に對しても嫁するには道のある者なり貧しくとも親ある身なり普通の事は必らず我が方にて仕つらんとて此の芳志をも退けたるには淺影も人の心の憑もしく覺えて斯る人を岳父と仰ぐは身の幸福なりと語りけるとぞ。

實に經三は人を欺かず妻にも命じ娘にも命じて夙夜となく手内職を勵せ寸より尺尺より丈と物調へしかば一年の後には十二荷の道具を齎らし猶は金百兩を三年が程の小使にとて與へ此金のあらん限りは必らず良人より小使を求むべからずと戒め更に香月に對して耻かしからぬやうに取賄ひめでたく祝言させたるには感ぜぬ者こそなかりけれ。

相愛し相懷ひたる女夫中なれば更に風波の立つべきやうもなく家内和合し親族相睦みて香月の家は幸福の空氣にのみ圍まれぬ四年のころには初產の紐を解きて娘を生めり即ち匂子なり夫よりまた長男の馨一を擧け二女のお雪を擧け今玆また復三とよへる二男を擧け一家六人いと睦まじく樂しき月日をのミ送りけるなり。

匂子が父は此の如し匂子が母は此の如しお幹が繼兒にもやと思ひつる萬一の望みは絕てけり訝かしきは匂子が病ひよ。

第四節　花芽

松にわたる風の調べ筧をつたふ水の音皆汗あへし肌のゆるやかなる頃としなりぬ、香月が息女匂子の

身に覺えたるうつら病ひハ倘は癒りはてやらずして終日枕と相語られるのみなりけり父なりける淺影もいたく心に煩ひて暇あるごとに問ひ來りて食べる物より目を喜ばせ心を樂しましむる類ひをあのものかのもと撰て薦むれども唯だ忝けなきよしを申し述るばかりにて進みて請ひまをさん氣色はあし父が來るごとに匂子は其の疾しき色を視めしてちゝの實に幾層の苦勞をかけ參らするは不孝の上の不幸なりと思へばや努めて髮を搔き上げ衣服を淸らかにしていとも悦ばしげに笑顏つくりて欵待しけるほどに父も其の心根を推測ればいたく〳〵しき事限りなく案じわぶるまゝ數訪ふも却りて病ひの種子とやならんかと遠く慮はかりつゝ心のみは此の柳島にうち靡けども熱き情を押へてはうるさうも問ひ來在さすあれり、父なりける人已に此のごとし、はゝそ葉の母には在するお香の心は夜となく晝となく匂子が身の邊をさまよひて身に添はぬがちなれども我が膝下にて看病つる頃よりも人に容體を問はるゝさへ最と苦しげに見えしものを母なりとても數ば問ハば益々心の惱みやせん願ふ所は神佛のみと思ひつさしゝ賢き人の性も子ゆゑにハ同じ愚かなる婦人となりて水天宮に日參を怠らず丈六の觀世音に百度を踏みはては遠きあたりをも憂しとせずして名ある神佛には必らず詣でゝ他し意とてもなくひたふるに匂子が平癒を得せしめ給へ女が病ひたに癒らば吾が命は召させ給ふとも惜しからじとぞ念じける。

實に子を想ふ母親の心ほど切なるものはあらじ佛說に鬼子母は子ゆゑに狂して人の子をさへ取食ふといへり良人が文にさへも忠言をまゐらせて京師第一の學女と稱へられ別て歌には堪能の聞え今の末代

までも喧しき赤染右衛門すらも我が子が病ひには堪へやらずして住吉の神に三日三夜の祈願を籠め我が命を割きて我が子に與へたびてよと祈り代らんとの歌をば詠じけり徐庶が母の魏に縊しも我が子を不義の臣とせまじとの心盡しのみ親の子を思ふの切なるは親ならずして誰れかは知らん夜の鶴燒野の雉子巴峽の猿のためしさへあるものを人として賢きも愚かになり行くは常のとなるべし親の心はかくぞかしそを親に酬ひまつらぬ子の心惟ひみれば作者のむかしぞ恐しかりける。

お香はかくても尙ほ慊らずして稚く愛らしき妹娘のお雪に心を得さして常に匂子が好める物あまた持せて遣はせば馨一もまた我が身の人より貰ひ集めたる錦繪、寫眞あるは團扇のたぐひをも取纏めてを姉上に進らせよとことづくるも愛らしき、さてお雪は我れのみ姉が許に到る事の嬉しくて着るものは今年の天王祭にとて賜はりたる絽の染摸樣の中振袖しつけ苧とりて着せてたべ姉上に見せ參らせん帶は糸錦の紅地もの姉上の常から我か身には相應しと宣ひければあれこそ宜けれ上締には桃鷺色の絹縮紅き帶にはうつりよし頭は何に結ぶそよけん下げ髮にて海老茶のリボン夫れに桃色の花簪兒あれかこれかと幼き身にも女は婦人の嗜みにて母にせがむも優しかりけり。

かくてお雪は一個の乳母に送られて柳島に赴きて見るに茂りたる杜の中には珍しき新葉の匂ひて常には聞かぬ小禽のねふたげに囀るも耳新らし彼處此處に咲く草の花岩に堰かるゝ水の奔飛しりて玉を散らし岩ともいはず苔とも言はずうち濕はへるも心淸し別て小女の目を喜ばせるは花畑に咲ける薔薇の花な

り吾が插頭の擬製花と比べては其の優劣を競ふも樂し乳母はお雪を促がして先づ玄關の方に赴き執次を請ふて御本宅より御見舞として娘樣の來ましたるよしを通じやりお雪の手を執りて態と廚の次の間なる女中溜へ赴くにお雪はいと喜ばず母上と來し折りには彼方の襖を開きて入りしものを此方に來りて勝手違へりとむづかりぬ。

老實やかなるお幹は折から投入の花をかへんとて後園なる栽溜に趣きて常夏の花を摘み來りしがお雪の姿を見るよりも例の顏に笑ひを充せて手に持ちたる花も鋏みも縁側へ投やりたるまゝ飛上りて『オヤ〳〵オヤ〳〵マア何うも小娘さま……オヤ〳〵オヤ〳〵オヤ何うもマア能く被爲入いました、お暑うございましたらう？マアネー眞個にお可愛らしい事、いゝお召しネー、幹なんぞの手が障ッたら腫れませう、漸との事が霜瘡や垢胼が癒ッたのにまた此樣なに腫上るんですよ、オヤ〳〵蛇籠に流れ、こゝへ花が咲て、マア　涼しさうだ事、幹に下さいませんか、お否？、其樣な事被仰らずに下さいましなネー、オヤ何うもマア此のおみ帯のお立派だ事、さう〳〵去年あの目白へお涼納に行て螢狩の時に――アゝさうさう爾うでございましたネー、ネー婆アさん眞個に人形のやうでお出なさるよ、小娘樣みきが抱こをして上げませうか、暑いからお嫌ッて、さう？、大層みきをお嫌ひなさいますネ、覺へて被爲入ましオホゝゝゝゝゝ』獨り心地よげに笑ひ興ずればお雪は始めのほどこそ遠ざかりたる例の顏をうち凝視て恐しげに見られたりけれども心潔よきお幹が言葉の面白さにはては少しく相馴れて幹をなぶり戯ふるゝよは

至りぬ『みきや、あの彼方の子のお家へ行くのハ嫌かへいゝ物を上げるからネ今度予歸る時に、アノ一緒にお出で』お幹は例の目を細くして實にも嬉しさうに『小娘樣予しが參ッても貴女お叱んなさりやアしませんネ』れ雪ハ少し離れて言はぬ先より可笑さを忍び得ず『叱らないよ、予ネ……アハヽヽ予いゝ物遣るの、』『いゝ物ッて何でございませう、何だか嬉しうございますよ』またもやお雪は少しく遠ざかりて笑ひながら『アノネ、去年のネ、去年のー、お祭りの時見たネー』『エー天王樣の時に小娘樣と見ましたのは｜｜エーさう〳〵小網町でお神樂を見た事がございましたネー』『アヽ爾うサ彼の時に出たヒョットコが宜しくとよ』『小娘樣』と叫びて故とお幹は身を起すにれ雪ハ嬉しげにも身を縮ましてエヘエヘと笑ひながら一間のうちに驅入れり。

乳母も可笑さを忍びやらす笑ひを唇に銜來れどもまた思へばお幹にも氣の毒にて銜來る笑ひを呑み込みつゝ『マアお雪樣は何の事でございます其樣な事を被仰るものぢやアございませんヨ』止められてもお雪ハ嬉しげにて尙ほ狂ひつゝ追ばます〳〵奧へ進みて今は匂子が病間に近く竄往けり『これお雪樣お姉樣はキイ〳〵がお惡いンですよ、サア此方へお出遊セ、ヱ、お雪樣、サア此方へ』お雪は今しも姉の許近しと聞きてさすがに優なしき心いで來ぬ怖しきものを伺ふやうに見ぬもやらぬ彼方をふり回りて密と覗き見ながら一足づゝに乳母の方に來りて其の肩に倚りかゝれり『姉さん彼處？』聲を低めて斯く問ふ折から廊下の葭戶に人影の映すを見てうち駭きつゝ乳母の後に驅來りて身を隱せしが其の脇よりは纔か

に半面を出して廊下の方を目戍居たりき。

病間を出て此方に來りしものは曩に取次を頼みたる看病の老婦なりし、かくと見るより乳母は此方へと迎へて『お娘様ハ如何でございました お目が覺て被爲入いますか』看護の老婦はうち點頭て『今顔を洗ひたいと被仰いますからお顔をお洗はせ申して居りましたから宜しくございますから彼方へ被爲入て御機嫌をお伺ひなさいよ……オヤ小娘様は袂が見ゑて居て何處へお出遊したよ、お歸り遊ばしたのか知らん』これ嬰兒に戯るゝ言なりされどもお雪にハ言ふ人の異なれば面白く感せられしや愛らしき嬉ばしき笑ひを洩らしつゝ其處へ出て膝かき合せ袂をたゝみて膝におき所體繕ろひて會釋せるなり『オヤ〱此處にお出遊ばしたの、マアネーなお優なしい事、婆やアさんの御躾けがいゝものですから眞個にネー』看病の婦人は箇樣に艶辭に述べて一禮を殘し出去りぬ『雪チャン、被爲入い……婆やアも此方へお出』彼方より洩れ來るは匂子が聲なり『サア姉さんがお呼び遊しますに、アノ能く御行儀を善くなすッて夫から阿母さんの御口上を忘れずと仰被いましョ』乳母が繰返したる忠告にお雪は今までのやんちん孰れへか忘れて優なしく承まはり俄かに襟をつくろひて帶にはさみし扇子を彼方に廻し此方に戻しなどし乳母に手を托して姉が病間へ赴きけるに匂子は了得に吾が愛し悦ぶ妹の獨り訪ひ來つと聞きて父母にも會ふとの進まざりし身が我から起ちて葭戸のこなたまで出迎へぬ、お雪も姉の姿を見て戀しくや少しく足を進めて其側らに行けば匂子は疲せたる手にお雪の愛らしき腕を把りて今拂はせたりと見ゆる臥床を巻

きたる邊に伴ひ居らしめたり、乳母は閾を入りたる處に座を占めてお雪が會釋を終るを待つほとつくづく匂子の姿を見やれば哀れなると限りなし母上に似給ひてや、面長なる面貌に程よく着し肉は白絹の下に桃鷺色絹を襲ねてうち透したるが如くほんのりと濃かき膚もて覆はれ鼻梁は父上に肖まして隆く彫みたる美人にも稀なりとぞ見られつる眼の麗はしさ畫きたる人の如き唇の美くしき眉の新月を研ぎたる額の富嶽を描がきたる黒く艶やかなる髪白く長き頸常に見る者さへも新らしく戀ひわたるべき姿なりしに今は三月が程のうつら病ひに惱み給ふて肉は飽まで落ち目は飽まで曇り唇も色褪せ眉も茂るに任せつ髪もとり上ると少なればよごれ蓬けて見るさへに其の苦はしさを察しまゐらせられぬ斯る折には隆しとて愛にし鼻のみ徒らに高き嵩を加へて却りて物凄まじくぞ仰がれける、乳母はつく〴〵と見るにつけても何時かは再び元のめでたき顏貌には復し給ふぞや願はしからぬ事ながら在りし姿を鏡に寫して見給ふとの出來がたき終りには至らずやなど想はるゝも一向に老の繰言のみにはあらずかし。

餘念なきお雪は乳母の涙を汗に交らすをも知らずして携へ來れる三つ四つの包みを吾が手もて披らきつゝ『アノー阿母さんがチー姉さん、これネ奇麗でせう、此の菓子をお藥の口直しにても上ッて下さいツて……夫から是れはネ此の葡萄ネ葡萄は姉さんが好だからこれは予がお見舞……』匂子は其の列べ揃へる品は笑しけにうち見やりて『オヤ〳〵マア何うも濟ません是れをお雪さんが……予しに……オヤ何うも何よりの好物を澤山に難有うございます』『何う致しまして……夫からアノ此の錦繪とネ團扇とは

ネ兄さんが上るッて……ハイ皆な其方へしまひお呉なさい』臚べ了りては早や我が身には用なきやうに手もて彼方へ押やりたり『是れはマア御銘々から難有うございます何うぞ宜しく』お雪は今齎らしたる美麗なる團扇を把ッて扇ぎつゝありけるが俄かに何事をか思ひ出しゝと思しくて『アッ、さうだ〳〵アノー姉さんれ加減はいかゞでございますかッて、夫れからアノー今に寒くなると不可ないから早くお醫者様の言ふ事を聽て湯治に入ッしやいッて……アーモー無ッたッけ』さすがに匂子も其の愛らしさには紛らされて『宜く分りました夫からお雪さんが學校が土用休みだからまだ二三日は遊んで行てもいゝでせう、子、姉さんの處へお泊りナ』『アゝ泊るんだ、幾日もネ此處で遊んで行くの、明日は子婆やアが歸ッて姉さんのと予のと衣服を持て來るの、今度歸る時はネ、阿父さんも阿母さんも兄さんも復坊ちやんも皆な來るの、彼のお祖父さんも來るの、而て皆なで一緒に歸るの、ねア』罪のあらぬ幼き口よりは此の秘密をさへ洩らしたりけり聞く乳母ハはッと驚きけるが深くは咎めもならで其の詞をうち消さばやとて『お娘様、誠に御無沙汰を致しましたチョイと御暇を頂いて御見舞に上らねば成らないのでございますが誠に閑がございませんので存じながら御無沙汰を致しました何うもまだ御さつぱり爲さいませんッて子ー不可ませんネー、でも何でございますよ此間御新造様に伺ひましたよりハ減きりと御血色が違ッて居りますよ、モウ何でございませう直きに御快氣でございませう何でもお藥りは根よく召上らんと不可ませんよ』片手を疊みにつきて片手に膝の上なる汗手拭を動かしながら匂子の顔を見つめて徐々と

かく說き出したり。

匂子は我が病ひの事を問はるゝに心とかくに安からず『切角皆さんに御心配をかけて子ー』と言ふ間に身を退きて後なる柱に凭れ團扇に半顏を掩ひて『濟ないとは思ッても何うしても考へてばかり居て不可ないよ』乳母は尙ほ其の心を知らでや『夫れが一番お毒でございますよ、だから湯治でも入しッて御氣保養をなさるのが一番、エーモウ夫に限りますよ』匂子は全く顏をうち反けて眉を顰めながら『アイよ、所詮死なくッては治るまいよ』眼に餘る一しづく其の詞に愕きて言慰さめんとする乳母よりもお雪は姉の顏をさし覗きて『アラ姉さんいやだよ、お泣でないよ泣くもンぢやないよ、エ、きいきが惡いの、お藥を上げやうかへ』折角に愛らしきお雪が殊勝にも慰めたるものを乳母の老し考へは却りて氣色を害ねたり再び言はんよすがもなく起つにも機會を失ひたる時お幹は再び常夏を摘みて幹を燒き水揚をして之れを盆に上せ鋏と水指とを添へ匂子が前に持來るに乳母はやうやく折を得て『オヽさう〳〵お幹どんにも御本宅から御土產があッたッけ、鳥渡あれを取つて參りませう』これにて其の座を外しつゝ彼方の間には出行きけるがさても訝かしきは匂子が病ひ鬱性とてもかばかりにはあるまじきに何事ぞやと思ひはかりて汗する胸に手をさし入れ小首をかたげて次に去りぬ。

お幹は床の間なる籠花生を下し來りて更に匂子に進め『アノ先刻直とネいゝ花を摘みましたけれどッイれ雪さまに見惚れ其まゝ緣へ置きましたから大なしに成て……また今度は一番美しいのを取つて參じ

ました、ハイ』匂子ハ夫れを能くも見ず『此樣なに開いたのは不可ないよ、棄ておしまひ』『ホラまた失敗た、でもモウ常夏はございませんよ石竹……矢車のいゝのが飛だ宜うございませう』『なきやア入りません……濃厚い彼方へお出で』お幹は例の顏に驚きと不審とを加へて手持無沙汰に立去ればお雪は氣遣しげに姉を見る其の手を捕つて肌に添へしみ〴〵匂子はなげきけり。

第五節　蟲拂ひ

『此の涼しいのに其處にばかり閉籠つて居ないで些と此處へ來て景色を御覽なさい眞個に畵にかいたやうだよ』かやうに申す人ハ年四十路にや餘りぬべし然れども天然の美しき色は年なみにつれて遷ろひもやらで昔し若かりし時の面影は今も尚は眉のあとに青々とひき殘して氣高く仰がるゝ婦人なりけり『ハイ唯今參りますよ鳥渡こゝの新聞を讀みかけたら面白うございますから是れだけ讀まして下さいましな』かやうに答ふるものは先つ頃よりは肉づきて顏の色さへ麗はしうなりしかども見紛ふべくもあらぬ香月が娘匂子にてありけり。

匂子は何思ふとしもなくて現つ物の哀しさに自ら病ひを求めつゝ成るべく人に遠ざからんとて柳島の別莊に出養生したりしは唯だ苟且の氣保養にと思へりしに青かりし梅の黃みても身ハ五月雨の晴間もなく物れもへば思ふほど空蟬の身の嘆しさに在る甲斐もなき身を保ちて樂しからぬ世に存命らへんよりも念ひのまゝに身を御佛の蓮の臺に導き給ふをころ待めと覺期し藥とても服さんとはせず食とても減じ勝な

りければ見るまに心衰へ身羸りて今しばし此のまゝにて置んには如何なる名醫の心肝を碎き如何ある良藥の配劑あるともあだし野の露とならんと瞬く間に迫りぬと醫師もいへバお幹もいへり之れを聞く父母の心はいかにかわらん心も容も美しう生れつるものを何神のれとり給ひてか蕾ながら散れよとハ情なし兎ても角ても存生ふべき命ならねばさて休むべき外に術なし去りながら今のうちに強ても藥餌を施さんには萬ゝ一つも細き命をつなぎ止めて再び花の梢を眺むるの望みなきにはあらじといへば娘の心に逆らへばとて親たるものゝ見殺しには得もならじを如何にもして治療のほどを試みなん人に逢ふを憂しといふも夫れハ病ひが爲せる業なり我れから心を鬼にして忍び難きを忍びてこそ能く娘を慈しめる誠を得たりといふべけれ宋襄とやらんが仁は誠の情にあらぬぞかし縱令厭へる色の見ゆるとも夫れには少しも心を勞せず思ひのまゝに藥餌を與へて玉の緒の永からんとをのみ願ふべしと意を決めたり。

一たびかくと定めてはれ香もなか〳〵に心を強うして固より物足らぬ身ならねば直ちに醫師を雇ひ一人二人づゝ夜となく晝となく見舞ひ賜はれ總ての費用は直を倍して進すべしとてお香は乳飲兒をのみ懷きて柳島なる別莊に移り住みけり、匂子は母の來りしをうち煩ひて只だ情なき事にのみ覺えけるが母は常のやうにはなく最と情の剛くて嚴かにも藥餌を與へまた食るものも自ら乳飲兒を抱きつゝとゝのへて是れを夫れをと與ふるは了得に夫れをしも厭ふべきにあらねば是非もなくて咽喉に通しぬ然れども心の苦しさは何に譬へんやうもあらざれば寧そ夜るのほどに忍び縊れんか將た刃物もて自害せんか但しはまた

前なる川に身を投げて果つべきかと思ひて母が寢息を伺ふにいつとても安らかに目睡みたる事はあらば寢返りうつだに手を添へ給ふほどなればろもまた心のまゝならず斯くと知りなば坐ながらにして死を待んよりも人のかくと心着かぬ程に疾く死ぬべかりしものをさても嘆の哀しくて死に難しこそ憾みなれと悔みけるは心細き病ひの業なるかも。

初めの程こそかくは思へ固より孝といふ事知らぬ身にてもあらざりければ或る夜母の痛く勞れて熟睡せしを見定めて竊かに我が臥床を離れ此の間にこそ覺期を定めなんと思ひつゝ目睡み給へる母上の面を見參らすれば白く艶やかなりし顏の色は去年の春の産の時よりもいと蒼みて眼も恐しく凹りつ頰骨さへも高う顯はれて髮の毛の艶もいと薄し、見まゐらするにつけても我れゆゑに斯ばかり御心を痛め給ふか慈愛の勝れて深く在する母上に孝養とても聊かも盡しまゐらせず後の御嘆きも思はずして幾層ばくその御心勞をかけ參らせし果に淺ましき身の終りを見せ參らするとの恐しさよと思へば憶りなくも涙はふり落ちて潸然とうち泣きけり其の涙の母が面に灌げるを見て驚きて飛退らんとすれば母は何をか宣まへるなり匂子は胸つぶれて我が臥床に轉び入りつ轟き騷ぐ心を押へ小夜具の襟に涙を包み佯睡りしてありけるが母は現に言はれしにはあらずして夢に魘はれ給へるなり、朧げながら其のいふよしを聽くに語とては約らねども御身の疲せをさへ忘れ給ひて我が身の病着をいたく案じ給ひ何卒して娘の病ひを癒らせ給へ我があらん命を十年縮めて召し給へと天滿宮に祈念し給ふにぞありける、匂子は憶はずも身を慄はして

さても母上の御慈くしみの最と厚さよ屑ならぬものをさへ最愛しの子と思し給ひて御身の長き御命を縮めても我が身の平癒を神に祈り給ふかや朝となく晝となく夜となく常に心に念じ給へばこそ現なき夢のうちにも斯くは祈願を凝し給ふなれ、後のほどは兎にも角にも今は我が身の死を止まりて母上の御心を休め參らせずば何時の世にかは此の恩愛に酬ひ奉つるべきと始めてこゝに思ひ回らしけるに心一たびここに至りては藥餌の試驗もいと著るくて一月餘りを經るほどに稍や病ひ心を忘れけるなり。

されば香月一家の喜びは言はんばかりなかりしが斯る病ひは尙ほ保養せしむるこそ宜けれお香も看病の勞れわらんともに湯治してはいかにといふ、幸ひにして香月が知人のこたび那須停車場の傍らなる那須野屋てふ旅人宿を購なひてなほ鹽原なる古町の五階樓を支店と定めたれば入浴の節は是非に我が方へ來給へと言ひ越しけるにぞ彼の人ならば心眞實しくて氣の置るゝとはなし心ざまをかし人なれば匂子も鬱を忘るゝとわらんとて直ちに其の準備を整へつお香は乳香を懷き匂子を携へ例のお幹と外に一人の眞實なる手代を伴としつゝ上野の汽車に坐を占むれば半日あまりにして居ながら那須へ赴きたり本店は停車場前としいへは彼處の大きなる旅籠屋なるべしとて其處に至れバ豫て見知越しなる主人の居つ己も支店へ赴けバ御案內申すべしとて夫れより鹽原へ立越えつ主人が心づかひもて隔離れて物靜かなる座敷へぞ舍りを定めける、今しも新に靈泉に浴みてお香ハ端居しつゝ山々谷々の景色を目かれもせず見てあるに匂子は何故よか蒸暑き屛所に在りてさし俯向つゝ彼方を向て何をか考ふるものゝやうに見られければは

てこそ斯くは誘ひしなれ。

軈て匂子は新聞をうち掩ひて地袋の上に置き母が側らに來りて『ア丶面白かつた、明日もまた取つて見て宜うございませう……オヤマア何といふい丶風だらう、アラ阿母さんチョイと御覧なさい葡萄でせう、マ美事に實つて居る事よ』愛らしき笑みを含みて其の氣色を賞する態の美しさ、お香も愛らしげに匂子の方を見て偕に笑みを含み『アノ來る道に瀧が大層にあッたぢ丶アないか、れ前も予も東京で生れて他所へ行たら横濱か江の島鎌倉、夫れに此方は成田より外行た事もなし眞個の山なんといふものは始めて來て見たのだから見るもの〳〵繪を見るやうな心持がするネー』匂子は語の尾るを持ちて餘念なげに母の面を見つめながら『アノ日外の讀賣新聞に有りましたよ此の鹽原には高尾の碑がありまして明日よでもなッたら方々行て見ませう』ト言ひつ丶西の空に傾く日をうち仰ぎながら『ア丶何だか日が長いやうで短ッかいやうだは、オヤ馥坊は』『先刻れ幹が何處へ連れて行ッて出て行ッたが――』其の聲の未だ終らざるにれ幹は馥三を脊負ながら一枝に鈴の如く生りたる柿を携へて庭の彼方より歸へり來ぬ『サア坊ちやま、お乳を召上れ戀しいお乳を上げて下さいまし、眞個に種々お物を御覧なすつてれ優でございましたよ、サアお娘樣斯ういふお土產、奇麗でせう奇麗に生ッて居ませう』馥三もいたいけなる心に母の膝にかい上りつ丶お幹が齎らし歸りつる枝柿の方をしば〳〵顧みては誇り顏なる笑みを示しけり母は柿には心をも留めぞして汗ばへたるお幹が脊を見やり『お幹やこれを脊負てい暑くつて堪るまい

早く一風呂浴つて其汗をお流し何うして中々重くなつたから難澁だよ』といへばお幹は例の目の消ゆるばかりようち笑みて『ハア難有うございます、御新造さま眞個に些と彼方の方へ行て御覽なさいましよ實に畵にかいたやうな景色なの野萩だつて申す事ですがアノ萩の花のやうな草が一杯に花が咲て居りましてネ夫れにアノお娘樣の御好な何とかいふ石竹……アヽ爾う〳〵アノ常夏だの螢草だのつてネ夫れは〳〵眞個に奇麗でございます事よ』母は只だお幹が笑顔につれてうち點頭けるのみなりけるがお匂ハ覺束なげにお幹の面をうち目戍てありけりやがて美しう生りたる枝柿の方を見て自から眉のひそまりけるが今は忍ばずやありけん『幹この柿は何處に生つて居たのだへ』こなたの物語りにハうち背きて思ひも設けぬ柿のありし所を問はれけるにお幹ハいと奇異の思ひをなし圓なる眼を瞬りて『夫れですか其れは此の先の山に……』『イヽエ山ではあるまい百性家に生つて居んンだらう』『オヤ能く御存じで被爲入いますネー夫れおやアお娘樣も疾くにもいで召上つたと見えますネ甘い樣でございますヨ』匂子ハ味氣なげにお幹の方をきつとうち見やりて『お前は眞個に無闇だよ此を柿を折る時に斷つてお貰ひかへ』『誰が斷る奴があるものですか山のおかァーな處に出しや張つて居るンですもの皆な往來の人が折ては往きますよ』平氣なるお幹が答へに匂子は膝を改めて『お幹、マア妾のいふ事をよくお聞きなさい此の柿はネ山や畑の畔にあつても百姓が丹精して作つて鴉に突ツつかれないやうに番をしたりなんぞして是だけに生らしたの而して能く熟したのを賣て商賣しやうといふの夫れを心なしに無闇と折られて堪るものか此

の春柳島に居た時ゞお庭の梅の花を醉はらひが折つたッてお前は人のうちの花を折た十間川へ突飛して遣るといつて駈出して御父樣に叱られた事をお忘れかへ只だ眺めにする花でさへも其通りに思ふのに是が商賣ものを他の人に折れたら腹が立たうか立つまいかマア自分の身になつて考へて見るがよい敵手でも惡くつて御覽夫れが何んな騷ぎに成るか知れませんチトお嗜みなさい』常には何事のありとても憤ほりたる事あらぬ匂子の何故にかいたく其の行ひを惡しとして責めければお幹は兩の目をきよろ〳〵と働かせて頰のあたり膨だめるを隱しもやらず湯槽の方へぞ走り去りける。

夕暉は向ふ峯上にうち茂れる杜に遮られて山風いと涼しく袂を拂ひければ匂子はこの鹽原の山の景色あなたこなたを見まほしとて浴はてたるお幹を伴ひて那須の家が宿を立ちいでつゝこゝの谷かしこの峽なる珍しき草花を手折ては其の麗しき色を賞で稱へつゝ色珍しきものゝある每に手折ては谷水を灌ぎこれを束ねて手に携へつゝ往く程にお幹はふと足をとゞめて凄まじく一方を凝視しながら匂子の袂をひかへたり、何ぞと問はねど匂子もそこに足をとゞめてお幹が見つめたる方を辿り見てければ前の枝柿こゝよりこそ折り來つれと見ゐて十本ばかり柿のいづれも枝も折れんばかり美くしく生り居けるに其のもとには年はたちばかりなる少年鍬を前に置きて小休みすと見えたるが懷中より西洋綴の本を取り出だして餘念もなく讀めるさま彼のリードルにて見たる牛を追ふ少年のやうにてあはれ殊勝なりけり髮は一び短かく剪りたるものを絕えて苅もすてざるにや彌が上にも生茂りて髣髴たるに顏は垢づき髭さへもいと蕪陋

げに生へ日に焦げて照れるばかりに黑みたれども自から涼しき目には侮り難き光りあり僅かの閑を偸みて一丁にても多ほく讀まんとの心搆へにや瞬きもせず文字に凝らす態匂子はこゝにたてもとをりて目かれもせず眺め居たりしが何を心に愧ぢてにか栗の樹の屏風に半身を忍ひて尚ほも眼は彼の少年より離れざりけり。

颯と吹おろす風に鴉の啄み殘したる柿のはたりと落ちて少年か見たる書物をうちたりしかバ少年ハ始めて心づきて空をうち仰ぎまた轉じて此方を視つるに匂子はうち驚きて栗の幹に身を匿さんとして却つて全身を顯はしたるが彼の少年は別に訝かしき色もなくして西の日さしを望みたるがおどろの髮をかい撫て書物を懷中に深く秘め鍬をかたげて小徑を進むにお幹れかくと見てまたもや匂子の袂を控へ『御孃さま、先刻折たのは此の柿ですよ今の兄イが丹誠をして作ッたのでせうかネー此樣なに鈴なりに生るのは餘程柿つくりが上手だと見えますよアノ柳島のれ庭にある柿も此の人に作らしたらきッと此んなに生るでせうにネー』匂子は只だうち笑みたるのみにてまたもや谷を越て進むほどに村里をなしたる處の裏手の小徑へ出にけり一家の座敷と覺しきにいとはしたなう男女の罵る聲聞ゑければさて女夫諍ひなどいふものにやと思ひて近づくまゝに其のいふ處を聞けば女も男も交るべうもなき江戸訛にて此のわたりの里人が言ひ態とは似るべうもあらずわからさまには得聞えねど其の罵しるやうを聞きてあるに『ヤイ手前はいつまで餓鬼で居やアがる商賣ものを盗み食しやアがアて知らねへも無へもんだ……』斯くはた

る傍らより婦人の聲にて『徳やお前も眞個に大概にしねへか十九にもなつて枝柿の盗食ひでもなからうぢやアねへか大方何だナ祥隆寺の糞坊主が言ひつけて供物にする爲めに盗ましやアがつたンだらう、エ爾うだらう眞個にあの坊主め碌な事ハ敎えやアがらねへ、爾うならさうで言てしまいねへ隱して居ちやア解が分りやアしないョー』箇樣に罵しり騷ぐは正しくお幹が折りすて歸りつる枝柿の事なるべしさてもよしなき戯れしてあらぬ濡衣を着せつるよ責むる人はいかなる人ぞ責らるゝ人は如何なる人ぞと生籬の破れよりおそる〳〵も内の樣をかいま見るにこは思ひきや男は得も知らぬ者なれども女は正しく幼き頃父が寵妾となりにしものにて責らるゝものは今見つる少年なりけり匂子は餘りの奇異に胸いたく轟きて姑らくは立も得去らず。

第六節　霜雪

人は清く身をもちたきものならずや如何なる時何れの處にて古にし人に面を見らるゝも計り難きものぞかし省みて愧かしき事あらねば古にし人を見る心の歡ばしさは幾年別れにし我か兒を見るよりも樂しきものなるに淸からぬ身をもて人に會ふ心は果していかにあるべきか人を殺し貨を奪ふほどの者なりとても隱らふべきとのあらばと四邊に心をのみ配られ彼方の眼は吾を見ぬにだも電光のごとく鋭く怖ろしく思はるゝに聲かけられんには幾百磅の太砲もて我が胸いたを射貫るゝ心地ぞすめる心の曇りほど恐ろしきものはあらじを。

香月の令孃匂子は現たり我が父が一時深く心を迷はして千金をも惜しめる色なくよし町の狹斜より根びきして柳島の別莊を新たに贖ひこれに忍ばせ圍ひ置きつゝ夜となく晝となく車を通はして契りいと濃かなりける小春がかくも變りはてたる姿を視たりける事なれば我れから心羞かしき心地せられて小柴垣のまばらなる彼方に憚りもなき身を隱ろひて尙ほ其の詮んやうを伺ひ居けり、お幹はかゝるべしとも知るよしあらねば破れにたる籬の間より內の容をつく〴〵と見ていたく驚き騷げる面色にて匂子が方に駈せ來りつゝ遽だしく袂を控へぬ『しッ徐かにおし、幹や靜かにおしよ今こゝに人が居る事を知られたら何樣な目に遭はせるかも知れないからネ』匂子はお幹が口を開かぬ前にかく注意をしたりけれどもお幹の心はなか〳〵に騷がしかりけん其の詮なくて例のだみ聲高く『マア鳥渡お聽き遊ばせよアノ子はホラ今しがた柿の木の下で本を讀んで居た子ですよ夫れぢやア此處がアノ子の家ですかネー彼の婦人の人は阿母でせうか、ちよいといゝ婦人ですネー大層意氣な婦人ぢやございませんかネー、ですが予お孃樣彼樣な意氣ないゝ婦人の癖にアノ口の所きやうは何うでせう眞個にマア嚙着く叱言をいつて彼の子が可愛さうですよ予しも邪見な親を持て身に覺ゑがございます……でも邪見でも何でも女親があるから羨ましい……予しの樣に女親には早く別れる……後にも先にも杖にも柱にも男親は御覽遊ばした通り……忘れも致しません予しが十一の歲貴女がれ十二の秋貴女は龜戶へ萩を見にお出遊ばしたお歸り……予しの命をお助け遊ばして下すつた其のお金を持たきりで何處へ參ッたか親父は往方知れず……アーア何は

邪見でも親は親ア丶して人が兩親に叱られて居るのを見ますとツイ元の事を思ひ出しまして……眞個にモウ予は悲しくツて〳〵……』お幹はいくその感に閉されて予が身のうへを追懷しつゝ得も堪えやらねは聲を放つてぞ泣きわめきたる、匂子もと哀憐の心淺からぬものなればお幹が人の事をもかく一身の上に思ひ比ぶる薄き幸の程を想ひやりては了得に約ましき心をも失ひて貰ひ涙に袂を絞りけり。

その聲柴垣の間を洩れて彼方にや聞えけん一枚開け殘したる障子破るが如く手荒にうち開きさま食ひつくやうなる聲にて『其處で立聽きしてるのは誰だと』罵り吁きつゝおそろしき眼ざしゝて此方に面を向けたるは年のころ五十路には及ばぬなるべし色淺黑くひと癖ありげなる男なりけり匂子ハ其の聲音を聞きて色變るまでに心おかれつるにまたもや其の面を見て恐しさ言はん方なく迯んにも途のほど遙かなり隱れんにも屏所は見えず身を縮まして能くも得見ぞ、お幹は然までには愕かざりけん直に涙おし拭ひて聲せし方をきツと見つるに軈て是れもうち愕かれて遁んとしつゝ急に匂子が袂をひきて聲も遽たゞしく『オゝゝれ孃さまオゝゝ鬼がーオゝ親父が……』かく言はるゝにて匂子も夫れと心着きけんこたびは心を鎭めて其方を見やりけるに寔にやお幹がいへりし如く今我が身の立聽を咎めたるは幼き折にも恐しと見てお幹を憐れみ初めたるその親酉松にてありけり、かくと心着きてはなか〳〵に騷ぎもせず固より恩をこそかけ置きたれ渠よりとかうの紛紜を言はるべきふしとてもあらねば匂子の心ハ泰らかになりもて行きお幹を隨へて物をも言はず元來し途へ立去らんとしたりけるがまたつく〳〵と思ひかへすに彼の少

年がかく責はたかるゝは固とお幹が復三を慰めん爲めに折り歸りたる枝柿の事なり彼の折より宜からぬ事をとは思ひしかども今まのあたり身に濡衣を被せられてうき目見る人あるを他所に見なし我が罪遁れ顔に歸らんは餘りに腹穢なしいかに鬼を欺むく人々あればとて身を投出して罪を謝せんにはよも承がはしとは爭ふまじ人の難儀を他所に見て身を全ふせば後々までも後ぐらしいでや内に入りて事の仔細を解き聽さんと思ひ定めけるぞ健氣なりし。

匂子の心一決してそなたに足を回らさんとする折しも彼の酉松はこなたの答へなきに慍ほりてや駈出して恨なくもお幹にはたと往當りぬ『ヤゝ貴樣は阿魔ぢやアねへか、何しに來やアがッた』お幹は此の一語に恐れ戰きてまた言葉なし、匂子は靜かに優かなる笑を粧ひて慇懃に禮儀をなしつゝ『お前さんは慥か此のお幹の親父さん酉松さんでございませう』さすがに麗やかなる令孃のやうに慇懃なる詞を交されたる事なれば酉松もやゝ其の怒りを控へけん『へイ私は此のお幹の親の人來酉松ですが――』匂子は益す笑みを盛りて『お忘れなさいましたか私しは蠣殼町の香月の娘でございます、此節此の塩原へ湯治に參つて居ますので今日は散歩ながら此方へ參つて見ましたが唯今では此方へ御住居でございますか』柔よく剛を制すとやらん此の優美なる人の詞に酉松も太く恥ひて俄かに面の怒りを解き切りに頭をかきながら『オゝお孃樣でございましたか何うも阿魔めをお助け下すつた大恩を忘れてお見反申したとは些と申し上げ憎うございますが實に何で、御容子が何で、へ……御容子が悉皆お違ひなさいましたからへ

イ誠にその、ツイネお見反申しましたのでヘ……、御湯治で入ッしやいますか那須廼家へ、些と御休足と申したうハございますが此の通りの白屋でお掛けなすつては却つてお召が穢れますからネへ、ヘイ』匂子は思ひの外に優しき詞を聴きて却りて胸安からず覺えたりうは他し事ならず此の酉松もと無頼無慈悲の白ものなるに其の妻としも見ゆめるは現に我が父上の情を通はし千金に代給ひしものなるを欺きて通じ合ひけるが小春が父上の黄金を奪ひて夜に紛れ身を隱したるまゝ渠とゝもにこゝに世を忍べるを以て考ふれば此の者決して我が爲に利するものにはあらじ幵を慭ひに渠が甘き舌に乘せられてこゝに誠を語らんには如何なる巧みの罠にやかゝるへき所詮体よく言ひ拵へて此の處を逭るゝには及じと思ふ案じの安からねバなりけり。

然りけれども匂子は愛憐の心深き女性なり彼の少年が無辜の罪を被て苦しめらるゝを他所に見てやは歸らるべき再び心を取直して『イエ決してお搆ひ下さるなモウ晩いから早く歸りませう、お前さんが此方にお出の事を知て居たなら何かお土產でも持て參んでしたが今日ハ誠に手ぶらで困りますの』酉松は疾く去れかしと思ふ念のみ熾んなりきいかに人らしき人にあらぬ者とても我が娘には恩ある主なり況てや夫れが父の寵妾を欺きて多くの金を奪ひたる上にてハ尚は預られたる金のありしを奪ひて亡命したる事なれば今夫れが娘に合ふとなかくに後安からぬなりけり、匂子は左まで深くも考へざりけれども唯だ一言彼の少年に代りて謝さばやと思へばお幹の疾く還り給へと進むる色目をも故と他所に見つゝ『ア

ノ誠に訝しな事を申すやうでございますが只今此方のお息子さんでございますか唯今大層叱られて入ッしやいました樣ですが一体何うなすッた譯でございます』問れて答ぬも異な事なれば酉松もモジ〳〵しながら『ナニ彼の餓鬼やア一体手癖が惡うござへやして隨分嚴しく致しては置きやすがチョイ〳〵何うも抓み食ひをやッつけるのにやア困りやすよ、ヘイ、實は何でげす此の先の畑に柿が造ッてござへやすが一番大事な枝を折て山へ持て行て盜み食をしやしたから度性骨を敲き直して遣らうと思ひやして、ヘイ實は今の樣に折監したのでございます、誠に何うもお恥しい話しで――かく語るうちに先づ疑ひ惑へりしものはお幹にぞありける今まで我が身に兄ありとしも聞き及ばざりしに先に見たる少年の紛れもなき父が子にて在らんには我が爲には兄上にて在すらめ然るにても父うへは固より誰とて我が外に子てふものありと告るものはなかりしものを何とてかゝる怪しき巷には迷へるぞやなぞ思ひつゝ例の圓なる眼を睜りて父が方をのみ目戍詰めけるをかし『夫れでは彼れはお前さんの御總領ですか匂子が』問ひに意味ありしとも思はねば『何に彼れは少し仔細あつて貰ひました養子で德四郎といふ餓鬼ですが百姓が嫌ひで役にも立へね本ばかりひねくッて困りやすよ』去りげなき答へ匂子は一層落着きたる風情にて『爾うですか夫れはお可愛さうな事を致しましたアノ柿は……』此の一語にお幹はうち驚かれて恨めし氣に匂子を疾視たるも道理ぞかし『實は子供がねだつて困りますから人樣の物を惡い事とは知りながらツイ私しが折りましたのでございます、作荒は罪が重いと申しますが別に惡氣で致した譯でもございま

せんから何うぞ彼れをお拂ひなすッては下さいますまいか代は幾干ほどでも差上げますから』その罪を身に引受たる主の誠心れ幹は今まで睜りたる双眼にはら〳〵と涙を浮べて『其の盗人はこゝにあり』と名乘出まほしくに思ふものから斯ては主人の好意を空しうするに等しかるべし返す〳〵の主の慈悲いつの代かれ報ずべき然にても腹黒き我が父上の何と難題を言ひ出し給ふぞ是れもまた心懸りなりなぞ思ひ危めば内にはまた徳四郎のかくと洩れ聞きて驚くと一方ならずうち開けたる障子の間より母に覺られじと表の方を見やれば花の姿月の顏色桂の鬢にはやかに孰れの貴人か姫にか在すと思ふばかりの處女なればかゝる貴人のよも然る事はせられまじきぞ通りかゝりて我が折監に會ふを聽れてさも便なしと思されての事ならん祥隆寺の上人より聞きしには我が父母は誠しからぬ父母なりとぞ常々里に遣し置きつるとのぞと仰せられしハ僞りなるべし夫れは兎もあれ角もあれ養育の恩は生の恩にも等しかるべく尙且義理の深かるべきの偶ま身の明りを立んとして兩親に太く聲を立させ却りて其の非を人に聽れしこそ嘆はしけれ我れ盗みしを言ひ解ん歟、彼の姫もまた心在しての事なるべきに愁ひに名乘出ては彼方の誠を夏山の雪とし消なす事もやあらんと是れも同じく出も得やらぞ唯だ其の父が答へをのみ片時遲しと待ち詫なるべし。

酉松は唯だ茫然として少焉は匂子が面を目戍つめけるが直呆れに呆れたる容子にてさて言ひけるよう『御串戯を仰やッちやア困りますま高が柿の一枝か二枝誰しも途中では烏渡折て見るものですが彼奴が仕

たとばツかり思ひましたのでツイ癇癪に障りましてへ……なアに貴女が何ならモウ私は何にも申しやせん、何うも誠に飛でもねへ、其代り御孃樣へ何うか私のこゝに居ます事は誰にも內證にお願ひ申しやす、少々日蔭の身で些と世間へ知れてはバツの惡い事がごぜへやすから、へ……』酉松はひとつの島を認たり斯く恩を賣り身を全うせんと謀りけるは了得に此の道には慣れたるものなるべし。

匂子は酉松のいへる事を聽き了りていづれをも諾ないたるうへ携へたる鼻紙袋より幾干かの黃金を裹つみて酉松の辭ふをも聽かず與へけるが其の時酉松は匂子の携へたる夾囊の地合に鋭き眼を注ぎつゝ何をかいと驚きたる氣色なりしかども忽ちにして思ひ返しけん然までは騷ける色もなく只だ忝けなきよしを述べて右の黃金を受け收めたり。

日は彼方なる森の抵き梢にまで懸りて今まで延ける長き影は朦朧として影ともなく形ともなき頃としなりぬ匂子はいざや舍に急がんとてお幹を促し元來し途に立還るに酉松は其が後影を見送りてニタリと笑みを含みける時お春は其の後邊にまで來りて良人が背をうち敲き是れも同じく微笑みぬ、獨り德四郎のみは椽の柱に身を倚り延して慕しげに其の行く方を目戍り居けるが父母は更にも知らでありけり。

第七節　破蕾

『梅が香に窓わけそめしきのふけふ池は氷のとぢしまゝなる』とは故人岡野伊平の翁が春興なりけり軒の南枝は昨夜の東風に綻び初めて一枝二枝のみは春來ぬと見らるれども窓洩る風の肌寒うして遣り水

のゐとより凍るに漫行きも成り難く春としいへど尚は冬籠りのつれ〴〵に書齋に籠りて物の本などくり廣げ火桶を抱きて身を縮ましたる香月淺影はつく〴〵我が身の上を思ひみるに幸福といへると身を迎へて樂しからぬものとてもなけれどもまた心にかゝる雲來るにはあらじ愼みに愼みて身ひとつの外は誰にても知らさねどもお香を娶る前つ方側近う遣ひけるお歌といへるものゝねよげに見ゆるに便なくて假寐の夢も人の氣息に驚かされ詞はなくて手の觸るゝを娛しみけるに宿世の緣や深かりけんお雪は間もなく月の物のさゝわりも絕え面の色あやしく赤みて兎角に食撰みするに至りしかば淺影は深く心の尤めて若しやと思へば竊かに醫者に賂ひて診せしむるに紛るべうもなき懷妊なりといへりき、さては好なき事をしてけりと思ひてお雪に語るにお雪はいと心優しきものなりければ予君の御情を受るさへあるに御胤を舍したるこそ冥加なき賤しき身もて君が枕の塵を拂ひ參らせし事人の聞かば君の恥なり予には身の遑をたびてよ親元に罷りて人知れず產まゐらせて健に育てまゐらせん切て兒の名をなづけ一たびにても御手に抱き賜はらば夫れにて予が望みは足りぬと誠ごゝろ見えて申しければ淺影その志の勝れて健氣なるゐ且つ愧ぢ且つ惜みて夥多の黃金を與へつゝ人には病ひのために遑遣はすと披露しつゝ親元へ送りかへし自らも直ちにその家に就き身の恥をもうち忘れて云々のよし申し尚は兩親にも其の手當したりければ兩親もまた故なく承諾ぬ、しかりしより後は絕て音信もなく淺影もまた忘るゝとにはあらねども商業の忙はしさに取紛れて往きて見ざりしが彼方よりこそ却りて人傳にてめでたく女子を擧げまゐらせたり御

名を諜びてたびてよと申し來りけれ淺影は取あへず金子といへる名をえらび彼方に赴きて一たびは其子を見つれども女のかにかくと否むに其後は強ても往かずはては如何成り往きしか心にのみかゝりて其の沙汰とては聞えずなりにけり。

今かく侶もなく靜かに間を消しぬる折ふしには昔しの事など了得に思れぬにもあらじ、淺影はそゞろ思へばその愛娘のいかに育ちしかも見まほしくまた彼の女が果はいかにぞと思ひやりつゝ物恐ばしき折からに茶立口靜かに開きておそる〳〵も內を伺ふものありけり淺影は來る人の氣意の心の羞かしくて忽ちに起なほりつゝ『其處へ來たのハ誰たヱ？』『ヘイ御免下さいまし徳四郎でござります』『アゝ徳か、成程今日は日曜だナ能く來たマア這入な、此間は試驗が大層能く出來たさうだ何にしても感心に能く勉强する、夫れでこそ此方の目鏡にも違ず大きに予も鼻が高いといふものだ、サア〳〵這入な〳〵梅もそろ〳〵咲さうたがまだ寒いので閉口だ壯年のうちハ血氣燃んなものだからモウ郊遊を試みたかネ』徳四郎は斯く懇ろなる語を交へられけるに心うれしくて幾たびか額きながらやをら室のうちにぞ入りぬる『如何でございますお寒さのお障りも別にございませんかお孃様は近頃お丈夫で何より御安心でございます』といふを淺影はうち消しつゝ『イヤ其のお孃樣を廢して貰はう句子といふ名があるから次から名を呼んで貰ひたいものだ實は……』其の語は尙は引續きて出んとするに徳四郎は直に詞を投じぬ『何う致しまして彼の方は私しの爲には再生の大恩人でございます彼の方のお救ひを受けませんでしたら予

しは養父母の爲に……』とまでは言ひ來りしが了得に五年六年がほど養育の恩を受けしに假にも親ぞと思ひてければ其の語は澁り苦しみけるも道理なり、されども忽ち思ひかへして熱心なる語氣を勵しつゝ『所詮予しは人間社會の交はりも出來ぬものと成たに相違ございません夫れを思ひますれば彼の方は予しの爲の救世主です』淺影はつく〴〵と其の言語に耳かたむけて『人は爾う恩を知りたいもの恥を言はねば解らんがお前が假の母となつたお春よ彼れハ元芳町の藝妓で予が圍妾にしたもの又假の父親酉松は匂子の爲に娘を救はれ予から資本を惠んでやツたもの夫れが互ひに密通して逃た上に尚ほ匂子が鹽原に居るのを知てお前の身體を引取て世話をして呉ろと賴んだ時詭併し娘は彼の通りな心ゆゑお前に見所があると言て引取た處折角のかゝり息子を上げた事だから親子の緣切と思つて百圓貰ひたいとの無心彼れからもお前の事を言て段々と賴んで遣したから人を救ふは慈悲の隨一情は人の爲ならずと思つて有る金だから百圓は遣たもの丶後で素性を聞た時は隨分腹も立たが娘の手前が羞しさにぢッと辛抱して居たのサ』德四郎は感泣の涙つゝみも得やらず『モウ其の御高恩は決して忘却致しません お孃樣は勿論の事此の御一家の爲めならバ一命も惜いとは存じません』とて再拜しけるが餘りに急に拜したる故にや懷にせる夾囊のバタリと前に落ちたるを淺影は目敏く見やりて『德四郎其の夾囊をちよいと見せな』固より何の心も着かねむ其のまゝにさし出して『御覽に入れるほどの品ではございませんが是ばかりは養父母が呉ましたので紀念と思つて大事に持て居りますのでございます』淺影はつく〴〵と見て膽うち消すばか

りに愕かれたり、道理なるかな此の夾嚢は正しく曩に契りを籠めて女子を產せたる女の別れに臨み金三百圓入れたるまゝ紀念にとて與へたるものなりしを先つ年匂子を戀てかにかくと言ひ寄りし男の持ちけるを見て竊かに其のうちを開き見ればうちには匂子が艶書の返事ありてこれを見るにいかにして知り得たりけん其の玉章のうちには『君が情はいとけなき身にも覺えはべるさても知らずば今より行末をも契りけんに知りては義理の柵のせき來る淚をいかにせん豫てより予に一人の姉上おはすよしほのかに承はり及びはべりて一目にても逢ひまゐらせんとねがひ侍りしに君の情の切なるまゝ戀には疎くはべれども若しふた親の後の世を許し給はんかとて罪深き事ながらひそかに御身の上を探らせはべりしに思ひきや我が慕ひまいらする姉上は君が二世を堅めたる內室にて在しましけり君は正しく姉上の聟がね予が兄上にて在するものをいかで不義の契りやは誓ふべき戀はこれにて思ひ斷ち給へ然ほど予を覺し給はんには姉上に他所ながら逢してたびね』云々と書つけたる末に『鶯の谷の戸いづる聲なくば』云々の古歌をぞかいつけにし、さてわ此の主こそ戀ふる娘が良人よと思へば慕しさは慕しけれど我れその父ぞかしとは娘が手前にいひもかねて竊かに娘へ宛たる手紙かい認め外に金五十圓を入れて人知れず元に藏め置きけるものを今またこゝに手に觸るゝといかにも奇異の思ひなるべし。

かくて二年がほどは其音信だもなかりけるに不圖匂子はうつら病ひに侵されて人に會ふも懶しといひつつ柳島の別業に世を避けゝりこれ其の事の基を知るによしなかりしがお幹は病床の下よりかゝるもの出

きとて窃に主人に示せしものを見るに寔に戀に紊る丶人ごゝろ程おそろしきものはあらじ彼男匂子を戀へるの餘りにや現に我が妻にして匂子が爲には姉なりける金子を人知れず殺害し匂子に義理を破らして我に從はせんとかき口説けるも丶の如し其の文中に先つ年の御玉章は故郷に歸る途次ひそかにひき裂きて妻には見せじと只だ和歌をのみ留め置き御身が父上より賜はりたる手紙も火中し恩賜の金のみは員數を缺て蓄へ來にし大田原にて何者にか掏取られぬるよしまでかい認めき、さては匂子ハ我が爲に姉の非業に死せしを苦に病み倶に冥府に赴みて我か身の明りを立んとの存念なるかと思へば其の者の心いと憎くあらゆる新聞を披き見るに福島なる新聞に人殺しの記事ありて程經たる官報に死刑執行の記事を見たりき箇程に因緣ある夾囊の今も無聊なるまに／＼契りし人の上亡き娘が上を思ひ出したる折しも我が手に觸る丶こそ不思議なれと思へば其の來歷を尋ぬるに德四郎も過る年の春我れ酒買に赴きし程に父の歸り來まして常にも見ぬ大金の勘定をし給ひ其の傍らに一ひらの紙ありて美くしき女文字もて『春來るとを誰かしらまし』てふ歌ありし事ありしが夫より此の夾囊の出入るとあるを見るといへり、是にて先づ西松が博勞を表として内に盜を行ひし事あるを知るを得たり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

『匂、汝は何うあつても德四郎を婿にする心か、德四郎の身分ハいか程賤しい者でも厭はぬといふの

だネ』父が問ひには了得にも答へ得ず然れども其の心の鞏固なるは羞かしき色にも著けき、淺影は倚を詞を和らげて『徳四郎の事を斷念したが宜からう、彼は新平民の兒だよ』匂子ハ始めて凜然として形を正しうしけり今ハ羞かしき色をも忘れて『夫れも疾うから承知して居ります縱令元ハ何であらうとも彼の艱難を潛つて學問した志しが……』口籠りたるは羞たるなり父は斷乎として言ひ放ちぬ『汝の志には感心した豫々貧困な者の子弟を扶助して其中から人物を選んだのは殊勝だが併し徳四郎は汝の見た通り義理を重んじる者何うあつても是ればかりは承知しない、既に此事を前知して徳四郎はお幹と夫婦の契約をしたぞよ』『エヽお幹と？徳四郎が契約？』『今夜は更めて婚禮をする筈、夫でも汝は思ひ斷れぬか』匂子は伏したるまゝに詞なし、姑くして面を擡げ『阿父樣御免遊しませ私しは弗りと思ひ斷りました、お幹も緣が定つて安心です徳四郎も身が固まツて安心です、私しは此の夫婦を行末長く扶助して遣はしませう親實に世話をして遣はします』襖を隔し彼方には徳四郎もお幹も共に感涙の身を浮べるをも知らず聲する方に合掌して憶はず漏るゝ倶音の謝恩『モウ何にも申しませんわヽわヽわ……難有うございます。

大尾

短篇小說　明治文庫第十三編　終

明治廿六年八月三十日内務省許可
明治廿七年六月二十日印刷發行

版權所有

明治文庫定價	
一册(二百頁)	金拾五錢
六册前金	八拾五錢
十二册前金	壹圓六拾錢
廿四册前金	三圓拾錢
郵税一册六錢	

編輯兼發行者　大橋新太郎
日本橋區本町三丁目八番地

印刷者　曲田成
京橋區築地二丁目十七番地

印刷所　株式會社東京築地活版製造所
仝所

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

桃川燕林君演述　松本楓湖先生畫

東洋義民　佐倉宗五郎

全一册洋裝大判二百七十頁密畫入
正價金二十五錢　郵便税六錢

一匹夫のみ、然るに死して百世に廟食し、その名海の内外に轟くものは、只その一片の義膽深く世道を照して人の心肝に銘すればなり、貪官汚吏虐を縦にし、下民の寃枉結んで解けず、流離困頓旦に夕を量らず、千訴聽かれず、百願容れられず、今はた如何せむ、嗚呼宗五氏なくば當年佐倉の民の膏血は悉く汚吏に汲收せられて止まんのみ、宗吾の俠骨、義膽、銕腸、讀み來らは千歳猶新なるを見るべし

短篇小說　明治文庫

毎月一回發兌洋裝美本
毎編彩色密畫挿入
正價一册（大判二百頁）拾五錢　十二册前金一圓六拾錢○郵稅六錢ヅヽ

（本書既刊目次）

◉第壹編目次　巖谷漣山人著　武内桂舟畫

辻占飴。秋の蝶。けなげさ。黑衣魔。白面鬼。梢上月。山時鳥。京自慢。花の旅。

◉第貳編目次　小林永興密畫

雪折竹　川上眉山著　福の神　村井弦齋著
佛魔一紙　廣津柳浪著　姥櫻　石橋思案著
薄命の鈴子　嵯峨の屋著　驚く鷗　江見水陰著

◉第參編目次　江見水陰著　武内桂舟畫

劍客。初嵐。疳癖太守。骨武者。畫師。斷絃。信天翁。初楓。故家水。漁郎。はかれ霜。畫師の妻。一夜の宿。雲烟過眼。

◉第四編目次　小林永興密畫

緣外緣　幸田露伴著　媒介人　巖谷漣著

新學士　多田漁山著
風流狂言記　川上眉山著
隅田川の秋　田山花袋著
庭の教子　嵯峨の屋著
都土産　渡部乙羽著

◉第五編目次　三島蕉窓密畫

山田美妙齋著

みゝずはれ。曙の春。月花の見立。紅墻記。賴朝の墓。雪折れ竹。大龍王。田舍聖者。古切手。くされ緣。ゐなか娘。母のなさけ。春の花鳥。鴉の道行。戸隱山紀行。都門雜興。

◉第六編目次　武内桂舟密畫

忠義お安　福地櫻痴居士著

當世二人女婿　依田學海居士著

◉第七編目次　三島蕉窓密畫

中村花瘦著

俄長者。狂蝴蝶。合歡花。俠魂。片時雨。破鏡。

◉第八編目次　富岡永洗密畫

村上義光　山田美妙著
若水　巖谷漣著
國民大帝　嵯峨の屋著
夜行滊車　松華庵著
滑稽二人男　西森骨皮著
廿日月　田山花袋著
江戸舞蹈會　眠花道人著
靑春夢　原抱一庵著

◉第九編目次　寺崎廣業密畫

渡部乙羽著

浮田一蕙。捨扇。邪正一如。戀の今樣。京屋娘。こぼれ

梅。神田七不思議。新奥の細道。玉川河童泳記。故郷の錦繪。吉野初瀬花摺衣

◉第十編目次　富岡永洗密畫

僞稱紳士　福地櫻痴居士著

評判一人娘　巖谷漣山人著

母心（嵯峨の屋著）　鏡花緣（松居十八公譯）

銃獵（松華庵著）　薄暮山（田山花袋著）

◉第十一編目次

遲塚麗水著　寺崎廣業密畫

月雪花物語。懸想文賣。餓鬼。心字池。寶刀。畫師。階樂園梅。啼美人。新佐世姫

◉第十二編目次

思案外史著　武內桂舟密畫

斷腸花。片破月。禿木魚。青大將。美人車。可愛い子。わが戀。羽拔鳥

◉第十三編目次　水野年方畫

吉野拾遺名歌譽　依田百川著

末開紅（南翠外史著）　世の中（嵯峨の屋著）

◉第十四編目次

宇田川文海著　水野年方密畫

爪の痕。和氣清麿。藤袴。但馬行季。（滑稽演說）犢鼻褌。胸算用。竹生島。萬金丹。（本院）信夫摺。葉末の露。

校訂

風來山人傑作集

全一冊背皮
上製頗美本
正價五拾錢
郵税拾六錢

江戸文學社會の奇傑風來山人平賀鳩溪の傑著を集む、小説あり院曲あり風世罵俗の快文あり、滑稽諷刺奇矯激勵の偉觀實に他にその匹を見ず、乃ち載する所の目次は左の如し

目次

●風來六々部集●根なし草●風流志道軒傳●そしり草●金のなる木●神靈矢口渡●前大平記古跡鑑●弓勢智勇湊●嫩寨葉相生源氏●二世風來の田舍芝居●驪山比翼塚●附平賀鳩溪實記

校訂

滑稽名作集

全二冊背皮
上製頗美本
正價五十錢
一冊
郵税拾六錢

鬼神をも抱腹せしめ木石をも動るぎ出させんは此の滑稽集にぞある、玆に上編の目録を擧ぐれは

目次

開卷百笑(烏亭焉馬)、花暦八笑人(瀧亭鯉丈)、舊觀帖(感和亭鬼武)、滑稽二日醉(十返舍一九)、忠臣藏偏痴氣論(式亭三馬)、滑稽和合人(鯉丈)、魂膽夢輔譚(一筆庵)、六あみだ詣(一九)、傾城買二筋道(谷峨)

以上九部六十三卷

校訂

西鶴全集

全二冊背皮
上製頗美本
一冊五拾錢
郵税拾六錢

井原西鶴は我邦小説家の元祖なり古くは榮花源氏等の物語あれども着眼上流社會を觀察するに止りて其下流の實相を描出せしものなし天和元祿の時始めて井原西鶴出でゝ靈妙の着想と艶麗の筆力とを以て世間の裏面に潜む惡魔外道を摘發し怒罵し鞭韃して餘す所あらず其一代に述作する著書二十餘卷悉く諷世嘲俗の文字ならざるはなく其文の至妙なると評するに語無し加之本書は元祿文學に精通なる尾崎紅葉渡部乙羽兩氏の校訂に成り名手の繪畫數十個を挿みたれば錦上に錦を添ふの美觀あらむ乃ち上卷載する所の「一代男。二代男。一代女。五人女。二十不孝。大鑑。武道傳來記。永代藏』の八部となし下卷には『武家義理物語。本朝櫻蔭比事。織留。文反古。大下馬。俗つれ〴〵。胸算用。三代男。新可笑記。一目玉鉾。置土産と梅園堂作の元祿太平記』等を載す今や全部を完成す大方の君子一本を机右に置かば坐乍らにして三百年前の文學を味ひ元祿時代の風俗を仔細に察知するを得べし希くは愛讀を賜へ

校訂

三馬傑作集

全一册背皮
上製頗美本
正價五拾錢
郵稅拾六錢

輕妙の筆を以て、敏活の意匠を寫すものは、式亭三馬が、特有の技倆なり浮世風呂、浮世床が、如何に江戸の社會を、活描せる辰巳婦言、船頭深夜が、如何に深川の花柳を、摸寫せる百馬鹿、四十八癖が、如何に人情の微細を曲盡せるかを見よ

校訂

京傳傑作集

全一册背皮
上製頗美本
正價五拾錢
郵稅拾六錢

山東庵京傳は我邦小說家中の泰斗なり實に一の滑稽洒落を開きて世を嘲り、又所謂實錄流の一派を開き、門下に有名なる曲亭馬琴を出せり、其傑作の多き中に就て、昔語稻妻表紙、本朝粹菩提、双蝶記、忠臣水滸傳、優曇華物語等は彼の創躰に係るものなり、其他京傳予誌、白川夜船、通言總籬、娼妓絹篩、仕懸文庫、夜半の茶漬等は彼の妙筆を揮へり

校訂

種彥傑作集

全一册背皮
上製頗美本
正價五拾錢
郵稅拾六錢

幽婉の筆を以て偉麗の結構を描寫し、京傳馬琴以外別に一機軸を出せるは柳亭種彥氏其人也、惜らくは其著書今傳はる者多らず、依て廣搜博羅淺間ヶ嶽面影草紙。逢州執着譚。正本製縹手摺昔木偶。觀音守護寳劍。勢田橋龍女本地。阿波之鳴門』との部を集めて世に公にす、或は讀本あり、或は腳本院曲に擬せるあり、之を繙かば一種異様の光彩眼を射來るを見るべし

校訂

梅曆春告鳥

全一册背皮
上製頗美本
正價五拾錢
郵稅拾六錢

爲永春水の小說は天然の美人の如し、敢て意を用ゐて修飾せざるも、情致纒綿、愛嬌滴れんとするものなればなり、その人を動かす處はその天眞爛熳の處にあるなり、梅曆。春告鳥は、爲永流即ち人情本中の傑出たり、これによりて彼は馬琴、種彥、一九、三馬等と併稱せらるゝを得るなり、梅曆は惠の花、梅曆、辰巳園、英對暖語、梅見舟以上は五種の總稱にして春告鳥は春告鳥、籬の梅、春の若草三種の總稱なり、本編は此八種を集めて、例の美麗鮮明なる印刷、堅牢精良たる製本を以て發刊せられたり。

圖書出版
東京博文館

明治文庫

短篇小説

博文館發行

明治文庫第拾四編

宇田川文海著

爪の痕

萬金丹

葉末露

滑稽演劇 犢鼻褌

院本 信夫摺

胸算用

藤袴

柳生嶋

和氣清麿

LIBRARY U. OF I. URBANA-CHAMPAIGN

[stamp]

短篇小說 明治文庫第十四編目次

爪の痕……一
葉末の露……三〇
院本 信夫摺……四〇
萬金丹……五〇
竹生島……六六
胸算用……七二
滑稽演劇 犢鼻褌……九六
藤袴……一三一
和氣清麿……一五七

以上

短篇小説　明治文庫第十四編

●爪の痕

（其一）

宇田川文海著

過ぎし安政年間の事かとよ、江戸本所松井町に、定家様にて水木歌扇とした〻めし、表札打たる踏舞の師匠あり、年齢猶二十ばかりにて、容貌美くしければ、女兒の弟子のみにはあらで、アハ好くばと張りに來る經師屋連、轉んだら取て喰うの狼連など名のつく、怪しき男弟子も少なからず、殊に此邊は、近き頃までは岡場所と稱へたる、花柳の巷の一つなりしを、時の老中水野越中守が御趣意とか稱して、彼の有名なる奢侈禁制の令を布きたる時、取拂ひとなりし土地なれば、今も猶其名殘とて、近き傍に料亭もあり、歌妓さへもあるなれば、歌扇も時々知る人に招かれて、酒席の興を助くる事あれども、浮きたる技藝もて世渡る者に似ず、極めて物堅き生得なれば、只眞面目に藝を奏づるのみ、更に打解けたる樣子なく、偶々猥なることなど云掛るものあれば、袖うち拂ふて歸り去るにぞ、彼女は訝う驕傲り、嫌に偏屈なりなど、嘲りそしるもの多きその中に、イヤ〱然でない、言語擧動の慇懃な加減、衣裳好みの

高尚な工合、夫れ是から察すれば、藝が身を助ける程の不仕合せで、今こそ水木の流れを汲み、舞踊の師匠と成下れど、以前は武藝出に違ひない、如彼いふ女を手に入れるのが、眞の愛情の契といふもの、堅いもの程噛しめてから美味があると、妙な所に道理を附けて、物識り顔に保庇ふ者あるも可笑さが是ぞ歌扇の爲の豫言なりしやも知れず。

歌扇平素天滿宮を深く信仰し、月の二十五日には雨風の厭もなく、必ず龜井戸の靈廟へ參詣せり、筑紫の太宰府は姑く置き、京都の北野、大坂の天滿、江戸の龜井戸の三廟は、三都の靈社と仰ぎまつりて、貴賤の尊信尤厚く、常に參詣の老若群集せるが、中にも龜井戸は、社內に名を得し藤棚あり、又程近き所に臥龍の梅莊ありて、人の目を喜ばすもの多き上に、柳島の妙見、橫川の萩寺、木下川の藥師など、名所舊跡に乏しからねば、春秋の野遊びをかねて、笻を曳き瓢を携ふ、騷人雅客も尠からず、常に人足の絶間なけれど、木葉地に落ち寒風野に滿る、所謂霜枯時の氣候とありては、さすが繁昌の靈廟も、やや寂寥の色を催はし、池の緋鯉は、稀に社前に跪きて、打つ柏手の音聞つけて、吾を呼ぶにやと身を浮べて見れど、燒麩與ふる兒女もなければ、日光逐ふて脊を曝す龜に、その疎忽を笑はれて、只さへ赤き顔に色揚げして、ソコ／＼に水底に沈み、又唫喁の泡さへ立てず、啄木鳥の木を突く響き、百舌の樹傳ふ羽風に散らされて、霜に黄みし病葉の、芝生の上に落んとして、又冷き風に吹れて舞踊るなど、哀れに物寂たる境內の冬景色。

元來遊山ならぬ信心參りも、此境內の冬枯の景色、平素高尙なる氣象に適ひて、さすが面白からぬにあらねば、歌扇は小女を伴に連て、彼方此方と眺望つゝ、即て菅公の祠廟に詣で、何事を願ひまつるにやあらん、良久しく祈念を凝し、サア歸りませうと、小女を促して身を起すその時、傍の物蔭より手巾にて面を包みし、一個の男が衝と現れ、歌扇の身邊へ寄るよと見る間に、水髮島田の後に挿したる、銀の平打の釵を手早くぬき取り、力にまかせて小女を突退けて裏門の方へと走去れば、小女は不意を打れてキャッと一聲、其場にドッサリ尻餅つき、歌扇は兩手に頭をおさへて、偸兒……と高く叫びたれども、早後の祭にてその甲斐なく、曲者ハ遙か彼方へ逃去りけり。

折から橫川の方より、五紋つきたる黑の羽織を着し、荒縞の袴を穿ちたる、二十四五の一個の武士、境內さして來かゝりしが、今小女がキャッと叫び、歌扇が偸兒と喚びたる聲を聞附けて、必定此奴こそ曲者なれと、大手を廣げて捕へんとす、後へ戻れば神官や茶店の者におさへらるゝ恐怖あり、前に進めば左も強げなる武士の、仁王立に突立ちたれば、曲者ハ進退維に谷りて、暫しの間たゆたひしが、身を捨てこそ浮ぶ瀨もあれと、一か撥かの度胸をや定めけん、拔取來りし銀簪を、武士目がけて早速の手裏劍、ハッシとばかり投げつけて、これを避んとする身の隙を伺ひ、袂の下をツと搔潜りて、後をも見ずして逃去りける、迹に武士は受留めし銀簪を取直し、逃行く賊を逐んともせず、小首傾け眺めゐたり、此る所へ水木歌扇は、小女とも〴〵歩みよりて、慇懃に會釋なし、

『麁末な品ではございますが、母の譲りのその銀簪、すでに奪去られます所をおかげさまで、取止めまして、誠に難有う存知ます』

と云ふその歌扇の様子を、彼の武士はつくぐ〲見やり、

『甚だ卒爾なお尋ねだが、此銀簪を母御の譲りと云はるゝからは、此紋所はお身の家の定紋であるかな』

異なる問に歌扇も亦、心に不審を抱きつゝ、今更に又氣を留めて、その武士の容子を能く見れば、不思議やその着たる羽織の紋所は、色紙を三つ重ねたる、吾家の定紋と同じけれバ、歌扇ハ何か思ひ當る事のある樣子にて、

『失禮ではございますが、貴君のおめしあそばした、お羽織の御紋所は、此銀簪につけましたものと同樣で、あまり世間に見かけませぬもの、その上お言葉の御樣子を伺へますれば、ドウやら秋田樣の御家中かと存知られますが、若や石田金十郎と申すものを、御承知ではございませんか』

武士は少しく言葉を早め、

『仔細あつて先年退身いたされたが、その石田氏なれば、拙者の一家シテ、御身は石田氏とは、何か縁故のあるお方か』

歌扇はさもおもはゆめげに、

『お恥かしい事でございますが、妾は金十郎の娘の歌でございます』
と赤らめし面を背けしその脊には、白き菅糸もて小さく、重ね色紙の紋所を縫せてありけり。

（其二）

『ヤア〳〵、夫にうたせたまふは、下谷の御大將と見奉る、まさ無うも敵に背を見せたまふかイデ引返さずとも其處におん待ちあれ、此く申す某は酒の黨の馬鹿頭、飲拔の次郎萬事酩酊、見參せん……と、扇を揚げてさしまねげば』
と聲に節をつけて饒舌り、妙な身振をしつゝ走來る、町人風の一個の男、何れかの藩士の、微行と思はるゝ兩個の武士が、此聲を聞附けて、チヨツと立止つて後を振向き、
甲『ヤア、誰かと思へば本金か、相變らず元氣ぢやな』
金助『這は御大將の御諚には候へども、此くいふ某よりも、左いふ御大將こそ、百倍增したる御元氣、天正年間の英雄も跣足、イヤ深草の少將も屎を喰へ、此寒さをもお厭ひなく、千鳥啼くなる川風に、顏も手足も吹き晒されて、妹許さしてお通ひとは、近來以て恐縮感心、何と丹田樣左樣ではござりませんか』
と云へば一個は苦笑ひしつゝ、
丹田『サア、お頭にはお目的がある故、お非番ごとに下谷から、本所までのお通ひも、サマデ御苦勞にも

なるまいが、在下はホンの附合せ、鱠のケンか刺肉のツマ、是がほんとうにツマラン役廻りと申すもの』

金助『など丶愚痴なことを仰せられな、御本社にお渡りがあれば、末社にもソレ〴〵附祭りがなくては叶はぬ道理、が、今に御覧じませ、可愛けりやこそ丹田から通てなことになりますのは、浄玻璃の鏡に懸て見る如しで、若もさうなつた曉ゑは、貴所は豊後節の源太もどきで、色にはなまじ連は邪魔と、獨り先驅功名をなさるし、黑澤の御大將にはいふまでもなく、もう貴樣に用はないと見放され、角秖冥加につきるのは、此くいふ金助タンダ一人、ア丶夫を想へば賴み少ない人心、今の内にシッかりと、セメテ御馳走にでも成ておかずば、ヨモお命はつゞきますまい、イヨ高島屋……、イヤ是はチト嵌所が不巧かつた……エ、もし、黑澤樣、何處ぞで淡泊と、底を入れるといふやうなことに……コーツと、柏木ではチトおつくう過ぎるし、さしづめ常盤といふ所ですが、左なければグッと沽券を下げて坊主の軍鷄で溫まるなぞも、隨分洒落もんで……』

黑澤『コレ、〳〵、もう少し離れて口を利てくれ、唾がはねてならん、先刻から默ッて聞いてゐれば、トウ〳〵此長い河岸端を、饒舌りづめに歩るいてしまつたソレに何を云ひだしても、例も揚句のはてになると、酒に古事つけて仕舞のが、金公汝の癖だが、宜く飮みたがる男だぜ』

丹田『大かた母が、大蛇を飮むと夢みて、ソシテ孕んだものと、見ゐる』

黒澤『道理で醉ひ倒れてからの鼾の聲は、ドウしても人間とは思はれぬて、ハヽヽヽ』
金助『イヤ、もう、人間でも大蛇でも、飲さへすればソレで結搆、早々御場所をおん定め候へ』
丹田ハ黒澤の方に向いて、
丹田『拙者も金助の肩を持つて、下卑藏を極めるではござらんが、猶彼のが稽古を仕舞ふ時刻にはすこし早いやうでもあり、且はかねて金助へ御申附けになつた次第もござれば、その樣子をもお尋ねかたぐ\、暫時御休息なされては如何でござる』
黒澤はしきりに點頭きて、
黒澤『身共も左樣に存ずるが、如何に微行とはいひ、マサカ坊主へも立寄れまい、いろはの瀧蕎麥といふ所ぢやが、此寒天に瀧蕎麥と來ては、名を聞いたばかりでもゾッとするから、ヂヤア金助の申すに任せて、少し贅澤ぢやが常盤といたさう。時に金助、例の一條はどんな都合ぢやな』
と問はれて金助頭を搔き、
金助『エヽ、あれは、その……あれはそのこれわいさ、宜いやさといふやうな譯柄で……委細の事は九州相良、イヤ、落着くさきでゆる\／\申上ませう』
とさすが多辯家が沸切らぬ、ドギマギした挨拶をするに、黒澤は少し焦れ氣味の樣子なれども、往來を憚りて口をつぐみ、其後は何事も云はず。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

常盤亭の奥座敷の、間隔の紙障を閉切りて、酌取の女さへも遠ざけて、黒澤を上座に据え、丹田本金の二人の末社、左右をとりまいて三鼎足　會席の膳を小楯にとり、額を鳩めて密談閑話、目の寄る所へ球とやら、此隣座敷にも客ありて、是も密談など凝すにや、いとしめやかに話しおりしが、調子に乗りてか漸々に、いつしか聲の高まり來りて、果は此へも漏聞ひぬ、黒澤等の三人は、此話の內の、如何なる言葉の心にとまりけん、さながら言合せしもの丶如く、齊しく耳を聳て丶、隣座敷の方に身を寄せけり。

彼方には此くとも知らねば、傳法なる男の聲にて、

『もし若旦那、世間に彼ばかり女ぢやアごせへやせん、何のつけ面白くもねへ、小可ア腹が立ツて溜らねへのです……いつの間にか、チヤンとあるんですもの……』

といふに答へて、温厚しき調子にて、

『サア、余もさう聞いたゞけ、猶……、一体何者だらう、その情夫といふのは……』

『武士です、屎いめへ〱しい』

『フーン、お旗本か、御家人か、但しは何藩かの家來衆でも……』

『小笠原の三蓋菱の出來そくなつたやうな、紋をつけた羽織を着やアがつた、身すぼらしい青侍で、何だか言葉が少し鼻にかゝつて、確か秋田の家來だとか……』

此問答に此方の三個は、想はず顔を見合せしが、此時隣室に客あるを知りたるか、彼方の問答は急に低聲になりて、其後は更に聞取れざりけり。

（其三）

松井町なる歌扇の家の、格子戸をガラリと開けて、

『阿母ア大きゐ御無沙汰をいたしやした』

と聲をかけつゝ入來るは、鳶口本田とかいふ髷のはけ先を、少し左の方へ曲けて、結城木綿の藍微塵の布子に、黑八の長襟をかけた、亂竪縞の絆纒を引掛けし、町内の鳶の者梅吉といふ小意氣な男、ソレと見るより歌扇の母のお種は、チヨイと顔を皺めしが、急に笑ひを含みて、

たれ『ヲヤ、頭、お珍らしい、近頃は強いお見限りですねへ』

梅吉『ヘン、其方より此方が見かぎられたやつさ』

と口の内にて呟きながら、内へ這入て長火鉢の向ふへ、片膝を立てたるまゝ座り、銀の小豆ぐさりへ、象牙の根附をつけたる、黑綫の提烟草入より、銀銅の烟管を抜出して、梅吉は一喫吸ひ、

梅吉『阿母ア、師匠は』

と問ひながら奥の方をチョイと見返りしは、若や座敷にでも居るかとの意づかひなるべし、お種は氣の毒さうに、

たね『折角、頭が、たまさか、來てくだすッたのに、彼女がをりませんで……今日はアノ、お寺參りにまゐりました、お晝過から』

梅吉『寺參りに出掛たと……獨歩で』

たね『ハア……イヽエ、親類のものと一所に』

梅吉『寺は何處だへ』

たね『下谷の龍泉寺町です』

梅吉『葬禮は何時だ』

たね『頭、いやですよ、縁起でもない』

梅吉『アハヽヽヽ此いつは惡いことを云ッた、洒落だ、冗談だ、氣に觸つたら勘忍してくんねへ、時に師匠が留守なら、強氣と話が仕好い、テナア、外でもねへ、菱屋の若旦那の一件よ、過日來から、度々お前にも話す通り、明烏の文句ではねへが、どうした縁か彼人に、逢ふた初手から可愛さの、身にしみ〴〵と惚ぬいてといふ、素的な逆上かたで……阿母の顔までか、師匠に見ゑて、寝ても寤ても忘れられ〳〵ねへから、ドウか余に取持てくれと、頼まれて見れば一歩も、迹へ引かねへのが

江戸兒の氣象、その上年中世話になつてゐる、大事な旦那場の若旦那の事だから、ハテ宜うござへやす、小可が一番ウンと立切つて、キッと消口を取りやせうと、受合たのが此方の因果、先は世間見ず懷中育ち、少しの遠慮會釋もなく、顏を見るたびに、猶未か、まだかと、耳の痛くなるほど嚴しい催促、此方の火の手は段々強くなるのに、お前の方は煙が遲く、何日も同じやうな漠然した挨拶、一昨日おいでとゲヂ〴〵同樣、イヤ、マサカ夫程でもねへけれども、蛇の生殺しで逐拂はれる、その氣の利かなさ加減はねへけれども、戀はかうしたものだらうと、疳癪の虫をぐつと殺して、あはびの貝の片便り、おれつたいではないかいなアと、内の師匠の十八番、康秀氣どりで待てゐりやア、宜い氣に成て附上り、あくまで踏附にする了簡か知らねへが、さう安ッぽく扱れちやア、余は承知しても、兩腕の登龍降龍が承知しねへのだと、此うマア云ひてへ所だが、マサカ女を相手に出入りも出來ねへから、そんな野暮は取てのけとして、今日は若旦那へ土產になるやうな、キッパリとした挨拶がして貰ひてへ』

たれ『頭、お前さんのお話は、能く分つてゐます……が、御存知の通りの彼女の氣質、此上もない强情者で、妾のいふ事なんぞは、容易に聞く風ぢやありませんので、ツイ〳〵お返辭が』

梅吉『そこを一番親の威光で以て、何とかやつゝけてくんねへな』

たれ『ソレは仰しやる迄もなく、妾が腹を痛めた子なら、どんな呵責折檻をしてなりと、若旦那の仰せ

に従れせますが、何をいふにも生さぬ中の遠慮……ソレに妾の口から此う云ひますのは、何だが可笑しいやうですが、如彼様に見えても、猶其方にかけては、カラ未通ですから……』

梅吉『ナニ、未通……フン、未通よりは間夫が聞いて呆られア、畢竟此方がお坊さんだから、虫の着てゐるのを承知しながら、愚痴未練に斷念められねへのだ、考へて見りやア、随分好い鳥だア』

たれ『何んですと、頭……』

梅吉『ナニサ、菱伊の若旦那なら、旦那ゞ取ても不足はあるめへといふことよ、是までだつて、此處の家の爲に、幾許成てゐるか知れねへ上に、一件をさへ諾と云やア、仕度金が五十兩に、月ゞに五兩づゝの手當たア、大してものだ、何處の青侍か知れねへが、羊羮色の羽織に垢の染みた袴、アノ見すぼらしい風体ぢや、一年に五兩の給金が精一盃だア』

と烟管を烟管袋にさしながらの獨語、おたねは火鉢に炭をつぎ、鐵瓶にちよいと觸つて見て、

たれ『青侍とは誰のことです』

と言ふ言語の中に、どうやら思案の決せしもの丶如し、梅吉ハツーイと立上がり、

梅吉『ナニ、今來がけに途中で逢つた奴よ』

と輕く答へて、

梅吉『ソレよりか、師匠が歸つたら、能く相談して、色好い返辭を聞してくんねへ……コリヤ大きにれ

やかましう』

たれ『マア、頭、好いでハございませんか、もう少しハ遊びなさいな、今お茶を入れますから』

梅吉『今日は向ふ河岸の龜の尾で、組合の寄合があるから、緩くりしてはゐられねへ、又出直して來やせう』

と門口へポーイと出るトタンに、向ふより來る本屋の金助、

金助『ヤア、是は、梅頭、相變らず御精が出ますね』

梅吉『ヲヽ金助さん、久しく逢はねへネ』

金助『師匠は、内かね』

梅吉『ウンにや、寺參りだとよ』

（其四）

裏家ながらも造作廻りの行屆きて、疊建具も小綺麗なるに、柱、敷居、板の間などの、テラ〳〵と好く光りて、さながら鏡にも換つべく、家の内を見廻しても塵とてハ、藥にしたくも見當らねハ、家主が極めて潔癖にて、朝夕拭き掃除に念の入りしを知る、此處は何人の住居か知らねども、此家の二階座敷に、猶年若き男と女の、いと睦まじう語らふあり。

女『アノ、淸之助さん、緣といふものは、何處にどう結んであるか知れませんねへ、貴君にお別れ申し

てから、恰是十五年ぶりで、不思議にお目にかゝつて、此様……是れも天神様の御利益合でございませう』

男『サア、眞個に縁は不思議なもので、石田の小父さんが、彼様いふ事にお成りなすつて、お國をお立退の時は、小生は八歳、お歌さんお前はヱーと、確か五歳であつたが、小生はその當座、飯事の相手を失なつたのが悲くつて、毎日御膳を喫ずに泣てゐたつけ』

女『さう、眞個に……』

と云つて嫣然笑ひ、

女『デモ龜井戸でお目にかゝつた時は、全然御存知ないやうでした』

男『ソリヤその筈さ、別かれた時には、かぶつ切りのお芥子頭で、惡戯ばかりしてゐたのが、此様に美くしい、ソして嫺雅な人に成たのだもの、見忘れるのが當然だ』

女『ハイ、〳〵、澤山おなぶりなさいまし』

男『イヤ、愚弄でも巾着でもない、眞個のことさ、ソレはさうと、平生から物堅い小父さんだつたのに、ドウしてお前に舞踊などを習はせたか、今では夫が役に立つて、結構ではあるけれども……』

女『阿父さんは嚴しかつたんですが、今の阿母さんが、隱くれ忍んで習はせたのです』

と聞て清之助は、暫時默つて考へゐたるが、

男『さういふ阿母さんの氣象では、定めし小生が邪魔になるでせう、氣の故か知らないが、此間一二度、松井町の家を尋ねた折の、阿母さんの樣子が、ドウも變だと思うた』

女『ソレは御煩慮なさいますな、今の事を始めるとき、身過ぎ世過ぎなら仕方ありませんから、隨分浮いた稼業もしませうが、客を取るの、旦那を持つのといふことは、決して致しません、若も亭主を極るならバ、妾の好いたのを持して下さいと、堅い約束をしておきましたから……夫はさうと、此間のれ話の樣子では、貴君も隨分御苦勞をなすつた御樣子ですが、今暫時御辛抱をなさいましたら、故の御身分にお取立になるのでございませう』

男『サア、小生もそれを樂みに、心に染まぬ役儀をも、耐忍して勤めてゐるが、今の樣子ではとても、さういふ運びにはゆくまいと想ふよ』

女『元來小父さんは、貴君の何歳の時、れ卒去に成たのです』

男『お前の阿父さんが、お國をお立退になつた、翌〻年、丁度小生が十歳の時だつたから、當然ならば、少の減祿ぐらゐで、すぐお召出になる筈なのを、小生の阿父も、石田の小父さんと一所に、御國政を非議したとの御不審で、小生には些々の捨扶持を下すッて、親類へお預になつたまゝ、十五の年まで、何のお沙汰もないゆへ、親類中から種々嘆願してくれたので、やう〳〵お召出になつた所が、ヤッと同心見習さ、始め重役から御內意のあつた時は、かりそめにもお目附の御儀をもつと

めた、折田の家柄の事故、さしづめ御近衆見習ひか、下ッてもお廣敷番位には、キッとお召出にな
るだらうと、人も云ひ、又自分でも想つてゐたのに、案外にも、お目見え以下の輕輩とは、實にな
さけない始末、濟ん事ではあるが、一時は内々主君をもお怨み申したが、是も時運天命と斷念て、
其後八年以後、勤大事と身を愼んでゐるのも、責て小祿でも宜いから、士籍に列したいと思ふばか
り、ダガ、今の分では、迚も望み通り行きさうもないテ』

と左も力無げにいふ淸之助の顏を、歌扇はチッとうち目戍りて、

女『さうお力をお落しなさらないでも、今に御運が向いて來ませう』

と慰めながら心の中には、今の物語に依る時は、淸之助の身の薄命も、元はといへば吾親の金十郞より
起れることなれば、吾力の及ばんかぎりは、行末長く幇助となりて、そが不幸の幾分をか補ひてんと思
ひ定め、玆に一入の愛情をぞ加へける、淸之助は急に心附たるもの丶如く、歌扇にむかひて、

男『ツマらん昔話で、大層長居をして、此處の家でサゾ迷惑に思ッてゐるであらうから、もう徐々歸る
としよう』

女『ナニ、此處の家なら御遠慮にはおよびません、此屋の主婦は死去ッた母に、種々世話に成たことが
あると云ッて、まるで妾を兒のやうに思つてゐる寡婦ですから……それとも貴君、なんぞ御用でも
ございますの』

男『イヤ、小生は別に……』

女『おやア御緩りなさいましな、猶種々お話もありますから、オヤ、貴君、お寒いの、お羽織なんぞめして』

男『ナニ、寒くはないよ、國に居てごらん、今頃は軒より高く雪が積ツて、道にとまどひして、引窓から盲人が落るやうな騒動だ……』

女『ほんゝ小兒心にも少しは覺えてゐますが、強うございますねへ、お國の雪は……お國といへば、貴君は、何時此地へお詰に成つたんです』

男『一昨年の夏さ、國にゐれば猶出世の望みもあるけれど、江戸詰になつてからハ、その望みも絶果たりといふもの』

女『それは又何故でございます』

男『大きな聲ではいハれぬが、小生のやうな武骨者で、世辭追從のない人間は、江戸屋敷の士風に逢ハないし、ソレに意地の惡い黑澤紋太夫の配下になつてゐては迚も駄目さ』

といひつゝホッと太息つけば、歌扇は言葉せはしく

女『エッ、あの黑澤が、貴君のお組頭ですか、アノ……』

と云つたきり、暫時無言……

（其五）

水木歌扇折田清之助との間は、日に添ひて親密になりゆき、宛然膠漆もて附たる如く、人の細工にて離ろうとしても、破壞さずに離れまじきその風情、隱れたるより顯はるゝは無しとか、一人が知れば妬心半分、賴まれもせぬに金棒を引廻し、輪に輪をかけて觸散すにぞ、稽古は附たりの男弟子、野心の目的を奪はれて、鳶に油揚のそれならねど、空を睨んで口あんぐり、拳を握つて悔しがるもあれば、歌扇から口說かれでもした戀中か何ぞのやうに、顳顬へ蕁薬程の筋を出して、ドウも彼女に限つて、さういふ道理はない筈だのにと、疊たゝいて理屈ばるもあり、十人十色の人情、落れば同じ谷河の、水に流して居るはなく、修練のビラに、一兩散財んだのは何の爲め……云ずと知れしおん事ならずや、ヘン、師匠も分らねへおやアねへか、何が面白くッて、縮の仲間入をしたと思ふか、人を馬鹿にするも程があらア、座敷の造作をしてやッた時にやア、お前さんは、眞個に實があるよ、なんテ、程の好いことを拔かしやアがッて……初手から主の華美な氣を、知てゐながら女房に、成て見たいの慾が出て……ウフフ、低聲で唄やアがつたのを忘れはしめへ、元來源次の野郎は虛言家だから、彼奴のいふ事は當にやならねへ……が……アゝ云れて見ると、氣の故かして、頃來師匠の様子が、如何もウハ〳〵してゐるから油斷はならねへテ……

吾庭の花とも極らぬに、他人に手折れたかの心遣ひ、猜疑、嫉妬、邪推、などいふ、あらゆる忌むべ

き念慮は、歌扇の家の敷居を跨ぐ、男の心に充滿すれば、清之助との秘密の間が、いよ〳〵左樣と知れたが最後、是迄は師匠々々と、只その機嫌に逆らはざらんことを是勉め、外へ出る時は履物まで揃へ、日傘の出納牙を、パチンと云せて働きぶりを見せ、コレは憚りさま、眞個に御親切なこと……の只一言の御詫宣を伺ふを、眞宗の信者が、門跡の御剃刀を授かるより、猶嬉しく想ひし連中の、その反動力は又格別にて、悔しいと、妬ましいとが混淆になりて、ムラ〳〵と沸騰げて來り、浴室の二階、結髪店の一隅、不平と愚痴の鉢合せ、此復讐は彼樣して遣らうか、此うしてくれうかと、男清姫新鐵輪例もイデ〳〵の相談のみ、昨日までは入替り立替り、男氣の絶る間はなく、夜更るまで笑ひさゝめく聲の、常に洩れたる歌扇の家の、遽にさびれて朝の内に、女兒の稽古をしまひしのちは、誰とて訪問ふ人もなく、日が暮れて燈火を點るや否や、早くも鼠か舞臺を占領して、勸學院の雀門前の小僧、見やう見眞似にチユチユラのチウと、鳥羽繪の枡落しを踊るもおかし、此の狀況なれども、歌扇は結句氣樂なる心地して、いさゝかも氣にはとめねど、繼母のお種は、急に收入の減るのみか、若い男の寄合へば、互ひに外見の張合より、一人が越後屋の蒸菓子をおごれば、一個も負けぬ氣を出して、蛇の目ずしを散財む、その使いは例も阿母ア御苦勞だがと、おたねの受持ゆゑ、手につけ足につけ、何につけカスリの取れて、臍くりの巾着はいつも福々、口の締らぬ程なりしが、その餘德はパッタリ止りて、今は出る一方のみなれば、おたねは頻に氣を揉み出し、始めの内は夫となく、遠廻しに愚痴を溢して見たれども、歌扇に元來その

氣なければ、男の弟子を取らぬのは、始めからして妾の所望、今度皆さんの退ッたのは、恰是幸ひのことなれば、是からは男の弟子入を斷りませうと、母親とは反對の考へに、おたねれます〳〵望みを失ひ、此上は清之助を遠ざくるより外に策なしと、彼鳶の者の梅吉と談合せて、ひそかに其手段をめぐらしけり。

思ひは同じ黒澤紋太夫も、歌扇の情夫が吾組下の、折田清之助と知れしより、如何にもして折田に辛き目見せ、歌扇に物を思はせて、戀の叶はぬ、寧ろ戀の仇なる……意趣晴しさせんものと、阿諛者の丹田十平、貸本屋の金助等を、帷幕の内に侍らせて、評議區々……扇子バチ〳〵とは、どうでげすなど、、駄洒落まじりに善ない相談、さりとも知らぬ清之助は、歌扇の情愛に絆されて、勤仕の暇のあるごとに、松井町の家を訪問れ、彼の寡婦の二階を借りて、人目を忍ぶ假の契りは、吾知らず渡る劍の刄、嗚呼危いかな、危さかな。

（其六）

黒澤『ドウした、金助、太く青い顏をしてゐるが、氣分でも惡いか』

金助『氣分もあんまり好くはありますまいテ、晃りバッサリの一件ですから……』

黒澤『何だ、その手振は、稻荷の花表へ小便でもしかけはしまいか……云ふことも變だぜ』

金助『變だから、馬鹿らしや……といふ目に出會しやした、ア丶今思ひ出しても慄然する、桑原々々』

黒澤『汝獨りで承知したつて、他人にはサッパリ解らない……一体何樣な目に會つたのだ』

金助『マアサ、慌てずにお聞きなせへやし、昨日も樣子を探りに、彼の所へゆきやした、すると彼女め例物を啣へて、何れへか岩戸がくれをやつたので、母親は大苦情、その愁嘆場を充分一段聞されながら、爰ぞと思つて散々焚附けて、左樣サ、彼處を出たのが、彼是五ッ小前でしたらう、それから直ぐ歸れば宜つたんですが、宿坊は大体此處といふ目的がありやすから彼奴等、どんな巫山戯方をするか、成るべくなら見分してやらうと、此家と思つてる所へ廻つて見ると、もう酒も飯も話もすんだ後で、微醉機嫌の啣へ揚枝か何かで、手を引合ふて彌生山……うめ……が笑へばア……、さ……くウらがア……まねく……』

黒澤『これ〳〵、金助、貴公の話は兎角傍道へ外て、手間が掛つて困る、アノ武骨者の淸之助が、何で歌なんぞを謠ふものか』

金助『ヘエ、ナニ、是はその、チョット話の形容で』

黒澤『形容なんざア止めて、本筋だけ話さんか』

金助『ヘエ、それでは極眞面目にはなしやせう、エヽ夫から百本杭まで來やした、スルト、何か聲高に言合つてゐるものがありやすから、大方醉漢が管を捲くのか、朋友同士の諍論だらうと思つて、別に氣もとめず、サッサと歩いて、もう五歩か六歩で、側まで行くと思ふ時、ナニ、此無禮者めがと、

雷公のやうな聲で怒鳴たかと思ふと、閃然と電光がして、バッサリ……キャア……てエんです、流石の小生も、不意を喰つたから耐りやせん、ハッと驚いて逃やうとしたが、もう間に合はない、抜けやした』

黒澤『何がぬけたのだ』

金助『コヽ腰が、腰です』

黒澤『意氣地のない男だ、雷公が鳴たつて、腰を抜かす奴があるものか』

金助『旦那、分らないなア、雷が鳴たんぢやアごぜへやせん、ヒヽ、人が斫れたんです』

黒澤『分らないといふのは、貴公のことだ、斫られたのなら斬れたと、判然言へば好いのに、雷公だの電光だのといふから、乃公は又雷でも鳴つたのかと思つた……シテ、斬たのは何者だ』

金助『斬たのは何處の者か、いまだに知れやせんが、斬れたのは確か、ソラ、旦那も御存知でせう、彼女の所へ稽古に來た町内の鳶の者だとか……梅吉てヱ……アヽ、アノ男ですと、小可は生來この方、アンな怖い目に遭た事がございやせん、壽命の五年位は、的然と縮めやしたな』

と手眞似交りに物語るを、黒澤紋太夫はつくぐ〜と聞終り、

金助『金助、もう少し側へ寄るが好い、何と物は相談だが、一番度胸を出して、其鳶の者を殺したのは、折田清之助の所爲だと、訴人してくれないか』

金助『エッ、訴人……御番所へでずゝか』

黑澤『さうよ』

金助『ソイツは願ひ下げにしやせう、御番所と拔刀は眞平だ、彼の位氣味の好くない所ハありやせん……夫に第一、證據がないのではごせへやせんか』

黑澤『そんな氣の弱い事をいはずに、證據は乃公が拵へるから、思切つて遣つてくれ、禮に百兩やるから』

金助『チアヤ何ですか、訴人さへすれば、百兩下さるんですか、百兩……マア止しやせう、まかり間違へば、此方の笠の臺が飛ぶ仕事ですから、慾得づくにやア換へられやせんテ……然し、百兩ですな、百兩……と、元來貴君の拵へる證據といふのは、如何な物です』

黑澤『證據といふのは是だ』

と取出すハ歌扇が實母の紀念なりとて、命に代へて大切にする、重ね色紙の紋のついたる、彼の平打の銀釵なり。

金助『コリヤ、例の龜井戸で掏摸イヤ、掏摸せ損くなつた、因縁附きの銀釵ぢやアごせへやせんか、是ゲ如何して貴君のお手に入りやした』

黑澤『實は豫て話した通り、清之助の品行の良くない事を、前以て重役の耳へ入れておいた所、昨夜無

屆で外泊したから、是幸ひと尾に尾をつけて、目附へ散々吹込んだので、いよ〳〵吟味中謹愼とい
ふ事になつたので、先刻彼れの長屋へ參つて、役掛りの者と立會の上、所持の品を改めたら、歌扇
から、仕送つたものと見えて、衣類持物などに、身分不相應の品が有たので、ます〳〵不審が增し、
トウ〳〵下屋敷へ押込めといふ事に極つたが、其時此銀釵が彼の荷物の中に有たから、何ぞの役に
立うと思つて、チョロまかしておいたが、丁度幸ひ彼が昨夜歸宅をせぬのも、疑つて見れバ不審の
廉になり、殊には此紋と彼の定紋とが同樣だから、是が彼の死骸の側に落てあつたと申せば、夫こ
そ確實な證據で、滅多に失錯る氣遣はない……若夫でも懸念に思ふならば、丹田が警固の當番の時、
折田の刀へ犬か鷄の血を塗らしておけバ、何樣な目の明た奉行でも、一抔喰はされるのは案の中だ』
と辯に任して說附けられ、元より百兩といふ掛聲に、心の迷つてゐる金助、欲し、怖しの踏切つか
ぞ、

金助『ともかくも今夜一晚、とつくりと考へやすから、旦那、この銀釵を、小可に借してください』

（其七）

水木の家の勝手にてれ、例の貸本屋の金助と、繼母のれ種が閑談密話、

たれ『ソレぢやア、黑澤さんも、トウ〳〵駄目だね』

金助『大駄目、〳〵〳〵、大駄目ロ上左樣テな譯柄さ……何しろ、殿樣のお納戶金とかを、斷りなしに遣

つたといふ一件だから、どうでも腹切り仕事だといふ噂だ……ソレに就て詰らないのは丹田の十的サ、何時でも當がい扶持を喰てゐながら……世の人の數にはもれて、なか〳〵に、うきにはもれぬ、吾身なりけり……今度もどうやらお伴らしいといふことだが、馬琴や京傳の小説に能く書いてある文句の、寧ろ鷄口となるとも、牛後となるなかれとい、ホンに此の事だ』

たれ『大層むづかしい事をれいひだが、妾にやアさつぱり分らない……が……内のも、早く稽古のなるやうにしたいものだ』

金助『アハヽヽヽ此いつは好い、時に師匠はどんな樣子かね』

たれ『困つたものさ、お醫者に云はせると、疲勞は強いけれども元來氣から出た病だから、開きさへすれば癒るてェが……』

金助『さやみにでんせ、東山てな譯で……何處か此う、氣の晴れる所へ出養生でもさせたら宜らう』

たれ『どうして、寢返りさへ、一人では出來ない程の疲勞方だもの』

金助『ヘエ……、猶それ程の事ではないと思つてゐたのに、元來小可ア、あんまり師匠の受の好くない方だから、度々見舞なんぞに出て來ちやア、却つて病氣に觸るだらうと思つて、ツイ〳〵遠慮してゐたもんだから……左樣酷くツちやア、兩便も、寢ながら埀れる觀世音てな譯かね』

たれ『いつそ左樣だと、却ツて仕好いけれども、身体が衰へ切てゐても、アノ突張た氣象だから、ソレ

を嫌がッて、負ッたり抱へたりして、淨房まで連て往かなければならないので……』

金助『病根は全たく清印かね』

たれ『ソリや云れずともサ、元來彼時明白に云てしまへば好つたのを、何でも清之助を薄情者に思せて、斷念させやうと思つたので、種々手を盡して瞞着めた所……が……清さんは、幼少の時からの馴染でもあり、殊に從弟同士の間だから、その氣質は能く知てゐる、彼人に限つて、そんな薄情な男ではないッて、何と云ても承知しないのサ』

金助『フーン、成程、幼少馴染と紅花染は、色が褪めても、香が殘るッてやつだあ、畜生め』

たれ『なんでも、清さんと妾との中を割うとするものがあるに違へないッて、意地張てゐたが、今では少しは疑ふ心が消えたやうだけれども、傍から水を指したからだといふ念は、ドウしても失ないと見ゑて、時々訝な聲を出して、清さんと妾との間へ、水を注した人には、屹度うらみをいふから、梅吉頭を手本だと思ふが好いッて、囈語のやうにいふが、第一番に金助さんお前にお鉢が廻りさうだよ』

金助『エッ、母親ア、おびやかしてば否だぜ……嗚呼今更想へば、黑澤さんに頼まれた事をしなくッてソレでもマア宜ッた……金錢づくには換られねへ』

たれ『何ぞ黑澤さんに頼まれてゐるの』

金助『なアに此方の事よ、南無阿彌陀佛……

此方の一室にては、霜がれ野邊の尾花がもとに、すだきて鳴ける虫の音より、猶哀れなる歌扇の聲にて、

歌扇『ヲヽ、清さん、能くまア來て下さいました……妾やア、一度でもお顔を見れば、夫で死んでも……急にお國へお皈りの事は、老媼から……せめて一筆ぐらゐ……是程想つてゐるのに……お怨みに存知ます……』

夢か、現か、幻か、斷續に聞ゆるその聲音の、胸に冷りと徹ふれば、金助は思はず身を振はし、

金助『母親ア、セヽ、折角お大事に……』

是だけの挨拶も、半分は家中半分は外、猶殘暑嚴しき七月中旬に、粟粒たてゝ歸りけり。

繼母のお種は、藥土瓶を手に提げて、病人の枕許に來り、

たれ『お歌、〳〵、サアお藥を温めて來たから、是を飲んで氣をお鎭め』

喚び覺されて歌扇は、糸より細く目を明きて、

歌扇『ハイ……母親さん、清之助さんは』

たれ『清さんは、來てゞはないよ、此春お國へ歸ッたぢやないか』

歌扇『ソレでも今清さんの聲が……』

たれ『アレは金……イエ、近所の方が見舞に來てくだすッたのだはね』

歌扇『左樣……』

力なげに再び閉る、眼ハ落ち凹みて、肉は脫け、高きハ鼻と頰骨のみ、常に見慣しおたねさへ、何となく物凄き容貌……又すや〳〵と寐入りし樣子に、お種は元の勝手へ歸り、夕餉の仕度に餘念なし、夕廻りの豆腐屋も早來りて、家々に蚊遣の烟たちそめ、團扇の音の聞ゆる頃、疾病の床に臥したる歌扇は、羅綺の衣にも耐えぬばかり、病衰れたる容体にわりながら、何思ひけん突然に、スックとばかり身を起し、スル〳〵と表の方へ歩みゆくゝぞ、おたねはうち見て大に驚き、

たれ『アヽ、コレ、お歌、れ前、淨手なら妾が連れて行く……コレ、何處へれゐでだ、其方ではないよ』

と云へど歌扇ハ何の返答もなく、猶も端近く身を進め、出居の柱を緊と抱へ、落くぼみたる目を見張り、左も物凄き顏色にて、東の空を佶と見つめ、うら枯たる聲をふり絞り、つく息さへも絕々にて、

歌扇『折田さま……淸之助さん……』

この一言が此世の名殘、惜や盛りの色も香も……抱へし杜に血に染みたる、怨恨の爪の痕深し……

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

同じ日の同じ刻限、江戶より百何十里隔てし、秋田の城内なる長屋の内に、黃昏より蚊帳を釣りて、中

暑の氣味とてうち伏せし、歌扇の情夫の清之助、帳外には同役の甲乙が、椽端近く座を占めて、團扇の風に涼を納れて、世間雜談の高笑ひに、晝の勤務の憂さ晴し、疲れを忘るゝその折から、中天よりヒウーと音して、此長屋の軒を掠め、閃然と飛込む光り物『ソレ、人魂が』と人々の、呼びし聲も終らぬうち、蚊帳の中にてアーッと一聲……憐むべし清之助の全身は氷よりも冷か……

* * * * * * * * * * * *

黒澤紋太夫、丹田十平の兩個が、官用金濫用の辨解立たずして、切腹したるも此日の同刻、貸本屋の金助が、水木の家より吾家に歸りて、俄に發狂の氣味となり、黒澤より預かりたる、歌扇の實母の紀念なる、例の銀釵にて咽を突き、狂ひ死に死したるも、恰是同じ時刻なりしと、偶然と云へば云ふものゝ、是も亦甚不思議……

（をはり）

●葉末の露

(上)　煩惱の卷

今は昔尾張の國鳴海の郷に、春尾左衛門太夫重明といふ大名あり、時しも足利將軍の武威漸く衰へて、政令その力を失ひ、英雄諸國に割據して、各自虎狼の慾を恣にし、天下將に麻の如く亂れんとする際にて、重明が住める尾張國も、領主斯波氏の亡びてより、斯波氏の老臣を始め、其旗下に屬する諸大名、孰も城に據り砦に籠り、些の虛も有ば、取て領地を併せんものと、隙を窺ひ鎬を削り、互ひに油斷なかりけり、重明も弓矢取る身の數の備はれば、祖先より繼續たる所領をば、誓つて人手に渡さじと、朝夕軍備に怠りなきものから、當國第一の勇將と聞えし、織田備後守信秀の所領と境を接すれば、動もすれば爲めに侵略さるゝの憂ひありて、安き心とてはあらざるに、其身も早老の波寄る、五十にちかの鹽釜や、鬢に白毛を見るに至れど、生憎男の兒とては一人も無く、先年蓮の臺へ乘急ぎせし妻の紀念とては、僅に小萩とその名を喚べる、本年二九の齡なる、姫君一人あるのみなれば、責めてこれに智勇すぐれたる、佳き婿君を迎取りて、吾家の弓矢を續するのみならず、一日も早く初孫の顏をも見んものと、密に婿撰みに心をつくしけるが、織田の所領を彼方に隔てたる所に、美濃部刑部少輔兼祐といふ大名ありて、其二男の小二郎兼冬と云へるは、二十の上を二つ三つ越たる青年なるが、文武の二道に秀で、世に多く

得がたき武夫なる由にて、然も祖先よりの通家なれば、幸ひ迎取りて姫の婿にせんと、乃て縁談をぞ整へける、小萩姫は此くと聞きて、父の慈愛の尤深きを、今更のやうに厚く感じ、噂に聞けば小次郎ぬしは、弓箭の道に長けたまふのみか、姿容も世にすぐれて美くしく、性質も人に超えてめでたしとか、此る優美男子を夫に持つとは、女子と生れし身の果報にこそと、手の舞足の蹈所を忘るゝまで、見ぬ戀にあこがれて甚く喜び、婿入のその日を今日明日と、指折數へて待に俟ちけり、偖定めの日となりければ、婿の小次郎兼冬は、父の所領を立出たるが、元來織田家とは仇敵の交際なれば、その領地を經過る間は、主從行商人に身を打扮して、いと忍びやかに通りぬけ、やつとの思ひよて舅の所領に入り、此にて始めて形粧を改め、出迎への人々に誘はれて、行列美々しく出立ちて、春尾の城にぞ乘入りける、此方は待設けたる事なれば、ソレ婿君のお入りぞと、奥も表もさゞめきわたり、直に設けの席に誘ひて、方の如く三々九度の盃を擧げ、めでたく祝言の式を終へけるが、舅重明は人々を遠けて、改めて姫と兼冬に向ひ、徐ろに口を開きて　重明『サテ小次郎殿、今度は不思議の緣にて、不肖なる娘の婿に迎へ、物數ならぬ某も、和殿の父と呼るゝ身となりたり、就ては此く妻と呼ばれ夫と呼れ、父子と呼び呼ばるゝも、宿世あやしき契りなるべければ。不束なる娘なれども、幾末長く見捨られず、偕老同穴の盟ひを全うしたまひてよ、又此春尾の家は、僅に二郡の主に過ざれども、祖先重宗此に城を築きしより、某に至るまで八世二百年の間、連綿として血統を絶さぬのみか、幸ひ家名をも疵けざりしかども　某　既に知命の年

に近く、近來やゝもすれば病魔に侵され、今は早物の役に立つべくもあらず、殊に頃來將軍家の武威衰へて、諸國の大小名我威に募り、就中當國の織田信秀の如き、虚さへあらば他家を討滅し、その領地をば兼併せんものと、己が武勇に任せて信義を蔑にし、虎狼の慾を恣にすれば、吾家の危きこと累卵も啻ならず、何卒今より某に成代りて、一藩の士卒を厚く撫育し、あくまで弓箭の道を磨きて、侮りを隣藩に受けぬやう、偏に貴殿の武勇を賴み申す、又姫も能くその心して、小次郎殿の愛を失はぬやう、誠心つくして能く事へ、夫婦心をひとつにして、吾家の繁昌を計れよかし』といと懇ろに說諭せば、小次郎は恭しく頭を下げ　兼冬『身不肖なる兼冬を、當家の婿に迎へられ、最愛の小萩殿に嫁はせらるゝのみならず、分に過たる只今の仰せ、迚も其任に耐ゆべくは思はれねども、緣あつて當家の相續者となるからは、弓箭八幡の應護、當家の祖先の冥助、且は父上の御武德、一藩の士卒の忠勤に依りて、骨を紛にし身を碎きて、春尾の所領を全うするのみに止まらず、武名を四隣に輝するでござりませう』と云ふを傍聽せる小萩姫は、良人の健氣さ勇ましさに、その嬉しさも又一入、殊にその容貌も聞しに增して、繪にある如き美男なれば、羞しさゝへうち忘れて　小萩『小次郎さま、只今父の申せしごとく、世にもふつつかなる此小萩、ゆくすゑ長うお見すてなくと僅に唇を洩すその折しも、俄に表の方の騷がしくなり、甲冑着けたる……一個の武士、庭傳ひに走來りて　武士『御注進々々々』と聲高やかに叫びたり、三人は之に驚かされて、均しく其方に膝をし向け、先づ第一番に重明が口を開きて　重明『火急の注進何事ぞ』

と言葉忙しく問返せり、武士は流るゝ額の汗を拭ひも敢ず　武士『今日の御祝儀に、味方の士卒心を寛め、自然と武備に怠りしを伺ひ、一擧して當城を攻落さんものと、隣郡清洲の城主織田信秀、數千の兵を卒ひて不意に打ていで、俄に城下境まで押寄せ來りしを、砦を守りし吾々共、此處破られては一大事と、必死と成て防戰いたせど、敵は名におふ織田勢なり、殊に人數も吾に倍すれば、迚も長くは禦きがたく候ふ、彼地の要害を敵に乘取られなば、唇破れて齒寒しの譬へ、恐く當城も保ち難く候はん、早々御出馬あつて然るべし』と大息ついて言出けり、左衞門太夫は聞きも敢ず、奮然として突立ち上り　重『ナニ信秀が不意に押寄せしとな、ヲヽ火急の注進大儀々々、敵は聞ゆる織田の大軍、當城は平地にて守るに小便なし、城下境にて喰留めずば、夫こそゆゝしき一大事、直に出陣して逐拂はん、其方は此上の大儀ながら、速に砦へ走歸り、予が出陣の旨を告げて、味方の士卒の心を鼓舞し、今暫時の間防戰せよ、ヤア〳〵者共、出陣の用意いたせ』と勢ひこんで叫びけり、僅に祝言の盃のすみしのみ、婿とは云へど小次郎は、猶妻の小萩にしみ〴〵と、言物交す間さへなきに、想ひがけなき此大變、左れどめでたく婚儀を擧て、すでに當家の婿と定まるからは、元より傍觀すべきにあらざれば、同じく突と身を起し　兼冬『父上御出馬とあるからは、某御先驅仕つらん、小次郎の家來共、用意の甲冑これへ持て』といと勇ましく呼はりければ、左衞門太夫はうち喜び　重明『武勇の名譽高き婿殿が、先陣の大將を勤めらるゝからは、戰爭の勝利疑ひ無し、イザ諸共に』と勇みたてば、小次郎も愈々勇氣を加へ、家來の持出る甲冑を、手

早く取て身に投掛け、忽ち出陣の用意を整へけり、嗚呼有爲轉變の娑婆の常態とて、今まで人間一世の大禮と、上下擧つて盃を擧げ、婚儀を祝せし極樂界も忽ち變る修羅道場、姫は身も世もあられぬ想ひ、千丈の海に沈み、龍の顋をかき探りて、たま〳〵得たる眞球をば、陸に上るか上らぬに、端なく敵に出會ひて、その身の難を免れん爲め、礫となして打つけて、之を禦ぎしに異ならぬ想ひ、而も投つけしその眞球の、劍に當り鎧に觸れ、若や碎くる事はなきかと、心づかひのせらるれど、さすが吾家の大變に臨みて、良人が奮つて出陣するを、武士の妻たる身を以て、とゞむる事もなく田鶴の、泣くより外はなかりけり、左衞門太夫は之を見て、左こそと思へど武門の意地

重明『ヤア狼狽しか娘、婿殿が武勇の名譽を顯はさるゝ、世にもめでたき戰爭の門出、笑ふて機先を祝ふ筈を、不吉の涙は何事ぞ、速に面を拭ふて、今より城下境に走向ひ、寄來る織田勢を斫散らさるゝなれば、數千の東夷を枯草と共に、薙拂玉ひし日本武尊の、十束の御劍にも譬ふべき、婿殿の太刀を取て進らせよ』と、言懲らされて氣を取直し、白銀造りの大太刀を、重げに抱きて小次郎の、身の傍近く進み寄り、濕める目にて見上ぐれば、南蠻鐵の小手脛當、紫裾濃の大鎧、手綱染なる上帶を、一躍り躍りて締る態、天晴武者振り健氣の大將、此程の良人を持ながら、祝言とは只名計りにて、猶枕さへ交さぬに、聞くも危うき戰爭の場へ、出陣ささねばならぬとは、亂れたる世の習ひとは云へ、武門の常とは云ひながら、悲しきことの限りにこそと、又今更に一時雨、太刀の鞘をば濕しけり、小次郎は太刀受取て姫に向ひ、慨然として目をしばたゝき、

兼冬『壯士陣に臨めば死せずんば傷くとかや、増して某當家の婿と成りて、今日始めての出陣なれば、萬一未練の働きして、汚名を兩陣の間に取らば、只小次郎一身の恥辱のみならず、春尾美濃部兩家の瑕瑾なれば、敵を領地の外に逐拂はずば、一歩も迹へは引ぬ覺悟、左すれば死せずんば傷くの、古言を免ることかたからん、卿も重明殿の娘なれば、某が申すまでもなけれども、小次郎が生てふたゝび還らんとは、ゆめ〳〵思ひたまふべからず、併し弓矢神の應護に依りて、幸ひに敵兵を逐拂ひ、武運めでたく凱陣なさば、ふたゝび顔を見もし見られもせん、マヅ夫迄は今生の別れと思されよ、さればでござる小萩どの、父上、イザ』と言捨て勢ひこんで先に進めば、左衛門太夫も遅れはせじと 重明『娘、能く留主せよ』と只一言を迹に殘して、表の方へと走去りけり、姫はあまりの悲しさに、迹を逐ふべき氣力もなく、そのまゝ其處へうち伏して、前後も知らず泣入りけり。

(下) 菩提の巻

頃しも秋の初めつかたなれば、春尾家の後庭には、山上憶良が、かきかぞふればと詠じたる、萩の花、尾花、くづ花、撫子の花、女郎花、藤袴、朝顔の花など、時を得顔にさきそめて、とり〳〵に得ならぬ色香を競ひ、そのしほらしさ云ふばかりなし、殊よその日も暮果て、新に磨ける鏡かとあやしまるゝばかりの月は、東の山の端よりさしり上りて、其處等くまなく照せば、七種の花ごとに、珠を聯ぬる夕露に光を宿し、又一入の風情を添へけり。

かゝるところへ小萩姫は、一個の侍女だも從へず、左も力なげなる樣子して、飛石づたひに歩み來りぬ抑も姫は新郎小次郎兼冬が、父と共に出陣したるその迹にて、涙にくれてゐたりしが、老女の甲乙に諫められて、やう〳〵と吾居室に入り、衣ひきかつぎてうち臥せしまゝ、小次郎の上、父が事、即ち戰場の摸樣をば、とやかくと想ひやりて、只管心を苦めゐたりしが、あまり物憂さに耐かぬれば、單身ひろかに曹司を立出、人の知らぬを幸ひに、くまなき月の光を見はやし、霧に濕ふ草花の色をながめて、いさゝか心をなぐさめんものと、さてこそ此處には來りしなれ。

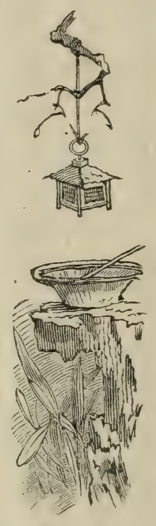
左れども始め想ひしとはうらうへにて、姫は月と草花とをながめても、更に心の浮立ぬのみか、尾花を見れバその穗は鎗の如く想はれ、小次郎の身のこれにや刺れんなど、そゞろに胸を痛め、又空にきらめく數の星の内にて、西ゑ向ひて流るゝあれば、小次郎の亡魂ならずやなど、あらぬ心を驚かせば、果はそよ吹く風に戰ぐ萩原の内に、小次郎が紫裾濃の鎧着て、白銀造りの太刀を佩き、すつくと立たる姿さへ見とめて、吾を忘れて走寄り　姫『ヲゝ小次郎樣、めでたう御凱陣あそバしてか、おなつかしや』と取縋れバ、心の迷ひか化生の所爲か、姿も形もアナ無慘や、露に委るゝ糸萩の、風にゆらめくばかりなり　姫『ヤヨノウ小次郎樣、いづれへおいでなされしぞ』と喚べど叫べど答へなく、右よ左よと見廻せど、くまなき月に照さるゝ、草木の外ハ物もなし　姫『アゝ不思議、小次郎樣には只今、あり〳〵此處よゐませしに、何處へ姿をかくしたまひしぞ、ナウ小次郎樣』と云ひつゝも、茫然として立たる折しも、表

の方より一人の武者、大童の姿にて走來り、ソレと見るより大地に手をつかへ　武者『ヲヽ姫君これにござありしか、一大事の御注進と』大息ついて言出れバ、姫にはハッとばかりにうち驚き　姫『ナニ一大事とは氣がヽりな、若や父上のお身の上か、但は小次郎樣のお身の上か、戰爭の摸樣をとく〳〵申せ』と言せはしく問返せば、武者は流るヽ汗を拭ひ　武者『さればにて候ふ、敵は大軍味方は小勢、殊に不意を討れしことなれば、戰ひ既に難儀におよび、今や境ひを越されんとする所へ、吾君及び小次郎樣の御出馬、新手の勢の加はりたれバ、味方はこれにいさヽか氣を得、盛返さんと競ひたれども、勝誇つたる敵の大軍、容易く打破ることの叶はぬのみか、やヽともすれば味方のいろめきたつを見て、小次郎樣には齒をかみしめ、ヤア言甲斐なき味方の擧動かな、織田勢とても鬼神にてはあらじ、小次郎兼冬が戰爭の仕樣を見よと云ふより早く馬にかく入れ、太刀眞向に振りかざして、群がる敵中に割て入り、縱横無盡になぎたてたまへば、左しも勝誇つたる織田勢も、若殿只一人に切くづされ、やヽ引色を顯しければ、味方の勢も之に氣を得て、今や盛返さんとする折しも、敵より放つ一發の銃丸に、おん傷はしや小次郎樣には』と迹云ひかねて咽入れば、姫は思はず聲ふるはし　姫『ヤア吾夫にはお打れ遊ばせしとか』武者『餘儀なき次第見るとそのまヽ、走歸つて御注進　姫『アヽお討死にかなさけなや』と叫ぶとそのまヽドウとなり、齒をかみしめて息絶へけり、此体見るより武者は驚き　武者『ヤア姫上のおん身につヽがあり、お出合ひ候へ方々と』聲をかぎりに喚はれば、之に驚かされて老女侍女、驚き遽てヽ出來り、水よ藥と介

抱すれども、早事切れしかその甲斐なければ、人々途方にくれたる所へ、俄に表の方の騒がしくなり『ソレ吾君の御凱陣』と、喚はる聲の聞ゆると均しく、左衛門太夫重明には、愁然として出來り、姫の氣絶の体を見るより、物をも云はず走寄つて、ヤニハに抱起して聲高く　重明『ヤヨ、小萩、氣を確に持て』と呼生けつゝ拳を握りて、ヤと聲かけて活を入るれば、やがて小萩は息吹き返し　姫『アヽ父上』と云ひかけて、ワッとばかりに泣入れば、重明は嗟嘆して　重明『小萩、汝は小次郎が、討死せしを聞知て、嘆きのあまりの此体裁よな、アヽ、思へば不便のいたりなり、さりながら、小次郎が一身を棄たる爲め、春尾の家は萬々歳、是も全く汝あればこそ、左しも勝誇つたる織田の大軍も、小次郎一人に斫立てられ、右往左往に潰へ走り、今は春尾の領地には、敵の影だもとゞめざるぞ、イナ、吾家の武威に驚怖れて、ふたゝび敵の境ひを侵すの患ひなからん、左すれば小次郎兼冬は、吾家の爲め守護神、喜び候へ、悲しみ候へ』と涙かくしていさめ勵ませば、姫は或は喜び或は悲み、父に對ひては嬉し涙、良人に對ひては傷みの涙、すゝり泣きして立も上らず、小萩がうへに身をなげ伏し、露と涙にひたされて、前後正体なかりしが、やゝありてツと身を起し、帶の間より懷劒とりだし、緑りの黒髪フッゝと截捨　姫『父上、生者必滅會者定離、今の今まで小次郎樣の、めでたき凱陣を待し甲斐なく、早くも此世に無き人の、數に入りたまふと聞く果敢なさ、如夢幻泡影、如露亦如電、實にも有爲轉變の浮世にこそ、色即是空空即是色、一夜の枕も交さねども、偕老同穴と心に契りし、最愛の吾夫を先立てゝ、何樂みに此世に立交らひ

はべるべき、煩惱即菩提、娑婆即淨土、今より佛の道に分入りて、小次郎樣と亡き母上の、おん迹吊ひまゐらせん出家を許させたびたまへ』と迹は涙にむせ返れば、父重明も目に涙、唯うなづくのみ言葉もなし、此父子の心を不便と感じけん、今までくまなかりし嫦娥は、雲の帷に面を掩ひ、無情の草木も風にゆらるゝまゝに、露をば涙とふりそゝぎぬ

（完）



◉本院　信夫摺

（上）

玉鉾の道の奥出羽の鎭めにと、選みに會津の蒲生宰相、軍旅の勞れを休めんと、一門田丸中務が邸にて、一夜宿りの大酒宴、狂言亂舞も千鳥足、主從一同に醉ぞれて、おの〳〵寢所に入りにけり、已に其夜も丑三つの、かねて待たる時こそと、勝手知つたる前栽の、木蔭を出る小姓の左門、日頃の優しさ引かへて、勇氣りゝしきつらだましひ、千草にすだく虫の音を、とめてはそれとや悟られんと、拔足さし足飛石傳ひ、寢所の樣子を窺へば、殘る暑さに妻戸さへ、あけ放ちしは是屈竟、造作よしとうなづきて、入らんとせしがまて暫し、幽かなれども燈火に、見咎められては一大事と、ためらふ折から簾ごし、吹くる秋の夜嵐に、行燈さえて眞くらがり、かの阿新が仇敵本間を討ちし舊事に、さも似たりしも天の與へ、今ぞ本望成就やと、忍びよつたる枕元、短刀すらりとぬき放し、蒲團の上より力を極め、ぐさつと刺せど空蟬の、もぬけのからの手ごたへなし、こはそもいかにと意外の驚き、急ぎ起たんとする所へ、隔ての唐紙押しわけて、ばら〳〵入くる蒲生の近習、曲者やらじと抱きとむるを、左門ハ一生懸命と、左右へはつとふりほどき、短刀片手に取り直せば、こなたも後れず拔き合せ、暫し鬪ふ物音に、手に手に手燭ともしつれ、十手早繩棍棒と、得物えものを引さげて、追とりまくぞ事ともせず、投げのけ

蹴りのけ突飛し、いとも烈しく働けど、運の極めの悲しさは、敷居に躓き倒るゝを、得たりとつけ入る近習の面々、をり重りて早繩に、いましめられて口をし涙、一間の内より悠然と、騒がず出でくる蒲生氏郷、左右をきつと見渡して、其方共が日頃の心がけ、曲者を容易にめし取つたる、武功のほど感じ入る、恩賞は後日に沙汰せん、又此曲者の詮議の筋は、氏郷自らなすべき間、皆々次へ。と、應揚に、鶴の一聲一同にはつといらへて　計られぬ、心をこゝにわきの波、よるの詰所へ立て行、跡には氏郷只一人、俯き耻たる曲者の、顏熟とうち詠め『汝はかねて見しつたる、當家の小性花形左門、此氏郷が汝の爲よ、討るゝほどの怨をば、與へし覺へかつてなし、察する所其方が、恩ある人に頼まれて、かゝる所業に及びしならん、つゝまず樣子をうちあかさば、助けがたき汝が一命、刀にかけて宥し得させん、ササいかに。と、物和らかに問ひかけられ、はつとばかりに左門が當惑、何と答へも口籠る、氣色をさぞと察しやり『白狀せぬも理りながら、夫でハ汝の爲計りか、頼まれし人の爲にもなるまい、推量するに其方は、伊達の侍從が間諜者、地うつ槌ハはづるゝとも、之に相違はよもあるまい、早く語れ。と、うち詰る、詞に左門は顏をあげ『コハ御諚では候へど、此左門をば大崎の、伊達家の間者ならんとは、憚ながらお目がね違ひ、かくなるからは是非に及ばず、主と頼みし中務、年來謀反の企てあつて、申し付けたる今宵のしまつ、爲終せざりしは當家の不運、申し上るはこれ計り、命は更に惜しからず、とく此首を。と、潔さ、覺悟に氏郷につこと微笑み『勇氣は餘れど智惠はまだ、若き汝が謀りごと、言ひくろむ

るとも欺かれうや、いかに田丸とく〳〵。と、呼はる聲に中務、はつとこたへて氏郷の、傍に近く畏まり『先刻より次間にて、御詰問の次第をば、逐一承知致せし某、此少年を豫てより、間者なりとの御眼力、御一宿を幸に、態と寐所の妻戸をたてず、誘きよせたる今よひの計畧、イヤナニ左門いかにあらごひ陳ずるとも、のつぴきならぬ汝が素性、汝が以前に身をよせし、清壽院の鐵禪和尙も、必同志の曲者ならんと推せし故、内々人を遣はして、召捕らんと致せしに、旅立せしとて寺に居らねば、寺中を偏く捜索させしよ、是といふべき文書はなけれど、和尙が手筥に竹に雀の紋ある香合、出所を小僧に責め問ひしに、汝が和尙に贈りし品、此紋所を推す時は、疑ひもなき伊達家の間者、返答いかに。と、證據の香合、左門が前にさしつくれば、それはと驚く左門が顏色、氏郷さこそとうち見やり『今の汝が白狀に、中務が謀反をいひ立てしは、此氏郷を疑がはせ、我手をかりて中務を亡はせ、蒲生の家の勢を、殺がんと思ふ汝が謀計、惡むべきには似たれども、汝ぢに取つては是れも亦た、伊達家へ盡くす忠義の一つ、其忠心を感ずる餘、汝が一命ゆるしてとらさん、かねて豐臣殿下より、我家伊達家と干戈に及ばゝ、奧州一國人民の、困難いはん方なければ、なるべく平和に治めよとの內命、我家元より伊達家とは、古き怨のあるにも非ず、今宵の事はこれ限り、只氏郷が所望には、二心なく關白に、隨從あれと立ち歸つて、政宗主に傳へてくりやれ、ソレいましめを。と、仁智の計らひ、田丸ハ立つて左門が早繩、とく〳〵行けと急がす詞左門はあつとひれふして、感淚そゞろにとめあへず『免されがたき此身の罪、助け玉はる

其上に、兩家和睦の御敎諭れ、肝に銘じて辱し、仰せに從ひこれより直に歸鄕致さん『ホヽオ又の再會それ迄は、無事にく〳〵。と、氏鄕が、かくる詞の情の露、同じ思ひの中務、左門も流石今更よ、三年がほどは主從と、結びし緣の名殘とて、惜しき別れをくだかけの、告る八聲に催され、袖に淚を忍ぶぞり、亂るゝ心取直し、大崎さして出てゆく。

（下）

咲亂れたる草の花、秋の詠めも大崎の、城下にちかき里ながら、山家といへば隣へは、谷を隔てゝ一二町、音づれするは荻の葉の、上風のみの詫住居、二人ぐらしの淋しさも、なれては流石忘らるゝ、娘小萩はしなやかに、こぼるゝ露の愛嬌もの、うみさしの苧笥かたへによせ『もうし母さん今くれたやうなれど、月の樣子ではもう初夜過ぎ、納戶でお休み遊しませ、おこしなともみませう。と、やさしき詞に母はうなづき『いつもかわらぬその孝行、汝の父公は妾の兄上、いつぞや一揆の討手にうち死、跡に殘つた汝一人、引きとつて娘分、ゆく〳〵は悴の淸十郞と祝言させ、早う初孫の貌を見やうと、樂んだかひもなう、三年跡の正月に、御上覽の曠れの賭弓、負をとつた其夜からの逐電、汝やわしは兎も角も、大恩ある主君をば、置き去りにした悴の不所存、たとひ歸つてきた處が、直に勘當一寸も、內へとては入る事ではない、此間も進めた通り、汝も今年はもう十八、すてものにした淸十郞に、どうせ添はれるわけにはいかぬ、他家へ緣付きしやるのが汝の爲、わしじやとても血をわけた淸十郞、惡い中にもかわ

いゝが、不忠な倅をかばふては、信夫の家の名の汚れ、浮世の義理はすてられぬ。と、跡いひさして袖の露、ともにしほるゝ娘の小萩『道理に叶ふた其れさとし、かへす詞はござりませねど、ちいさい時から引きとつて、生みにもまさる御養育、ごれんをかへすも萬分一、ふり分け髪の其時から、夫と定めし清十郎様、日頃の忠孝ひきかへて、家出なされたお心は、どういふ事かしらねども、行方を早う尋ね出し、殿様へおわびを願ひ、歸參かなへて添へるやう、どうぞなされて下さりませ、よし其事がならずとも、やつぱり妾はお傍において、御用をさして下さりませ。と、涙ぐむこゝろあはれなれ、母は心をとり直し『いふてかへらぬよしないくり言、嫁入りしやれと進るも、急いだ今の事でもなし、きな／＼と思はずに、そこらしまふて寝やるがよい、わしは先へ寝るほどに。と、いふに娘も笑貌を作り、そんなら母さん先へお休み遊しませ、妾も仕事をかたづけて、直にお傍へ參りませう。と、氣にさからはぬすなほさに、又もほろりと一雫、袖にかくして母親は、納戸の内へ入にけり、跡に小萩はうちしほれ、すぎこし方と行末を、案じわづらふ獨言「今も今とて母さんが、此身を思ふてのご信切、さら／＼あだとは思はねど、どうして余所へ嫁入れう、まだ下紐のうちとけて、語らふ事はなけれども、夫とさだめた心のちかひ、假令野の末山の奥、果なき海の浦曲でも、尋ね回つて御行方をと、心ばかりははしれども、妾がこゝを出たならば、跡に殘つた母さんを、誰か慰むるものがあらふ、家出なされて三年越し、どうぞ恙のないやうと、朝夕いのる神佛、さだめしぶじでござらうと、思ふもほんのそらだのみ、もしそれ

ならばゆきかひの、鴈の使にことづけて、玉章なりと便りして、しらせてくれてもよい事に、あんまりつれない清十郎樣、こがるゝ妾の胸の中、ちつとは察して下さりませ。と、孝と戀とをうちませて、歎き入るこそ道理なれ。

風すさまじき夜のみち、月を明りにいきせきと、たち歸つたる清十郎、我家ながらもあれはてゝ、昔にかはる軒のつま、傾く門をほと〳〵と、叩けバ内には娘の小萩、歎きの中に心づき、荻かあらぬを耳たつる、外には垣のくづれより、すかし覗いて『ソコにゐるは小萩どの、清十郎が戻つた、コヽあけて。と、いふは慥かにこがるゝ人、ハッとばかりに氣もそゞろ、とる手おそしと門の戸を、あけて見合す顔と顔『ヤアあなたは清十郎樣、おなつかしい、ヨウマアおまめで戻つてきて下さんした、これは夢ではない事か。と、嬉し涙の顔に袖、清十郎も案しやり『そなたも無事で重疊々々、シテ母上はお達者なか『アイ母さんもごきげんで先もさきとてあなたの噂、どこにどうしてござるやらと、泣てばつかりゐましたを、ちつとはさつして下さりませ。と、すがりなげけば『ホヽ其恨みは道理々々、われとても、母上やそなたの事、心にかゝらぬ日はなけれど、しさいあつて便りもならず、永の年月すごせしが、チト願ひあつてたち歸つた、母上へ其よしを『イマおつげ申升う、コウ歸つて下さんした上は、もう外へやるものではござんせぬ、コンナ嬉しい事はない、ドレ母さんへ。と、娘はいそ〳〵、立かゝる一間のうち『アヽコレ小萩、きくに及ばぬ、最前もいふた通り、君を見限つて家出した不忠者、歸らりやうはづ

がない、早う外へつきだしや。と、するどき詞に清十郎『ソウいふお聲は母人樣、お腹立はご尤なれど、何卒ごきげんなほされて、ご對面。と、ひれふして願へば、小萩もともぐ\に『モウし母さん、さつきに私へ仰しやつたおさとし、お道理しごくの事なれど、三年ぶりに戻らしやんした清十郎樣、私を不便と思しめし、お顔をみせてあげまして、下さりませ。もくもり聲、母はなほ〱聲はげしく『あふてくれならあひもせうが、顔を見たらば勘當せねばならぬぞや、夫よりはとつ〱と此處をばたつてゆきおろう。と、氣強き中にも慈愛のことば、清十郎はありがた涙『スリヤご對面がかなはゞ、ご勘當とな、ハヽア此上は何をかつゝまん、三年以前某が家出せしは、御主君政宗公の御差圖『ナニ家出したは、御主君のおさしづとな、夫きいては捨ておかれぬ、改めて逢升う。と、しづ〱出る母岩手、小萩も側に不審のむね、清十郎は威儀を正し『ハア久しぶりのご對面、清十郎恐悦に存じまする『オヽ其よろこびは私事、シテ家出した其わけは『其仔細と申するは、過し正月の曠れのかけ弓、某が未熟より負けをとりしはせん方なし、其の夜は丁度當直の番、一人御前に伺候せしに、殿は身近かく某をめされ、われ日外小田原の陣中にて、一旦豐臣家に隨從したれど、いつ迄かれが下風にたゝんや、不日に旗を押し立てて、日本國を手に入れん我大望、さし當つて邪間になる蒲生氏郷、かれを討とるその時は、秀吉の片腕を取たも同前、汝これより會津ゑ至り、清壽院の鐵禪と申し合せ、此謀を回らせよ、此儀は家中の面〱にも、極秘密なる大事なれど、汝を見込んで申付る、汝がこゝを去るならば、今日の勝負を仕そんじ

て、それを耻ぢての國遠と、家中の者まで疑はじ、當座の餞別取らすると、御さし添の一腰を、下し玉ひし身の面目、ハヽ畏り奉ると、即座の御うけ、母上にも告る事ならねば、其より直に會津にたち越え、鐵禪和尚に身をよせて、伺ふ折しも幸に蒲生が股肱の田丸直政、獵くらの歸へりがけ、淸壽院に休息し某を見て抱へんと、こはれし時の其嬉さ、直樣田丸に伴はれ、小性勤めも二年餘り、不便を加て使はる其つらさ、恩義のかせはかけられたれど、主君の仰せにかへられずと、時を伺ふ折こそあれ、去る五日に氏郷が、田丸の邸に招かれて、酒宴亂舞の其跡で、一宿ありしは天の與へ、本望成就此時と、忍び入たる、寢所の內『オヽ只一刺さしに氏郷を、首尾よう討つて「サヽ只一さしと思の外、彼にもかねて某を、間者と覺つた謀、寢所はもぬけの夜具ばかり、コハ仕損じたり口をしと立たんとせしに一間より、かけ來る近習に取かこまれ『ヤヽ其マア危ない處をば、ヨウマア切りぬけて『切り拔んと働けど、終には刄をうち落され、押られたる繩目の耻』シテ〳〵其あとは『本より惜しまぬ一命と、覺悟極めて候ひしに、氏郷直政出來り、傍の近習を遠ざけて、詰問數度の其上に、證據の香合出されし上は、隱しおほせぬ我素性、捨る此身は厭ひねど、是こそ君の御大事と、心を痛めて死を待ちしに、氏郷ご仁智のさとし、大崎會津合体して、奥羽を治め靜めよと、關白殿下の內意までを言ひ傳へ、とく立歸つて此由を、我君に申せよと、いましめ解いて免されし、情に向ふ刄なく、オメ〳〵と其場をば、立去つて候ひしが、つら〳〵思ひ回らすに、かほど仁義の豐臣蒲生を、討亡ぼさん御企ては、おほそれながら主君の

ひが事、諫め書をたてまつり、御心をひるがへさせんと、認め置たる此一通、此上の御願ひは、母上より我君へさし上げて玉はりたし、忠義の爲とはいひながら、二君に仕へし清十郎、重き仰せをしそんせし申わけ、今此處で潔く、拜領の刀にて切腹なさば、御手討ちになりしも同前、先だつ不幸はおゆるしあれコレ、小萩どの、あとの孝行たのみ入る。と、口にはいへど丈夫も、是が此世の名殘ぞと、胸にせきくるため涙、始終を聞いて驚く二人『ソウいふ事とは露しらず、むごういふたをこらへてたも、げに武士の道ばかり悲しいものが世にあろか。とゞめたうてもとめられぬ此場のしぎ、何としたらばよからうと、流石けな氣の母親も、とり亂したる歎きの露、小萩はワッと聲をあげ、三年このかた面影を、忘るゝひまもあら磯の、あまがふせやにたく鹽の、こがれこがれて浦松の、まつにかひある今宵のお歸り、顏みた時の其うれしさ、つきぬゑにしと思ふたに、いかに忠義を立うとて、腹きつて死ぬるとは、あんまり氣強い清十郎樣、わしやなんぼうでも死しはせぬ、死なねばならぬ事ならば、わたしも一所に手にかけて。と、すがりなげくぞ道理なる、不便と思へど清十郎、泣き入る小萩をとつてつきのけ、時刻うつれば不忠の不忠、母上さらばと短刀を、ぬくより早くとり直し、既にかうよと見えたる處へ、表の方に聲高く『早まるな信夫清十郎、伊達政宗對面せん。と、呼はつて、しづ／＼入り來る大崎侍從、思ひがけなく三人は、ハッとばかりにひれふして、下座の方へとかしこまる、政宗莞爾とうちゑみて『珍しや清十郎、無事の對面祝着／＼、今夜月の明きに乘じ、そことなくうかれ出で、はからず來か、

る此住家、最前よりの物語、殘らずあれにて聞き取つたり、其諫書とくこれへ。と、仰せにハツと母岩手、一通捧げて奉れは、つらつらとよみ下し『年にましたる清十郎か忠義、まつた關白殿下會津宰相が仁智のさとし、此政宗感愧にたへず。今より大望をひるがへし、豐臣家に隨從せん、かほど天晴なる汝をば、切腹させんとまで思はせしも我誤り、其誤りを正しくれたる褒賞に、改めて二千石に召し出さん、岩手か健氣な志、此母にして此子あり、早く小萩にめあハせて、信夫の家を續がせよ。と、殘る方なきおんさしづ、清十郎は進み出『コハ有難き御仰せ、數にも足らぬ此身の微忠、御許容ありし其上に、大祿賜る過分の譽れ、關白殿下の內意の如く、蒲生と御和睦あるならば、伊達の御家は萬々歲。と、歡び勇めば母娘、歎きにかへし嬉しさを、つゝむに餘る袖袂、かきつくろいて笑顏の眉、政宗機嫌斜ならず、夜は早明るに程近からん、是より直に清十郎を、身に從へて歸城せん、いざとばかりに名將の、心は廣き宮城野の、小萩がたてし貞女の操、母の鏡と世の人の、いはでやまめや岩手の誠、しのぶに堪へぬとらはれの、耻をしのびし忠臣義心、功成したる美少年、高き其名ハ後の世ゝ、殘る湯淺の常山紀談、筆に傳へて芳しき。

（終）

◉萬金丹

予は素秋田藩にて、三百石を領せる、槍一筋の家の次男ありき、同じ江戸詰にて、千石を領せる、車善左衛門の次男同苗善七郎、六百石を領せる、石川十郎の三男同苗新之助、五百石を領せる、宮田内記の四男同苗左門など呼ばるゝ同氣相求むる少年仲間と、一歳の春連立ちて、吉原の夜櫻を見に行き、一杯機嫌に任せて登樓なし、解語花を手折りしが病着きにて、其後一度が二度、二度が三度、武夫の心は無くてこは如何に、花に戯れ月に浮れて、意馬の狂ふに乘せられ、心猿の迷ふに引かれ、土手八町を通ふのみか、暖かなる鴛鴦の衾の裡に、濃かなる雲雨の夢を貪り、流連する事などあるまでに至りぬ。

惡事千里の譬へ、此事遂に親共の知る所となり、法度嚴しきは武門の習ひ、かりそめにも兩刀を手挾む身を以て、汚らはしき遊所通ひするなどゝは、言語同斷不埒の振舞と、主君に屆けて久離勘當、予を始め車、石川、宮田の三人、同年月同日に屋敷を逐はれ、手振り編笠の身とはなりけり。

其後彼處に五日此處に三日、寄食人居候と名は異れども、狂歌に謠ひ川柳に穿ちし如く、殿でなければ樣でなし、時に先生貴公大將、三杯目にはソッと出す、せうこと無しの子煩惱、飼猫にも世事を云ひ、下婢にも上手を遣ふ、遠慮と氣兼の果敢なき境界、果は、江戸の町にも住詫びて昔男ならば、きつゝなれにし唐衣と、歌でも吟する所を、當世男のことなれば、まゝよ三度笠よこちよに冠りと、都々一を唄

ひながら、信州小諸在の野澤といふ村に、いさゝかの知邊あるを尋ね行き、藝が身を助くる程の不幸、少し算筆の出來るを便宜に、一軒の小家を借りて寺子屋稼業。

此處等は草深き所にて、庄屋と旦那寺の和尚の外は、四角な文字を讀む者なければ、好い先生樣がをいで下されたと、村中の者が大喜び、草苅り歸りの露の乾かぬ衣裳のまゝ、田植戻りの泥を落さぬ手足のまゝ、或は暑さに休む夏の晝、或は寒さに凍ゆる冬の夜、阿兄い株の若者、わんぱく盛りの餓鬼、甲となく、乙となく、稽故に來る者日增之に植ゑ、漸く飢餓と凍寒とを免かるゝに至れり。

やがて村の庄屋も予を愛顧にされ、朝夕往來するやうなりたるが、予は聊か圍碁の嗜好あり、一日庄屋殿の相手をしたるが、予の方が三目以上も强かりしかば、先生は圍碁も上手なりと、非常莫大……非常莫大とは吾秋田人の言癖なり……非常莫大に持囃され、造酒業の隱居にも、旦那寺の和尚にも紹介され、算筆の稽故の暇には、何時も白と黑の爭ひを試み、風雅でも無く洒落でもなく、せうこと無しに日を送れり。

寒國の習ひとて、秋の來ること逸早く、昨日まで蜩の聲涼しげに漏れたる、裏の雜木の森も、いつしか霜に染められて、下葉よりやゝ色づきつゝ、天地を飾る錦を織始め、山田の稻は殘りなく苅られて、落穗拾ふ雀の聲、時を得顏にかまびすしく、夫にひきかへ畔に佇立む案山子は、用ひられしは昔にて、今は誰顧みる者もなければ、手に持る弓矢のわざとがましく、捨つべきものはとかこち顏なり、相木川

の水は我田々々に引きつくされ、此頃ハ流れ涸れて所々川肌を現はし、保福寺峠の背に隱れんとする、わかく\とつれなき夕日の姿、名殘を一抹の茜にとゞめ、夫を招かんとてか籬根の薄の、風に搖らるゝもしほらしく、繁り合ふ小草の陰に身をひそめて、しのび音に啼く虫の音も、身につまされていと哀れなり。

稽故の小童等ハ七ツさがりに殘らず歸り、いつもならば入替りて來る碁敵の人々、作酒家の隱居は風の心地にて臥し、旦那寺の和尚は三里奥の上畑まで、法用の爲とて出て行かれ、庄屋殿さへ今日は生憎、親類の集會ありとて來らねば、一人緣端に腰うちかけ、物さみしくも詠めゐたり。

此國の俳人一茶の句に曰く、婿にでも、つゝ這入ふか、秋の暮、實に眞、吾身血氣の過失より、主君と親に見放され、見る影もなき今の零落、小糠三合の譬はあれど、縱令遮莫、貰ふてくるゝ家だにあらば、婿になりとも身を入れなんと、吾知らず獨語みつゝ、壯士は秋に感ずるとかや、過去を懷ひ、現在を悲しみ、將來を案じ、萬感胸に集ると共に、吾と一所に屋敷をはれし、遊び友達の彼の三人は、今は何處に如何にしてをるならん、別れて後は互ひに音信不通、其中に取別親しかりし車善七郎、彼は文武の才にも秀で、器量骨柄も人に過れ、一家中の評判者なりしが、屋敷を逐はれて其後は、愈々酒と色とに身を崩し、世渡る便宜の無きまゝに、切取り強盜は武士の習ひと、今は綠林の群に入り、犯せし惡事の重なりつゝ、お尋ね者の身となりはて、此中仙道にも人相書の廻つてあるとの噂、千石も領する家に

生れ、人に優れし器量を持し身の、如何に酒色の二つに迷へばとて、逐剝强盜にまで身を落すとは、なさけなき車よ、己の罪の己を責て、高天に跼くまり、厚地に蹐しゝ、此濶大き日本の土地に五尺の身軀おきどころなく、今は如何なる處に、如何にして日を送るらん、夫とも既に天の網に罹りて、日光見ぬ牢獄の内に呻吟きをるにや、又は三尺の秋霜一閃の下に骨原の霜と消たるか、可惜しき善七郎よ、と向秀が笛を聞くの悲み、王粲が樓に登るの想ひ、舊きを懷ひ鄕を慕ふのあまり、そゞろに昔の友さへ思ひいでゝ、夢現の境に其身を置き、茫然として淚の襟を濕すを知らず。

此る折には平素聞馴れたる、甲州通ひの馬子共が、驛鈴花やかに響かしつゝ、節面白く謠ひ行く逐分け節も、何とはなしに物の哀れを添ゆる心地して、さし俯首きてゐたりしが、颯を吹出る夕風に、冷りと襟首を洗はれて、始めて吾に復り頭を擡げ、不圖門口を見遣る途炭、廻し合羽に身を裹み、菅笠前下りに冠りたる、商人風の一人の旅人、足早に予が家の門に入るにぞ、不審と思へばヤニハに口を開き。何者なるぞ。と誰何むる聲の下、彼は早くも進み來りて、予が目前近く突立つたり、其擧動のあまりに怪訝しければ、予はふたゝび聲を强めて。御身は何者なるか。と尋ねたるに、彼は猶笠をも取らで。左云はるゝは鳥海氏にて候ふか。予はますます驚きいよいよ怪みぬ、夫は笠の下より出たる此一句が、予が姓名を言出たるのみならず、然も何處にか聞覺えある聲音にて、加之るになつかしき國訛りさへ交りたればなり、予は吾知らず詞を早めて。如何にも予は鳥海なり、シテ、御身は……予が此答よ、安堵し

たるもの丶如く、彼は何か心に點頭きつ丶、被りし笠の端に手を掛け、四邊一遍見廻せしが、やがて其笠の緒を解き始めぬ。

折しも日は早名殘なく山の端に沈みて、往來の人も全く絕へ、遙かに響く山寺の鐘の音いと、幽かに聞ゆる草間の虫の聲の外は、何ひとつ耳に入るものなんなかりける、絕へて久しき鳥海氏、拙者でござる。と笠ぬぎ捨てさし出すれ、おぼろげながら見紛ふべくもあらぬ顏、聞覺へある確に其聲、ハッとばかりに驚きて、予は只一句。ヤ、貴殿は車氏……今しもその事を思ひ、その惡を傷み、その身を惜みゐたるその人の、圖らずも尋來りて目前に突立たる、あまりの意外に驚かされ、あまりの不思議に打れて、予は暫時の間呆れゐたり、彼は甚く夫を氣遣へる樣子にて。其後は如何にわたられしぞ鳥海氏、此くゆくり無く尋ね來りしも、貴殿に一件折入たる賴みのあればこそ、吾身の上に就ての事は、風の便にも聞れつらん、舊誼を想はずば、爭で此く推しつけがましき擧動をいたすべき、無禮の段は幾重にも許したまへ。と喞つが如く、詫るが如く、頻に訴ふる樣子を見て、予れ二樣の感じを胸に起し、左やせん右やせんかと、その判斷に苦みける。

彼は莫逆の舊友なり、同じ過ちを犯し、同じ咎を受け、共に流浪の身となりし、四人の同伴のその中にても、最も親しみ敬ひたる人なり、一別以後は斷蓬浮萍、四年あまりの永き月日、夢路に見へし俤の外、鴈の信さへ通はせしこと無し、いざと坐敷に請じ入れんか……彼は刑狀持の身なり、天の網を潛り

て世に在る者なり、天倫と人道の二つに背きて、逐剝强盜の大罪を犯し、多くの良民を苦しめて、一身の嗜欲を恣にせる、不義不仁の逆賊なり、夫を知らざればともかくも、知りつゝ片時も止むるは、天下の法度に背くのみか、武士たる者の本意に違ひ、人倫の道にも外るゝなり、又彼が賴と云へるも、恐く善き事にてはあらざるべし、潔く斷りて逐返さんか……快く請じ入れて歡待んか逐返さんか、請じ入れんか。

心なき身にも哀れは知られけりと、西行上人の詠じたる、鴫立つ澤のそれならねど、目に見るもの耳に聞くもの、總て淋しさを添ふる秋の夕の景色、只管予の思想を哀れといふ方にのみ傾けゝれば、遂に予か判斷の情の爲に奪はれぬ、此淋しき秋の暮に、立寄る陰も無き彼の身の便宜なきは、そも如何にあるならん、世に唯一人の友と想へる予に向ひて、何事か賴まんとて折角尋ね來りしものを、情なく斷はられて逐返されなば、彼の失期は許幾ぞやと、彼の心の裡を想ひやるにつけ、今は只哀れといふことのみを感ずるに至りぬ、窮鳥懷に入れば、獵夫も之を取らず、況んや莫逆無二の親友をや、彼は、天下に對してこそ、免すべからざる大罪を犯したれ、予に向つては、いさゝかにても冒せることなし、彼は世の人の爲には、畏るべき强盜なれども、予が身に取ては依然たる舊友なり、彼を請じ入れて歡待すは、法度に對しては濟まぬことながら、人情より云へば止みがたき事なり、今こそ浪人なれ、予も以前は槍一筋の武士、無賴の博徒、市井の俠客すら、其身に換其家に換ても、罪を犯せる子分を隱匿ひ、法を蔑

にせる同類を庇護ふとかや、危きを見て苟も免れ、己を頼める友に背くハ、不義なり、不信なり、不慈なり、卑怯なり、腰拔なり、博徒俠客にも劣れる行ひなり、若も不幸にして彼を宿せし事の顯はれ、公邊の沙汰に及べる時ハ、屑く其罪に服せんのみと、此く决心して漸く口を開きぬ。安心せられよ、車氏、御身の事ハ噂にて知りぬ、恙なきこそ何よりの幸ひなれ、シテ余に對する賴みと云ふは、ソモ如何なる事にて候ふぞ、又御身は如何にして余が此處に在るを知られしか。と、予が此答と問とは、彼に滿足を與へたるものゝ如く、其聲は前に變りて勇ましげなる中にも、甚く愧たる調子にて、忝け無く候　鳥海氏、昔に變らぬ貴殿の高誼、吁々想へば面目なき此身の不始末、貴殿にも定めて愛想をつかしをらるゝならん、物の理非事の善惡を辨へざる程、愚なる吾にもあらざるハ、貴殿も豫て知らるる所、然るに如何なる天魔の見入りけん、酒といふ曲者に狂はされ、色といふ惡鬼にたぶらかされ、惡事と知りつゝ人の財を掠め、果は酒の曲者を飽し、色の惡鬼を歡ばす爲に、いつか其手を血汐に染めて、人の命を取りじも拾餘名、その積惡の報ひ來て、今は刑狀持の果敢なき境界、梢を拂ふ松風の聲にも心を寒からしめ、岸を洗ふ白波の音にも膽を冷し、虎臥す深山の奥にも身を置きかね、鯨鳴く荒き海邊にも足を止められず、六拾餘州の日本の地に、五尺の身体の置き所なき、僅か一時數刻の其間も、心のどかに眠られず、明日にも縛めの繩にかゝりなば、二つありても足らぬ此首、此庭の千草の葉末におく露よりも猶たのめぬ命、せめては息あるその內に、一夜はおろか半宵にても、手足を延して安々眠らば、是に增したる

思出はあらず、貴殿の此地に居たまふことは、曾て江戸にて石川氏に邂逅ひし時、談話の序に聞置きたれど、何分世を忍ぶ日蔭の身、晝は伏し夜は行くも猶足らで、日に幾度か形粧を變へ、捕吏の者の目を掠むる次第なれば、音信をなさんも心に任ず、且なまじひの事をして、夫が爲貴殿に累ひを及ぼしてはと、今日まで故意と音信はせざりし、疎遠の段は許してたべ、賴みと申すは今もまをせる、責めて今世の思出に、手足を伸べて何憚らず、枕を安く眠りに就きたさ、一夜の宿りを請はんのみ、舊誼にめで、許されなば、是に增したる喜びはあらじ、いかで此儀を聞入れたまへ。と他事なく見ゆる舊友の言葉に、いとゞ哀を催ほして、予は一議もなく其請を許し、奥の一室に請じ入れ、快く彼を宿らしめぬ。

相木川の香魚は、此邊第一の名物なり、幸ひ懇意の漁夫より、晩酌の下物にとて貰ひたるが、大小併せて五尾あり、是ぞ今宵の珍客に向ひて、第一番の馳走なり、野菜の類は朝な夕な、畑戻りの村人等が、何呉となく携へ來れるが、獨身の予には喫へ切れず、今日も種々の貯蓄あれば、內庭の隅より二品三品採出し、料理は元より手馴れたれば、燒物煎物浸し物、吸物までも取揃へ、咄嗟の間に出來上りぬ、以て予が不時の需を待つと云ひし、氣の利きたる東坡の婦はなけれど、幸ひ買置きの斗酒あれば、夫を燗して膳を隔て、久々ぶりの對酌ひ、鶴背仙遊彼一時、夜櫻の事、燈籠の事、さては當時互みにありし、面白き事、華美なる事、思ひ出、語り出、献しつ酬へつ、一杯一杯又一杯、數盃を傾くる其間に、予は彼が氣高き顏色の昔に變らず、彼が人に優れし器量の、今も猶言葉の端端に現はるゝを見聞して、

可惜しく想ふ心の彌增しければ、些少詞を改めて。今より懺悔發起して、出家沙門の身となり、難行苦行、斗藪行脚、罪障消滅を佛陀に祈りなば、或は臥床の上にて目を眠る事を得なましと。卿つが如く勸むれば、彼は頭を左右に掉り、否とよ、今更懺悔するも出家するも、既に十日の菊六日の菖蒲なり、縱令高野に登り熊野に潛むも、此くまで嚴しき詮議に逢からは、爭で何時までか免れ得べき、殊に多くの人の命を奪ひたれば、其身非業の最期を遂げ、犯せし罪の萬分一なと償ふは、世の諺に云ふ盜賊名利、果は三尺高き木の空に、此首を晒すは豫ての覺悟なり、併し夫程の事を辨へながら、猶此く身を扮して天網を潛り、僅に一日の安さを偸むは、實に吾ながら未練の心底、是も凡夫の淺廡しさにこそ。と左も味氣なき答をなしぬ。

夫より又是まで彼が經來りし行路難、種々なる話に移りしが、予は不圖彼に向ひて、此る問ひをこそ起しけれ、御身は從來許多の人の命を奪へりとの事なるが、縱令金錢の欲しき爲め、眼の眩みし時とは云へ、御身の如き辨別に富める人の、辜無き人の命を取るなれば、何とか心に感することのあらん、ソモ如何なる想ひのするものにや、試に打出して余に聞せたまへと……

善七郎はいさゝか形を改めて。左ればなり鳥海氏、下駄の齒の下に飛込みし蛙を、思はず知らず踏殺してさへ、心好らぬものなるに、況して人一人の命を取るをや、又況して待ち構へ尾け狙ふて、罪も無く科も無き人を殺すをや、始めて人を殺せし時の吾心地は、實に何とも云はれぬ程なりき、思ひがけ無き

電光一閃の下に、キャッと一聲最後の叫びをなしてより、暫時の間は現世の暇乞ひ、手足を藻掻きて苦痛の樣、見るも中々哀れにて、如何に金錢の欲しければとて、吾は何故此く淺麻しくも、罪無き人をば殺したるぞ、臨終の際の此人の、遺恨の程は如何許りか、迹に殘れる父母妻子、兄弟緣者の悲嘆のみか、吾に對する其人々の、怨み憎みも如何許りかと、夫を想ひ是を畏れ、今更後悔の念に耐ず、始め奪はんと考へし、其人の懷中の財布をも忘るゝ許りなりし、左れども此る心地は最初の事にて、二人を殺し、三人を手に掛け、漸次に數の重りて、四人五人となるに至れば、如時しか不快の心地は失せて、殺さんと狙ひし人を手に掛け、奪はんと想ひし金を占めたる時は、先は望み達したりと、却て心地好き感じを起し、演劇の定九郎ならねども、造化精妙と口ずさみて、獨笑みさるゝ事さへありと、彼が得意然と語るを聞きて、予は屢々點頭きて。習へば性となるとかや、移り易きは人の心、實に馴るれば然ることもありぬべし、くらきより、くらき道にぞ、入りぬべき、遙に照せ、山の葉の月と、故歌の訓誡は爰の事、世に恐ろしきは人の心、愼むべきは習ひこそ。と吾知らず嘆息して、ふたゝび語を續き。夫につけても一つの不審は、御身が今日の扮裝なり、身に寸鐵だも帶びざるやうなれど、時機の時には何を以て、人の命を取りたまふぞと。尋ぬる語を遮斷りて、車はカラ〳〵と打笑ひ、腰に挾みし手拭を外して片手に打振ひ、是こそ吾等の正宗村正、身に寸鐵は帶ざれども、是さへあれは大丈夫なり、鳥海氏、人を殺すに刀を用ふるは、初心の間の所爲のみ、最初は吾も二尺三寸、長き刀を用ひたれども、人切庖丁を腰

に手挾みては、相手も自然と用心すれば、暗殺するの隙を得がたし、相手に油斷をさせるには、刃は全く無用の長物と、此く悟りてより後は人切庖丁を廢め、短き物に換たれども、夫さへ遂に邪魔ありと感じたれば、今は九寸五分をも身には着けず、元來盜賊の目的は、黄金に在りて生命にはあらず、然れば相手に油斷させ、黄金のみ奪ふか上策なれば、全然町人風に身を打扮し、懷中重き旅人と見るからは、程好く言寄りて同伴となり、尤實直に交際ふて、あくまで他意なきものと思はせ、相手に充分油斷させ、目的の黄金を奪ふのみ、若も相手の用心嚴しく、平和に望みの遂げ難くば、其時始めて非常の手段に訴たへ、二日三日と連立ちて、人里離れし山道か、或は淋しき畷手などにて、手ごめの石を此端に包み、隙を伺ひ背後より、腦顛目掛けてタッタ一撃、手輕く相手の息の根留め、望みを遂る分の事、馴るれば世の中に人を殺す程、容易き事は無きぞかし。と何心なく語るを聞て、予が心の中には何とは無しに、最初問へる時には異りて、一種畏るべく厭ふべき感じを起しぬ。

火の車の指物の光と共に、武名を天下に輝かしたる、佐竹家第一の勇將たる、車丹波守の子孫、祿千石を領せる名家に生れ、お乳母日傘にて育ちたる善四郎、如何に流浪せしとは云へ、何程零落せしとは云へ、手拭一筋、石塊一個にて、人を殺すに至りしとは、變れば變るものにこそ、嗚呼頼み難く畏るべきは人の心なりと、又更に嘆息すると共に果は吾身までが不安心になり、此程の惡人となるからは、舊き友親しき交の吾なりとて、命を取らぬとは云ひがたし、此くとも知らで信義を思ひ、快く一夜の宿を貸

せしこそ、今更思へばおぞましけれど、醉ふたる樣に紛らして、思案の頭を垂るゝ折しも、提燈の光りに道を照して忙しげに入來る其人は、庄屋殿の庭子の正作と云へる若人なり、親類方の寄合すみたる後、夜食の馳走に造へたる、蕎麥一椀振舞をしたければ、今より余と連立ちて、すぐさま御出下さるべし。との口上、如何はせんと躊躇へる予に先ちて、車は先づ口を開きて。我が在ればとて、斟酌は無用なり、庄屋殿とあるからは、格別大事の花主先なり、疾く行きて疾く返られよ、云ふその詞と目顏の中に、若も怪まれては双方の不爲なりといふ、其意味さへ籠りて聞ゆれば、予も其意を得て、然らば暫時無禮を許したまへ、往きなば例の圍碁も始まり、少しは時刻も遲るべければ、空く歸りを待ち玉はず、自宅と思ふて遠慮なく、一杯機嫌にて寢入りたまへ。と言葉殘して庭子に從び、庄屋殿許へと赴きたり。

信州の名物は、田每の月と、善光寺の如來、更科の蕎麥、其蕎麥は予が尤も好物なる事を知りて、故意の招きなれば、庄屋殿の滿足も其面に現れて、即て馳走も首尾好く濟み、此くあらんと豫て期したる、圍碁の遊びは、果して始められぬ、猶居殘りたる親類の甲乙、予が此道の上手なるを聞知れば、生にも一番、生にも御稽古をと、請はるゝまゝ賴まるゝまゝ、相手變れど主代らず、思はず數局を試みて、そぞろに夜の更るをも知らざりき、予が心は先刻よりの樂みは失せて、又も快らぬ波は立初めたり、車は定めて安らけく寢入りしならん、予は俄に彼を嫌ふとにはあらねども、彼が先程の談話にて、やゝ畏ろしくなりぬ、此家へ招がれしを幸ひに、今宵を此處に過して、明日早く吾家へ歸るべきか……イヤ、

〳〵、如何に親しかりし友なりとは云へ、久しぶりにて尋來りしに、夫に一夕の留主を守らするとは、禮を欠けること甚大なり、彼も恐く不快に感ずるならめ、イナ、單に不快に感ずるのみならず、幾分か不安心にも思ふならん、彼に不快と不安心を感せしめては、折角今宵宿せし吾志も、徒に水泡に歸する道理、夫より少も早く暇を乞ふて、歸りて彼と枕を併べ、共に一室に臥すこそ當然なれと、漸く心を定めければ、暇乞ひさへ疎忽々々に、庄屋殿の家を立出て、畑の中の捷徑を取り、足を早めて吾家へ歸りぬ。

彼は既に能く睡りしならん、うつそみの此世の思出になよたけの一夕なりとも、快く睡りたしとて、故々吾家を問ひたるに、みだりにその夢を驚すは心無きに似たりと、故意と裏口より進入り靜に立寄る一室の内には、こはそも如何に展たる布團の上に、彼は猶形影自ら相憐む如き樣して、行燈の火を背にしつゝ、悄然として坐しゐたり、予は驚きて。御身は未だ睡り玉はぬにや、夜も早甚く更けたるに……。と云へば、彼は見返りて。貴殿を疑ふとにはあらざれども、行く先きが庄屋殿の事なれバ、若や密告などしたまふこともやと、思ふ心の自ら抑へ難くて、幾度か睡らんとすれども眠ること能はず、此くは貴殿の歸りを待居たるなり。と答へて呵々とうち笑ひぬ、予は彼が風聲鶴唳の身を憫み、又彼が多くの罪無き人を手に掛けたる、其罪に身を責められて、罪ある彼が其身の上を、自ら恐れ自ら疑ふも道理なりと、此く思ひつゝ手早く寢衣に着更へ、予も豫て展をきたる蒲團の上に坐しぬ、左れど前刻の恐れと疑

ひとは、今猶予が胸に横はりゐて、とみには眠りに就くへくもあらず、彼も亦猶目の冴たる様子なれば、習ひ既に性となりて、今は全く慈悲仁愛を失ひたる、彼が闇黒なる胸の内にも、猶一點良心の光を存するや、否や、試みに確めおきなんと、思ふ心の動きそめければ。如何に車氏、最前の談話續きに就きて、今一件問ひたきことのあり、御身が今まで手に掛けたる、十有餘人の人の中にて、尤も憫れに罪深く感じたる者は無りしか、有らば話して聞かせ玉へ。と問へば彼は點頭きて、俄に形と共に詞を改め。左なり今猶吾心に殘りて、痛ましく思ふ一事こそあれ。

思ひ廻せば一昨々年の冬、吾人を殺し始めてより、恰是八人目の事なりき、奥州街道に網を張りて、好花主のかゝるを待てをりしが、白澤の宿より尾けし一個の旅人、夫は江戸より戻りの會津藩の飛脚、其年齢は四十有餘にて、筋骨逞しく眼光鋭く、天晴武藝も人に優れ、一癖あるべく見受られしが、懐中重げなるその様子、三百 両 は確と思へば、此奴尋常の旅人と違ひ殊に會津藩の者なれば、容易く手出しはなしがたけれど、重き財布は他に看過し難し、如何なる英雄豪傑なりとも、暗殺するに難き事あらんやと、自ら勇氣を奮起し、我は其時も旅商人に身を扮せしが、商賣用にて山形まで行く者と僞はり、程好く言寄りて慇懃を通じ、二日の間同伴となり、第三日目の黄昏時、横川より糸川に越す山路にて、往來の途斷へしを幸ひと、飛脚の油斷を見すまして、其頃は猶手拭を使ふまで、人殺しの術の進まねば、用意の九寸五分を窃に引抜き、力を籠めて飛脚の横腹を、グッと一突衝通せしが、飛脚は其手をム

ヅと取りそのまゝ、其處へドッカと坐し、待てと一聲掛けたるが、柔術の心得ある大力に、確かと取られし予が手なれば、引外さんこと容易からず、鍔元深く突込みたるまゝ、ホッと一息躊躇ひしが、飛脚はその鋭き目を光らして、吾顏を熟と打守り、苦しき息をホット突き、吾等飛脚を身の勤めにして、此街道を往來すること、二拾餘年百度以上、習ふより慣れろの世の諺、自つと人の善惡を見知り、彼は枕探し是は胡麻の灰、一目睨めば違ひし事なく、何時の道中も許多の金銀を、懷中せざる事はなけれど、一度も不覺を取らざりしに、今日といふ今日此失措、氣高き品格優美しき言語、其方ばかりは如何見ても、惡事を働く者なりとは、夢にも思ひがけさりし、其方に此る働き爲せしは、全く此方の油斷をいふもの、飛脚を其身の役目としながら、盜賊と知らずして同伴に成り、不覺を取りしは吾過失、決して其方に罪は無ければ、少しも其方は怨むまじ、熟々其方の樣子見るに、卑賤き素生の者あらず、由緒ある人の血氣の誤ちより、此る淺麻しき次第には成果しならん、猶春秋にも富める身の、可惜器量を持ちながら、何時まで善らぬ事を爲し、果は刑場の露と消んよりは、今日只今此處にて吾命を取り、吾金を奪ふを、此世の惡事の仕納めとして、斷然心を改めて、之を資本に身を立てよ、其方も今は盜賊稼業、云はねど疾くに知りたらんが、此中には小判で三百兩ありと、云ひつゝ片手を懷中に入れ、胴卷取つて投出しゝ此手を押ゐしは臨終の際に、此事其方に言遺たさ、最早是さへ言へは此世に用なし、とても助からぬ此重傷、長く苦痛をさせんより、今一扶りして息の根止めよと、飛脚は握りて手を放ちぬ、予

は彼が潔き覺悟、彼が厚き親切、此二つに胸を打れて、身心恍惚として醉るが如く、短刀持つ手も委痺れて、ふたゝび抉る力は無く、只涙ぐみてゐたりしが、飛脚は聲を勵まして、ヤア卑怯なり若者、其方が短刀の使ひ樣、武藝の手練も平凡ならず、由ある武士と思はるゝに、此期に臨んで何を猶豫、疾く抉らずや、早くせずやと、言勵まされて氣を回復し、弱る心を鬼にして、眼を閉ちて二刀三刀、漸く息を留めたるが、さながら吾と吾手にて吾身を抉ぐる夫よりも、猶も苦痛の甚しかりし、吾從來夥多の人を殺せる中に、此程甚しく痛ましき事は曾て無かりき今猶其事を思出す毎に、恍惚として其飛脚の姿の、目前に隱顯く如き心地ぞする、然るに其親切なる遺言に背きて、いよ／＼惡事に身を委ね、此くお尋ね者の身となりしを、彼人が草葉の陰にて知りもせば、怨もせん、嗚呼と車が歎息の聲、予も亦共に憐れを催し、膝に涙の一滴二滴、何事も無う其夜を明せしが、彼は明未に起出て、予が朋友の信義を忘れざる、厚き情誼を幾回か謝しては、さすが鬼の目にも、一滴の涙に今生の別れを惜み、見返り勝に立出しか、姿は見る／＼朝霧に消失せぬ、何地往にけん、如何にしけん、雲又山、山又雲

其後二度綿入を襲ね單衣を着て、三度目の夏の初のこと、富山の賣藥行商が、伊勢の朝熊の萬金丹幾包と、一通の書狀とを持來りぬ、封を切て讀下せば、始めに過つる年の禮を述べ、終りに今猶不思議に天の網を免れ、此くして娑婆に彷徨ひをれば、憚りながら安心しくれよと認めあり、其差出人は誰、其居所は何處、二つながら分明ならねども、手紙の面に見覺ある水莖の跡……彼の 車 某、

（完）

◉竹生島

（上）

いづれの御時にかありけん。豊原峯敏といふ樂人ありけり。其家の道なれば。管絃いづれも優れたるが中に。殊に琵琶をよく彈きて。帝の御覺もめでたかりしに。他より猜みを受て讒言せられしかば、御寵しみ漸くに衰へて。果は官を免されにければ。世をはかなく思ひとりて。妻子とゝもに嵯峨の里に隱れ住みて。終に歿死りけり。後には妻の刀自と娘敏子との哀しみやる方なく。あぢきなき月日を送りけるが。敏子はことし十に五つを添へたる齡にて。眉目容止清らに嬌愛づけるうへに。心ざま優にやさしく。母に事へていと孝なり。幼き時より父の膝元にて學文の暇には。家の事とて管絃を習ひしが。此娘も琵琶を好きければ。いとほしがりて教ふるほどに。性質ての妙手なりし故に。年多くたゝぬ間に。ほと〳〵父の撥音にも劣らぬまでなれば。あはれ男ならましかば。家の風をも起し。天の下の上手と呼れんものをと。かこつ時もありけり。かゝりければ家の秘曲を悉く授けしが。これなん早く歿去るしるしにもやありけん。敏子はかくまでに藝に堪能なりけれど。今は家貧くなりて。調度の類ひもみな代なして賣盡したれば。日にけに心淋しき上に。母が何となく病みて。臥しがちとにはなけれど。起居ものうきさまなれば。敏子の心遣ひは一方ならず。近きあたりの人に賴みて。人の衣ぬひ洗ひ滌ぎなどして。

僅のあしをまうけて。朝夕の細き烟りたつる便きとし。身は解き洗ひ衣のみ着て。髪あげさへせぬがちなり。元より少女の事なれば。よき衣はほしかれど。世は甲斐なきをいかんせんと思ひ直しても。うち泣かるゝ時もあれど。我と吾心をさとして堪ゐ忍びて居り。慰むかたなきものから。好むものを調じてまゐらすを。母の喜びて箸とり。物語りつゝ腰撫る程よ。母が心快く眠るなどを見て。之をせめてもの樂しみとしけり。斯くて敏子十七になりけるが。をのづからなれる美しさはすてがたくて。深山隱れの初櫻。うすき日影にほの匂へるさま。いひしらずめでたければ。誰いふとなく傳ひける程に。さらぬだに色好なる方に心浮るゝ若き殿上人等は。さる賤しき人なりとも。今の赫夜姫ならんにはなといふもあり。又よく元をしりて由ある人なり。さな卑しめそといへば。見ぬ先より甚く贔負もの哉と笑ひつゝ。物見にかこつけて。嵯峨にせうゑうして。彼家のあたりを浮れありき。壁の崩れなどより伺ひても。え見ずして空に歸るもあり。又折よく垣間見ては。思ひかけずはしたなき所にかゝるなまめかしきは仙女にやと。怪しむ迄に驚きて心惱ますも多かり。終は歌文などを人づてしていひよるも一人二人ならねど。敏子はさるたはれたる方には心をよせねば。皆手にだにとらで返しければ。彼少女は財もてなびかすべくもあらず。竹取の娘に物もとめられて。辛き目見つるよりは。思ひを遂ずともまさりたりといひてやみにけり。その頃時めきし紀の大納言の息子に藏人の少將保守といふが。敏子の事をきゝて。其かたちよりも親に孝なる心ばへの優なるをやめでけん。見ぬ戀にあくがれてゐたへず。一たび彼處に行きける

が。それより後は忍び〳〵に童をさへつれで。獨り出でゆくこと度重りければ。前の若人等はいつしか知りて。少將こそ彼少女に通ふなれ。いと妬き限りなりなど。さゝやきける程に。父の大納言きゝつけて北の方に。此頃少將が折々夜歩行するは。いと人聞わるし。よく諫め候へとの玉ひければ。北の方は少將を近つけて。汝はこの頃ゆかしき處いできて。嵯峨に通ふとか人傳にきくに。彼方は筋目の恥かしからねば。今零落てありとも。そを賤しむべきにはあらぬものから。勅勘蒙りし人の娘に語らひしなとありては。官家の御氣色も憚りあれば。いとせちなる思ひならむも。絶ゑ候へかし。若き時のならひなれば。これまでの事は父上もゆるし玉はんなど。なだめて諫め聞ゑければ。少將は顔うち赤めて。御命せをもどく詞も候はず。さと思ひ止り候ふべし。父君へはよきに取りなして玉はれといひて退きしが。其後猶微行のやまねば。大納言にはよく繕ひおき玉ひけれど。北の方ほと〳〵困じ玉ひにけり。

(下)

薄雪ふりたるあとの曇りなく晴れて。月のさし出でたるよ。にほひあひたる前栽の梅がゑに。まだ莟ながら薫らぬ花さきたる。寒しとはいへど。いと面白き夜のさまなれば。母と娘はさし向ひに端近う出て。窓の紙障子うちあけて。冴る月影をながめながら。なう敏子。年ごろ汝が甲斐〴〵しき孝行を。神佛も感じ玉ふらん。妾が病ひもやう〳〵治りて。殆々常のやうになりたり。あはれ世が世ならば。よき衣きせて冊きてなべ。人にも羨まれなんに。今はみる影なき此田舍に住ひて。水仕女にも劣りたる事をさす

るが。いと口惜くも心苦しき限りにこそといへば。敏子はほゝゑみて。母上の又さることをいひ出て物思ひし玉ふか。浮沈は世の中の常にて。理りに叶はぬわざして富み貴とからんよりも。道をふみ違へで貧しく賤しき方が勝れりと。父上も毎々教へ玉ひし事も侍り。美しき小袖を願はざるにはあらねど。今の身にはふさはねば。強ひて着たしとも思ひ侍らず。火焚き水汲業も。あれてはさまで苦しうも侍らず。たゞ母上の恙れてたりて。健康にならせ玉ふ。嬉しとも樂しとも思ひ侍りと聞ゆるに。母もげにいへばさなり。汝と二人かくしてあらば。世は心安うに過さるへし。されど又折々には。亡夫の事を思ひ出て。昔なつかしうこそ。こよひはいと靜なり。彼秘曲を久ぶりに彈きてきかせ玉へ。亡夫の撥音とも思ひて慰みあんといふに。敏子は心得侍りといらへて。傍の棚より取り下す。是なん物みな賣盡したれど。是のみは命にも換じと殘し置きつる。父が秘藏の琵琶にて。撥面には湖の中に青山の茂きを畫きたれば。竹生島と名づけたり。敏子は居すまゐを正して。四つの緒を調べて彈き出す。元より堪能の上に。父が心をこめて授けし秘曲なれば。其音其妙ともいはれず。母は耳を澄してきゝゐしが。やう〱奏で了りて。敏子は琵琶をさしおき。いと拙う侍りといふに。久しうきかでありしが。いとよく調ひて。殊にめでたくて。亡夫にあふ心地したりと。心慰めるやうなるを見て。敏子は嬉しく思ひけり。かゝる所に淸げなる若き男。月影に色あひは定かならねど。つやゝかなる狩衣着て。双袴は雪にぬれながら。柴の編戸をほと〱と叩きて。物申さんときこえけり。二人は驚きて琵琶を棚におほし。母は火桶を用意

する内に。敏子は門の戸をさし明るに。男は會釋して内に入りぬ。其後より又來る人ありしが。いと忍びたる樣子にて。傍の垣に隱れゐたりけり。男は二人に對ひて。某は紀の保守と呼れ候ふが。幼きより琵琶を好みて弄びしに。さる事ありて久しく遠き國に下り候ひしがば。田舍にはさるべき師もなく。都には豊原峯敏朝臣此道の堪能ときゝて。いと慕はしく。いかで朝臣に就きて學びなんと志しありし程に。都に歸り上る事となりしかば。我が志しを果す時來れりと喜びつゝ。歸洛すると直に人に聞くに。朝臣は已に世を去りて。御身ら二人殘り居玉へり。されど家の秘曲は娘敏子こそ悉く傳へたれとの事なれば。いとゞ本意なきものから。秘曲は絶えて敏子の君の傳へ玉へるはよろこばし。うちつけに見參して。授からんことを請はんと思ひしかど。一應には受ひき玉はじ。且は敏子の君もまだ世ごもれる年なり。己も若きに親しうせんはうしろめたしと。今夜までは御目も玉へらざりしなり。されど彼秘曲をいつか彈き玉はらぬ事はあらじ。一度聞得たしと折々は此處に來て伺ひしが。今夜はからずも御撥音をきゝしに。思ふにもましていとめでたく。年頃の望を遂て侍りし嬉さに。たゞに歸らんもさすがなれば。驚かし侍りしありといふに。二人共にうちきゝて保守が志しの篤きに感じ。あはれ亡夫が世に在る時に。君の如く道を執ずる人のありしときかば。いかばかり喜びなんをと。母のしをるゝに。娘も又父の事を思ひ出でゝ袖をしめらせけり。折しも案内して入來る人を見れば。保守少將が父の大納言なりければ。少將は母の北の方より諫められつる事もあるに。此處にあるは父の思ひもいかゞと。少し恥て居た

り。大納言は母と娘に初ての對面の詞はてゝの玉ふやう。いと面ぶせながら。此少將が此處の少女に通ふと。人のいふをいぶせく思ひ。諫めさせしかど。なほ夜歩行のやまねば。今夜嵯峨の御堂に參りつる序に。もしも少將が此處ゑ來なば。あひて恥みせんと。車を下りて忍びて此家の門に來りしに。果して少將の入たれば。暫し垣に身をよせて聞しに。あだなる戀のそれにはあらで。通ひしは四つの緒に思をかけしにて。今夜初めて敏子にあへる樣なれば。人のいひつるは譏らなりしと悟りたり。げに七度尋ねて人を疑へといふ諺もうべにこそと。うち笑玉ふに。少將も面起しなりと思ひけり。かくて其夜は大納言少將。同じ車にて歸り玉ひしが。少將はかの琵琶の事。敏子が妙手世に又あらじなど語り玉ひしかば。大納言より帝に聞ゑあげて。峯敏の勅勘をゆるされ。敏子は召し出されて宮中に侍らはせ。琵琶の御師となされしかば。都に家をつくりて母を住はせ。里下りの日は母を慰め。ます〳〵孝養怠らず。敏子は終に內侍となりて。身の榮ゑを極めしは。いともめでたき事にこそ。

（完）

◉胸算用

（第一）

午後三時三十分に、靜岡を發せし下り汽車の、中等室に乘れる、年齡は四十路近くにて、紳商とでも自ら名乘りさうな男、何が氣になるのか、分別ありげな容貌して、葉捲煙草燻らしながら、其の烟りの間より、屢々瞳子を右の方へ流し、見ぬふりして偸み見る容子なれば、此男の眼球に、何ものが映ずるにかと、室内をズッと見廻せば、他の室の混雜するにも似ず、僅か三四人の乘客が、圍始めの碁盤の上といふさまに、隅々へ一人づゝ陣取ッてゐるは、恰好の好くないフロックコートを着て、古氣に大きな眼鏡を掛け、東京日々新聞を餘念もなく讀でゐる田舍紳士と、京阪地方へ出張など命ぜられた、奏任官五六等ぐらゐと覺しきが、頻りに髭を撚りて、乃公は官員だぞと、云はぬばかりの容色した人物の外には……イヤあるぞ〱、松柏の中に交ッた一點の紅が、……年紀三十二三と見ゆる遲櫻、盛りは少し過ぎたれど、婀娜ぽい標致と、化粉の巧手などで、男子の心腸を惱殺する價値は、十分ある……が、頭髮のつくりや、着つけの淡粧とした割には、顏に塗つた白粉が濃いやうなと、氣を附けて視れば、額から目尻のあたりに、漣がうね〱、それを隱さうが爲めの厚化粧と察して見れば、事に依たら、生年より五つ六つも買かぶつたかも知れず、彼の男の注ぐ視線の的は、全く此れ……この花に違ひなし。

一瞬千里の勢ひにて、汽車は忽ち暗黒世界に馳せ入ッたれば、
『オヤ氣味の悪い』
と叫んだ女の聲、
『此處の隧道は少し長うございますが、直通り越します』
と慰さめるやうに云ふ男の聲、其の後は只汽車の轟きと、軌條を軋る響のみ聞こえぬ。
軈て列車は明るい處へ出で、舊に仍て駛行しつゝある、乘合中の田舍紳士は、ふたゝび新聞紙を眼鏡のほとりへ翳し、髭殿は細君と留別の宴に夜を更したか、但は金春あたりの花に醉た、芳夢の未だ覺ぬのか、腰掛に凭れてウツラ／＼と旅魂を華胥の郷に遊ばしてゐる樣子、彼の紳士然たる男は、眞面目な風を裝ひて、相變らず視線を、右の方へ注げるが、何時の間に孰方から進み寄たのか、婀娜女との距離が、以前より餘程近くなつたるが偖も不審な、
『隧道の中は如何も薄氣味が悪い』
と獨語のやうに、繰返した婀娜女の言葉、これぞ好き談話の端緒よと、透さず其方に向ひて、
『婦人方は定めて左樣でせう、少し長い處へ、男でも餘り心地が好くありませんから』
と、其が歡心を結ばんと、先同意を表し、爾して少し身体を扭らせ、
『れ前さんは東京の方らしいが、何處までおいでなさるのです』

此の機會失ふへからずといふ体にて、問ひかけしに婀娜女も、朝からの維摩の行に、退屈したる折柄ゆへ、好き語敵と思つたか

『ハイアノ……名古屋まで……貴君は』

と輙く玉音を洩して、反問を辱うしたれば、此方は得たりと、

『俺は大阪へ歸るのですが、名古屋にも少し商用がありますから、今夜は名古屋泊りとして、一兩日逗留するつもりで……』

「オヤそれでは大阪でいらつしやるの、奴家はまだ參つたことはございませんが、大層繁華な土地ですツてね』

『とても東京には及びませんけれど……また目先が變つて、東京のお人の目には、珍らしいこともありませうから、遊びにお出なさい、見物がてらに』

『奴家も一遍は、京大阪から奈良の方へまゐツて見たいと存じますが、ツイホヽヽヽ』

ツイ如何したのやら、嫣然たる一笑に、後は包まれて分らねども、此方は尙ほ熱心に、

『でも名古屋までお出なされば、もう直です……が、なんですか、名古屋へも始て』

『イエアノ……名古屋へは、兩三度まゐりました金波樓と申す方に、用事がございまして』

『ハア左樣ですか、俺も名古屋へ往けば、大抵金波樓へ宿ります』

旅は道伴の諺の如く、一句は一句より親しく、一語は一語より密になりもてゆく。此の談話の中に汽車は漸々に進行を停め、車掌が濱松〱と呼びながら、車室の戸を開けると共に、田舎紳士は此驛より下車し、新に乗る旅客もなければ、戸は再び閉められしが、腰掛に凭れたる髯殿は、いつか横になつて、鼾の聲を洩してゐれば、婀娜女と大阪の紳商とは宛ら對座同様ゆゑ、甚と睦じげに何事をか、話し續ける樣子なれども、生憎く器械の音と車輪の響高くして、聞取り難き……が、今夜金波樓に同宿せんとの約束は、如何やら極ッたらしい。

(第二)

金波樓の二階座敷なる、八疊の間の床を背中に坐り、三種四種の下物を排置て、小宴を催せるは、彼の大阪の紳商なれば、其の對手は問ふまでもなく、汽車中にて言葉を交せし、婀娜ならんと思ふに、左はなくして、芳紀も十九か二十歳と見ゆる、一倍すぐれた美人、爾も身裝は華美ならず高尙すぎず、何處となう灰汁脫けのした鹽梅は、一寸得易からぬ尤物なるが、談話の樣子にては、舊い相識とも思はれぬに、馴々しい物の云振りこそ心得がたけれ。

紳商はや、陶然として醉を帶れど、餘程得意の境にありて、杯を斂むるが惜しと覺しく、相貌を共にやゝ崩れし我が膝に片手を突さ、片手に杯とりあげて『お菅さん、一献合を賴まう』菅『もう妾は否ません、先刻から何の彼のと、お强なさるもんだから、ツイウカ〱と……大變醉ひましたわ』『ナンのねッから

飲もしないで、好きの盃なら、喜んで受けるだろうが、ドウセ俺のじや、氣に入るまいけれど……』萱『オヤ訝な厭味を……左樣なことを被仰るなら、頂きますよ何杯でも……其の代り醉て苦しんだらば、介抱してくださるでせうね『お前の介抱なら徹夜でも、此方から賴んで、さして貰ひたひ程だ　萱『アラ御樣子の宜いことばかり、痴人に御冗語を被仰ると、眞劍に受けますから、後で御迷惑をなさますよ『ナニ冗語……俺は昔から冗語と坊主の頭は、いつたことのない男だ』

輕からぬ口より出た、古代の洒落も、當人は一はんの出來といふ容色にて、お萱と呼ぶ美人の顏を、覗くやうに視れば、お萱は瑠璃の露の滴るばかり、淸しき眼にて、秋の波を送りながら、

萱『ジヤア屹度ですね』

と云ふより疾く我が前にある、吸物椀の蓋へ盈々と酒を注ぎて、一口にグッと引飲ア丶と花の如き顏を皺める、所謂美人の一顰には、胸に二一天作の絕へぬ、堅固な商人も、フラ〳〵と算盤の桁をはづして、千金も惜からぬ氣の起ると見えて、此の紳商も如何やら、美人掌中の物らし丶、

『オヤ大層お親密ですね』

と優しい聲をかけながら、此の座敷へ入來りしは、是ぞ汽車中で見た婀娜女、美人の側へベタリと坐り『ア丶草臥れた……、貴君お一献頂きませう、何を考へておいでなさるの、蝘蛉兒のやうに、癇の虫でも引出すと不可ませんから、チトお盃をおはやらせなさいな』

年は年だけ流石物慣た云廻し、
『オヽ恰度こゝに、お菅さんに背れた盃がある、これを献じやう『アラ否ですねへ、背れたお盃なんざア、貴君お改めなすッてください、其の代りお菅にも飲せますから 菅『イエ母親さん、妾はもうこの盞で飲だんですわ』
はて訝かし、此の婀娜ものが、此の美人の母親とは……、そこらの事に、お氣がつかれたか、つかれぬか、紳商いよ〳〵滿悦の顔附にて、
『俺が此の盃の、合をしてと賴ンだら、お菅さんは人を困らせやうと思つて、其樣な物で飲だんだから、俺は知らない 菅『アラ如彼なことを……、御自身が妾を醉さうと思つて、無理にお飲せなさりながら
『東西〳〵夫婦爭論は、奴家が行司預かりとして……、ねえ貴君、醉せて聞たい事があるんでせう』
牙算取つて錙珠を爭ふには、脫漏なきも、係る塲合の操縱には、餘りなれぬかして、
『サア母親さん』
と持たる盃を獻したるまゝ、身体を杖突き乃の字といふ形にして、兩女の顔を七分三分に見比べながら、只ニコ〳〵と笑ッてゐる、お菅は聞ねばかりの低聲にて、
菅『醉て管捲ア、尙かあいッ……てやうな、親切があると眞個に嬉しいけれど』
と云ひつゝ水晶で作らへたかと、思ふばかりの齒を、一寸覗せてニッコリ、此の一笑繝の一顰、もし意

ありて見たらんには、如何なる石心鐵腸も、藁で結へし海鼠の如く、グニャ〳〵と溶けるならんが、もし意を止めても聞もせば、今の兩女が言葉は假り初にも、親と呼るゝものゝ口から……、子の身として親の前で……云はるゝ事か、お菅は急に思ひ出たやうに、

『母親さん隱れ里の方は好いの『アヽ概略準備はして置いたが、今夜はもう更深から此樓へ宿泊て、明日からでも貴君を……『隱れ里、ゑらい粹な名だね　菅『まあ入しつて御覽なさい、妾どもの宅は汚なうございますが、中々小意氣な土地ですよ『ムヽそりや明日早速く往て見やう』

南無三、如何やら擒にされたやうな。

第三

大阪心齋橋筋の平野町に、五間の間口を三間は格子にして、家根に龜の子の商標と、順血水との藥名を、金文字もて記したる、橫看板を揚げたる、力行堂といふ賣藥店あり、舊は家賃低き橫町に住居して、かすかに手製の藥を鬻ぎをりしが、其の製藥効驗ありとて、大に賞賛され、諸國より受賣を望むもの、日に月に增加しければ、身代メキ〳〵と延び、今まで有金家財ひつくるめて、一力は確かなものを、隣家の貨財かぞへる人の噂なり、家長は尾淵與平といひて、四十路ばかりの分別盛り、身長高からず色はや黑き方なれど、デップリと肥た立派な男、骨格といひ風俗といひ、如何見ても幼年より、商人で叩き上げた人に紛れ無し、就中其の眼のギョロッとして銳き所が、此の男の特色にて、越中の富山から糞草

鞋履で、この十餘年前に大阪へいで來り、僅々五十錢の金と手足を資本に、辛苦と勉强との功を積で、やう〳〵新聞紙の廣告欄へ、名譽職の候補者として、姓名を載せられるまでの有財家になッたと、自負半分の經歷談を、證據立るは乃ちこの目……、敏捷なといふ符號の……他人が命名たのか、當人自ら撰びしか知ざれど、力行堂の家號も、蓋し此の辛苦勉强の四字より、割出したるものなるべし、斯く處世の風濤を凌ぎ來て、今日の位置までに漕着けたる與平なれば、生爪剝す程の吝嗇家にはあらざるも、萬づ節儉にて、算當に合はぬことには、五錢白銅一つ浪費せず、三思を經たる後ならでは、迂濶と財嚢の口開けず、常住金庫を背後に、帳面と首引き、算盤を脇息にして、居睡りするほど、世の中に樂みはないと、常々他人に語りけるが、それ程拜金守錢の性質も、情慾の熱火は抑へ難きものか、與平近き比、女房を返らぬ逆旅へ首途させ、獨寢の閨房さみしさに堪へで、折々は路傍の花に戯れて、鬱勃の氣を洩すことあれど、何事にも算用づくが先きに立てば、無鹽でもお多福でも、田舍娘でも老婆でも、お手輕專一の經濟主義を則とするより、ゑてして下女や喰せ物の後家さまなどにかゝりて、一口ものに煩を火傷し、これだけの療治料出す程なら、後腹の疾ぬ賣婦買うたが倍しと、人知れず胸算して後悔せしも、一度や二度ではないとのこと。

與平此の程、東京へ赴くべき商用のありければ、その序でに、横濱、靜岡、名古屋等の、取引先を廻りて、掛を集め來んとて、不在中の事何呉れとなく、重手代の政七に向い、ひちツくどひ程示し置きて、

やう〳〵出立したるが、豫定の日限を一週間あまり過ぎても歸らねば、手代丁稚下女はしたまでが、如何なすッたらうと噂とり〳〵、所へ主人與平より、金二百圓直ぐ送れとの電報、名古屋より達したり、その差出所は、隱れ里越川方とあれば、政七小首を傾け、

『ハテ彼邊へ何時の間に客舍が出來たか』

と不審には思へど、主人の命令いなむべきにあらねば、形の如く送金の手續きをなしけり、それより四五日を經て與平歸り來りけるが、平生なれば、旅裝を解か解かぬに算盤取て、帳面と名の附くものは、臺所の小遣帳まで一々に點檢し、僅か五厘の差ひでも、勘定の合ふまでは身動きさせぬが習慣なれば、雇人等は家則に從ひ『旦那さま御歸り』と揖禮する片手には、銘々擔當の帳面携へて主人の前へズラリと並びたれど、與平は例の鋭どい眼球に、少し黃色を帶びさせ、何處やら腫れぼッたい目淵より、月夜の螢ほどに光らせて、

『オヽ不在中は政七始め、皆の男女も、いかい世話であつたらう、種々聞くこともあるが、總て明日のことゝしやう』

ツイに例のない主人の言葉に、政七帳面を膝にその顏目戍りて、

政『大分御血色がお惡いやうですが、御氣分でも……』與『イヤ氣分には變りはないが、汽車疲勞か辛度うてならん依ッて……』

折から入來る五十路あまりの男、頭顱をクル〱と剃りをれど、僧侶とも見ゑず、商人とも見ゑぬ風体「イヨ大將、昨日はお娯樂……、御挨拶に出る筈でげしたが、私も谷村さんの辨慶なり、大將の御陣中にも、初見參の靜御前が」 與「オイ〱甘井、何を寢惚けてゐる、俺は只た今名古屋から歸宅たばかりだ」 甘「ジャア昨日角の芝居を御見物では……」 與「阿呆らしい、身体が二個ありはしまいし」 甘「ヘエゝなアる程……、トキに政七どん、先日御注文の看板が彫れました、偖は此の男、職人と見ゆる

第四

力行堂の重手代政七は、結界の中に座して、諸方の注文書をしらべながら

政「オイ藤助どん足下は何と思ふ、近來の旦那の擧措を」、

と突如に問ひかけられ、その次に机ならべて、帳合してゐる手代の藤助、筆の運びを駐めて、ちよッと横を向き

藤「何と思ふとは何を…… 政「何をッて、能く注意て見玉へ、御寮人が死なられてから、店と奥を一人で掛持たれて、魚の直段の押引も自分でなさるし、菜蔬を買うにも、桝や秤の目を、ヂッと睨んでござつた旦那が、東京から歸られてといふものは、全く人が變つたやうな 藤「サア左樣聞けば、少し異つた所もあるやうだが、第一晩菜が好くなつたじやあいか 政「足下の下卑にも惘れるせ、丁稚までが笑ッてゐるわ……、私のいふのは其樣なことじやない 藤「ダッて其の他に變ッた所は 政「ダカラ足下は否に小

理屈をひねる癖にぼんやりだといふのだ、見玉へ昨今旦那のそは〳〵して沈着れぬ容体を、是までも夜を更して歸られたこともあり、酒も隨分あがつたが、翌日は肅然となられて、製藥の指圖から來客の應對、金錢の出納まで獨りでなされた上、明日の晩菜、藏庫の中の掃除にも氣を附けられた、まめな旦那が、此の節は毎晩のやうに家を明け、三日にあげず外泊て來らるゝばかりか、歸られてから、帳面尻見らるゝさへ、ホンのお役目のやうにしてござる、爾でなければ、又しても名古屋に用事があるとて往かるれど、其の割に注文が殖えるでもないじやないか　藤「僕も旦那が從來になく、名古屋行の多いのは、不思議だとは思ッてゐた、ソレに此の間京都の神効堂へ送る荷を、虎吉に梅田へ持たせて遣ッたとき、美人と合乘で常村屋へ這入ッたのは、家の旦那に違ひないと、夕飯の折に虎吉が話したけれど、その日は恰度旦那が名古屋へ行かれてから三日目だから、人違ひだとうち消して、別に氣にも留なんだが……

政「左樣〳〵、それに甘井が角の芝居で見掛たといふのも、實説らしい」

と二人が己れの職務をも其方除けにして、餘念もなく語らへる横合より、丁稚上りの竹三郎といふ青年、藥瓶封じる手を止めて、面皰だらけの顏つき出し　竹「嫌疑の次第はそればかりでなく、此前名古屋へ起行れる前に、歿なられたる御寮人の、衣裳や櫛簪の中で、目星い物ばかりをゑりぬき、一番の柳行李にギッしり一杯詰込で、お繁（死せし女房の名）の遺物を見ると、思ひの種だから、西京の御本山へ納附てしまふと、問はず語りに話されて、携て行かれたと、針妙のお縫どんが羨しさうに、是も問はず語

りだが、旦那の平生の氣象にしては、ねえ、政七どん……　政「ヘエ、其様なことがあッたのか、そりや愈々怪しい　藤「此だけ證據が具備したら、もう告訴しても好いぜ　政「足下は直其様な、三百じみたことをいふから、生利なッて、旦那に叱られるのだ……、然し何方の女だろう、對手は　藤「貴公も迂濶だなア、何處の女ッて、名古屋の女さ　政「ハヽヽ先刻の復讐か、名古屋にゐるらしいから、名古屋の女は云ふまでもないが、藝妓だらうか、客取りだらうか　竹「それは甘井に聞いたら知れますぜ、角の芝居で視たといふから　政「彼奴職人のくせに、中々の阿諛男だから、アワ好くは旦那の臀に喫附いて、幾許か甘い汁を吸はふといふ、野心があるで、俺們に對しては、滅多に口を開んことさ」

一疋の猿が狂へば、千の猿が狂ふの俗言、まして心棒が弛んでは、それにて廻される羽車の動かぬは當然、さしも家則の嚴肅なと、仲間うちの模型になりし力行堂も主人の意馬のぐれたるより、手代丁稚も怠慢がち、晝は主人の蔭口に半日を費やし、夜にいれば手代の影、何方へかドロンと消へて、丁稚が饂飩屋呼ぶ聲聞ゆ、それに準じて、奥には五分心の洋燈、カン〳〵と燿けど、雑巾一つ刺す女なく、炒豆噛みながら役者の評判、ろれまもこれにもメリの立つ一方、女房存生のころに使はれた針妙の老媼が、如何やら家政の樣子が變つたやうなと、心配さうにいつたも無理ならず、若し今一際刧じたら、十餘年來の辛苦勉強も雨中の花、霜前の草、散るか摧るか

第五

四寸づゝ喰ふ仲の好さと、川柳點の穿ちをそのまゝ、春慶の八寸膳を中に挾みて、卯飲の小鍋立に、一綺の魚肉をつゝき合ふ嬉樂さ、帆立貝の煮り附く音もゆたかに聞えて、算盤を脇息に坐睡りするより快きか、與平は中形かと思ふばかりに、絣のあらき琉球紬の寛袖に縮緬の女のシゴキをしだらなく締め、小楊枝で奥齒をせゝりながら

與「エれ菅、東京と此地と竈を二つにして置くのは、隨分不經濟な譯だから、東京の家をしまッて、母親も此の隱里へ、同居になつたら好からうじやないか」

お菅は寢亂れの鬢の毛が、クッキリと白い素顏へ垂れかゝるを、蒼蠅さうに耳の脇へ搔上げ、水ならば溢れやせんと思ふばかりの愛嬌を、眼波に湛へて、すが「それが左樣往かない仔細があるんです、よしんば往くにしたつて、妾は否だわ……、苦勞の種を蒔くやうなもんですもの　與「ナゼ〳〵、何が苦勞の種……　すが「何でも宜うござんすよ、惡らしい　與「自分一分承知して居たつて、解るものか、俺に聞かせんことなら、初から云出さんが好い　すが「オヤ貴方お忿怒なさるの、何も貴方に隱し立てをする、譯はありませんけれど、與「なけりや、云ふが好いじやないか　すが「でも何だか……　與「其樣にじらすと、如斯るせ　すが「アラ酷ひ……、其の手をお放しなさいよ、云ひますから　與「サア早く云ひなさい、サア〳〵　すが「アゝ遽しない……、コレ御覽なさい、此樣に赤く痕か着きましたわね

と流眼にちよッと睨むも憎からず、與平圓い眼を細くして、ニコニコとうち笑ながら、

與「其様ことを云て、話しを胡魔化さうと思つて　すが「一旦云ひますと、歯から外へ出したからには、女でこそあれ尾淵與平の女房、其の様な卑怯なことはいたしません、オホヽヽ、随分自惚が強うござんせうね、女房氣取は……」

此の一言與平の耳には、信ずる神の御託宣豪ぶつたより、有難く聞へて、可否の岐路に彷徨ふて居た、或る問題をば八分までは可の方に決した容子、それゆゑか尚更お菅の言葉の後……苦勞の種……が聞きたくなり、疾く云へ早く語れと促がすを、お菅よいほどにあしらひて、男に十分脂を乗らさせ

すが「大變御熱心ですねゑ、オホヽヽ妾がね苦勞の種と云ひましたのはね、アノー……貴方が何ぞと云ふと、阿母さんを側へ呼寄せやうと、なさるからさ　與「ナゼそれが苦勞の種だ　すが「ダッて貴方、オホヽヽ阿母さんとは前からのお馴染ですもの　與「ナニを阿呆が、親に悋氣する女があるものか　すが「親だつて子だつて、色戀道ばかりは別ですものヲ……、貴方が眞實に家が二軒あつて、經濟とかに悪いとお思ひなさるなら、豫て被仰る通り妾を大阪へ引取てくださいな、左様すれば、此地の家をたゝんで、東京だけにしますわ　與「お前さへその氣なら、俺に否やはないが、商人の世話女房には、チット不向なやうだから　すが「妾だつて今こそ此様なだらしの無眞似をしてゐますが、自堕落を一生の荷物に、持て生れたのでもありませんから……、それは左様と阿兄は柔順くしてゐますか　與「ムヽ善次郎は飛だ眞面目な男だ、お前の同胞とは思はれん程に……　すが「ドウせ妾は阿婆摺れですよ、定めし今では後悔なす

ツてでせう、止せばよかつたと思つて　與「また愚痴か、久しいもんだ……、だが母親は若いよ、お前の上に善次郎がある、二人の子持とは如何しても見えない　すが「ソラ又阿母さんのことをお云ひ出しなさる、だから中々油斷は出來ません　與「もう宜加減に止んか、悋氣も人に依るは」

幾歳になつても稚態ことをいふて、すねたり笑つたりするが、色遊びの娯樂とか云へど、四十の髯男を掌上に乘せて、自由自在に玩ぶ、婦人の怪力恐るべし、折から下女が倉皇しく入來り「室樣電信が……」と差出すを

すが「オヤ何方から」と手に取りて　すが「阿母さん許からだか、何用だらう」と、心配顔に封切りて、一二度口の中にて讀返し、いと愕きたる樣子にて、我知らず聲を高め

すが「エヽ東京の家が、類燒ましたと、まるやけに……

第六

その日の午後、東京より到着た諸新聞に、昨日午前三時ごろ、京橋區日吉町より出火し、金六町竹川町金春新道等にて、戸數百五十戸、燒失したる旨記しあり、戸數と時刻とには多少の差異あれども、お菅の母が住宅を持てる町内に、火災ありしに紛れなければ、與平大きに笑止がりて、取敢へず見舞にと、當座の小費殘した迹は、爽袋の底たゝひてお菅に與へ、大阪へ還ッた上で、新しく家持たるゝだけの、金子送り遣らんと、約束して別れけるが、溺れても迷ふても、算勘とふい念の、全く腦裡を去たでなけ

れば、お菅の側でうだ〳〵と、現を脱してゐる間は、資産はおろか性命でも遣る氣になれど、離れて見ると自然分別かはりて、纏ッた金子取らるゝが、子に別れるやうな心地になり、如何かなして此の約束を取消し、母親を名古屋へ呼寄せて、下女一人口を減さば、月々大分の徳用なるに、金子を送ッて家を持せ、その上に二戸の雜用を辨へては、俗に云ふ雁木鑢、毎月の失費中々小さきことにあらず、ハテ好方便が、ありさうなと、約束變改、母親呼寄に、さま〳〵と思案を凝らしぬ、お菅かくと知らねば、與平が大阪へ歸りたるより、十日程經て後、郵便切手四錢貼た、長やかな文を送りて、初めに戀しい、なつかしいを、卷紙二尺あまりも繰返し、扨とや此の程お申聞けのこと、早速く母の許へ申つかはしまし候ところ、母事も貴方樣の御親もじを、殊さら喜び、幸ひ烏森に相應しき家、これあり候まゝ、造作代や、敷金等は、後より渡す相談にて、少々の手附を遣はし、とりあへずそれへ引移りもをし候、安々雨露を凌がれ候ふこと、全く貴方樣の御恩惠と、毎朝其方の空を伏拜み候まゝ、妾よりも呉々厚く御禮申上げよとの、返事まいり候、云々とした〻め、其後へも亦た、男の心を搔むしるやうな、殺し文句を、一尺ばかりも、書きつゝけたる、ソレと言はねど、早く金子送れの催促狀、與平は文を膝へ置き、獨身ものが晩菜貰うたやうに、ニコ〳〵笑うかと見れば、忽ち苦虫でも喰潰したかと思ふばかり、澁い顔する、喜憂交も色に現はる百面相、扨も東京者の氣の早さ、もう引移つたとか、造作まで買うて……、彼の邊は造作の代が、家より貴いといふから、迚も端金では買へまい、と云ッて今更ら知らん顔したら、

お菅が中で迷惑しやう……、如何も彼女の心意氣は感心だ、俺の寫眞へ、三度蔭げ膳を据ゑているッて……、然し流石は女だよ、一日も早く、おん許へまいられ候やう、此程より大洲の觀音樣へ、朝參りいたしをり、ウフヽ左樣まで俺の傍へ、來たいかと思へば、憎くおいて、ダガ彼女を家内へ入れるに就ても、なにがしか費消ことだに、今東京へ纒まつた金子を送るは、太頭痛だ、彼の時餘計なことを、云はねば好かッた、思へば此の口めが……、眞個に口は禍の門だて

只今手許の都合、惡きに付き、何れ後日にと、簡短なる書束を添へて、幾許かの金子を送り、與平逢たさ見たさをジッと堪へて、一月あまり名古屋へ得往かでありければ、お菅の許より日毎に郵便を發して、只管おんいでを待つ旨云ひ來り、果ては餘りのおんつれなさに、病ふの床にや臥倒れんなどの、せつなき文句さへもしたゝめあるにぞ與平は堪へ難くて、今日や行かんか、明日こそ立めと、身支度までせしことの、いくたびか知れねど、兎角金子取らるゝが胸につかへて、ツイ〳〵痳痺をきらし、一日〳〵と延ばすうち、いつか夏の央となりけり、一日の夕暮、曾の字の記號つきし、法被着たる車夫、小奇麗な空車挽いて、力行堂へ來り、此の書狀旦那樣へと差出す、折柄來客のありければ、迹より參ると車夫を返し、尻もお附して去がしにあしらへど、生憎客は長尻にて、跡から〳〵話しかけられ、心こゝにあらざる與平は、兎角受け答へも行違ひがちなり、漸く談話の途切れたれば

與「甚だ失禮ですけれども少し用事が……と」纔と客を追拂ひ　與「彼の男にも困る、可惜ら光陰を、冗

話しに、三時間あまり潰されたと、今日ばかり光陰が、貴重のやうに、呟きながら出て行く

常村家の、風透き好き小座敷に、尾淵與平は、スコ焦れの氣味と見ゑて、茶碗へ獨酌で盈々と注では、グビリ〳〵と自暴酒を煽りながら

與「如何も變だ、彼女は當地に、知縁は一人もないといふに、何方を歩行て居るぞ、今ごろまで、納涼……納涼と云たつて女一人で……此樣なことなら、來るのではなかつた、阿呆らしい、歸らうか、デも折角今まで待たのに、エヽ歸ろう、もう來やせんぞ畜生……とは云ふものヽ從來の動作に、一點の不審はない、殊に彼の文の文句、觀音へ日參……、寫眞へ陰膳……、疑へば棕梠帚も鬼に見ゑる道理、ア、疑うまい〳〵、會へば樣子でも知れることだ……、然し餘り遲いなア、もう十二時だろう」

折から

「オヤ左樣、御厄介でしたらう、サゾ」

此の玉音と共にバタ〳〵と、此の小座敷へ、驅込むやうに、這入る美人、腋下に抱へた袱包を、小暗き方へポイと投げやり、

「貴方眞個に失禮しました」

與平は醉眼を睜りて、其方をキッと睨み

與「お菅……何處へ往てゐたのだ、俺を呼寄せて置きながら、」

お菅は恬然なる顔附きにて

すが「待のは辛うございませうね、妾は二月越し待されましたよ……へエ……

第七

疑ひの念一たび發しては、妬心深き人物ならぬも、何彼に就けて怪し訝しと目を注けるは、世間普通の人情、與平常村家にてのれ菅の擧措を怪しと疑ひて、さま〲に詰り問へど、待つ身の辛氣を貴方に知らせましたく、的目はなけれど彼方這方と漫步行して、故意と夜を更しましたとの辨解、雨夜の星と疑ひは晴ねど、是と云て押ゆる灸所を發見ねば、その夜はグズ〲の泣寢入り……が……今一つの不審しきは、お菅が携へ歸りし袱包、中より出しは褻服の浴衣、漫步きに褻衣が何の必要ありけるにや、一時の色香に醉ひて、意馬の手綱と共に鼻毛をも伸したれ、生得敏捷の與平、ハテなと小首を傾けしより、表面は變らぬお菅が掌上の木偶、傀儡子の手品次第で如何でも動き、他愛なき樣を裝へども、心中少しも油斷せず、そが爲樣を窺ひをり、お菅より婉曲に金の事、本妻となる事の談話出れば、曉らぬ顏に左右を顧み、好い程に挨拶して每も他事に紛らしけり御靈社內の人寄席にて興行せる、尾半一座の俄狂言、面白しをかしとの評判高ければ、一度見たしとのれ菅の請求、いと安き程の事なり今宵ゆくべしと、與平は晩酌の二陶かたぶけた勢ひに乘じ、散步かた〲と曾根崎の常村家を立出で、御交合の俄狂言縱覽こゝに一つの不思議といふは、大阪に相識のないお菅……、夜更までの漫步は取除けとして……が……

此の一座の出方に、相識ありて、今晩は宜う御觀覽、いつ御來阪でござりましたと、言葉を被けるもの、一人や二人にあらねば、與平ます〳〵疑點を加へたれど要こそあれと神經を鎭めて、聞かず知らず顏に、その夜を過し、お菅の秘事を探偵にかゝりぬ、俺蔽こと霧顯れぬものならば、何時も監獄は無人の境ひならんが、左樣甘くは烏賊の甲良、その白化の皮剝れる時節か、自ら求めて馬脚を現はしに往きたること、是非もなし、お菅の兄と稱する善次郎といふもの、妹の緣にて此春より、力行堂の手代となりしが、此男若年に似ぬ老實質にて、陰陽なく働くにぞ、一つは電氣の作用もあれど、太く與平の心に適ひ、故參の手代を超へて重く用ゐけるに、夏の初より輕からぬ脚氣に罹りて、起居も自由ならぬを、與平手厚く慰り、醫師の勸めにまかせ、若いもの添へて、寶塚へ轉地療養させければ、善次郎深く與平の恩に感じ、旦那のお爲めお店の事とあれば、假令此一命を棄ても、今度の芳情に報ひんと、眞實から出た熱い淚溢して、附添の男に語りしと、誠が、人を感動する力は中々に强きもの、一つ穴の貉と忌たる敵の中に、意はぬ味方を得て、與平概略の實情を知りぬ、實に好意は他人の爲ならじ

* * * * * * * * * * * * * *

圓頭顱を振り立て

「旦那すッかりタ子を擧げて來ましたと、手柄顏に鼻蠢めかすは、彼の甘井といふ男、額に湧出す玉の

汗を拭きながら

「蛇くふと聞けば、おそろし、雉子の聲……彼樣な美くしい、虫も殺さない顔して、男を殺す……と云て刃物や、モルヒ子じやアございやせん……、旦那もひところの御容体では、如何やら半死半生の　與「オイ〳〵甘井、餘計なことをうだ〳〵云はずと、聞いて來たことだけ話てくれ玉へ　甘「ヘエ宜うごす……、旦那マア腹をお立なさらないやうに……

と云ひつゝ、訝うギクシヤク衣紋を刷ひ、兩手を膝に反身となり

甘「お下に御座つて一通り、お氣を鎮めてお聞くださりませ、イヨたかしまイヤ阪井屋……エ、モシ技藝に掛けちやア、名古屋名物……、オッと名古屋と云つては、舞臺に觸るか知れませんが、女を生擒らしちやア、阪井屋は大歌舞伎の巻頭巻軸も、洗足だといふ評判です……、その阪井屋が、彼女の虫だから堪りません、マア如斯いふ仔細なのです

第八

甘井某、圓顱に蒸氣を立てながら、語り出すを聞けば、お菅もと新橋の煙花塲裏にありて、左褄の優姿に、縹客の魂を飛せたる、花走兒なりしかば、親類交際の顧客すくなからぬ中に、別て某の子爵殿、いたくれ菅を愛でられ、園生の花に移植ゑんとの、内談までありし折から、市川右馬作、大阪より登りて本郷の春木座へ出勤中、練馬蘿蔔も鼻についたれば、上方下りの棒鱈で、子爵殿の口直しせんと、酔興

の隱し喫ひに、甘ひ味を嚼しめ、血道を上げての大逆上を、子爵殿の家扶が聞込み、左樣な不品行な女をとの御諫言に、斷念れて、牛を馬か、馬を牛か、何れかへ乘替へられしが、此の噂さに、他の馴客も、追々に巣替へして、又た顧みる男なければ、御神燈の影うす暗く、淨火のカチ〳〵音稀となりしころ、右馬作大阪へ還りければ、お菅虻蜂取らずの身となりて、毎日緣起棚睨めて、ぼんやりして居るを、お菅の驥尾に附して、千里を走ッた姉株の老妓が、笑止の事に思ひて人の噂さも七十五日、お前の腕なら容色なら、回復すに手間ひまは入らねぞ、少しの間息脫きに、旅稼ぎをしてゐと、勸められて、當人も其の氣になりて、同じ旅へ出るならば、少しでも大阪近くへ、——行きたいと云へば、老妓はちよッと肩を打つて、如斯なつても、猶未信仰が冷ぬのか、如何して〳〵、好な鰻を金比羅樣へ斷ても、彼の優のこと、忘られるものぞと笑へば、老妓も高く笑ひて、それならば、名古屋へ往かれよ、知音あれば周旋すべしとて、竟に金波樓へ來りて、馴れし三絃に、酒客の興を佐けをりしが、與平を大阪の紳商と聞き、これを蹈臺にして、彼優に會ん量見で、人身御供に擧げたのなれば、與平に用事ありとは、世を忍ぶ假の名、實は……といふ譯けなれば、大坂へ來る每に、先づ右馬作と密會したる後、與平を呼出すが常にて、想應に華美な散財をもしたとの事、是れに依てこれを見れば、滊車の中にて出會ッた老木の花は、彼の老妓ならんとの事、東京に家はなき事、家がなければ燒失る筈もなき事、先づ如斯云つたやうな、次第でごして、何ともハヤ……、一句ごとに眼をばチッかせ、汗を拭き〳〵、告げ聞へければ、與

平しば〳〵首肯きて、俺が他所から聞込だのも、足下の云ふ所と大同小異、眞個に探訪御苦勞……とは、洒落か、眞面目か

その翌日、與平は善次郎を、一室へ招き、良暫く何事をか密語きて、名古屋へ去したぎり音信不通、戀に暗みたる胸の曇りを、一陣の風で吹き拂ふた如く、與平が昔日の與平に回れば、力行堂も舊の力行堂に復して、一家の男女、亦た算盤の桁を外さず、見一無頭さつきうの、注文受けても、萬事手順の整ひゐれば、華主に少しも事を缺さず、主從商業を勵みけり

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

眞鍮の菊燈臺二ツに、百目蠟燭を點しあれど、心切る手を持つた人なきか、臘涙流れて光明薄く、盃ア疊の……模樣じやないとは、蓋し此室から流行出した唄か、置いたなり、注だなり、睨合たなりの男女、八疊の座敷、陰々と失興け、床の置物までが、泣出しさうな景色にて、何時果るかと、思はれしが、やがて女はハンケチにて目を拭ひ

「エヽ、貴方、これ丈お詫をしても、堪忍してはくださいませんの、成る程お腹立は御有理です……が、……妾も云ふに云はれぬ義理があつて、濟ないことゝは知りながら、母樣でもない女を母だと僞り、彼樣な眞似をいたしたは、重々惡うございますれど、些細なことを恩に被せられ、否と云はれぬ板挾み、

全く妾の心から出たのではなく、又た阪井屋とのわけも、ホンの一時の出來心、今更後悔の外はなし、此れから心いれ替へて、貴方大事に册きますれば、恕してやると只一言……、そのれ言葉を聞かぬうちは、妾は死でも……、成佛いたされません」

と、悄々として掻口説、涙に潤む眼波にて、ジッと男を見やりたる、その美しさ、時代ながらも、海棠夜雨、鬼のやうに氣强き男も、愛情といふこと知りたらんには、その角を折るなるべし、男は蔫兒二三服つゝけさまに呑みながら戀と金とは、何方が重いの胸算用、浮氣は損と合點して

「お菅……さん、云ふことは、もう夫れ切りか、上方ものは詐し易いと、思ふてか知らんが、二度と其の手を喰ふものか、今宵此家へ出て來たも、未練があつての譯ではない、お前のやうな莫連女、默止て置いたら何樣なこと爲樣も知れねば、此家へ斷りかた〳〵……、緣があつたら、復た會う、緩り御座れ」

と袂を拂ひ、後をも見ずに、立歸れり、イヨ出來されたり、さすが〳〵

（了）

◉滑稽演劇　犢鼻褌

初幕　加田辨助病室

金満家加田辨助、　介抱人深井お欲、
藪醫者竹原拙齋、

辨助衰弱したる病人の体にて、頭に鉢巻して臥てゐる、枕頭に水藥の瓶粉藥の包ミ藥茶碗に水呑コツプ土瓶など、塗盆に乘せておいてある、お欲枕頭に坐りおる、即てお欲は辨助の寢顔をながめ、舞臺の中央に出來り、

欲『老爺は猶眠てゐる樣子……眞個に厭な吝嗇老爺だよ、妾は彼の老爺が、金錢を大層に可愛がるだけ、夫丈け氣障で溜らない、けれども只一つの心頼みがあるので、此うして長の月日、辛抱して介抱してゐるのだ、其心頼みといふのは他でもない、お醫者の竹原さんの云ふには、彼奴は迚もゝう長くは持つまいッて……如何な吝嗇老爺でも、マサカ、錢嚢を首に掛けて、金庫を背に負つて、黄泉の旅行も出來まいから……幾許かの金錢が欲しいばかりで、好い年からげて、此歳月の下女奉公、アノ可愛い肥太さんと、十年も前から、チヤンと末六十日の約束がしてあるのに、此老爺が業の盡さないばかりで、今だに此うして引止められてゐるのだ、眞個にもうだれつたくてならない、尋常の寡婦ならば、もう以前に

いてれけば好いにと、此間も妾に云ふてゞあつた』
それはさうと、老爺と親類と、何かでて〳〵もめてゐるが、竹原さんも夫を知てか、早く遺言状でも書
狂人に成てゐる時分だ、夫を辛抱して家事の賄ひ、たまけに夏蠅い病氣の世話、なみ大体の事ではない、

辨助は猶眠りながら咳する、

欲『オヤ〳〵、老爺が目を覺したと見える』

辨助の方を見る、

欲『いや〳〵、猶らしい、然しもう起して藥を飮ませねばならぬ、今日のやうに快く眠つては、未一週間ぐらゐ生延るかも知れぬ、さうあると何彼に面倒だから』

辨助の枕頭にゆきて、之を搖起す、辨助びつくりして、

辨『ゴホン、〳〵、〳〵』

激しく咳をする、

辨『オヽ、お欲、余は大層苦しい、ゴホン、〳〵』

欲『オヤ、旦那様、お苦しうございますか、夫はいけませんねへ、妾は又貴君がいつになくスヤ〳〵と、好く眠つて入らつしやいましたから、今日はお心持が、ちつとよくおなり遊ばしたのかと思つて、内々お喜びまをしておりましたのに』

辨『ナニ、好く眠てゐたと、僞を云ふな、余は未だ十分間も寐はせぬ、眞個に……』

　お欲は側を向きて舌を出し

欲『そんな事は、お前さんが云はなくつても、妾が能く知てゐる』

　口の内にて呟きて、一段聲を高め

欲『イヽヱ、旦那様、妾よりは貴君が間違つてゐるのでございますよ、誰でも好く眠つてゐる時は、時刻が格別早く過るやうに思ふものです、妾は先刻からお側にゐて、新聞を一枚悉皆讀でしまひました、ソレはさうと貴君、お薬を召上らなければなりませぬ、サア、お丸薬から』

辨『ナニ、又薬を飲めとか、實に溜つた事ではない』

欲『デモ貴君、竹原先生が、三十分毎に、丸薬一粒と、水薬を一杯飲めとおつしやつたでは有ませんか』

辨『サア、それだから余も、此六週間の間は、一日も、イヤ、一度も欠さずに飲んで來たのだが、夫が爲に夜も晝も、少しも眠る間がないので、實に強く弱つた、實に強く……お欲、お前、余が何ぞ喰べても宜いとは想はないか、ヱ、お欲』

欲『何ですと、何ぞ喰べる、喰べるなら貴君の御勝手に、何でもお喰べなさるが宜しうございますが、先生が、物を上がればヾ死ぬとおつしやつたことを、マサカお忘れではござりますまい、それならば、別段妾に御相談にもおよびますまい』

辨『鶏肉の一片でも』
欲『いけません』
辨『そんなら冷飲の茶漬でも何でも好いから、オイ、お欲、余は腹が減つて耐られないから、ゴホン、〳〵』
欲『モシ、旦那、貴君のお命がございませんよ、少しでも滋養になるものをお上りになりましては』
辨『イヤ、喰べなければ余ハ死んで仕舞ふ、どうぞ粥の汁の一滴でも、粥は常から余の好きなものだから』
欲『ヱ、粥の汁、それは格別お毒でございます、そんな事を仰しやらずに、早く丸薬と水薬を、召上るが宜しうございます』
辨『嗚呼かなはん、〳〵、二十四時間に、こんな大きな丸薬四十八粒と、こんな苦い水薬を四十八杯……夜も晝も、マンチリともする間はない』
れ欲ハ辨助を慰め顔に
欲『デモ貴君、妾が申す迄もございませんが、之を召上らないと、貴君の御病氣ハ直りませんから、ヨー、旦那、辛抱してれ上りなさいまし、ヨー、旦那』
丸薬と少量の水を入れし茶碗を添へて、辨助に渡す
辨『今飲んだ丸薬が、猶咽喉にくツついてゐるのに、又丸薬か、實に溜らないなア、ゴホン、〳〵』

欲『そんなら、丸薬と水薬を、一緒にお飲みなさいまし、さうしたら、先に上つたのも、一所にお腹へ下るでございませう、妾が申す迄もございませんが、是が命の親ですから』

　辨助は顔を皺めて丸薬を飲み、再び咳してこみあげる

辨『ゴホン、〱、ソラ又丸薬がこみ上げて來た、アヽ、〱』

欲『旦那、何ですねへ、嘔吐たりして、サア、貴君、もう一度元氣をつけて、グイと飲んでれしまいなさい、ヨー』

　辨助は咳をしながら

辨『咳が……大層苦しい』

　やう〱に丸薬を飲み

辨『アヽ、頭がピン〱と痛んで來た、ドリヤ横にならう』

欲『旦那、〱、猶いけません、貴君、水薬を召上らなければなりません、是が貴君の命の親ですから』

辨『ナニ、まだ水薬を……實に溜らないなア』

欲『そんな事をおつしやらずに、早く召上つてれしまひなさい』

　辨助、茶碗を取上げて、苦々しい顔をして、之をながめる。

欲『サア、早くお上り遊ばせ』

辨助一生懸命になり、グイと飲干して、非常に苦しげに、ハンケチを口におし當て、やがて全く疲れて横になり、目を閉ぐ、お欲は側を向きて、又舌をペロリ

欲『ドウゾ竹原さんが、早く來てくれゝば好いが、今といふ今は、此老爺が遺言狀を書くについて、肝腎な時だから』

辨助は急に足を縮めて

辨『ア痛、タゝゝゝ』

欲『オヤ、旦那、ドウなさいました』

辨『アー大層痛い、れ欲、早く摩つてくれ、アー〳〵』

欲『旦那、何迄が痛いのです、こゝですか』

持ち上げし膝をさする

辨『いや、〳〵、其處ぢやない……アー腰だ〳〵』

欲『ハイ、こゝでございますか』

腰を摩る

辨『いや〳〵、も少し上を……上を……アー横腹を』

欲『ハイ、こゝですか』

横腹をさする

辨『いや〳〵、も少し下を』

お欲はさすりながら

欲『こゝですか』

辨『いや、も少し上を……アー胸……鳩尾の上を、アー苦しい、〳〵』

欲『どうでございます、旦那、少しはお好しうございますか』

辨『アヽ、苦しい、アヽ苦しい、アヽ余は迚も命はおぼつかない……余程常から人に憎まれた人間はあるまい』

欲『旦那、そりや貴君、何をおつしやります、貴君の甥御と姪御を除けて、其他の世間の人は、悉皆貴君を好いお方だと、賞めないものはございません』

辨『ナニ、賞めてゐると、虚、虚、そんな事があるものか』

欲『眞個ですよ、旦那、若も貴君を悪くいふやうな者があつたら、ソレこそ、此お欲が承知する事ではございません、其奴の舌の根を抜いてやります……抜てやりますとも、眞個に……』

辨『お欲、お前は感心な心がけな女だ、余はお前の親切は死んでも忘れないよ』

欲『アラ、マア、旦那、又死ぬなんて、妾は貴君がそんな事をおつしやると、眞個に悲しくなつて、心細

くなつて、すぐに涙が出てかなひませんから』
お欲、顔に手拭をあてる
辨『コレ、お欲泣くな、泣くものではない、余はもう死ぬなど、いふ事は、忘れても云はぬから』
辨助、疲れて顔を枕にあてる、お欲目を拭ひて花道の方を眺め
欲『オヽ先生がれいでになつた』
醫師拙齋、場へ登り舞臺の中央に立ちて
拙『お欲さん、今日は……どうです御病人は、少しはよろしいかな、オホン』
れ欲、頭をふる
拙『ナニ、不可ないと、夫は奇妙だ、不思議だ』
辨助の側に進みて枕頭に坐る
拙『貴君、如何です、少しも氣力がつきませんか』
辨助、弱りたる体にて
辨『ハイ、少しも……』
拙『つきませんと、如何も奇妙だ、ドリヤ一應お脈を』
時計を取出して數へる

拙『フヽーン、脈膊が百三十五……熱の工合で、間斷があると見える……フム、どうも奇妙だ、およくさん、貴女は、余の藥方書通り精密にして下すッたらうね、藥方書通りに……』

欲『ハイ、いたしましたとも、十分精密に』

拙『御病人は何か召上りはしませんか』

欲『イヽヱ、なんにも』

拙『フムー夫に氣力がつかないとは、實に不思議だ、頗る奇妙だ、お欲さん、ドウゾ少しも隱さないで、眞個の事を云つて下さい……食物を上らなければ、何か飮物の方に……異つた事はありはしませんか……

……ツツヲなんぞ上げたのではございませんか』

欲『イヽヱ、何も上りませなんだ、眞實です、妾が保證ます』

拙『成程、々々、ソレに少しも氣力が付かないとは、サテ〳〵、奇妙……不思議……御病人は半時間ごとに水藥と丸藥を飮んでゞすか』

欲『ハイ、きち〳〵と』

拙『夫に氣力が付かないと、嗚呼實に奇妙だ……非常に不思議だ』

立上りてお欲と共に舞臺の中央に來る

拙『夫ではもう少し水藥を增しませう、片時も油斷が成らぬ時ですから』

欲『ヤレ、〳〵、心配な事でございますなア』

拙『實に奇妙……何様な療治を施こしても、もう迚も無益……ぢやがヤハリ病人は病人として扱はねばならず……仕てくれと請はれゝば、ヤッパリ療治を施さねばならず』

欲『眞個に、仰しやる通りでございます』

　およくは、醫師拙齋に私語く

拙『フムーフヽーン、左様、御尤、至極御尤』

　又辨助の傍に行く

拙『加田さん、僕は貴君の爲に、實に精神を凝して治療を施こしてゐるのですが、貴君の御病氣が直らないで……益々容体の惡いのは實に奇妙……頗る不思議……此様な事を申すのは、忌はしいことで……甚だ不愉快ですが……併し貴君も、エー……代言人などにお與へになると同じやうに……エー氣立の善い看護人や、イ……醫者などの手當も……遺言狀に追加して……僕の引受けた病人に、死ぬといふ事は無い筈だが……實に奇妙……頗る奇妙……』

辨『アー余は大層惡い』

　お欲はすゝり泣きして

欲『アー、〳〵、旦那は、大層お惡い』

拙齋は肩を縮めて舞臺の中央に來り

拙『さうです、病人は惡い、大層惡い、翌はコロリとイヤサ、萬事につけて治療が充分行屆いてゐるです、病人は決して治療が足らないので死ぬのではない、ともかくも水藥の分量を增して飮ませなければならぬ、實に一刻も油斷はならないから、病人の生命は短いが、僕の書出しは長い……イヤ、長いとも〳〵、大層に長い』

同じく返し　加田家の別室

三百代言江戸和太郎
辨助姪お栗

辨助の姪れ栗手紙を持て舞臺に登る

栗『妾は只今、アノ戀しい江戸和太郎さんから、此手紙を貰ふたが、アノお方も、叔父さんの病氣の危篤いのを氣にして、急に妾に逢ひたいとのこと、直にといふ返事を出しておいたが、ドウゾお欲に見付からぬやう、ソッと來て下されば好いが、アノ意地惡のれ欲めが、又どのやうな邪魔をするかも知れぬから……夫につけても、アノ和太郎さん、不束な此妾を、是程迄に思ふて下さるとは……』

手紙に頰ずりする、和太郎舞臺に登る

和『オヽ、お栗さん、僕は今竹原君の所へ行て、貴君の叔父さんが、最廿四時間とハ持たないと聞いたか

ら、ソレで急いで出て來たのです、是といふのも、實は……』
栗『妾の顔が見たいからですか……氣休めも好い加減に云つてお置きなさい』
和『エヽ、氣休め、是はけしからん、僕の云ふ所ハ、熱く、堅く、ソシて潔白にて變る事のない愛情を、而も細やかに表する爲めです、お栗さん、假令、病氣で有うが、健康で有うが、又金滿家に成らうが、貧乏人に成うが、出世をしやうが、零落やうが、僕の心底は決して變らない、死神が來て僕等の中を引分けない以上は……僕は決して貴女と離れません』
栗『眞正に嬉しいこと、江戸さん、妾の心は、今更彼是と、物數を多く云はないでも、貴君は能く御存知でせう……ソシテ、妾は貴君のやうに能く廻る舌を持ちませんから、心に思ふ十分一も云へませんよ』
和『僕は、貴女の心を能く知てゐます、貴女ハ、どんな事が有ても、違約、イヤ變心……僕の外に、わだし心はおもちなさるまいと、確く信じて疑いません、……が、併し、動もすると、心ゝ浮んでくることが、只タ一つわります……夫は外でもわりません、貴女の叔父さんが、明日にも御死去にあれば、可愛い姪御のことゆゑ、無論何萬圓といふ財産を、お讓受になるは必定です、スルと、紳士とか華族とか云はれる人達が、吾一と先を競ふて、その冠つてゐる高帽を、貴女の足下に据ゑるは必定です、さう成た日にはれ栗さん……』
栗『アラ、マア、實のないこと、江戸さん、嫌ですよ、怨みですよ、貴君は、妾の愛情が、金錢の爲に移

ると思ひなさるの、嗚呼口惜しい、ア丶羞かしい、好くそんなことをおつしやいました、ソレが、ソレが貴君のお心ですか、妾の氣も知らないで、嗚呼口惜しい。〳〵』

お栗泣き臥す

和『ア丶、コレ、れ栗さん、僕ァ貴女の心を知てゐる、今のは眞の冗談です、本心から出た事ではありません、併し僕は、豫じめ許しを受けておかなければならない、一つの癖があります、其癖といふハ、貴女が僕を可愛がつてくだされば下さる程、ます〳〵貴女を貴重に思ふのです、有体に云へば、少し悋氣深い方です、イヤ、嫉妬の神の申子と云つても宜いくらゐです』

栗『そんなら、今のやうに情ない事を仰しやつたのも、ヤッパリ悋氣ですか、夫なら別にお怨み申す譯もありませんけれども……』

和『エ丶、悋氣ですとも、僕の心の中には悋氣の外には、一物もないのです、夥多の華族や紳士等が、貴女の姿色と財產に心をかけて、自分等の爵位や名譽を鼻の先にぶらつかせて、貴女を迷はして、各自貴女を手に入れやうと競爭してゐる中に、貴女が立てゐるのを見ると、僕は實に氣が氣ではありません、是が僕を悋氣深くする、非常に悋氣深くする原因です、何故といふに、僕は彼等のやうな貴族的の人間とは、迚も競爭が出來ないです……免許狀も持たない三百代言ですから』

栗『妾は、貴君の氣に惚れて、ソレで貴君を愛しく思ふのです、江戸さん、さういふ貴君も、ヤッパリ、

妾と同じ心でせう、妾は常からそう思つてゐるのです』

和『ソリヤおつしやる迄も無く、勿論同感です』

栗『それならば、叔父の財産の譲り渡しの事は、何も妾の身に關係はないぢやありませんか、勿論妾は、愛しい貴君のことを思ふにつけて、百望叔父が、妾を忘れてくれないやうにと、心に祈つてはおりますけれど……オヤ、大變です、お欲が出て來ました、サア、江戸さん、貴君此處にゐてはいけません、早くお避げなさい』

江戸はお栗の手を握りて

和『お栗さん、今云つたことを、忘れてはいけませんよ』

各々別れて這入る

是にて幕になる

二幕目　加田辨助病室

加田辨助、辨助姪お栗、
深井お欲、狀師志摩律平、

病人辨助蒲團の上に横はりゐる、法律家志摩律平數枚の書類持て枕頭にゐる、

律『僕は貴君のお指圖通り、萬事漏なく認めたつもりですが、如何です、最一度繰返して朗讀しませう

か、是は既に調印濟の物ですけれども、變更をしやうといふお考へなら、何時でも追加が出來ますから』

辨』イエ、〳〵、もう二度も貴君がお讀みくだすッたのですから、是で充分です、もうお引取下すッても宜しうございます、余は大層疲れを覺えて、一人でゐる方が勝手でございますから』

志摩は書類を巻き納め

律』然らば僕はお暇と致しませう、加田君僕は幾久しく貴君の狀師に雇はれるつもりですが……』

迹云ひかぬるを、辨助はうち消して

辨』何も御遠慮にはおよびません、法律家といふものは、娑婆に居る間こそ要はあれ、今にも極樂往生をすれば一向に關係のないものですから、貴君が生の、代言なり辯護なり、御勝手になさるが宜いです、生は別に御依賴は致しませんから』

志摩は辨助の此言葉を聞流して、舞臺の中央にいで來り

律』ヱヽ、一文にもならぬ事で、種々の手數をかけくさつた、併し、此う雇はれた日當は、ドッサリ取てやらねばならぬ、彼是と口實を設けて……』

志摩は這入る、引違へてお欲出來る、お欲目に手拭をあてながら、さも悲しさうに

欲』旦那、貴君、マア、緣起でもない、何故御遺言狀などゝ、こんな不吉なものをお書せなすッて、餘計な御苦勞をなさいますのです』

辨助弱りたる体にて

辨『コレ、お欲、泣くな、泣くには及ばぬ、生は決してお前の事は忘れないから』

およくはすゝり上げて

欲『妾は泣くまいと思ひましても、ツイ、耐忍が出來ませんで……オヽ、ソフ〳〵、アノ、お栗さんがおいでになりまして、是非貴君にお目にかゝりたいとの事でござります』

辨『ナニ、お栗、生の姪の、此へ通しておくれ、生も段々臨終に近く成てくるから……其他の人々にも、此世の別離がしたいから』

およくは猶もすゝりあげて

欲『アー——悲しい、悲しい、悲しうございます……アノ、貴女、お這入りなさいまし、お栗さん』

おくり入り來る

栗『叔父さん、何故、貴君は、常から妾に會ふのをお嫌ひなさいましたの、毎朝のやうに使ひを上げて、御介抱をさせて下さいと願ひましたのに、いつでも情なくお斷り遊ばして……恰是三週間あまりですよ、毎日使を上げましたのは……』

辨『ナニ、斷つた、是は不思議、ついぞ生は、お前から使を受けた事はない筈だが』

栗『何ですと、使を上げたのを、御存知ありませんとアレ程毎日出しましたのに、ソレに、妾が幾度出ま

しても、君貴は、會ふ用事はないと、いつもお欲に情ない返事ばかりおさせなさいまして

辨助は弱りたる体にて

辨『お欲……およ……く……』

栗『叔父さん、妾の申すことに、決して虚はございませんよ、妾の弟の當次も、大抵毎日のやうにお見舞をしてをりますし、又兄の讓吉は、御存知の通り、銀行へ出勤してをりますから、毎日と申す譯にはまゐりませんけれども、日曜の休暇毎には必ずお見舞をしております、シソテ從弟の宇一も、清造も、度々お見舞に上りました』

辨『誰もそれを生に云はないから、生は又、皆が生を忘れて仕舞たのかと思つてゐたのだ、何故又生に其事を知らせなかつたのだ、コレ、お欲……れよ……く……』

およくハ腹立しけに

欲『エヽ、マア、能く詐僞をいふれ人だ、お心好の叔父さんを欺さうと思つて、フン、兄弟も從弟も能く出來た、誰一人來ぬどころか、人魂も來た事はないのに、サウシテ、自分は又自分で、或人のお見舞にいそがしいから、迚も叔父さんの病氣はさておいて、思ひ出してゐる暇もないくせに……眞正に呆れ切て物が云はれない、叔父さんの病氣を好い事にして、勝手な所作をしてからに……妾は何も彼も旦那にぶちまけやうかと、幾度思つたか知れないが、詰らない事をお聞せ申して、又御病氣の障りにでもなる

と惡いと思つて、今日まで故とひかへてゐたのです』

栗『能くマア、そんな僞が云はれたものだ、妾が何時叔父さんの病氣を好い事にして、そんな身勝手なことをしました、自分こそ詐僞家の性惡女めが』

欲『アノ、マア橫着にも程のある……自分の不品行はソッと棚に上げておいて、好い兒のやうな顏をして、互ひに親切を盡し合つてゐる、旦那と妾の中に水を注して、ごてつかせやうといふ惡計み、さう巧くは行きませんよ』

　少し傍に寄りて、お栗の方を斜視に睨み

欲『遺言狀はもうとうに出來て、而も調印ずみに成てゐるから、今更トウする事も出來ない程に、いくらなりとも惡戲をして見るが好い』

　辨助はさも弱りたる体にて

辨『誰か生に氣つけの藥を飲ませてくれ……』

栗『ハイ叔父さん、妾が飲せて上げませう』

　お栗茶碗に藥を注ぐ、お欲急にふり返りて

欲『エヽ、何ですと、貴女が藥を……それはいけませんよ』

栗『お欲、默つておいで、姪が叔父に藥を飲ませるのに、他人が彼是云ふことはないよ』

辨『アー—苦しい、早く藥を飲ましてくれ、早く……』

お栗が藥を飲ませんとするを、お欲さまだけて、その茶碗を奪はんとする

欲『貴女、いけませんよ、竹原先生から、お前一人で藥の世話をしろ、誰にも手をさへさせることはならないと、嚴しく命けられてゐるのですから』

辨『藥を……早く……』

お欲とお栗と攫み合ひて、遂にお栗は肝癪を起し、茶碗の藥をお欲の顔へ、投げかける

栗『ソレ、何處に……藥が欲しくばやるワ』

お欲大ひに怒りて

欲『鈍狂女め……今に此返報は屹度……ヘン、遺言狀を讀れるまで、暫時待てゐるが好い……どうした事で、妾が貴女を戸口から、一昨日おいでと逐ひ拂ふまいものでもない……イヤ、屹度逐出して見せやう』

栗『ソレはどうなりと、お前の勝手にするが好い、出來るものなら……併し、萬望叔父さんに、お藥を飲ましてあげておくれ』

欲『大きにお世話……妾は、妾が好いと思ふ時までは、たとへ誰が何と云つても、一滴でもさし上ることではございません、此役に立ずの恥知らずめが……』

辨『アー—苦しい、アー—せつない、早くゝれ、早く……藥を……』

　お欲は猶も言を續けて

欲『エヽ、色狂人の狠狽者めが……』

栗『コレ、お欲、さういふお前も、あんまり口廣くは云はれまい、昨夕肥太、イヤ、太つた男が此へ來たのを、妾は能く知てゐますよ……眞個にヅウ〳〵しい』

欲『フーン、大きにお世話さま、覺えておいで叔父さんが目を眠るのを待ておいでなさい……其時に又、貴女の息の絶えるやうに、妾が打て〳〵ぶらすへてあげるから』

　辨助はいよ〳〵苦しげなる聲にて

辨『早く、早く持て來て、藥をアー』

栗『アーお氣の毒なは叔父さん、妾がお側にゐては、ろくに介抱もして貰はれぬ仕宜……どうも仕方がない、妾は部屋へ歸りませう、實にしようのない惡たれ老婆だ』

　お栗舞臺を退く、辨助は蚊の鳴くやうなる聲にて

辨『アー』

欲『眞正にこんな腹の立つ事はない……アノ色狂人を四分五裂に引裂いてやりたい……微塵に……粉碎微塵に……クソ、何でも此返報をしてやらなければならない、遺言狀を讀上げられる迄持て、ソして、門口から彼女を、しゆろ箒で打き出して、饑えなと渇すなと勝手にしろ、乞食をするとも、淫賣女にな

るとも……一昨日來い……と云つたら、サゾ快い心地で、胸の溜飮が下るだらう、とにかくに、少しも早く、遺言……遺言……遺言……』

かく云ひやみて、ホッと一息

欽『オ丶、思ひ出した、老爺が藥をくれと云てゐたッけ、ドリヤ、取て來て飮ましてやらう』

次の間より藥を持來り、辨助の傍に至る

欽『モウシ、旦那、大層遲く成て相濟ません、さぞお待兼でござりましたらう……モウシ、旦那……ヤア、大變、コリヤ息が……旦那……』

思はず大聲に叫ぶ

『誰か手傳ふてくれんかいな……ヤア死んだ……ヱ丶、仕方がない、此ういふ事といふものは、豫て覺悟をしてゐながら、誰でも一度は狼狽へて吃驚するものだ、コリヤもう全く死んだに違ひない』

舞臺の中央に來る

『ヤレ〳〵、是で此人の業も了つたといふもの、南無阿彌陀佛、〳〵〳〵〳〵々々々々々、併しありがたい事には、妾の辛抱もこれでお仕舞ひ、是から後は愛しい肥塚肥太さんには……情愛、憎いお栗には……怨恨……ソレにつけても先立つものは遺言、早く遺言が聞きたいものだ、遺言……遺言……遺言……』

是にて幕になる

三幕目　加田家廣間

〔お欲、お栗、和太郎、律平、
　拙齋、甲助、乙助（二人とも加田の甥）
　丙造、丁造（二人共に是迄二度も勘當されし加田の甥）

欲『アー、今日は日が長い、丸で一年も立つやうだ、妾は實にもどかしくつて……氣づかはしくつてそれに肥太さんが、先刻にから待勞びれて、臺所で前祝だとか云つて、酒を飲んで、ソレでうすく欠伸をおさへてゐるから、猶更待遠でならない、代言人の志摩さんが、早く來れば好いのに、もう少し立つと、愛しい肥太さんは、泥成に醉て仕舞ふだらう、アノ人も、田舍で地面を買ふとか云つてゐたが、萬望さうなれば好いが、併し待てよ、田舍で地面を買ふは好いが、妾の財産で、鵞や鷄でも飼はうといふ精神なら、ソレこそ大目的違ひだ、妾は所謂因緣なしに、三度も後家になるは嫌だ……妾は、財産さへあれば、自分獨立でやつてゆきたいと思ふのだから、何でもそのつもりでやつて行かなければならない、さもないと……夫から思ふと妾の爲にゃ、肥太さんでも、肥塚さんでも、決して入ッたものではない』

れ栗入り來る

欲『サア、お栗さん、此で一所に、遺言狀を讀むのを待てゐて、孰が此家の女主人になるかを、互ひに見合はふではありませんか』

栗『アヽ云ふまでもありません、お前は定めて叔父さんにお追從して、自身の爲に都合の好い、遺言狀を書ておもらひで有う、ダカラ、お前は夫を賴みにするが宜い、妾ハお前の手からは、何ひとつ貰はうとは思はないから、安心しておいで』

欲『ヘン、くれと云つたつて、誰が塵一本やるものか、お前は先刻妾の面へ、藥をぶつかけたことを、よもやお忘れではゐるまい』

栗『アヽぶつかけたがドウした』

欲『おツつけ其返報に、お前の面へ貫木を投げつけて、戸を閉めてやるから、さう思つておいで』

栗『サア、〱、逐出せるものなら逐出してごらん、お前のやうな者の世話になるくらゐなら、乞食をしても世渡をして見せるワ』

欲『お氣の毒ながらやがて其通りになるでせう』

江戸和太郎入り來る

和『オヽ、お栗さん、今日ハ貴女の、生涯に一度の大事の日だから、僕は助勢に出て來ました』

欲『オヤ、江戸さん、入らぬ世話を燒くやうですが、貴君、お栗さんと添ふ目算なら、婚姻の約束を定める前に、能く事の成行を考へなければ、迹で後悔することがありませう』

和『是はお欲さん、御親切に有難う、併し僕は……會計の事は、全く度外においてゐるものですから、其

點についてハ、別段考へるにも及びません』
欲『アハヽヽヽ世間の人は誰彼となく、常も金錢の事ばかり思つてゐる者に限つて、とかくそんな事を云ひたがるものです』
和『フヽン、小人の心を以て、君子の心を量るとは、お前のことだ』
欲『ヘン、如何だか知らんテ……そんな事はドウでも宜いが、妾は長らくの間、陰陽なく奉公した、その報ひは屹度あるだらうと思つてゐるのです』
栗『もし、江戸さん、そんな者と物を云つても無益てす、口を利くだけ損ですからお止めなさい、貴君と妾の中さへ變らなければ、何も他人に兎や角云はれることはございません、妾の心は如何な事があつても、滅多に變ることハありませんから、おかまひなさいますな、狂人に…………』
欲『オホヽヽ自分ばかり心が變らなくつても、男の心が變らないといふ、そんな危險な保證は出來ませんよ、お栗さん』
和『實に念の入つた意地の惡い女だ』
和太郎ハ故意とお栗の側に引附いて坐る、甥の甲助乙助丙造丁造ぞろ〳〵と入來り、左右に分れて坐る、お欲傍に寄りて
欲『サア、〳〵、悉皆陸續とやつて來た、恰是烏が腐敗た魚の腸でも嗅ぎ出したやうに、實に此世の中に、

欲ほどあさましいものはない、併し……オヽ竹原先生も見ゑられた……入つしやいまし、貴君、御氣分は如何ですか』

故意と鹿爪らしく、至極壯健で……眞面目に挨拶する、拙齋は思はず釣り込まれて

拙『ありがたう、至極壯健で……イヤ、是はしたり、お欲さん、人を馬鹿にして、僕が病人に對つて云ふのと、同じやうな事を云つて……恰是今もそんな事を云つて來たところだ……併し遺言の樣子は如何でした、僕は、得意先の大患者より、其方が氣に掛るので……お欲さん、貴女、辨助君が遺言狀を製作る時に、其席に列なつて、御覽でしたか』

欲『イヽエ、ツイ…………』

拙『ぢャア、御覽なさらなかつたのですか、ソレは不思議、甚だ奇妙、デは貴女は、何がどうなつたか、少しも御存知ないのですか』

欲『あんまり鐵面皮しいと思つて、夫で……』

拙『貴女にも似合はない、疎漏千萬な』

欲『さう仰しやれば、大きに御尤も……オヽ志摩さんが見えました、是で何も彼も判りませう』

代言人志摩律平、勿体らしく入り來る、およく丁寧に挨拶して、之を上座に招ぞる、律平上座に就き、皮箱の中より遺言狀を取出して前に置き、洋服のポッケットより巻烟草を出して燻らし、ハン

ケチにて鼻の周圍を拭ひ、鼻の尖に金線の眼鏡を掛け、やがて遺言狀の封を切て、一座の人々に辭儀する、お欲は律平の次の座につく、醫師拙齋その次に座る、およく、手拭を顏に當て、ワイ〳〵と泣く

律『貴女、どうかお靜に』

お欲すぐに泣止む、和太郎ハお栗の膝に手を置きて引き添へおる

和『お栗さん、もつと此方へお寄んなさい』

律平は、ヱヘン、〳〵と二度咳拂ひして、さて遺言狀を讀上げる

大坂市高麗橋二丁目十五番屋敷、加田辨助の遺言狀、幷に其證狀

拙者加田辨助、最期に臨んで遺言を作ること左の如し

拙者は拙者が從來知りながら行ひたると、知らず〳〵行ひて、他人に害を與へたる、種々の罪惡を悉皆御免を蒙ると共に、拙者に對して夥多の惡事を加へし輩をも、殘らずその罪を許さんとす、就中拙者が曾て某株式會社の配當金を受取るため、乘車して行きたる時、不正にも過當の增賃を要求したる、帳場の雇車夫大八如き者をも免すなり

抑も拙者の財產は、悉皆拙者の親友なる、今橋一丁目二番屋敷金田豐作、本町三丁目四番屋敷富村堅太郎の兩氏に委託して、左の如き處分及び目的に供す

第一に拙者の尤も親しき姪栗には、金六十圓を讓りて、年一割五分四厘の勘定にて預りおき、而して

婚姻の當日に元利共に之を給與す

和太郎は之を聞きて、おくりの膝におきたる手をソッと引去り、次にジリ〳〵と、身体をにじらして、お栗に背を向け、次にズイと後へ引き離れる、律平は猶も遺言状を讀續ける

甥甲助には、一金四十四圓四十四錢を讓り渡す、但し此内四十四錢は、何の名目ともなく、只手數料として引き去る

甲助腕組をなしたまゝ、ツイと立て律平の傍を離れ、舞臺の下手に來る

又甥乙助には同じく金四十四圓四十四錢を讓る

乙助も亦甲助と同じく下手に來る

曾て勘當せし甥丙造には、喪服を買ふ料として、金二十圓を與ふ

丙造も亦立つて下手に來る

同じく勘當せし甥丁造には、是も亦喪服を買ふ料として金二十圓を與ふるものなり

丁造も亦丙造の如くする

拙者に對して親切にして且つ正直なる、介抱人深井欲には……

およく甚だしくすゝり上げて、悲しい、〳〵、と叫ぶ

律『貴女、ドウゾお靜に』

およく直に泣やむ、律平遺言狀を讀續ける

拙者病中、ひとかたならぬ介抱といひ、十年來忠實なる奉公といひ、かたぐ〳〵以て厚き報いをせざるを得ず、其報いにれ、拙者は盡く拙者の……

律平は此時遺言狀の一紙面を讀みをはりて、次の紙面に移るところなりければ、遺言狀を下に置き、卷烟草をくゆらし、ハンケチにて鼻を拭ひ、やがて讀みつゞける

拙者は悉く、拙者の衣裳簞笥を、衣服を入れたるまゝ遣はす、且形見として、簞笥の鍵を鎖紐に附けたる銀時計一個を添ふるものなり

此くの如くソレ〴〵處分したるのち……

およくは一生懸命に、耳をすまして聞ゐたるが、非常に激動したる氣色にて、律平の朗讀を遮斷る

欲『貴君、甚だ御面倒ですが、只今の所を何如か今一度お讀みくださいませんか』

律『お易いこと』

拙者は悉く、拙者の衣裳簞笥を、衣服を入れたるまゝ遣はす、且形見として、簞笥の鍵を鎖紐に附けたる銀時計一個を添ふるものなり

およくはアッと叫んで氣絶する、一人も之を助くるものなし

此くの如くソレ〴〵處分したる後、拙者は拙者の財産を、殘りなく抛ちて、慈惠病院と貧民學校を設

立するやう、彼の金田富村二氏に依賴したり、其手續方法等は、別紙遺言狀の追加に畧記せり

律『諸君、如何ですか、病院學校設立の方法等も一々朗讀しませうか』

皆々『イヤ、夫には及びません、夫には……』

律平は遺言狀を卷納めんとす、拙齋はあはてし調子にて

拙『甚だ失敬ですが、何か別に追加の遺言狀はございませなんだか』

律『オヽ竹原君、是はとんだ疎相をいたしました、玆に一ヶ條、君の爲に記されたのがありました』

拙齋は左もこそとうち默頭きて

拙『僕も、必ずさうだろうと思つてをりました』

律平はさらによみあげる

拙者の醫師竹原拙齋殿は、拙者の久しき病中、種々無功の療治を施こし、剩さへ、不必要の藥を多く用ゐ、あくまで拙者を苦しめたり……拙者ハ彼の書出に、重き課税を附するを忘れざらんことを、拙者の代理者に向つて、切に希望するなり

拙齋はッと立ちあがりて、前方に來る

拙『ナニ、僕の書出しに税を付する……途方もない、實に不思議、頗る奇妙、ドリヤ、如此な所でうろついてゐるよりは、他の病人でも見舞ふてこよう』

拙齋スゴ〳〵舞臺を去る

律『僕の處用は是で了つたから、お暇いたすといたさう……』

律平もつゞいて舞臺を去る、丙造、丁造、前方に來る、丙造手に持てる二十圓の切符を睨みて

丙『オイ、證書、貴樣、喪服の爲に身を賣る氣があるか、ドウだ、返辭をしろ』

丁『オイ、丙造君、何を云つてゐるのだ、詰らない事を、僕等が喪服を着るまで、老叔父が極樂往生をしないやうでは、夫こそお氣の毒な譯だ、サア、君、來玉へ、行かう〳〵、こんな所に何時迄もゐる必要はない』

甲助乙助も下手に來る、丙丁舞臺を退く

甲『乙助君、どうだ、君、僅か四零、四コンマ、四々、おまけにコンマ以下を引去るとは、實に汚穢ではないか』

乙『眞正に忌々しいなア、併し吾等斗りではない、アノ强慾のお欲婆々が、どんな顏をして、簞笥を開けるだらう、その顏が見たいなア』

甲『アハヽヽヽ鍵附きの銀時計といふと、一寸人聽は好いが、今から十年も前に、三圓か五圓出して買ふた怪しい品物、實にありがたくないなア、どうだ君、いつそヤケ祝ひに、一杯飲みに行かうではないか、ソシテ、會計方は例のチャンケンで決めるとしやう』

乙『賛成々々、サア來た、チャンケンホイテ……ヤア負けた、アハヽヽヽ』

兩人笑ひながら舞臺を退く、お栗は和太郎の方に向ひて

栗『もし江戸さん、何ですねへ、男らしくもない、何もそんなに陰氣な顏をしてゐないでも好いではありませんか、妾だつて失望して、胸の痛い程悲しいけれども……今更どうも仕方がありません、妾は叔父の遺言狀を讀聞かされない以前に、何と貴君に言ひました……假令如何な事があつても、妾は貴君に對して、變る心はもたないと、堅く誓ひを立てたではありませんか』

和太郎は無頓着に情なき調子にて

和『さうです』

栗『そんなら、何故貴君は、そんな氣の無い顏をしてゐるのです』

和『僕は貴女と首尾好く添遂げて、如彼して、如此してと、種々に考へてゐた想像が、悉皆烟のやうに散てしまつたので、夫で……』

栗『なんです、江戸さん、悉皆散てしまひましたと』

一時は氣絶せしが、今しも漸々吾に回り、ソッと身を起せしお欲婆々、面におしあてゐたる手拭を取り、二人の樣子を斜視に見て、耳を傾けて聞てゐる

和『左樣、悉皆散つてしまひました、而も永遠に……れ栗さん、貴女は、僕を薄情だ、殘酷だなどゝ、お

思ひなさるかも知れぬが、僕は決してそんな不實な人間ではありません、僕は僕自身を罰して、可愛しい貴女の前を退き、イヤ、僕は自らおさへて、斷然貴女を斷念り、貴女が定めて、僕よりは幸福な人の手に入るだらうと、他ながらその事を想像り、胸を焦し、氣を狂はし、不幸と後悔の闇に引籠つて、憂愁の中に世を送り、是まで格別貴女に惚れすぐした、種々薩陀の妄想を、せめて此身の所有物にし、涙の中に世を送りませう』

和太郎はハンケチを取り出して、己が面を掩ふ、お栗も同じくハンケチを面にあてゝ泣く、お欲はそれ見たかといふ体にて、點頭きゐる

栗『江戸さん』

和『アイ、おくりさん』

栗『貴君は、どうあつても、妾に配偶ては下されませぬか』

和『實に面目が無くッてさ、貴女、少しは、僕の感情を察して……僕の心臟は破裂しましたよ、實に可愛想なものですよ』

栗『江戸さん、萬望妾を見捨て下さいますな、貴君最前……金持に成らうが、貧乏に成らうが、出世をしやうが零落れやうが、お前は僕の妻ぢや、死神が來て二人の中を引分けない以上は……と仰しやつたではありませんか』

和『なに、僕がそんな事を』

栗『デも江戸さん貴君、今しがた仰しやつたことだから、マサカ覺ゐて入つしやりませう、マサカ……』

和太郎は空惚けし樣子

和『戀に心を奪はれてゐる時ハ、迹で思へば不思議な程、能く譯もないことをいふもの……、コレ、お栗さん、今僕は、正眞の事を云ひますが、所要僕等は一文なしの果敢ない境界、西洋の諺に、貧乏が戸口から進入て來る時は、戀は窓から逃げて出るといふのがあるが、實に能く人情を穿つた文句、錢の切れ目が縁の切れ目と……云ふて、僕は貴女を見捨て、貴女に難儀さそう……そんな不實な精神はさら〳〵無いのです、お栗さん、マア氣を落附けて能くお聞きなさい、其段は僕は頗る寛大なものでせう、イヤ、寛大なものです、僕は今、貴女が僕に向つて成さつた、一切の誓言を、貴女の爲に、一旦取消します、さすれば貴女は自由の身体、万一後日に福の神が、僕の内へ舞込で來る時節が有て、其時に成つても、幸ひに未だ貴女が、何處へも他へ縁組せずにゐないでなすつたら、僕は僕の運命をも僕の一身をも、貴女の足下へ投出しませう、イヤ、捧呈ませう可愛しいお栗さん、マア御告別』

お栗はよゝと泣沈んで

栗『エヽ江戸さんの酷らしい……アいた〳〵、癪が、〳〵

お栗胸をおさへる

和『僕はたまらん、〳〵、どうも辛抱が出來ぬ、左樣なら〳〵』

和太郎早足に舞臺を退く、お欲はお栗の側へ寄り、

欲『マア是で少しは腹が癒れた』

お栗に向ひ

欲『おくりさん、如何です、是だから妾が前刻に云はないことか、たとへ貴女が變心しないでも、男の方ですると……』

栗『妾の傍へ寄ておくれでない、早く何處へでもおいで』

欲『イヽエ、まゐりませんよ、妾も貴女と同じやうに、玆に居る權利が十分にあるですから、妾は動きませんよ』

お栗は立ち上がりて、

栗『そんなら勝手にしたが好い、妾は如此な不吉な家に、片時もゐる心はないよ、アヽ、江戸さん和太郎さん』

泣く〳〵舞臺を退く、お欲は迹に殘て獨り語、

欲『世間体を憚らなければ、アノ、吝嗇老爺を、棺桶から引摺り出して、散々ヽ打ち擲いてやらうものを……忌々しい、何だ衣裳簞笥なんて、此十年來、綴くッた上に繼たしをして、雜巾のやうな衣類バかり

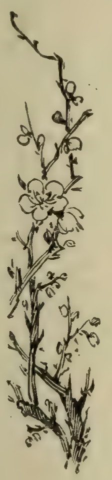
押込んであるのさ……襦袢も筒袴も錢にならないものばかり、夫にマア此着物に羽織、紙屑買に見せても跣足で逃出すだらう、長町の裏屋の隅でも、こんな襤褸ハ着やしない』

舌打ちして、

『嗚呼、々々、つまるところは、此妾も、彼のお栗と同じことだ、若肥太さんが此事を知たら、ヤッパリ和太郎と同じやうに、肱鐵砲を喰はして、御告別と出懸るに違ひない……嗚呼世間の人、世間の人……世間の人は不人情の凝塊……戀といふも虚、情といふも僞り、イヤ、戀も情も悉皆金錢づく、遺言、々々々と……仰山相に、人に散々パラ樂しませておいて、つまるところは惡い〱遺言、外れ易いは、目的と犢鼻褌、まゝにならぬは、浮世の習ひじやなア』

お欲ワイ〱と泣きながら舞臺を退く是と同時に幕。

（打出）



◉藤袴

（其一）

今を距ること十有六年前、明治十年二月中旬、某日某刻の事になん、肥後熊本鎭臺の分營なる、豐前小倉の營所に通ふ往還を、丈は十寸に餘り、鬣は長く垂れ、頭は小さく、鼻は大ひに、目尻は下り、耳は竹を割たる如く、体は鞠をころがしたる如く、足細く、尾太く、藤袴の花の如き、美くしき斑のある栗毛の駒を、年齡ハ稍五十恰好なれども、頗る壯健らしき馬丁が、營所の方へと引行けるが、彼方よりして、孰も營所の士官と見ゆる、三個の軍人の來かゝり、行ちがひさまにその馬を相て、

木村『時田さん、良い馬ぢやないか』

時田『サア、誰の馬だらう』

木村『菊地君、知らないか』

菊池『木村君、君が知らんものを僕が知らう筈ない』

時田『主ハ誰か知らんが、實に名馬だ、オイ、馬丁、馬丁』

と呼び止むれば彼は立止りて、

馬丁『ヘイ、何御用でござります』

時田『貴様の引てゐる馬は、稀らしい名馬だが、誰の馬かな』

馬丁『ヘイ、是は春日田保様のお馬でございます』

時田『ムヽさうか』

木村『何時求られたのか』

馬丁『ツイ頃來の事でございます』

菊池『主人を迎ひに行くのだらうが、あまり珍らしい馬だ、暫時見せてくれぬか、鎮臺の調馬から廻つたのではあるまい』

時田『勿論さうだらう、司令長官の馬でも中々及びもない逸物だ』

木村『春日田大尉は、何處から如此馬を得られたらう』

馬丁『ヘイ、猶時刻が少し早ふございますから、ゆつくり御覽なさいまし、アノ……さうでございます、調馬から廻つたのではございません、廣島から廻つて來たのです』

木村『名はなんといふかな』

馬丁『身体の班が、花の形に似てゐるからッて、藤袴と申ます』

時田『アハヽヽヽ大層優美な名だな、蹄の工合から肩の加減、後の踏込まで、少しも申分はない』

木村『サウして貴様もあまり見掛けんものヽやうだが以前から春日田君の所にゐるんか』

馬丁『イヱ、さうではございません』
時田『ヂャア今迄どこゝゐたのだ』
馬丁『ヘイ、小可も此馬と一處に、廣島から參つたもので、此馬の幼少ときから手に掛ましたから、丸で吾子のやうに想つております、實ハ春日田樣のお家に、舊く奉公をいたしておりますもので、今の保樣が、御幼少時分、猶御一新になりません時からのお馬丁で、保樣のお兄イさまの正樣が、廣島鎭臺においでゞございますが、此九州が物騷がしいとまをすので、萬一の時の用意にと仰しやつて、正樣が御秘藏の、此ふぢばかまを保樣へお贈りになりましたので、そのお馬丁をして附いてまゐつたのでござい升』
菊池『ウム、さうか、道理で見掛んと思つた』
木村『併し、菊地さん、ドウ見ても名馬だ、此足ならば、如何な嶮しい山路でも、一飛に飛越せるねへ』
時田『勿論のこと、山坂ぐらゐは云ふに及ばず、此足で一跳々たら、十里ぐらゐハ持て行くに違ひない』
と頻に馬の平首を撫で、又鬢を撫でなどして、口々に品評を試てゐる折しも、遙かなる營所の方に當りて、一聲の喇叭高く聞え、而も調子烈しく吹立てければ、士官は各自聞耳立てゝ、
木村『ヤア、何だ、非常だ、〱』
菊池『ハテ、妙な時分に召集をやるな』

時田『イーヤ、是は演習ぐらゐの事ではないらしい』

と猶三人が言切らぬに、非常を知らす五發の大砲を、轟然として連發しければ、士官はます〳〵驚きに怪しみを添へて、スワ何事か起りしと、馬丁に挨拶する暇もなく、

木村『ともかくも走せつけて見やう』

時田『勿論、急いで行かう』

菊池『ドウでも平事でハない』

と三人靴の音をそろへ、一目散に走去りけり。馬丁もこれに驚かされければ、馬の口を取て足を早め、三個の士官の跡を逐ひ、營所の方へと赴きけるが、營所にては出陣の用意急がしく、今にも戰爭の起らんとその狀態、春日田大尉は己が率ゐる大隊に、出陣の準備を整へしめ、マヅ兵を整列させつゝある所なれば、馬丁が喘ぎ〳〵ぶちばかまの、口を執て來るを見るより、突と身を寄せてひらりとうち跨り、

大尉『甚吉、大層遲かつたな、これからすぐに熊本へ出張するのだ、戰爭に行くのだ、宅へ行て其事を知らして、すぐ出直して來て伴をしろ、早く〳〵』

（其三）

馬丁甚吉ハ、あまり火急なる出軍に、一時ハ大きに驚きたれども、元來忠實なる者なれば、大尉の命令を了承みて、急ぎ屋敷に立歸り、春日田の妻子にうち向ひて、大尉が俄の出軍の趣きを、事云々と告げ

知らせしが、妻はあまり意外の事にうち驚きて、元來夫はどうした譯でと、押かへして尋ねけるにぞ、

甚吉は頭を掻きながら、

甚吉「旦那樣には只……今から出陣するとばかり、何にも詳しい事を仰しやりませんから、ドウいふ次第か分りませんが、營所の中に居た、小使等の話してをりました所では、鹿兒島にござるアノ陸軍大將の、西鄕隆盛樣が、東京の政府に、何か氣に入らない事があつて、大層腹をお立なされ、私學校かの、人數を連て、東京へ攻登る心算で、人吉あたり迄出張された所、熊本鎭臺にござる司令長官の、谷干城樣が夫を聞て、設令陸軍大將にもしろ、朝廷のお許しもないのに、多人數の兵隊を連て、專橫に上京するのは不埒の至り、全く朝敵謀逆に違ひない、此干城が司令長官であるからは熊本の城下を通行させる事はならぬ、今にも西鄕が押寄せて來たら、一泡吹せて追拂つてやると、昔の淸正公も其方退けといふ、大層な勢ひで力身出して、戰爭の準備に取掛られ、此分營の聯隊にも、電報で出軍を命じられたので、此う俄に、御出張になるのだとのこと……、ナーニ、大將でも、先生でも、西鄕でも、隆盛でも、昔から朝敵と名のついたものに、軍に勝た例はございませんから、御安心なさいまし、即て滅されるのは請合でございます、お內の旦那樣も、大層なお手柄を遊ばして、威張てお歸り遊ばすのは、ツイ今の間でございます……、さうから申してゐる內に、旦那樣に遲れてはなりませんから、もう小可はお暇いたします、奧樣も、坊樣も、御機嫌能く、旦

那様の御凱陣をお待ち遊ばしませ、左様ならば』と言葉短に云捨て、馬の道具や、其身の物、主人の物はいふに及ばず、何彼と取揃へて背に負ひ、營所へこそは走つけゝれ、迹に春日田の妻のれ愛は、良人の不意の出陣に驚かざるにはあらねども、元來軍人に連添ふ身の、商賈農民の妻とは異なれば、此る時にも心をおちつけ、少しも女々しき樣子なく、一層邸内を取片付けて、良人の武運を神に祈り、氣遣ふ吾子を慰めゐたり、談話轉つて馬丁の甚吉は、年こそ老たれ身は健かなれバ、戰争の塲の伴に立つれ、豫て心に望む所、殊に年頃己が飼養たる藤袴が、主人を乘せての初陣なれば、宛然吾子を始めて軍に出す想ひ、日夜藤袴の側を離れず、兵糧の運搬び、馬草の手當、何呉となく世話なして、藤袴にすぐれし功を立てさせ、天晴無双の名馬よと、此上無き名譽を得させくれん、ふぢばかまに功を立てさすは、取も直さず主人の大尉に、功を立てさすものなれバ、自然忠義の道にも適ふ道理、その藤袴に功を立てさすれ、結局吾飼養の如何にあれば、少しも早く主人の側に行き、吾藤袴の口につかんと、心の内に思ひつゝ、宙を飛んで營所に越けば、既に出軍の準備整ひ、今しも進發の喇叭をば聲勇ましく吹立る所なり、吾主人の大隊は孰にあるぞ、先鋒か、中軍か、後陣かと、目を皿の如くにして見廻せば、吾子と思ふ藤袴は、主人春日田大尉を乘せて先鋒に在り、長き鬣を夕嵐に吹亂し、鼻息荒く吹立てゝ、いと勇ましく立たりけり、甚吉は一目見るより踊躍り、

甚吉『ヤア、藤袴は先陣に進みをつた、強いぞ〳〵』

と吾知らず叫びつゝ、主人の側に走寄れば、保は馬上ながら甚吉を見て、

大尉『ヲゝ甚吉か、早かつたな』

甚吉『ヘイ、奥様も、坊様も、御機嫌好く御出陣遊ばせと、此様におつしやいまして、ソシテ、御陣中は、格別お厭ひあそばすやうと、くれ〴〵お傳語でございました』

大尉『ムゝさうか、併し甚吉、藤袴ゝ初陣だぞ』

甚吉『ヘイ、夫で小可も、大喜悦のやうな、大心配のやうな、變轉故な心地でございますが、側に就てゐられますから、マア安心でございます』

大尉は片頬に笑みを含みつゝ、

大尉『馬鹿を云へ、いつまで一所にゐられるものか、主が先か、馬が後か、汝が後か、余が先か、ドウで一度は死なねばならぬ』

甚吉は驚いて目を圓くし、

甚吉『エー』

折しも進軍の號令は、勇ましき喇叭の聲にて傳へられ、大尉は一聲高く、

大尉『大隊、進め……』

藤袴は、躍りあがつて『ヒーンー』

（其三）

抑も十年西南の役たるや、鹿兒島三萬の壯丁をつくし、必死を極めて押出したる事なれば、其當初の勢ひの猛烈なりし事、史傳に傳へ口碑に殘り、天下の人の悉く知る所なれば、今更此に記すまでもなけれども、彼等が人吉を越て熊本に來るや、宛然潮の寄するが如く、左しも金城鐵壁の名ある熊本城も、アハヤ一揉に攻落されん狀況なりしが、城將谷干城君の忠勇無双なる、張壞陽の節を磨き、楠河州の智を廻らし、能く士卒の心を收めて、巧に防禦の術を盡しければ、左しもの西鄕桐野篠原等も、容易く城を拔く事あたはず、爰に當初の目的を失ひ、此くして空しく日を送る内に、若も援兵の來りて、要害に據て行手を塞がば、戰爭益勝算なからん、若かず城は此まゝにして押ゑをおき、速に上京の途につかんにはと、忽ち軍略を一變して、田原、植木、山鹿の諸路に向ひ、隊伍整然として押出しけり、爰に又小倉營所の兵は、熊本城内なる鎭臺の本營と合して、共に薩軍に當らんものと、道を急いで來りけるが、春日田大尉はその先鋒を卒ゆれば、例の名馬ふぢばかまにうち跨り、自身眞先に進みて、植木口まで來りしに、ト見れば薩軍は早前面にあり、而も要所に陣を取りて、拳下りに銃尖そろへ、今にも官軍よせ來らば、只一撃に討破らんと待搆へたり、官軍は薩兵の此容子を見て、サテハ薩軍には早此處に來りたるよ、イデ打破りて熊本城に入らんものと、先づ此由を司令官に告知らせ、場所を選みて陣を布き、

即て砲戰をぞ始めける、官軍は勿論兵器繰練二つながら、賊軍に勝る事數等なれども、如何にせん、彼等は地の利に據り、殊に待設けたる所なれば、拳下りに打立れども、官軍は總て敵の眼下に在り、如何に堅固なる胸壁を築けども、敵より其內を見すかされたり、且は事やゝ不意に出たれば、破つて進まん事容易からざるのみならず、動もすれば打立られて、隊伍もまばらとなりけるにぞ、司令官を始め一隊の將士、コハ殘念なり無念なり、唯一攻に攻破れよと、必死となりて砲擊すれども、敵ハ山に據りて胸壁を築きたれば、林の內に身を藏し、金線ある帽子を戴ける、官軍の將校のみを目掛て、巧みに狙擊を試みければ、暫時の內に多くの將校を打倒され、兵士の心頓に折けて、今ハ戰爭難儀を極め、勝つべき望みのなきのみならず、引くも引かれぬ塲合とはなりにけり、春日田大尉も乘つたる藤袴も、馬丁の甚吉も、幸ひ此時まで微傷も負はねば、大尉は味方の兵機の折けしを見て、無念至極の事に思ひ、何卒して之を盛返し、責ては薩兵の胸壁の一つなりとも、乘取らんものと氣を焦り、血眼になつて兵士を叱咤し、一歩も引かず戰ふたり、左れば彈丸雨の如くに降來れども、藤袴は能く主を乘せて、嶮岨の道を縱橫に駈廻りて、少しも一所に止らねば、敵もこれを狙擊なすあたはず、極めて殘念の事に想ひ、アレ、アノ、栗毛馬に乘たる士官を見よ、小賢しき振舞をなす奴かな、官兵原の目覺しに、打て取れ、射て落せと、大音に叫びけるが、果は栗毛馬士官を打て〳〵と口々に罵り叫びけり、左れども丸は一つも大尉に當らず、甚吉は又藤袴が、世に勇ましき此働きぶりを見て、心嬉しくは思へども、若や丸に當りはせ

ずやと、心の内に案じ煩ひつゝ、始終馬の側を離れず、はたらきされけり、兎角する内に、官軍は漸次に引退きて今は春日田の先鋒隊のみ、僅かに其處に踏止りて、猶も勇を振つて戰ひしが、折しも薩人の隼人の面々は、砲戰を手緩しとや想ひけん、其勢凡そ百人あまり、三尺の秋水を拔きつれて、ドッと吗喚いて斬込み來れり、此る接戰には馴れざる官兵なれば、此の勢ひに避易して、ムラ〳〵パッと崩れ立つを、大尉は馬上に劒をうち振り、

『とゞまれ、〳〵』

と叫ぶ所へ、薩兵は驚く官兵を打破りて、バラ〳〵と進み來り、先づ狼狽ね騒ぐ馬丁甚吉を、何の苦もなく取て押ね、續いて大尉を生擒にせんと、側近く進み寄るその時早し、大尉は藤袴に一鞭あてしが、馬はヒーンと嘶いて一躍りをどり、群り來る薩兵の、頭の上を飛越ねて、彼が飼養の親ともいふべき、馬丁甚吉を跡に殘して、主の大尉を乘せたるまゝ、蹄をならして飛び去りけり、

（其四）

甚吉は吾子と想ふ藤袴にふり殘され、遂に薩軍の囚徒となり、その儘營内へ引れしが、賊の内にても大將分と見ゆる一人が、

賊將『見れば汝は馬丁らしいが、是から心を入替て、西鄉先生の手につき、余の馬丁に成て働け、否といふと首打斬るぞ』

と權柄おしにおしつくるを、無念の事には思へども、命有ての物種なり、年は取てもこの場合、容易く捨る命でない、暫時の間彼等の、云なり次第に成てゐて、機を見合せぬけいだし、旦那の所へ歸らうと、密に思案を定めければ、故意と何氣なくつくろひ、

甚吉『ソリヤ旦那樣、勿論馬丁は小可の稼業、命さへ助けて下されば、何で否やがござりませう、ドウゾ
　れ使ひなすつて下さいまし』

と左も心よく了承へば、ソレではこれを預くるぞと、十寸に餘る黒馬の薩摩種、引そばへのする難物を押附けられ、頗る御しがたくて迷惑すれども、是も命を繫ぐ媒と、少しも厭へる氣色なく、尤丁寧に取扱へば、賊將ハ深く喜びて、是はとんだ掘出物をしたり、同じ分捕者のその内にも、こんな重寶なものは又と得られぬ、取逃さぬやう用心して、永く使ふてやるべしと、晝夜心を許さねば、甚吉は其目的の外れたるに、頗る望みは失へども、今更他に詮術なければ、猶も忠實しく働きて、二心なく見せかけゐたり、然るに薩軍の勢ひ愈々猖獗を極め、田原、植木、山鹿等諸口の戰爭、官軍屢々利を失ふにぞ、甚吉常に心を安んぜず、旦那も定めて苦戰を遊ばすだらう、藤袴も例も難澁するであらう、旦那にお怪我はないか、藤袴に過失はないかと、夫のみ氣に懸れば賊兵が戰場より歸れば、さりげなく戰の模樣を尋問へば、イヤハヤ百姓上りの鎭臺兵は、薩摩武士の相手にはならぬ。今日もかうであつた、昨日もあゝであつた、將校の首を何級取たと、傍若無人の自慢話し、聞くたび毎に栗毛馬に乘つた、如此々々の士

官はドウでございましたと、咽まで突て出るその言葉を幾度となく呑込みて、ソレはお手柄好い氣味と、心にもなき追從口、ソレを聞て賊兵は誇り顏に、いよ〳〵圖に乘る自負廣言、桐野殿は强ひ、西鄕殿はすさまじいと云ふその口の下よりして、然しどか、ダガとか、前置をして言出すは、三線の金線を帽子につけ、栗毛馬に乘てゐる先手の隊長、馬は逸物乘者は達者、敵ながらも天晴の豪傑、鬼神不測の働きする故、毎度それが爲ゐ妨げられて、とかく想ふまゝの勝を得られねば、ドウかして狙擊してやらんものと、味方一同に氣を配れど、何分仕留られないで、殘念だと、甲乙となく主人の噂、甚吉はシテ見れば、旦那樣も藤袴も御無事で息災で働いてゐるかと、思ふ嬉しさを色にも出さず、戰のお話は勇しうて面白い、明日もドウゾとすべり出、人なき所に至るや否や、天を拜し地を拜し、南無八幡大菩薩、將來とも主人と藤袴の、武運長久を守らせたまへと、丹精凝して祈りけり、此は是れ初めの間の事にて、後には薩兵次第に敗を取り、八代口より官軍の別働旅團、破竹の勢ひにて進み來り、無二無三に賊の本營を突けば、今は田原、山鹿も守りがたく、果は御船の方へと引退けども、甚吉は尙も免るゝ事あたはず、牛に引れて善光寺參り、夫は往生極樂の願ひ、いや〳〵ながらも好き事なれども、是れ地獄の修羅鬪爭、冥助を垂れたまふ大慈大悲の、地藏菩薩の降臨なければ、午頭馬頭の鬼に齊しき、賊兵に誘引れて、往く道々も、彼等の噂に耳を傾くれば、栗毛馬の士官が能く働いて、いつも我兵を惱せども、狙擊せんにも馬は駿足にて、宛然虎空をかくるが如く、一所に足を立てねバ、如何に心を盡せど打つ事叶はず、殘

念至極と異口同音、主人と馬の沙汰のみなれば、甚吉はせめてもの心の喜び、口の内にて幾度か、
『旦那樣、強い、藤袴、出來した』

（其五）

三船の戰爭は戰線廣くして、薩兵も精鋭をつくし、官軍も大擧して、たがひに一戰に雌雄を決せんとする所なりければ、甚吉が捕はれとなれる薩兵の一隊は、或る丘に沿ひて長く戰線を張りてあり、甚吉は如何もして此處を逃出、恙なく主人の陣營に歸りて、藤袴の無事な顏見たしと思へば、夜は殊更に注意して、隙もあらばと伺ひゐけるに、此處に着てより二日目の夜なりしが、幸に已れを守る番兵もなく、殊に月なき夜なりければ、今宵こそ遁れ出べき時なれと、ソッと陣所を拔出し、四方の樣子を伺ふに、此隊の隊長の陣所と定めし、彼方の森の中なる民家を目掛て、多くの士官の集る体、平事ならず見えければ、毒を喰へば皿とやら、到底命を賭にして逃る位なら、賊軍の樣子を細かに探ッて、旦那樣のお爲になり、藤袴に功を立てさするが、ツマリ此身の忠義といふものと、戰の中に日を送りし甲斐ありて、自づと度胸も太くなりたれば、早くも此うと覺悟を定め、密に本營の内に忍び入りて、隊長のおる百姓家の裏手へ廻り、窓の破れより内を窺ひ、息を凝してゐたりけり、賊將等は此る間者のありとも知らず、壁にも耳のある世とはいへ、鬼とも云はるゝ薩摩武士の營所へ、忍び入るものの有べき筈なし、若も命知らずのあるならば、見附しだいに引捕へ、乃ち渠の望み通り、首に刀の引出物、此世の引導渡してく

れんのみと、安心なしての戰爭評定、隊長某ハ虎鬚を撫でつゝ、
『此隊の側面に當る官軍は、例の栗毛馬士官の大隊なるが、彼奴め己が武勇の鋭さに任せて、吾戰線に侵入し、夫がため此隊の戰線のみは、一里あまりも引込んである次第、何と遺憾千萬の事ならずや、然るに明朝未明より不意に彼隊の背後を斷切り、敵の本營との連絡を斷ち、彼隊を袋の鼠と同樣にして、前後左右の山々より、拳下りに砲擊して、鏖殺にして退るやうと、本營よりの命令なるが、何と愉快の事ならずや、平素怨みのある栗毛馬士官の、首を得るのは翌の朝飯前、ソレ樂みに準備さるゝぞ好き、出發は午前四時なり』
と左も心地好げに言渡すを、聞て甚吉は大に驚き、
『サテは危險なる戰爭評定、今夜の中に旦那樣にお知せ申さねは、藤袴めも命はない、コリヤ何とせう、ドウせう、イヤ〳〵狼狽てゐる所ではない、此う脫走と覺悟を極めたからは、叶はぬ迄も逃出し、官軍の本營へ此由を注進して、旦那樣の大隊を引揚さするが、又は連絡を斷れぬやうにするか、二つに一つの事をせずば、可愛い藤袴の一大事、貴重な旦那樣のお命、さうだ〳〵、少しも早く行う、賊兵の出發は、午前四時と極てゐれば、夫迄に注進せねばならぬ』
とソッと其處をば拔けいたし、道は知らねど官軍の營所を目ざして、ひた走りに走り、凡そ里程の半里も來たと思ふ頃、向ふより誰やら人の來る氣色、元より暗夜の事なれは、判然と黑白はつかざれども、

賊軍の斥候兵と思はるゝにぞ、

『南無三寶失錯たり、彼等の手に落ては一大事、此身一つはさもあらばあれ、藤袴の命を助ける事も出來ず、旦那樣のお身を援ふ事もならず、ドウしたら此場が免れられるだらう、嗚呼世の中には、神も佛もないものか、有らば官軍の爲め、旦那樣のため、藤袴のため、此甚吉の身を守りたまへ』

と口の內にて祈念する折から、唐突に背後から、

『誰だ……』

一聲誰何められ、甚吉は只さへ胸を傷めをりしに、不意を打れし事なれば、その儘其迄に平伏りて、振へし聲をふり絞り、

『ドウゾお許し下さいまし』

と吾を忘れて叫びたるが、誰何し兵士は光り輝く、劍をつけたる鐵砲をとりのべ、甚吉の目先につきつけて、

『コレ其方は何者だ、シテ今頃何處まへゐる』

甚吉は恐怖に心を充されて、齒の根の合ぬまで震へを感ずれども、此ぞ一生懸命の場合と、强て聲に力を入れて、

『ト、隣村まで……百姓でござります』

（其六）

『百姓でございます、近所まで一寸』

と云へる甚吉の曖昧なる返答は、却て此斥候兵の疑ひを添へ、

『怪しい奴め、此方へ來い』

と手もなく縛られて引立てられけり、其夜は既に十二時前後にて、而も月なき夜なれば、此處は何處なるか、方角さへも定かならず、唯樹木の森々と生繁りたる、凹凸道を辿れるのみ、甚吉は引れながら、心の中に想ふやう、賊營を脱出してから、猶一里とは歩まぬやうなれば、迚も賊の戰線を越せし筈はなし、左れば此斥候兵は、洋服を纏ひ劍銃を持ち、その服裝は官軍じみたれども、あまりに汚穢すぎて見すぼらしければ、必定是は賊軍に紛れなし、嗚呼殘念なことをして退けた、本營へ連て行かるれば、脱走を企てた事も知れ、此首を斬らるゝは云ふまでもなし、此命を失ふことは、すでに田原坂の戰爭に、藤袴と共に討死せんと、一旦覺悟を定めた事もあれば、左して厭ひはせぬなれども、明日の朝になるなれば、旦那の大隊は、藤袴の大隊は、本營の聯絡を斷れて、袋の鼠も同樣、藤袴が如何に駿足でも、此圍みは拔けられまい、不便や彼めゝ旦那樣と御一所に、翌ゝ必ず討死に極つてゐる、二歳の時から手にかけて、三歳駒の若盛りに、己が引いて招魂祭の競馬に出し、第一番の勝を取らせ、鎮臺一の駿足と譽られた時の嬉しさ、我子が戰爭の先登して、敵の大將の首でも得たやうに思つたが、彼奴も夫が嬉しか

つたか、鼻嵐を吹いて鬣を振り立て、一鳴い嘶いた時の勇ましさ、その時の姿は今も猶、此眼中にあり〱と寫つてゐる、ソレがマア、五歳になるかならず、旦那樣と一所に討死するとハ云へ、翌の朝露と消るとは、何たる情ない事やら、田原坂で本意ない別れをして、マ一度ドゥゾして彼の顔が見たい、旦那樣のお姿もおがみたいと、今日の今迄の心盡し、漸やく大事を聞出して、助けて遣らう、お救ひ申さうと、精一杯の今夜の働き、折角賊營を脫出して、途中まで來て此の体裁、もう藤袴の顔も見られまい、旦那樣のお姿もをがまれまい、おくれ先立つ世の習ひ、到底一回は行く道と、定つてゐるとは云ひながら、如此な果敢ない別れをするとは、返す〱もなさけない、是もみんな薩摩武士、賊軍めの所爲と想へば、ヱヽくやしい腹の立つと、吾を忘れて齒をかみしめ、れのづと足もとゞまれば、引行く兵士はもどかしがり、

『ヤイ何をグヅ〱する、サッサと歩め』

と罵るにぞ、さながら屠所の羊の思ひにて、涙のみてみ引かれゆきしが、やがて荒廢たる一個の寺院に連込れ、中門の方へと引れゆく折しも、彼方に當りて一鳴い、さも勇ましき馬の嘶き、アッ、あの聲はと甚吉は、聞耳聳てゝ聞くも道理、その嘶きは甚吉が、吾子と想ふ藤袴の、その嘶きに似たればなり、今一鳴聞たしと、吾を忘れて佇立めば、

『ヱヽ又しても何をグヅ〱、早く此方へ來い』

と心なき兵士に、力任せに引立てられ、是非なく庫裡の方へ引れゆき、空納屋の内にぞ繋がれける、甚吉は又も心の内にて、さるにても今の嘶き、藤袴の聲に能く肖たり、若や此處に藤袴が、イヤ〳〵、此處は賊の陣營なり、藤袴のゐやう筈なし、全く他の馬の鳴い聲、藤袴を戀しふ思ふ心より、他の馬の聲までが、彼の聲のやうに聞えしならん、心の迷にこそ、思ふまじ、想ふまじと想へども、なまじひ馬の聲を聞し甚吉、又も藤袴の事を思ひいで、とても此世では再び會へまいと、人目なければホロ〳〵涙、手はうしろ手に縛られたれば、落る涙をぬぐひもやれず、只ひた泣になきいたり、やがて以前の兵士は、再び其處に入來りて、又も縛りし繩を取り、此方へ來いと引立てゝ、本堂の方へと連行きて、高やかな緣前に引きすへたり、緣の上には此手の隊長なるへし、黒のズボンに黒のヂヤケツト、ソレさへ甚く色褪せて、金筋もなく飾りもあらざれば、必定賊將と見えたるか、洋劍を片手につきてひかへたる、その傍にハ炎々と、篝火を焚きて燈火に換たり、甚吉は恐る〳〵、その篝火の光にすかして、隊長の顏を見て、アッと叫ひしが、隊長も亦甚吉の顏を見て、コレはとばかり驚きけり、

（其七）

『ヲヽ旦那樣』

『ヤア甚吉か』

『藤袴は無事でゐりますか』

『ムゝ無事ぢや、コレ、繩を解いて遣はせ』

賊營と思ひしは官軍の支營、賊將と思ひしは春日田保なりしかば、甚吉の喜び云はん方なく、繩を解かるゝとそのまゝ、大尉の足に縋りつきて、

甚吉『旦那樣、お引揚なさいまし、藤袴の口は小可が取りますから、早く〳〵』

と急立れば、大尉は片頬に笑を含みながら、

大尉『何を申す、遽てゝは不可、此處は余の受持の戰線ぢや、進むとも退くことはせぬ、馬鹿な事をまをすな』

甚吉『デモ、大變で……明朝は、襲擊……是非ともお引上げ……藤袴の命にかゝはります』

大尉は俄に目を怒らせて、

大尉『靜かにいたせ、默れ』

と叱りつけて兵士に向ひ、

大尉『これは僕の馬丁ぢやから、もう附いておらんでも宜い、元の線へ行け、怠るな』

と兵士を去らしたるのち、甚吉と對向ひになり、更に面を和らげて、

大尉『甚吉、汝、マア、ドウしておつた、ともかくも無事でめでたい、汝の樣にさう遽てゝ物を云ては、何がどうしたのか、サツパリ譯が分らん、今襲擊とまをしたが、アレハ何の事だ』

と言葉徐に問掛くれば、甚吉も少しく心を落着て、田原坂にて賊兵に捕はれし以來の事を、簡短に物語り、且は明朝の襲撃の事をも告げて、

甚吉『トいふ譯でございますから、一刻も早く此處をお引上なさいまし、サア、此ういふ内も氣が氣ではございません、一時も、イヱ、一刻も早くお引揚になりませんと、ソレこそ大變になります、いま何時かぞんじませんが、賊軍は四時の出發でございます』

と猶も烈しく急立つれど、大尉はいよ〳〵落附き拂ひて、懷中時計を出してチヨツとながめ、

大尉『ム丶、一時廻つておるワ』

と云つたきりにて、身動きさへもなさゞれば、甚吉はもどかしく思ひ、

甚吉『旦那樣、もう一時をすぎてをりますれば、四時まで……賊の襲撃する時刻までに、三時間はございません、さう落着いてゐらつしやる場合ではございますまい、少しも早く、お引上なさいません、と、御一命にも……不便や藤袴めも……』

とあせれども大尉は泰然たる樣子、

大尉『コレ、コレ、靜にせんか、奥には兵がおるぞ』

甚吉『ダッテ、貴君、大變』

大尉『またそんな大聲を發しおる、總じて一隊の司令官となり、長官の命を受けて、一方面を守るもの

は、長官の命令のない内は、寸歩も戰線を退く事はならん、設令明朝の四時になつて、賊が大擧して襲擊しようとも、其時は死を以て此處を守る分の事ぢや、春日田大尉は名譽を重んじ、節義を重んじ、軍令を重んずる軍人ぢや、敵の襲擊に聞怖して、故なく守備線を去るやうな、卑怯未練なものではない、甚吉、汝がいくら何といつても、此處は一歩も退かんから、命が惜しくは汝だけ迯げろ』

と云ひ切ッて自若たるにぞ、甚吉はアッとばかりに其處に平伏り、折角九死の内に一生を求めて、やう〳〵此處まで迯來り、圖らず主人の大尉に會ふて、ヤレありがたや、是にて藤袴の一命も救はれると、嬉し喜んだ甲斐もなく、大尉が一徹なる軍人の決心、敵の意外なる襲擊も怖れず、義を重んじ死を輕んじ、少しも動ぜぬその強膽に、思込たる望みを失ひ、今更返す言葉もなく、此くては藤袴も大尉と共に、三船の露と消るは必定、アヽ悲しやと涙に咽び、暫しは正体もなかりしが、やゝ有て心を取直し、恐る〳〵大尉に向ひ、

甚吉『成程、さう承はれば、如何にも御尤でござりますが、此儘にしておりましては、敵は大軍、味方は小勢、明日の戰ひの結局は、十が九つ味方の敗北、シテ見れば、旦那樣を始め小可が、子のやうに想つております、藤袴めも討死せねばならぬ、ソリヤもう討死するは武士の習ひと、昔から世の喩にも、云ひます事ゆゑ、討死は軍人の當然ではございませうが、併し免れる道のあるのに強て

討死するもおろかな話、早く此樣子を本營に御注進なすッて、援兵の出張をお求めなさるか、左もなくば引上の命令をれ受なさるか、二つに一つをなされるのが、差當つての上策と考へられまするが、ドウゾさうなすッて下さいまし、如何も藤袴めが、可愛想でござり升』

と淚ながらに訴ふれば、大尉ハ首を左右に打振り、

大尉『ソリヤ不可、此春日田ハ田原坂以來、未だ一度も他に援兵を求めたことはない、又一ト步も退くことは嫌ひだ、賊の大擧して襲擊するこそ幸ひ、命を賭にして、一番やつて見る心算ぞ、無益なことを云ふな』

（其八）

甚吉『デハ、旦那樣、それもなりませぬか』

大尉はいさゝか聲を低めて、

大尉『成らん、假しその通りにするとしても、今はもう一時過ぢや、本營までは六里もあるから、往復十二里に近ひところ、若も徒で行くならば、片道だけでも四五時間はかゝる、傳騎をやつた所が、凸凹の山坂道だから、ソレも駄目な話、シテ見れば、假に汝の意見に就た所が、援兵も間に合ず、引上の命令も達しない、ダカラ、いつそそんな女々しい事をしないで、軍人たるべきもの丶職分を盡し、自分の担當する方面を守り、運を天に任せて決戰した方が、何程潔か知れぬ、甚吉、汝、

もう何といてつも無益だ』
此く言放されて甚吉は、再び失望の淵に陷入り、主人の大尉と藤袴を、見す〳〵此處で殺さねばならぬか、ソレも賊の内狀を聞ねば、夫迄の事にてあるなれども、なまじひ耳にしたが怨めしい、ドウかして他に助ける工夫かないかと、思案にくれてゐたりしが、即て思ひ得たる事ある樣子して、
甚吉『旦那樣、此處で旦那樣の一大隊が、萬一鏖殺になるやうなことがあれば、旦那樣や藤袴の命にか丶はるばかりでなく、官軍惣体の勢ひが挫けませう、就ては甚吉も藤袴も命がけ、二人が、イエ、彼と小可とが一生懸命の御奉公、他の馬より足の早いアノ藤袴、ドウゾこの甚吉にお貸しなすツて下さいまし、年こそ老たれ乘者は甚吉、二歲の時から手がけた藤袴、互ひに氣心の別た同士、山であらうが、坂であらうが、飛越し跳越し本營へまゐり、キツと援兵をお間に合せませう、此事ばかりは旦那樣、ドウゾお聞屆けなすつて下さいまし』
と想込んで言出れば、大尉はしきりに點頭きて、
大尉『それも恐く間に合ふまいが、汝のいふ通り、若も此手が破れなば、官軍全体の勢力にもか丶はる事、又二つには汝の命、藤袴の命、保が數度の苦戰を經て、今まで微傷も負はずにゐたは、全く藤袴の功であるのに、その恩賞をせぬのみか、此處で一所に殺すは不愍、宜いワ、許してやる、早く行け、合詞は天地だぞ、忘れて哨兵に捕はれるな』

甚吉は想はず飛びあがり、

甚吉『ヱッ、ありがたう、旦那樣、藤袴は何處に』

大尉『庫裡の背後にゐる』

甚吉はあはてゝ庫裡の裏手に行けば、藤袴ハソレと見るより、別れし親に逢ふ如く、鬣を振立てゝ喜び勇み、いくたびとなく嘶きけり、甚吉は和らかに頭を撫でゝ、

甚吉『能くマア無事でゐてくれた、アゝ、旦那樣もお瘦せなすつたが、汝も瘦せたな、可愛想に、僕が側についていたら、不自由はさせぬものを、空腹しくはないか』

と平首に抱きつき涙一滴とすれば、馬もその心を知りたるか、首を垂れて悄然たるは、嬉し涙に咽ぶなるべし、甚吉はキッと心を取直して、

甚吉『アゝ、此うしてゐる所ぢやない、コレ、藤袴、旦那樣の御一大事ぢや、明朝の四時迄に、援兵か、引揚の命令か、孰かを本營から取つて來ねば、旦那樣の御一命にかゝはるばかりか、官軍惣体の弱みとなる、御主人のお爲め、天子樣のお爲め、平素足の早い汝だが、今夜は格別骨を折てくれ、空腹しくはないか』

と宛然人にものいふ如く、いと懇に言聞すれば、馬はその心を得たるか、忽ちキッと首を擡げ、イザ乘れ行かんと身構へたり、

甚吉『ヲヽ聞分たか、かしこい奴よ』
といふより早く飜然と飛乘れば、藤袴はさながら矢を射る如く、風を截つてぞ走去りける、

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

春日田大尉は、ゆくりなくも甚吉の歸來りて、賊の內狀を告げゝれば、彼が大擧して襲來ることを知れども、如何せん本營とは、許多の道を隔てたれば、援兵も又引上の命令も、迚も間に合はざるを能く知れば、故と自己の手よりは通知せず、馬と馬丁の命を併せ助けんため、彼が請ふがまに〳〵出しやり、心靜かに討死の用意を整へ、尤嚴重に兵を配り、一死以て皇室に報ひ奉る、軍人たるものゝ職分をつくし、息ある內は一歩も退かじと、潔き覺悟を胸に定めつゝ、目にあまる大敵の寄來るを、今や遲しと待構へたるが、即て二時も過ぎ、三時も往き、四時五分前とはなりぬ、今五分せば賊の大軍、吾一隊を取圍み、微塵になれと砲擊するならん、來れや來れ、吾も春日田保なり、平素訓錬せる兵力を顯はし、死を以て守りて彼等を惱まし、左右なくば破られじと、片唾を飮んでひかへたるが、チクタク、〳〵の音と共に、時計の針は漸次に進み、今や正しく四時の上に來りし折しも、馬の嘶き蹄の音、いと花やかに聞ゆる間もなく、藤袴は疾風の如く歸り來り、甚吉は飛んで降りると、そのまゝ大尉に向つて聲高く、
甚吉『援兵はまいります』

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

當日の戰爭は、賊軍の來らぬ先に、官軍連絡して備へを立てければ、賊は却つて不意を撃たれて大敗軍、官軍は非常の勝利を得たり、春日田大尉は數度の戰功に依り鹿兒島鎮定の後ち、職を進められ、少佐となり、勳四等に叙せられぬ、少佐は己が未帶びぬ前に、その勳章を藤袴の平首にかけ、甚吉を傍に立せて、感謝の涙に兩眼を濕せつゝ、

少佐『貴樣等こそ、此勳章を佩ぶべきものだ』

馬は主人の恩にや感じけん、一聲高く嘶きぬ、甚吉は滿面に喜びの波をたゝへつゝ、

甚吉『藤袴めは、違ふと申してをります、小可も同樣……』

（完）

◉和氣清曆 （正本製）

第一齣（上） 僞の神託

稱德天皇再び登祚あり、重ねて萬機に臨みたまふ、神護景雲三年の夏の末、一日の事になん、今日も朝政を料理めんと、百官諸司袖を聯ねて、紫宸殿に參朝し、位階に隨ひ威儀をつくろひ、整々として並居たり、上座にひかへし左大將弓削の黒人、兄道鏡か君寵を恣にする、虎の威を假る狐面、權柄眼をきよろつかし、人も無げに一坐を見廻し（黒人）先年惠美押勝兄道鏡の威權を妬み、螳螂の斧を揮つて謀反を企立て、速に天誅に伏してより、あらゆる天下の政道は、一も二も無く禪師殿任せ、夫に安心してか、但ハ怠惰か、永手殿も眞備殿も、左右の大臣は只名許り、病氣に假托けて引込勝ち、兄一人にて萬機の裁決、晝夜身心を勞らすゆゑ、頃來は所勞の氣味、當分の所は吾等か名代、今日は差出者の百川も、今に參殿いたさねば、打も舞ふも吾等の手一つ、イヤハヤ大体の事でハござらぬ、夫を左樣とも心得す、無智蒙昧の百姓共、些少の不作を饑饉と號し、飢渴ゝ迫るなどゝ仰山な言立て、實に世話の燒けた奴等でござる」と傲然として言出れば、道鏡兄弟の權威を恐れ、媚ひ諂らへる官人原、其意を承けて口を揃へ（甲）大臣の禪師殿は申すに及はず、左大將殿の頃來の御勤仕、容易ならざる御辛勞、憚りながら御推察申す（乙）卿等御兄弟の仁德に依り、四海ます〳〵泰平の化に潤ひ、都の東南の方に當つて、

五色の雲のたなびくさへあるに、伊勢の豐受の大神宮の上に當りても、五色の瑞雲起れる由にて、書圖にしてまで奏上あり、此く天地神明までも、歡喜の瑞相を呈したまふに（丙）恩惠に馴れて飽くこと知らぬ、强慾無慘の百姓共、些少の事を仰山に言立て、救助を仰ぐとは言語同斷、畢竟米穀の登らぬは、彼等か耕作に怠るからのこと、設令餓死いたすとも自業自得、別段御配慮には及び申さぬ」と調子を合する其處へ、下司一人階下に蹲踞り（下司）ハッ申上げ奉る、只今筑紫大宰府の神官、習宜の阿曾麻呂、宇佐八幡宮の御神託を蒙り、奏聞の爲め出頭いたしてござるが、如何取計らひませうや」と云ふに人々驚きて（甲）ナニ習宜の阿曾麿が（乙）神託を奏聞の爲め、出頭せしとな」と不審の言を發する間に、黒人は何か心にうち點頭き（黒人）かりそめならぬ八幡宮の御神託、自身の奏聞は當然のこと、速に之へと申せ」下司の官人はハッと答へ、退る間もなく習宜の阿曾麿、左もゝのゝしげに出來たり、緋の袍の裾搔合せ、恭しく階下に蹲踞り（阿曾丸）某過る夜、宇佐八幡宮の託宣を蒙りて候ふが、其故は、今上に親近する、大臣の禪師道鏡は、深く佛法の奥旨を極め、道德世に優れたる者なれば、速に彼に王位を讓り、天下の政道を任す時は、四海ます〳〵太平にて、國家安穩の基ならんと、尤も明著なる神の告げを得て候ふ、夫故に長途を厭はず、晝夜を兼て馳登り、此段謹んで奏聞し奉る」と眞實やかに言上げしけり、心ある者は此託宣を聞きて、互ひに目と目を見合せつゝ、叡慮の程を謀りかね、密に心を傷むるにひきかへ、黒人は滿面に喜悦の色を顯はし（黒人）神明かしこくも、吾兄道鏡の法德を照覽にありて王位を讓

れとの御託宣、殊に天下益々大平とあるからは、仁智に優れたまふ天皇の、爭で神意に背きたまはん、叡慮を伺ふまでも無く、速に御裁許あるは勿論のこと、其方天下の爲を謀りて、遙々の道を厭はず、京都に登りて奏聞すること、誠に誠忠の至りといふべし、追て恩賞の御沙汰あらん、今日は先退出いたせ」と傍若無人の其言葉、心ある者は聞かぬれど、鹿をも指して馬といふ、彼等兄弟の權威に恐れ、敢て一言も發する者無く、阿諛の小人原は得たりかしこしと、只管道鏡の法德を稱讃ゆるのみ、黑人はいよいよ圖に乘りて(黑人)如何に方々、豫て神は正直なりと聞きたれど、吾兄に讓位の今度の御託宣、眞に以て公明なる次第、格別恐入つたではござらぬか」と鼻うごめかして言放つ間も無く、遙か末座より眞人の豐永、慨然として座を進め(豐永)方々をさしおきて、物數ならぬ某が意見、れこなりと思ざれんが、讓位の儀は天下の大事、神託を無みするには候はねど、獨り阿曾丸の上奏を以て、容易に事を決するは、却て神慮を輕んずるに似たれば、大臣の禪師殿は申すに及ばず、永手眞備の左右の大臣にも篤と詮議をつくされ、其上にて叡慮を伺ひ奉り、徐に事を決したまふも遲かるまじ、此場に於て可否を定めたまふは、憚りながらいさゝか疎忽のやうに存ずる」と言尖どく言出けり、黑人は豐永の云ふ所を聞きて、くわつとばかりに眼を怒らし(黑人)ヤア過言なり豐永、讓位の事はかしこき神託、全く吾兄の法德の致す所、天皇と雖も動かし難きに、永手眞備等に詮議は無益、時務に疎き腐儒者、汝如きの知ることならず、默りをらう」と叱すれば、豐永は屹となり(豐永)コハ左大將のれ詞とも覺ねず、某腐儒には候へど

も、かりそめながら學士の職務、文學言語を以て、朝廷の顧問に備はり、謀議に參はり、諫諍を納るゝを得る者、受禪の事は國家の大事、詮議の上にも詮議をつくし、萬一の悔ひこれなきやう、遠く慮からるゝが當然ゆゑ、言語を進めたが何で過言、左云卿こそ潜上でござらう」黑人は威丈高になり（黑人）ナニ此黑人を潜上とな、恐多くも大臣の禪師、道鏡法王の名代たる、左大將弓削の黑人、設令如何なる取計ひをなすとも、潜上の沙汰を受る筈なし、返す〴〵も不禮不法、今一言申して見よ、其分にはさしれかぬぞ、それ方々」と頤にて指揮すれば、道鏡に諂ふ官人原、右左より立寄つて（甲）かたじけなくも陛下の御親任を受け、萬機の政務巨細となく、總て掌裏に握りたまひ（乙）出入ともに鑾輿に乘り、衣服も食膳も供御に擬へ（丙）既に當春も西宮の前殿にて、大臣以下の年賀を受けられし（丁）法王殿下の御名代たる、左大將殿の御意に逆らふは、取も直さず違勅も同樣（庚）御身の爲に惡かりなん、疾く〳〵此場を立去られよ」とその手を取て引立るを、豐永はふり拂ひ（豐永）イヤ立ちますまい、只今も申す通り、朝家のお爲に諫諍を容るゝは、此豐永の職務なれば、申せし言語をお用ひなき上は、左大將殿は云ふに及ばず、法王殿の怒に觸れ、二つなき命を召さるゝとも、あくまで非義をお止め申す（黑人）ヤアまだまだ申すか、學士とは云へ寒貧書生、六位にも足らぬ分際にて、再三再四無禮の過言、諸司の懲戒イデ此場に於て、其舌の根を截斷りくれん」と太刀の柄に手をかくれど、豐永少しも恐るゝ色なく（豐永）天下の得失を論ずるに、素より官位の高下に依りて差別を立つる道理はござらぬ、殊に某は物言ふ職務、其

口を塞がるゝ足下こそ、無禮でござらう、不法でござらう(黑人)ウヌ云しておけば附上り、上官に向ひて無禮呼はり、最早勘忍罷りならぬ」と今や太刀を拔んとするその折しも、奥殿の方に當つて聲高く(百川)ヤア二方とも靜まり候へ、其儀に依て參議藤原の百川、親しく勅命を承はれりと、徐々として出來る、智德兼備の優美の相、見るより黑人駭然として、黑人は其方に向ひ(黑人)ヤア、卿は藤原の百川殿、何時の間に內殿へ」百川は左手の上座に座し、諸司に向つて一揖し(百川)其不審尤も千萬、今朝未明に、進守大夫和氣の法均尼公より、只今參殿せよとの御使ゆゑ、早速伺候いたせし處、法均尼公內勅を傳へらるゝやう、主上には昨夜、宇佐八幡宮の神使の來りて、和氣淸麿の姉、進守大夫廣虫、即ち此法均尼に憑りて、大神神詫を下したまふべしとある、正しき靈夢を見たまひしが、如何にせば宜しきや、百川を呼て尋ねよとの御諚なれば、速に勅答いたせよとの仰せ、正しき靈夢とあるからは、元より捨れくべき事ならねど、女性の身を以て海山隔てし、筑紫の空へ御使は如何と、暫時思案にくるゝ折から、習宜の阿曾麿か神詫の奏聞いよ〳〵符節を合する思ひ」と半聞さして黑人は、莞爾と笑ひて席を進め(黑人)正しき御靈夢を見たまふ上に、符節を合せし神の詫宣、最早疑ふ所もなければ、法均殿を御使に立るまでもなく、速ゝ吾兄道鏡法王に、御讓位遊ばさるゝでござらうな」と云ふを百川はうち消して(百川)イヤ主上には此儀を聞召され、重ねて法均尼公を以て、某に上意の旨を傳へらるゝやう、正しき靈夢といひ、かしこき神詫あるからは、敢て疑ふべきにはあらねども、讓位の事は最も大切なれば、唯

獨阿曾麿の上奏を以て、輕々しく定むべきことならず、更に宇佐へ御使を立てられ、今一回神慮を伺ひ、いよ〳〵神託と符合なさば、道鏡法王受禪たるべし、併し此御使を勤むべきもの、如何に神の御告あればとて、女性なり且は落飾せる、法均尼に似合はしからず、其方然るべき者を撰み奉れとの仰せ」と聞くより豊永は左も喜ばしけに(豊永)御讓位の事は天下の大典、コリヤさう無うては叶はぬ次第、シテ百川殿には、誰人を御推擧遊ばされしぞ」と問へば百川は笏取直し(百川)某深き叡慮を感佩し、諸司百官のその內にて、誰か是かと心に撰みたる末、屹度一人を思ひ得て、今般宇佐八幡宮への御使は、從五位下近衞將監和氣眞人清麿、彼れ未た賤官に候へども頗る正直廉潔にて、誠忠も亦他に比類なければ、恐く御使を過つべからず、殊に靈夢の告けありし法均殿の弟なれば、夫れが代りとも思召され、大神も就中感應ましまして、詳細なる託宣を降したまふべけれバ、此者こそ然るべく候はめと、謹んで奏聞せしに、主上にも御感斜めならず、直に清麿を召喚して、其旨を傳へよとの勅命を聞くより豊永勇み立ち(豊永)清麿ハ某の門弟、彼は己を行ふに恥有り、四方に使して君命を辱めざる者、此御使に立ん者、彼に上こす者は候ふまじ、御推擧如何にも其人を得て、祝着至極に存知候ふ」と云ふにひきかへ、黑人と阿曾麿は、階上を階下へと顔見合せ、互ひに不興の面ふくらし(黑人)再度の使者を立てらるゝとは、御念の入りすぎたる御叡慮(阿曾麿)殊に人もあるべきに、賤官卑職の清麿を使はさるゝとは、神慮に對しても恐れあり、誠に以て片腹痛き御詮議、イヤハヤ、馬鹿々々しい次第でござる」といふを百川は耳に

もかけず、徐に阿曾麿を見おろして（百川）築紫の神官、習宜の阿曾麿とやら、遠路の上京大義であつた」と左も應揚に言捨て、片頬に笑を含みけり。

第一齣（下）　森の下露

すべらぎの聖代平かに蒼生の、みのりの秋を祝ふなる、神樂の笛の音もさえて、神さびまさる春日の森、頃しも夏は老杉の、梢頭にかゝる藤波の、ゆかりの色は見えねども、同じ流れの末榮ふ、藤原の百川が娘楓、言ばしがらむ唐糸の、下の心のむすぼれの、解て嬉しき逢ふせをば、祈りて日毎朝詣で、氏の神とて隔なく、人にハ云へぬ秘密を、朱の玉垣うちつけに、祈れど請ど今日までは、効しなぎさの捨小船、波にゆらるゝ想ひにて、歩む足さへ力なく、侍女二人に扶けられ、夢路をたどる下向道、青柳はなぐさめて（青柳）まをしお姫樣、其樣にお力をお落遊ばしますな、今日こそは彼のお方は、屹度此處へおいでに違ひござりませぬ、ノウ菖蒲さん（菖蒲）さうでござります、頃來からの日照り續きて、折角植た苗も枯れ、百姓等が難儀する迚（青柳）雨乞ひの御祈禱のその爲めに、今日此れ社にお神樂があるゆへ、豐彦樣にはお父上の御名代に、是非とも御參詣をなされる筈（楓）サア妾もさうと聞いたゆへ、平素の願ひを感應あつて、氏の大神樣のお引合せと、今日は毎より早く參詣して、最前からお待ちまをしてゐたが、今までお姿の見えぬのは、ヤツパリお目にかゝれぬのか、若もさうなら何とせうぞいなア」とふりの袂を顔にあて、又さめ〴〵と泣き入る折から、一個の侍女が向ふを眺め、調子外れの歡び聲（青柳）アレア

レ向ふから、見えました、〳〵(菖蒲)見られたとは何が(青柳)ハテ知れたこと、彼のお方が」楓は聞くより望外の嬉しさに、羞かしささへ交加せて、きまり惡氣に只うろ〳〵、二個の侍女は氣をあせり(菖蒲)是はしたりお姫樣、何も羞かしい事はござりませぬ、今日のやうな好いお首尾れ、又と再度ござりませぬ故、平素の思ひをお口づから、確然とおつしやりませ、萬事は妾どもが飮込んで、御都合好いたします」とさゝやく處へ徐ゝと、歩み來れる眞人豐彥、父豐永の敎育を受けて、學問文章のめでたきのみか、容貌さへも世に優れ、花も實もある一秀才、ソレと見るより侍女青柳、出迎へて聲を懸け(青柳)コレまをし豐彥樣、妾の主人が此處にをりますのに、お素通りとはあんまりでござります」と云れて豐彥始めて心づき、姫に向つて一禮なし(豐彥)ヲヽ是は誠に百川殿の御息女、楓どのにておはせしか、心急くまゝ此くとも知らず、御挨拶もせず通り過しは、近頃以て疎忽の至り、失禮の段平に御容赦」と慇懃に挨拶すれば、例の氣輕の菖蒲がさしいで(菖蒲)イヘ堪忍はなりませぬ、ナアお姫樣」と目顏で知らせて笑ひかけ(菖蒲)ヲホヽヽヽまをし豐彥樣、其樣に遠方から、四角四面に御辯解なされても、此お謝罪はとヾきませぬから、もつとお姫樣のお側へ行つて、うち解けておわびをなされませ、ノウ青柳どの(青柳)眞にさうでござんす其樣なむづかしいお顏をなさらずと、早くお姫樣と直接應對」と云はれて豐彥は頭を搔き(豐彥)是は又迷惑千萬、男女七歲にして席を同うせざるは、唐土の聖人の訓戒、どうぞ其儀ばかりは(菖蒲)アレ又そのやうな堅くろしいことを(青柳)情を知らぬは鬼か蛇か(菖蒲)サア其鬼神の心も和ぐ

るは、三十一文字の和歌の徳(青柳)かねてお認め遊はされた、アノお短冊を豊彦様へ(菖蒲)色好いお返事ではなうて、お胸の晴るゝ御返歌を、ナア、ソレ、お姫様」と戀の手管の以心傳心(菖蒲)妾等はその間に、春日さまへお禮まゐり(青柳)憚りながら豊彦様、暫時の間お姫様を(豊彦)如何に御懇親の中なればとて、男の某か姫君を」と云ふを打消し侍女共(青柳)ハテ宜敷うございます(菖蒲)御懇意の間に何の御遠慮、チャッとお姫様のお側へ」と豊彦を姫の側へ突きやり、二人は打連足を早め、社頭の方へと走去りけり、豊彦は突きやられて、ひよろ〳〵と姫の側へ寄り(豊彦)イヤ是はけしからぬ、自分等ばかり承知して、姫君を某に預け、勝手に立去るとは迷惑千萬」と云顔をうち眺め(楓)戀しいお方の許へおいで遊ばす、お心急ぎの路次、かやうなお預り物をあそはして、サゾ御迷惑にござりませう(豊彦)是はハヤ痛み入たる御挨拶、決して左様な譯ではござりませぬ」と眞顔で云へば姫はうち笑み(楓)うちつけながら豊彦様、妾が平素の思ひのたけ、イヘ、平素好める三十一文字、萬望御添削を願ひまする」と用意の懐紙取出し、渡すを豊彦おし戴き(豊彦)和歌の道に御堪能なるは、豫て人傳に承はる所、御添削などとは想ひも寄らず、謹んで拜見いたしまをさん」と猶も眞顔に詠みくだし(豊彦)瀧河や、こほりにむせぶ、岩浪の、えもうちいでぬ、わが思ひかな、フ――ム」と思ひかねたるその様子、姫は思ひのあまりてや、今は羞しさもうち忘れ(楓)ふつゝかなその腰折、請願お直しあそはして、そしてお心やさしい御返歌を」と立寄るをりしも杉の陰より、想ひも寄らぬ人の高聲(黒人)清潔を貴ぶ社頭を汚穢して、不義

を働く豐彥かへで、其處一寸も動きをるな」と呼はりながら立出るは、兄道鏡の影に依り、成上りの弓削の黑人、其名は實を顯ハして、色ハ眞黑獅子鼻鰐口、盲目に見せても下司の相、其癖眉さへ目尻も下り、でつくり肥えし數寄者顏、夫と同時に社殿の左右より、身を現はせし百川豐永、黑人が不意の狼籍さへあるに、思ひがけ無き父の顏見て、かへではハッと胸とゞろかし、消も入りたきその風情、豐彥は當座の迷惑、互ひの親の疑念と共に、身の寃罪をも晴さんと、思へば屹度黑人に向ひ(豐彥)神前と云ひ親の手前、身に覺えなき不義の言ひかけ、黑人主とて容赦はいたさぬ」と佩刀の鯉口くつろげて、おり〱と詰寄れば、黑人は眼を怒らし(黑人)ヤア無禮なり豐彥、無位無官の身を以て、左大將たる黑人に對し、狼籍なるその擧動」と云ハせも果ず聲を高め(豐彥)左程無禮を咎めたまふ卿が、他人に對して無實の言ひ懸け、夫こそ却て狼籍でござらう、夫とも不義の證據ばしござるか(黑人)イヤ無實とは云はさぬ、現在某が不義するを見認めしのみか、手に持てる其懷紙が、辨解ならぬ一件の證據」と云ふより早く豐彥の手に持てる、楓の渡せし懷紙をヤニハニ奪へば豐彥は喫驚(豐彥)ソレは只今楓殿より、此身に贈られし御近詠」と取返さんとする間も無く、豐永はツカ〱と立寄り、豐彥の襟首をムヅと取り(豐永)アノコヽな不所存者めが、豐年祈る今日の神事、汝に代參を命けたれど、朝政の早くすみたれば、百川殿と御同道申し、忍びて吾等も參拜すれば、父の名代たる身を持ちながら、瓜田に履の誡めを忘れ、神前も憚らず此不体裁、姬上は更なり百川殿にまで、御迷惑を及ぼすとは言語同斷」と引据る手

に姫はとりつき（楓）不義の疑ひ受けたるは、豊彦様の科ならず、皆自らがなせし過失、折檻さるゝあら此妾を」と云ふを黒人引放し（黒人）イヤ、そうは云はせぬ、不義の法度は兩成敗、平素公平を貴ばるゝ百川殿、現在吾子の不義淫奔、ヨモヤお捨置きには相成るまい、小娘に小袋の世の諺、豫て貰ひ人の有た時、速におやりに成たら、今日の憂ひハござるまいに、さりとてハ笑止千萬、夫ハ今更云ふも返らぬ繰言、此塲の樣子を親しく見なから、沈着つてござる百川殿、兩人の所置は何となさるゝ」と左も憎さげゝ尋ぬれば、百川始めて口を開き（百川）男女と語らひゐたとて、强ち不義とも定められねば、篤と實否を糺せし上にて（黒人）いよ／＼不義と定らば、其時には如何めさるゝ（百川）云ふまでも無く制度に照らして（豊永）それ／＼成敗いたす分のこと（黒人）イヤ、こりやそう無うてハ叶はぬ筈、併し親か其子の吟味をしてハ（百川）他人の嫌疑を避る爲め、娘は豊永殿にお預けまをし、豊彦殿をは某か（豊永）如何にも夫は好い御思案、互ひに親子の私情を離れて、少も假さぬ共吟味（豊彦）身に覺えなき濡衣ながら、乾すに由なき此塲の仕宜（楓）たかひの誠は正直なる、氏の御神も照覽あれば（百川）かゝる疑ひの雲も晴れ（豊永）隈も殘らぬ靑天白日（豊彦）やかて目出度き親子の對面（楓）嬉しう其日を待ちまする」引るゝ其子も引く親も、涙かくして黒人の、顏をしり目にかけまくも、あやに尊とき御神の、冥護を心に祈りつつ、春日の社の馬塲先の、草踏分けて朝露に、裳ぬらして立去りけり。

第二齣（上）　餞別

ゆくり無くも朝廷より、宇佐への御使承はり、明日は筑紫へ發足とて、和氣の邸宅は旅裝整頓、奥も表も上を下、とりみだしたる其中にて、客室の中央には、左大將弓削黒人、兄道鏡の名代とて携へ來れる餞別の品々を新鮮き魚甘き美酒、白銀黄金絹帛等、堆き迄目前に積せ、館主淸麿にうち向ひ、常にも似ざる笑顏をつくろい(黒人)卿此度勅命に依て、宇佐へ御使に立てらるゝは、云ふまでも無き大切の役目、阿曾麿の奏上にて知らるゝ如く、吾兄道鏡の仁德を感應ましく、王位に即しめんとの神勅なれば、今更申すにも及ばざれど其心得あつて神慮を伺はれよ、卿が回奏の次第に依て、吾兄禪師公受禪なし、めでたく王位を踐まれなば、卿を以て直に大政大臣となし、祿田として所望の國を與へん、若又心得違ひをなし、此御使の詮なくんば、其身の死刑は勿論よして、餘殃は三族に及ふべしと、禪師公の仰せなれば、回奏の次第が禍福の差別、努力も心得違ひしたまふな、此品々は禪師公より當座の贐誼、辭退なく受納められよ」とすかしつ威しつ云ひふくむれば、淸麿聞いてうち默頭き(淸麿)神は聰明正直のものなれば、其神慮に二つはあるまじく、旣に阿曾麿に云々の神託ある上は、爭で違變のあるべきや、必ず太政大臣禪師公には、九五の天位に即せたまふべし、決して御心な勞し玉ひそと、宜しく御返辭をしたまひてよ、此御贐誼の品々は、分に過ぎたる賜物なれども、折角のお志ゆゑ頂戴いたさん」と最謹んで答ふれば、黒人は歡喜の体(黒人)如何にも神ゝ正直の者なれば、ヨモ詫宣に二つゝあるまじ、ウム、實に尤なる卿の返答、歸つて斯くと申上げなば、禪師公にも定めて滿足、明朝未明の出立なれば、何彼

とお取込の事ならん、麿は是にて、お暇申さん（清麿）責て麁酒一獻と存ぜしに、最早お歸にて候ふか、忙しき中とて何彼と失禮、左樣なれば左大將殿（黑人）努力も大切の御使ひ、心得違ひの無きやうに、道中も氣をつけめされい（清麿）決して御念には及びまをさぬ」黑人ツヽと身を起し、表を指して立出るを、清麿は次の室まで見送りて、元の座席へ立回り、其處に座を占め思案の体、をりから一室の障子引開け、立出る姉の法均尼、迹に續いて眞人豐永、黑人のもたらしたる、道鏡の贈物を尻目にかけ、右左より詰寄つて（法均）コレ清麿、此度宇佐への御勅使は、天下の大事を其身に擔ふ、實に此上なき大切の役目、諸司百官のある中より、殊に汝が選まれて、其大切の役目を蒙りしは、汝の榮ゑ妾の面目、云はゞ和家一家の名譽、併し何と御復命いたす所存か、其心得を聞いて置きたい」と問へば清麿はうち笑ひ（清麿）是は姉上とも存ぜぬ、不思議の仰せを承はるものかな、神慮は凡念の及ぶ所ならず、宇佐へ下りて社殿に伺候し、神勅を承はつた上でなければ、如何なる復命をいたすことやら、今より分る道理はござらぬ」と云ふに尼公は少し遽込み（法均）神は非禮を受けぬものなれば、道鏡が王位に登れぬことは、云ふまでもなきことなれど汝の御復命の次第に依ては、又如何なるかも計られず、代々忠義の和氣の家名を、汚さぬやうに分別しや、」とかさねて云へど清麿は、猶も落着きて氣もなき樣子（清麿）アハヽヽヽヽ恰悧いやうなれど女は女、小さひお心より入らざる御心配、吾國には從來慣例なけれど、唐土にては往々ある習俗、堯は舜に讓り舜は禹に讓る、德ある人に天下を與へ、民を治めしむるは公平の計ひ」と

聞くより法均尼は嚇と怒り(法均)サテハ只今黒人より傳へし、道鏡が甘言に心迷ひ、匹夫を九五の君とわがめ、不義の榮華を貪る所存か、實は今度御勅使發向の事は妾が、上に勸め奉り、百川殿とも協議せ吾弟なれども正直潔白、優れし忠義を見拔きたれば、大切の御使ひに立てさするとも、事を誤つものならずと、故に汝を撰みし次第、今宵道鏡の名代として、弟黒人餞別をもたらし、汝の邸宅へ向ふと聞き、いさゝか其儀の心にかゝり、且は猶語らひ置きたき事もあれは、豐永殿と打連立ち、後門より入りて樣子を伺へば、如何なる天魔の見入りしか、名利の爲に忠義を忘れ、平素の潔白は何處へやら、思ひかけなき此体裁、あまりと云へばなさけない、若も汝の心得が違へば、汝を御勅使に撰みたる、妾も百川殿も不忠の臣、生て此世にをられぬ仕宜、一人の姉の命に換ても、大切なる和氣の家名を汚しても、不義の汚名を末世に殘しても、其身の榮華を貪ぼる心か」とたゝみかけたる道理の意見、豐永も慨然として清麿に向ひ(豐永)足下も豫て知らるゝ如く、道鏡は曾て某に從ひ、聖賢の道を學ひし者、若も渠にして神託に依り、九五の位に登るならば、吾何の面目あつて之に事へん、首陽の山に蕨を折りたる、伯夷の風に習はんのみ、足下の心如何にぞや」と目をしばたゝきてうら問へば、清麿はいよ／＼輕侮たる色を現はし(清麿)姉上のお言に候へども、受命の君を助け奉り、賢人君子の名を留めし、世に英傑は幾個もござる、只今豐永殿の仰せられし、心の狹い伯夷叔齊が、馬を打いて諫めを入れた、其武王は紂王を誅して、却て聖人と世に仰がれ、其又武王を助けたる、大公望も賢者と尊ばれ、遠き吾日本にまで

名を轟ろかし、人の表準と成てゐるではござらぬか、豊永は心の狭い、伯夷の風に習はれて、首陽山に餓死なさろうとも隨意、某れ大公望の智謀を學び、七十餘城の主と仰がれ、榮華富貴を極むる所存、姉上にも左樣な取越苦勞をなさらずに、とかくは神慮任せになさるゝが宜しい、幸ひ禪師公より恩賜の酒肴もあれば、席を改めて出發の祝ひ、快く一献傾けまをさん、姉上にも豊永殿にも、某と倶に彼なる一室へ」と勸むる折しも立出る、新參の侍女若芝(若芝)御前樣御酒の御支度が整ひました。

第二齣　(下)　摸索

其昔采女がこゝに身を投けて、ねくたれ髮の末長く、今に憐れをとゞめたる、その猿澤の池の面に、亥中の月の影すみて、玉藻かづきし面影の、又今更に浮ばれて、いと物凄き夜の景色、風にゆらめく衣掛の、柳の陰に悄然と、水をながめて佇立む娘、衣裳はやつれし賤女なれど、容貌美麗しさやさ姿、片手に涙をれし拭ひ(お鹿)眞に想へバ此身程、果敢ない者が世にあろか、二年の年に兩親に死別れ、其後は他人に育てられ、やう／＼手足が伸たと想へは、義理ある兄の破落戸か、散々人を意地めた揚句、博奕の資本に困るから、魁雷女に賣ると無理非道、此上泥水に身を沈めて、苦勞に苦勞を重ぬる程なら、いつそ一想に命を捨て、草葉の陰にござる父さんや、母さんの傍でくらすが増しと、覺悟を定めて此處へ來たなれど、凡夫の悲さ今更に、娑婆の名殘か惜まれて、吾知らず不覺の此涙、アゝ思へば愚痴な返らぬ繰言、人目にかゝらぬ其内に、少しも早く冥土へ旅立ち、さうぢや／＼と點頭きて、有合ふ小石を袂

に入れ、池の水際にすゝみ寄り、南無阿陀彌佛と唱へも敢ず、既に此うよと見ゐたる折柄、和氣の邸宅より歸りかけ、通りかゝりて娘の樣子を、最前よりして木陰に伺ひし、眞人の豐永立出て、背後より確と抱止め(豐永)ヤレ待て娘早まるな(お鹿)死なねばならぬ譯ある者、萬望放して殺して下さりませ」と身をもがくを猶も引据(豐永)今其方の獨語にて、死ぬる仔細は能く知たり、設令如何なる事ありとも、其身を捨るは無分別(お鹿)その御親切は忝けなけれど、生てゐられぬ妾の身の上(豐永)夫を承知で助くるからは、何事も余の胸にあれば、決して案じることはない(お鹿)そんなら果敢ない妾の身を(豐永)今より邸宅へ伴ひて將來長く世話して取らせん(お鹿)見ず知らずの貴君樣が、親身も及ばぬ厚いお情愛、ヱヽお嬉しう存知まする」と娘は豐永の誘引ふまに〳〵、二歩三歩步めるをりから、向ふに聞ゆる人聲足音、要こそあれと豐永ハ、娘を從へ足早に、樹陰にかくるゝ、間も無く、忍び姿の弓削黑人、最前和氣の館にみたる、侍女若芝と打連立ち、只二人して出來り、猿澤の池の邊りに足を止め(黑人)諸司百官の其內にて、吾兄禪師公に敵對て、忠義立てする馬鹿者は、藤原の百川を首領にて、之に從ふ豐永清麿、平素心憎くゝ想へるまゝ、豫て事ある時の間者として、汝を清麿方へ入置きしが、汝が年弱き女ゆへ、流石の清麿も心づかぬ樣子、最前麿が兄の名代として、明日發足の餞誼を名とし、彼の屋敷へ赴きし時、恩威の二つにてすかしつ威しつ、あくまで彼の心を取り、十が九つまで味方につけおきしが、麿が歸りの其後にて、何か異變はあらざりしか(若芝)御前樣がれ歸りの其後にて、清麿の姉の法均尼と、眞人豐

永の二人の者が、禪師公の事を惡樣に云ひ、今度の御勅使ハ大切の役目、決して忠義を忘れぬやうと、言葉をつくして意見を加へ、宇佐より歸りし曉には、何と復命する心ぞと、左右より問詰たれど、凡夫の心にて神慮は料られねば、今より復命の程は定められず、吾國にこそ例は無れど、仁者に王位を讓ることは、唐土にては往々ある慣、何も不思議はござらぬと、二人を說破る淸麿の言語、あくまで富貴に心をかけ、法王樣に加擔の樣子、決して御心配には及びませぬ(黑人)然らば其儀も安心にて、吾兄禪師公の御運めでたく、本望成就疑ひなけれど、世の譬に云ふ油斷大敵、ヤハリ淸麿の館に入込み、猶もぬからず間者の役目(若芝)若も異變のあるならば、すぐさま御注進をいたしませう(黑人)かならず共に氣取られぬやうに(若芝)ハッかしこまりました、左樣ならバ左大將樣(黑人)若芝、行きやれ」と別れを告ぐるその間よ、月ハ雲間に光をかくし、四邊は忽ち如法闇夜、助けし娘の手を引いて、身を現ハした る眞人豐永、四人端なく行合ひて、互ひに人氣のあるを知り、樣子を覗ふその所へ、舍弟の許より戻りがけ、廣虫の法均尼がいで來る、是と同時に夜をこめて、淸麿の許を訪問はんと、忍び來りし藤原の百川、六人此處に落合ひて、忠臣奸賊烈婦貧女、黑白も分ぬ闇の中に、探り合ふたる善惡無差別、池の面の波の紋、岸の柳の糸の綾、めぐりくるくる三巴、よれつもつれつ合ひつ離れつ、暫時の間爭ひたり。

第三齣　(壹)　强迫

藤原百川と路の豐永、忠義を競ふ隣同士、門を併ぶる築地の外にて、半女と見ゆる容貌好き女を、破落

戸と想はるゝ男が執へ、濁聲揚げて目を怒らし（茂九）ヤイお鹿、ジタバタするな、めつたに迯して溜るものか、何卒して貴樣に會ひたひものと毎日此築地外を徘徊いてゐたのだ、出會したのが百年目、サア此茂九郎樣と一所に來い、」といふを女は振切つて（お鹿）ヲヽお前は兄さん、妾を執へ如何する積、御主人樣の大切の御用が、遲う成ては此身の落度、萬望放して下さんせ」と云へど男は猶執念く（茂九）ドッコイ放して溜るものか（お鹿）連て歸つてドウするのぢやへ（茂九）ハテ知れたこと、魁雷に賣て金にすると云ふ顏眺めて目に涙（お鹿）兄さん、如何にお前が無慈悲でも、最早其樣な事はその口から、マサカに云れた義理ではあるまい、妾を散々意地めた上、魁雷に賣るとの無理非道、夫が辛さに覺悟して、猿澤の池へ身を投げて、既に死なうとした所を、圖らず豊永樣に助けられ、お屋形へ連歸つて厚いお世話、猶其上にお前にまで、大枚のお金を下すつて、親身も及ばぬ難有い御意見、其時お前も後悔して、此の後妹の身体には、指の頭でもあてませぬと、堅い約束をしたではないか」と云へば男は冷笑ひ（茂九）サア彼時は豊永の鍋取が、苦しい手許で物數奇にも、再來汝の世話をするから、兄弟の緣を切て音信不通、其代り身の立つだけの手當をやると、少許りの手切金をくれたので、嫌と冠りを振りたかつたが、是も當座の小遣へ取りと、其塲は承知と胡麻化したのよ、此お兄いさんの博奕の資本、一生食物にする汝の身体を、僅かの金で手放して、ドウして算盤が立つものか、今から魁雷に打賣つて、タンマリした金にするから四の五の云はずに、己と一所に來ヤアがれ」と泣入る妹の手を執へ、情愛容赦もあらばこ

そ、力任せに引立て行んとする背後へ、何時の間にか來りけん、年猶若き牛飼舍人、突と身を寄せて襟首取り、言葉も懸けずヅデンドウ、お鹿を吾身の背後に圍へは、茂九郎は起上り(茂九)アイタヽヽヽヤア誰かと想へば、吾りや百川の仕丁の與作、何で此己を投げたのだ」舍人は莞爾とうち笑ひ(與作)何でもねへ、あまりお鹿殿が可愛想ゆえ」茂九郎は目に角立て(茂九)兄親の此茂九郎、妹をドウしやうと勝手次第、他人の汝が知た事では無へ、餘計な世話を燒さやアがるな(與作)イヤ兄親とは云はれまい(茂九)如何したと(與作)先夜お鹿殿を救れた後、汝と兄弟の縁を切る爲め、豊永樣から手切の證に、大枚の黄金を遣はされたを、一禮述べて戴きながら、猶其上にお鹿殿を執らへて、手込めにするとは言語道斷、是でも彼是强情張らば、豊永樣の御前へ引て行くぞ」と、腕まくりして威しかくれば、茂九郎は尻込みして、最初の擬勢は何處へやら、(茂九)今日は汝の屋敷の築地外、塲所が悪いから勘辨してやる、此後他所で逢たら許さぬぞ、覺えてゐろ」と瘦狗の迯げ吠ゑ、負惜みなる捨文句を、後に殘して一目散、逸足いだして迯て行く、お鹿はホッと胸撫下ろし、舍人に向つて嫣然笑ひ(お鹿)危ない所へ與作さん、能うマア來て下さんしたなア」舍人も片頰に笑を含み(與作)出過ぎた事とは思ひながら、あまりお前が氣の毒ゆゑ、ツイ傍に見かねて入らぬ世話、是といふも同病相憐むとやら、お前はアノ破落戸の兄御ゆゑ、人の知らない苦勞して、豊永樣のお屋形の懸り人、此又生は去年の饑饉で、大切な御年貢も納めかね、既に水牢の苦みを受ける處を、百川樣に助けられ、然も今では牛飼舍人、此うして結搆に召仕は

れ、海とも山とも譬へがたない御恩、命に掛ても御奉公せにやならぬ(れ鹿)妾とても其通り、親にも優つた豊永樣のお惠、此身に換ても返さにやならぬ、夫につけても與作さん、互ひに寄邊のない身の上、世の譬に云ふ膝とも談合、豫て妾の云ふ通り、倶に白髪の末かけて、便りに成ては下さんせぬか(與作)其儀ハ生も願ひなれども、互ひに今は奉公の身の上。不義はお家の法度なれば、主人のお許し受くるまでは、心計りの夫婦の約束(お鹿)ソレ聞いて妾も安堵、假令枕は交さずとも、互ひの心は二世かけて(與作)今宵は恰好七夕の、星に手向けの笹竹を(お鹿)せめて一夜の新枕、夫も叶はぬ切ない身の上(與作)恩と義理との天の川、やがて隔の波も消ね(お鹿)歡び告ぐる鵲の、羽翼ならぶる橋渡し(與作)媒妁入れて祝言して、幾千代祝ふ其折まで、心のどかに待てゐられよ」と二人はぢつと寄添て、行末かけて契る折から、門内より人の出來る氣色、二人はこれに驚かされ、心殘して立別れぬ。

第三齣　(二)　天の川　(上)

梶の葉に、かきつくしてもあまりある、思ひに沈む百川の、娘かへでハ日頃より、こがれしたひし其人の、邸に今ハありながら、又其人はわが館に、とぢこめらるゝ身となりて、互にこひの方違へ、なげきにたへてせきかくる、棟は比べどおもかげを、一目見るさへまゝならぬ、かはる住ひにかはりなく、心ばかりや通ふらん、情も深き親々が、かゝるめぐみは高殿に、送る日數もいつしかと、今日七夕の星祭り、手向けの床を立琴の、天の河原のかさゝぎの、橋にかけたきねぎごとも、人目隔の塀一重、隣へさ

かすつましらべ(琴歌)みだれ苦しき小田巻の、糸の願ひもしるしなく、絶し契をいかにせん、年にまれなる七夕の、星のあふせもうらやまし、かたしく袖におく露と、消ん此身を同じくば、君があたりの草の葉に』と謡ふ聲さへ淸らかに、雲間を晴て照る月の、桂男の豊彦が、机によりて物思ふ、姿を寫す障子の影、かへでは見るより飛立つばかり、調べし琴はそこへやら、欄干近く延上り(楓)まをし豊彦様、夫れにおいであそばしますか、牢舎よひとしいお預けの身、さぞお氣づまりにておはすらん、かゝる憂き目をお見せまをすも、皆自らが不行儀から、どうぞ許して下さりませ、父の怒りに眞人様の、此お邸に預けられたを幸ひ、科無き郎のぬれ衣を、せめて乾かしまゐらすこそ、心で誓ひし吾夫へ、盡す女の誠と思へば、郎の御勘氣お許しあるやう、朝夕眞人様へ御訴訟まをせど、お聽入れなきその悲さ」と云ひかけて泣入りしが、やゝあつて顔を擡げ(楓)元はと云へば弓削の黒人、自らに懸想して言寄りしを情なく言ひしを根に持ちて、妾はさらなり郎にまで、かゝる憂き目を見せしなれば、彼の腹黒き心より、猶此上に惡計を設け、親と親とのお身の上にどういふ、災厄をかくるも知れねば、若もさういふ事のある時は、舅御様の御身代り、命を捨ても申し分け、疾うから覺悟定めてをりまする、此程に思ふ妾の心、少しは不便とおぼしめし、たとへ枕は替さずとも、妻よ楓とたつた一言、優しいお詞をかけて下され」と又もかつぱと泣臥たり、姫のせつなき心を察して、豊彦は障子引明け四方をかねて聲をひそめ(豊彦)嗚呼音高し楓殿、切なるお心は是にて承はつたり、預けの身とは云へおん身の父御、百川殿が懇ろなる

接待、少しも不自由にハ存せねど、只心にかゝるは親親の身の上、今朝廷に佞人はびこり、心ある者は孰も身を退き、諸司百官の其内にて、厚く忠義を存する者は、卿の父御の百川殿と、某の親の豊永のみ、左すれば吾親ながら二人の命には故語に謂所國家の柱石、吾々兩人の過失よりして、萬一罪科を兩親に及すならば、夫こそ不忠の臣不義の子、爭で一日も存生ふべき、某も直に命を捨て、百川殿の御身代りに立つ所存、卿もさすがは百川殿の息女とて、某の父の身代りに立れんとは、忠孝全きその覺悟、豊彦殆ど感伏致す(楓)お賞めのお詞は嬉しけれど、楓殿よ百川殿の息女よと、改つたそのお詞、妾を不便とおぼしめさば、楓よ妻よと呼捨に、手輕ういふて下さりませ(豊彦)某を愛しう思はるゝばかりか、君をも親をも思はれて、同じ忠孝の道を行く、世にありがたき卿をば、妻と喚ばんは豊彦の本望、不幸にて一夜の契りも交さず、別れ〳〵に果るとも、二世も三世も變らぬ夫婦(楓)ヲゝ嬉しうござんす豊彦樣、そのお詞を聞くからは、このまゝ悲しい別れはするとても、良人の家で死ぬるなれば、妻たる此身の上なき喜び(豊彦)某とても妻の里にて、忠孝二つに命を果さば、夫こそ榮ある此の世の紀念(楓)とハ云へ今宵は七夕の天の星さへ一年に、一夜の契りは交すものを(豊彦)物言ひ顔は見合へども、手を取ることも叶はぬとは、思へば果敢ない二人が中とぢつと互ひに顔見合せ、落す涙に欄干の、手摺をぬらすその折柄(○)御勅使のお入りー」と豊永の邸の門前に聞ゆれば、百川の館の門前にも又(△)御勅使のお入りー」双方一同に觸込みたり。

第三齣（三）　天の川（下）

此方の館には君への忠義、吾子の恩愛單身に、公私二つを決しかね、思案にくるゝ藤原百川、彼方の屋敷には路の豐永、同じ想ひに兩手を組み、默然としてゐたりしが、思はずホッと溜息突き（豐永）習宜の阿曾丸め、其身神職にてありながら、虎の威を假り勅使と號し、吾邸に來りて無禮の雜言、憎みても猶餘りあり」此方の館には百川が、眉をひそむる其傍に、夫人月小夜兩手をつかへ、良人の顏をうち守る、眼には瑠璃なす露もちて、開きかねたる夕顏の、風にゆらるゝ其風情（小夜）只今お勅使に參りし、道鏡の弟の黒人、兄の權威を笠に着て、人を見下す面憎さ、女のさしでがましけれど、紙障の陰にて漏聞けば、頃日より當館に預りある、豐彦殿のお身の上に就て（百川）左れば弓削の黒人めが、傍若無人の今の口上、子供等兩人の儀について、余も豐永殿も閉門謹愼」彼方の邸の豐永は、四方見廻し獨語（豐永）奸人朝廷に威を奮ひ、密に九五の御位にも心をかくる、危急の秋の今日に當り、いさゝかの事をか條よして、彼百川と此豐永の、出仕を留めて閉門さすは、猶此上に佞臣共の、惡意を逞うせん企圖計略、加之へ當邸に預かりある、百川殿の息女楓殿を、納得させて黒人の、妻といたして差出すか、但しは首にして持參するか、二つ一つに行へと、退引させぬ彼の口上」此方の館には百川朝臣、夫人月小夜にうち向ひ（百川）豫て余が許に預りある、豐永の子息豐彦殿こと、黒人より結婚の事を申入ある、余の娘の楓に對して、横戀慕せし罪に依り速に首打て持參せよ、左も無き時は汝も同罪と、言語に絶たる彼の言

分(小夜)そんならどうでも豊彦殿を(百川)サア夫故に此百川も、心を苦しめをる次第、國家の爲めに大切なる、父の命に替さするなれバ、是が吾子の首ならバ、打つも元より是非なけれど」彼方の邸には豊永も(豊永)預かる姫が吾子なれば、吾手にかけて首を打ち、弓削の館へ持參なし、彼等兄弟の心を和らげ、同志と見せて樣子を伺ひ、不日清麿宇佐より歸り、其復命の次第に依て、豫て百川殿と協議せし通り、大義に依て事を擧んが、何を申すも他人の息女(百川)世に云ふ親一人子一人にて、便りに思へる〻豊永殿のかけがへの無き一子豊彦(豊永)、(百川)ハテ何とし左ら好かろうなア」と云ひ合さねど忠臣の、心は同じ隣同志、思案にくれてぞゐたりける。

第三齣　(四)　身替り

百川の館の二階には仕丁與作が覺悟の切腹、血に染む肌を顯はして、呼吸苦しき斷末間、豊永の邸の二階には、咽喉搔切る半女の小鹿、與作の姿を遙に見とめて(小鹿)ヲ〻與作さん、好う腹切つて下さんした、妾も共に冥土の同伴、嬉しう成佛いたします(與作)、汝も好う自害しやつた、平素の御恩を報ずるは、只此時に極つたか、此く衣裝をば改むるからは、誰目で見ても豊彦樣(小鹿)妾も姿を更るからは、とりも直さぞ楓樣、御恩報じのお身代り、忠義も戀も同じ想ひ、必ず共に未來永劫(與作)佛と成ても變らぬ夫婦(小鹿)嬉しうござんす與作どの」と二人が忠義に生命を換へて、喜び會ふたるその所へ、あはて〻障子おし開き、此場に入來る主人豊永、隣りの二階も主人百川、同時に入來て驚き聲(百川)ヤ

ア豊彦殿と想ひの外、汝は仕丁の與作ならずや、與作は苦しき聲を張上げ(與作)コワ百川殿にハお目がね違ひ、國家大難の時に臨みて、御身の命を救はん爲め、切腹なしたる路の豊彦」隣りの二階にても豊永に向ひ小鹿は苦しき聲音にて(小鹿)眞人樣そのお驚きは御最樣、貴君の御身が助けたさに、楓樣のお命に代り、無利に落させまゐらしたり、此上は妾の首を、お身代りとして持參なし、おん身の疑ひ晴せし上、百川樣とお心を協はし、千秋萬歳御壽命保ち、お上に忠義をれつくしおそばして(豊永)さては楓殿を落せしとや」と云ふ聲漏れてや隣館の百川(百川)余方に預かりありし、貴殿の子息豊彦殿、親の命に代らん爲とて、只今切腹なされたり」と云へば豊永も其方に向かひ(豊永)拙者方にても同じこと、貴殿の息女楓どの、朝廷の爲め親の爲とて、潔う自殺を遂げられたり」と聞いて男女の負傷者は嬉しく(與作)是でこそ、萬分一の御恩報じ(小鹿)嬉しう成佛いたします」と云ふが互ひに此世の名殘り、塀の外には豊彦、楓、賤の女姿、仕丁の形、今日七夕の牽牛織女、一個は小田卷、一個は牛、たがひに持て二階を見上げ、樣子伺ふ眼は涙、吾身に代りし二個の者が、今や最后の手を合し(豊彦)南無阿彌陀佛(楓)南無阿彌陀佛」唱ふる聲に親々は下を見おろし濕み聲(豊永)其處ゐをるは不義者の豊彦、イヤ、仕丁の與作にあらざるか(百川)ヲヽ汝は娘の楓に似たれど、能く見直せば賤女小鹿、今余が申すこと、心を沈めて能く承はれ、過日宇佐の奉幣使にまゐりし、近衞將監和氣清麻呂、渠の復呼の摸樣に依ては、天下の大事になるも知れねば、女なりとも朝廷に志ある者は、命を大切に能く保ち、萬一の御用に立ねば成

らぞ(豐永)豐彦ならぬ仕丁の興作、たとへ其身は賤くとも、忠義の道に上下なければ、天下將に事あらんとする今の時節、父イヤ、此豐永の詞を用ゐ、いづくの浦にも身を忍びて、イザといふ時に忠臣の、數に加はり働けよかし」と親と親とが忠孝の二つを勸むる慈愛の詞、男女ハ其處に泣臥して、かたじけなうも口の內、漸次に立てこむ秋霧に身をつゝまして遁れ去りぬ。

第四齣　大極殿の復命

大極殿の正面には御簾を垂れ、左座には弓削道鏡、同黑人、習宜の阿曾丸、右座には參議藤原の百川、其他の諸司百官、衣冠正しく並みゐたり、黑人は左も得意氣に(黑人)先達て宇佐へ御使に立たる、和氣清麿、今日歸京いたす由、既に阿曾丸より奏聞せし神託もあれば、此度とても同樣のことならん(阿曾)昨夜禪師公には、尊き神童の現れて、今度宇佐の神託は、全く汝が高德の到す所、辭退なくお受けせよとある、正しき靈夢を見たまひしとか、左すれば清麿の今日の復命も、身共が過日奏聞せしと、決して相違はござるまい(諸司)是と申すも禪師公の高德(百官)豫め祝賀し奉る」とり〳〵諂ふその處へ(清麿)和氣清麿、只今歸京仕つると衣冠整へ笏を正し、徐々出來る和氣清麿、道鏡は夫と見るより(道鏡)早々これへ、遠路のところさぞ勞れつらん、恙なく歸京の段、叡慮にも頗る御滿足、此度宇佐に下りし事につき、具に奏聞いたすべし、清麿少しく坐を進め、笏を正して御簾に向ひ(清麿)臣清麿、去る十五日彼地に到着、直に宇佐に參謁し、夜もすがら默禱いたせしに、丑三過る頃と覺しく、社壇俄に鳴動して、

光明赫々四邊を照らし、端嚴微妙の御聲にて」と云ひかくれバ、道鏡はもどかしげに(道鏡)シテ如何いたせしぞ、清麿は一段聲を張上げて(清麿)吾大八洲國ハ、神代の昔よりして、君と臣の差別正しく、未だ臣を以て、君と仰ぎし例なし、道鏡はうち消す如き調子にて(道鏡)例はなけれど時勢を計りて(清麿)アイヤ、天つ日繼は皇統の御子達を以てすべし、道鏡何者なれば、道鏡何者なれば御寶を覬覦ふ、早く無道の者を罪して、玉座の側の汚れを拂ひ清めよと、のりたまふと均しく、光は失せて元の如し、宇佐の神勅此くの通り、臣清麿、謹んで奏し奉る」清麿の此の復命を聞きて、百川豊永等の忠義を重んずる人々は、今まで手に汗握りてひかへゐたるが、ホッと一息安堵の思ひ、黒人阿曾丸等の、道鏡に媚る佞人原は、齦を切みしめて無念の面色、中にも道鏡は目を怒らし(道鏡)ヤア、清麿、玉座近きも憚らず、百官滿座の其中にて、此道鏡を無道の者罪せよなど丶、あくまで恥を與ふるは、意趣意恨あつてのことか、奇怪千萬無禮至極」とぢり〳〵と詰寄れど、清麿は恐るゝ色なく(清麿)コハ思ひ寄らざるお疑ひを蒙るものかな、承りたる神語のまゝを、申上ぐるが御使ひの役目、何條憚ることの候ふべき」と云ふに阿曾丸傍よりさしいで(阿曾)コレサ清麿、今述べたは、よも眞の神語ではムるまい、其證據には先達つて某が奏せしとは、黒白雲泥の相違(清麿)イヤ、其許元は禪師殿に諂諛ひ、左も無き事を神託と僞り奏し、天聽を暗まし奉りしは、誅に容れざる大國賊(阿曾)ヤア、神に事へて正直をもとゝする、此阿曾丸を國賊などゝハ、あまりと申せば雑言過言、某が申してそ誠の神託(黒人)今阿曾丸が申せし如く、

先度の彼の奏聞こそは、誠宇佐八幡の神の宣告（道鏡）汝が此度の復命ハ、僞り設けし大虚言、全く余を逐退けん爲めの惡計（清麿）イヤ、左にあらず、阿曾丸如き小人の、言を信ずる貴殿には、誠の神語を疑はるゝも、强ち理義無しとは云へず、いで某が神語に就て、明らかなる解釋をいたしまをさん、ソモ、吾が日の本は、恐れ多くも日の大神、すめみまの命を天降したまふ時、御手自ら御鏡を授けたまひ、之を見ること吾を見る如くせよ、天つ日繼ハ天地のあらん限り窮りなしと、のりたまひしは……萬代不易、那の海外の諸國の如く、臣たる者が君を退け、位を奪ふて聖人顏、民を欺く國風と、日を同じうして語るべからず、素生賤しき貴殿などが、神器を汚さんなど思ひも寄らず、身の程知らぬ愚の望み（道鏡）ヤア此道鏡を素生賤しきなどゝ、聞捨ならぬ過分の惡口（清麿）過分とは貴殿のこと、元はと云へば夜居の法師、君の恩寵を專らにし、今人臣の位を極めながら、猶飽足らで非望の企圖、天誅めぐらぬその內に、早く官位を返上して、元の出家の墨染衣、身に纏はるゝが返て幸ひ（道鏡）ヤア憎さも憎きその一言、汝が今日の復命は、神語を僞るのみならず、大政大臣の禪師たる、此道鏡を罵る不敬の罪、もはや容赦は相成らぬ、刑部省へ引渡し、極刑に處してくれん、ソレ、官人共、清麿を引立てられよ」と云ふに人々立上り、清麿の左右よりバラ〳〵と立掛るを、藤原の百川おしへだて（百川）暫時ゝゝ、清麿は禪師殿に對し、あらき言語は發せしなれど、兩度の宇佐の神勅は、彼を誠是を僞りとも定めがたし、只々妄言不敬の罪のみならば、强て極刑には處しがたからん」と云ふを豐永うけ續ぎて（豐永）ともかくも罪の當否は、

別殿にて衆議の上、マヅ夫迄は東の陣に閉籠めおきて然るべう存ずる、道鏡は理につまりて(道鏡)然らば所刑の事はいづれ復にて、ソレ、清麿を、東の陣へ引立めされよ」諸司は清麿を引立てる、百川笏を正して(百川)入御ヽヽ、ヽヽヽヽ。

第五齣(一)　配所

日の本の西のはてなる大隅の、海の中なる離れ島、丸木の柱かやの屋根、住居といへど名ばかりの、小屋の中にも住む人の、ありと知りてや一艘の漁船、浪を開いて漕寄せ來り、どや〳〵上がる五六人の漁夫、無造作に緣に腰掛け、塩辛聲の高話(○)天頭樣も意地惡るお、折角今日はと思ふて出て來たのに、どえらい荒れやうでないか(△)サア、西が切れてゐるから、長くは吹くまい、此風のなぐまで、例もの通り此小屋で、暫時やすましてもらはうかい(□)阿父殿、素湯を一杯舞振ふて貰ひますぞや」云ふに家主と見ゆる白髪の阿爺(與次)ヤイ、〳〵、最前から默つて聞いていれば、ガヤ〳〵と何を吐すのぢや、成程貴樣達の目から見れば、破れ小屋には相違あるまいが、此うして吾等が住んでいれば、親子三人の城廓も同前、さう安く云ふて貰ひますまい(○)成程こいつは吾等が惡かつた、此方さんが此家に住んでいればこそ、吾等も雨風が凌げるといふもの(△)又湯水の無心を云ふも此の小屋、ドツコイ、此家があるからといふものぢや(□)夫はさうと、貴公さんが物數奇で、生れた村をふり捨て、此離島に住んでいるものだから、息子の與作殿まで嫁御を連て、ヤツパリ此家に相住居、同じやうに不自由な思ひをして

いるが、物數奇も大体にしておかんせ(◉)此島にも清麿樣といふ、立派なお公家樣が住んでござるが、夫は罪あつて都からの流れ人、此方さんのは眞の物數奇(○)お前はマア自身の物數奇にもせよ、可愛想なは息子と嫁、孰も都成長と聞ているが、さぞ淋しがつているだらう、近日に好い日和を見定めて、船を持て迎へに來て進せるから、炭焼村へ戻らしつたが好い(與次)親切に好う云ふて下すつた、成程老朽ちた乃公はともかくも、若い夫婦ハ可愛想、忰が歸つて來たならば、アレとも相談して、ノウお鹿(鹿)アイ夫が宜うござんせう(○)與作どんに否やがないなら、早速村へ歸らしやるが宜い(△)幸ひ風もないで來た、そろ〳〵仕事にかゝらうか(○)そんなら阿爺どん(◉)お鹿さん、毎度厄介になります」うち連どや〳〵歸りゆく、引違ふて入來るは、漁師仲間の破落戸と、人に知られた鰐の茂九郎、物をも云はず大丈六、與次兵衛は駭然として(與次)ャア誰かと想へば吾や茂九郎」茂九郎は鼻で笑ひ(茂九)ャイ與次兵衛、汝、能く己の顔を知ているなア、去年長疾ひの其揚句に、年貢の金に詰つたといふから、拾貫といふ大金を貸してやつたが、今日よ明日よと引延してれいて、揚句の果は漁夫だけに、尻に帆掛けて炭焼村を逃出し、人も通はぬ此離島に、ヌク〳〵隱れてゐるとは太い奴、今日便船を貰つて出て來たからは、何が何と云つても貰つて行くのぢや(與次)さう云はれると面目ないが、實はさういふ譯で此島へ渡つたのではない、是には種々」と云ひかくるをお鹿はうち消し、手に持つ茶碗をさし出して(れ鹿)茂九郎さんとやら、お茶を一つ」茂九郎は茶碗を手にとり、お鹿の顔をチッと見て(茂九)ヲヤ、こりやアお

かたじけ、阿爺、大層美くしいが、何處の街妻ぢや（與次）イヤ夫は乃公が若い時、都で生せた與作といふ和郎の嫁ぢや（茂九）ソレぢやアおぬしの息子の嫁か、さう聞いちや猶更只は歸られねへ、金が出來なければ此街妻、おぬしの嫁なら親の威光、煮るとも燒くとも勝手にならう、金の代りに連て歸る」與次兵衞は少しムツとして（與次）そりや茂九郎話が違ふ、金は借りたが其代りに、嫁を渡さうとハ云ふておかぬ（茂九）ヱヽ、死損ひめ、何を吐すのだ、云ふたも云はぬもあるものか、どうでも連て行て抱いて寐るのだ」と怖がるお鹿の帶際取るを、與次兵衞は立上り（與次）イヤさうはさせぬ」と支ゆるを、立蹴に丁と蹴倒ふして、お鹿の手を把り小腋に抱へ、引立て行んとする處へ、歸り來りし悴與作、此体見るより獅子奮迅、茂九郎の右手把るより早く、彼方へドウと投飛せバ、お鹿は嬉しく取縋る、茂九郎ハヤツと起上り（茂九）ヤイ何で此己樣を投けくさつたのだ（與作）知れたこと、人の女房を手込めにすれば、投げるくらいは當然だ（茂九）何だ人の女房、そんなら汝は、此街妻の（お鹿）ハイ妾の亭主でござります（茂九）そんなら與次兵衞の悴といふは（與作）都で生れた此與作（茂九）こいつは話が面白くなつた、汝の親の與次兵衞に、年貢の金の貸があるから、其金の代りに此女を連て行くのだ、其子とキツパリ名乘るからは、よもや言分はあるめへなア（與作）イヤ金の代りに女房は渡さぬ（茂九）そんなら金を受取らふ」與作は暫時思案して（與作）成程阿爺樣の借りた金、其子の返すハ理の當然、手渡しするから請取れ」と銀の塊を投げ出せは、茂九郎手に取り呆れ顔「ヤア、こりや銀の塊」と云へば與作は冷笑ひ（與作）拾貫には

少し多いけれど夫をやる(茂九)錢を貸して利足を取るのハ、何處へ行ても當前、少し位多いのでは、不承知だけれども持て行てやる」とわくなで澁とき捨臺詞、逃るか如く立去つたり、迹見送つて與次兵衛は、與作お鹿を上座にすえ(與次)嗚呼お傷はしや……誰有ふ、藤原百川樣の御息女楓樣、路の豐永樣、の御子息豐彦樣、玉簾の内にそだち、荒き風にも當りたまはぬお身が、お國の爲めとは云へ、御兩親の仰せとは云へ、筑紫の盡處の一孤嶋、かかる邊土にお渡りなされ、漁夫風情の此與次兵衛を、父よ舅とおつしやつて、清麿樣の影身に附添ひ、晝夜を分たぬ御介抱、夫さへあるに今も今とて、由ない事にて御心配掛け、何ともお禮の申しやうもござりませぬ」云へば與作はうち笑ひ(豐彦)彼式の事、何の禮に及はうぞ、某と楓殿、讒者の爲に都を離れ、浪華の浦に忍べる折柄、和氣清麿殿忠義の爲め、弓削道鏡の怒りに觸れ、此大隅へ配流と聞き、元より父の使命もあり、途中の程さへ心許なければ、見え隱れに迹を慕ひ、此一孤嶋に渡りしをりから(楓)以前吾家に召仕ひし、其方に圖らずめぐりあひ、夫婦の者が世話厄介、此うして朝夕清麿樣の、御介抱をすることの出來ると云も、皆な其方のあればこそ、忝なう思ひますぞや(與次)是は又改つた御挨拶、賤しい下郎でも主從は三世、是式の御世話は當然、夫はさうと若旦那樣、今日は例の所へおいでになりましたか(豐彦)今ちよつとお見舞申して來たところ(楓)そして御加減ハ如何でござりました(豐彦)少しハお宜しい方なれど、何分手足の骨を斷ち切れた、そのお痛みの癒らぬことゆゑ(與次)誠にお氣の毒なことでござりますなア(楓)夫といふも皆道鏡めが所爲(豐彦)今

にて思ひ知してくれん」吾を忘れて怒りの高聲、吾と氣がつき四邊見廻し(豊彦)ツイ一時の怒りに任し、吾にもわらぬ疎忽の高聲(與次)隣りとても無い此一家、滅多に人に聞かるゝ憂ひはなけれど、若も漁夫共に知られては、此後共に何彼の妨げ(豊彦)人目を忍ぶ其爲に、いつ〱迄も嫁悴(與次)物態ないがヤツパリ親子、そんなら悴、嫁女、觀音崎へでも行て一喫烟やらうか」と三人うちつれ立出る、ひき違へて船漕寄せ、ドヤ〱入來る以前の漁夫(○)どうぢや阿爺殿、猶思案が定まらぬか(△)善は急げぢや、今から一所に歸のうではないか(口)ヲヤ、誰もをらぬが、又不在かな(◉)明け放しておいても、用心の好い一離孤島(○)たとへ盗賊がゐたとても、取る物もない此小屋故、其段は安心ぢや(皆々)アハヽヽヽ」と笑ふところへ、山附脚半に三度笠、引廻し合羽を身に纏へる、三十前後の一個の旅人、此家を目がけて出來り、漁夫等にうち向ひ(旅人)一寸お尋ねまをしますが、炭燒村の與次兵衛の小屋ハ、何處でござりますか(○)ハイ、その小屋は是ですが、與次兵衛も息子も嫁も、三人とも不在でござる(旅人)夫は生憎、其與次兵衛の息子といふは、此方で出來たのでござりますか(口)何でも都で出來たのぢやとか、美しい嫁を連て、近來歸つて來たのでござる(旅人)そんなら、都で出來た息子、フーム」と小首傾け思案の處へ、若い夫婦を濱邊に置き、單身歸る家主與次兵衛、旅人は夫と見るより(旅人)ヲヽ與次兵衛とん」と云れて與次兵衛驚き顏(與次)ヲヽ貴樣は大安寺村の莊五郎(莊五)少し都合が有て此國に下り、炭燒村を尋ねたところ、此孤島にをると聞いて、すぐ船に乘て尋ねて來たのぢや、然し今聞けば、都でこ

しらへた息子殿が、嫁御を連て歸つてゐるとのこと、都で私の知てた自分はおぬしも、定まる女房はなし、子といふ者はないやうであつたが、ともかくも近附になりたいもの、ちよつと會してくださらぬか(與次)イヤ、息子が有うが無らうが、貴樣の知つたことではない」と主客が語ふ其の間に、漁夫共は立上り(〇)そんなら阿爺どの、今日は私等は歸る程に(△)此次の便船のあるまでに、能う思案を極めておきなされ(口)そんなら旅のお人、大きにお妨害をいたしました」と挨拶そこ〳〵歸り行く、迹に與次兵衞は莊五郎に向ひ(與次)遠い都から此筑紫の果まで、下つて來たは何の用(莊五)與次兵衞どん、余が今度下つて來たのは、不日天子と仰がれ玉ふ、弓削道鏡樣の御舍弟、黑人樣に賴れて、此島へ流されて來てゐる、和氣清麿を殺しに來たのだ」云はれてヱ……と驚く與次兵衞、最前よりして歸り來り、吾家の裏手に身を忍び、樣子を伺ふ豐彥楓、莊五郎は此くと知らねば(莊五)今云ふた大罪人の、和氣清麿といふ和郎に、藤原の百川路の豐永といふ公家があつて、此島へも人を廻し、陰ながら清麿を守護さす樣子、其奴等も共々討取る手筈」と語らう折から習宜の阿曾麿、いつの間にやら伺ひより、表の方に身をひそめ、內の樣子を伺ひよる、夫と知らねば與次兵衞は(與次)そんなりや、我りやその黑人殿の手先きぢやな(莊五)夫も出世がしたけれバこそ、其事はさておいて、何でも迂散臭いは、イヤ、何でも會たいは貴樣の息子、早う行て呼で來てくれ、ソシテ久しぶりで逢た馳走ぶり、ついでに酒でも買ふてくるが好い(與次)ヲヽ逢はせいでどうするものか、ツイ一走り行て連て戻らう、酒を買ふ買ハぬハ其上のと、そん

「あら荘五郎、暫時の間留主してくれ」と左も無造作に言捨て、濱邊を指して立去りけり、引違ふて入來る阿曾麿、上座に直りて荘五郎に向ひ（阿曾）最前より物蔭にて、始終の樣子を立聞せしが、合點の行かぬは與次兵衛の詞の端々（荘五）私も左樣に存知ますれバ、たとへ朋友でも容赦はなく、清麿始め彼に味方する奴は、片端より皆殺しにする日算（阿曾）應、天晴、々々、併し相手も强者、ぬからぬやうに（荘五）ナアニお氣遣ひなされますな（阿曾）然らば船にて休息いたさん（荘五）何時まで此處に待てゐたとて、急に歸りさうもない阿爺の素振り、夫ぢやア私も御一所に（阿曾）沖を詠めて持參の酒にて（荘五）一杯いたゞくといたしやせう（阿曾）そんなら左樣いたすが好い」二人は連立ち立去りけり、始終の樣子を伺ふて、豐彦楓は身を現はし（楓）豐彦樣、最前からの彼等の樣子（豐彦）油斷のならぬ吾々の身の上、卿は今から清麿殿の、お側へ行て守護が肝腎、身共は是より浦回に行き、敵の樣子を伺ふて、首尾好くば皆殺し（楓）そんなら今から豐彦樣（豐彦）必ずともに油斷めさるな（楓）卿もおん身に怪我ないやう」忠義に戀慕を思ひ換へ、別れ〳〵に立去りけり。

第五齣　（二）　白波

磯邊に繋る松ケ根に、腰うちかけて二個の男、誰に氣がねも高話（茂九）阿爺どん、相手の若藏が骨がわつたので、思ひの外に痛い目に逢ふた（與次）さぞ痛かつたろう、己も仕事に身を入れ過ぎて、汝に蹴られてとんぼ返り、尻の骨をいやといふ程打たから、其苦情ハ五分々々よ（茂九）夫ぢや先刻占めた一包、

たしかに渡すから受取りねへ(與次)應、ありがてへ」と手に取て(與次)ズッしりとしたこの目方、五年や七年はうめへ酒が飲めるだらう」と云ひつゝ其金を懐中に収め、腰につけたる風呂敷より錢執出し(與次)サア約束の骨折代」茂九郎はちよいと見て(茂九)阿爺どん、こりや何程だ(與次)一兩なら澤山だらう(茂九)ヲイ、お前も苦勞人のやうでもねへ、馬鹿にしちやアいけねへぜ人に二十兩の仕事をさして、其一割もくれねへとは、あんまり譯が分らねへぢやねへか(與次)何を吐かしやアがる、此切辛い世の中に、元手入らずの働きして、僅か一時か二時に、一兩になりや結構過らア、此與次兵衛の仕事といふのは、今日の二拾兩は猶いろは、是から先がらむうゐの、おくがあるから、やまけふこゑて、ゑひもせずまで言て聞かせやう、足元へ寄せる浪頭で、耳を洗つて聽聞しろ、汝も豫て知ての通り、元はと云へば此國の出生、その名からして大隅と、つくしの果の片邊土、漁夫か炭焼きで一生を、齷齪暮らすも殘念と、若へ時分に左所を飛出し、此處で半歳、彼處で三月、流れ渡りに渡つた末、果は都へ乘込んで、藤原百川といふ公家の內へ、便を求めて下司奉公、始めは面を被つてゐたが、漸次尻の温もるに從ひ、地金を出して買物にとて、預つた金を持て逐電し、其後四國中國の津々浦々、賑やかな土地へ足を止め、酒と博奕で日を送つたが、額に皺の寄る年浪、さすがの乃公も氣が弱くなり、故郷の空の懐かしく、二三年前に炭焼に歸り、多年覺へた手戲み、賽の目で若へ者を胡麻かして、丁と半とで活計てゐる內、百川の娘の楓を、豊永の悴の豊彦が連て、此九州の果へやつて來て、炭焼村で便船を求め、此島へ渡るの

を見かけたので、此奴何でも迂散臭い、彼等を瞞して金の蔓と、不圖浮むだ一仕事、是はお久しやお姫樣と、猫撫聲で言寄つて持掛けた處、利口なやうでも懷子、殊に便り少ない折から故、渡りに船とふはと乘り、乃公と一所に此島へ渡つて、世間を憚かる親子の附合ひ、今日は一兩明日は二兩と、路用の金をかぢり取り、是迄にも餘外しこめたが、夫でいどうもゝどかしいので、汝を相棒にして今日の仕事(茂九)阿爺の例もの長談議、是までの來歴は夫で分つたが、大仕事といふのはどういふ譯だ(與次)サア、夫は是からいふところだ、其仕事といふのは外ではねへ、今日昔の朋友の莊五郎といふ奴が、都から遙々下つて來て、流人の清麿をせしめに來たと、鼻うごめかして乃公への話、大金になる仕事らしいに、人手に渡すは惡黨名利、汝と乃公と二人して豐彦楓をひつ縛り、アノ足萎の首を打ち、奴等を出しぬき都へ持て行き、道鏡樣にさし上げて、澤山褒美をいたゞいた上、左り團扇の都住居何と惡くはあるまいがな(茂九)そいつは骨のある大仕事シテその、手筈は(與次)應、其手筈いと、耳に口、何かひそ〳〵囁きけり。

第五齣（三）　赦免

汐風荒く吹きすさめど、操は曲ぬ老松を、小盾に設けしわし葺きの、見るもいぶせきはにふの小屋、これぞ忠臣清麿が、世に捨られし配所の住居、奥の一室に清麿は、怪しの脇息に身を凭せ、側にかしづく楓に向ひ(清麿)姦人朝に跋扈りて、忠臣外に貶謫るゝは、昔よりして往々あるならひ、某此大隅の島

守にて、空しく一生を終るとも、其儀は更に惜からねど、心にかゝるは皇家の行末、多くの百官諸司の内にて、頼みに思ふは卿の父の百川殿と、豊彦殿の父の豊永殿のみ、夫につけても卿と豊彦殿、此る多難の折柄に、都の空に身をおきて、君と親との爲にはつくさず、つくしの果に流浪へて、世に捨られし清麿の、世話介抱に昨日今日、可惜月日を送らるゝは、物態ないやら忝けないやら、禮は詞につくされずと、涙ぬぐへバ楓はうち笑み（楓）是はしたり清麿様、改つたそのれ詞、妾の父の百川と、豊永様が言合せ、妾と豊彦殿を此うやつて、二人お側につけてれくもヤハリ皇家へつくす忠義、何のお禮に及びませう邪は正に勝ずとやら、やがて姦臣共は退きて、赦免の御沙汰のあるは必定、只々御身を御大切に、皇家の榮えと御運の開くを、お待あそばさるゝが宜しうござりまする（清麿）如何にも卿の仰せの如く、何をいたすも忠義とは云へ、玉簾の内に育ちたまひ、荒き風にも中らぬ卿が、人も通はぬ一孤島にて、賤の手業のいとほしさ」と又もそゞろに咽入るを、楓は背を撫摩り（楓）由ない事にお心づかひ、御病氣が重るといけませぬゆゑ、暫時おやすみなされませ（清麿）そんなら卿の勸めに任せ、暫時の間横になり、都の夢にても結びまをさん」とそのまゝ其處にうち臥せば、楓は裾にものをおき、ソツと表へ立出て、若やと伺ふ曲者もやと、四邊に心を配るところへ、時分は好しと茂九郎與次兵衛、大刀腰に伺ひ寄り、小屋を目がけて入らんとするにぞ、楓はあはてゝ立遮斷がり（楓）此方さん達ちは何しに此處へ（茂九）何でもねへ、清麿を首にして、夫を道鏡様にさし上げて、出世の蔓にありつくのだ（楓）エツ、そんなら最

前のアノ事は(與次)汝等の懷中にある、路用の金を占める仕事だ(楓)そんなら與次兵衛、其方も惡漢(與次)エヽ、欲が無くては身が立ねへ、汝も同じ出世の蔓、不便ながらも此世の暇(楓)かゝる惡人とは夢にも知らず、かりそめながら今日の今まで、親といふたが殘念な、女ながらも藤原の百川の娘、汝等如きの手に合はうや(與次)エヽ何を小癪な街妻め、ソレ茂九郎、小間言云れせず片附けて仕舞へ(茂九)ヲヽ合點だと兩人が、白刀ひきぬき切てかゝる、楓も今は一生懸命、用意の懷劍逆手に持ち、左右に敵を引受けて、防ぎ戰ふその處へ、一刀片手に路の豐彥、韋駄天走りに馳來り、詞もかけず茂九郎與次兵衛、左右にドウと切倒す、途炭に出來る以前の莊五郎、夫と見るより立向ひ(豐彥)ウヌ道鏡の間者めが」と飛びかゝつて切りつくるを、防ぎかねて肩先一太刀、深疵を受けつゝ莊五郎、其處にドッカと片手を揚げ(莊五)マヅ暫時若殿樣(豐彥)ヤア、此場に臨んで卑怯の一言サア、尋常に命を渡せ(莊五)命はさらさら惜しみませねど、最後の際にタッタ一言、申上げたい儀がござります(豐彥)合點の行ぬその言葉(莊五)サヽその御不審は御尤、此莊五郎が最後の懺悔、お聞きなされて下さりませ、僕は元都に有て、小商ひせし者なるが、過つる寶字六年の春、俄に保良の都遷し、都の商賈吾先と、家居を求めて引移れど、貧しき身には夫も叶はず、果は都にも住詫びて、大安寺の邊りに逼塞し、人に雇はれ手馴ぬ田業、露の命を繫ぐ折から、かてゝくはへて炎天旱魃、餓死する場合に臨みければ、切めて夫婦の中の三歲の嬰子、只是のみは助けたく、一夜猿澤の池の邊りに捨おきしに、其子は和氣廣虫法均尼公に拾はれあまつさへ

此身に預けられ、乳料をも數多賜はり、夫婦の者まで命を繫ぎ、何卒して此御恩を報いんものと、朝夕心に念ずる折から、和氣の御姉弟には道鏡の讒に依り、流され給ふと聞くとひとしく、スハ御報謝の時來りぬと、故意と道鏡方へ身を寄せて、彼等の樣子を探る折柄、此度神官習宜の阿曾麿、歸國といふは表向き、實は窃に此嶋に渡り、淸麿樣を殺さん計略、故意と願ふて其伴に加はり、阿曾麿と共に此嶋に渡り、卿等の此嶋にゐるを幸ひ、何とか示合して逆樣に、習宜の阿曾麿を討取て、淸麿樣の御感に預らんものと、思ひし事は水の泡、かりそめながら惡人に、附隨ひし罰は覿面、卿の手に合ひ此最後、僕の本心を明しさへすれば、法均尼樣の御慈悲に依て、今日まで生存た此命、何で今更惜みませう、早々御介錯願ます」と聞いて夫婦は顏見合せ(豐彥)此ういふ事と知たなら、かゝる最後はさせまじきを(楓)誠に不便なことをさせましたなア」と疎忽を悔むその處へ、組子引連れ習宜の阿曾麿、豐彥楓をれつ取卷き(阿曾)ヤア路の豐彥、大罪人の淸麿を介抱すれば、汝も元より大罪人、淸麿諸共首にする、又楓はこのまゝ都へ召連れ、黑人殿へ土產の一品、ソレ者共、足萎の和氣淸麿、此處へ引摺出せ(組子)ハッ」と答へてバラ／＼と、さゝふる豐彥楓を衝退け、一室の中へ飛込む間もなく、將棊倒しに投出さるれば、是はと駭く間もなく、最後に踏入る二人の組子を、左右に捻上げ徐々と、身を現はしたる和氣淸麿、さし貫き直衣附太刀して、威わつて猛からざるその風采、四邊を拂ふばかりなり、見るより二人は驚き聲(楓)ヤア淸麿樣の其御足は(豐彥)御病氣御全快にござりまするか(淸麿)イヤ、刑部省にて手足の筋を拔

かる丶筈の處、百川豐永兩卿の救護に依り、僅に無事なるを得たれども、猶も奸人共の祟りを恐れ、故と不具者と見せゐたるなり」聞くより阿曾麿いよ〳〵周章(阿曾)手足が利くと云ふからは、猶助けておけぬ和氣清麿」と、太刀ふりかざして立向ふを、豐彦は中を隔て、二合三合戰ふ間もなく、阿曾麿の首は宙に飛ぶ、夫と同時に多勢の從者を從へて、百川の一子藤原緒繼、衣冠美々しく出來り(緒繼)一別以來清麿殿」清麿打見て大に驚き(清麿)やア珍らしや緒繼殿、人迹絕し此島へ何の御用で(緒繼)某此度此島へ下向せしは、父百川が指揮、今般上には崩御に依り、近江の帝の御孫を東宮と傅き奉り、不日御即位これある間、卿にも早々歸京有て、共に道鏡を亡ぼす計略をめぐらしたまへ、是こそ東宮よりの御赦免狀」と懷中より勅書把り出し清麿に渡せば、恭しくおしいたゞきて(清麿)ハッ、御赦免とな、ふたゝび花開く此身の運命(豐彦 楓)おめでたう存知ます」、手負の莊五郎も最後の際に此事を漏聞て、冥土の土產の嬉し泣き、緒繼はふたゝび口を開きて(緒繼)片時も早く、御歸京の御用意――(大團圓)

短篇小說　明治文庫第十四編　終

版權所有

明治廿六年八月三十日内務省許可
明治廿七年七月十一日印刷發行

明治文庫定價		
一册(二百頁)	金拾五錢	
六册前金	八拾五錢	
十二册前金	壹圓六拾錢	
廿四册前金	三圓拾錢	
郵税一册六錢		

編輯兼發行者　大橋新太郎　日本橋區本町三丁目八番地
印刷者　曲田成　京橋區築地二丁目十七番地
印刷所　株式會社東京築地活版製造所　仝所
發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

大槻如電先生校訂　原田芳五郎君編纂

遊藝起原

全一册洋裝
正價金拾錢
郵税四錢

目次

●歌舞音樂起源沿革●能樂●操人形●歌舞伎義太夫節●一中節●常磐津節附岸澤、松廼家●富本節●清元節●薗八節●富士松節●新内節●琴唄●長唄＝附荻江、大薩摩●端唄＝附歌澤、哥澤、小唄●相撲●講談●落語●手品●輕業●倭獅子

遊藝の起源に就てハはやく齋藤氏の聲曲類纂、喜多村氏の嬉遊笑覽等類纂したるものなり近くは又小中村博士の歌舞音樂畧史あり何れも學者研究の爲には此上なき良書なるべし、しかはあれ其簡にして要なるを求めは如何答へむ本書は即ち此要求に應じたるものにして汎く古書を涉獵し其膏腴を抽擇せしものなり殊に斯道の博識如電先生の精密なる校訂をも經たるものあれば各種遊藝の起源は此書に因て始めて明かなりといふべし世の風流諸君等此書を座右に置きて參考の資となさば啓發する所また甚た尠からざるべし

巖谷漣山人編

日本昔噺

（毎月二回發兌）

全部拾二巻 洋装美本

毎編有名畫工挿畫數個挿入

正價一冊金五錢◉六冊前金廿七錢◉十二冊前金五拾錢◉毎郵稅二錢

一名 昔々文庫

本書目次

第壹編 **桃太郎** 文學士坪内雄藏先生序文 大和田建樹先生唱歌 富岡永洗氏密畫（七月十日發兌）

第二編 **玉の井** 尾崎紅葉山人君序文 佐々木信綱先生唱歌 小林永興氏密畫（七月十五日發兌）

日本昔噺近刊目次

第三編 猿蟹合戰
第四編 松山鏡
第五編 舌切雀
第六編 大江山
第七編 花咲爺
第八編 俵藤太
第九編 かち々々山
第十編 瘤取り
第十一編 文福茶釜
第十二編 物臭太郎

桃太の遠征、猿蟹の戰爭、兎の功名、雀の報恩、是等はお伽はなしの傑作と仰かれて、幾百年來幼年諸君に謹聽せられ、秀吉も家康も西郷も木戸も、皆一たびは是等の談を無上の講話とも小說ともして喜びたりき、されと錦の衣裳も目馴れては麗はしからずと、幼年文學の大手筆たる巖谷漣山人が、敏妙無類の奇想を凝らし快筆を揮ひ、古搆に就て新案を立て、一層面白くして有益なるやう綴らるゝに、當代名家の精美なる繪畫をさへ加へ、全部十二冊として毎月二回發行するもの、即天下無雙の昔噺文庫なり、

每月二回發兌
每編有名畫工彩色密畫挿入
洋裝大判美本

短篇小說
明治文庫

正價一册拾五錢
十二册前金一圓六十錢
郵便稅一册六錢

第一編目次
◉風流辻占餉…巖谷漣山人 ◉秋の蝶 ◉黑衣魔 ◉梢上月 ◉京自慢 ◉けなげさ ◉白面鬼 ◉山時鳥 ◉花の旅

第二編目次
◉雪折竹…川上眉山 ◉福の神…村井弦齋 ◉佛魔一紙…廣津柳浪 ◉薄命の鈴子…嵯峨のや ◉姥櫻…石橋思案 ◉驚く鷗…江見水蔭

第三編目次
◉劒客…江見水蔭 ◉初嵐 ◉骨武者 ◉斷絃 ◉信天翁 ◉漁郎 ◉畫師の妻 ◉雲烟過眼 ◉痏癖大守 ◉畫師 ◉若楓 ◉故家水 ◉わかれ霜 ◉一夜の宿

第四編目次
◉緣外緣…蝸牛露伴 ◉落語媒介人…巖谷漣山人 ◉新學士…漁山人 ◉風流新狂言記…川上眉山 ◉隅田川の秋…田山花袋 ◉庭の敎へ子…嵯峨のや ◉都土產…乙羽菴主人

第五編目次
◉みくずはれ…山田美妙齋 ◉田舍聖者 ◉大龍王 ◉くされ緣 ◉雪折竹 ◉古切手 ◉戶隱山紀行

第六編目次
◉忠義お安…福地櫻痴 ◉當世二人女婿…依田學海

第七編目次
◉俄長者…中村花痩 ◉狂蝴蝶 ◉俠魂 ◉破鏡 ◉合觀花 ◉片時雨

第八編目次
◉村上義光錦旗風 山田美妙齋 ◉花やぐら…佐々木信綱 ◉若みづ…巖谷漣山人 ◉國民大帝…嵯峨のや ◉二十日月…田山花袋 ◉滑稽二人男…骨皮道人 ◉夜行汽車…松華庵主人 ◉江戶舞踏會…眠花道人 ◉青春夢…抱一庵主人

第九編目次
◉浮田一蕙…渡部乙羽 ◉捨扇 ◉戀今樣 ◉こぼれ梅 ◉新奥細道 ◉故郷錦繪 ◉邪正一如 ◉京屋娘 ◉神田七不思議 ◉玉川河童泳記 ◉花摺衣

第十編目次
◉僞紳士…福地櫻痴 ◉一人娘…巖谷漣山人 ◉母心…嵯峨のや ◉銃獵…松華菴主人 ◉鏡花緣…松井十八公 紅葉山人閱 ◉薄暮山…田山花袋

第十一編目次
◉雪月花物語…遲塚麗水 ◉畫師 ◉階樂園梅 ◉啼美人 ◉新佐世姬 ◉懸想文賣 ◉餓鬼 ◉心字池 ◉寶刀

第十二編目次
◉斷腸花…石橋思案 ◉片破月 ◉美人車 ◉わが戀 ◉禿木魚 ◉可愛い子 ◉羽拔鳥

第十三編目次
◉吉野拾遺…依田學海 ◉名歌譽 ◉世の中…嵯峨のや 幽芳女史作 ◉末開紅…南翠外史補

第十四編目次
◉爪の娘…宇田川文海 ◉信夫摺 ◉葉末の露 ◉萬金丹 ◉藤袴 ◉胸算用 ◉竹生島 ◉犢鼻褌 ◉和氣淸麿

第十五編目次
◉迷霧…幸田露伴 ◉裸美人…尾崎紅葉 ◉片時雨…巖谷漣山人 ◉星…小金井きみ子 ◉加利保留尼亞…村井弦齋 ◉若木櫻…柳園主人 ◉香の雪…廣岡柳香 ◉納豆賣…睡花亭主人

（第一編ヨリ取揃御注文ニ應ズ）

圖書出版

東京博文館

明治文庫

短篇小説

博文館發行

明治文庫第拾五編

迷霧　幸田露伴
裸美人　尾崎紅葉
加利保留尼亜　村井弦齋
片時雨　巖谷漣
星　小金井きみ子
若木櫻　柳園主人
香の雪　廣岡柳香
納豆賣　睡花道人

[seal stamp]

短篇小說 明治文庫第十五編目次

◉迷霧……一
◉裸美人……一〇
◉加利保留尼亞……一八
◉片時雨……八〇
◉星……一四四
◉若木櫻……一四九
◉香の雪……一六六
◉納豆賣……一八一

以上

◉迷霧

（上）

幸田露伴

よしや草の莖を矢にして百練の鐵を貫くことはありとも毒惡の言は遂に清淨の人を傷つけんこと難く、たとひ蜘蛛の巣のいと細きをもつて九種の龍を縛し得ることはあるとも暴戾の業は何ぞ慈悲の德を凌ぐを得むとむづかしう四角ばつて云ふまでもなく、旅は道づれ世はなさけといろはがるたの金句は說き當てゝ動ぎのないところ身延參詣の途中にて互ひに助けつ助けられつ、八王子行きの汽車の內で自分は腰掛より離れて、あなた樣立つてばかり居られては御老躰の定めしおつらい事でござりませうにちと此處へ御坐りなされと席を讓り、又は甲州路の岨道で、御履物の緒が切れましたか、やれ御氣の毒な、さあ是でおたてなされと有合せの短い細紐を與るなどいふ仲間のみが同行かは、日々夜々人も我も實は伊勢暦の中を一格づゝ常に旅して步行て居るやうなもの、隣りの男も向ふの婆も皆同行には相違なし、されば行き着く先々は各々ちがつて日本橋の人道がはじまり、夫より色無色の天に登るか修羅餓鬼畜生の惡趣

に入るかは知らねど、坦々たる大道を正當に行かば盲目も差支へはなく京のぼりが出來るとむかしより云ふたものなれば畢竟は權兵衛八兵衛も一佛乘の道づれ、彼岸に到るの同行こゝを考へて見れば、呉越の客ども船を同じうしてから情をよくするのみならで船に乘らぬ前とて互ひになさけのかけ合ひをすべきはづ、ましてや親となり子となり兄となり弟となり夫となり婦となりて住む家の棟を共にするは勿論淺からぬ因縁あつての事、紅花綠葉素同根、どうしてなんの、なんの恨み、惡み、嫉妬、偏執我慢、貪、瞋、癡、打つ、つねる、喰ひ付く、詈る、欺く、惱ますなどいふあさましい所思所業の成り立つべき地のあるべきや。雀王經中の靈雀と猛虎、九色鹿經の神鹿と溺人、波羅奈國の大龜と賈客の話しなど皆一方は得手勝手の爲し放題、恩忘らず義理かまはずの大我武者なれど、遂に其がむしやが此世を一統して盡未來際支配したとは聞かず、矢張り却後無量劫を過ぎて天王如來となり、むかしの其無法者妙法を說くとあれば無法も到底皆歸妙法、煎じつめて云へば惡は善に勝たず暴は慈に克たず無明は金剛不壞のものにあらず、短く譬へば好色の男も若盛りの無分別からあのゝものゝと衣類持物を吟味するうちこそ淫女に迷溺もすれ、經帷子を是から着むといふ夕暮にも猶能く微音にお前百までわしや九十九までを吟じ得て若い時のまゝの心を持ちて居らるゝか、高の知れたる色慾の火の手なんど打捨て置ても三四十年ばかり經たる後は兩鬢に積る雪霜のために埋められ消されて仕舞ふところを見ればどうしてもこうしても迷ひはつまり眞如大海の一浮漚、決定して惡人自滅の時あるべし、惡事は來出ぬと覺悟する時あるべし

と誰も彼も知つて信じて居るか知らずに信じて居るか何にせよ人間の腹の底に持て居る爭はれぬ天の命じたところならむに、さても又彼奴のふるまひは何事ぞ、彼奴は多分生れついて仁といふものをもたず、心の靈德の缺けた男かと疑はるゝ若者ありて、齡は今を盛りの二十三四、五とはなるまじ、普通ならば最早幾干かの働きをして、取つた金を神棚へのせて、おふくろでも悅ばすべき頃なるに春雄〳〵と甘く育てられし故かそれとも養家故に我まゝ三昧せぬが損とあばれちらすかと苦々しい評判せらるゝも無理ならぬ乱暴狼籍、聞くさへ忌はし。よろづ五月蠅商賣は仕舞ふたやの小躰ぐらし、表面に賑々しいところは見えねど地面公債しつかりある青山家へ養子に貰はれて何不足なく學問勉强出來る仕合せの地位に居ながら飽までやさしい養母の人のよさに付込み、怠惰るどころかまるで書など一冊も手に取らずに遊蕩ばかり、最初はそれも朋友のつきあひと名だけをせめてしほらしいものにして無益金を費せしが、後には遠慮なく打ち出しての不品行、素より行く末に立派なる目的を持つて居るといふにもあらねば、見るところ思ふところは眼前一寸、たゞ虛しく驕りいたづらに高ぶり、帽子の詮義、駒下駄の穿鑿、下らぬ事に屈澤して何にする氣か、つまりは見識もなく操行もなき無知の婦女ばらによろこばれんため、義理ある母の仁慈を度外にして野犬のやうに其處等中うろつきあるき、類をもつてあつまる惡友同志、互ひに通とか粹とか乙とか妙とかいふような怪しき意味を持てる言葉を放ち合ひて輕薄きはまる盃酒の交りを結び、どうも是は恐れ入りやした、凝つたもので、珍でげす、面黑い、たまらねへ、澁うがす、

捻つた奴、などいへる文句を吐きては間々にオホンと拍子を取り、反身にあつて厭味の臭氣を空中に射り出すを自分では天晴才子の所業と心得て得意顔なる鼠輩の伍に入り、やれ花、やれ月、釣に演劇に浮れあるき、遂には長じて枯野までを面白がれど、畢意は酒色を夫等に事寄せてさもしい腸に虚妄の歡樂を與ふる手段に過ぎず、明ても暮ても飲むこと三昧騷ぐ事三昧、是で行末がよくは天道も人道もなし

（中）

あまりの亂行、若いものゝ一時の不了見はあるならひとて、打捨てゝは置けずと、たまには諫め諭せど中々養母のいふ事など耳にも入れず、お母さん餘計なことは云ひ玉ふな、ぶらりとして日を送ればとて瓢箪でさへ胸のあたりに締めくゝりはありますに、春雄の腹の中には憚りながらお母さまなぞには知れずとも確なところがござります、たゞし瓢箪にも劣つたものとおぼしめしての御教訓ならば失禮ながら御眼がちがつて居りませう、左程御辛配あそばして小さな御胸にくよ／＼と物案じは御身の毒でござります、なんの靜に果報をおまちなされ、古語にも大器は晩成とござります、今の若さにあわてゝ立身出世など望むで騷ぎちらすほど私は馬鹿でござりませぬ、また少しばかり行狀が普通はづれたればとて是は天性の磊落おゆるしなされ、大功をなすものは細瑾をかへり見ず、中々もつて詰らぬ事にびく／＼して居るやうではどうせ碌なものにはなれませぬ、世間俗物どもに是彼云はれる位は何でもない事、容れられずして其大を見るとはそこの事でござります、唯今どのやうなことを致さうともわたくしも是切で

終りはしませぬ、まづ〳〵氣長に先の先を樂みにして居らるゝが宜しうござります、決して一個の男子間拔なことはしませぬと、縱板に水を流す如く辨舌を揮つて理を使つて非を飾る口前恐ろしければ、少しも母に口は明かせず。何とやら呼ぶ藝妓に引かゝりしか引かけられしか丹樣ぶりの好男子となりすまして家を外の無法、遂には云ひ譯も前ほど叮嚀ならぞ、二言と母の言葉をきかずに、おだまりなされ、英雄色を好み酒を愛す燕雀何んぞ知らむ鴻鵠の志と講釋師から習つて來た糞威張りをふりまはせば母もあきれてたゞ泣くのみなり。かゝる男に持たれては如何ほどの大金なりとも財產なりとも何條長く其まゝにあるべき、青山家の運も次第に衰へて地面も一ヶ所二ヶ所と賣渡たすやうになれば、公債は既の事飛んで踪なし、是はならぬと母親氣をしめて春雄に渡さねば春雄はまた忽に智惠を出し突然金を借り置きて何日の間にか持地を質草にするなど愈々ます〳〵白痴を盡し、世を懷中手で渡らるゝやう見くびり三文の挊ぎもならぬくせに武内殿を安く使ひ蛭子の命を小僧叱るより烈しく追ひまはせば、終には貧の水に榮華の寐耳を驚かされて歡樂の夢長くはつゞかず、段々と着物の襟垢のみ增して襦袢の袖の縮緬にあさましい瘦見ゆる身となり、一寸外あるくにも黑塗りのつやよく藍天鵞絨の內張りした人力車を擇みて乘りしものが、赤枯れたる疊のつきて鐵ほど堅うなりし革緒のむかし恨めしき下駄引ずりて鐵道馬車にも乘れぬ仕誼、まして母親は老眼のさだかならぬを眼鏡の力に助けられながらハンケチの緣縫ひを疾からはじめて內職に肩の凝り針だこの傷みを厭ふ間なきまでに到りて暮せり。大抵の者なら此處

等が悔悟時、女には早くも見限られて口惜涙の愚に煮ゆる擧句、煮ゑ切れて發起もしそうなもの、朋友も漸く遠ざかりて往來でまざ〳〵逢ひながら向ふは帽子の庇を楯に知らぬ顔で行く憎さ、癇癪の火のむら〳〵と燃ゆる擧句燃えたちて今までの惰弱を自ら責むべき筈なるに、斯くなればまたいよ〳〵根性煮ゑこぢけて怪しくなり、魂魄半ば燒けて鐵滓の如く爲りでもするものか、僻みばかり強くなり行き怒り易くなり行き、輕薄より粗暴に流れ、惰弱より妬悍に一足飛びし、何ぞと云へば人を罵り物にあたり、自然言葉も妙でげず乙でげす粹通なんどいふを捨てゝ、若き男女の相乘車景氣よく走るを見ても、畜生と評し、立派な紳士の悠々とあゆむにすれちがつても何だ此野郎とつぶやく心の中のむごさ、畢竟は自分が畜生に落ち野郎とそしらるゝ身となり居る證據なるべし。かゝる境界に沈みてハ余所目よりはひとしほあはれ深き自繩自縛自肉自食の魔となりて自ら悟らず、衣を賣りて酒をあをり、醉ては昏々としてしばらく睡り、醒めては欝々として長く苦しむありさま恰も巳の腿を割て己の口に奉ずるに等しきを心づかず、ます〳〵邪見の大外道忿懣の阿修羅となり我を責めて正に歸することは露知らずに、我を執して空しく人を惡み他を嫉み、一日幾度か瞋恚の惡火を發して骨髓を焦かし殘忍の寒風を吹き出して肚腸を氷らする惱みに智水枯れ竭きて清涼の妙相失せ心華零落して脈々たる佳香亡べば可愛らしきところはすべて無く、見るからが鄙しく忌はしき眼ざし、聲には元より毒刺を含むにぞ誰かかゝるものを能く憐まむや、殊に貧乏の苦患もみづから招きたるにはあらで孝行して貰ふべき筈の忰より逆に報はれたる母親

むかしのまゝならむにハ絹物に踵をかくして豊かに晩年を樂しみ送らるべき身が足袋を縫ひ刺子を作る内職など手の届くだけして齷齪辛勞夜を日につぎながら少しも女の癖の怨みも云はで居るを勿躰なくもいためつけ、酒買ふ錢が無いかとあばれちらす春雄の極惡、どうすればあゝも無茶に出來るものかと近所の人達さへ惡みに惡みて人間の面よごしと言るまでになれば誰一人春雄のためになることを敎へくれるものもなし、嗚呼人の性は善か將惡乎天の道は仁歟また不仁かとは此噂きいたる老人の歎息なりしとか、あんな奴はのたれ死せずには終るまいとは子を持たことの無いさる山の神の評なりけり。

（下）

春は發生の機をつかさどり夏は長育の恩を與ふる時節、三度の食につかゆるものも此二季にはまづ幾分かのゆるやかなるところありて凌ぎよくもあれど、秋風白露、蟲の聲々天地のさびしさを鳴き立つる頃となりては衣服も一枚では濟みかねるに冷たさは身ばかりならず心にも浸みて、富貴の御公家樣さへ悲しい歌よみ出らるゝにまして貧人のつらさは猶々、霜は万木をいためて林間の鳥寒げに叫び、それより野分吹き立つて、やがては嵐木枯し蜘蛛の巣はらはれて簑蟲かくるゝやうになれバ、寂滅爲樂と觀じ玉ふ佛は知らず、凡夫が手は火鉢にわたらむを願ひ賤女が足は炬燵にもぐらむことを欲するが常、何も仕ないでづく〳〵と冬籠り、但寐て居たいが好みなるに此時そもさん貧者の苦み、一日ハたらかねば一日の口も共にやすませねバならず、寒風寒威いとふて居る間はなし、手はひゞに足ハあかぎれに、それの

みか惱むは、日短ければ拵で得る錢も少く年つまれば勤めて爲すべき業も多からず、要るもの多くて取るもの足らぬに、無慘や夜ゝ蒲團の綿かすかなるを引張り合ふて夢も半夜に幾度か破れなむ。心がらとは云へ春雄次第〳〵に落魄して見る影も薄いと母の眼からさへ思はるゝほどになりし揚句の果ゝ天罰か、自業果か、忽然として病を得たり、酒の祟りか、色の報か、心まづ病でから身病みしか、身の病に心の病もさそはれ出しか、左程にもあらず見ゑたる病氣の下り坂に石の走るほど早く惡い方に赴きて枕あがらず呻き悶ゆれば、情あつき母のかゝる者にも慈悲深く足らぬ中の物を殺でそれ藥りそれ針治、手のとゞくだけ身の及ぶ限り夜も碌に寐はせでの看病、アゝ恐ろしい熱ぞ、頭冷してやらむと覺束なき足どりに冷水汲んで來て手拭ひたし、引き換へ〳〵ては此の熱さめよと額をひやしてやるなさけ、春雄漸く苦み薄らきて何時か知らず睡りに入り、しばらくして眼さめてそつと眼を開き、あたりを見まはせば世間靜りて夜は三時頃かとおぼゆるにホヤも無い手らんぷの下にて內職の縫物まだやめ玉はず、嗚呼、と我知らず歎聲を發する途端オゝ眼さめてか心持は如何に粥湯作りて置きしに少し喫べ試みぞやとまめ〳〵しく柔和い御言葉、何となく肝に浸みて自然に恐れ入り、御顏を見れば病人かとおもふほど瘦せ衰へ玉へり、是も皆我不所存よりと痛ましく、おもはず此時無數の過已罪眼前に浮びて大鉄圍山四方より逼り來て我身を蹙むる如きを覺え、目をふさぎて春雄一言もなかりし。

夜も明けるに近くなりて、櫺子の破れに風白く、やがて日の光り難有も平等の大慈を旋して此貧家の裡

にもさし込むやうなれば母ハ藥取りにとて出行き、たゞ一人病蓐に横はりて過し方をおもへばおもふほど罪深くそゞろに落涙とゞめかねつ、流石の男も我慢の角少し折れかゝりたるところに母は歸り來り玉ひて、大分其方の顔色もよし今朝また一度粥湯をたべて早く力づけよかしと殘なき慈悲、見れば少しばかりの米を土鍋に入れ玉ひて煎じ玉ふ、それも直ちに出來てさあ是をと茶碗持ち添へて啜らしめ玉ふに冷汗腋の下より流るゝ心地しつ、腸の中にてよくぞ今までに罰のあたりて此口の裂け破れざりしぞとおもひつゝ感泣してそれを食ひぬ、其事すみて母は自ら朝食したゝめ玉ふに何となく人に隱し氣なり、あやしやと寐ながら横眼に椀中をうかゞへは、無慘、米にもあらず麥にもあらぞ、芋など入れたる糧食にもあらず、むごらしや豆腐の粕、嗚呼ッ、かくまでに御自分の身を責め玉ふても此不孝のわれを愛し玉ひしかと魂魄ゆらぐほどに驚けば春雄が心中に無限の春風わたりて迷霧忽然と晴れ清淨心にぞ歸ける。實に慈愛の念の徹する時は人に不思議の靈力を生ぜしむるものにて春雄其後病治して、病後の人は病前の人に異なり打つて變りし孝行者、母は素より子を愛せしに今は子もまた母に孝なれば不足の食にも滿足の想を生じ、寒苦の中にも温和の光りやはらかに、假令軒洩る風つめたきも惡夢長く絶えて樂は長閑なり、かゝれバ世間の人もまた春雄を愛して、春雄が世に出るの道ひらけ、猶心を細かにし氣を平かにして能く處し能く勤めければ終に青山家も天晴むかしに歸りてめで度榮えしといふ

（完）

◉裸美人

尾崎紅葉

曲線美！曲線美！曲線の好配合から成立所の女人の裸體は『美』の神髓である！あい、あい、左樣でござい、我は美術家の某とて夙に『裸美宗』に歸依するものなり。あはれ、此宗旨の有難い處を、弘めてくればやと思ふに、世には僞聖人多く、裸美の實相を觀もせで、世教風俗を紊亂すと、一言にいひ消す事こそ心得ね。いでや奮つて、俗眼凡慮の迷霧を拂はむ！

（こらよ、こらよ）

（はい、お呼びなさいましたか）

と現はれたる美形は、此間もらうた花嫁子なり。

（あい、話しておいた通り、明日は新婚びろめをするのだが、其に就ては少しお前の量見を聞きたいて）

（はい）

（何なりと私のいふ事ハ背きはしまいね）

（はい）

（それならば話すが明日は朝野の名士が數十名も集るので、また新婚弘めといふのだから一生に一度の

曠の宴會だ」
「はい隨分麁相のないやうに致します」
「頼みますよ」
「はい、それで、あの、明日はどういふ衣裝をいたしましたら宜しうございましやうか、母樣が伺つて參れとおつしやいました」
「なるほど其處だて。夫より大いに注文かあるのたが、其前になほ聞きたい事がある。うウと………お前は私を一体どういふ人物と思つてるね」
美形は夫の顏を不思議さうに見て、もぢ〳〵返詞なければ、
「政治家か、文學家か、または………」
「美術家！」
「其一言！美術家。美術家ならば其目的とする所は『美』の一字の研究である、といふ事は承知だらう」
「はい」
「それなら、美術研究上、私の參考とも、利益ともなる事を、お前が私に爲し得るならば、一身を犧牲にして、私の研究を助けておくれだらうね」
「御用に立ます事なら………」

（あ丶、持つ可きものは女房！必らず其言葉に嘘言はあるまいね）

（はい）

（丸裸になつてくれ）

（ね丶！）

（衣物を被ていならん、丸裸で臨席してくれ）

（え丶！）

（さ丶、其驚愕は道理だ、道理だけれど、ま丶、落附いて子細聞てくれ）

此時隣家にて、合方さつぱりとはゆかねど、びあの丶音がするに、先生此處ぞと容を正し、

（扨て改めて說くまでもない、女人の裸體は、美の神髓である、此はお前も美術家の妻たる以上は、承知であらう、悲しい哉、我國民は未開である、美術思想の乏しい事というたら、與論が我『裸美宗』に抗抵するのを見ても知れる。わつぱれ一匹の美術家でござると、法隆寺の和倘を從弟ヱ持つたやうな顏をして居る奴等までが俗人と雷同して……どうも情ない、此宗旨を信仰するものは、實に私一人くらゐのものだ、此が爲めに、世人はいふヱ及はず、朋友までが甚だしく私を論難する、確として動かないけれど私は疑ふよ野暮な事をいつて、喋々しく裸美宗を排擊ぶる人物は、薄識小量の男かと見るに、中々左樣でない、何故に此しきの道理がわからぬのか、實に一大疑問だ。恐らくは繪草紙屋に釣

るしてある《鰒魚取》や《浴後》の石板繪を一瞥して、ふウん、此が裸美宗の本尊かと、向不見に說破して欣々たるに相違ない、もし實相を觀たものなら、彼等は必らず美の神髓を會得して、一心不亂の裸美宗拜家になるに極まつてる、どうかして濟度してやりたいと、かねて志して居たのだが、幸ひ明日の宴會には、曲線好配合の見本として、是非お前の裸體を彼奴等に拜せたい、さうした曉には美の實相は此處なと一念忽ち發起する所を我宗門に引入れやうといふ私の本願だ。お前の裸體を見た爲に一同が裸美宗にあらうなら、お前一人の名譽ではない、私も非常な名譽だ。われ〳〵一箇人の名譽のみか日本美術の名譽だ、了解つたかい。うウ。何も涙ぐむことは少しもない。お前は面は白し、肌理は濃し、むつちりとした肉つきは、どうも言ぬほど好いから、裸體は屹度似合ふよ、惣身薄化粧をするがいゝね。これさ、何を涕ぐむのだ。髮はふり亂すに限る、文金島田の丸裸は、至て不恰好なものだから。これさ、さう泣てばかり居てはならん》

夢中になつて說き諭せば、花嫁はめそ〳〵泣くばかり、一向不承知のやうすなれば、先生赫と怒り、

《お前はさつき何と言つた。美術研究上、私の參考になり、利益になる事なら、一身を犧牲にしても苦しくないと、いつたではないか。夫の言葉を用ゐんやうなものは、女房でない！離緣する！》

《御……御免……遊ばしまして………》

《知らん》

（ど……どうぞ、お放し……）

（あゝ……な……放さぬか……非常な腕力だ……あいた、た、つねるナ。）

（覺語をきめました）

（きめるナ、そんな事をきめるな。もしお母さァん）

（私は死ます……死ます）

（死ではいけん、お母さァん）

けたゝましき物音、呼聲に、母親かけつけ見れば、嫁女は上になり、組敷るゝ婿殿ハ嫁の向脛に喰つき、右手をあげて嫁のナイフを持つ手を握れば、嫁は其手をつめり、双方片息になつて揉合を、母親賺し宥めて、子細を聽かむと嫁を連れ、我居間へこそ入りにけれ。

扨て嫁女！愚息いかなる無理を言懸けての彼始末と尋ぬるに、涕を拭ひ、されば明日のお座敷へは、私しに丸裸にて出よ、御客に美の實相を觀せむとの御了簡。裸になるが厭あらば離縁とのお言葉、私の身にして離縁は死ぬより厭なれど、裸になるも命をかけて厭なり。そもや婦女の嗜みとハ、唱歌讀書のみならず、朝ハ夫より早起して、身仕舞さらりと濟まし、しだらなき亂れ髮、寐白粉所禿の顏、細帯寛みてみだらなる姿を必らず見せまじきと、心を付るが道なるべきに、ある可き事か、禮義の衣物を引むき丸裸にしてそれも夫一人への見世物ならば、また辛抱する方もあるべし、愛想つかされに、満座の中へ

出られましやうか、賤しい勤とやらをする女でも、此れバかりハ得爲まじき姿を、大勢の眼に曝させ、名譽と思ふ夫の氣が知れませぬ。足らはぬ私しゆゑお嫌ひなされ、罪科なければ、死ねともおつしやりかね、かゝる難題をいひかけたまふは、出よ、死ねとのお心か、ゑゝ恨めしや！口惜や！道理道理と、當惑顏の母は首肯のみ。母樣、今まではお陰し申して居りましたなれども口籠るを、何んの私に遠慮があらう。はい、きッと愛想を盡かして下さるな。

私實ハ、生れついて臀に大なる靑痣あるを、いつかは見出され、片輪ものと棄てられむことを苦に病み、いつそ私からいひ出さば、まだしほらしく。不敏のものとおぼされ、大事にも及ぶまじと思ひながら、流石に心弱く、打明す機なく過ぎました、不埒の段は御容し下さりませ。此の瑕知れましても、お二方だけへならば、まだ〳〵羞かしいも當座にて濟む所を、此度丸裸を大勢に見られ、此痣も見つけられては、あなた方の恥辱のみか、此辱私しに於ては、命を捨ても雪がれませぬ。

よし無瑕の肌にしても、わが男にさへむざとは見せまじきものを、あられもない、大勢の目の前へ……私し不敏と覺さバ、此喃母樣と、しがみついて泣くこそ道理なれ。万事は我に任すべしと、母親立つて息子の書齋へ行けば、待かね顏にて、裸體の一條かれは得心いたせしか。なんの〳〵たとひ嫁女が得心すとも、此母ある間ハ、いつかな、さる狂氣の擧動させる事にあらぞ。しや！狂氣とは聞惡い、美の實相を研究せんとの志ざしを亂心といはれては、「あぼろ」も照覽あれ！母親たりとて用捨はない、理由を

聴かむと、血眼になりてたけり懸れば、母親此の勢ひに魂消かへり、かうなつてハ、意見も熱鐵に唾なり、勝手にしやれといひ捨て嫁女の部屋へゆけば、母様！血相尋常ならず、案じられます、容子聴かせて。私とて力及ばず、と投首する。頼みの綱切れて、嫁はわッと泣き出し、どうあつても裸になる事かや、母様私は先立ちまする、逆縁ながら御回向を。早まつてたもるな、これと囁けば、嫁は合掌してふし拝み、別條なく此日暮れ、此夜更けゆく二時の音に嫁姑手を引きつれ、忍び〳〵に勝手口の戸を明けむとする時、下女が、

（御隠居様！奥様！）

（えッ！）

（この夜深に何方へお越し遊ばします）

（すこし子細があつて嫁の里まで行くのだけれど……）

（其子細は存じて居ります。どうぞ私もお連れ遊ばしまして……）

（其子細を知てるとか）

尋ねる奥様の顔をつく〴〵と打護り、偖ても御傷はしや、物の数ならぬ私風情さへ、此はいづかしと思ふを、奥様の苦しき御心中山々お察し申しまする。私は四日前御目見えゝ上り、御意にかなうて、御奉公ときまり、いかにむづかしき御家風かと案せしに、御隠居様は、お慈悲深く、お二方はおやさしく、

万事もつたりとした御活計長く御奉公申すべきお家と、難有く思ひしに、昨日はお二方御入湯のお留守風邪の私の床へ旦那様お出でなされ、明日のお客の席へは、丸裸に薄化粧して出よ、差かしい事は少しもない、何とやらの何とやらだと、色々はづかしい事をおつしやつて、おうけを致さずば、からき目に遇はさむ御見脈恐ろしさに口頭たげはおうけを申したれど、田舎には許婚のある私し、餘の男には、怪我にも肌は見せまじき大事の身なり。衣類手道具おさへらるゝとも、此身には替へ難し、今宵は遁げむと思ひしに、晝程お二方の御話しを襖越しに承はり、奥樣の涕を私もお貰ひ申ました、思へば傭人請宿の妾の、此家のお望みはふとり肉にて色白く恰好見惡くからぬあらば、器量には望みなし、其外は無性ものにてもおしやべりにても、懶惰ものにても強情ものにても、手癖わるにても、武骨にても、それ等には搆ひなし。しかも給金は並の二倍丁度お前が似合しく又とない口、はて妾奉公ではあるまいかと樣子を聞くに、此頃奥樣をお持ちなされたるよし、何の子細あらじと、上りましたれば、給金並の半分にても、願ひたき程のお家、昨日の旦那樣のお言葉にて、解けかねし不審がすつきり解けました。百圓頂いても、こればかりは出來ませぬ、女の心掛けはさもあるべきことなり。何はともあれ、かれめ、目覺ましなゝ面倒、仕度はよきか、

（そんなら母樣）

（お二方樣）ち、ち、ちんと三時鳴る　（終）

◉加利保留尼亞

村井弦齋

第壹回

煢々たる五尺の小身を以て地中海の一孤島より起り拾有九年の間歐洲全土を震動して絶大の雄名を北半球の三大陸に轟かしたる千古無雙の大豪傑拿破烈翁第一世が夫の白耳義の一寒村『ウヲートルロー』の戰塲に最後の活劇を演してより歐洲列國の形勢は暫く小康の世となりて常に硝烟彈雨の爲めに蔽れ居たる大陸全土の表面も漸く將に青天白日の光を仰がんとするの有樣なりき此に於てや前路の障碍を除却せられたる人爲現象の進歩增殖ハ日に益す隆盛の域に赴き遂に一種の新現象を產出し來りて人類社會の歷史上に一大段落を與へたり其事何とかする他なし理學的の大發明是なり此發明や人類發生以來三十萬年間に產出したる人爲現象中一も之に及ぶ者なき程の勢力を有する者にして帝王も之か爲に漸次其伎倆を施すの地を減縮せられ僅々數十年の間に於て地球の表面は非常の變動を蒙りたり二十九萬哩の鐵道線五十萬哩の電信線七萬艘の船舶八億萬の無形職工此等の者は皆當十九世紀に現はれたる新現象にして其勇壯快活 絶大迅速なる勢力を以て遂に地球表面の面目を一新したる者なり是皆實に彼の『パヽン』『ワット』『モールス』『フエルトン』『ステフエンソン』諸氏が人類幸福の進歩に非常の速力を與へたる無盡藏の賜に非ずや若し地球以外に人ありて人類社會の有樣を觀察せば必ずや今日の人類が天然の地球表面を變更

製作して將に人爲の地球表面を作んとする如き大勢力を有するに驚駭するなるべし實に大發明者の功業ハ幸福の種子を萬年に遺して永く後世の人類をして年々歳々倍蓰増進する無盡藏の美菓を收めしむる者なり決して夫の黄粱一炊の夢に異ならざる豪傑的の事業が其人の長逝と共に消滅し去りて唯纔に痕跡を萬國歷史の一小節に遺すが如きに非ざるなり試に思ひ拾九世紀以前の豪傑は他の人類に向て戰爭をなしたる者あらずや今日以後の豪傑は漸く將に天然力に向て戰爭を爲さんとす昔時の人類は常に天然の地球表面に集散離合せし者ならずや今後の人類は漸く將に人爲の地球表面を作て其上に縱横往來出沒翺翔せんとす實に此拾九世紀は人類勢力の進歩に大速度を與へたるの時代なり地球の表面に一沿革を與たるの時代なり地球以外の觀察者に一大吃驚を與へたるの時代なり。

『相變らす面白い御文章でございますナー是は新聞か雜誌へでも御投書になるのでございますか

『エー實は或る雜誌へ投書しやうと思つて書きかけたんですがまだ筆を下した計りですからいけません。

『オヤソウですか出來上ッたら定めし美事な御文章に成る事でせうネー。

六疊敷の小坐舖は學びの窓の書齋にやあらん美麗と云ふ程にはあらねども室内の裝飾より色々の器物まで物數寄にて集めたるにや清閑にして雅致を含めり西の一方は壁にして東の一方は一間の床の間に一間の違棚上と下とに小さなる押入あり北の方ハ唐紙にして南の方ハ中窓なりまだ新しき堺段通を一面に敷

詰めたれば疊の表は見るに由なし中形なる佛蘭西製の姿見は皎々として一點の曇りもなく右の方の柱に懸りて斜めに半底の景色を寫しけり黒檀緣の横に長き扁額には淸人何如璋氏の筆もて竹露松風蕉雨の六字を認めたり石版畫もて寫しなしたる『ダウィン』氏の肖像は左の方の鴨居に安置す窓の下には一閑張の机あり其上に黒檀の蓋と古梅園の墨を載せたる小形の硯は右手の一隅に割據しピラミッド形のインキ入は屹然として其向に立てり之れに隣れる筆立は孟宗竹の牡丹唐獅子を彫りあり其中には高木の筆と上等のペン軸と鉛筆と石筆と折合好く雜居せり左手の一隅には漢書と洋書を積累ね中央には罫紙兩三枚眞書の細筆一本と共に人待顔なる風情なるは主人公と共に文壇の出陣を俟つにやあらん机の右翼には總桐の抽斗附の書箱ありて其上には新聞雜誌兩三枚横はれり唐木製の書棚は机の左翼を張りて折々は茶棚をも兼帶するにや紫檀の茶盆と瀬戸の草子鉢は樊川集潛夫論の隣に同居せり坐舗の中央には小形の長火鉢に西京出來の鉄瓶を載せ黒柿の手提煙草盆之に附屬せり火鉢と机の間にフランチルの坐蒲團を搆へ端然と其上に坐したるは此書齋の主人公と覺しく年の頃は二十五六なるべし威ありて猛からず温和にして凛然たり背はスラリとして脊髓骨は正しく丁度疊の平線とペルペルンデクリヤールを爲し居れり色は少し淺黒く顔は面長に体格は上等營養は善良肺臟は廣く肩骨は長く少し瘦方なれども筋骨の至て逞ましきは体育に心を用ひし賜か髮は少しく縮れて見えけれども毛の至て濃くして其色澤の黒々せるは顔に幾分の威嚴を添へたり鼻は隆く眉は秀で口元尋常にして締り好く妄りに言語を發せざる如き風情あれども亦一た

び之を開けば議論風生能辯縱橫三寸の舌當に不爛の働きを顯はすべく見ゆめり目は餘り大ならされとも皆は少し舉りて目元自から俊秀の氣象を顯はし眼光は鋭くして人を射るの風あり眼球は妄りに動かず動くも必ず視神經の働きと並行して規則正しく決して輕躁なる人の眼球が視神經と分離して働くか如きに似ざるなり鼻の下に畜へたる八字の拿破列翁髭は可成りに生長して肺臟保護の任に當るに足り形好く場所取りたる双方の耳は耳翼長大にして鼓膜の鋭敏思ひやられたり容貌風采をもて之を察するに思慮深き神經質の人にして智識經驗も共に具はれる如く舉動は謹愼閑雅にして精神は活潑勇壯と見ゆめり事物に注意する事至て深けれども妄りに事物の爲に心を動かさず深沈勇壯着實活潑とも許すべき一個の美丈夫あるが衣服は餘り華美にもあらず屑糸織の上着に博多の帶を甲斐の口に結び羽織は着せず金巾の足袋を穿てり今此主人公と對話せるは火鉢の向に坐を占めたる十八九歲の佳人にして身体は肥太の方なれども肢体の結構甚だ釣合好く天然の强壯を顔と体に現はして問はでも知るべき多血質頸筋の工合より肩先手足に至るまで彼の『ボルク』氏か物したる美人の論に適恰し希臘古代の彫工が情神込て造りたる女神の象に髣髴たり芙蓉の容顏新月の眉鼻は隆くして鼻梁通り口元は小さくして自ら愛嬌を含めり色は飽まで白くして其中自ら淡紅を帶び髮は餘りに濃くはあらねど毛のいとも柔かにして癖の少しも無きは素直なる性質を表はすあらん然し其色の少しく赤みを含みたるは色の白きと共に黒色素の皮膚内に多からぬ故なるべきか此佳人の他に比類なきは一顧千金の價なる目元にて愛嬌と云へる無形体か仙家一滴の玉

露と混化して此雨眼を造り出せしにや鈴形にして大きくパッチリとして涼しく是も黒色素の少なき故にや少しく碧色を帯びたれど通常の歐米人種に似たるに非ず西班牙の嫂婷か伊太利の嬝娜か都て歐洲南部の美人か有てる眼に類せり頭を回して一笑すれば百媚生ぞ六宮の粉黛顔色無しと白香山が形容したる楊太眞の愛嬌も爭でか此佳人に及ぶべき風姿秀麗にして言語爽かに擧動快活にして精神は自ら温和なりと見ぬ八反の下着に糸織の上着博多の丸帯をやの字に結て本鼈甲の水色櫛を品の良き高髷に挿したるは當節柄チト古風な頭なれども是は此佳人の母親が『日本服の束髪は品が下ッて好く無いから洋服を着ない時ハ矢ッ張り島田におし』との御注文と見ゑたり此佳人は主人公が書きかけたる一枚の文稿を手に持てツク〴〵と眺めてわりけるが軈て夫を下に置き漫に東風春雨の力を藉て妖艶の桃花紅唇を開くとも云ふべき風情にて可愛らしき口を開き、

『本常に子ー地球の外から誰か見て居たら嘸可笑しなもんでせうネー。

『ハア隨分面白いでせうヨ。

『アノ子私の叔母さんが國から出で參た時に子私と一所に淺草へ參たんでございますヨ爾うすると途中で子ヤレ舊は馬道ハ此樣なでハ無かッたのヤレ淺草は彼樣なでは無いのッて子大變に方々の變たのに驚いて居ましたが子若し二三百年前の人を連れて來て今の世界を見せたら嘸驚く事でせう子ー

『左樣サ歐羅巴なんぞは今に丸で天然の形は無くなッて仕舞ませう夫に付ても亞細亞はまだ…………

『デスけれども子幾ら歐羅巴の人が大きな事をしたッて迚も蟻にや叶ひませんと思ひますワ。

と主人公は驚きながら言かけしがチョトとした事でも心に感じると直に大きく言出す此佳人の例の癖なりと思ひ少しく輕蔑したる語氣にて微笑しながら、

『蟻………………

『ナゼだッても子私は此間蟻の塔を見ましたんですヨ三尺斗りも有りましたろうか大きな物ですが子其塔を製へて居る蟻は左樣サ尺度で二分位しきや有りません小さな者ですヨマア考へて御覧なさい二分位な体で三尺位な物を拵へるとはエライではございませんか其位なのいまだ澤山ありますッて

『蟻がなせ其樣にエライんです

………モット大きいのは有ると申しましたヨ、エート二分を十で二寸百で二尺と………三尺ですから百五十倍に成りますチー人間が幾らエライと申したッて百五十倍の高さの物が幾個此世界に御ざいませう而して夫れ斗りではありません其塔の周りに蟻が澤山居まして子彼方へ行たり此方へ行たりして食物を運ぶんだか土を運ぶんだかチッともヂッとして居るのは有りませんヨ人間は随分惰けたり遊んだりする者が澤山ありますが蟻には其樣な者は無いと見ヘますデスから大きな物を製へるのと勉強するのは蟻の方が餘ッ程人間よりはエライと存じましたヨ。

初めには輕蔑しながら聞居たる主人公は此咄しの内に何か感せし事ありと見ヘ最初佳人の顔に注射して

居たる視神經の方向が次第に上向となり又追々下向となりて遂に其方向は消滅し視神經の働は暫く休業せしに隨て聽神經の働次第に鋭敏になり遂には内身の能力を聽神經と腦髓とに聚めたる樣子なり蓋し此人は常に日本人の懶惰なるを慷慨して歐米諸國の進歩と我邦の進歩とに遲速優劣の大差あるは兩國人民の性質に勤惰の差あるが故なり今にして此惡風を除かずんば我邦の前途は覺束なしと云ふ說を主張して明暮れ其事をのみ思ひ續けて居たりしかば今此の佳人の咄の内に蟻の勉強と云へる事を聞き何か考へ出せしにや咄の終るも氣が付かず返事もせずに默然として居たりければ佳人は張合の拔けし調子にて

『潔さん(主人公の名なり)何うかなすッたんですか。

此時潔はフト氣が付たる樣子にて漸くに頭を擡げ、

『ナール程迚も蟻には叶ひません。

ト突然言出したるが其樣子の何となく可笑しければ如才なき佳人は話頭を轉じ、

『郎君ナゼ先達て私共の親父が資本を出して上ますから洋行なさいと申したのに御辭なさいましたの郎君は何時も一遍世界を周りたいと仰しやッて居らッしやるじや御ざいませんか。

『イヽヱ私は何も御辭り申したと云譯ではありませんが私も色々世路の艱難を嘗めましたからモーモー決して人を宛にするものでは無いと決心しました人を宛にした事は屹度出來ません又出來たッて永續しません出來なければ人を怨みます不平も起ります他人にさへ委賴しなければ不平も怨もあり

ません私も初めは人を宛にして度々失策しましたから是は全く自分の惡いのだ獨立心が無いからだと氣が付まして夫からはモー／＼決して他人の世話には妄りに成るまい假令他人が世話をしやうと言ても理由のない世話は此方から辭る積りに決心しました洋行も是非一度は爲て見度と思ひますが自分の收入から少しづゝでも貯蓄して夫が溜ッたら參らうと思つています夫にもう此頃は少しは貯蓄も出來かゝッて來ましたから……假令好機會が有るからと云て無闇に後來の負擔を增したり又は他人の世話で洋行して自分の自由がきかなければ私の樣な風變りな思想を以て風變りな事を仕樣と思ふ者は却つて究屈ですから夫で貴女の御親父さんの御親切な御言葉にもツイ從はない譯ですから惡く御思ひなさらない樣に貴女から良くおッしやッて下さいまし。

『イヽヱ決して惡く思ふなンと言ふ事はありませんが子夫じやア郎君あんまり御堅過るじやありませんか人を宛にすると外れると仰やるけれど夫は先の人を擇ぶと擇ばないのにありませう何も私共の親父がれ金を出して上たッて夫を郎君から復取らうのなんのと申すのではなし又郎君に何處へ何て何をなさいと指圖をするのでもありません郎君の御好み次第になすッたら好いじや御ざいませんか私　共の親父は子唯々あなたの御エライのに感心して居りますんですヨ先達もソー申しましたッけアノ潔さんは珍敷い人だ今にドンナにエラクなるか知れないアノ才智の鋭いのと品行の正いのは全く母親の遺傳と敎育とにあるのだ潔さんの御母さんの樣な賢夫人はない實にアノ母なれば社アノ

子を生んだのだッて大層あなたの御母さんを褒めましてチソーして潔さんの年に似合はない老練で精神の確かなのは全くあなたが東京に御出なすッてから色々御艱難をなすッたからだッて………アノ實に潔さんは御堅くッて捌けて居らしッて御おとなしくッて確りして落付て居らしッて活潑でアンナ珍敷い人は無いッてソーすると母も子………

『モー〳〵澤山其様なに油を御掛けなすッたッても何にも奢りませんヨ。

『アラ串談じやありません本當の事を申すんですヨ母も子潔さんの様な好い御方は滅多に無いアヽ云ふ御方の………

ト言懸けて跡は何にも言出さず目の縁に少しく紅潮を呈して只微笑してありければ潔も何となく可笑しくなり是も同じく微笑を含みながら

『夫から………アヽ云ふ御方の………夫から。

『エーナーニ潔さんは實に御エライッて。

『本當におッしやいヨ今の跡をサ夫から。

『申しましよふか………アノー潔さんの様な御方の御嫁さんになる人ハ………幸福セ者だッて。

ト言切て顔を少しく赤くしながら彼の愛嬌的の目を斜めに潔の眼中に注で此返答を待て居る様子は實に是れ一片の秋波人を惱殺する風情あり潔は此時胸中に浮ひ擧ッた一種の感情を態と笑ひに紛らして、

『アハヽアなんだと思ッたら…………落が付ましたネ。
『アラ詐じやありませんヨ本當ですヨ。
ト力を入れて言ふ潔は少し眞面目で、
『私の樣な者の處へ來て呉れる人は有りません。
『アラ…………降る程有ますワ。
『ヨシヤ來て呉れる人が有ても私の方で當分御辭はりだ。
ト聞て佳人ハ忽ち笑顏を收めて眞面目になり、
『ナゼ…………あなたの御嫁さんはモー極ッて居ますのー。
『イヽヱ極ッちや居ませんが。
『夫じや西洋の扁屈人見た樣に生涯獨りで御暮しなさるのー。
『イヽヱソー云譯でもありませんが全躰男子の運命は婦人に支配される者でして少年の時は母に運命を支配され中年からは妻に運命を支配され生涯男子は婦人の勢力に抗抵する事は出來ませんから女房を持ッ程大切な者は有りますまい況して天下に何か事業でもなそふと思ふ者は猶更賢妻を得なければ到底其事を成就して其事を永續する事が出來ません秀吉拿破列翁『ミル』『フォーセット』其他世の中に大事業を爲た者は大底夫人內助の力に賴りまそ私なんぞは何にも出來ませんが今から百年の

運命は全く生涯の良友を定める時に決しるのだと思ふと此樣な恐ろしい事は有りません夫ですから私が此人なら生涯の運命を委しても好いと思ふ樣な人に出逢ふ迄は何年でも獨身で暮す積りですソー申しちや失禮ですがあなたなんぞはまだ御若いから好く少年客氣と云ふ者に誤まられない樣に御氣を付なさい婦人の運命も亦男子に支配される者ですから。

ト言はれて何と岩見潟荒波渡る舟ならで焦れ焦るゝ胸の內忍ぶとすれど中々に忍ぶに堪へぬ篠薄尾花を戀ふ露の身の墓無き心自から淺間しと見ッ憂しと見ッ思ひ返さんと思へども本是れ高尚なる尊敬と性理的の愛情が內外より凝結して一種の感情を起せしなれば其身にさへも解し難く悟り難き迄に打惱み遣る瀨汀さの繫り舟渡り求る折あらば心の底を打明けて言はんとすれど生中に言ふべき塲合は有りながら斯く迄戀ふ其人の淸き心と眞實の意見の言葉身に染みて取付く島も荒磯の波に碎くる秋の月心の影や寫すらん世故に長けし潔なれば佳人の心大方は推して知れる者からに可憐の者やと思へども世の艱難に人となり鍜へ錬へし心から少年客氣を愼みて思慮いと深く行末の悟り兼たる運命の前後に心沖の石人社知らね其身さへイッしか浮ぶ情の海漂ふ波の胸の內性理的の感情と道理的の抑制と思は二ッ身一ッに定め兼たる折もあれ此家の下婢と覺しき者唐紙を明けて聲を懸け、

『旦那樣御飯が出來ましたから御客樣と御一所に彼方へ入ッしやいましと御隱居樣がソーおッしやいました。

『ソーカ今直ぐに參りますと云ひナお春さん（佳人の名）少し御膳に參りましよふ。

ト烟草盆を片手に持て立上れば春子も漸く立上り出でんとせしが何やらにフト氣が付し樣子にて頻りに床の間の方を打見やれば潔もチョイと見返りて、

『其軸物は此間出來て來たんですがアノ聯句ハ私が好んで鐵舟さんに書て貰たんです御意に叶ひますか。

『ソーですかヱート消磨歳月書千卷傲睨乾坤酒一缸と是は慥か楊仲弘の句ですネーサッパリとして好い句ですが私には一字餘り好かん字が有ります。

『ハヽア酒と云字が相變らずの禁酒論じや恐れ入ますネー。

『ヲホヽ

時に正午の號砲『ドーン』

第二回

千早振る神田小川町の片邊りに白石潔と素札打たる門構の家ありけり此家の主人は本と中國邊の者と見へて文筆を以て業となし硯田墨池に逍遙しつゝ文壇に旗幟を立ると覺えて新著書の肩書には時々此人の名を載せたり此肩書ある著書は每に非常の聲價を博し世の喝采を獲るを見れば尋常ならぬ伎倆の程も想ひ知られて奥床し天然の性質か將た道德主義の慣習か仁義五常を旨として一人の母を大

切に朝夕孝養怠らず妹二人を慈み教育看護を加へたり渾家は餘り大勢ならず奴婢一人づゝを召使ひ外に米利堅種の洋犬一匹は陸家の獒か梁上の君子の敵と知られたり頃しも彌生の半なれば庭に植ゑたる一重櫻は垣の上に咲亂れて道行く人の足を停めまだ散り殘る梅が香は吹く春風にさそはれて人の袂を襲ひけり小氣麗に氣取りたる八疊ばかりの坐舖には母と潔の差向ひ母は啜みかけたる茶碗を下に置きながら、

『今も言た通りお前梅村さんに御金を出して貰ふのが厭なら公債や株劵を賣拂て夫とお前が洋行費として毎月貯蓄したお金を以て洋行したら宜かろふ跡ハ決して心配するに及びませんョ此宅と地面は自分の物だしお前の著へた本籍の賣上は毎月餘る程來るしお前が二三年位居ないからつても私達が困る樣な事は決して無いよ又萬一困る事が有たつて私も子供に教ゑ樣と思て習て置た洋服の裁縫が一人前には出來る樣になつたし女の子を集めて漢學だの茶の湯だの女禮式だのを教ゑても暮し位の事は充分取れるし夫にお玉やお雪も(潔の妹)お前の薫淘みで漢學も洋學も好く出來るといふのに夫れ〲獨立の出來る樣に相應な職業を覺ゑて居るから何樣な事が有ても決して困る氣支ハ無いから子私達の事を心配しないで今の内に洋行をしたら宜かろふ其樣なに色々と私や妹の事まで心配してお呉れのは誠に有難いが却て夫がお前の身の邪魔になる樣では依依私が苦勞だからお前の餘り年を取らない内に洋行でもして思ふ事遂げた方が宜かろふお前の親父さんか兄さんでも生てお出だつたらお前に斗り此樣に心配は懸けやしまいものを何を云ふよも親父さんは、

と言懸けしが少しく其の目を潤ませて、
『佐賀の戰爭で御戰死なんなさるし猛も（潔の亡兄）お前の樣に素直な子で私の親父さんの塾では一番だつた位何かゞ好く出來たから賴みに思て居たのに官員に出た斗りで鹿兒島の戰爭でつい殺されて仕舞たしお前は十三の年から東京へお出で家に居ないし私は何樣に心細かつたか知れないが幸ひ學校の女敎師に成つて娘だけは育てられたがお前には一文も學資も送らず夫もお前から本當の事を言ておよこしならちつトは何とか爲た者を自分が一通りでない艱難をして居ながら私に安心する樣な事ばかり手紙で書ておよこしだもんだからお前から迎が來て東京へ來るまでは些とも知らなかつたよ夫だのにお前が勉强中からお金を溜めて斯やつて私達を樂にしてお吳れのハ何より難有くつて私はお前の樣な子を持たのが本當に此上もない幸福せだと思て居升よ然し私達の幸福がお前の不幸に成てはいけないから今言た通りにして洋行をしな。
と眞實込めし母の言葉に感情深き潔が心は忽ち非常の感動を起せしが母の志の切なる程母を思ふの志も亦切になり家の金を使へと云ふ母の言葉は家の金を使ふまいと云ふ潔の決心をして益々深からしめしかば潔は忽ち顏を擧げ、
『イヽエ御親切な御志は難有ふ御さい升がソリヤ出來ませんあなたや妹の爲に著書の利益で買て置た公債や株劵ハ何樣な事が有ても手を付ない積りですから夫りやドーしても出來ません夫にあなた

も御年を召て被仰入るから遠くへ行くのさへ心配になる位ですから公債や株劵を賣て洋行仕様なんて決して〳〵…………

『ナーニ私は年を取て居ても此通り丈夫だから決して其樣な心配は入らないがソー迄お前が御言のならマア夫ハソーとしてアノ梅村さんはアノ通りな好い人だから何も御金を出して貰たツて決して跡でドーかコーかと面倒な事が起る氣支は無いが…………折角アヽ御信切に被仰るもんだから…………夫はマアお前の了簡次第だが…………夫にネアノ梅村さんが資本を出そーと御言のハネ實ハ、

ト言懸けて少し小聲になり、

『實はお前の志を援けると云斗りじやないよお前も察してお出かも知れないがアノお春さんをお前の所へよこしたいのが向の望なんだしネアノお春さんハアンナに優くツて怜悧で何が良く御出來だし夫に人が好くツて素直で何所ともなく可愛らしいから私はモー大好き…………丁度内のお玉とは姉妹見た樣にして御出だし…………お春さんの心もお玉から聞た事も有るがマアお前の氣はドーだか知らないが若しお前の氣に入るなら貰たらドーたへソーすれば西洋好きの梅村さんだから屹度…………宛にする譯じやないが…………お前の洋行費ハツマリ自分の御金見た樣な物だしネ然し夫はマアお前の心次第だが。

『お春さんも今時分珍敷い子ですから私も好きですけれど親元が餘り善過ぎ升から私の地位がモー少

し進だ後なら兎も角も今じゃまだ少し不釣合です夫に洋行の金を出させる爲に貰ふ樣では誠に卑劣で…………アンナ人ですから其樣な氣支は有升まいが若し夫が爲に始終女房に氣を措樣でハ第一金錢にも換へられない此一家內の幸福に傷が付升…………外に少し心當りの事が有り升からマア其方の樣子次第で。

ト咄す處へ表からドヤ〱入來る二人の妹何れも劣らぬ上等美人洋服揃の當世風學校より歸宅せしにや書籍の包を傍へに措き丁寧に兩手を突て、

『お母さん只今。兄さん只今。

姉なりと見えて十八九のスラリとした娘は潔に向ひ、

『アノ兄さんお春さんが此間は御馳走樣ッてソーしてネアノ御文章の後が出來ましたらドーゾ見せて頂戴ッて、

此梅村春子と聞へしは或る會社の社長にて梅村馨と呼びなせる財產高き紳商の秘藏の娘なりけるが父なる馨は過し頃潔の父と諸共に藤森先生の門下に在りて互に親しく交ハりしが潔の父が業成て國へ歸りし頃なりけん浦賀の港に現はれし黑き烟りと諸共に世は暗憺と曇り行き汽罐の水と沸き返る擾亂次第に發生して維新の變革終るまで志士論客は明け暮れに心を碎き身を碎き千辛万苦も國の爲め尽す誠は一なれど唱ふる說は二筋道尊王攘夷と開港佐幕潔の父は尊王家春子の父は開港家敵と味方と西し東し參商胡越

イッしかに音信不通となりけるが明治の御代となりし頃潔の父は出京して或る官省へ奉職し兩三年も勤むる内程無く縣官に轉任し九州地方へ赴く折柄神戸の港に計らずも梅村馨が外國より歐米漫遊の歸るさにフト邂逅したりしかば互に喜ぶ舊識相知琵琶一曲の聲無きも共に忘るゝ歸踏發程舊を語り今を告げ互に再會を約しツゝ西と東へ別れしが潔の父は其後に佐賀の亂に遭遇して遂に敢なく命を落し職務の犧牲となりし由梅村方へ知れければ馨はいとゞ驚きて惜しき人をト歎きしが歳月の經る儘に忘るゝ如く成にけり馨は元來剛毅勇敢の生れにて才學識見も高ければ一時は其身を官海の漂ふ波に浮べしかど幾程もなく急流を錢氏の勇退斷然と印綬を解て民間に工業會社を起せしが百折不撓の氣力を以て遂に其業を成就なし富も榮も名も位地も次第に高くなりければ最愛の娘春子をば天晴女子の龜鑑とも成るべき迄に教育し世の矇昧を醒さんと或る女學校へ通はせしに同じ學校の同級生に白石玉子と呼びなして年も氣量も學問も春子に等しき者ありて互に親敷成る儘に其身の上や家の事親同胞の事さへも語り合迄睦み合ひ常に往來をなしけるが此白石玉子社梅村馨が亡き友の忘形見と分りし故馨は早速春子を連れ白石方へ音信れて潔と母とに始めて逢ひ何呉となく世話を爲し其後も親敷交際ふて親戚の如くなりにけり本此潔の母なる者は儒者先生の娘にて和漢の文に眼を晒し才學高き賢女なれば潔を始め二女までも家庭の薰陶其道を得一家に聚ふ賢母と孝子奥床敷迄に睦ましければ娘の爲には好き師表と馨は春子を隙ある毎に此家にのみ遣したり斯る目出度人々が共に親敷交はる者から其交情の藹然たる愛して狎れず敬して遠けす讀書論

文の清興より春花秋月の閑遊迄互に追隨徴逐して恰も一家に異ならず中にも潔と春子の兩人は性理的の反對性質愛情的の陰陽電氣一日見ざれば三秋の思は同じ高尙の敬愛心を基礎として種々樣々に進化なす二人の胸の感情を潔の母と梅村の馨も大方知れる者から共に之を賛成し折を見合せ兩人の幸福多き行末を取極めさせんと思ひたり或る時馨は潔より洋行の望ありと聞き然らば資本を抛ちて其志を援けんと思ふ旨をバ告げたれど偏する迄に物堅き潔は容易に承引かず外に何をか計畫して其成行を待託びしが思ふ樣には墓取らず日を經る儘に戻かしく潔は心に思ふ樣、

『ア丶自由にならん人生意の如くならさる者十常に七八か羊姑の感慨も無理じやないアノ外國貿易論は己れが畢生の能力と數年の日子とを費して漸く出來上た者だから折が有たら自分で出版して置ふと思たのを惜いながら賣拂て洋行費に仕樣と思へば安い事を言やがるし其癖アレは大概精密な統計表で塡ッて居るし枚數も皆なで千四百枚程有るし字數も多しセメテ一枚三圓宛になれば宜いがソーなればエート三………ト三四の十二だから四千二百圓か夫に貯蓄の方が先月慥か二千三百五十…………何圓かになッたから兩方で六千五百五十何圓ト夫丈有りや一日拾圓と見ても一年で三千六百圓二年で七千二百圓マア一年半ハ充分周て來られるナア、ドーカ早く出來て吳れば宜いが然し先達て出版堂がソー言たッけが斯云物は小說なんぞと違て永く賣れる更りに一度に賣れないから余ッ程資本に裕餘の有る者でなくッちや懸れないッて夫れもソーだか富貴堂の方にや金も隨分有るし夫に

アノ亭主は中々氣前者だから…………事情も斬して置たからマサカドーカして呉れん事も有るまい若しやアノ方が出來なかッたらイッソ梅村の方…………イヤ〳〵ヨソー〳〵れ春さんを貰ふ積りでなけりや宜いがアノ子を貰ふにや今金を出させちや惡い夫が爲に宅中で嫁に遠慮する樣な事が有ッちや何にもならん…………イや然しお春さんはアヽ云子だから其樣な氣支もあるまい馨さんだッて其樣な事で威張る樣な人じやなし今金を出して貰たッて惡い事はない人を宛にして惡いのは其人を擇ぶと擇ばないのに在るッて先達てれ春さんがソー言たッけがアリヤ卓論だ中々アヽ云所なんぞはエライ感心だ…………イヤ惡い矢ッ張り惡い自分の腕から出した金でなくッちや矢ッ張り良くない若しや原稿が賣れなけりや…………仕方がない…………モー少し待ふ…………アヽ自由にならん

斯くて潔は其後も色々奔走盡力して遂に右の原稿を富貴堂と云へる書肆に一枚三圓宛の割合にて賣渡したれば大に喜び其由を母に告げ早速旅裝を整へて便船次第歐洲へ出發する事に取極めたるは五月中旬の事にして幸ひ其下旬に佛蘭西郵船の橫濱を出帆する者ありければ家事万端を母に托し母の保護を妹に任せ親戚朋友に暇を告げ中にも梅村一家にハ別けて後事を賴まんと思し事も折惡敷丁度其時馨には業務の際を見計ひ春子を始め一家を伴ひ熱海に入浴中なりければ不本意ながら書面にて細々と其由を言送り返事を俟ッの暇もなく出帆期日になりければ用意を調へ橫濱に赴き本船へ乘組みて同港を出帆せり。

環二大八洲五大洲一　匏瓠桑矢志始酬
吾盡二千杯萬杯醉一　送二君千里萬里遊一

是は之れ潔が漢學の師たる鹿門先生が送別會の席上にて賦せる什なりと云ふ。

第三回

神奈川縣武藏國久良岐郡横濱の港と聞えしは往る嘉永の六年に始めて開けし互市場にして三十余年の其内に漸次に開け改まり今は一個の小都會朝に歐洲の出舟を送り夕に米國の入舟を迎ふ洋館峨々として居留地に聳へ車馬絡繹として街衢織るが如し海岸に立ちて遠く見渡せば海水廣く湛へて雲浪相合し洋々たる相摸灣茫として際涯なく風伯怒を收めて淡靄遠く棚引き海門の觀音崎果して何れの所にか在る遠涯の寸碧遙に長天に連なるゝ房相の諸山なり無數の帆檣水上に林立するは萬國の船艦なり黑烟の餘沫を曳て遠く水雲髣髴の間に匿れ去るは明石の浦に人麻呂が歎きを遺し白帆の風を含んで遙に烟波万頃の中より顯はれ來るは品川の沖に密柑舟の喜を留む波止場を出る艀け舟、波止場に歸る小汽船右と左に行き違ひ波間を潜り走り行く中に一艘の艀舟は數人の舟子に艪を推させ波を蹴立て水を分け沖の方に繫りたる四本檣の大船を目懸て進む折柄ゝ沖の方より戻り來る是も一艘の艀舟此方を差て來しが間近くなる儘に互ひに除け合ふ艫と艫十間程も隔りて今摺違はんとせし時に向ふの艀の中よりして双眼鏡を手に持たる一人の佳人立上り此方を目懸て聲をかけ、

『梅村さアーん

此方の艀の中よりも一個の紳士立上り大聲を張上げて、

『お玉さんですかー、モウ間に合ひませんかー。
『エー、モウいけませんヨー。
紳士は舟子を見返りて、
『船頭モウ駄目だ故アノ船へ着けて元の海岸へ戻せ。
此時此方の舟の中よりも一個の佳人、紳士の側に立現はれて向の舟に聲をかけ、
『お玉さアーん、モウ何うしてもいけないンですかー。
ト再問する此方の艀は向ふの舟の側近く漕寄るに向ふの舟よりは以前の佳人。
『惜い所でしたネー、モウ少しお早いと…………
『お玉さんモウお舟は出たンですか。
『今出る所、アレ御覽なさい笛が鳴りませう、ホラ動くではありませんか、お春さん此双眼鏡を貸て上げますから御覽なさいナ。
ト双眼鏡を差出せば舟子は之を受取りて佳人に渡す佳人は急ぎ眼に當て、
『是りやア些とも見えやしませんは。
『アラ夫やア捨て出さなくッちやア見えません。
『オヤ

ト言ひながら捨て出し早速に眼に押當て、

『アヽ見ゑます…………彼所に立て居るのハ…………

ト思はずも延上り舟の動ぎに蹌々と蹶けつゝ倒れんとしければ紳士は之を抱き止め、

『アヽ危ない落たら何する立なくツても見ゑるは。

ト言へど佳人は夢中にて猶も頻りに頸を延し巾領振山が此にも有らば驅も上らん風情にて、

『お玉さん、潔さんが見ゑますヨ、アレアノ背の高いのが屹度ソー…………アヽラ此方を向た…………

…アライヤナ…………西洋人だヨ、オホ…………

兎角する程に本船は愈よ遠く離れ行き二艘の艀は海岸に着ければ梅村親子白石親子其他五六人の人々も共に舟宿の二階に上て休息せり梅村馨は潔が母にうち向ひ、

『お鶴さん(潔が母の名)今日はお目出たうございます私しも直ぐに參る筈でしたが潔さんの御手紙を戴いた時は丁度熱海に居りませんで修禪寺へ參つて居りまして昨日遲くなッて熱海へ歸りまして始めて潔さんの御手紙を拜見致しましたから家內や外の者は宿屋へ殘してお春ばかりを連て昨晚直と熱海を出ましたが何分遲う御ざいましたから小田原へ一泊しまして今朝暗い內に發足して綱ッ引の車で急ぎましたがツイ間に合ませんで誠に遺憾でした。

春子は傍より口を出し、

『夫だから私しが昨晩夜通しに參りませうと申したんですは、夫ゞ夕アノ位宿屋へさう言て置たのに今朝早く起て呉ないもんですから遲くなッたんですョ今朝私が起た時には宿屋の者ハまだ誰れも起て居ません／…………モウ彼樣な宿屋なんぞへ泊るものじやアない。

馨は少し笑ひながら、

『夫だッてお前の起たのはまだ二時前ぢやないか宿屋の者は丁度寢た斗りだ然しアノ時分から仕度を爲りやア間に合たかも知れない。

潔が母は、夫々へ挨拶し色々と談話の最中春子は双眼鏡を以て緣側へ出で欄干に憑り懸りて頻りと海面を眺めて居れば玉子も來りて側に寄り、

『お春さんまだ見ゑますかね。

『イヽエモウ烟ばかり…………

ト言ッて歎息し打凋てゐ見けるに玉子は之を慰め、

『お春さん誠に殘念でしたチーモウ少しの所でしたがチー兄も貴女に御目に懸れないのを大層殘念がッて居りましてチ呉々も貴女に宜しくッて爾う言置て參りましたョアノ彼方から屹度手紙を貴女にさし上げますッて…………

春子は少し笑顏を粧ひ、

『オヤ左様………本當に………屹度御手紙を下さいますかネー而して何頃御歸りなさるノ。
『一年半位は懸る積りで參りました。
『一年半……長い事ネー早く一年半立てば宜い………アノ潔さんは西洋人が御好でしたネー、若しも西洋の夫人でも御連なすツて御歸りなさりやアゑませんかネー。
玉子は春子の顏を眺めて笑ひながら、
『ナアニ夫りやア大丈夫ですョ其樣な事は決して有りません私しが受合ます夫よりやア貴女が兄の歸る時分にやア屹度ミツセスで被爲入るだらうツて兄が心配して居ましたョ。
ト聽て春子は大きく淸き眼を丸くして、
『アラマア潔さんは私を其樣な者だと思召して被爲入るんですかネー私こそ其樣な事は決してモウ……
……夫りやアモウ屹度有りません受合ます。
『デモネ兄が貴女の所へ上る手紙を書きました時にネ私も側に居ましたんですョ爾すると兄が己も洋行して歸ると杜樊川になるかも知れないツて言ひますからネ、ナゼだと申しましたら綠葉陰を爲して子枝ゑ滿るだらうツて申しましたからネ私は決して其樣な氣支はないツて左樣申しましたョ。
『夫りやアモウ末の松山波が越さうが其樣な事は………
ト噺す處へ馨も坐舖より出で來れバ此談話は中止となり一同の人々も暫時此ゑて休息の上皆東京へと歸

りたり。

扨て其翌日春子の母も熱海より子供を連れて歸り來り梅村家と白石家は其後猶更親み合ひ互ひに往來なしけるが快活なる氣象を持し春子は此時より何となく浮立たぬ樣子となり常に憂色あるを見て親友なる玉子は之を慰め互ひに學業を勵みし故其年の夏なりけん兩女は共に女學校を卒業せり、海外へ旅立し潔よりは其後所々の港、諸國の市府等より便船のある每に必ず細書を吾家と梅村方とに送りしかば兩家の者は皆共に其消息を聞くをもて此上も無き樂みとせり中にも春子は潔より時々信切なる手紙を受取又色々の贈物をも貰ひたれば飛立つばかりに喜びて桂林の枝と珍重し昆山の玉と愛翫し玉子と共に明け暮れに其噂のみなし續けたりき嚮に梅村一家の人々が熱海に滯在なせし時憶なくも或る貴公子と親みしが此貴公子は其頃の權力高き一貴紳の最愛の令息にして過る頃より歐洲に永年留學なし後業の成否ハ知る由あらねど近頃漸く歸朝して暫く勞を休めんが爲め熱海へは來遊なりたるなり馨は元來此貴公子の父君なりける一貴紳と業務上の關係ありければ時々貴公子を客舍へ招きて饗應なせしが緣となり歸京の後も折々は互ひに訪問なしけるに此貴公子は疾くよりも春子が無双の艶色と又類ひ無き才學に敬慕愛戀の心を生じ如何もして之を娶り共に運命を分たんものをと或る時人を以て馨に談ぜしに如才なき馨の事なれば婚嫁の事は當人の心次第に委するとて寄らず障らず答へたりしかば此に於て貴公子は然らば春子に取入て其歡心を得んものをと明け暮れ梅村が方に音信れて種々樣々の手段を盡し全身の能力と許多の資本を

傾けて只管春子の注意を喚起し遂には之が愛情を博せんとのみ思ひける才學高き春子なれども年齡未だ若ければ世の經驗も多からず然るが故に此貴公子が淺見皮相の外形視察歐米諸國の實歷噺しも初めの程はいと面白く且又最愛の白石潔が當時外國に在るがゆゑに春子は殊更に注意して歐米の噺を聽き居たりしが少しく内部に立入りて高尙の事を尋ぬれば忽ち答に差支へ强て附會の說を吐き殆んど人に噴飯を催さしむる事多かりければ果は春子も呆れ果て斯の如き人々が百年歐米に在らんよりハ寧ろ親愛なる潔君が一回の周遊に如かざるべしと感じたり然れば初めは貴公子を尊敬せしも其後は追々嫌忌の念を萠し力めて之を避けたりしが自惚れ深き貴公子は却つて之を誤解して獨り心に想ふやう、

『モー締たぞお春さんも追々思ふ壺へ嵌ッて來たぞ此頃は大分樣子が變つて來たから可笑い初めは己れの噺しを注意して喜で聞て居たが追々敬愛の心が起ッて來たと見えて此頃ぢやア愛戀と云ふ感情が萠して來たのだらうイヤに氣取り出して無闇に遠慮しだしたのは有りやア羞かしいと云ふ氣が起ッたに違ひないさう來るのは順序だ道理である初めの内は彼的の眼光が眞直に己れの顏へ注射したが此頃ハ少し斜に成ッて誂うに己れの目の中へ飛込むテ、モウ大丈夫だ言出して見樣か知らん然し羞かしがッて直ぐ返事は爲まいなア何と言だらう返事に困るだらうなア返事に困らしちやア氣の毒だ何か言出す手懸りが欲しいなア夫にやア何か遣るんだな、何を遣らう指環か………イヤ〳〵指環は後の咄だ………愈よ契約といふ時に兩替せるんだ………今は唯手懸りを製へるんだから………エ

ート………『アリボム』が宜い『アリボム』が………上等の『アリボム』を注文して開巻の第一枚を特別に奇麗に仕立てさして其處の所へ己れの『デイバー』(米國有名の寫眞師)で寫した『カビテット』を一枚挿んで遣らう爾すれば夫から咄が出ると………〆た〱………イヤ此方で挿んで遣ッちやア面白くない別にして遣る方が宜い爾すりやア屹度向で挿んで置から………跡で向へ往た時に己れが何の氣なしに見る樣な振りをしてチヨイと明けて見ると己れの寫眞がある其所で己れが『オヤ〱私の寫眞なんぞをナゼ此樣ナ奇麗な所へ御挿みなすッたのッ』と言ふと向ぢやア何と言だらう彼的は學問が有るから詩だの歌だの解らない古事なんぞでイヤに謎見た樣な事を言はれると困るなア二ッもじ牛の角もじ直なもじ位な事なら知て居るけれど………此間も巳れが前に遣ッた寫眞の裏へ大きく鳳と云字が書て有たッけが那りやア何云ふ譯だらう屹度己れを鳳凰に見立てゝ祝ッて呉たんだナ、モウ爾なッて來たから〆た物だて。

ト心も此に一決し早速大金を抛ちて上等の寫眞挿みを製へさせ之に自分の寫眞を添へて春子の方へ贈りしが四五日を經て早速に梅村方へ到りしに春子は折惡敷不在にて其母親が出で迎へ一應の挨拶終りて後早速彼の贈物の禮を言ひ、

『先達てはマアれ春に結構な物を下さいまして難有うございますホンニ御見事な物で御ざいますネー那も大喜びで居ります。

『イヽエ何致しましてホンニ詰らない物で何に外から貰ひましたから……定めてお春さんが色々の寫眞を御挿みに成りましたでせう子。

『ハイ何だか色々挿んで居りましたッけ此に御ざいますから御覧なさい。

ト座舗の床の間に二ッ三ッ置てありし寫眞挿を一度に貴公子の前に差出せば茶を飲みかけし貴公子は急に茶碗を下に措き外の寫眞挿には目も懸けず自分が贈りし『アリボム』を手に執りながら心臓の鼓動俄に劇しくなりて手先のブル／＼と振へるにも氣が付かず心で急いで手で緩りと留めを外して之を披き先づ開巻第一枚を見れば豈料らんや自分の寫眞にはあらで洋服着たる一個の美人の寫眞此に挿みあり其先を段々と明けて見れば自分の寫眞は五六枚目に入れてありたり少し心に失望したれど又思ひ直して是も羞かしき故に春子が態と自分の寫眞を初めに出して置かざりしならんと推測し一枚／＼に跡を見終りて初めて先刻の茶碗を手に取り少しづヽ茶を歠りながらフト傍を見るに小形なれども華美を盡したる外國製の寫眞挿ありければ左の手で茶碗を支へ右の手にてチョイと之を披ひて見るに此には開巻第一枚に嚴然たる一個の美丈夫の寫眞あり其顔貌の何となく先に自分の地位を代理して居たる美人に似たる故何者ならんと少し頸を下けて覗らんとする時春子の母は之を見て、

『アノ其寫眞入は外國へ參ッて居ります者から贈ッて呉れましたので御ざいますヨ其所に寫て居りますのが其男で其寫寫も寫眞入も慥か佛蘭西のだとか申しましたッけ。

『ハア左様ですか何と被成る御方です。

『ハイ夫は白石潔と申します。

『ハヽア夫ぢやア貴所方が熱海に御出の時分修禪寺から御歸りになると外國へ立つ人があるからッて直く馨さんとお春さんが晩方から御立になッたのは其御方の御出立なんでしたか。

『ハイ左様ですアノ時は貴所に失禮斗り致しました。

ト言れて少し氣に懸るは春子の様子の其時に怪しき事のありたりと憶ひ出せば何となく猜疑の念の生し來て種々の疑問や想像が腦裡を往來なしける折春子の母は何事か所用ありとてチョイと其座を立ければ是れ幸ひと貴公子は密と右の寫眞を抽き出し裏を返へして好く見れは筆勢見事な英字にて左の數字を記してあり。

Present to my Seur Miss Haru Umemura.

Yours respeltfully Kiyoshi Shiraishi.

August 21 st. 1886. Faris French.

其下の所には春子の筆にて、

誰謂筑山不㆑可㆑登　不㆑及君恩高百層

誰謂遷水不㆑可㆑測　不㆑及妾心深千尺

ト倘不愧齋の句を認めありければ之を見るや否や貴公子は心臓忽ち大皷動を起し血液は上騰して頭部を刺衝し耳翼の邊は己に充血の色を呈せるが春子の母の出で來りし樣子なれば密かに又此寫眞を舊の所へ插み入れて素知らぬ顔にて二ッ三ッ談話を爲し早速暇を告けて自宅に歸りたり。

貴公子が自邸へ歸りし所へ年はまだ若けれど脊髓骨が余程曲ッて身体は弓狀を呈し頸椎骨の邊にて又一段落を爲したる脊の矮い一人の御男機嫌伺として尋ね來りしが貴公子が異常の顔色あるを見て貴公子の苦樂は吾身の苦樂なり貴公子一寸の憂あれば吾身一尺の憂を感するといふ忠義無類の男なれば忽ち眉を顰め、

『御前何うか遊ばしましたか大分御顔の御色が御惡い御樣子で御坐います。

『何うもせんがハヽ腹が立て溜らん。

『へイ夫は又何う云ふ次第で全体何が御氣に障りましてエへヽー。

『アノお、お春の事ヨ。

『へヽーアノお春さんの事で夫は怪しかりません夫ぢやア先達て手前が周旋致して製へましたアノ寫眞ブックを受取らないとか何とか申ましたんですかー。

『イヤ爾ぢやアないが貴樣アノ白石潔とか云ふ奴を知ッとるか。

『へイ會ました事は御ざいませんが存じては居ります此頃ハ慥か洋行致して居りませう、

『イヤサ夫は知ッとるが其奴とお春の關係を知んか。
『ヘイお春さんとの關係と申して別に何う云ふ事も御ざいますまいが………勿論折々は梅村家へ出入を致した樣では御ざいますが………シテ又夫が何か御前の御邪魔にでも………
『大成りョ斯云ふ譯だ。
ト有りし次第を物語れば脊髓骨の曲ッた男は、
『ヘー夫は怪しかりません如何にも怪しからん爾いふ譯なら私も一度御前の御依賴を受けてお春さんの事を梅村に懸合た事が御ざいますからモウ一度今度は御前の御名望と御威權とを笠に着て嚴敷表向から懸合まして屹度………
『イヤ〳〵夫いいかん今其樣な事をやッちやアいかん夫よりやア斯云ふ奇策を行ふて夫から………
ト何やら頻りに小聲で耳語げば彼の男は全身の官能を總神經に聚めながら頸を電氣作用風に上下して、
『ヘーナール程………ヘヽー〳〵ナヽール程…………是は妙策是は實に妙策………ナール程ヘヽー………爾すれバ自然と此方へナール程……夫りやモウ其内に………追々と、ナール程……母親が此方の者だから……ヘヽー確かで……ナール程如何にも妙策……孔明張良も三……ヘヽー夫れはモウ手前が實行致す上は決して………イエモウ他へ漏す樣な事は誓て………其變り御前先達で願ひましたアノ事は………是非何うか………

『夫りやア屹度叶へて遣るョ然し此事は極内々だぞ。

第四回

粤に復た白石潔は過ぎつる頃に横濱の港を出帆なしてより五月の天の日和好く追手の風に送られて海路遥かに乗り出す相摸の海や伊豆の沖駿遠參の灘までもいつしか超ゆる輪船の轉る車の足疾く富士の高根を後に見て和歌の浦江や那智の瀧紀路の沖も夢の間に通ふ千鳥の淡路島播磨潟をも打過て此は世界に名も高き四國の瀬戸の風景は造化の神の瑤の池絶景勝地立連りて好奇の心ある者は舟の疾きを恨むらん遠き異郷に旅立の心筑紫の沖といふ玄海灘に差かゝりまだ行末は長崎の港に暫し立寄れば此ぞ故山の西の端我日本の陸地をも愈々離るゝ事なれば盡きぬ名殘は惜しけれど行途は遠き歐米の文化の花を採り得て價ある實を家土産に再び故山へ歸る日の憶ひやられて勇ましく汽笛の聲と諸共に船は直ちに大海の万里の波を推破り長風千里を帆に受けて西に向ひて進み行く左手の方は太平洋、右手なる方は亞細亞洲中一の開港塲上海の港に船を寄せ暫し碇泊なして後黄浦を出れば支那海の東はヒリッピン東印度、島又島の島續き西は安南暹羅の陸、山又山の海の岸炎熱金をも鑠すべき新嘉坡に立寄りて巫來由半島打廻りマラッカ峡も過行けば此は名に負ふ印度洋黒雲白雨折々に船の邊りへ襲ひ來てまだ慣れやらぬ浪枕旅寢の夢をや覺すらん風景異なる熱帶の錫蘭島や亞剌比亞の海もイッしか紅海と進む船路の寂寥もスヱスの地峡打越ゑて地中海に入りぬれば風物此に一變し東洋人の眼には珍奇の物のみ多ければ彼方此方に心を留

め目を慰むる程もなく日數積りて佛蘭西の馬塞里港にぞ着にける。

哲士は坐ながらにして千里を知る學問上の實歷者白石潔は豫てより斯るべしとは期しながら初めて歐洲の地に上陸なし高加索人種が製作したる人爲の地球表面を實地に目擊せし時は聞きしに優る宏壯偉大、人爲勢力の進步の程思ひ知られて膽に銘し思はず故山の有樣を追想なして流汗は雨の腋下を濕したり抑〻人の觀察の單純正當なるものは第一着の感覺にて久しく一所に留まれば耳目は外物に慣れ初めて芝蘭の室や鮑魚の市自ら醜美を忘るゝ者多し然れば初めて歐米の實地を目擊せし時に腦裡に起す感覺と久しく歐米に滯在して始めて日本に歸りし折先づ第一に惹起す一種微妙の感覺こそ單純正當のものなれ其後白石潔には都の中の都とて人爲現象の粹を拔きし佛蘭西國の巴里府や商業世界の中心にて人爲現象の大を聚めし英吉利國の倫敦府或ひは伯林ブリユッセル、アムステルダーム、コーペンハーゲン東に廻りて魯西亞なるペーテルブルク、モスコー府、土耳古に渡りてコンスタンチノツポル過ぎし昔ぞ忍ばるゝ希臘のアゼン、スパルタヤ羅馬の府、伊太利の今ハ日の出の有樣より其他所々の國々まで遍ねく遊歷なして後彼のゼノアの住人が初めて渡りし太洋を飛脚船よて打渡り新世界の地に上陸して空に鐵道敷ける府や彼のジエフエルソンが筆の跡四方に傳播せし府より自由の泰斗と仰がるゝ美名の今に殘る府まで所〻を遊覽なしけるは潔が本國を立出でし其翌年の春なりき。

潔は元來黽勉なる人なれば此等の事は逐一に本國なる我家と梅村方へ報道し米國に着してより所〻を遊

覽なして後南亞米利加に赴かんと紐育府より本國へ左の一書を送りたり。

(前畧)小生ハ最早歐米諸國屈指の地方は一ト通り遊覽相濟まし申候此上は兩三日內に中央亞米利加及南亞米利加に向て出發致す心得なり其次第は元來我日本國の爲めに將來の大關係を有する地方と申すは本日隆盛を極め居る遠隔なる歐羅巴大陸に非ずして他日我邦の進步すると同時に漸次隆盛の域に赴くべき大平洋海岸の地方なりと存候即ち南北亞米利加の西部及濠斯太利亞、亞細亞の兩大陸此等の地方は我邦將來の好隣にして此地方の盛衰は我邦の爲めに大關係を有する事恰かも近縣地方の消長が東京市府に大影響を與るが如く且此等の地方は我邦の前途と共に將來の隆盛を期する者にして其現時の有樣進步の程度將來の見込等は我邦人の最も注意を要する事なるに卑屈懶怠なる我邦人ハ却て之を度外視せり彼の有名なるパナマ地峽開鑿工事の如きハ我邦の爲めに非常の大關係を有するものなるに我邦人は毫も之に注意するの意なく恬然として其身に及ぼすべき利害休戚を忘るるが如し是れ小生が最も深く慨歎する所にして今回の漫遊を幸に自ら進んで先つパナマに趣き堀割事業の詳細を視察し夫より南亞米利加を巡周してカリフオルニヤに歸り目今日の出の勢ある此地方に暫らく足を停め其後都合に依れば直に濠斯太利亞に渡船せんと決心致候濠洲より直に好便を求めて御地へ歸朝仕るや或は再び米國へ歸り來りて其後歸朝致すやは未だ確定仕らず先方へ到着の上其都合を取極め該地より御報道可申上候今後共當方よりの通信の儀は今迄通り怠らず到着の地

より郵送仕るべくは候へ共何分僻陬僻壤の事なれば途中の都合等にて少々は延滞致すやも計られず此段豫め御含被下度又御地よりの華翰はカリフォルニャに到着の後一度に拜誦可仕候へば何卒今後は桑港領事館へ宛御届置の程希度小生も今より六ヶ月の後位には必ず南方周遊を終て桑港に赴くべき心組に御座候《下略》

此書簡こそ本國なる白石梅村両家の者が潔より受取りたる最後の音信にして其後は絕へて何等の消息なかりけれ初めの内は來書中に潔の注意も有る事なれば差程懸念もせざりしが二ヶ月三ヶ月を經過するも全く音信なかりしかば此に至つて大に怪み共に心を痛めける其後又た數十日を過ごせしかども愈々全く鴻魚の便の絕へたれば両家の者は益々驚き此は只事に非ざるべしと頭を疚し相談しけるが梅村馨が勸めに任せ先づ合衆國に設けある我邦の公使館或は領事館其他馨が業務上の關係ある諸商業知人朋友等へ潔が行方を問合せたるに皆一樣の答へにて其の紐育出發の後は行方を知る者なかりける左れば白石の家にては潔一人を柱とも杖とも賴む母親と兄思ひなる妹や交情厚き梅村の一家の者も諸共に行方知れざる潔が爲めに明暮れ心痛なしけるが中にも春子は一層の苦心に堪へぬ切なさを語らふ人は親友の白石玉子のみなりければ共に打寄り色々と潔の身をば案じける或る時春子は玉子に向ひて、

『アノー潔さんから一番仕舞の御手紙が來てからモウ何日程に成りませうネー。

『モウ丁度六ヶ月ばかりに成りませう。

『眞個に何う爲ッたんでせうネー氣候の變る所へ被爲入ッたんですからモシヤ御病氣にても御成りなさりやしませんかネー。

『兄は身体は極く丈夫ですし夫に自分でも身体が惡くなるのは其人の耻だッて始終氣を付けて養生しますから病氣なんぞ起る氣支ひは有りませんが開けない所へ參ッたんですから何か危險な事にても出逢て生命ても…………

『イヽエヽ那般な御用心深い御方ですから其樣は事は有りますまいが何にしても御樣子の分らないのには一番困りますネー何樣な所に被爲入るか知れませんが搜にでも往て見たう御ざいますは昔玄の人い翅無き身を如何せんなんぞと能く言ひましたが羽なんぞは無くッても切てモウ少し世の中が開けて居て風船でゝも方々へ飛で歩けると宜ふ御坐ますのにネー。

玉子は少し眞面目になり思切ッたる樣子にて、

『羽や風船なんぞは今間に合や爲ませんから私は御金が欲しいと思いますヨお金さへ有りやア貴女にでも搜しに參られますは。

『お金…………

『エー、此節はお金さへ有りやア女だッて何所へでも往くに往けない事は有りませんから充分のお金が有りやア私は先づ亞米利加の紐育へ行て兄が南亞米利加へ立ました樣子を調べて其樣子次第で夫

から何所へでも參ッて搜す積りですが…………何を言ふにも先に立つものはお金でして…………尤も宅には少々は有りますけれど彼れは兄が母の爲めに備へて置きましたんですから兄の行方が愈々分らない時には猶更入用なものですから手を付る譯には參りませんし縱令夫が出來るにしたッて迚も足りずト言て斯やッてポカンとして居たッて兄の行方が分る者じやアなし私はモウ自烈たくッて…………夫に母も氣丈者ですから口へは出しませんが腹の中では何樣なに心配を致して居るか知れやしません私は何か身体に障ッて呉れなければ宜いがと夫もまた案じられて堪りませんヨ。

春子ハ何か思ふ由のありけん暫く無言にて居たりしが漸く口を開き、

『お玉さん貴女充分のお金が出來さへすれば屹度搜しに御出なさいますか、爾して貴女が御出なさらうと御思ひなすつたつて貴女の御母さんが御承知はなさいますまい。

『イヽヱ母は私よりは大事な兄の事ですから私が搜しに參ると申せば屹度承知致しますヨ先達ても子アノ『カピタン、グランド』の小說を讀で母に聽かせましたら子西洋の人は感心なものだ十五六の娘や十三四の子供が貴族の援けが有るとは言ながら父を尋ぬる爲に二年も三年も方々ゑ艱難辛苦して到當しまひに其父を尋ね出すなんッて實に感心な者だッて子爾申して居りましたが子夫から暫く何か考へて其內チョイと脇を向て鼻をかみました樣子ハ子口でこそ何とも申しませんが何でも屹度又兄の事を憶ひ出して兄もグランドの樣な目に逢て無人島にでも居るんじやア無いかと思た樣な樣子

でしたヨ私も其時から其様な氣が起りましたものですから何かして用意が充分出來るなら私の參る事は決して止める氣支は有りませんヨ又若し止めましたらグランドの噺をして是非承知させます は。

『夫じやアお玉さんお金は親父に爾う申て出して貰ひませうし私も貴女と御一所に搜しに參りませう

『お金を………アお金の所を爾う願はれりやア誠に難有う御ざんすが貴女が御自分で私と一所に危ない所へ御出懸なさるにやア及びますまい私は夫りやア御一所に參れりやア何より結搆ですけれども何も貴女が兄の兄弟と云ふ譯じやアなし又…………

ト言ひ懸るを春子は押戻す如く遮りて非常に眞面目なる顏色になり、

『お玉さん私ハ貴女と斯やツて實の兄弟を見る樣にして居ますのに貴女は私の心が御解りになりませんかネー貴女も餘りじや有ませんかソリやア私の樣な者ですから何セ…………

玉子は少し笑ひながら、

『オツト、モウ御免なさいヨ今のはホンの串談ですヨソーお怒ンなすツちやアいけませんヨ夫りやア貴女の御心も善く知て居ますし兄の心も知て居ますヨ今のはチヨイと貴女の……甚だ濟みませんけれど貴女のお氣を引て見たんですのサ。

春子も漸く笑顏になり、

『其様なに私の心を知て御出なら何も氣なんぞを引て見なくッても宜いじやアありませんか

『ハイ〳〵何卒御勘辨なすッて下さいましモウ決して申しませんからオホヽヽ

此に於て兩女は種々に談合なし遂に其相談も纏りしかば早速春子より先づ此事を馨に談せしに義俠に富める馨なれは資金を出す事は承知せしかども兩女を手放して南米無人の境に遣るに忍びす別に適當の人物を擇んで之に其事を托せんと言へども兩女は中々に承引せず是非共自ら實行せんとの決心いとも堅ければ後には馨も其の勇敢なる決心に勵まされて竟に之れに賛成なし直ぐ此事を馨より玉子の母へ談せしに是は大に喜びて忽ち同意なしけれども唯春子の實母のみ娘の出發を拒みける元來春子の才德は父なる馨の遺傳にて母は余り賢婦に非ず尋常一樣の女なれハ初めの内は春子をば白石方に嫁に遣らんと思ひ居たりしも潔が洋行せし後に彼の貴公子の入込みて金力を以て色々と氣に入る樣になしければ女心の淺墓にも此の計策に載せられて彼の貴公子を敬愛し復た無き者と思ひけり斯くて此敬愛の心は次第に增長し遂には春子を貴公子に配偶させなば双方の幸福此上なかるべしと思ふまでに進みし折柄潔の行方の知れざるより愈々其心の深くあり且貴公子にも迫られて或る時夫に之を勸め又娘にも言聞かせしが二人の同意なさゞる故暫く口を緘みける斯る關係も有る事なれば春子が此度の企てをば熱心に推止め種々の口實を並べ立てゝ承引く氣色更になし馨も春子も困じ果て再び談合を費しけるが據なき儘に暫く母の意に從ひて其身の出發を思ひ止り唯資金のみを抛ちて獨り玉子を米國へ遣す事に決したり斯て馨と春子とは

玉子の爲めに盡力なし用意万端整ふ折柄馨の知れる人にして米國人夫婦の者が此度歸國なすといへり誠に得難き幸なれば玉子を此者に委托なし便船を待て米國へ留學する旨を披露して覺束なくも横濱を出達せしめたり。

玉子か横濱を出帆の日馨ハ春子を伴ひて見送りの爲めに同港へ赴きしが其日夜に入りて馨のみ歸宅せしかば春子の母は夫に向ひ、

『貴夫お春は御一所じやア有りませんでしたか。

『お春は亞米利加へ立ましたヨ。

『ヱ……………ナニ夫はお玉さんじやア有りませんかお春は……

『お春もお玉さんと一所に立ましたヨ、斯ばかり言ては分るまいが實はお前があんまり止めなさるし親類の者も兎や角言ふから一時ハ止めにした積りにお前達には咄して置たが何うせアノ子の勢ひじやア今遣らなけりやア逃げ出してヾも行き兼ないからお前に咄すと又大噪ぎだからお前達には内証でスッカリお玉さんの方で仕度をさして今日一所に立せましたヨ、爾言ふとお前が又お怒りだたらうが子跡で逃出したの何かッて騒いだり世間で惡く言はれたりするよりは今立派に外國へ留學に往た積りにして遣た方が好いハナ夫にモウ船へ乘て出て仕舞たから今更何と言たッて仕方がないアノ子もお前に呉々も宜敷ッと爾う言ましたヨ。

ト言はれて春子の母親は一ト方ならず仰天なし色々怨言を並べたれど最早過ぎし事にて仕方がなく其儘泣寢入となりにける春子が不意の出發に驚きたるは母のみならず他にも一人其後に此事を聞て落膽なし失望の余り暫しが程は殆んど喪心なしける者ありしとなん。

第五回

『お玉さん此位調べても確りした事が分らないんですから仕樣が有りませんネー愈々親父の教へて呉れた通り一應は新聞へ廣告をして其樣子で南亞米利加へ出懸る事にしませう。

『左樣サネー……ですが此位彼方此方へ手を廻して調るんですから些トは何とか手懸り位分りさうなもんですがネーモウ此紐育へ着てから一月半にも成りますョ此所の領事館でアノ位調べて貰ッても分らずワシントンの公使館でもアノ通り盡力してくだすッたのに矢ッ張り知れず○○會社や○○商會の方なんぞへ馨さんの御顔が有りますから猶更骨を折て呉れるのにネー、斯うマア分らないと云ふのも不思議ですネー内のジョールジさん(兩女を伴ひし米國人)からパナマの堀割會社へ問合せに遣ッた手紙まだ返事が來はせんかネー。

『爾うですネーアノ返事が來れば大抵分るだらうと思ひますネー夫にしても何うせ潔さんの手懸りは南亞米利加の方に有るには違ひ有りませんから分れば猶更直ぐに彼地へ行かなくッちやなりませんが夫には彼地の地理を良く知て居なくッては不都合ですネー、ジョールジさんに賴で中央亞米利加

や南亞米利加の詳しい地圖を買て貰ひませう而して彼地は西班牙語が餘計通用するさうですから是も少は覺えて置きたいもんですネー良教師を聘んで今の内少えづゝでも習ツて置うでは有ませんか夫から昨日ブロードウエイ、ストリート(町名)の鉄砲屋に女持の好ピストルが見えましたがアレも是から旅へ出には入ますから二ツ御揃で買ませう佛蘭西邊の女なんぞは平常でも一ツ宛は持て居るさうですヨ。

『お春さん貴女ピストルを打つ事を御存じですか。

『イヽエまだ扱ツた事は有りませんが夫りやア直ぐに覺えられますさアネ南亞米利加の野原や山の中へでも往たら無闇と打て見りやア直に慣れませうと思ひますは、夫はさうと此間宅から届た手紙の文面では私達が桑港から出した手紙はまだ宅へ届かないと見えますネー大變に後れるぢやア有りませんか。

『爾うですネー屹度アノ時郵便函へ入れたのが遲かツたからアノ日の船に間に合なかツたのかも知れませんネー。

『其樣な事でせうネー夫なら此次の船で往ましたらうマア宅の方は何うでも宜う御ざんすが潔さんの方へ一日も早く手懸りを見付たいもんですネー早速ジヨールジさんに咄して新聞へ懸賞廣告を出して貰ひませふ。

『お春さん廣告を出すのはパナマの方からでも返事が來て愈よ分らないと云ふ時になさいナ、ソー無闇とあなたにお金斗り使はしちや御氣の毒ですし夫に私は今此は廣告するよりや南亞米利加へ往てから彼地で廣告した方が宜かろーと思ひ升は。

『ナーニ此方は此方で廣告をして見て委しい事が分らなけりや彼地へ往て又彼地で廣告しまサー子金なんぞは幾ら使ッたッて搆やアしません私は命まで使て仕舞てもヨウ御ざんすワ。

『ヲホヽ命まで使て仕舞て跡で兄が出て來ると困り升子ー。

『ナーニ其時にや命の代りをヽヽヽと云ふ譯にもいきません子ーソー成たら義孝じやないが『君が爲め惜からざりし命さへ。

『長くもがなと御思ひでせふヽヽヽドーカ早く兄に會てあなたのソー云ふ御心を知らしたいもんですチー。

兩女は米國へ着してより彼の米國人夫婦と共に紐育に來り其夫婦が下宿せし家へ共に下宿せしが明暮れ潔の行方をのみ尋ねたれど一向手懸りの知れざる故愈々賞金を懸けて新聞紙へ廣告せんと相談も此に一決し遂にジョールジ氏に托して米國の重なる諸新聞紙の特別欄内に左の廣告を出したり。

千八百八十七年の春頃歐洲より紐育へ來遊し夫より中央亞米利加及南亞米利加へ向て出發したる日本人白石潔の行方に付第一番に精密なる報道を爲したる者には當方に於て取調の上其事實の確實なるを

證したる時は報酬として金千弗贈與致候也

紐育府ストックトンストリート第二百十三號にて

白　石　玉　梅　村　春

此廣告を爲したる二日目に兩女は左の豫告書を受取りたり。

拜啓白石潔君の事に付詳細の儀を御咄申さん爲め同君の親友なる小生は明日午前九時と十時の間に貴館まで可罷出候右時間に御差支有之らば御都合好き時間御通知被下度候也

タウク、ストリート第三百五號ホワイト、ホテルにて

ロ　ー　ゼ　ン　ベ　ル　ク

此書を得たる兩女は大に喜びて早速明日は其時間に御來訪を待居る旨返書を送りしが其夜は兩女共種々の妄想の爲めに通宵睡魔の來襲を妨げたり扨其翌日になりければ兩女は早朝より客室を灑掃して今や遲しと俟處に軈て九時二十分頃に至り室の戸をホト〱と打叩く者ありければ兩女は内より戸を開けば宿屋のボーイに案内されて入り來る一人の壯士あり年の頃は三十前後なるべし体格肥大にして背は高く眼髮鬚髯共に黑色にして鼻は至て高けれども鼻筋の中段に少しく凸形を爲したるは所謂る鷲鼻と云ふ者ならんか眼光も甚だ鋭くして是も亦鷲に類せり衣服粧飾美麗を極めて風彩自ら凛然たれば未だ土地慣れぬ兩女の目には天晴れ一個の紳士なりと見へしなるべし一應の挨拶終りし後春子は早速口を開て、

『あなたマー委しい事は後にして早速伺ひますが白石潔は只今何處に何をして居ります。
彼の両女眼中の紳士は獨逸人風の英語にて、
『不幸なる白石さんは今墨西古の牢獄に御出でず。
『ヱ、牢獄……牢……夫りや又何云譯で。
『夫には色々仔細の有る事で段々御咄し申さなけりや御分りになりませんが斯云譯です全体私は商人ですが商賣の爲めにフヰラデルフヰヤからブラジルの方へ參る積りで中央亞米利加の方を通て參りますと丁度白石さんとパナマで御一所になりました白石さんもブラジルへ御出懸の御咄しでしたから夫れならば御一所に參りましよふと御約束をして便船のあるのを俟て居りますと御存知でも彼爲入いませふがアノ邊はまだ開けませんで極て不便ですから定期の便船なんぞはありません折々蒸汽船にブラジルへ行くのが有りますが其時は丁度出ました跡で其頃の便船は何日に出るか分りませんで困て居りました處へ一艘大きな帆前船がブラジルへ向て出帆するのが有りましたから私ハ商賣荷物を澤山持て居ますし帆前船ならバ運賃も廉くツて丁度幸ひですから直ぐ夫へ乘込む積りにしましたが白石さんもドウセ漫遊だから何でも宜からてツて一所に御乘りになツてパナマを出帆しまして其外にも船客が三人程有りましたスルト兩三日過ぎて船が内海から段々大洋の方へ出ますと或る日の事でしたが船長始め五六人の人々が皆な手にピストルを持て私達の居る處へ參りまして申しま

すにハ『お前達は知ないで乗ッたのだが此船は海賊船だからお前達の荷物は皆んな取上げて仕舞ふしお前達も全体なら殺して海へ抛込むのだがお前達の体は丈夫で役に立そふだし夫に此間墨西哥の警察官吏に追はれて水夫を五六人失ッたからお前達が是から此船の人になッて倶に働くならば助けて遣ろうし若しイヤと云ふなら直に打殺して海へ抛込むがドウだ』と言はれた時にや皆なビックリ致しましたがドウセ斯なッては仕方が無い命有ての物だねと諦めて私や外の者は直く船長の言葉に從ひましたが白石さんは中々殺されても服從しないと云氣色でしたから私達が色々宥めてトウトウ皆んな一所に船長の前で誓を立てゝ其忌むべき海賊の仲間となりました其後私共は色々相談して好い折が有たら逃け様と思て居ましたが中々嚴重で逃る事は出來ません仕方が有りませんから暫く辛抱して『ブラジル』の海岸や墨西哥の近所を廻て居升内に白石さんは學問が御出來で色々面白い咄を爲たり又船長が解らない事が有ると白石さんに聽たり何かする樣に成て直に白石さんハ水夫の頭になりましたが丁度三月程立ましてから或る時船が墨西哥の近所で其國の軍艦に目付ッて追懸られまして船長始め一同はトウ〳〵捕縛されて墨西哥へ引かれました其時白石さんや私共は色々情實を咄して放免を求めましたが中々聞かれません斗りではなく白石さんは容貌が西班牙人に似て御出だから其以前西班牙政府から墨西古政府へ捕縛方を委賴に成て居る同國の大盜賊だろーと疑はれて色々嚴しい詮議を受けなすッて白石さん一人は別の牢へ入れられまして私も外の水夫と一所に

四人宛一の牢へ入れられましたが粗末な牢ですから二月半程懸ッて四人で丹精して漸く床下へ穴を堀て或る晩ソッート其所から牢を逃出しました夫から私は白石さんを援け出ろふと思ひ外の者は同類を救ふと思て牢屋へ火を放けましていまだ物に成らない内に獄丁に見付ッて外の三人は直く捕縛され私丈はホウ〳〵の体で漸く逃け終せて夜を日に續で合衆國の境まで參ッて知己の者を尋ね其所で仕度をしてフキラデルフキヤへ歸りましたのはモウ二月程前でした然るに兩三日前商用で此地へ出府しました處アノ廣告が有りましたから夫では由縁の人が當地に御出なら御世話に成た白石さんの事故早速御知せ申そふと思て伺ひました譯です。

兩女は余りの驚駭に茫然として暫ばは呆れて居たりしが玉子は此紳士に向ひ言葉忙しく問懸けて、

『夫じやまだ白石は牢に居りますか－まだ何共極りませんか－今頃はまだ無事で居りませふか。

『左樣白石さんの事を西班牙政府へ問合せるのなんのッて言て居ましたからまだ極りは付まいと思ひます然し評判でハ多分皆んな死刑は免れまいと云ましたが大方まだ御無事でせふ。

ト聞て兩女は胸打騷ぎ血液の流動忽ち激昂して思はす春子は、

『死…………死刑…………ドウカ援ける工夫は有りますまいか。

『外に工夫は有りませんが墨西哥の官吏社會には賄賂が自由に行れますから今の內一刻も早く彼地へ御出なすつて白石さんがまだ牢に御出なら充分賄賂を使て彼地の官吏へ賴んだらドウカ援からん

事も有ますまい若し彼地へ御出になるなら私が御案内を申しませふ。
春子は暫し考へて、
『何れソー致さんじやなりませんが一應外の者とも相談致して取極めますが彼地へ參る時にや是非御案内を願ひます夫れ丈の御報酬は別に屹度致しますから又賞金の方は何れ彼地の樣子の分り次第差上ますが夫に付てはあなた何か白石の證據物でも御所持ですか。
ローゼンベルクは徐かにポケツトより潔の寫眞一枚と日本製の純金細工のカフス、ボタンを取出し兩女の前に差置て、
『是は私が白石さんから船に居る時戴たのです私も寫眞と卷烟草の吸口を差上げました。
兩女は之を見れば寫眞は彼の巴里より送り越したる寫眞と同一の者にしてカフスボタンも亦見覺の有る品なれば更に之を疑ハず一應相談を遂げし上早速墨西哥行に取極めんと其日は一ト先ヅ彼の紳士を返し跡にて色々相談なし一應ジヨールジ氏夫婦に咄して一刻も早く墨西哥に赴き如何にもして白石が瀕死の難を救はんと決定なせし其處へ外出して居たるジヨールジ氏夫婦の歸宅せしかば兩女は有りし次第を物語り一時も早く墨西哥行の用意を爲さんと迫りければジヨールジ氏は少しく眉を蹙め、
『夫が眞個なら一刻も早くドウカ爲なけりやならん譯だが然し其ローゼンベルクと云ふのは名前と云ひあなた方の御噺の樣子で見れば屹度ジユー(猶太人)に違ひないが此國で惡い事を爲る奴は大概ジ

ユーだから何だか其噺しは怪い様だ第一其證據物と云のが怪ひ設令ひ白石さんに貰たにしろ牢へ入るに其様な物を持て入れる氣支はなし又持て入たからッて牢を破て火を放けて捕まりそくなッて這々の体で迯る者が其様な物を後生大事に持て迯筈もなし又夫は夫としても眞個に白石さんから貰た物なら其寫眞の裡には白石さんの自筆で此寫眞を進呈すると云事が書てある筈だが夫は有りましたか。

兩女『イヽエ、ソー被仰りや何にも書て有りませんでした。

『夫なら猶更怪い何にしろ私が一應其者の様子を委しく取調べますから其上でドー共御極めなさいマア今の處は私に御任せなさい。

ト懇ろに言ければ兩女は氣の急くを堪へ一ト先ツ其言に從ひて兩三日を過ごせしが何分彼の猶太人の身元等判然せず其内兩女は潔の事の氣に懸りて片時も早く墨西哥へ赴かんとジョールジ氏に迫りし故夫れならば猶太人にハ其由を告げず別に然るべき人を雇ひ夫と共に赴くべしと勸めければ兩女ハ其言に從ひ急ゞ或る代言人を頼みて之と同行する事に決し彼の猶太人の來りしより四日目に南部鐵道の切符を買ひ其日午後四時頃に三人打連れてステーションに赴けり汽車の出發は四時三十分なれば暫し待合場にて待合せる内ハヤ出車の時刻に成りければ荷物は盡く荷物掛へ托し置き三人は唯手提革盤を携へて群集の後より徐かに列車の傍に進みしが是送りに來れるジョールジ氏は急に何をか見付たりけん立留りて兩女

を呼び、
『モシ〳〵何時も領事館からあなた方の所へ使に來る黒奴がアレ彼所にキヨロ〳〵して誰かを搜して居る樣ですが若しやあなた方の所へ用が有るんじや有りませんかネー。
ト言内黒奴は兩女を見付けて驅來り一通の電報入りと認めたる封書を差出し不規則なる英語にて、
『是は日本から領事館へ今屆た電報ですが早くあなたに上けて呉れろと書記生さんに賴まれましたから今アチラの御宅へ………
ト噺す内汽車はハヤ出發せんとする樣子なれば兩女は黒奴の言葉を耳にも懸けず春子が封を破りて之を披けば玉子は頸を差出して之を覗き共に其電報を見るに梅村馨より出したる英文電報にて其意は、
白石潔の在家分る濠州に居る無事なり委細は郵便
ト有りければ兩女は驚喜雀躍して殆んど手の舞ひ足の躍るを知らず直にジヨールジ氏と代言人に向ひ兩女更る〳〵、
『モー墨西哥へ往かんでも宜ふ御ざんす白石の在家が、
『今分ましたア、嬉しいモウ二三分遲いと………
ト咄す折柄ピーと一聲汽笛を鳴して汽車は忽ち進行を始めたり此に於て一同は不用になりたる切符を割引にて買戻させ又荷物掛より荷物を取戻さんとせしに荷物のみは主人を遺して出發せし由なれば次のス

テーションより送り返すべき旨電報を發し置き使に來りたる黑奴へは常時の使賃の五倍即五弗の金貨一枚を遣り表の方に並び居る馬車を雇て一同は下宿屋に歸りたり兩女はジョールジ氏と相談して彼の代言人には相當の禮金を與へて其雇を解き又新聞紙へハ潔の行方分りたる由再び廣告を爲し領事館諸商社等の人々へも電報の旨を告知らせ一同安心して唯郵便の來着を待詫びける然るに彼の猶太人は電報の事も何も知らざれば新聞紙へ再廣告の出でたるは自分の咄を信したる故なりと思ひ頻りに尋ね來りて兩女に墨西哥行を勸めたれど兩女の容易に出發する氣色なきを見て此度は彼の證據物を口實として直に千弗の金を請求せしが兩女は未だ本國の詳報に接せざれば此猶太人の咄は果して僞りなりや或は潔が墨西哥の牢獄を脱して濠洲に渡りしなりや判然し難ければ猶太人の請求に對しては當方より人を墨西哥に遣したれば其報道に接せし上ならでは賞金を拂ひ難しと拒み置きたり其後數日を經てバナマ堀割會社よりジョールジ氏に宛て回答の書達したり夫には白石潔と云ふ日本人は本年春頃當地へ來遊し暫時滯在して委しく堀割工事を實見せしが視察終て直に南亞米利加へ向て出發したり其後の事は知らずと記載しありたり若し此手紙に潔が陸路とか海路とか或は南米の何國へ出發せしとかありたらば彼の猶太人の咄の眞僞忽ち判然せしならんが其事の知れざるは遺憾なりき其後又數周間を過ぎて愈々本國より兩女が翹首企足して待兼たる郵書到着せり。

第六回

是より先き本國なる白石梅村兩家にては兩女が米國へ旅立ちし後指折數へて其消息を待居りしに丁度十八日目に桑港より安着の電報ありたれば一先づ安心なして次の詳報を待所に如何か爲しけん其後二ケ月程を經過するも何等の音信なく其癖其間に桑港より橫濱へ五六回の着船ありたりしに兩女より郵書の來らざるは不審なりとて又一層の憂慮を增しけるが馨の知人にて其頃驛遞局の高等官に出仕せる者ありければ馨は此者に潔と兩女の事を物語り驛遞局にて何か取調の手懸りあらば通知して給はれと依賴せり其後數日を過ぎて右の男は梅村方へ尋ぬ來り馨に會て言ける樣、

『先達て御賴みの一條は早速外國受信係の方へ參て種々取調ました所が餘程變な事が御ざい升。

『ハア夫りや又ドンナ、、

『ナニ斯云譯なんです私が段々係に者の尋ね升したら其白石潔と云人の手紙は今迄折々屆いたが何時も外國の飛脚船が着く時分にや一人の男が白石家の者だと言て出頭して其手紙を皆んな自分で受取て往く者が有るとコー申しましたから夫じや此頃桑港か紐育から白石玉とか梅村春とか云名前の手紙は屆かないかと聞きましたら夫は此頃米國の船が着けば屹度二三本宛來るが夫も矢つ張り其男が皆んな受取て往くと申しましたがあなた其男と云者に御心當りは有りませんか。

『エー夫りやマー怪しからんトンダ事だ其男と云ふものはドンナ奴でせふ。

『ドンナ奴だか私は見ませんが、

『何にしても實に怪しからん咄だ誰が其樣な惡戲をするのか知らん直逆惡戲じや有るまい何れ何か主意が有てする仕事だろーが何者だろー更に心當りは有りませんが實にドーモ何とも………怪しからん。

『夫じや斯なさい明後日は米國から丁度船が着升から屹度御手紙も參りませふー其男も來ませふからあなた御自分で驛遞局へ御出なすつて待て彼爲入いソーして巡査でも賴で直く其所で其奴を引捕へて詮議をしたら分りませふ局の方は私がスッカリ手筈を爲て置升から。

『夫じやドーカソー願ひ升明後日は早朝から出懸升から何分宜敷御手筈を願ひ升然し實に怪しからん實にドーモ…………

此に於て相談を極めて早速此事を白石方へ通知なし其翌々日に至り馨は白石の母を伴ひて自ら驛遞局へ出頭しけるに其日米國より着船ありて郵便物ハ直に驛遞局へ回送になりしかば早速取調べて貰ひしに白石潔が自宅へ宛て濠州「メルボルン」より差出したる書狀一通と兩女が紐育より是も各自宅へ宛差出したる書狀兩通と合せて三通の書束有りしかバ大に喜び早速之を受取りたる所へ彼の白石家の僞者ある男出頭して白石潔同玉及梅村春三人の書束あらば受取り度しと申込しを何者ならんと馨が見れば豈に料らんや彼の貴公子の無二の忠臣と聞へたる脊髓骨の曲た男あるが此者は貴公子が賴みに依て兩三度梅村方へ來りし事ありて互に顏を見知り居れば今思懸なく馨の出頭し居るを見て大に驚き一目算に迯出さ

んとするを豫て見張り居りし巡査出で來り直に之を捕へて其筋へ拘引したり。

馨と白石の母親ハ趙氏の壁にも優るべき三通の書狀を受取りたれば大に喜びて家に歸り早速披て讀下すに兩女の書面には潔の手懸り未だ知れざる旨を記載しあり扨潔の書面には、

(前略)小生も當地方は最早概畧巡覽致し候へば愈々此次の便船即ち『ゼーランデキヤ』號と申す汽船に乘込て米國桑港に赴き同地方に暫時滯在の後直に御地へ歸朝可仕候前便にも毎度申上候通り最初米國紐育より南米地方へ出發致候節は南米より桑港に赴き夫より當地へ渡航せんと存せしに丁度智利の『バルパレーザー』より當地への好便有之候故豫定の方法を交換して直に當地へ參り候次第にて前の考案通りに致せば日數も余計相懸り隨て費用も餘程增加致す譯にて此度の都合に致せば万事德用に參る次第に御座候小生が南米地方及當地方より只今迄に差出したる數十回の書狀は皆滯りなく御落掌相成りし事ならんと存候(下略)

と有りければ一同は其無事なるとを喜びしが又彼書束を橫取せる男を憤り早速其筋へ照會して是迄橫奪せられたる書束を取戾ん事を求めたり然るに彼脊髓骨の曲つた男は元來浮薄怯懦輕薄卑屈と云ふ諸性質を兼有せる者なれば其筋の訊問に對して忽ちペラ〳〵と明地に白狀せしが別に罪となるべき廉なかりしにや如何にや其子細は知れざれど幾何もなく放免になりしかば馨は無據なく人を以て書束取戾しの事を懸合せしに奇怪不思議なる返答にて左樣の事は少しも知らず又知て居たれば迚其書束は悉く或人の手

へ渡り其人の手許にも今は保存して無るべしとの挨拶を受たり平生は剛毅不屈の馨なれども何故か此事は其後泣寝入の姿となり又何故か此時春子の母は非常に慙愧しけるとなん又何故か其後彼貴公子は全く足跡を梅村家の門に絕しと云ふ。

扨兩家より此事を委敷書面に認めて米國に在る兩女の許へ報道なしければ或は驚き或は喜び或は怒りしが中にも春子は何故か非常に憤怒なしけるを玉子の諌に漸く氣を取直し直に旅裝を調へて潔を出迎の爲に玉子と共に桑港に赴ける其後彼猶太人『ローゼンベルク』は何人よりか此事を聞きたりけん或は自ら其奸策の行れざるを覺りしか兩女が紐育を立出でし後『ジョール』氏が之を取捕へんと其旅宿に赴きし時には既に何れへか形を匿せしと云ふ。

扨も兩女は三千里の鐵路を七日間に通過して桑港に到着なしパレスホテルと云へる大旅店に投して直に『ゼランデキヤ』號の來着を問合せけるに丁度其日の着船にて既にゴルデン、ゲートの近傍に來り居る旨燈臺より電報ありたれば二三時間の內には棧橋に着くべしとの事なれば兩女は大に喜びて旅店の椅子未だ暖かならぬに早く既に馬車を命し之に駕して第三號の棧橋に赴きたり抑も此第三號の棧橋は濠洲通の飛脚船の着く所にして横幅三十間余長さ二百間余もありて上は悉く板張りの屋根にて蓋はれ下は一面に厚板を敷詰てあれば此頃の降雨氣節にも行潦衣を濕すの憂もなく泥濘裳を汚すの恐もなし今社着船の眞際なれば其入口の邊りには行人車馬輻輳雜還して織が如く沸が如し赤く塗たるはパレス、ホテルの出迎

馬車なり黒く塗たるは乘合の辻馬車なり高き帽子に長き外套を纒ひ星形のニッケル標を胸邊に着たるは巡査なり背廣の上着に竪島の細きヅボンを穿き中山の帽子を蒙りて彼方此方に徘徊するハ旅店の宿引なり美麗なる『ストーン、パイフ』《高帽》を戴き意氣な衣服を着け手には數十枚の『カビチット』寫眞を持ち桑港の風流才子は吾のみなりと言ぬ斗りの容体にて頻りに諸人と雜談を爲し居る背のスラリとした一個の紳士は此地の旅客は何人も能く知りたる鐵道會社の支配人『マッケー』氏なり其他朋友知己を出迎の人々良人父兄を待合の貴夫人達或は稅關の官吏汽船會社の役員等此棧橋の内外に聚り來りて偏に本船の來着を俟つ程も無く『ゼーランデキヤ』號は『ゴルデンゲート』《黄金門》を通過して徐かに港内に進行し右に旋りて直に棧橋に向て進み來り運轉自在に船を動かして棧橋の左の方に近けば船より數條の大綱を抛出すを陸に在る人足共各々之に手を懸けて力に任せて挽く内に本船ハ忽ち棧橋に密着して直に懸橋を投すれば待搆へたる人々は一度に船中に昇り入る中にも彼の春子玉子の兩女子は初め御者の忠告にて一ト先づ棧橋の入口に在る汽船會社出張事務所の樓上に到り見れば上等船客の姓名を紙に認め張出してあり《是は本船の棧橋へ着かざる以前に蒸汽船にて役員が本船に至り上等船客の姓名等を取調べ直に之を事務所に通知して樓上の壁に張出すなり》其中に白石潔と云へる名前の見へければ大に喜び勇進で本船の來着を待居りしなれば今此懸橋を渡るが否や直に甲板に驅け上がりて片足の未だ懸橋を離れざるに春子は忙はしく傍に立ちたる人に向ひ、

『モシ白石潔と云ふ日本人は何處に居り升。
『私も今人を迎に來たんですから何にも知りません。
『ヲヤ夫は失禮。
ト言捨てゝ奥の方へ到れば船客らしき人數人各手に革盤を提げて上等室の入口に立ち居るを見て今度社はと之に問へば、
『其人の此下のカビン第六號室です。
『難有ふ。
ト禮を言て直に下に降り六号室を尋ぬるに倉卒の際なれバ鳥渡は見當らず其内春子は見付たりけん急に向へ進まんとせしに着物の裾足に纏はりて倒れんとしければ傍の柱にツカマリながら、
『お玉さん其所ですソラ其所に6の字が書て有升ふ。
『ドレ…………是れ…………イゝエ是ハ9の字。
『ヲヤ地烈度ネー何所でせふ…………アゝ此方の方今度は屹度。
ト兩女は漸く六號室を見付けて足疾に其所に赴けば室の戸は開てあり内には此兩女が身体と資財とを犧牲にして今迄も其行方を尋ねたる白石潔がフロックコートに高帽子を戴き手に革盤を提げて凛然と立ながら旅店の宿引らしき男と何やら談判して居たれば兩女は之を見るより精神も身体も共に躍り上る程嬉

しく開き懸けの戸をズーウト明ながら、
『兄さーん。
『潔さーん。
潔は呼ばれて此方を向き兩女の顏を見て茫然たる事稍久數五官の官能も一時其働を休業せし如き容体にて其內舌と口のみは第一番に少し働を始め腦神經の指令をも俟たずして自ら言出せし如く、
『マア……………ド……………して此へ……………私は日本へ着たのか知らん。
兩女は此時室內に進み入て玉子は潔の側へ寄り此頃習慣になりたるにや思はず手を出して潔の手を握ながら、
『イヽヱ此は矢張桑港です私達が此へ來て居る譯は跡で御咄をすれば分り升がマア御安着で御目出度ふ。
春子も側より、
『潔さん御目出度ふ。
此時潔は漸く官能舊に復したれば玉子の手を握り返へし又春子の手をも握り今度は腦神經より命令を口に傳へて、
『マア何にしても不思議だ實に意外だ結構な意外だマアお前もお春さんも御變りが無くつて何より御

目出度いが實に此でお前達に逢ふのは不思議だ。

玉子『不思議は跡で分り升が私達はパレス、ホテルに居升からあなたも直ぐに被爲入い。

『ソーか己も今パレス、ホテルへ往ふと思つて居た所だ。

是に於て潔は前に談判し懸けたるパレス、ホテルの宿引に其事を咄して荷物等も托し置き税關の撿査も手輕く濟まして其身は兩女が乘り來りたる馬車に共に打乘り直にパレス、ホテルに向て馬首を向けしめたり。

潔は今思ひ懸なき人々に思はぬ所で逢ひしなれば嬉しさと不審しさと交々腦裡に充滿して始めて見聞に上りける桑港の有樣も鼓膜と眼球には觸るれども聽神經と視神經は之を腦神經に傳ふるの道無く疑問にて蔽はれたる腦髓が漸く旅店に着するや直に兩女に向て疑問の解釋を求めたれば兩女は更る〲口を開て潔が出立後に起たる音信の中絕兩女の洋行猶太人の奸策より彼本國にて發見したる驛遞事件貴公子の賤むべき惡むべき密謀まで落も無く物語れば潔は聞く度每に歎息し或は怪しみ或は驚き或は感し或は喜び或は危み或は怒り其身は其事に出逢ざれども本其身より起りし事なれば神經の刺擊も甚しく暫しは西天を睨で憤慨せしが漸くにして氣を沈め夫より其身が經歷したる荒增しを兩女に告るを聽くに潔は無事にてパナマより陸路南米に赴き夫より直に濠州に渡りたるにて其間差したる異變に逢ひし事なく常に無事安穩なりし由又彼の『ロービンベルク』と云へる猶太人は潔がパナマに在りし頃暫時道連れなりたりしが

本是惡事を以て業とする者なれば潔が雜具を入れ置きたる手提革盤を大金の入れある者と思ひ違へ隙を窺ひ竊み取りて出奔せる者なる由し聞て兩女は疑解け彼の寫眞とボタンの二品の出處も漸く此にて分りたり。

是より此三人は直に電報にて本國へ潔の來着を通知なし其後は此に滯在して暫く此『カリフォルニヤ』の今を盛りと進み行く日の出の有樣を目擊せしが潔は豫て本國に在りし頃より太平洋海岸の適當の地に移住なして日本人種の爲に新天地を開かんと心懸け居たりしに此度の漫遊は益其志を深からしむるの實證を與へし所へ不意に兩女に邂逅して本國の事件を聽し者から何となく本國の空氣を呼吸するは不愉快の如き感覺を起し人間到處有青山と古人が遺せし言の葉さへも皆其志を激するの媒となる折から最後に此天幸無双の一大州人間世界の極樂國『カリフォルニヤ』州の實況を委しく見聞なせしより忽ち其志を奮昂させ愈々移住の心矢の如く心中遂に決定せしかば或る時之を兩女に語りしに余りに贊成なさざりけるを種々樣々に説諭なし遂に本國に歸りて後兩家の父母に相談して其同意を得しならば早速此に移住して幸福愉快に世を送らんと豫め之が用意を爲し種々の取調等を爲し置たり。

抑も此『カリフォルニヤ』州と聞へしは千七百六十九年に始めて西班牙人の爲めに殖民せられ千八百四十五年に墨西哥政府の手を離れて獨立し同四十七年に彼『マルシャル』に金壙を發見せられてより移住の人民頓に增加して全州忽ち繁榮に赴き四十九年に州の憲法を制定し其翌年に合衆國の一聯邦となりたるよ

り氣候温和にして土壌沃肥天幸無双の黄金州なれバ金壙發見以來數十年の間に於て長足絶大の進歩を爲し既に今日に至りては拾八万八千英里の面積は漸く人類勢力の爲めに變更製作せられて二百二十万丁の耕地となり五百余丁の葡萄園となりて各州の人民に食料を供し幾多の杜康に財料を與へり四千余万のブッセルの大麥小麥は年々積で山を爲せども粒々差程の辛苦を爲たるに非ず百四十万余頭の牛馬は天與の牧場に逍遙して頻りに繁殖増進すれども別に孔丘が乘田を要するに非ず千五百万弗の金銀は年々世界各地に流注して無羽無足の魯家の神と化し三百二十余ケ所の製造所は黒烟常に天を衝て桑港不滅の雲となれり貨幣市場の機關には四十有二の銀行あり言論壇上の機關には九十余種の新聞紙あり百事活動し万業鋭進し須臾の間倏忽の際全州は忽ち繁華隆盛幸福愉快なる天地となりて日に新に月に改り年々歳々迅速勇壯絶大無限の進歩を爲す者は古今東西亦此州に及ぶ者無るべし實に是將來のユートーピヤ前途の華胥の郷亞米利加大陸の黄金州太平洋海岸の極樂園なり彼の一丈夫兩佳人は數月の日子を費して此地方の各所を遊覽したれば横濱行の便船の有りし折愈當地を辭し去て四千八百里の太平洋を西に向て航行し三五加一の日數以て曩に三人の人々が時ハ變れど皆共に海外へ向け出發したる横濱の港に着きけるは潔が本國を出立せしより足掛三年目の事なりき。

白石梅村兩家にては此三人が恙無く歸國なせしを大に喜び共に愁眉を開きしが幾程も無く潔と春子は兩家の父母の許を得て目出度華燈の典を擧げ琴瑟永く相和して白石家の幸福に一の新原素を加へたり其後

潔は頻りに移住の說を唱へ漸く一家をも同意させ又梅村馨の賛成を得其の翌年に至りて遂に全家を携へて『カリホルニヤ』洲の地に移住なし此に有形無形の資本を注下して後來大事業を爲すへきの基礎を定めたりと云ふ是れぞ今日太平洋海岸の三大陸に大勢力を有する日本人種が十九世紀の終りに於て北亞米利加の大陸に移住を始めし嚆矢なりと數百年後の歷史家は記するや否や。

◉片時雨

漣山人

（其一）

秋を旨としたる庭は、頃日の時雨に見事色づきて、楓、錦木、櫨、銀杏など、實に二月の花も及ばず。赤きもあれば黄なるもあり、或は眞紅、淡紅それに松の綠を彩りて、さながら綾を曝らし錦を織れるが如くなり。

抑も此處は、以前は時めきたる豪商何某の別莊なりしを、榮枯定めなき憂世に、其家沒落の後は、暫時住む人も無く、荒れるがまゝに打ち棄てありしを、今の主人鶴岡繁と云ふ人、二三年前に少からぬ金擲ちて之を引受け、心を込め手を盡して、修復に財を吝まず、池を廣め山を高くし、石を殖やし木を植へ足せし程に、今は以前に優れる眺望とはなりぬ。さても主人鶴岡繁と云へるは、且てある省に出仕して局長迄勤めし身なりしを、去年惣領の榮一醫科大學を卒業して、醫術開業なせしより、自己も次第に取る年に、何時までか果敢なき官海に漂ひて、身を帳簿の奴隷に爲すとぞト、潔く職を辭し、後は此處に隱居して、いとも豐かに晩年を送りぬ。今日しも小春の空の麗らかなるまゝに、繁は妻時子、及び里子花江と云へる二人の娘を相手に、庭に立ち出で、小高き築山の上なる東屋へ、茶器、煙草盆など運ばせて、此處に憩ひつゝ、樂しげに庭の紅葉を眺め居る處へ。母屋の方より小間使と覺しき一人の小女、

忙しげに走り來りて、『もし奥樣、若旦那樣がお入來でムいます。』と云へば。時子は靜に顧みて、『それは丁度よい。直ぐに此方へ……』『ハイ。』
小間使は其儘引返せしが、間もなく彼方の切戸を押し明けて、入り來る二人の男あり。先に立てるは廿五六の紳士風にして、それに續けるは廿才前後、是は書生体の男なり。……先なるは榮一に相違なけれど、後なるは何人なるや?
見れば背は高からず、色もあまり白からねど、髮濃く眉秀で、〆まり好き口元と細き眼の中に、愛嬌ありて而も利發らしく。榮一に導かれて歩みつゝも、始終四方に心を配りて見ゆるは、思ふに此處へは初めて來れるものなるべし。
斯くと見るより、築山の上に在りし、今年十歳に成れる花江は、『アラ阿兄樣!』と、云ひつゝ嬉しげに走り下り、榮一の傍に駈け來りて、其袂に縋りつかんとせしが。後に見知らぬ人の續けるに心付き、流石にはにかみて、一歩程に前に立止まり、愛らしき眼を見張りて、訝かしげに其顔を見詰めぬ。
榮一は其儘進み寄りて、輕く花江の頭を抑へ、『どうだ花江、今日は何處へも遊びに行かんのか。』と云へば、花江は甘へる樣に其手に縋りて、『今日は父樣や母樣と、御自家の紅葉を見てるんだワ。』『左樣か。それは好い時に來たネ。』『ほんとに阿兄樣丁度好い時入らしやつた、』『では御馳走でもあるのかネ。』『アラあんな賤しい事……』『ハヽヽヽ』

後に居りし書生風の男は、罪も無き此問答に可笑くなりて、片頬笑みつゝ花江の方を見しが、其顔のいかにも優しく見えしより、小兒心に懷しくや思はれけん、花江は少し近づきて、何やら物云ひ度氣に男の顏を打守るに、男はやがて慇懃に一禮なして、又榮一に向ひ、『御妹御樣で御座いますか。』と問へば、榮一ハ輕く點頭きて、『左樣です……お轉婆で仕樣がないのです。』花江は急き兄の袖を引き、上眼で睨む眞似をして、『アラ阿兄樣………』

兎角する程に三人ハ築山の上に登り來りしが、榮一はまづ兩親に挨拶なしたる後、父に向ひて、『アノ兼てお咄し致して置きました增山を、今日連れて參りました。』と云ひつゝ後に立てる男を顧みて、『增山君是が阿爺です。』と、紹介せて自己が躰を引けば、增山と云ふ男は僅かに身を進ませ、『私が增山勝吉と申します……何分宜敷……』と、云ひつゝ頭を下ぐる時、稍々面を紅らめたるハ、まだ物馴れぬ青年の常なり。

（其　二）

繁ハ元より磊落なる男なれば、無造作に一禮して、『オヽ增山君か。大人には度々御目に掛つた事もあるが君には初度ぢやな。』

勝吉はかく言葉を掛けられて、僅かに首を擡げ、『父が存命中は、一方ならぬ御厄介に成りました……此度も亦……飛んだ御惑惑をお願ひ申しまして。』『イヤ少しも迷惑な事は無い。實は自家も無人で、一人

確然な者を置きたいと思つて居つた處で……君が來て呉れるなら至極妙ぢや。……で、阿母さんは御達者かな？》《ハイ此はれ蔭様で達者に致して居ります。》《國の方に？》《ハイ、親族の許に預けまして。》《唯た一人か》《ハイ。》《それは心細い事ぢやらう。然しまア早く君がゑらい者に成て、安心させんければならんのぢやな。さうして君は……他に同胞は無のか。》《一人妹が御座いますのですが……何處に居りますか解りませんので。》《それは妙ぢやな。一体如何した譯ぢや。》《里へ遣つて厶いましたのですが、其里親が非常に可愛がりまして、如何致しましても親許へ返しません。其中に其里親と申す者が、何處へ參たのか行方が知れませんので。……父が歿ります時も、頻りに此事を案じて居りました。》《それは然し妙な話ぢやないか。如何しても知れんのか。》《探しましても解りません。》《今居れば幾才か。》《丁度十五で厶います。》《然しまさか一生知れずには居まい。命さへあれば必ず其中に邂逅ふともあらう。……イヤこりや變な話に成てしまふた。まア茶でも入れやう。》

此にて話は途切れしかば、榮一はまた勝吉を母時子に紹介せ、夫より妹里子にも挨拶させんとする時。里子はそれを待たず、吾から言葉をかけて、《アノ先日は誠に失禮を致しました。》と、さも馴々しく云ふに、勝吉も少し驚きたる体にて、《オヽ此は……》と計り、丁寧に辭義をなしたり。わが紹介をも待ず、早く已に勝吉を知る里子の言葉に、榮一は訝かりて、《それではお里は、增山君を前から知て居るのか。》と尋ぬれば、里子は得意顏に、《ハア存じて居りますワ。一二度お目に掛つた事があります。ねヱ郎君。》

と、勝吉の方を斜に見詰むるに、物馴れぬ勝吉は、此時又少し面を紅らめ、榮一に向ひてさも云ひ惡く氣に、《ハイ、あの……紅亭の處で、一二度お目に掛りましたので。》《紅亭？それでは君も畫を習つてお居での。》《イヱ、あれは同郷の者で……それで時々參ります。》ト、云ひ掛けしをお里は引取りて。《イヽヱ増山さんも少しはお書きなさるんですよ。》勝吉は周章てゝ打ち消して、《イヱ如何致しまして……》と、さも迷惑さうに面を外向けぬ。

元來此里子と云へるは、年未だ二九に滿たねど、其性質至て怜悧く、容色も人並に勝れて、敎育も一ト通りは備はれる女なるが、幼少より畫を好みて、母親に强情る玩弄器も、人形よりは錦繪を欲しがり、暇さへあれば筆を甜りて、美人の風俗山水の景色など、餘念なく寫し取りては、是を無上の快樂となしけるにぞ、兩親も之れを見て、却て私に喜び、元より繪畫は女性に適したる技術なるに、況して好きこそ物の上手なれと云へば、今より良き師を撰びて、丹靑な道を學ばしめんに、將來は名譽の畫師ともなりて、家名を耀かすとあるべしと、やがて里子が望めるまゝに、當時名高き南宗派の畫工、澤紅亭と云へる人の門に入らしめ、號さへ紅鶯女史と命けて、專ら畫學を修むる事となりしは、實に里子が十四歲の秋なりき。

それより里子は、土曜日毎に紅亭が家に通ひて、只管技術を勉めし程に、次第〳〵に上達して、此春東洋美術會に出品せし、櫻に鯉の密畫は、一等褒狀を得しのみならず、畏き邊のお目にも止まりて、あれ

をトの御聲掛り、忽ち御用品とぞなりにける。紅鈎女史の面目如何計りぞや！。されども此女、性來て人に馴れ易く、物に恐れず、時としては男々しき擧動もありて、口數も隨つて少からぬ爲め、其外部のみ見る時は、稍々蓬葉に思はるゝも是非無し。

（其 三）

さて又彼の青年の、素性如何にと尋ぬるに、父は增山義作と云ひて、以前は繁の配下に屬官を勤めし者なるが、一昨年流行のインフルエンザより、忽ち腹膜炎と云ふ難症に罹りて、間も無く黃泉の客と成りし後は、余義無く家を疊みて、勝吉は母と共に、一ト先つ故郷姫路に立歸り、詫しく其日を送りしが、かくてはあたら青雲の志願ある身を、土臭き田舍に隱れて、自ら埋れ木と成り果てんも口惜し、せめては今一度都に出で、出來得る丈の脩業をなして、天晴れ有爲の士とならんと、或る時母に此由を告げて、其意見を尋ねしに、母も元より氣丈者故、勝吉が奮發を太く喜び、唯た一人の大切な悴、手許を放すは辛けれど、家の爲め又其身の爲め、脩業に出でんてふ健氣ある願、何としてか止むべき、其方が將來ゑらい者に成て、故郷に錦を飾る日を、樂しみにして待て居升ぞト、勵まし立つるに勝吉も嬉しく、やがて母を親族の許に預け、僅少斗りの路用を調へ、只一人東京へと上りぬ。

されども元より家貧しく、學資とても思ふに隨せねば、兼て亡父が知遇を受けし、彼の鶴岡を便らんものと、乃ち其子息榮一が許に行きて、宿願の程を陳べ、如何なる御用も勤むべければ、食客として養

ひ給へと、言葉を盡して頼み入りしに、榮一も其の志を殊勝に思ひ、且は見るから利發らしくて、後日の望ある青年と、早くも見拔きて快く承引ひ、やがて父繁に咄せしに、父も增山の忰とあらば、世話をしてやるべしとの言葉に、榮一乃ち勝吉を伴ひて、さてこそ今日此處へは來りしなれ。

かくて是より勝吉は、鶴岡の食客となりて、玄關の傍なる四疊半計りの一間を、わが部屋と定められ、來客の取り次ぎ、表座敷の拭掃除、夜は又花江が復習の敎師、此等を日々の義務として、其間に學校へ通ひ、自己が學事をも勉むる事となりしが、根が温良にして、而も心利きたる質なれば、まづ主人夫婦の氣に入り、隨つて家內の者の評判もよく、果は飛んだ人氣役者とはなりぬ。

或る日勝吉は、姉娘里子が許に來れる一通の郵便を持ちて、其部屋に入り來りしが。折しも里子は、枠に張りたる、丈五尺巾二尺餘りの畫絹に、秋艸と雞の雌雄を、半ば畫ける前に坐を搆へ、膝の上にて胡粉を練りつゝも、餘念なく畫の方を眺めて在りしが、後の襖の開く音に、急ぎ顧みて勝吉と顔見合はせ、《誰かと思つた……增山さんなの？》ト、はや例の快活なる口調にて云ひぬ。

勝吉ハ此家に住み込みしより、はや一週間ほど經ちたれど、里子が部屋に來たりしは、今日が初度でもあり、且つは年若き女の傍に、只一人近よらんと、何とやら心濟まぬやうに覺えしかバ、次の間より半身差し入れて、例の書狀を出し、《只今是が參りました。》と云ひ棄てまた出でんとするを、里子は忙はしく呼び止め、《增山さん一寸！》增山も急いて振りむきて、《何ぞ御用ですか。》里子は微かに笑みを浮べ

て、《今何か御用があるの？。》《イヱ何も……。》《それぢやア此書を見て行て頂戴な。》《ヘヱ、拜見致しましやう。》《只見た計りぢや仕樣が無い、何處が惡いか、それを云つて頂戴！》

勝吉は一寸頭を搔きて、《それは困ります。私に何が解りますものか》と、云ひつゝ少し進み寄り、書面をつく〴〵眺め居しが、感嘆したる語氣にて、《イヤお見事です……一体これは何うなさるので厶います？》《これはアノ、今度閣龍の博覽會ゑ出す心算で、此間から書きかけたんですが、如何も甘く行かないんですよ。》《成る程……然し至極御見事です。》ト、云つて再び立上らんとすれば、里子は急いで、《まアお待ちなさい！お世辭計り云つて逃げやうなんて、其樣な狡猾い事。》と窘めるやうに其顏を尻目にかけて、勝吉が出で行かんとする、襖をピッシャリ立て切りたり。

（其　四）

間の襖を立て切られて、勝吉は少しく狼狽へしが、仕樣事なしに元の坐に屈み、再び繪をば眺め居たり。里子は畫具皿を少しく押し遣り、身を勝吉の後に近づけ、同じ方向より畫を見やりつゝ、《妾は些と雌鷄の軀が大き過ると思ふんですが……貴郎は如何思ひます？》と、云つて顏を覗き込むやうにすれば。勝吉は少しく頭を傾けて、《さア……然し此で可いぢや厶いませんか。》《雄鷄の方が少さ過ぎた所爲か知らないが……何だか妾は先刻から、氣に成てならないのですよ。》《イヱ私の見た處では、此で結搆だと思ひます。》《さう、そんなら嬉しいけれども……》と、云ひかけて少しく口籠りしが、やがて獨り語

の樣に、《雄鷄が少さくて雌の方が大きいと、何だか……貴郎の側に妾が居る樣だから。》《まさか貴孃が、私より大きいとも御座いますまい。》《でもさア……釣合が！》と、何の意味やら斜に勝吉の方を見やりて、にッと笑たる顏と、勝吉が何の氣無しに振むきし顏と、思はず見合せて勝吉は、一種不思議の電氣に感じたる如く、吾知らず胸轟き、眼も眩むやうに覺えて、急ぎ又繪の方を見返へりしが、此度は鷄も七艸も、何としてか更に目に入らず。折から表の方に車の軋る音近く、誰やら來りし樣子に、勝吉は急ぎ立ち上り、とつかわ里子の居間を出でゝ、玄關の方へ走り行きぬ。

此時來れる客は主人繁が知人なりしが、今日は繁朝より他出して、未だに歸らぬ由を告げ、名刺のみ受取て其儘歸へし、やがて自己も部屋に戻りて、机に對ひ本を開き初めたれど、里子が先刻の振舞に、太くも神經を刺擊せられけん、暫時は恍惚として、夢見る人の如くありしが、稍々ありて漸く吾に返り、何をつまらぬ事に屈托して、貴重の時間を費やす事ぞと、自ら窘めて氣を取り直し、わが心を紛らさん爲め少し聲を揚げて本を讀み續けんとする時、其聲を聞きつけてや、窓の外より不意に、《増山さん勉强ねエ。》と可愛らしき聲にて呼ぶ者あり。

勝吉ハ驚きて、急ぎ障紙を開き見れば、其下には例の花江佇み、此方を見て笑ひ居りぬ。

勝吉は物和かに、《花江さんですか。私は愕然致しましたよ。》《貴郎があんまり勉强してるから、邪魔して上げたの。》《人の惡い方だ。》《そはれさうと……好い花進ましやうか。》《頂戴！》花江は手に持ちし

一枝の山茶花を出して、『さア！何所へか活けてお置きなさい！』『これハ難有う。』花江は渡さんとし、勝吉は受取らんとする、其時如何なる彈みなりけん、花は手を滑べりて下に落ちしかば、勝吉は狼狽へてこれを拾はんと、窓の中より身を伸ばさんとする時、赤き帶の結目の、右の方にチラと見えしに、誰ならんと其方を顧れば、是は花江が傳役に、此頃傭はれし小女にて、お鈴と云へる者ありけり。

年は漸く十五六、髪は唐神髷とか云へるものなれど、いや二三日保たせしと見えて、油氣薄く後れ髪垂れ、唐子の切布の解かゝりしも風情らしく、毛繻子の半襟のつきたる、荒き赤縞二子の布子に、赤地メレンスの帶をヤの字に結び、古びたる黄八丈の前垂、淺黄の唐縮緬の襦袢の袖と、緋金巾の袖裏の、重りたる袂の中より、桃色の襷の紐の、一寸計り垂れたるもをかし。……顏の丸貌は肉〆まりて、眉濃く色白く、頬の邊ホンノリと紅味を帶びて、フックリとした二重頤の鹽梅、美しと云はんよりは、寧ろ愛嬌に富める顏容。戸袋に背を持たしかけて、少しむくみたる可愛らしき手に、細き鉄串を三四本わしらひ、海老色の毛糸にて脈留らしきものを、餘念なく編み居る風情、取り繕はぬ處に天眞の美しさ現はれて、野末の菊の一入興あり。

勝吉は此家に來りてより、未だ此娘とも親く言葉をかはせしと無けれど、里子とは違ひて奉公人の事なれば、さして遠慮すること無しと、やがて聲をかけて、『お鈴さん、一寸其花を取て下さいな！』と云へ

ば、お鈴は初めて此方を顧み、《ハイ》と靜かに返辭して、落ちたる花を拾はんとするを、取らしもあへず、《妾が取るからいゝよ。》と花江は自ら拾ひ上げ、土を拂ひて再び勝吉に渡し、《大切にしてお置きなさいよ、……今鈴に折てもらつたんだから。》ト。云ふて二人の顏を見較べぬ。……無心か故意か、年こそ行かね、是も中々の曲者と見えたり。

《其　五》

物も云ひ樣と聞き樣にて、妙に角立つとあり。されば今の花江が言葉も、此花を大切にせよ、お鈴が折りしものなればト、只是だけに過ぎざれど、勝吉にもまたお鈴にも、何と無く際立ちて聞こえしにや、二人ハ覺えず首を垂れて、暫時は無言なりき。

されども肝腎の花江は、更に心付かぬ体にて、又何やら勝吉に咄しかけしかど、此時勝吉は他に考へ事のあるらしく、挨拶さへ懶氣に見えしかば、物に飽き易き稚兒の常にて、花江はまた此場を去り、《鈴！お庭の方へ行かう。》と、先に立ちて進みゆくに、お鈴も靜かに其後に隨ひ、技折戸を入り生垣を繞りて、やがて庭の芝生に出でぬ。

此時四邊に人無きを見て、お鈴は後より聲をかけ、《お孃樣！》と、用あり氣に呼び止むれば、花江ハ此方を振りむきて、《何ィ？》お鈴ハ少し進み寄りて小聲に、《貴孃何故あんな言おつしやいますの？》《何を？》《あんな言おつしやッて……妾は嫌でございますよ。》《何だらうあんな言ッて？》《今おつしやッた言》

《今？何を云つたらう妾……》《今増山さん許でおつしやツたぢやムいませんか。》《増山さん許で？如何な事云つたらう？妾は忘れてしまつたワ、》と、一向に張合なければ、お鈴は少しく焦思し様子にて、《そんなら宜敷ございます。》と、キッパリ云ひて其儘黙るに、花江は稍々氣味悪くなりしか、ぢつとお鈴の顔を見上げながら、《オイ鈴！怒つたのかイ？》《何も怒る譯はムいません。》《だつて……恐い顔してるぢやないか。妾しが先刻云つ言が、氣に障つたら堪忍してお呉れ！何を云つたか知らないけども》ト、可愛らしき聲にて謝罪る様に云ふに、お鈴も亦氣の毒になりて笑顔を作り、《なにも左様おつしやるとは無いのでムいますけども、若し誰か聞いて居りますと悪うムいますから、此からはあんな言をおつしやらないで居て下さいましよ。》《あんな言つて……一体何の事だねヱ？それを云はないぢや解りやしないや子。》と、花江は眞實腑に落ちぬと見ゑ、眞顔に成りて問ひ返すに、お鈴は尚も四邊を見まはしつゝ、《先刻貴孃は増山さんに……アノ此花は鈴が折つたんだから、大切にしてお置なさいッておつしやいましてしやう。》《ハアそれハ云つた。》《其事で御坐い升。》花江はかくと聞くより、さも合點のゆかぬ様子にて、お鈴の顔を打守り、何故それが云ふて悪いのか、今一度問ひ返へさんとせしが。お鈴の何やら物思はしげなる顔色に、其機嫌を量りかね、口へは出さで躊躇ひけり。

此時奥の方にて、花江！花江！と母の呼ぶ聲に、花江は急ぎ座敷の方へ走りゆけバ、お鈴は其儘元の枝折戸より、勝手の方へ歸り來ぬ。

此方は例の勝吉、一人部屋にて書見せしが、學校に出づべき時間に漸く近づきしかば、まづ身支度に取掛らんと、押入の中につくね込みし、袴を出だして穿かんとぜし時、不圖心付き見れば、紐付の處二三寸、昨日綻びたるまゝ繕はであり。かくては此儘穿くと叶はず、さりとて自ら繕はんにも、男の手術には覺束なければ、家婢に賴みて縫ふて貰はんト、やがて之を持ちて女部屋に行けば、内には例のお鈴のみ、毛糸細工に餘念なし。

勝吉は襖の外にて瞬時逡巡ひしが、思ひ切て內に入り、『アノ誠に濟みませんが、一寸此處を縫つてもらへますまいか。』ト云ひつゝ袴の綻處を示せば、お鈴は其處をよくも見ず、押入の中より小さき針箱を取り出し、『よく出來ませんけれども……』と云ひつゝ袴を受取りて、覺束無げに針を運ばせぬ。

勝吉は傍に屈みて、出來上るを待ちながら、お鈴の橫顏をつく〴〵と、見れば見る程不思議にも、鏡にて見るわが顏に、瓜を二ッの處あり。他人の空似か知らねども、兼て尋ぬるわが妹の、もし世にあらば年頃も、顏容も亦斯くあらんト、思へばいよ〳〵懷かしく、機會を見合せ其素性を、糺して見んと思ひし折柄、今こそ丁度好機會なれトやがて膝を少し進ませ、『お鈴さん！ 妙な事を聞く樣だが、お前の阿父さんや阿母さんは、まだ生きて居るのか？ エ』と、云へばお鈴は顏紅らめ、霎時言葉も無かりしが。『ハイ阿父さんは死りましたが、阿母さんは田舍に居ります。』漸く洩れし此の返答、先づ勝吉の胸を躍らせぬ。

吾にも父亡く母のみ存す。彼にも父なく母のみ存すと云ふ、さては吾が想像の矢も、正鵠近く進みしを
と、波立つ胸を押し鎮め、勝吉は尙語を次ぎて、《其阿父さんは何時歿つたの？》と問へば。《アノ一昨
年で御坐います。》と、……是も反應ある返辭。勝吉はや丶急き込みて、《それではお前は、其阿父さんの
死ぬ時に、側に居やしなかつたのだらう。》と、第三に放ちし矢は無論外さぬ覺悟なりしに、此度はお鈴
頭を振りて、《イヽヱ死ぬ迄側に看病して居ました。》ト、埒も無くはね返へされぬ。
話頭變りて彼の里子は、先刻に勝吉の出で去りし後、尙暫時は書筆持て、書面を繕ひ居たりしが、やが
て是にも倦みたりけん、靜かに自己が居間を出で、母の部屋に行きて見れば、母は此時仲働きのお初を
相手に夜具の綿を入れて居り、其の傍には妹の花江が、手傳ひ顔に控へ居るに、里子も側に坐りて、《わ
手傳ひ致しましやうか。》と、串戯半分に云へば、お初も串戯半分に、《さア何卒お願ひ申します。妾は手
が荒れて居りますので、綿に引かゝつて、ホヽヽ、仕樣が無いのでムいますよ。》《眞綿と角觝取つて…
…ほんとに好い取組だと。》《またあんな事を……御孃樣のお口にはどうせ敵ひません。どうせ眞綿は白
うムいますし、妾の手ハ眞黑でムいますから、雪と炭團でムいます。》《アラあんな氣を廻はして、ホヽ
ヽヽ、お前の方が餘程口が達者だよ。》《どうせ多辨でムいます。お鈴どんの樣に溫順は出來ませんも
の。》と、お初は里子をよい敵手にして、頻りに下らぬ事を饒舌り居るを、片頬笑みつゝ聞き居たりし母
の時子は、此時漸く口を開きて、《ほんにお鈴と云へバ、今度來た增山は、お鈴によく似て居るでは無い

か。』と、云へばお初は引取りて、『さア誰でもさう申して居りますよ。眼元から口付がまるで生寫しで厶いますチ……それで奥樣、昨日もお鈴どんに喧嘩ひましたら、眞赤に成て腹を立つて、ほんとに可笑しいので厶いますよ……自分でも腹の中では、嬉しいので厶いましやうが、まだ年が行かないもんで厶いますから、耻かしいので厶いますねエ。』『年の行かない者を可愛さうに、あんまりお責めでないよ。』『ナニ責める譯では厶いませんが、ツイ面白いもんで厶いますから。』

里子は傍に在りて此話を聞き居たりしが、不圖何やら思ひ出せし如く、やがて此場を立ち去り、茶の間より臺所ゐ出で、さて女部屋の方に行かんとする時、只見れば半ば開きたる襖の陰より、男の後影少し現はれて、而も勝吉が姿に似たり。里子は之を見付けしより、何思ひけん足音を竊み、ソト走りて其隣なる、小さき部屋に身を潛め、呼吸を殺して樣子を覗ひぬ。

かくとも知らぬ二人の者は、前よりの話を續けて『それでは其阿父さんの死ぬまで、お前は側に居たと云ふんだネ?』『エヽ。』『少し可怪しいな。……それは眞實の阿父さんかイ?』『エー。』『それぢやアお前は一体お國は何處だ?』『江州です。』『江州は?』『堅田の側です。』『阿父さんは何をして居た?』『百姓です。』『名は?』『黒須新左衛門!』『阿母さんは?』『桑!』『それでお前は幼少い自分からお鈴ト云ふ名か。』『エヽ。』『只た一人?同胞ハ無いの?』『ありません。』『幾才の年に田舍を出たの?』『去年……十四の時で厶います。』『田舍に居た時ハ何をして居たの?』『時々畠へ出で、阿父さんの手傳をしたり、山へ行て薪

を拾つたりして居たんです。》《阿父さんい何病で死んだの？》《肺病です。永い事煩つてとう〳〵死んでしまいました。それで、仕方がないから阿母さんが、妾を連れて東京へ奉公に出して、自分はまた田舎へ歸つて、一人で百姓をしてるんです。》《成る程……》ト云ひつゝおとは獨語、《それでは矢張り違ふかしらん。》

《其 七》

暫時してお鈴は、袴の綻處を繕ひ了り、勝吉にそれを返しつゝ、《何故郎君其樣な事御聞きなさるんです？》と、訝かしげに問ひかけぬ。これも先前より吾身の上を、あまりに委敷尋ねられて、少しく心に掛ればなるべし。

勝吉は四邊を見廻はせしが、やがて稍々聲を低めて、《ナニ、何故と云ふ事も無いけれども……もしや私の……妹ぢやないかと思つてサ》と、言ひ放しておきながら、流石に極まり惡く成りしか、ツト立上りて部屋を出でぬ。……其勝吉にい氣付かざりしが、此時お鈴の顏の色は、急に夕日を受けし如く、耻かしげに差しうつむきぬ。

さても此家に住み込みし、其當初より勝吉は、彼のお鈴に眼を注ぎ、あまりに吾とよく肖たれば、もしや尋ねる妹かと、常々心に思ひし故、今日しも人無き折を幸ひ、其素性を尋ねしに、案に相違の彼が返答、故鄉も違へば親も異り。……さては全く他人かと、思ふものから懲いに、吾と面の肖たるだけ、何

うやら他人の心地せず。床しくも又懐かしく、果は愛しく慕はしく、其愛らしい顔見る時は、何となく嬉しくなり。それと親しく咄す事が、何よりも樂みに思はれて、吾しらずウカ／＼と、……是や戀の初峯入り、辿りゆくこそ不思議なれ。

實に戀てふ峰の深さ、其頂きに登りゆくに、誰も吾から進む者は無けれど、麓に路の幾筋もありて、思ひもよらぬ處より、何時かは次第に踏み迷ひ、果は歸る路だに失ふとあり。豈に愼むべき事ならずや。

さても勝吉は、其儘自己が部屋に歸り、支度をなして學校に出でしが、尚お鈴の事のみ心に掛りて、何となく嬉しき樣にもあり、又物苦しき樣にも覺え、心は漸く上の空になりて、何事も手につかばこそ。三時間ほどの授業の中、何を學びしか身にも染まず。夕方になりてまた家に歸り、夕餉を濟まして机に對ひしが、まだ本をも開かず、筆をも取らず、一人茫然となし居る折柄、隔ての襖靜に開きて、入り來る者ありけり。勝吉は後をふり返り見れば、思ひもかけず例の里子なるに、驚きて畏まれば、里子は笑を含みて、『増山さん少しお願ひがあるの。』『何でムいますか？』『お安い御用よ。』『ハイ。』『アノ手紙の上書してくださいな！』『其樣な事私におつしやらずとも、御自分で御書きなさればよいぢやムいませんか。』『所が書けないから頼むんです。後生！一寸此へ！』

里子はズッと進みて、机の傍に坐を占め、『サア此へ……書くとは此通り』と、封したるまゝの一通の書狀に、晝間屆きし郵便をならべて勝吉が眼前に置きぬ。

されども勝吉は筆を取らず、迷惑さうに頭を掻きて、「是は然し御免を蒙り度う厶いますネ。御自分でお書き遊ばした方が宜敷う厶いますよ。」「妾は書けないから頼むんぢやありませんか。」「書けないとが厶いますものか。」「イヽエ書けません。」「それぢやア今迄は如何なさいました？」

里子は少し行き詰まりしが、さあらぬ体にて、「其樣な理屈を云はずに、早く書いて頂戴よ。」「どうも困りましたナ……」「郎君がそれを書いてくれない中は、妾は何時迄も此處を退きませんよ。」

里子が先前の擧動より、此方は太く恐懼を抱き居れば、其傍に在るとだに、何とやら氣味惡く、早く此場を去らせんと思へど、其需に應せぬ中は、出でヽ行くべき樣子なきに、餘義無く筆を取あげて、其上書を認めん爲め、初めて先方の名を見れば。……鈴木某と云へる者なり。

勝吉は何の氣もなく、宿所より書き續けて、其名の最初の字を書きかけし時、側に見て居た里子は急に袖を口にあてヽ、何事ぞ！クスリと笑ひぬ。

（其　八）

かヽる處へ花江は、平常の如く本を持ちて、「増山さん復習つて頂戴！」と、云ひつヽ忙しく入り來たりしが、姉を見るより走り寄りて、「まア姉さん此處に居らしつたの？」と、云ふを里子は制して、「何だねエ大きな聲で！」と、斜めに一寸睨み付くれば花江は其れに驚きもせず、「だつて今阿母樣が呼んで居らしつてよ。」「解つたよ、今行きますさアね。」ト仕樣事なしに半ば立上り、尚モヂ〳〵して居る中漸々書き了は

りし件の書状を、受取りて懐中に收め、『おほきに難有うムいました。』と、禮を云ひて出で行けば、代りて其處に妹の花江が、陣を構へてはや本を開きぬ。

一つ拂へばまた一つ。袖にまつはる猫を追へば、またも小犬の膝に取りつく。……勝吉はさも五月蠅氣に、花江が本を復習つてやりしが、元より心此處にあらねば、譯も無き字を讀みちがへ、また行を飛ばし抔して、却て花江に笑はるゝこともあり。

漸くにして復習も濟みしに、尚花江は立去らず。机の上に積み重ねし、洋書を一々引出しては、解りもせぬに開き見て、繪解など所望するに、此方はいよ／＼弱はり果て、碌に挨拶もせざるにぞ、果は花江も、稍々不興顔になりて、奥の方へと歸り行きぬ。

後に勝吉は、漸々重荷を卸せし心地。四邊に人もあらざれば、アヽ……と長き溜息吐き、差し上る樣に欠伸をして、其手を頭の後に組み、其儘仰視に倒れて、霎時は天井を睨み詰めたり。

此時勝吉の心中、假に鏡に寫るものとすれば恐らくは如此。

……思へば／＼、實に不思議でならない。あゝも似た者があるかしらん。其癖素性を聞て見れば、すつかり違て居る樣子。……尤もわが妹とても、襁褓の中に別れたので、其顔に知覺は無から、果して吾に似て居るやら、まるで似て居ぬやら、又……誠に忌はしい事ではあるが、今は早や此世に亡い者やら、それすら少しも知れて居らぬに、只顔の似て居る計りで、直ぐにわが妹ではあるまいかと、思つたのは

ちと輕卒な話だ。が……あの可愛らしい眼元！あの利發らしい口付！……よしんば吾が妹でないとしても、かくまで吾に似て居るは、何か……佛說に所謂約束と云ふやうなもの丶、兩人の間に成り立つて居るのではあるまいか。……馬鹿な！其樣な事のある筈もないが、兎に角彼は……虛心平氣な眼で見ても可憐な少女には相違ない。で吾が妹と思ふのも、否、妹の樣に思ふのも、否、妹の樣に愛しく思ふのも、万更無理な話でゝあるまいト……自分で理屈をつける事も無いが……〇玆にまた心に懸るのは彼の里子孃だ、吾が此家へ來た當座から、頻りに馴々しく仕向ける、それは彼の孃の性質であるとしても、今日の晝間のあの事は如何だ？……吾を自分の部屋へ〆め込んで置いて、自分と吾とを繪に畵いた鷄の雌雄に譬へて……舌たるいあの言葉遣ひゝ何だ？茶屋の女か藝娼妓なら兎も角、苟にも良家の處女として……實に片腹痛い事だ。それのみか今も今で、たかゞ手紙の上書位、自分で書いても濟む事を、態々持て來て吾に書かせ、まだ其上に吾が鈴木と書きかけた時、側でクスりと笑つて居た。其冷笑は、吾字の可笑いからでは無く、確に他の意味あつての所業。思ふに吾を嬲る心算で、あんな眞似をしたに違ひない。……ほんに夫を思へば未思當る事がある、先刻花江孃が花を呉た時のあの言葉。あれも底意あつての所爲に極まつた。揃ひも揃つて姉妹が、吾を嬲らうとは失敬極まる。……然し、思へば恐しいもの、忍ぶれど色に出にけりとやら、まだ自分の口からゝ、一度も口外した覺えの無いに、はやくも人に悟られるとは、てもさても……人の目が鋭いのか、吾が心の鈍いのか。……ろゝ兎も角、此事次第に弘まつて、

若しも主人公夫婦に知れた時は……ト思ふて此處に至る時、俄然として起き上り、机の縁に兩手をかけて、キツト四邊を見廻はせしが、さて何物を見ん爲めなりしか、そは自分にも解らざりき。

《其　九》

はや霜月も末となりて、紅葉漸うに移ろへば、庭の手水鉢に薄氷張りて、此二三日はメツキリ寒氣を増しぬ。

この爲にや勝吉は、少しく感冒の心地なりしが、元より食客の事なれば、堪ゆる丈は堪ゑんものと、勉めて學校へも出でし程に、病勢次第に增して、頭は痛み胸は苦しく、我慢も出來ずなりしかば、無餘儀醫者にかゝりて藥を貰ひ、遂には枕に就く事となれり。

さなきだに上下の評判よき勝吉なれば、病にかゝるとも不自由はなく、家婢共交る〳〵來りて、粥を進めるもあれば、藥の世話をするものもあり。また例の里子花江、果は主人夫婦まで、時々見舞に來るなど、尋常の食客には得難き迄、手厚き介抱うけたりける。

高が感冒と一口に云へど、元より侮るべき病ならず、今は氣管支にカタルを起して、出で入る呼吸の苦しきのみか、熱氣も卅八度を越ゑしまゝ、未だ少しも下る景色なし。此分にて尙進まば、遂には肋膜炎と變じて、平癒にも日數を費やすべしとは、出入の醫學士の診斷なり。

されは日を經れども、少しも全快の模樣なきに、勝吉も今更最初の不養生を悔ひ、且つは食客の分際として、主人を初め他の者にまで、何時までも厄介を掛ると、いかにも心苦しければ、何卒早く癒らんものと、氣はあせれども儘ならず、獨り胸のみ痛め居たり。

今朝は天氣も心地好く晴れて、病勢もやゝ衰へて見えしかば、勝吉はやをら身を起し、枕を立てゝ頰杖つき、病に細りし吾に膝頭を、茫然として打ち眺め居る處へ、入り來れるは彼のお鈴なり。

黑塗の圓盆の上に、粥を入れたる土鍋と、飯喰茶碗に梅干を載せたる小皿を添へて、勝吉が枕元に持ち來り、靜に下に置きて勝吉の方を見やり、『如何です今朝程ハ？』

勝吉は靜に顧みしが、『難有う……まア少しは快い樣です。』『起きて居て可いんですか、冷ゑるといけませんよ。』『今朝は少し心持が快かつたから、一寸起き直つて見たんです。』『少し快くなつたと云つて、油斷は出來ませんよ。』と、土鍋の蓋を取り、『早く喰物があがれるやうに成らないと、ほんとに不可ねエ。』と、云ひつゝ粥を盛るお鈴の手許を、熱に弱りてウットリしたる眼にて、勝吉はヂッと打ち守りてありしが、何思ひけん涙組み、二ツ三ツ數瞬きて後、手の甲にてソト拭ひぬ。

お鈴はそれと心づかず、茶碗を出して進むれば、勝吉はこれを受取り、覺束無げに箸取りて、辛うじて一口喰べしのみ、其儘膝に手を扣へ、さし俯視きて默然たり。

お鈴は氣遣はしげに其顏を見込みて、『あがれませんか。』云へども答辭無し。『如何かなすつたの？』再び

問へども尙無言。

《あがれないのなら、もつと後刻にしましやうか》と、お鈴は甲斐々々しく盆を出して、茶碗を返さしめんとするよ、勝吉は漸く面を上げ《イヽヱ喰べられないのでは無いが……》と、云ひさして又お鈴の方を、ヂッと見詰めたる其顏見れば、……色靑ざめて頰骨秀で、常は愛らしく見えし口の邊も、無遠慮に髭生へて、凉しき眼も深く落ち、而も睫毛に露を宿せり。

かく哀れにも亦物凄き顏して、ヂッと見詰められ、お鈴は、恐ろしきか、耻かしきか、面を外向けて斜めに垂れ、美しき其襟脚のみ見せて、是も暫時は無言なりしが、やゝありて思ひ出せし如く、《ほんとにもウ喰りませんか。》と、云へば勝吉も思ひ出せし如く、急ぎて粥を啜り込まんとする時、込みあげる咳に身を悶きて、思はず茶碗を前に置き、枕に縋りて突伏せば、お鈴は周章てヽ伸びあがり、勝吉の脊をば撫でんとして……また躊躇ひて……獨りとつおいつ！

されども其の苦しさを、見るに見かねて遂に身を寄せ、脊を摩らんとする折しも、誰とは知らず後の方にて、襖を明けし音せしが、其まヽピシヤリと〆め切りて、見れども人の影ハ無し。

（其　十）

偶々の好天氣、殊に今日は主人夫婦も、朝から出でヽ御留守なれば、其中から溜つて居た洗濯物を、此間に皆洗うて置かうト、例のお初は井戸端に出て、大きな盥を前に扣へ、宮重大根にしては少し黑過る

腕を、肘のあたりまで現はして、ジャボ〳〵遣つて居る處へ、是も少しばかりの汚れ物を持て、手傳ひ旁々出で來たりしは、例のお鈴なり。

お初ハかくと見るより、はや喧嘩ふ了簡、『お鈴さん只今はお樂しみ！』と、云へどもお鈴にはよく聞えざりしか、『何が？』と問ひ返せば、『お前さん今迄何處に居ました？』『増山さん許へ粥を持つて行たんだワ。』『ホヽヽだからお樂しみと云ふんだァね。』『アラ……またあんな事。妾ハ知らないワ。』や、腹立しげに云ひ放ちて、やがて自已も盥を持ち出し、水を酌まんと釣瓶繩に手を掛るを、お初は止めて、『お鈴さん、洗濯物なら向ふの大釜にお湯があるよ。此寒いのに水で洗つてたまるものかネ。また胝でも切らすと、何處かの人に濟まないよ。』『もう廢して頂戴よ。』『何をさ？』『いろんな事云ふんだもの。』『何も云やしないぢやないか。可笑しな人だネ變に氣を廻はして……』相手に成つては面倒と、お鈴はまた默つて湯を酌み込み、洗濯に取り掛りしが、兎角お初は執念く纒はりて、『お鈴さん何もそんなにふくれなくツても可いぢやないか。』『何も怒りやしませんワ。』『それぢやアいゝけど……増山さんは如何な塩梅だイ？』『もう知りませんよ。』『ホヽヽ増山さんの塩梅を聞くのに、そんなに怒るとは無いぢやないか。お前さんは今まで側に着ひて居たから……』『側に着いてやしませんわ。』『まあさ！側に居たから、今朝は如何な塩梅だか、それを聞く計りぢやないか。それを知らないとはあるまい。』『今朝は少しは快いんですとサ。』『左樣？それはまァ御安心だ。あゝやつて阿母さん

は御國に置ひて、自分だけ遙々東京へ出て來て、只一人餘所の家の厄介に成て居て、只さへ心細い處へ、また塩梅が惡いと來ちやア、何樣に心細いか知れやしない、妾でさへ、ちつと風邪でも引いたり、歯か痛かつたりする時にや、阿母さんの事を思ひ出すもの。……尤も男はまア其樣な事も無からうけども、增山さんなんぞは、平常からあゝ云ふ優しい方だから、時々はお國の事や阿母さんの事を、思ひ出すとがあるに違ひ無い。ほんとにそれは、親の側位好いものはないから子。だからお前さんでも、時々行て慰さめて上げないと、段々鹽梅が惡くなる計りだよ。》《其樣に云ふんなら、お初さん行て慰めてお上げなさいな。》《オット其處だよ。妾が行て濟む事なら、幾何でも慰めてあげたいけども、其處がそれ……矢張りお前さんで無けれやならない、譯があるから仕樣が無い。》《またあんな事云ッて、何で其樣な譯があるもんですか！》《などゝお前さんハとぼけるから憎らしいよお前さんだッて增山さんの側へ行くのは、萬更嫌でもあるまい。》《アラ嫌だワ。》《だつて先刻なんぞ、增山さんが苦しがつて突伏してると、お前さんが後から摩つて上げてる……ほんとにあの信切には、增山さんより妾が感心しちまつたよ。》云はれてギックリ！お鈴は顏も燃る心地、默然として言葉も無きに、お初ハ尚も付け入りて、《妾でさへ左樣だもの、男の身に成て見たら、如何に嬉しからうと思つて……》《だつて彼の時はあんまり苦さうだから、一寸摩つたばつかりだワ。……妾はもう增山さん許へは、此から決して行かないからいゝ。》《アレ！お前さんは左樣取るからいけないよ。それや人の苦しがつてる時にや、摩つて遣るのは當然の話で、

何も妾は惡いたア云やしない。此からも度々行つて、看病してあげるがいゝさ。』『いゝゑもう行きません。』『其樣な事云はぞに行ておあげな！』『……いゝゑもう行きません。』『アレ、ほんとに可笑しな娘だねエ。』『もう……い……いき……ままん』云ふ中洗濯の手は止まりて、首うな垂れると見ゆるほどに。……空には知らぬ村時雨、濕れたる手に袂を持ちて、チット前齒ゑ嚙みしめぬ。

《其十二》

斯くて十日計りも過ぎて後、勝吉の病は漸く癒へて、今は熱氣も去り食慾も進み、血色も稍々常に復せしかば、悦ぶと大方ならず。尚反動しの出ぬやうに用心せよと云ふをも聞かで、床を上げ席を清め今まで世話に成りし報恩にと、以前に增して骨を惜まず、活潑に働く樣になりぬ。

或る日勝吉は、學校より歸りて見るに、彼の榮一が許より端書來りて、至急面談致し度とあれば、今宵にも可參との文言なり。

何事ならんと勝吉は、急ぎ夕飯を濟まして、取る物も取り敢へず、榮一が許へ尋ね來れば、榮一はかくと見るより、例に似合はず奥へ通し、自己が書齋へ引き入れたり。

勝吉はまづ下手に坐を占め、慇懃に手をつかへて、『今日は御手紙を有難ふムいました。……で早速上りましたが、何ぞ御用で？』と、云へば榮一は落つきたる語氣にて、『ハア少し君に話し度い事があつたか

ら、それでまア一寸端書を出したんだが。……然しゆつくりして行くが好い。』『ハイ有難うムいます。』『此間中少し惡かつたさうだナ……私が居れば早速診てやつたものを、生憎千葉の方へ出張して居つて、漸く一昨日歸つた處だから、遂に見舞ひもせんで濟まなかつた。』『どう致しまして。實に皆樣には一方ならん御厄介に成りまして、何とも御禮の申し樣もムいません。』『もうさつぱり快よいか。』『ハイお蔭樣でもう全快致しました。』『書生の中に愼むべきは、第一に不養生、第二に不勉強、……第三には不品行だから……

……よく氣を付けて居らんと、此三點で身躰を損つてしまふ。』

と、やゝ言葉に力を入れて、妙に意味あり氣に云ふにぞ、勝吉も少しく嚴格になりて、『御道理でムいます。』と云へば、榮一は半ば獨語の樣に、『然し若い中には、なか／＼油斷の成らんもんだて。』と、尚も底意ある如く、勝吉の顏をヂロリと見遣りぬ。

元より吾に暗き覺え無けれど、さりとてまた充分に、潔白なりとも云ひ難ければ、此言葉に薄氣味惡く、吾知らず首を垂れて、段通の摸樣を見詰めぬ。

此にて會話はちよと途切れしが、稍々ありて榮一は語氣を改め、『君もまだ若いから、不心得の無い樣に、氣を付けんといかんぜ！え！』と、眞綿に包む枳梡の、底に針ある榮一が言葉。勝吉の胸も漸く轟き、『ハイ』と洩らせし返辭も震へば、榮一は尙語を次ぎて、『斯う云へば君は腹を立てるか知らんが、君の利

益を思ふて云ふ事だから、決して惡く思ふてはいかんぞ。ト云ふのは他の事でもない……あのお鈴と云ふ下女の事だて。』と、云ひ了つて茶を一口。……さてはト思へば勝吉も、はや脇の下に汗ビッショリ。榮一も流石に云ひ憎くさうに、『尤も證據の無い事を、彼是云ふのは甚だ良からぬ事だが、兎に角火の無い處に煙の立たぬものとすれば、面白からぬ風評のあるのも……まアあまり面白く無い事だと思はれるから……決して君を咎めるのでは無いがまづ注意の爲に云つて置くのだ。それで君に、毫も暗い覺えが無いならそれこそ重疊、萬一あつたとした時には、世話をした私も甚だ面目ない話だから、事の大きくならん中にと思つて、實は君を一寸呼んだのだ。で、阿爺の方でも、此樣な噂のあるのは甚だ面白くないからと云つて、一ト先づ女は下げる事にしたが、君は奉公人と違ひ、修業の爲に出京して居るものの事だから、滅多な事をして一身を傷つけるのも氣の毒と思つて……まづ私から注意をする迄に止めて置いた。……君も此樣な事聞くのは甚だ面白くあるまい、亦私だと云つて、此樣な事云ふのは甚だ迷惑だが、是も皆君の爲めだ。出世前の躰に傷を付けまいと思ふから云ふので、決して惡く思ふては困るぞ！え？よいか。』と、威すが如く賺すが如く、情を籠めて說諭しぬ。

（其十二）

思ひ設けぬ榮一が意見。……元より吾はお鈴を戀へども、只是獨り胸を焦せるのみにて、人に耻づべき程の事、未だ微塵も覺えなし。さるに何ぞや今日の仕儀、注意の爲めとは云ふものゝ、さりとてはまた

改まつて、さも仔細あり氣な說諭立。吾が利益を思ふ志はうれしけれど、まださほどに深き罪を犯したりとも覺えぬ者を、かく云はれるは恨めしゝ、トは思へども相手は恩人、憖じ言譯する時は、却つて疑惑を增す基。兎角ハ素直に聞くこそよけれと、少しは焦燥立つ腹の虫を抑へ、涙を吞んで勝吉は、只唯々と答ふるのみ、心の中や如何ならん。

されば榮一も、あまり强くは云ひ兼ねて、果は話は他へ紛らし、時刻も次第に移りし程に、勝吉はやがて暇を告げ、榮一が家を立ち出でたり。

途すがら彼是と、榮一の言葉を繰り返して、吾と問ひ吾と答へ、樣々に考ふるに、兎角腑に落ちぬとばかり。殊にお鈴には暇を取らしたと云ふ事、合點の行かぬ第一にて、……只獨り胸を焦せる吾を、かほどに云ふさへちと過ぎたりと思ふに、何も知らぬ彼のお鈴を、追ひ出すとは何事ぞ。常から大度な主人には、そも〳〵似合はしからぬ仕方。……是にハ何か譯があらう、事に依つたら何處やらに、腹のよからぬ者あつて、針ほどの事を棒ほどに、讒訴したのでハあるまいか。……それにしても氣の毒なはお鈴吾に戀はれたばつかりに、身に知らぬ濡衣を着せられて、而も暇まで取されたとやら、『ほんに今日はまだ顏を見なんだが、さてはわが留守の間に、はや宿へ歸つたものか。かへす〳〵も氣の毒な、吾故に此の災難。嘸や今頃は吾を恨んで……憎い奴と思ふてゞあらう。アヽ濟まなんだ。許して呉れ！とは云ふものゝ、是も皆、間に誰やら遊戲をして、二人に憂目を見せるものとすれば、罪は萬更吾のみにハ無い。

それを吾のみ恨まれてハ、彌々面白からぬ話だ、兎角は今一度お鈴に逢ふて、此辯解をしたいものだが……。イヤ〳〵それこそ眞の瓜田の履、もしや榮一樣にでも聞えたなら、噓も實に成てしまふ。……

……ト云ふて此儘棄て置ひては、一生吾ハ恨まれ損、それも甚だ快からぬぞ……

彼を思ひ是を念へば、胸は次第に結ぼれるのみ、足の運びもいと鈍く、途敢果少しも行かざりけり。折から十日計りの月は、漸く雲の圍みを出でゝ、只ある高塀の上を越ゆれば、勝吉の影は横さまに、細く長く地を染めて、垂れたる首の寫れるもをかし。不圖心付きて見れば、……吾はそも何の爲に、故郷へ母のみ一人殘して、此東京へは出でけるぞ？ 修業の爲めに出しにあらずや。さるを區々たる一少女の爲に、心を奪はれ胸を焦がし、剩さへ名譽まで、自ら汚さんとする鈍ましさよ。而も吾は今食客の身分。其主人の恩をも報ひで、一端の情に吾を忘るゝと、吾ながら云甲斐無しと、何物にや感じけん、勝吉は俄に奮激して、同時に步行も速になりしが、漸く鶴岡の家近くなりし頃、とある曲り角の處に、一人の女佇み居て、此方を見るより進み寄り、『增山さん』と呼びかけたり。

勝吉は驚きて、月光に透かし見れば、仲働のお初なるに、稍々安心はせしものゝ、今頃に何用あつて、かゝる處に佇み居るや。そも亦不審なれば、此方よりも聲をかけて、『お初さんぢやないか。何だッて今頃此樣な處に居るんだ？』と云へば、お初はいよ〳〵近く寄りて、『妾は貴郞を待てたんです。』『ナニ僕を待つて……？』『ゑゝ。』『何か用か。』『咄したい事があるから。』云ひつゝ四邊を見廻はして、一層聲を

低め、《増山さん……お鈴どんは今日お暇が出て下りましたよ。》と云ふに、此方ははや承知あれど、態とさあらぬ体にて、《左樣かイ。》ト云へば此方は急き込みて、《左樣かイ處ぢやありませんやチ、ほんとに可愛さうなんですよ……それで妾が貴郎に是非云なければや、ならないとがあるんです。》

（其十三）

仔細あり氣なお初の言葉に、勝吉も氣に懸れば、《何だ、云ひ度いことゝは？》と、言葉忙はしく問ひ返せは、お初は尙も四邊に心を配りて、《それより先に、妾は貴郎に謝罪らなければならない事があるんですよ。》《何を謝罪るんだチ？》《貴郎はまだ、何故お鈴どんが御暇に成つたか、其譯を御存じありますまい。》《……アゝまだ知らないさ。》《お鈴どんこそほんとに可愛さうなんですよ。》《何だかお前さんの云ふ事は、ちつとも連續が解らない。一体如何したと云ふんだねヱ？》《さアそれを今云ふんでざアチ。………誰か來やしないか知ら……》《大丈夫だ早くお咄し！》《アノ斯う云ふ譯なんですよ。今日正午後に、お鈴どんお奥樣の許へ呼ばれて、暫時何か云はれて居ましたッけが、御奥から下つて來た時見ると、眼を眞赤にしてますから、例に無い事だが……何か御小言でも受けて來たんかと思つて、お鈴どん何の御用だつたイ？ト聞くと、あの娘は妾の顏を恨めしさうに見てましたッけが、やがて、アノお初どん、妾はお暇が出たんだよト、云ひながら突伏して、泣き出すぢやありませんか。妾はいよ〳〵不審が晴れないから、一体それは如何した譯だイ？と聞くと、その譯は奥樣もおつしやらないから、妾にも解らないけ

ども……妾は悔しくッてたまらないト、云つてまた泣き出すんですよ。妾は側に居て氣の毒でたまらないから、種々に宥めながら聞きましたけども、奥様がおつしやらないから解らないとばつかりで、少しも譯を云はず、只悔しい〳〵と云つてるんですよ。……其處で段々様子を考て見ると、何でもお鈴どんはお奥で、何か……、貴郎怒つちやいけませんよ、何か貴郎と譯でもあるやうに云はれて、それで御暇が出る事に成つたらしいんです。尤も此間中からお孃様方が、時々變な事をおつしやッて居らつしやいましたし、又……貴郎怒つちやいけませんよ。……誠にすまないけども、妾も面白半分に、何だとか彼だとか、喧嘩つた事もあるんです。ですから、萬一するとその事が、何時か奥様のお耳へ這入て、此樣な事に成たのかも知れません。それに……斯う申しちや何だか、御主人の惡口を云ふ樣だけども、おのお里樣とおつしやる方が、中々尋常大体のお孃樣ではないので。それに、……貴郎怒つちやいけませんよ。少し貴郎に……まア惚れて居らしやるんですよ。いゝえさ、事實なんですよ。それに貴郎の方では、少しも御感覺が無いのみか、……まア、……貴郎怒つちやいけませんよ。まアあのお鈴さんの方を、可愛がるやうな素振が見えたもんだから、少しチン〳〵の氣味で、岡焼半分に奥様へ何樣な事おつしやッたかそれも知れた話では無と、妾はまア思ふんですの。然し妾だッて、……少しも惡氣も無いんですけれども、まア色々冷評したり喧嘩つたりした事もあるから、万更罪の無い事もないト思ふと、さア氣の毒で〳〵、氣に成て〳〵ならないのです。貴郎にも謝罪れなければヤならないと、今云つたのは此事なん

です。其處で增山さん！妾は如何にもお鈴どんが可愛さうでならないから、如何かしてやりたいと思ふんですけども、如何する事も出來ないンですが、貴郞如何かしてお遣んなさいな！」「如何かしてとは？」「あの娘を如何かして、お邸へ歸れるやうにするンでさアね。」「だッて、僕だッて、まア同じ科人ぢやあいか。僕からどうもする譯にはいかんぢやないか。」「だッて貴郞は、まだ幾何か罪が輕い方だから。」「處があんまり輕く無いンだ。實は今日榮一樣に呼び付けられて、酷く油を取られて來たんだ。」「それでは貴郞も其事で……」「左樣さ。」「ぢやアお鈴どんのお暇が出たとも、皆聞いて來たでしやう。」「アヽ。」「まア人の惡い。皆承知して居ながら、妾にばつかり饒舌らして……ほんとに憎らしいよ。」「まア怒つてくれちやこまる。」「怒りやしませんけども。……一体貴郞は是から如何する心算です？」「何如するッて……仕樣が無い。」「仕樣が無いなんて、其樣な不實な事が今更云はれた義理ですか！貴郞はあの娘を可愛さうだとお思ひなさらないのですか！此樣な事に成たのも、みんな貴郞のお蔭です。……それを今更知らぬ顏して、それで貴郞は男なんですか……！」「さう云はれると僕も一言無いが、然し如何する事も出來んのだから。」「だから貴郞は不實ですよ。」「ナニ不實と云ふ譯は無い。今も實は、途々考へて來たんだが、兎に角僕故にあゝ云ふ事に成たのは、いかにも氣の毒だから、一度逢つて詫をしたいと、思つては居るんだが……」「一度逢つて？ほんとに逢つておやんなさるか。」「然し僕は家を知らんから。」「家なら妾が知てます。ほんとに貴郞が逢ふ氣なら、妾が案內してあげますよ。さうすれば彼の娘だつて、何

《何の面目ない事があるもんですか。》《でも、嘸腹を立てるだらう。》《處が増山さん、あの娘も貴郎には……》《馬鹿云へ！》《ほんとに惚れて居ましたよ。》《馬鹿云へ！》《ホヽヽ、そんなにはにかむ事はありませんよ、妾が連れて行てあげますから、……サ、何を愚頭々々してるんです子！》

《其十四》

去る程に彼のお鈴は、今日しも妻君時子に呼ばれて、思ひ設けぬ解雇の辭令。さりとてはまた寐耳に水の、濡衣着せられしは口惜しけれど、それを云ひ解くともならず、其儘部屋へ下りて後、暫時は涙に暮れて、餘所の見る目もいぢらしかりしが、かゝる處へ受人ある、叔母のお鐵と云へる者、はや妻君より通知ありしか、荷物を引取る車の用意までして、態々迎ひに來りしかば、はや是までと心を勵まし、泣く〳〵荷物を取り纒め、衣服を改め支度する程に、朋輩のお初も氣の毒がりて、何くれと世話を燒き、また亂れたる髮の毛を、撫でつけ抔してくれるに、平常ハ彼是嫐られて、心の中に恨みし者も、かゝる時に優しくさるれば、流石情にほだされて、持つべきものは朋輩ぞと、今更頼もしく思はれぬ。

かくて支度も整ひしかば、再び奥へ出で、時子初め里子や花江に、改めて別を告れば、時子も少しは氣の毒に思ひ、麁末ながらも反物に、目錄まで付て餞別に取らせ、尚時々は遊びに來よト、優しき言葉掛らるゝ時、嬉しともつかず悲しともつかず、只涙のみ堰きあげて、面も上げ得ず伏したりしが、お鐵

が側より促がすに、漸く吾を勵まして、奥より又部屋へ歸り、お初にも亦飯炊女にも、永々お世話になりましたト、挨拶して立出でんとすれば、常に似合はず彼のお初が、自己が眼までも泣き腫らし、門の外まで送つて出るに、此方も兎角後髪ひかれながらも車の上に、涙乾す間もあらざりけり。

話說分頭彼のお鐵を、如何なる者ぞと尋ぬるに、こはお鈴が母の弟、傳吉と云へる者の妻にして、叔母とは云へど眞實の、血を分けしものにはあらず。殊に三四年前より良人傳吉の、行方知れずなりし後は、寡婦暮らしに只一人、年頃溜めし臍栗にて、世に云ふ烏金と云ふ物を、近所の貧乏人に貸し付け、血の出る様な利息を取つて、隨分豐に日を送るものなるが、元より性質直ぐならず、且は大の吝嗇なれば、家も態と裏家住、蠶物は簞笥の中に、澤山仕舞つて置きながら、身には常に襤褸を纏ひ、三度の食事も牛麥に、肴も干物の他は用ひず。されば同じ長屋にても、お鐵と其名を呼ぶ者なく、慾深くて口喧しきより、烏婆と渾名して、寄りつく者も無かりけり。

されば彼のお鈴さへ、苟にもわが叔母なるに、常より太く忌み嫌ひて、まだ奉公して居る頃も、お鐵に尋ね來らるゝ時は、眉を顰めて面を外向け、相手に成らで居たりしに、此度暇の出でし上は、他に便るべき處もあらねば、無余義叔母に引取られて、暫時なりとも同じ家に、居ねばならぬ事となりしかば、悲しさ辛さ遣る瀨なく、さてこそ邸を下る時の、悲嘆も一入强かりしまて、彼のお初が不憫がりしも、蓋し此の理由を知ればなれ。

冬の夜もいや九時近く、月はます〳〵冴へ渡れど、老女の化粧に喩へたる、物凄さを増すのみにて、人通りは更に無き、此處四谷鹽町の裏通り、土藏の駒寄と天水桶との間に、四尺計りの路次口あり。夜九時〆切と、札の張り付けたる木戸も、まだ時刻に至らぬかして、三寸許り開け放したるまゝなり。

折から來かゝりたる二人の男女、……女は少し先に立ちて、此路次口を覗き込み、立止まりて後を見返りつゝ、《たしか此處ですよ。》と、云ふも世間を憚る聲。

男は靜に進み寄り、《では此路次の中なんだネ？》《ハア、一番奥の家ですよ……一寸お待ちなさい！妾が行てソッと樣子を見て來るから。》と、云ひつゝ女は先に這入りしが、稍々ありて走り出で、《増山さん一寸來て頂戴！……大變ですよ。》

《其十五》

《……何をメソ〳〵と泣くんだ。手前が勝手に姦通をして、お邸を追ン出されて來ながら、今更身躰を汚すのは嫌だたァ……よくも云へたものだ。ほんとに年端も行かねェ癖に大それた……何處までお前はずう〳〵しいだらう！ナニ、知らねェ？何が知らねェもんか！ナニ覺えは無ェ？とぼけなさんな！覺えの無ェものを奧樣が、何でお暇を下さるものか！え、おい！覺えの無ェものが、何故またお邸を追ン出されたんだよ？増山とか何とか云ふ奴、何樣な奴だか知らねェけども、其書生と好い事しやァがつたからだ

やねエか、云はゞ自業自得だ。それに今に成て高慢な顔して、ヤレ姦通した覺えは無エの、身躰を汚すのは嫌だなんて、ほんとに何處押しやア其樣な音が出る？……オイ泣いてばかり居ずと、妾の云事をよく聞き！妾だつて只た一人の姪だもの、お前の可愛く無エ事は無し、また可愛いと思へばこそ、自家へ置いて甘い物でも喰ハして、今まで奉公をして苦勞を仕て來た埋合せに、少しは樂もさせて遣り度エのは山々だけども、何を云ふにも寡婦暮しで、此樣な裏店に引込で居て、傳さんの居た中なら兎も角、今ぢやア鐚一文、何處から這入る目的も無エから、自分一人が關の山、中々人に喰はせる事ハ出來ねエ。其處へまたお前と云ふ、厄介者に轉がり込まれた日にや、何うも斯うも成りやしねエ、明日から二人とも日干しだ。けども妾だッて、可愛い姪を日干しに仕度かアねエ。と云つて他に仕樣も無エから、先刻も源さんの云つた通り、お炭さん許へ掛つて、妾奉公に出るか、それとも苦界に身を沈めるか、何方一ツに仕ねエと云ふのも、みんなお前の爲めを思ふからだよ。それに……何だ……ヤレ身躰を汚すのは嫌だの、人の玩弄物に成るのは御免だの……それは往昔の人の云ふ事だ。今時其樣な事は流行らねエ。それも根が奇麗な身躰なら兎も角、手前の勝手には書生と姦通して置きやアがつて……それで身躰が汚れて居ねエ積りか！ほんとに……何處まで此娘はずう／＼しいか呆れ返つて物が云へねエ。……何だと？如何かそれバかりは堪忍して呉れ？其代り餘の事は何でもする！勝手にしやがれ？他の事でお前に何が出來る？奉公に出れアまた姦通をしやがるだらう。……まア考へても御覽よ。お前の阿母さんが、初め

てお前を東京へ連れて來た時、妾に何と云つたと思ふ？此娘の身の上は何分頼むと、お前の事を呉々も頼んで行つたぢやねヱか。して見れャ妾が阿母さんに代つて、何處までもお前の事を引受けて遣らなきアならず。またお前の躰だつて、云はゞ妾の勝手次第だ。それに妾の云ふ言を聞かず、我儘ばつかり云ひ張つて、妾に骨ばかり折らしやがる、それでお前濟むと思ふのか！……お……何を？其御恩は忘れねヱ？知れた事サ。此御恩を忘れられてたまるもんか馬鹿々々しい。それほど譯が解つてるなら、妾の云ふ事聞きなせヱな！……聞くなア嫌か、聞かれねヱか……お、もう焦思つてヱ、返辭をしねヱな！……」

* * * * * * * *

戸外には例の勝吉が、お初と共に軒下に、暫時身を寄せ聞き居しが、ます／＼募るお鐵の難題、聞けば聞くほど自己が身を、打たるゝよりも辛ければ、幾度か内に入りて、辨解せんと思へども、かくては尚もお鐵婆の、憤怒を増さんと又躊躇ひ、立ちつ屈みつ身を悶搔きて、胸は張り裂く思ひなり。

お初は斯くと見るよりも、心に何か點頭きて、やがて勝吉に耳語なし、暫時路次の外まで出させ、自己のみまた引返して、再び内に入りにけり。

* * * * * * * *

斯くとも知らぬお鐵婆、涙に沈む彼のお鈴の、何を云ふても返答無きに、今は言葉も無益しと、煙管片手に立上り、尚も聞かずば痛き目見せんと、膝立て直すぞ恐しき。

《其十六》

折から戸外に女の聲、《御免下さい！一寸此處をお開けなすッて！》

お鐵は耳引立て、《何誰ェ？》《妾で厶います。》《妾ぢや解らねェ。》《アノ、番町の鶴岡から參りました。》《番町の鶴岡さんね？》

お鐵は鶴岡と聞くよりも、何事ならんと少しは驚き、澁々ながら立上りて、掛鐵外し戸を明くれば、戸外に佇むお初は喜び、其儘ズッと內に這入りて、一寸お鐵に會釋すれば、お鐵は怪訝な顏色にて、《まアお初さん……何だッて今時分……？》《アノ奧樣の御用で……》《奧樣の御用で？それぢや買物にでも來なすッたのかイ。》《いゝえ其樣な事じやありません、實は今奧樣が、何だか急に御用があるから、お鈴どんを呼んで來いッて、…………それで妾が迎ひに來たんです。》と云ひかけて傍に泣き沈める、お鈴に向ひて言葉忙しく、《お鈴どんね氣の毒だけども、何だか直ぐお前さんを連て來るやうに、奧樣もおつしやッて、今待つて居らつしやる處だから、直ぐに妾と一所に來てお呉れ！》と、云ひつゝずつと進みよりて、お鈴の肩に手を掛け、尙覗き込むやうにして、《ねお鈴どん、如何かおしかい？何をまア其樣に……》と、態としらばくれて宥むれば、お鈴は僅に面を擡げ、お初の顏を見上げながら、未だ何事も云ひ出し兼ねて、泣き腫らしたる眼を數瞬くのみ。

お鐵は思ひがけぬお初の迎ひに、何やら張合の拔けたる心地、呆氣に取られて見て居しが、奧樣よりの

御用とあれば、否む事も成り難けれど、尚も不審の晴ざるに、《そしてお初さん、一体何の御用があるんだらうネ?》と、忙はしく尋れば。お初は態と無造作に、《其様な事聞く間も何もありやしない、妾は直ぐに飛んで來たんですもの……》《何の御用だらう? 御用なら妾に左樣おつしやりさうなものを……》《それや奥樣の御了簡にあることだから、此處で考へなくツても、行きさへすれバ知れまさアね。サお鈴どん、奥樣が待てらつしやるよ、早く支度をおしなさい!》と、はや自己は中腰になり、お鈴を頻りに急がせながらも、意味ありげに目配せすれバ、お鈴も何か樣子は知らねど、今迄恐ろしき叔母の側に居て、憂目見せられし折なれば、お初の言葉に地獄で佛、嬉しき事ハ嬉しけれど、尚また叔母の手前を憚り、ウヂ／＼なして埒わかぬを、お初はそれと心を察し、態と焦思氣にお鈴の手を取り、《サお鈴どん早くお出で! お婆さん大きにお喧ましう》と、引立てる樣に戸外へ出づれバ、尚もお鐵は後につきて、《まア急忙しねエ何の事だ》ト、戸口より半身さし出せしが、サッと吹き込む小嵐に、思はず首を縮ませて、《オヽ寒い!》と身を退きつヽ、忙はしく戸を立て切りぬ。

此間に早くと彼のお初は、お鈴の手を取り速足に、路次を出でヽホット一ト息、《お鈴どん、お前嘸驚いたらう。實は奥樣も誰れも呼んでやしないンだよ。》《アレ、それぢア嘘なの?》《其代り妾が好い人に逢はせてあげる……》と、云ひながらも後に氣を置き、尚半町ほど駈け拔けて、四辻を右に折れ、何やら探し物のある如く、四邊をキロ／＼見合はせしが、やがて或る家の軒下に、ションボリ佇める人影を見

付けて、ツカ〳〵と進みより、『増山さん？』『何だ。』『何ですねェ此樣な處に隱れて……早く出て入らつしやいな！』と、押し殺した樣な聲で云へば、彼方も靜に進み寄りながら、『甘く行つたか。』『甘く行きましたよ……。一寸お鈴どん、御挨拶をおしなさいな！』

初より何の事やら、更に合點のゆかざりしお鈴、此時漸くそれと察して、且は驚き且はまた、嬉しと思ふ心は滿つれど、流石處女の悲しさハ、恥しさのみ先立ちて、挨拶も無く俯視くのみ。

勝吉も亦同じ思ひ、胸は轟く計りにて、何と言葉を掛けやうやら……

〈其十七〉

お初は一人取り持ち顏に、『アノお鈴どん、唐突に呼び出されて、お前さんも嘸驚いたらうねェ。然し是には少し理由があるので……』と、云ひつゝ勝吉の顏を見しが、尙極まり惡る氣に俯視き居るにぞ、自己はまたも語を次ぎて、『其理由ハ今増山さんからもお云なさるだらうが、實は妾も、今日お前さんが下つた後で、いろ〳〵考へて見た處、お前さんの今度の御暇は、全く根も無い事を落度にされたので、それには妾なんぞも……平常からいろ〳〵喧嘩つた覺えがあるから、もしや其樣な事が奥樣のお耳に這入て、それで此樣な譯に成たのではあるまいかと、氣が付いて見ると氣の毒で〳〵、居ても立ても居られないから、どうかしてお前さんに會て、篤と詫言をしなければならず、また及ばずながら骨を折て、奥樣のお心の晴れるやうにしたいと、一人思案は定めたものゝ、其處が女の悲しさで、何うしたら好いか

解らないから、此は一番増山さんと、相談をしてからのことゝ、思ふと生憎増山さんはお留守、何處へいらしつたか知らないけども、家では相談もゆつくり出來ないから歸途を待つて途中で咄さうと、体よく奥様にお暇を戴き、買物に出る風をして、途中へ出て待て居ると、丁度増山さんが歸つていらしつたから、其譯を咄しかけると、増山さんも其のことで、實は今日若旦那樣（榮一の事）に呼ばれて、御意見をうけて來た處で。……私の爲めにお鈴どんに、其樣な迷惑を掛けたのは、如何にも濟まない事だから、一度逢つて謝罪りたいと、同一樣な事をおつしやるから、そんなら妾と一所に行て、謝罪つて來ましやうと、それで先刻お前さん許まで來たんだが、ソッと樣子を覗つて見ると、丁度叔母さんの小言の最中、お前さんを取捕へて、口汚く叱りつけてる處さ、元より一筋縄で行かない婆さんてヱ事は、妾も平常から知てるから、態と増山さんを他所へ隱して、妾丈一人で行て奥樣の御用だと嘘をつき、やつとの思ひで連れ出したんだが、此處迄來れァもう安心だ、ゆつくり話をするが好い！』と、一伍一什を話して聞かすに、お鈴は漸く面を擡げ『それはほんとに有難う』と、僅に聲を洩しけり。

此時勝吉も初めて口を開き『今もお初さんの云ふ通り、今日實は……榮一樣に呼ばれたから、何の用かと行て見ると、思ひがけない……何か私が……お前と譯でも……ある樣に。……元より私の爲めを思つて、云て下さる御意見だから難有く無い事はないが、何を云ふにも覺えのない事……殊にお前は尚更……。それを大業にも暇まで出すとは、ちつと聞こえない話だが、それを今彼是云はうより、兎に角お前

は飛んだ災難……それも皆私ゆゑと思ふと、實に何とも……申譯の無い話だから、是非一度お前に逢つて、謝罪らなければならないと、思ひながら歸て來る時、丁度お初さんに逢つたから、其處で一所に連れられて、此處まで尋ねて來たんだが。……お前は嘸私を恨んでるだらう、憎い奴と思ふだらう……然しそれも仕方がない……腹も立うが堪忍しておくれ！』と、さも云ひ惡くさうに云ひ放せば、お鈴は聞きて頭を振り、『いゝえ……恨みも何も……』と云はんとせしが如何にしけん又も涙にかき暮れぬ。

『アレ、をかしな人だね。増山さんが折角あゝおつしやるのに、何も泣く事は無いぢやないか。』と、お初はお鈴の肩を撫でゝ、慰むれば慰むるほど、身を震はせてしやくりあげ、悲嘆に結局見ざりけり。

お初も今は途方に暮れて、勝吉の方を見やれば、是も何にか感じけん、袂よりそとハンケチを出だして、涙抑ゆる樣子なるにぞ、自己も何時かつり込まれて、吾知らず眼を濕ませしが、稍々ありて獨り點頭き、

『ほんに此樣な往來中で、巡査さんにでも見付かつて、怪しい奴と思はれるのもつまらない。第一此處では寒くつて……それよりか増山さん、何處かへ上つてゆつくりと、話を仕やうぢやありませんか。……あれ向ふに蕎麥屋がある。サ増山さん！お鈴どん！愚頭々々せずとお出でなさいな！』

やがてお初は先に立ちて、只ある蕎麥屋へ這入りしが。勝吉も亦お鈴も、尙逡巡ひて門に佇み、内の樣子を視ひ居るに、お初はまた引返して、『關はないから妾に從いていらつしやい、よう増山さん！』と、勵ます樣に云ひつゝも足速に奥の方なる、二階座敷へと案内しぬ。

《其 十 八》

されども二人は尚ウヂ〳〵、屋根に小犬を上げたる如く、極まり惡氣に蹲踞りて、油烟に煤びし釣洋燈の、薄暗き光明も怕明氣に、面を上げ得で居たりけり。

其中に誂への物も出來れば、其にまづ腹を拵らへ、漸く寒氣も打ち忘れて、やゝ元氣付きし頃お初は思ひ出したる如く、『ほんに妾は……一寸行てお邸の樣子を見て來ますよ。』と、云ふも二人を打ち解けさせん、粹な捌きと知られけり。

されども勝吉は、未だかゝる事に塲馴れぬのみか、臍緒切りてより以來、若き女と同席するは、今宵が眞の初度なれば、嬉しと思ふ心より、物苦しさのみ先立ちて、只お初をば片腕とも、賴みに思ひし折なるに、今其お初に去れてはト、さも周章たる面持にて、『お前ゑ行かれちやア困る、何卒此處に居て呉れないか！』『それは妾も居度うムいますけども……先刻お鐵さんに嘘を吐いて置いたから、萬一あの後でお邸へでも來られると困りますもの。』『そんな事は大丈夫だよ。』『いゝえ、處が大丈夫でないのです。あのお鉄さんと云ふ人が、中々邪推深い人ですから、事に由ると妾を疑つて、後からお邸へ來ないとも云はれません。ですから妾はちよつくら行て、お邸の樣子を見て來ないと、何だか氣が濟みませんから……直きに行て來ます、車で行きや譯はない……』と、云ふ間もはや立ち上るに、勝吉も強いては止め兼ね、迷惑相に差し扣へしが、『それではお前の歸るまで、此處に居ても關はないのか。』『はア何時まで居たつて關やしません、

どうせ直ぐに歸て來ますよ。』『だつて何だか極まりが惡いぢやないか。』『貴郎もほんとに意氣地が無いよ。妾の居ない方が、よつぽど話が仕好いぢやありませんか。』『其樣な事云つて呉れちや甚だ困る。』『何でもいゝから待て居らつしやい、直ぐに行て來ますから。』と、急はしげに階子を下り、下駄を履きながら無造作に、『アノ妾はちよいと近所まで、用達しに行て來ますが……あの二階へお銚子の熱いのを！』

取り殘されし勝吉お鈴は、二階の一間に差し向ひ。初心同志の悲しさは、互ひに顏を外向けつゝ、言葉もなくて茫然と、仇に時のみ移せしが、かくては果てじと勝吉は、思ひ切つて口を開き、『お鈴さん！先刻もお前ん許の軒下で、暫時樣子を聞いて居たが、お前の叔母さんと云人は、あんまり良い人では無いと見るね。それでお前を……お暇の出たのを幸ひに……何か……惡い事を勸めて居た樣子だが……如何してもお前を、只家には置かないと云ふのかイ？』と、物軟かに尋ぬれバ、お鈴は尙震ひ聲にて、『えゝ。』『常からあんな無理を云ふ人かい？』『えゝ……平常からです。』『ウン、それでは嘸……辛からう。……それで、お前が鶴岡樣へお詫が叶つて歸れゝばよし、若し歸れない時にハ、否でも應でも……其………叔母さんの云ふ事を、聞かなけれャ成らないンだネ。』『はい……ですから……』『ですから……何うしたつて？』云へども答へずまた泣き沈む。

勝吉は眼を數瞬き、『成程……いかにも氣の毒な。……それでお前はあの叔母さんより外に、此東京には親族は無いのか。』『えゝ。』『では、田舍に居る阿母さんは、……矢張あの叔母さんの樣な人かイ？。』『い

ゝね、阿母さんは誠に好い人です。》《それでは嘸阿母さん許へ歸り度からうねヱ。》《ですから田舍へ行きたいんですけども……》云ふ中にもまた涙組む。

此時表に車の留まる音せしが、はや階子踏み鳴して、何者か昇り來る樣子に、勝吉は思はず坐を正し、きつと其方を見遣る折、速忙しく入り來りしは、誰にもあらず彼のお初、息をはづませさも苦しげに、

《增山さん、早く何處かへ逃げて頂戴!》

《其十九》

《それはまた何う云ふ理由で?》と、勝吉忙しく尋ぬれば、お初は心急きたる調子にて、《まア聞いて下さい、あれから妾は、直ぐに車に乘つてお邸へ歸つて見ると……ほんとに妾は肝を潰した、お鐵さんがもう來てるんですよ。》《あのそれではもう?》《それでね、まあお聞きなさい!お鐵さんが來てしまつたもんだから、妾の嘘がすつかり破露てしまつたぢやありませんか。……それで妾は、其樣な事とは夢にも知らないから直ぐに、中の口の方へ廻つて見ると、中ぢや大騷ぎなんですよ。奥樣もお孃樣も、皆其處へ出て居らしつて、自家から呼びに遣つた覺はないが、それは何でもをかしな話だ。事に寄るとお初も同類で、增山にお鈴を會はせる爲めに、お前の許へ呼び出しに行たんぢやあるまいかと、奥樣がおつしやると、お里樣が其側から、屹度それに相違ありません、其證據には增山さんも、晩方たら出たッ切り歸つて來ませんものト、一所に成て左樣おつしやる。するとお鐵さんは、怒るまいとか、悔しがる

まいとか、おのれ見やがれお初の畜生、大切の娘を連れ出しやがつて……姦淫の媒介を仕やがつたのも、皆お初の所業に違えねヱ。直ぐに行て捕攫へて、如何するか見やがれと、大きな聲で怒鳴りながら、直ぐに出て來さうな權幕だから、目付つちや大變と、其儘遁げて來たんですがね、もう斯う成ちや仕樣が無い、増山さんもお邸へは歸れないし、又お鈴どんも、今叔母さん許へ行つた日にや、如何な目に逢ふか知れないから、此儘何處かへ暫時の間、二人とも姿を隱して……。』と、皆まで聞かず勝吉は、『それは大變だ、私はこれから行て來。』と血相變へて立上る、其袖をお初は扣へ、『コレ増山さん何處へ行くんです？』『お邸へ歸つて辨解を……』『飛んでもない！お前さんが今お邸へ歸られるもんですか！今辨解をしたからツて、所詮通る譯には行かないから……まあ妾の云ふ事をお聞きなさい！』と、急き立つ勝吉を無理に坐らせ、『それは成る程、増山さんのさう思ふのも、少しも無理ぢや無いけども、啻さへ疑惑を受けて居る處へ、斯云ふ事ゝ成て見れや、中々辨解位ぢや追付かない。また、よしんば辨解が出來た處で、お前さんが今行てしまつて、お鈴どんを如何するのです？ほんとに今ん處では、お前さんよりお鈴どんの方が、何樣に氣の毒だか知れやしません。ですから先刻も云ふ通り、何處までもお鈴どんの、力に成てお遣んなさらなきや、男の義理が立ちませんよ。貴郎も男ぢやありませんか、一端浮名を立てられた女……而もそれ故斯云ふ事に成て見れや、ちやんと何處までも力に成て、お鈴どんを助けて遣らなけれやならないのが、お前さんの役目です。……ですから妾の云ふ事を。……今妾も途々考へた處、所詮今

「お前さん達二人が、お邸へ顔を出すと大變まづいから、一寸の間辛抱して、何處へか姿を隱して居らつしやい。さうすれば後の事は、妾が何處までも引きうけて、惡い樣にはしませんから。……なんの妾は何と云はれやうと、此位の事をするのは朋輩の交誼で、それを彼是云ふ奴こそ、人情知らずと云ふ者だ……。何の道妾もお暇は知れてるが、縱令お暇の出るまでも、妾は奧樣にお目に掛つて、今夜の仔細を有体に、妾は申上る心算です。なんの、是が不義淫奔と云ふでは無し、只お鈴どんが可愛さうだから、それを救けに云ふ斗りの事で、妾は誰に聞かれたつて、決して恥かしい事ぢやないと思ふワ。だけども、兎に角あんな噂があつた上は、今お前さん達二人が出ると、却て事がまづくなるから、此處は妾に委せておき、今に證明が立つた上で、其時當人の口からも、奇麗に辨解する事として、兎も角も今の處は、姿を隱して居て貰ひたい。」と、眞情見せしお初が言葉、其の說果して上策なりやは、勝吉も未だ腑に落ちざりしが、兎に角宵より思ひ亂れて、腦も鈍りし折なれば、他によき術を見出す暇無く、心ならずも其儘に、舊の座には直りしが、途方に暮れて面さへ、更に生きたる色は無し。

嗚呼恐るべきは戀なりけり。只苟の戀よりして、お鈴のみかはお初にまで、其身に知らぬ罪科を着せ、義理の足枷人情の手桎に、吾が身も今は四苦八苦、地獄の苛責もかくまでには、苦しからじと勝吉の、胸は血を吐く思ひなり。

《其 二 十》

さて翌朝に成りけれども、勝吉もお初も遂に歸らず。さては彌々何邊へか、駈落せしに極まりぬト、鶴岡の家にては、上下共に騒ぎ立ちて、口々に罵るもあれば、又二人が身の上を案じて、若しや短氣を起しはせぬかと、其行末に氣を揉むもあり、皆々頭を痛めける。

斯る處へ車を飛ばして、急忙しく駈け付し榮一、人々に打向ひ、今増山處から、此郵便が屆きました、まづ此手紙を御覧下さいト、云ひつゝ出す書狀を見れバ、

心急き候まゝ亂筆御高許奉願候。昨夜は御懇篤なる御注告承り、御厚情肝に銘じ辱く奉存候。實は其節申上兼差し扣へ居候へ共、元來愚生事、彼鈴女に對して毫も不都合なる所爲致し候覺ハ無之、此段は乍恐御心配御無用に候へども、只々心中に於ては、平素より彼女を戀慕致し居候事、乍恥敷白狀仕候、然れども彼女に於ては、全く無心にて毫も罪科は無之候に、突然御解傭相成候は、聊か御輕忽の御所置と乍恐奉存候。然し元より證據も無之儀なれば、何とも致し方無之、御嫌疑受候も、畢竟愚生の不覺と諦らめ、今後を戒愼仕候心得にて、昨夜は退出仕候へども、途々愚考仕候處、何分愚生の不覺を以て、罪科も無き鈴女に、非常の迷惑相掛け候段、如何にも氣の毒なる而已ならず、右鈴女には強慾非道なる叔母有之、其爲めに一層苦艱を受け候事、増々不憫と存じ、男子の一分として傍觀するに忍びず、出來得る丈救助可致と存じ候處、彼頻りに歸省を望み居候まゝ、兎に角彼を送りて、郷里江州迄屆け遣はす所存に有之候。右に就ては初女事一方ならず盡力致し、事

情をも充分承知致し居候間、委細は同人より御聞取被下度自然事理明白に可相成と存候。尚鈴女實母の許まで相届候上は、直ちに歸京仕り、拜眉を得て篤と御詫可仕其上にて尚貴意に觸れ候はゞ如何樣にも御處分可被下候。愚生上京以來、實に一方ならぬ御高恩を蒙り、未だ万分一をも報恩不仕候に、却て斯る仕末と相成り、一層御心配相掛候事、實以て汗顏の至には候へども、萬不得止事情有之、無據御異見に悖り候段、只々幾重にも御酌量の程奉願候。精神轉倒の際愚存充分に申上兼候、何卒御高判被下度候。尚番町樣御兩方樣へも、該死の罪宜敷御執成し被下度候、恐惶頓首

十二月十五日　　　　増山勝吉九拜

鶴岡榮一樣

とあり。之を見るより人々は、何れも顏を見合せて、霎時は言葉も無かりけり。

されども勝吉が本意の程は、未だ此書に現れざりしか、此に信任を置もの無く、却て疑念を強むるのみ。斯る体のよき事は云へども、其實お鈴を誘導して、何邊へか出奔せしならん、恩を仇なる此仕方、見掛けによらぬ大膽者よと、是大方の輿論にて、常より彼を贔負せし、榮一さへも今はゝや、全く信用の絆を斷ちて、共に勝吉が所業を憎みぬ。

若し此時に勝吉が、勇を振ひて榮一に對ひ辭を盡してお鈴の爲め、またわが爲めに寃罪を、云ひ開きさあば斯くまでに、後の批難は受けまじきを。憖じお初の言葉を容れ、またお鈴の望むがまゝに、姑息なる

手段を採りしかば、憐れ潔白なる交情も、淫奔不義と見爲されて、吾と吾が名を汚せしこそ、又是非も無き次第なれ。

さるからに此も皆、情に脆き勝吉が、實意に出し所業なれば、深く咎むる事ならず。實に此時勝吉は、只お鈴をのみ不憫に思ひ、如何にもして之を救はんと、其意のみ先立て、吾身の事は云ふも更なり、大恩ある主人の事をも、顧る暇は無かりき。

かゝる折から彼の里子は、不圖坐を立ちたるまゝ、何處へ行きけん姿を見せず。さてはまた部屋に籠りて、畫など書き居るとならんと、思ふ折から其部屋の方に、誰とも知れず金切聲にて、《アレまアお孃樣！》

《其二十二》

何事ならんと母の時子は、急ぎ里子の居間に來て見れば里子は突伏して泣き沈み其傍には小間使のお清が、何やら慰めて居る樣子に、時子は言葉忙しく《清！里は如何ぞしたのか。》と云へば、お清は傍にある畫面を指して、《これ御覽遊ばせ！》と、示すがまゝに其方を見れば、こは如何に何事ぞ？此度の閣龍博覽會に出さんが爲め、此間より丹精して、漸く此頃出來上らんとする、彼の秋草に雛の畫の、さも鮮麗なる其上を、惜し氣も無く黑々と、墨筆もて塗り消したり。

時子は見るより二度愕然、《まア……此は如何したものぢや……コレ里！お前は氣でも違ひはせぬか……

清、様子を知てぢやらう。》《イヱ妾も何だか能くは存じませんが、只今お孃様のお居間へ這入らうと致しますと、何で厶いますか……疳癪でもお起し遊ばした樣に突然墨でもつて、此通りにしてお仕舞ひ遊ばしましたんです。》《何ぞお前が……また疳を立せる樣な事仕たのぢやァないか。》《いゝえ何も妾は致しませんのに……》

時子は更に里子に向ひ、《コレ里！又お前の持病が起つたのか。それにしても……折角出來かけたものを、此樣にしてしまつて……お前は何が其樣に腹が立のだ。ね！これ！……泣いてばかり……》と、云つても更に返辭の無いに、今は漸くあぐみ果てゝ、只恨めしさうに畵を眺めぬ。

折から飯炊女が取次いで、《アノ奥樣……お初どんが歸つて參りました。》《ナニ初が？……》《それでちよつくら奥樣にお目に掛りてッて。》《妾に……まァよく厚皮しく出て來られた、逢つたッて仕樣が無いが……》と、云ひかけて躊躇ふ樣子に、里子は漸く首を擡げて《阿母樣！》《何だイ？》《初が歸つて來たのあら……》《ハア歸つて來たのだとさ。》《一寸此所へ呼んで下さい。》《此所へ？初をかイ？……》《何でも好いから呼んで下さい。》《お前が逢つて……》《何でもいゝから呼んで下さい。》はや焦思込むよ時子も無餘議、《そんなら此處へお通し！》と、謚々云へば里子はまた、《そして阿母樣も清も……一同他所へ行てください！》《アノ妾達が居ては惡い事かイ？》《何卒行てください！》《ハイ〳〵……何だらうねエをゝいゝかしな》

時子も今ハ逆らはず只里子の云ふが儘にお初をば此處へ通し、自己は暫時遠慮して、一と先づ此場は立ち去りしが、流石に心元無ければ、そと立ち戻りて次の間に隱れ、耳を澄まして聞かんとするに、生憎里子の聲音低くて、僅か洩れるはお初の言葉のみ。

《まア左樣でムいましたか……いゝえ決してお孃樣計では……妾も惡いんでムいます……飛でも無い……何とも申しては居りません……只……へイ……叔母と申者が……大變……それで誠に可愛さうなんで……それに……無理もムいませんが……大層阿母の事を……阿母の處へ參りたがつて……增山さんも大變氣の毒がつて……へイ……いゝえ船で……今朝ほど橫濱から……へイ江州……たしか堅田とか申す處ださうで……ナニ……それで奧樣ハ？……へエまア……それは御道理で……へイ……妾も屹度左樣だと存じましたけれども……よくお會ひ下さいました……いゝえ貴孃！其樣な御心配は……さう解りさへ致せば……妾も安心……へッ？其方は大丈夫、屹度歸つて參ります……へッ？なんの其樣な事遊ばしちや大變でムいます……決して〳〵……それは若旦那樣の方へも……妾がお請合ひ申します……何れ後刻お目に掛り……奧樣にも……はい……それハもう初が……ハイもう大丈夫……》

何の事やら少しも解らず。靴を隔てゝ痒を搔くと、もどかしき事の譬喩には、是のみ昔より云ひ傳へて、壁を隔てゝ話を聞くと、云はざりしこそ恨なれ。

《其二十二》

去る程に勝吉は、お初の勸告に從ひて、濟まぬ事とは知りながら、此儘お鈴を伴ひて、其郷里なる江洲まで、送り屆くるとゝはなりぬ。

されども元より食客の身の上なれば、所有金もいと少くて、一人の旅費にだも覺束なく、またお鈴も奉公中に、貯へ置きたる小遣錢の、少し斗りは無きにあらねど、先きに家を出る時、お初に急き立てられしまゝ、僅ゝ羽織を着換へしのみにて、それさへ殘し置きたれば、今更取りに行くともならずト二人は顔を見合せて、途方に暮るを傍より、お初ハ尙も勵まして其の心配には及ばぬ事、妾も此處に持ち合せは無けれど、横濱には一人の姉あり。至て心好き人なれば、それを便りて工面すべし、何の遠慮か入るものぞい惡い樣にはせぬ程に、妾に委せて片時も早くト、尙も逡巡ふ二人を急がせ、彼の蕎麥屋をば立ち出でゝ、直ぐ、新橋まで車を飛ばし、横濱さして落ち延びぬ、彼の榮一に送りし手紙は、此の蕎麥屋にて認めしなり。

かくて三人は、汽車に乘り込みしが、中ばゝ是夢心地。大恩ある主人の家を、無斷にて出で行くさへあるに、而も若き女を伴ふと、後めたき限りなれば寧そ此より引返さんか……それも此期に及びては、如何とも亦詮方なしと、今更良心の苛責に會ひて、千々に苦しむ勝吉に、お鈴も仝じ物案じ。日頃厭へる叔母を棄てゝ、戀しき母の許にゆくとあれば、元より嬉しからぬ道理はなけれど、また吾が爲に身を苦しめ、主家の首尾を損ひし、勝吉が事を思へば、痛はしくも亦氣の毒と、肚の中では手を合はさぬ計り。

之も元氣は優れぬ樣子。

さればまたお初も、今は只二人の爲に、吾かち心を千々に碎きて、或は勵まし或は慰め、眞情面に現はして、甲斐々々しくは働けども、自己も未だ主人ある身、斷も無く主家を出で、一夜を餘所に明かすさへ、あまり快き事にあらず、まして此身も今はいや、不義の媒介せしと云ふ、批難を受け居るとなれば、此後其をば云ひ解かんと、元より易き事にはあらじと、思へば流石女氣の、心細さに胸結ぼれ、兎角思案に沈み勝ちなり。

されども汽車は遠慮なく、三個の胸の懊惱を載せて程無く横濱にぞ着きにける。

お初はまづ先に立ちて、二人をおのが姉の家に導き、事の次第を大概咄し、旅費の工面を賴み込みしに、姉は其以前茶屋奉公して、相應に苦勞も仕盡したる女なればゞ快く承引けて、其夜は吾家に三人を泊らせ、翌日旅費を調達して、二人の者に之を渡せば、二人は喜ぶと大方ならず。何れ此恩は身の落付き次第、屹度報ひ申すべしと幾度か禮をなし、遂に其日の午前十二時、四日市行の東海丸にて、横濱を後に出帆しぬ。

此時もお初は、汽車にて行かんとを勸めしなれど、其實汽船に乘りたる方、旅費も廉く上る故、是も勝吉が遠慮にて、態とかくは計ひしに、さらば汽船迄見送らんと云ふを、それも無駄な話なれバ、片時も早く東京へ歸り吾等が爲に執成し賴むと、勝吉が言葉にお初も點頭き、さらばと其儘袂を別ちて、停車場へと急ぎ行くに、二人は後姿を拜まぬばかり……やがて波止場へ向ひけり。

新たに結婚せし者は、必ず相携へて旅行すると、西洋の國の習慣となれるも、旅行は相互の交情を、温むるに好き故なるべし。それと是とは事變れど、勝吉お鈴の二人は、共に汽船に乘り組みてより、今は案じても返らぬことと、流石に度胸も据はりしか、少しづゝ心打ち解けて、お鈴が勝吉を力と頼めば、勝吉も亦お鈴を勞はり、一夜を汽船の中に明かして、翌日四日市に着く頃は、餘所の見る目も羨ましき迄、睦まじき交情とはなりぬ。

それよりは汽車にて草津に至り、山田より小蒸汽に乘りて、湖水を渡ると一時間計り。堅田在なるお鈴が母の、住居間近くなりけるは、此日も已に入相時。三井の晩鐘ハ聞えぬども、彼方に見ゆる浮御堂に、落ち來る鴈の一羽二羽、彼も塒や求むらん。

(其二十三)

(アレ彼處に見える茅葺屋根……あれが妾の家ですよ。)と先に立ちたるお鈴が、さも嬉しげに指させば、(ドレ、あの高い樹の下かイ?)(えゝ、二軒並んでる先の家です。)(彼處にお前が阿母さんが、たつた一人で居るの?)(えゝ。)(お前が此處に居た時分には、やつぱり彼處に二人で住んでたんだね。)(左樣です……)と、云ひつゝ四邊の景色を見渡し、まづ第一に比良の頂きを指して、(あれが近江八景の比良と云ふ山ですよ。)(比良の暮雪……成る程もう直白だね。唐崎の松は何處だらう?)(それは此處からは見えません。)(石山は?)(先刻向ふに見えたぢやありませんか。)(何時?)(船の中で……瀬田の橋の向

ふに見ゐたの、あれが石山ですよつて妾が教へたのに……貴郎忘れちまッたの？》《左様だつたかネ。迂濶して居たもんだから。》

お鈴はまた路傍の小川を覗き込んで、《此處で鰻を取たともおつたッけ。》《お前が？》《ゑヽ。》《お轉婆だネ。》《アラ小兒の中でさゐね。》《僕なんぞ小兒の中だッて、其様な殺生な眞似したどは無。》《それや貴郎は左様でしやうけども、妾なんぞは田舎物ですもの。》《ハヽヽ何も田舎物だからお轉婆とは限るまい。中にゝ……》《中には……何ですゝて？》《もう宜敷い。》《アラ云ひかけて廢して……をかしな……

斯く罪も無きとを云ひて、屈曲したる野路を辿り行くほどに、二人はゝや例の茅葺屋根の家に着きぬ。家は只一棟、小篠、丸木、蜀黍の売など、不行儀に結びめぐらしたる墻に、三尺計りの門を切りて、栗にやあらんと思ふ自然木の柱に、男竹を疎荒に打ちつけたる片折戸を押せば獨り鳴るやうに、小やかなる鳴子までつけたり。

其中は二坪ほど庭になりて、只一木ひよろ／＼と立てるは、一抱へもあらんと思はるゝ槻樹にて、先刻より目標になりしも是なり、又其下には一叢の菊ありて、大方は霜に朽ちたれども、尚二三輪咲き殘れるも風情らし。

お鈴は此門に進み寄り、直ぐに内へ入らんとするを、勝吉後より袂を扣へて、小聲に、《一寸！僕はまア此處に待てるから、お前先へ行て……》《いゝぢやありませんか。》《好くないからサ。》《何故？》《まア…

…お前は一足先へ這入いておくれ。左様でないと……唐突に僕が一所に這入つちや、阿母さんだッて變に思ふからさ。』『さう……そんなら一寸待て丶頂戴！』と、云ひつ丶行かんとするを、また呼びとめて……何か云はんとして……何も云ひもせず……其儘黙つて頭を搔きぬ。

お鈴はいそ〳〵、鳴子を鳴らして内へ這入れば、其物音を聞きつけて、煤びたる障紙押し明け、内より現はれ出でしは、年頃五十餘りの女、年の割には銹の無き聲にて、『何誰え？』

お鈴はッか〳〵と進み寄りて、『阿母さん妾！』『ヱッ？まあお鈴ぢやないか、如何してお前は？』『これにはいろ〳〵譯があるんです。』『まあ……ほんとに……』と、呆れて言葉も無き体なり。

垣の外なる勝吉は、此問答を聞くと等しく、忽ち越歴を傳へられし如く、躰は妙にシャチコ張りぬ。恐しきが故か、さにものあらず。耻かしさが故か、さにもあらず。嬉しさが故が、さにもあらず。只是一種云ふ可らざる、刺撃を受しと云はんより他なし。

暫時は諄々と、何やら語り合ひし樣子なりしが、お鈴はやがて出で來り、『もうようござんすから入らつしやい！』と、云に勝吉は、極り惡げに其後に從き、家の内に入りしかど、折から黄昏の事なれば、四邊只薄暗くて、主人の顏も確とは見ゑず、覺束なくも挨拶のみ、辛うじて爲したりしが、其時お鈴が甲斐々々しく、勝手知りたる臺所より、行燈點して持ち出づるに、勝吉は頭を擡げて、主人と顏を見合す途端、如何になしけん主人の女、『オヤ貴郎は』と膝を進めて、尚も瞳を凝らしける。

（其二十四）

話變りて鶴岡方にては、彼のお初が辨別に依て、少しは心も解けしもの丶、如何にしけん勝吉の方より、其後何事の音信も無く、はや一週間計り經れども、歸り來る樣子見えぬに、何分若き男女の交情、人木石にあらぬ限りは、猫に松魚節の比喩の如く、只潔き心のみにて、共に居らんといと難しと、又も幾分の疑惑を増し、お初が折角の執成しさへ、今は水の泡と消ゑん計りなり。

さればお初は、更に心も心ならねど、兎に角主人の疑惑解るまで、世間の外聞朋輩の所見を憚りて、暫らく暇を取る覺悟なりしが、何の爲にや令孃里子が、是非留まれよと切なる依賴に、元より此處を去度きにあらねば、其儘暇も取らで濟ましぬ。さるに又不思議なる事には、勝吉がれ鈴と共に、家出せしと聞きし時より、里子が樣子常ならず。自ら焦思て彼の畵面を、惜しげもなく塗消したる後は、再び畵筆に手を觸れず果はどつと床に就きて、顏色さへも常ならぬに、母は一方ならず心配なし、榮一をして診察さすれば、是は一種の氣欝病にて、何か胸に思ふ事あり、其爲に心結ぼれ、身体の疲勞を招くなりと云ふに、常から內氣と云ふでも無く、却て氣作なゐの里子、氣鬱病とは合點ゆかずと人々小首を傾けしが、何にせよ此頃は、彼のお初をのみ近づけ居れば、彼に聞きなば樣子も知れんと、或る時時子はお初を呼び寄せ、里子が病の元因をば、氣遣はしげに問ひかけぬ。

此時れ初は膝を進ませ、小聲に仔細を語るを聞けば、『實は疾うから申上げやうと存じては居りましたが、

お孃様は増山さんに、想を懸けて居つしやいますので、増山さんのまだお邸に居る時分から、其素振は見ゑて居りましたが、何を申すにも増山さんは、あの通り堅い男ですから、お孃様に向つては串戯一つ云つたとは厶いません。其爲にお孃様の方では段々想の増す計りで厶います。すると……あのお鈴どんが……増山さんの病氣の時などにも、深切に世話を致しましたり、また増山さんの方でも、少しは氣のある樣子が……あゝ云ふお怜悧な方で厶いますから、お孃様の目にちやんと見ゑたもので厶います。さう致しますと……誠に申上悪いお話で厶いますが、申さなければ解りませんから、もう何も彼も申しますが、其處は女様だけに、お孃様の方でも、万更好い心持はなさりませんから花江様にもお云ひ含め遊ばして、お鈴どんをいろ〳〵に嬲たり、また奥様のお耳に這入るやうに、何だとか彼だとか、面白くない噂をお立て遊ばしたので厶います。と云ふのもほんの只、意趣晴し位の事で、まさか此樣な事には成るまいと、御自分でも思つて居らしつた處、思ひの外の大事に成て、お鈴どんはお暇が出る、増山さんはそれに次いで家出をすると云ふ、騷動に成て來たもんですから、さあ御自分が御心配でならない。御自分の爲に二人とも、お邸をしくぢらした計りでなく、事に依ると此お蔭で、尚の事二人の交情を……まあ……虚搆を事實にしやしないかと云ふ、それやこれやの御心配で、御平常が御平常だけに、却て種々な事をお考へ遊ばして、とう〳〵彼樣な御病氣にお成り遊ばしたんで厶います。實は妾も、此間お孃様のお居間へ召されました時、初めて此事を伺ひましたので、其時にもおつしやるには、初や！妾はほんと

に増山やお鈴に濟まない事をした。又阿父さまにも阿母さまにも、また兄上樣にも、面目無くつて顏が合はされないよと、さうおつしやつてハ泣いていらつしやいましたゞ、其樣な事はムいません大丈夫でムいます、屹度お請合ひ申しまして、殿樣にも奧樣にも、また若旦那樣の方も、甘くお執成し致しますから、決して御心配遊ばしますな。又増山さんも四五日中には、屹度歸つて參りますから、餘計な御心配は遊ばしますなッて、妾が種々申しあげましたが、如何致しましたか増山さんの方から、其後ちつとも音信がムいませんもので、其れで此頃ハあの通り、おふさぎ遊ばして居らつしやるのでムいます。》思ひがけなき里子が病根、それと知るより母時子は、更らに心配の種を増し、やがて良人にも榮一にも、右の次第を物語り、尙ほ此の後此處分を、如何がはせんと相談最中。お初は速忙しく飛んで來て、《モシ奧樣、増山さんが歸つて參りましたよ。》《ヱ、増山が……して何處に居る？》《まだ此方へは參りませんが、只今新橋の旅籠屋から妾へ手紙を寄越しまして、一寸來てくれと申しますから、何の用か存じませんが、妾は一寸行て參り度うムいますが宜敷うムいましやうか》《はア、そんなら一寸行てお出で！》《難有うムいます。》

《其 二 十 五》

お初は其儘暇を貰ひて、取る物も取りあへず、勝吉が宿へと急ぎしが、間も無く立ち歸り來るを見れば、彼の勝吉お鈴の他に、未だ見慣れぬ女の、五十路餘りなるを伴へり。

お初はいそ〳〵として、件んの三人をば主人夫婦が前へ導き、さも嬉しげに夫人に向ひて、『奥樣！まあお聞遊ばせ！お鈴どんは増山さんの、お妹御ださうで厶いまして、あの此處に入らつしやるのが、お兩人の生母さんで厶います。』と云へば、皆々打ち驚き、思はず膝を進ませて、シテ其仔細はと問ひ掛れば、勝吉心得て物語る樣。

さても其後お鈴を伴ひ、彼が郷里堅田に送りて、其母にも面會なせしよ、思ひきや其母こそ、お鈴が乳母お桑ならんとは。……元より是も此方よりは、少しも心付かざりしなれど、彼方はわが稚顏に見覺えのありしが爲に、早くもそれと悟りつゝ、さて面目無げに語るを聞けば、……彼が良人新左衞門お鈴を里子に預りし時より、一方ならず寵愛なし、何卒して我兒に貰ひ受んと、屢々親許へも掛合ひしが、遂に承引く景色無きに、獨り胸を痛め居る折から、止み難き事情の起りて、在所の住居叶ひ難くなりしに、お鈴に別れて立ち去るに忍びず、惡しき事とは知りつゝも、尚三才に充たぬお鈴を伴ひ、此堅田へ移りしが、近邊の者にも當人にも、里子と云ふと遂に明さず、我兒も及ばぬまで愛みて、養育に餘念無りし程に、いと健康に成長して、やゝ智惠付く頃となれば、彼方よりも亦新左衞門夫婦を誠の父母と慕ひ懷くに、尚最惜しさの増すのみなりしが、老少不定の習とて、良人新左衞門は一昨年の冬、病氣の爲に歿りし、臨終の際にお桑に向ひ、今日まではうか〳〵と、心にも掛けで過ごせしが、元より里子に預りしお鈴、斷りも無く我兒と爲すは、云はゞ勾引兒も同然なり。殊に生産の親の情は、吾等夫婦が心にも増

して、如何計りか彼を惜しみ、其行方を尋ねてやおはさん。それを思へば吾等が罪、中々に輕からず、片時も早くお返し申して、此お詫言をせねば濟まねど、所詮かゝる片田舍に、成長し彼のお鈴、傍近き小學校に入れて、讀書一と通りは敎へしかど、元より是田舍育ち、如何にして此儘返さるべき。せめては一度都へ出だし、行儀作法一と通敎へて、少しは女らしくなせし後、實の親許へ返して呉れ。此ばつかりが心殘りと、前非を悔ひし遺言に、お桑も實にもと納得し、やがて良人の野邊送を濟まして、直ぐさまお鈴を東京へ連れ行き、彼のお鐵が周施にて、鶴岡の家へ奉公に出せしも斯くして二三年の後には、再び迎ひ取りて、其時其素性をも云ひ聞かし、改めて實の親許へ、送り返さん下心と、お桑が語る一伍一什。聞くより勝吉一度は驚き、一度はまた悦びて、さては矢張り妹なりしか。思へば最初より吾が眼に、妹らしく見えたるも、心の迷にあらずして、これぞ世に云ふ虫の知覺か。さればこそ今日が日迄、吾大く彼を戀ひしも遂に身を汚さんとせざりしは、矢張り其知覺ありし故なれ。兎にも角にも嬉しやと初めて兄妹の名乘をなせば、お鈴も嬉しさ恥かしさに、夢路を辿る心地なり。

さて斯く仔細の知れし上は、今は躊躇ふ時ならず、片時も早くわが母に、對面させて悦ばさんと、次の日直ちに支度なし、又も姬路へ伴ひて、母にお鈴を紹介すれば、母は一端亡きものと、思ひ諦めしわが娘に、圖らず逢ひし事なればハ春を待ち得し優曇華の、喜び狂はん計りにて、日頃の憂さも一時に晴れしが、此上は再び東京へ立ち歸りて、主家の疑惑も晴らさではと、勝吉が言葉に母も同意し、やがて旅の

用意を調へ、母子三人打ち連れて、再び東京へと上り來ぬ。
されども不意に推參なして、主家を驚かさんも如何ト、さてこそお初を、呼び出だして、兼ての周旋配慮を謝し、尙此後の執成しをも頼みて、共に此處へは來りしなれ。
此物語を聞くよりも、主人夫婦を初めとして、居合す榮一其他の者も、あまりの事の不思議さに、霎時呆るゝ斗りなりしが、今は誰をか憎まんと、此處に日比の疑念も、朝の霜と消え失れば、彼の里子が病氣さへ、氷に焚材をかざせし如く痕無く解けて全快せしが、斯く迄勝吉を慕ふ心、兩親も不憫とや思ひけん、勝吉が品行此儘亂れず、首尾好く成業の曉には、其嫁に遣はすも苦しからずと、胸算漸く出來上れば、一家は目出度く治まりて、尙年の內ながら、此處のみ春の來りし如し。
只彼のお鐵婆のみ、……骨折損の草臥儲け、此樣な事なら折檻をせず、大切にして親許へ返へし、今迄の世話賃でも取て、春着の半纏なと拵へたものをと、獨り愚痴たらく。

星

小金井喜美子譯

羊かふためにとて、手飼の犬と共に、ルペロンの山に入りしより、いつしかと一月あまりの日數も過ぎぬ、日ごとに絶えず音信るゝものは、峯の嵐の音、谷の清水のひゞきのみにて、たま〳〵見ゆる人影は、リユール山にかくれすむ世すて人の、藥とりに來たると、ピエモントの峯に炭やく翁の姿、をり〳〵はるかにみゆるのみ、もとよりかゝる山深くすむ人なれば、まちかく相見ても、人と物語らんともせず、又物語らんにも、里にていかなる事あるか、露しらねばかひなし、たゞたのしみとするものは、二週目ごとに驢馬のすゞのひゞきして、糧を里よりはこび來るあるじの家の童かまた媼にて、かのさとにはさるとあり、かの家にはかかるをありしとかたるを聞けば、みつからもそこに行たる心地して嬉しことにあるじの家の少女のステハネットとて、其名里にかくれなき手弱女が、かの里のまつりに行きてをりしを、人々ほめたゝへきなど聞くはことさらうれしかりき。

糧のくへき日とさだまりたるある日曜に、常より時過ぐるまでもきたらず。『今朝は寺にて說敎のある日なればと。』言ひて心にもとめざりき、ひる過る頃ハ嵐おどろ〳〵しく吹出たれば、驢馬の道にてなやみすらんなど、思ひつゝけつゝしづ心なし、にはか雨さへふり出たれど、ほどなく晴渡りて、青空照らす日の光やう〳〵山の頂にかゝやきぬる三時頃、さきの雨に水かさ増さりし谷川の流のおとゝ共に、こ

なたをさしてくる鈴のひゞき聞ゆ、『まちつる驢馬の鈴の音か』。と云ふ中くらの前後に糧の入たる籠をつみ、上にのりて來たりしは、童媼などにあらて……思ひもかけぬ……かの少女なりき、雪をつかねたるかほはせの、山風に色つきたるは、桃の花の薄紅にやたとふべからむ、『童はやみ、媼は久しく我子みざればとて里に行きたれは、われこそとて來にけれと、ひとりなれば道にまよひておそくなりぬ』。といひつゝ、くらより下るゝありさま、日曜なれバ晴衣をよそひ、花をあみこめしかしらつき、をどりなどに行くらんやうにて、かゝる山中にくべきすがたとは見えざりき、今迄かくちかよりしともなく、また冬となり羊をともなひて里に歸るとも、我などゝともに物語するとなどあるべくもあらぬを、あなめでたのかたちや、うつくしのすがたや。

少女は籠をときて我にわたへ、きたる晴衣のすそとりて小屋に入り、わがぬる床又帽子のつきたる外套、およびそのかたいらにかゝりしふるき鐵砲など、いとめづらしげにうち見つゝ、『あな淋しき所かな、かかる所にそなたはいつも何を思ひてくらせるや。わがつねに思ひ居るいたゝ君のとのみなり。』と言はんとせしがくごもりぬ、『そなたの友のうつくしき少女が村より遊びにきたるとやある、されどさる物もあるまじけれバ、山姫のユリストル《佐は姫の如きもの》などころは來たりかたらふらめ』。と言ひつゝ、少しゑみて驢馬の脊にのらんとするを見れバ、世の人の常に高き山にありと云ふ、かのエリストルのしばし來りてわをなくさめしにやとぞ思はるゝ、『さらば』。『かたじけなし』。と言ふ中、家路にむかひかへり

行くに、つゞら折なる山路なれバ、たちまち姿は見えずなりぬ、驢馬のひつめにけられて、坂の小石のまろび落るが、皆我胸につみかさなる心地して、いと〳〵むなぐるしく、行きにしかたを詠め入りて日のくるゝをもしらざりき。

山の端の薄青かりしも、やう〳〵濃くなりまさり、はてはくちなし色とありてすがたをかくしぬ、草をはみける羊も、くるゝをしりてやかへりきたりし折しも、とのかたに我名をよぶ聲きこゆれば、おどろきてみるにかの少女のおもてゑみたれど、山風の寒さに身をふるはしてたてるなりけり、さらに驚きていかなればとゝへば、『下を流るゝソルグ川のさきの雨に水かさまさりて渡りがたければ』と言ふに、ともなひ里にかへらむにも、羊のみ山にとゞめ置くべきならず、少女も『父母のいかにおもひわづらひ給ふらん』と。言へば、『この頃の夜は短かければ、わくるにほどもなかるべし』となぐさめ、そだかきあつめたきて、乳などとり出してすゝむれど、さきにうち笑じにもにず、なにとなくかなしげあるおもゝちして涙を流すに、わが身もともになき出ぬべき心地す。

やがて夜に入りて、あたりはくらくなりたれど、たゞ山の頂のみは、入日の名殘にや少しあかみたる棚曳ぬ、小屋の中にともなひ、新らしき羊の皮とり出てわらの上に敷て、『しばしまどろみたまへ』と云ひて、我身は外にいてぬ、あるじの少女のまもりすと思へば、なにとなく心うれしくてうちゑまる後の小屋の扉をしあけて、『羊のさわがしさに、ねむられねば、しばしたき火のかたへに置きてよ』とて

いてきぬれば、火をかき起し、夜風ふせぐ爲にと、また更に野羊の皮をきせ、物語もせでならびゐぬ。星の光のすごくかゝやくを、ことなる世界の心地して、泉のおとのあやしくつぶやくやうにきこえ、沼の上より青き光見えみ見えすみ立ちのぼり、空氣の中にしづかに風の如き聲して、木のゑだ草の葉さわ〳〵となりひゞくは、山のあるじの行きするにやとおぼゆ。ひるは日の光かゝやき、よろづはなやかにて、生ある物につきぬる世界なれば、光かくれてさびしき夜は生なきものゝ世界にやあらむ。

少女は少しのひゞきあるごとに、おそれてわが肩によりぬ、にはかにあやしきひゞきの空氣の中にして、聲は沼より出でちりみだれしやうに聞ゆ、とみればともはならびしかしらの上を、うつくしき星流れぬ、されば今のはほしのひゞきなりしか。『あれはなになりや』と靜なる聲してとふに、『淨土に生るべき魂の聲なり』と答へつゝ、指もて十字形をゑがけば、少女もまた同じ形をゑがきてそらをあふぎしが、ふと思ひ出でたるおもゝちにて『世の人は羊かひはあやしき法をつかふと云ふはまことにや』。『そはいつはりにてあれど、下の村にすむ人よりも空ちかくすめば、そらの事はよくしり侍りぬ』。晴衣の上に羊の皮をまとひ、物語を聞きつゝ、空を詠むるありさま、天つ空なる羊かひの、しれしこの世に下りしやうにぞみゆる。『空の事みな知とならば、かず多く空にみちたる星の名をみな知たるか』。『皆よくしり侍り、かしらの上にあるは、とふとむべきジャーコップの道(銀河)にて、これはフランスよりスパニヤまで直につ

いき、チャーレス大王か宗教の戰のとき、この道をジャーコップがみちびきぬとなり、その廻りに多くある星も皆名あれど、中にとりわけうつくしき羊かひの星（北斗）は、わが身か朝とく起出て、羊をともなひ牧場にいづる時も、また夕暮にかへる時も常にかしらの上にかゝやけば、これをコゼローンと名付く、これはブロワンスのヒートル（星名）と契を結びて、七年とにひとたびづゝあへるのにて侍り』。『されは星も契結ふと言ふとなりや』。『しか侍り』。とやう〳〵うちとけものかたる折しも、肩にふるゝ物あるをみれは、日曜日とてよそほひかざりたるうつくしきかしらのよりかゝりしなりけり。

夜はやう〳〵明かゝり、ちかよる太陽の光に、星のかげ薄くなりゆけど、少女のねむりさまさんことのいとほしく、そのまゝに座りてよを明しぬ、數多き星のその道々を行きめぐるは、大なる羊のむれの心地し、その中にとりわきてうつくしく光あるは、むれをはなれてわか肩によりていこひぬ。

◉若木櫻

柳園主人

《其上つ枝》

昔たれか秋の夕をのみさびしといひはじめけむ。さる人に見せまほしき春の夕暮のけしきなり。をち方の山の端はいふまでもなく、常は目の前にありつる野司も、あまねき佐保姫のかすみのそでにおほはれ、たゞ向の森の奥なるわら屋より、心ぼそさをあらはして、かつ〴〵たつる夕けのけぶりのたなびきわたれるのみ。すこし前まで、たのしき夕ぐれの歌をうたひゐし芝生の雲雀の聲もきこえずなりて、今は唯胡蝶の舞の袖輕らかに、夕風のどけく吹わたりて、名殘のあかね色を、草葉の露にゑがける入日の影紅なり。治まれる世の春なりせばうすみどりなる艸の席に、菫つみ蕨をる里の子も、こゝにかしこにつどふらむを、乱れたる世のならはしとて、夕ぐれにあれば、誰もみなおぢおそれて、門口だに立出て遊べる子らなければ、たゞ靜けさとさびしさは、廣き此野と、すべての春を我ものがほに占めをれり。比は彌生の中旬、暮かぬる入日を促がしがほに、野寺の入相のやゝ二つ三つつき出したる頃、道のかたへの松よりも猶長き影法師をさきだゝせて、珍らしくも二三の人、物語しながら此方をさして來りぬ。

見れば雜兵をともなへる武士二人。

二人の武士は、面差の似よれる樣子、疑ひもなく兄弟ならむ。兄は廿四五、色淺黒くて身の丈人并より

高く、着ゐる具足は白皮威、威し毛は淺黄にて中二通りを紫にて威せり。されどいたく古びて胸板ハ黒皮かと見まがへられぬ。

弟は色白く中背。年はやう〳〵廿か廿一の程なるべし。具足は洗糸威、威のうす紅の夕日にかゞやきし有様、いかにも美はしく、兄とはちがひて具足もあたらしきを見れば、母の寵愛の程もいちじるし。太刀は兄弟ともに糸巻、金覆輪をかけたる葵鍔、帶取は柿色格子筋の漢嶋、ともに見ごとなる製作なり。

二三歩あとよりつきくる伴の雑兵、年は五十前後、冑も鎧も古びてゐるのみならず、所々にある血の跡は、度々の軍にいでたるを示しがほなりや。

三人の顔色は、如何にも喜ばしく勇ましげなれど、非常に勞れたるさまにて、兄は弟の方をふりむき、

『のう小二郎、今朝からいたう歩みつかれた、しばしこゝで休まうよ』

弟も同じやうに考へをりしと見えて、

『さらばこのあたりに』

いひながら若草の莚のしきろめてある傍の松陰に、身をおろすごとく坐しぬ。兄も足を伸ばして、こむらの邊をさすりながら、雑兵に向きて、

『儀助よ。此程の夜討ハ如何であつた。和主かつねに物語りやる國司の騒動の折も、よもわれには及ぶまい』

『いかにも仰やるとほり、此程のは一段と目ざましい事で御座つた。殊にあの晩、お二方のお手柄、いやもう日頃軍自慢な此老爺も、鼻が低うなりました』

『あは、、、瀧川勢が何程つよくとも、羽柴殿と戰かうては、もろい事、風に木葉がちるやうぢや。此樣子では、追付鬼柴田も降參するであらう。』

談話の内に日は全く暮れはてゝ、さびしさはいよ〳〵其勢力をましぬ。いつのまにか彼方の森につけたる神燈、かすかなる光は身にしむ夜風にゆられて、消掛らむとする影ものすごし。儀助は四方を見まはしながら、少し低き聲にて、

『つい御話で氣がつかずにをりましたが此邊にはまだ瀧川方がのこつてゐて往來の人を苦しめるとのこと、御用心なされませ』

いたくつかれし故か今まで無言なりし弟は、

『左樣か。勝つて冑の緒をゆるぶなといふこともある故に』

云もはてぬに兄は微笑みて、

『さはれ何條事があらふぞ。たかゞ命拾ひをした瀧川の殘黨ら。夫はとまれ、日もくれた、いざ行かうよ』

いひながら兄はさきにたちわがれるときも時、誰とは知らず森中より射出したる妻白の征矢、ねらひは

違はず兄の額のたゞ中にあたりぬ、思ひかけぬ急所の深手に、一聲あと高く叫びて仰のけにたほれぬ。
こは何者と弟のたゝむとしたる鎧の袖より二の矢はかすれり。
『兄君氣をたしかにもちて待たまへ、敵は今に小二郎がとつて參らむ。儀助あとをたのむぞ』
いひすてはせつける弟、見るまに姿はかすみの奥にきえぬ。
しばし時過ぎて息せき走りくる弟の小二郎、片手に一つの首級をかゝへながら、
『いかに、いかに、兄上は』
とはれて見あぐる儀助の目には、淚みちたり。
『いろ〳〵御介抱申しましたが、殘念にもあのまゝ』
『さては。それといふも此奴が射たる矢にて、ま、思へばにつくし』
憎さのあまりに抱へゐたる首級を地に打つけて、兄の死骸の許にたほれふしぬ。
折から哀さをとぶらひがほに、霞の水脈をながれ出る居待の月、身にしむ光もなか〳〵に悲しさの媒なり。
『兄上。どうぞ今一目。』
しばらくは忍び泣に泣ゐしが、
『これ兄上、敵は直さま打とめました。これ兄上。』

『それにしてもにくい此敵め。何奴でござつたか』
といひ乍ら首級をとりわけて、見れば二十七八の若者、儀介は月明りにすかし見つめゐしが、
『ふう』
非常におどろきたる様子、小二郎はきゝとがめて、
『な、なにをおどろく』
『こりやまあ、とんだことをなされたわい』
『すりや和主の知つた人か』
『あゝお逢がないから御存じのない筈、この老爺は折々お見かけ申すからよく知つてゐまする。こりや太田の五郎さまじや』
『なんといふ太田の兄上、儀介ちがひはないか』
『どうして見ちがへませう、何よりの證據には、見なされ、右の眼の下の此の大きなほくろ』
『むゝすりやまさしく。左様とはしらず我手にかけて、あゝ何たる因果か、時の間に二人の兄上が。儀介。』
『若さま』
顔を見合せたるまゝ、しばしは詞もたえて、腕をくみて考へゐる小二郎が膝の上に、ちゞの思ひをこめ

て思はずをつる一雫。
『あゝいかほどなげいても詮はない。これ儀介。夜もいたく更たから、己は一足さきへゆくほどに、そちハ亡骸のお伴してあとからまゐれ』
さすがは年の功に、唯ならぬ顔色を見つめて、
『ぢやと申して一人では。どうか此老爺と御一所に』
氣づかわしげにいふを小二郎はきゝながして、
『わしは。あゝつらけれど、少しも早う此事を、母樣におしらせ申さねばならぬ。一人で大儀ではあらうが、村の者を賴むであとからまゐれ』
『ま、どうかそう仰しやらずと』
二足三足行かけしが、立もどりきて、
『のう儀介、そんならさきへゆくぞ』
『あ、もし』
父なきのちは父にかはりて育てくれしこの老爺の海山のめぐみ、それをもむくいず、いつはりいひて別るゝはと思へば、後ろへ引かるゝ心、ふり切りて早足に、さてもいたまし。緋威をきて故郷にかへるにハあらで、忌はしき二つの土産をもちてゆく心は。

折しもなきてくる雲井の雁がね、親にわかれてか、子にわかれてか、はた兄弟にわかれてか。つれてこし數は足らでかへりゆく聲さびし。

《其中つ枝》

しくものもなき春の夜は、早しめやかにふけわたりぬ。見わたせば高嶺にかゝる白雲、林下に匂ふ白雲、これらをたしかめむと懇切なる春風はゆるやかなる香をはこび來れり。げに見あぐるも見下すもたゞ一面の花なれば、彼處の梢にやせむ、此處の木間にやせむと、月もやどる所を考へがほに、朧なる光をみ空にたゆたひをれり。

麓よりさのみとほからで、僅ばかりの九折をのぼりたる谷陰にたてたる山櫻戸、郷士などの住家と見ゆて、周圍は荒々しき松垣とりがこみて憂世をへだてゐたり。家の構造ハ横に細長く作りて、古びたれど狹くはあらず、西のはづれの一間にゐるは、年の頃五十二三と思はるゝ老女、眼は鮮明に愛嬌ある貌、さかりありし時もおもひやらるれど、いろ〳〵の心配のゆゑにや、いたくおもやせて頰骨高くあらはれゐぬ。着物は夜目にてさだかならねど、花色染の木綿のきものに、はゞの狹き三寸位の紬の帶をむすべり。

早夜もふけたるに、ねもやらずして薄暗き燈火をみつめながら、何をか考へをるらむ。優しさとのどけさにて滿たされをる此山里、鐘の音の外には人里より通ひくるものもなきところあるを、猶浮世の塵は

とざせる雲を敗りて入りや來らむ。あはれこの朧月夜を、竹椽のもとまでも出ず、一間にとぢこもれるは、月花の情もしらぬ老女か、さらずば常に目馴れておもしろしとも思はざるか、否老女は全くふかき物思ひの淵に沈みをれり。

思ひあまれりと見えて、長き溜息をもらしつゝ、

『あゝ思ふまい、いかほどおもうたとても甲斐のなきこと、とはおもうても心にかゝるは二人の身の上。さてもおぞましいのは昨夜のゆめ。我夫のなくなられた報知をきいた前の夜と、少しもたがはぬ夢を見たが、おもひ出してもおそろしいあの夢、日比は藤などを何とも思はぬに、それに何故か胸が立騷ぐよ。されど今朝の浮說を人づてにきけば、羽柴方は勝軍とのこと。さんれば二人もつゝかなくてかへりくるかほを、うれしげにほゝゑむ二人の貌を見るもほどはあらじ。儀介もさま〳〵の心づくしを爲たであらう。世話をかけたであらう。歸りてバ何をがな、左樣ぢや。あの鳥手差、作も惡うなければ、われを骨折の代にとやらば、いかばかりか、それにしても二人のなつかしい貌をば早く、此ほど仕立てある衣物をきせて、三人諸共に椿の神社にまうづる日の早く來れかし。ああその日は、明日か、明後日か。』

深き物思ひの淵も、飛鳥川にはあらねど、時には淺瀨とかはりてよろこびの水上となることもあるならひ。老女の心には、微笑のさゞ波のやゝ浮びそめたるをりから、表の門をたゝく音、かすかにきこえる

人の聲。

『はて此夜深に、もしや二人が歸りしには、それとも何か忌まはしい』

いひかけて我と我を制するごとくとゞめぬ。おぼつかなさと氣づかはしさをさき立たせて、門の前へ行ぬ。

『母上、母上、小二郎が』

聲は高けれど、力なし。

『なに小二郎』

掛金をはつすまももどかはしげに、門をわけぬ。

『をゝ小二郎。今も今とて、よくまあ無事で、して小太郎は』

老母の聲ハはやくもれり。

『はい兄上は、兄上も儀介もいま少しあとから』

小二郎の答へもくもれり。老母はうれしさに、小二郎はうれはしさに。

『さらば先閉ざしてれかう』

門をしめて、老母と小二郎は西の一間へ入りぬ。

『何はともあれ、つゝがなう歸つてまことに』

『母上にも御無事で、祝着に存じます』
嬉しさにしばらくは無言に、顔を見合せゐしが、
『いたう顔の色がわるい。心地でもあしうはないか』
不審しげにとふ詞、小二郎は、
『なにお氣づかひ下さるな、あまり急いでかへつて參りしゆゑ』
『さても小太郎はどうしたのう。かく歸りがおそいは』
『はい兄上はひどくつかれたゆゑ、和主はさきへ歸つて早く母上の心をなぐさめよとおいひなされしほどに、さきへまゐりました』
『そうであつたか。していくさは如何であつた』
『およろこびくだされ。味方は大勝利。一昨日の戰で瀧川方ハあとなくなつてしまひました』
『それはまあ何よりのことであつた。あゝ亡夫が生てお出であつたら、どのやうにかお喜びなさるであらうに』
又しばらくハ無言に支配せられゐしが、やゝありて少し詞をふるはせながら、小二郎は問ぬ。
『あの……異なことをお尋ね申すやうなれど、大田の五郎樣は今年ハ幾年ほどの方でせうか』
『さればよ大方今年は二十七八に成たであらう。近いところにハをれど、年久しく音づれもせずあひ

もせねば、貌も更におぼえてはゐず、唯幼い時から右の眼の下に大きなほくろがありしが』

『すりやほくろが』

『それにしてもさることを何故お聞きやる』

とひつめられてもさらぬ体に、

『なに道すがら兄上のお話をきゝ申せし故に。さても忘れてをりました。佛間へまゐつて父上に軍の勝つたことを申しあげて參りませう』

『をゝよく氣がついた。あまりのうれしさに母も忘れてゐた。佛間には燈火がついてゐれど、入口には長櫃が出してあれば、蹶づきやるな』

母は母、幾歲になりても猶子供のごとく心をつくる恩愛の詞、かゝる詞をきくも今しばらくの間ぞと、思へばむせかへるほど苦しき心を奥の間へ、力なげに小二郎は立て行ぬ。

あはれこの老母はいかなる人ぞ。老母ハ椿村の神官の女なりしが、關の驛の郷士太田某にとつぎて、五郎といふ男の子まで生みたりしかど、夫の放埒の爲離縁をなして花岡兵衛といふに嫁ぎぬ。老母の後の夫小二郎兄弟の父花岡兵衛は、この近邊にて勢ある郷士、指をりかぞふれば早二昔に近きまへの事と。二人の子のやう物心をおぼえ出したるころ、此伊勢の國司北畠家に騒動のありし折、兵衛は織田方の手に屬して出陣せしが、最後の合戰の日、ころは秋の末霧ふかくたちこめて道の前後もわきがたき朝まだ

き、前陣に出て進み行し横合より、不意に出たる敵の伏兵のため、草葉のつゆよりもはかなう討死をなしぬ。そを僕の儀介がしらせにかへりし折の愁歎、かたへに見るものもえしのばざりき。されど出陣の前兵衛のいひ殘したるには『軍のならひ萬一の事ありて我なきあとにも、尼になり經よみて後生を弔ふハ我本意ならず。たゞたのむは二人の子、我こそかくて朽果つとも、せめて二人の子は何の某と世の人にもしられ、父母の名をあぐるほどの武士に育てあぐるが何よりの供養ぞ』と、くりかへしたのみいひたりし詞を反故にせず、女とはいへ亂世にそだちし身、をゝしき氣象にとみて、天晴二人の兄弟を立派なる武士にしてと思ふその心只一つより、我身に年浪のよるはわすれ、うしろの山に花さく春もまへなる川にかじかなく秋も、たゞ二人の子のためを祈り、漸育てあげて一人前になしつる今日此頃、たれかよき主を見つけて奉公をと考へゐし矢先、今年の一月瀧川一益龜山の城を奪ひ、家臣をして守らしむと聞て、羽柴秀吉征伐の爲七万餘の兵を引つれてきたりぬ。かねてより軍有らば一つの功をたてゝ、そを傳手にせむと思ひゐし兄弟、いさみすゝみて門出をなし、羽柴方の手勢に加はりしは今より二月の前なりき。

《其下つ枝》

やゝ程たちて小二郎ハ佛間より出で來りぬ。

『何をしておじやつた。さるにても小太郎のかへりはおそいのう』

不審しげに老母ハとへば、
『さればいかゞしておいでなさるか』
小二郎も判然なる答はえせず、たゞくらき灯をまもれり。
『具足は重からう。早くこれときかへたらよからう』
小二郎はきてゐし洗糸威をぬぎすて、母より渡されし葛の衣物を着けぬ。老母ハ脱だる具足にきと目をつけて、
『をゝその生々しい血は。…………胸から草摺へかけて、ま、どうしたのじや』
覺悟は充分なしゐしものゝはとおもひて詞にぶりぬ。
『こ、これは』
『さ、どうしたのじや』
とへど小二郎はうつ向きたるまゝ返答なし。
『これだまつてゐてはわからぬ。何事ぢや』
老人の氣の世話しなさ、聲高にとひつめぬ小二郎は漸思ひ切し体に母の貌打守りて、
『やがてはわかることなれど、しばしなりともお歎きを延ばさうとおもうてゐましたが、まこと兄上は、兄上は、』

『おぼつかな。小太郎は、いかにせしぞ、これ』

『今日の夕ぐれ廣瀬野をすぐるをり、矢にあたつてあへない』

『なに矢にあたつて、すりやあへない最后を、してその敵は何者であつたぞ。さだめて討留めたであらうが、これ敵は何者であつた』

『されば、たゞちに敵の跡を追掛けたれど、はやとほくにげのびて、遂に見失ひました』

『それでは敵もえうたぞ』

思ひ入りたる体に、涙をふりはらひて、母はいひぬ。

『これ小二郎、つね〴〵此母が云てきかせしこと、よも忘れはすまじ。父上なくなられしのち、孀の手一つでそだてし子なればと人にうしろ指さゝれぬやうに、いかでか人らしい武士にせむと、朝な夕なに神かけて祈つた甲斐があつたとよろこむでゐたに、兄をうたれたまゝをめ〳〵かへつてくるとは。よくきゝね、今こそ此村の郷士なれど、もとは花岡左近將監とて美濃の國にて一つの城主なりし家ぞかし。先祖の名をも父上の名をも、あげねばならぬ身が、乱軍の中ならばともかくも、現在眼の前のかたきを討おほせずして逃がすとは、そも氣ばし狂つてのわざか。のう小二郎』

かつは恨みかつは涙。小二郎は何事もいはず、母の貌をまもりゐしが、

『是を御覽下さりませ』

いひながら一通の手紙を、母の前へ出しぬ。

『これはたれの狀で』

取上げて燈火の前によまむとする途端、かたはらに有し刀、取るより早く小二郎は我とわが腹へつきたてぬ。

『これ、こは又何故の生害ぞ』

老母ははや氣も狂亂、小二郎の手にとりすがれり。

『母上あの世で申譯は』

言ひし一言を此世の名殘そのまゝ、しづかに前へ倒れぬ。口にてはいか斗氣づよひことをいひても、母の心とて世の常の人情にたがひてはあらぬものを、小太郎が死にたりといふ詞のまだ耳をはなれぬ内に、又もや小二郎の生害、氣も心も亂れはて、前後不覺に小二郎の死骸にすがりつきぬ。されどあまりのかなしさに、泣きても淚も出ねば、叫びても聲も出ず。しばらくはたゞ夢現にとりすがりゐしが、やゝ半時も立てのち、ふと何か思ひつきたる樣にて四方を見廻しぬ。首をかたぶけて懷中をさがし、又手を入れて兩の袂をさがせどなほ見えざる樣にて、室の隅々を見、又天井を見、次に眼を轉じて死骸を見、暫時又とりすがりゐしが、漸見つけたりしれもゝちにて、わが膝元にある手紙をとりあげぬ。泣腫したる眼を見はりて、ひくゝくもれる聲に、手紙をよみ出し

ぬ。

『雲かゝる鈴鹿の山よりも高く、そてひなき三重の海よりも深き御恩を、つゆばかりもえむくいまゐらせずして、先立候ふ不孝の罪は幾重にも御ゆるしのほどねがひ上候。これのみにては何事とも御わかり有まじけれど、まことはけふの夕つ方、龜山よりかへるさ、道のつかれをやすめむと廣瀨野に休らひ居しをりから、後の岡より射出したる一羽の征矢、運惡しくも兄上の眞甲にあたり候まゝ、直さま走りゆきて、又もや矢をつがはむとしゐたる敵にむかひあひ候ところ、首尾よく敵を切伏せ申せしかば、急ぎ首打切りて兄上の許へまゐりしにはやこときれたまひしあとなりき。やるかたなき恨みにくれゐ候ひしに、儀介が敵の首を見て、正しく太田の五郎さまなりと申し候ひぬ。親をうち子をうたるゝも軍の習、かつは一度も御目にかゝらねば、しらぬことゝはいへ、まさしく兄上を我手にかけ、片時も生き長らふへき心は候はず。直にその場にてと存せしかど、今世にて今一目母上に御逢申候ふ上にてと思ひしまゝ、たゞ獨かへり參り候。儀介のかへり候はゞかれに委しくは御聞の程願ひまゐらせ候。くれ〲も年よらせたまへる母樣をあとにのこし、兄上といひ又私まで、年ごろの御恵の万分の一をもえむくいずして、さかさまなる御回向にわづかり候と思へば、きえゆく空もなきものから、是もさるべき前世の宿緣と御あきらめのほど願はしく候。朝夕は猶北風強く候まゝ、御身大切に御いたはりあそばされ、百歳の後まで御つゝがこれなきやう、草葉のかげより

祈上まゐらせ候。猶さま〴〵に申しあげたきことも候へど、せきかぬる涙に筆もすゝみかね候ふまゝ、かき殘しまゐらせ候。かしこ。

小二郎より

母上様

一行讀みては泣き、二行讀みては泣き、たゑず眼をぬぐひつゞけて、やう〳〵讀みをはりたる老母は、たゞ茫然ともちゐし手紙をとりおとしぬ。落せる手紙をとりあげむともせず、何處をよむともなしに、たゞ手紙の面てを見つめゐたり。

折から門に二三人の人、田舎者のだみたる聲に、

『門をとくあけてたべ、亡骸の御供して儀介がまゐりたるに』

されど誰とて出でくるものはあらず、たゞひくゝかすかにきこゆる老女の泣き聲。やがてもおくる春の夜、はや雲間の月かげはしらみそめぬ。何事もしらずがほに茂れる前栽を見やれば、老母が心をつくして生したてたる若木の櫻、やゝさきかけし二ひら三ひらの、心なきさよ風にさそはれて、はかなくちりゆくのみ。

◉香の雪　　柳香散史

（其一）

鶴田壽永と云へるは東京の紳士社會に名を知られし人、某の伯爵とは一門の間柄なれど、維新の際子細ありて臣下の列に屆け出で、今は東京府士族に籍を掲げ、奥州路にて鑛脈の盡きぬ銅山を所有し、年々の收益利に利を加へ、龜男と名げ今年二十二、一粒選りの子息あり、是も修學は卒業前、門閥と云ひ、財產のあるを見込みに、嫁御寮の口入も甚と多けれど、龜男は思ふ事ありとて、何の緣談にも應ぜず、曾ては一旦、洋行せんとの所存あるゆゑ、夫れを果して後との考へなるべし。

宗家伯爵の公達、父公の許可を得て、這回歐洲へ留學の首途、いつやら足下の子息にも、洋行させんとの噂ありたが、平生膩兒とは交睦しと聞けり、倶に留學をさせてはと伯爵の詞、壽永も是れぞ好き伴侶、幸ひの事なりと、龜男へ物語れば當人は此上なき欣び軈て相談も整ひ、公達とゝもに海外留學の事に決し、今日は其の留別の宴を自邸に開き親類は勿論、父子が知己の人々を招かんと、準備も中々に盛んなり。

鶴田の家には、男女の雇人數多ある中に、壽永夫婦が、就中慈悲をかけ傍近ふ使ふ、千賀と云ふ女あり、是れは伯爵家の舊藩士、松山翠といふ者の娘、今年十六の少女ながら、生れ落ると、母は產後の患に死

し、父翠の手て成長せしが、翠は三年前より大酒の爲め、半中風の症となり、今は起居さへ自由ならず、本所松坂町二丁目に幽なる生計なり、以前は某省の屬僚となり、何うにか活計は立てたれど、病氣後は仕を辭し、俗にいふ居食に貯へも費せど、性來の潔白男子、淸貧は愧る處でなしと、困難を耐忍のうちに送り居る事を、早晩壽永が聞き知り、彼の父は余の傳役となり、幼年の頃厚く世話をして吳れた事あり、父に似て翠の我慢、その困難ハ苦にせずとも、憫然や娘は飢に啼かん、邸に引取り召使て遣るべしと、翠の友人に內意を含ませ、去年の秋より雇入れしが、聞きしに優る美女、行義作去も、了得に堅固なる翠の躾、匆々に男親の手に育てられし樣ではなし、年こそ弱ざれ、その悧發さ、爾れどとて口數少く、差出たる行爲とてなし、朋輩にもいとしがられ、壽永夫婦の恩惠を、欣ぶとゝもに父の事は須臾も忘るゝ隙とてなく、駿河臺よりは迴に隔し、本所の方に向ひ、毎朝兩掌を合はせ拜禮するは、父樣今に御安樂をさせませうから、妾の身の立つまで壯健でお在遊ばせと祈るにてありし。

平日よりハ忙しき奧と勝手、お千賀、お千賀さん〳〵本所から人が見ゑましたと、朋輩の知らせに、客煙草盆の掃除にかゝりしお千賀、本所よりの人と聞き、心ならねば勝手の方へ駆來たりて見るに、我家の隣りに住むおあいといふ孀、豫ては父の介抱を賴み置きし人、オヤおばさんですか、何にか變つた事でもあつて、と云ふも最ど氣遣ひなり、お愛は笑みを洩らしながら低聲になり「否、氣遣ひな事ではありません、阿父さんもお變りがないから心配には及ばぬ、今日來たのは少し阿父さんから賴まれて」と云ひつゝ腰

をかけ、マア一ッと汲んで出す茶をハイ有難うと戴いて服み乾し「今日妾は少し用があつて、萬世橋まで來るゆゑ、阿父さんに何か用はないかと聞くと、夫れなら御苦勞ながら千賀に逢うて賴んでもらひ度その用といふは千賀も能く知ッて居ますが明後日は先代の祭日殊には亡妻の命日、毎年心計りの神祭を行ふに、今年は千賀がをらぬから、何や彼や不自由でもあり、人賴みするにも先き立つは金、暮に給金を受取ッたとて、屆けて吳れ、殊には主人夫婦より特別の贈り物、瘠疾同樣の翠の身を知り、懇切な取扱ひその恩は決して忘れぬ、是れといふも先考の賜物と思ふにつけても法計り祭度く、多分な事はいらねど、若し千賀の手に貯へにてもあらば、借て來て下されと賴ましやッた、和女も御奉公をして居る身の上、貯とてもないであらうから、お給金のうちでも借りるか、朋輩の人に繰り廻して貰ひなされては何うぢや」と遂になき父の無心、爾れど明後日はお祖父樣と母樣の命日と云ふ事は忘れた事なし、毎年父樣が祭文をお讀みなさるも知つて居る、お手元の不自由是れも知らぬでなし、何うにか都合をして送らぬばならずと思へど「おばさん御苦勞でござりました、其の祭日の事は妾も氣にかゝッてをりましたお出でを幸ひ、何程かお渡し申し、屆けてもらひ度が、今日ハ若旦那樣が、洋行を遊ばす御留別會で、お客をお招きになりますから、この通りお家も忙しい、何れ明日當方から、每もの人に賴み屆けます、遠方の處難うござります。

「オヤ〳〵夫れは嘸お忙しからう飛んだお邪魔を致ました、ナニ妾は何うせ萬世橋まで、來る用があつ

たのだから、夫れでは爾う云ッて置きませう、皆さんお世話さま「左様なら何分お頼み申します」父の世話をして呉れる人かと思へば我が親類とも思はれ今更に餘波をしき心地ぞする、夫れにしても父の無心、奥様へ願はうか、朋輩のおみつどのに頼まうか、何にしろ今日は其の様な事云ひ出しもできずと、獨り心をいため居たり。

《其　二》

已に設けの準備も整ひ、壽永夫婦は居室に在りて客の來るを待つうちも、子息が行末の相談、是れぞ親子の實なる「貴郎ャ、龜男も豫て望んで居りました洋行をする、事になり、若様と御一所に參りますから誠に安心でございますが夫れにつけても早く良い嫁の約束が出來てあつたなら此の上の安心でございませう、千葉様の糸子さんは恰好似合ひだと思ひますから、龜男に話ましたが、那の仁は少し許り學問の出來るを、高慢らしく云ふから、厭だと申します、夫れなら梶原の妹の高子さんはと云ひますと、那れは所謂お轉婆で、鶴田龜男の夫人とは云はれませんと云ひました、夫れで妾の思ひましたは、畠山の重子さんなら縹緻も良し、温順くて不足はあるまいと、相談をしますと、那の仁ハ阿母さんが藝妓脱りで教育の爲法が私等と丸で違ひますから、不可せんと、トンと相談に乘りません、夫では和郎の望は何んな婦人がいゝと聞きましたら、私しは外貌の美は索ません、唯心の美なるを愛します、マア夫れも今は申しません、何れ歸朝の上で選みませうと、一向其んな氣はない様でございますが、洋行前に今一度、

貴郎からお話しをなすつたら何うでせう「其の事は私も心注かぬではないが、昔と違ひ、今は夫婦の縁談も親の壓つけでハ不可ん、私が知つて居る向きでも、隨分、無理に嫁をもたせると、却つて夫れが爲め息が放蕩になつたり、また息は堅固でも、嫁が我意のお轉婆で、男女同權だのいや自由だのと云つて、遂には聞くに忍びぬ不行跡のあつた事もあるから、龜男に所存のある事であらうから、歸朝のうへで緩くり相談をする方が宜からう、一体今夫婦になると云ふものは智識品格の相適ふを選むが肝要サ、其の相適ふといふものハ、互に心を知りあつて、是れならは嫁にして云分はない、良人として不足はないと、見込みのついた處にて結んだ縁は、決して離縁抔になる氣遣ひはない、明治となつてからは、男女ともに教育の進歩する事は云ふまでもないが、何うしても男子の方ハ著るしい進歩が見ゑる、是れは所謂昔からの習慣で、男子ハ學問を勵まねば、一人前になれぬといふ事は封建時代から染み込んである、だが舊幕の頃は商人抔が學問をすると、反つて營業の害になると云ッて、偶ま學問をする商人があると、その社會で笑つてたものだ夫れに準じて婦人もまた學問のあるものは縁遠い傾きであつた是れは時世に慣ふ繪をかゝねばならんといふ諺ざの通り、無學でも何んでも良人に仕貞節でさへあれば、女の道が立つと爲てあつたものサ、乃公抔は依然舊弊だと笑はれるかは知らんが、愍ひ學問のあるを鼻にかけ、良人を尻に敷く不節操な婦人よりは、無學でも舅姑に孝行な、良人を大切にする嫁を有たせ度と思ふ、悴の了簡は何うだか知らぬぞ、千葉の糸子や、梶原の娘抔は、乃公も不承知サ、畠山の重子ハ先づ嫁にし

ても不足はないが、如何にも上流社會の夫人には探りかねる、何しろ出立前に一應悴に質問をして善く意見を聞いて置かう「爾う遊ばして下さい、何うも嫁の事が定まらぬと妾しも安心が出來ません」折から追々に入り來る賓客中には本家伯爵は公達高福と令孃滿壽子を伴ひ來たられたり、この人々を上客として其他親類知友、何れも設けの席に就き、主個親子は美酒佳肴を侑め、餘興には女優粂八の舞踊、天一の手品、到れり盡せる饗應に、來賓は僉歡を究め、起つて洋行を送る演說あれば、詩を賦して向途を祝すあり、了得に上流社會の交際、禮に始まつて禮に畢り、時辰後十時を報ずる頃目出度散會となりたりき。

（其　三）

本所松坂町二丁目松山翠の寓居へ訪れ來しは鶴田家の執事竹田節藏なり格子戸の開く音すれば翠の病所よりは直ぐに一目「オヤ是れは珍らしい、サアマア、穢い所ですが、ズッと此方へ、病人の一個住居、御覽の通り掃除も行屆かず……「もうお介意下さいますな、其後は御無音を致しましたが、御容躰は如何です「イヤモウ相替らず、死に損ねてをります、御主人御夫婦にもお替りはございませんか、昨年來娘までが御厄介、何共御禮の申し樣もない……若御主人も御洋行になりましたさうで誠に恐悅、殊に從五位樣と御同行で、何よりお目出度、性來賢明な仁だから、海外で御留學をなされて御歸朝になツたなら、適れ國家の名士とおなりなさるであらう、最早御安着の電報でも參りましたかな「はい已に先月廿

二日米國へ御着の電報がありましたから、近日詳細のお便があらうと存じます「夫れは先づ御安心で、今日は何所へお出掛かネ「少々御相談があつて當家へ伺ひました「僕方へ、オヤ夫れは恐れ入ッた、何か急な御用でゝも」「他の儀でもありませんがお千賀さんの事で……」「娘の……ド、何ういふ御用で「貴郎、御立腹をなすつては不可せんよ、實は表だッて使を向けると、平生の御氣質だから、立腹をして病氣の障にでもなッてはと、夫人も殊の外御心配で、夫れゆゑ拙者がお見舞旁々參ッたので、是れは夫人からお贈りものです「毎度何うも頂戴物計で何共恐れ入ッた……爾うして娘の儀に就いての御用とは「誠に申しにくい事ですが更めて貴郎から暇を願ひ出て、お引き取りを願ひ度のです「エ、娘を……何うして、何か不調法でも致しましたかネ、不埒でも「其の儀は如何なる子細か存じませんが、夫人の仰には何事も申さず、この所は穏かに暇を遣はすから、當り障りのない様、翠さんから暇を申し出でられるやうに、相談をせよとの事で「何うも驚きましたネエ、竹田君の前だが、千賀に限ッて不調法を致す様な不所存者とは思ひません、御承知の通り荊妻が病死後は男親の手で養育を致した、とは申しながら、從前人に後指をさゝれるやうな行爲もなく、當近邊では親孝行だとの噂もあり、親の口から申すではないが、容貌も心も美しう成長を致したと存じてをる、御家へ上ッてからは、夫人の御薰陶で尚更女德を備へた様に思はれ、僕も有難く存じてをる、當人もまた鶴田御夫婦の御恩は、生涯忘却をせぬと申してをります、お暇になるとは能々の事で、能々の不埒不調法があつた事と思はれますが、先づ其の子細

を承まはらぬうちは、畏まッたとお受を致す事はできません、松山翠は病朽てをりますが精神の武士は朽ません、竹田君打明けてお話し下さい、御遠慮、御斟酌には及ばん、如何なる不埒を致したか、其の子細によッては速かに引取り、御家に御迷惑はかけません、何うかお明し下さい「君の御性質では、爾う仰しやるだらうと存じたが、子細といふは夫人が御承知で僕杯は一向に存じません「否や、君が知らんといふ事はない、鶴田家の執事も勤めてござッて、假令下婢の進退にせよ、君が子細を知らず暇を遣るから引取れとの使者にお出での筈はない、子細を承まはらぬうちは、千賀を引取る事は出來ん、若しお邸からお暇になり歸ッたなら門前に立たせたまゝで内へとては決して入れません、サ、委細お話し下さい、承まはらぬうちは、翠安心が出來ない、第一承諾致されぬ」昔氣質一徹の老人、竹田も殆ど困却し「此事は決して話すなと、夫人から堅くお申しつけではありますが、貴郎の御心底で子細を聞かねば引き取る事が出來ないと仰しやッては、約りお千賀さんが憫然だから……夫れぢやお話しませう、併是れは主人も夫人も、内々でお濟ませになッて、穩かにお暇を下さるのですから、貴郎が立腹をして、如し手暴な折檻杯をなさると、御主人のお慈悲も無になります、宜しいか、だから僕のお話し申す事も、只貴樣の胸に藏めて居て、何事も云はぬやうに、ナニ、悪いと云へば悪いのだが、若いうちには有り勝の事でサ、爾う御立腹をなさる程の事ではない「娘は淫奔でも致したかナ「否さうでない、實は先達て若旦那が御洋行に付き、御留別の御宴會があつた時、御本家から從三位樣從五位樣姫樣がお出でになりま

したが、其砌姫様のお指輪が紛失致しました「成ほど「然るに姫様も其の事は深く秘していらッしやいましたが其後阿母様より指輪は何うしたとお問になりましたゆゑ、實は鶴田へ參ッた節紛失を致しましたとお答になり、夫れは怪しからん、何故其節詮義をせぬかとのお叱りで、遂々御本家より御照會があつたのです「成程飛んだ事で、成程「正可に當日の賓客が……種々詮義を致しました處ソノ……何んで……お千賀さんが貴郎の方へ金子を送つた事かあるといふ者があつて、夫れでは若しや……御立腹をなされては不可ん、貴郎が御先代の祭典を執行するそうで、金子の入用があつて、お千賀さんの許へ申し遣はされた事を、聞き知つた者が……平生から正直なお千賀さん、左樣な不所存のあるやうはないが……人には出來心といふ事があるから、一時チョイと間に合せ後で何うとか……是れはアノ人に限ッた次第ではない、我々も焦眉の急を凌ぐ場合には遣事です、だからマアお千賀さんに聞いて見るが宜いと……實は僕から夫人へ内々申し上けた處以ての外お驚きでしたが、元來夫人もお千賀さんをお疑ひ遊ばす筈はない、だが貴郎へ金子を送つたといふ一條があるからと陰にお問になると、御立服をなすッちや不可が、如何にも私しがと……「ヱ、ナニ、娘が其指輪を……盜んだと申したか「夫れがサ、先代の祭亡母の追福を營み度と思ふ心から……「如何なる天魔が魅いつたか、僕は左樣な不正な金と知つたら、受けまい、給金の中から拜借を致した事であらうと存じて……竹田君、僕は現在の娘の爲めに殺されました、最早士族といふ肩書も今日限り實に言語同斷不埒な奴……他は承まれるに及ばん、宜しい千賀を

速かにお歸し下さい、松山翠所存がござる「貴郎、爾う御立腹では不可ん、夫れでは夫人が切角の御心配も水の泡で「否、斯く貧困に生活してはをるが、僕は未だ不義の財を握つた事はない、況して恩人の鶴田……其の本家の令孃の指輪を盗む抔とは犬畜生に劣つた……左樣な根性になれよと敎育は致さぬに……向來ぞの面をさげて鶴田御夫婦に目見えられやう、心外千萬な……」膝をつたふ涙潸然、傍に聽き居る節藏も今更氣の毒の外なかりけり。

（其　四）

すまぬ事とは存じながら、姬樣がお指からおぬき遊ばして、卓子の端にお置きなされ、其まゝ忘れてお歸り遊ばしたを幸ひ、父の無心の金調へんと、密とかくして屑屋に賣り、父の喜ひし消息を聞き、嬉しさに惡しゝと思うた事も忘れ、竟この場になり申し譯かありませんと、夫人の前で申しわげた時の辛さ幼い頃より塵ッ葉一本人さまの物欲しがる事はならぬと、嚴しう仰しやりつけの父さま、昔なら手討にする筈今は夫れもならぬ、殊にその金は父に送つたといふ廉に免じ、命は助ける、親でない子でない、今から宅に置けぬ出て行け、父と思ふな親ありといふな、顔見るさへ身の汚れと、毎度莞爾々々してお話しなさる欣びに引替へ、眼には涙を有ち、腹立つての仰せ、さら〳〵無理でなし、實は斯々と打ち明けては御恩ある人の御意を背き、また一方には御身分ある仁の秘密を訐く事になる、夫れは元來望みでない、左にも右にもこの身一ッ捨たなら何事も濟む、分疏せずに死すとても、知る人ぞ知る心の潔白、

父さまのお身も却ッて御安心にならう、左は云へ、母さまお沒去なされた後は、一方ならぬ御心配をなされ、成人をさせて下された父さま、殊には御不自由なお身、これから御安心をさせまし、孝行盡すが子の道であらうに、歎ぎの上に歎きをかけまする不孝、宥して下され、今死ぬるは鶴田樣への御恩がへし、妾しの死んだ後は、父さまの事諄々お賴み申します、お邸を出る時から、宅へは歸るまいと思うたが、竹田樣のお諭もあり、この世の餘波に只一目、父樣のお顔が見たさ、未練ながら歸ッて見るとまた一倍、お餘波をしうて、別れに切てお笑顔をと思ふたが、夫れもならぬか、併し今死ぬる身には結句お腹立ちなされた方が、心殘りがなくてよいか、死んだ後では了簡の狹い女ぢやとか、馬鹿ぢやとか云ふであらうが、身の潔白を立てやうとすれば、御恩のある人や、身分ある人にすまず、妾しの命一ッ捨つるは双方の爲め、今更泣くは愚痴とやら」心に決する處あり往來の絕えしを幸ひ兩國橋上に指しかゝりしは松山の娘千賀子なり。

夜は已に三更、春とは云へどまだ淺うして肌寒く、雨もよふの空に、十日の月はうばはれて光もなし。本所の方より足音せわしく駈來る二三の人、確に見る提灯は鶴の丸の紋、ハッと驚き合掌し、已に斯うと欄干に身を憑せんとす「ヤレ待ッた」聲は聽き覺えし竹田節藏なり、ふり切ッてまた足をあげんとす「ドッコイ斯んな事であらうと思ッた、お千賀さん死ぬには及ばぬ、和女の身の明りは立ッた、左も右も阿父さんの所へ、和女の宅まで」何事を辨ずるの遑もなし、三名の男に抱き留められ引かれしまゝに

松坂町の我家へ來たりぬ。父ハ床の上に坐をしめ、その傍らには家重代の銘刀を置き遺書らしきものさへあり、原來は父さま御自害の覺期でありしかと、思へば己の死なんと決心せし事さへ忘れ、驚きて父の傍に駈け寄れり、父は鶴田家の書生兩人に左右の腕を捉られ、惴るまい、千賀さんも無事だ、戻られたぞ、と云ふ樣子は手ごめにさるゝにあらで、必定父の自害せんとせしを止めしものなるべし、夫是を早くも推し、父さまゆるして下さりませと泣さふせり。

千賀子のぬれ衣もはれ、その潔白も明瞭せり、今竹田節藏が鶴田壽永夫婦の命を彼け、在邸の書生車夫を引連れ、松山方へ駈けつけしは、父子の身に若しも過ちあらんかを慮ばかり、大勢を差し向けしなり、果せるかな、翠は一人の娘が盗みせしを愧ぢ割腹せんとし、千賀子はまた投身をくはだてし處なりき。

伯爵令孃滿壽子の指輪は、妾しが盗みしと千賀子自身の招丁、さる行爲のあるべき女ではなしと思へど、我が口より盗みしと云ひ、是れを屑屋に賣り金に代へ父の許へ送りしと云ふ、同じ召使の噂に龜男が留別會の日翠の許より千賀子へ金の無心してよこし、其の翌日、千賀子より三圓の金、翠の許へ送りし事は碇なり、夫れでは正しく盗みしか、寔に人は見かけによらぬもの、去りながら些た三圓の金にて、渠を賊にれとすも愍然と、夫人の慈愛、夫れとなく暇遣らんとて節藏に使させしなり、翠の一徹子細をきかねば受とらじと、終に節藏より綷の子細を聞き、渇しても盗泉の水は飲まず、穢らはしき金入費とし、先代の祭すませしこそ翠が生涯の不覺なれ、イデ腹かッさばいて、親子一ッならぬ潔白を見せ、冥

途の先考に詫奉つらんと、千賀子を散々に折檻し、我家より追ひ出し、其夜を去らじと覺期を究め、千賀子は眞實盜みしにあらねど、義理と恩とにからまれ、是れも死なんと決心せしなり。

伯爵令孃滿壽子は曾て龜男を懸想せり、されど了得に深窓の裡に養はれ、上流の教育をうけし身の上、はしたなく云ひ出でかね、獨り心を焦す折から、龜男は洋行の首途となれり、今はとてその留別に招かれし席上の閑を偸み、思ひのたけを筆にはこバせ、歸朝の後は、必ず妻に迎へてたべと、細々と認めし中へ、この指輪は妾の心に契ひ居る印に進らするなりと、手早く封しとゝのへんとする處を、うたてや千賀子に認められたり。

愧かしと思ひしも是れまで、和女を見込み頼み度し、この書簡、密と龜男どのへ李行の裡に納てくれよあなかしこ人には告げまいぞ、と思ひきつての詞、若旦那のこの姫樣と、御夫婦にならせ玉ふは、お家にとりて重縁、元來不相應き事にあらず、直接にかゝるお媒介をしてこそ悪けれ、若旦那の知らせたまはぬうちに、鞄の裡へ入れおかば、別に差間へもあるまじと快よく承諾ひ龜男の衣類を鞄にいれる折密と件の書束を倶に納め置けり、思はざりき、この指輪よりぬれ衣を身に着て人には告げなと、姫樣より頼みありしはこと、直素なる心に、フト出來心より盜みましたと、夫人へ告げたるは馬鹿と笑ふものは笑へ、差し出口して人の事あしさまに云ひ罵しる、婦人に比べて其の志操の優劣は孰れ。

《其　五》

滿壽子は母より指輪の事を問はれ、鶴田の邸にて紛失せしと、其の場を繕ひすませしが、この事早くも家扶より、鶴田の執事へ照會し來たりしゆゑ、遂には一人二人の命にも關係ふべき、大事とこそなりけれ、千賀子が堅く滿壽子の頼みを容れ、口外せぬ健氣さ、倩々思ひ考ふれば考ふるほど、渠の心を推量りても、知らず顏にては居られず、今更に寃にれとしいれし千賀子の憫然さ、我が爲めには戀の棧はし、その人に憂目見せて、何んと傍觀のなるべきかと、滿壽子はそゞろに身の怖ろしさに堪へかね、實は云々なりと明々地に母へ告げぬ。

千賀子の濡れ衣は乾せり、去るにても父の許へ送りし金ハ、また如何にして調達せしかと、翠の疑惑は更に解けず、千賀子も今は是非なし、父の許へ送りし三圓は、龜男が惠くれしなり、父の許より使來たりて、先代の祭母の追福の入費の補を貸せよとの無心話を、龜男密に聽き、是れにて父に安堵させよと惠みしなれど、若き男の若き女に金呉れし抔と云はれ、あたら孝女、あたら慈悲を、仇にする事ありてもうたてし、和女必ず余が惠みしと口外すな、余も云はじと、淸き愛情に受けたる金、打ち明けて見れば、彌よ千賀子の潔よきを知るに至れり。

鶴田夫婦は翠の潔白千賀子の志操を感ずるのあまり、翌日翠の室店へ車を枉げ、この病躰にて此所にあるは宜からじ、幸ひ長屋内に明きし家あり、是れに移りて父子近く相逢ふが好し諸事惡しくは取計ふまじと、萬端の手當をして、我が長屋内に引取り、千賀子は相變らず夫婦が最愛の召使となれり、千賀子

の孝心は日一日と、人に賞さるゝ計り、その行孝も寔に十年一日の如し、とは是等を謂ふか。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

三年の星霜早くも經ち、鶴田龜男は學なりて歸朝せり、程なく外交官に拔擢され、交際塲裏に其の名高し、當年の天長節鹿鳴館の佳宴に鶴田龜男同夫人千賀子との名を見たり、この才子佳人の媒介者は、伯爵夫婦及び令孃滿壽子にてありき。

當時三圓の夫人と紳士社會に名高し、三圓は僅少なれど、孝貞全き千賀子の淑德ハ、幾金圓の黄金を積むとも他に購ふ可ならず。

龜男が外貌の美をもとめず、其の精神の美を索んと云ひしは、蓋し此にありしなるべし。

◉納豆賣

睡花亭主人

《第一章》

さし昇る太陰の晴光に上野の深林は倒に射られ梢間に塒する幾許かの鴉噪き立ち啞々と鳴くが耳に障りてトロ〳〵と寝たばかり結びもあへず夢ハ破れぬ消よとこそ云はぬばかりの手洋燈の燭光油も枯れ〳〵て茫乎とした炎四邊を見れど何ひとつとして眼に遮るものもなく枕元に立廻す二ッ折の破れ屛風身代と倶に痩細りて何か骨を露はし今戸燒の火鉢一時瓦解したを竹の鉢卷にて漸く維持したるに口の欠て浮乎注ぐと外方へ茶の翻れそうな比々燒の土瓶火箸ハ勿論蝙蝠傘の壞れと見ゑたり九尺二間の棟割長屋上總戸の隙間洩る北風くるまつて寝る柏餅の蒲團を肩の邊から攻込んで。ハックショ。ハックショ何だ乃公のとを惡く云つたなハックショー。イヤ感冒だ々々々と縮小まつて寝やうとするに目も耳も冴へ切りて思ふまゝに眠られず吹回す風か將て來る吉原のドンチヤン騷き(うた)逢ふて立つ名が立つ名のうちか逢はで立つこそ立つ名なれテントンシヤン。エーナンダ厭惡しい餘人の心意も知らねいで。ダガ面白い〳〵々々と云ひながら彼樣な愉快をするも夢の間我身の上で覺ゑがある指しも大分限と云はれた本町の角新十間間口の見世庫で土倉の六戸前もあつて往來の人の顔面も映るばかり磨き上た身代番頭雇人の名前も一寸覺ゑられぬ程の家計であつたが風音した心意の狂ひから三十過ての色遊是程面白い境界を主人と

か旦那とか表向丈はやされて唐棧紬を身の皮とし是迄窮屈ゝ暮して居たのが馬鹿らしく悔しくつてサア夫から算盤球の音を聞くが守屋の佛法よりも嫌ひにあり紀文以來吉原の歷史に名前を擧る程古人に向ふを張て見たいと飛んでもあい誓願から到頭節分の夜の催に某樓の大二階に菰冠りの鏡抜て娼妓幇間打寄て酒飲ました明樽へ貨幣の數を知らないが金銀貨取交せて杉成りに積み上けサア誰でも兩の手を思ひのまゝ攫んで見よ攫んだ丈が銘々の所得とすべしと定めしに一座アッと驚ひて新造禿は今日ばかり我手の細きを恨むのみ虔婆小者が慾の皮引張合ふて我勝に鵜の眼鷹の眼鷲攫み押つ押れつ爭ひしは前代未聞の全盛よと持囃さるゝ嬉しさに迷ひの夢は尙覺めず頭の押手なきまゝに斯放蕩を仕盡くして果は女房の親切が何歟に付て邪魔にあり舊木に勝る裏表心の底の知れかねし娼妓に見易て離緣してから肆店の締りは倍亂れ番頭丁稚に至る迄主人を見眞似にれのがまゝ引負して遊び歩行は家業の立べき筈もなく果は各々逃亡して肆店は賣家と横に札到頭こゝに張り切れず地面其外素貨は皆抵當に引上られ殘るは我身獨りなりさて如此なつては誰わつて唾さへ掛るものもなく年來抱への鳶の者出入の知己に半年三月と食客のはかない身何處でも左樣々々置ては吳れず近頃橫濱は銀貨がよい些算盤でも取る者は日に十錢や貳拾錢は何でもないと申します旦那なんザア腕があるから一奮發して御覽なさいと實は躰よくれ拂箱是も先に無理はあい身から出た銹アゝ己が惡かつたと氣の付も遲い智惠なり舊は別莊作つて遊んで居た此吳竹の根岸の里在らふとかわるまい事か今は三島前の裏屋住居に日々の口を糊らしかねても天秤棒ハ肩が柔

人力車は足が鈍くして迚も物にはなられまいと彼是と工夫の上以前他人か惠んて呉れた些バかりの殘り錢漸々に掻集めて資本として納豆賣のゑがない生業氣さへ腐れて引糸の細き煙も立がたき辛き芥子の世渡に苦敷息をつく〴〵と我身に愛憎が盡果た今更思へばおもふ程此世の中が厭で堪らぬ寧そ首をと只獨り蒲團の上に起直りて腕を組み頭を垂れ蕭然とした我影も薄き衣の肌寒き行合の間の肩に荷ふ軒端並びの夜商人鍋燒温飩奈良茶飯賣て戻りの高聲に細君が寐惚る赤兒が啼く壁を一重の騒ぎさへ何靜まりて鼾の聲陰々として聞ゑけりア丶惡かつた々々々死なふと云ふ身が迷ひの種子に愚痴を翻すともないと徐々立上りて如何に貧乏な身上でも首ひとつ縊る位な器械は何かありそうなマテ々々此處に善いものがある不思議なとには細君の締てれつた細帶未だ世が世で在りし時の品ゴリ々々云ふ濱縮緬で染色は躰なし退めたれど如何して如此なものが今迄殘つておつたらう此紐で死ぬも細君への申譯にもならふこと丶片隅持て延上り投り上れば梁上をするりと潜りてぶら下るを兩隅取て結び合せ是でよし々々々々併し是迄遂ぞ首縊の稽古をした事がないイヤ誰もない筈だが首縊でも少は法式イヤ法式もあるまいが何か便利の仕方がありそうな者だハテ困つた誰ぞに聞て置くだッケ待々々如此して見やうか是では腮が締つて息が詰る夫でも息が息らなくてハ死なれもしまいさて々々不都合なとだ善々如此して見やう是なれば大丈夫死なれそうだと流しの棚に片足掛て思ひ切て踏張つ丶一動り搖つて釣下る機會に帶も弗と斷れ身は仰首に投られたりアイタ丶と口を喁み腰を摩り起も上らす立つことも堅田に落て病む鴈の空恨め敷仰ぎ見る

月の光も更行ば櫺子の破れ指入りて顔覗かるゝ愧かしさ譬ふるものはなかりけり兩隣の老婆や小兒道成寺の鐘落た役僧程此物音に驚き悸へて何でも今の音ハ猫や鼠の業ではあるまい但しは雷公の落たのかイヤ此寒天唐突に落雷の筈もなかろうと種々と評議の様子此上時宜に寄らば差配へでも屆け出る景色質問でもされては大事と此方では息を殺して再擧は圖らず寢た振りして居ながら熟々思へば此細帶何で是で死なれやう實に馬鹿らしい譯であつたが一体其死のふと云ふ了見がケチな卑怯な譯是でも男一匹だ此體死ぬまでは己の物貸があるとも借はなし何も廣い世間死ないでもよいと樂があるから苦もあるので其樂を仕過た故苦が一倍なのだ此苦を辛防さへすれば又た樂か來る道理だと云ふと今の納豆賣如何にも薄い利益なれと初めから考へては實にまだるいやうであれど是さへ心の持方で辛防さへした曉には遂には十圓や二十圓の貨幣必ず纒らぬともない筈死ぬ程の苦み此苦みを身に換て商賣を勵んだなら如何な事でも我慢が出來やう夫でも今死ぬより是から先の命が益けだ死ぬのが厶み〳〵厭になつた鶴亀々々と獨己れと氣を取直し何でも是から今一擧と力瘤出しての意氣込如此大和魂振り起しては居ても起ても堪り兼て夜の明るが待遠で仰伏して眠られず明朝ハ何時に第一番に買出しに行つて何處から何處迄賣て歩行歸掛に筋違て薩摩芋屑の蒸したのを二錢計り買込で横町の汁粉やで餡を少し賣て貰ひ芋を突き壞はして餡を包み琉球饅頭と云つて賣て見やうイヤ夫とも鷄卵の少し二の町あのを安く買つて温飩粉を入れ山梔子で色を付け黄金餅として賣と厶やうかイヤヽヽ夫には鐵盆か入る火鉢も入る左様は資本がない饅頭の

とにしやうと思案しながらトロ丶丶と一睡むと上野の五時の鐘サアしめたりと云ふ時西風か急に吹出して空一面に砂塵か起つて二三町先はかすみ切て何も見えぬばかり井戸端は厚氷が張詰て釣瓶の棹は氷柱に閉て他人の酌まぬ先には何分にも手か出されず何の是式ごゝか辛防じやと冷水で面洗ふてパリ〳〵した氷飯に塩摘み掛て二三椀掻込や否や直に納豆の荷負出してヒユウ〳〵云ふ寒風の氷はら聲枯して歩行些少ばかりの利益から例の琉球饅頭の資本を卸して如何か左右に製造て持て出て辻賣するに不景氣につれて安物流行小商人や車人やが量目のあるのに一寸手を出し思ひの外に評判もよい工合夫からは晝夜となく稼業に身を入て居る。コウ。納豆商。ヘヱー難有たう御座ります苞に致しませうか。イヤ昨日買つた貴樣の納豆だかアリーア豆が固くつて汁にしでもサッパリ喰へんアンナ物を賣るといふとかあるものか。ヘイ〳〵夫は實に濟ません今日はきつと御請合申しますれ入り合はせにれ代ハ決して戴きません何卒お取り下さいましと揉手の言譯大雪の降る翌朝履古した革鞋氷り切つて鉄沓の如く足の指も是限り落るかと思ふばかりの極寒そよとの風もなく眼も暗むばかりの炎熱の日一年中の骨休めに偶には一日位と緩む氣をイヤ〳〵我身ハ一旦死んだものだ死ぬ程のものが骨休めとは當らぬ譯と吾と吾身を勵まして一年余り必死と稼て一寸の怠りもあらざれバ了得の貧乏神今ハ競爭にあぐみが來てか店賃も三十日には急度前金を拂へるやうになるも亦妙なものなり。

《第二一章》

納豆賣の商人姓は飯朝のさい藤と稱すれども別當にはあらで納豆職あり其名を室藏と云ふも亦納豆に因みてのとなるべし比しも舊暦の霜月今年は雨も雪も降ぬので迎春の都合には至極宜しい併し此烈風には恐れる疊貳枚より外是と云ふ荷物もない貧乏世帶は如何でもよいが家藏を持て居るものは火事が何より心配だ其心配する身分に今一回なつて見たいと云ふも亦例の愚痴かヤア何の間にか風か死て雨に成てオヤ何だ雪交りとは念の入た趣向だ道理こそ此二三日厭にゾク〵〵寒氣が身に染むと思つた其處で火事の心配する樣な人達は雪見とか徘徊とかて娯遊も出來やうが結局苦難のは此方輩だ一日でも商賣に怠ると直其報應が來て中々寒い處でなく饑餓めを見ねばならぬ夫も世間に義理を欠たならば半月や一月位經過もしやうが底到身の詰りで自分で我咽喉を締るやうなものだヤア〵〵降るハ々々此樣子では翌日は商賣も如何であろうかと苦にしながら打臥しが果して詰旦になりても一向止むやうな景色もなし室藏は何よりも早く起出で此處が商賣に究竟の時機なり納豆賣には持て來いと云ふ天氣と獨りイソ〵〵勇み立ち草鞋掛けて飛出し納豆々々の聲降雪にかすませて賣步行は此大雪に納豆汁は妙だオイ〵〵納豆やと長屋の窓から丼鉢を出して買ふ老爺あれば手が冱寒て勝手元も難儀なりと云ふ獨生納豆買て朝餐濟ます輩も多く常には半日も掛る商賣を僅二時間ばかりに濟ませ殘らず賣切りて夫から例の芋饅頭に取掛る支度して立歸り氷り付てゐる雨戸こぢ明て入口に腰打掛け肩に積る雪拂ひ落す折柄此方をさして步行寄一個の老人年齡は六十許なるべし玉羅紗の帽子に軍艦の廻し雨衣フランネルの股引裾掛げて蝙蝠片手に杖つ

き々々下駄の屐よつく雪蹴返して歩行悪そうに溝板を傳はりながら覗き込て室藏と面を合はしイヤ久々でと云ふに室藏打驚きて是は々々此降雪に克こそお尋ね下さゐましたお耻い此爲體汚くるしくも先々と手を取りて席に就しめ己も續ひて這上り御覧の通り拙生も今只商賣から戻りまして何の用意も御座りませんでと老人の押し止むるをも聽かず貧乏徳利の口を欠きて土瓶の後家蓋してある消壺の中に手を入れて燒さしの炭攫み出し火燐擦りてポヤヽヽと燒付け火鉢に口添へてプウヽヽと吹き起すに漸々煙草の火からいさゝか温煖取れる程の火氣は出來ぬ土瓶片邊に掛て温湯汲む手當して眞に無作法を致しましたと其處取片付て室藏は老人に打對ひさて改めて挨拶する老人は此寒冷に火の氣のない處に數時ありて余程の間難儀をしたれど兎角して漸と出來た火鉢に搔嚙たる手を差翳し追々顫も止りし様子此如日に參りまして飛んでもない御厄介を掛けました今更の申譯いたすやうではありますが手前方でも聟取嫁取何やかやで種々取込がありまして何等にかまけ終々御無沙汰本町にお出なされた頃は不斷御懇意を下されたのに移り變る世の中とてあれ程の立派な御店何か他人の物となり明暮に見る我々さへ舊の事を思ひ出し顔を背けるバかりなれば嘸々お遺り惜からう今は何處にお居でやら室藏君の御動靜が如何も淨々分ぬと此間も老婆とのお噂れ住居も分ぬとお尋ね申さうやうもなく心にハ掛りながら打過てありましたが此程稚兒が坂本でチラリとお見掛申したとて貴君のとは日頃より申付てもあります故外ながら跡を追ひ正かに此處と見極めて歸宅しての申聞け夫は克こそ氣が付たドレ老人がと其翌日杖を牽てお尋ね申せば何も

暗いからお出稼ぎ夜分も遲く迄御商賣に苟かお寸暇もない御樣子何日の頃出たならばお目に掛れる事であらうと些困つて居りましたが昨夜からの大雪故本日こそお出稼はあるまいと今朝方此方へ來て見るに何もの通雨戶は締切りはや商賣にお出掛とお隣の方にお聞申して扨も々々今日と云今日以前の貴君であいとの其れ心根が分りましたと濕る煙草を吸付ながら語るを室藏頭を搔きイヤハヤ面目ない次第此塲になりて後悔も遲蒔ながら切てもの罪滅しと如此なと致しては居りますが此辛防の百分一も三年前に出たならば斯の姿にもなるまいに馬鹿の跡智惠何とも又申し樣もありません實は先日も令息君に圖ずお目には掛りましたが納豆賣の此樣で如何しやうもないと故と御挨拶もいたしませんので定て何とか思召もと心に耻てをりはしたが却てお心に掛られまして御親切の御尋には實に痛み入りました舊はと申さば我身の不埒惡いに相違は御座りませぬが一旦如此に落振れては親類緣者も寄附けず以前は彼是と世話をもして兄弟同樣にした向も鼻を摘んで素知らぬ顏是が當時と云ふもの故愚痴を翻すは野暮な事と口に出しては申しませぬが氣まづいとや情ないと多い中に貴君はまた斯御深切下さるとは扨々厚い御思召と漫に懷舊の情を催ふし語氣もうるむばかりなりしが心付て火鉢の傍に臥せてある茶碗拾ふて洗ひ淨め切てお湯なりおひとつと差出して嘆息し以前前田侯のお邸でお能樂を拜見しました折鉢の木の最明寺が斯樣に雪の降つた日に佐野の常世が家に宿り御饗應もなきまゝに松や櫻の盆栽を切て燒火にしたとは誰も皆知る美談にて納豆賣の室藏が舊より常世のつねならぬ世を果敢なくも暮らす住居にお尋下さるお志は最

明寺にも勝る珍客櫻餅には及ばずとも松風位のれ茶受をと思ふばかりで心任せず何卒お察し下されてと云ふに老人も打笑みて時に取てのれ談話なれどイヘ／＼最明寺様などとは假やうなき横ずつぽんと月の都の往き通ひれよびも附かぬとながらアノ鉢の木の役割には常世の女房がありましたが此處の主人にはなぜか女房がないイヤ其女房のとに就て實は老人故々出向て貴君に御相談いたしたいのは去る方に居る婦人ですが出戻なれど儉約で夫は／＼深切な氣質老人充分御保證仕ります何とお貰なされてはと半分聞かず室藏は腹裏にて打笑ひ是はしたり此老人餘程耄たものと見へて雪中を態々尋ねで呉れたはよいが女房の咄まで持込むとは呆れ返つた寸法違ひ假にもマア考へたかよい我身獨りが過し兼る極貧の此世帯如何して末々口が殖て立行やうがあるものかと縊を付て居と故へイ御深切は有難う御座りますが何を申もハヤと一向に受付る氣色もなきを老人重ねて室藏君マアお聞なさい愚老も隨分若いとき覺えのあいとではない女房を持つと云ふは何か不經濟に申しますが決して左樣云ふ者ではない結句持方にあると云ふもの貴君が如此して朝から商賣にお歩行なさつて歸て又候仕込して夜分持て出る事は並大躰のとではないが女房が留守の間に仕込をして貴君は賣ると一方となされたならば今迄の仕事の二層倍は必出來やうと思ひます大なり小なり女房は如何でも家に附物で柱礎になる女房がなくては兎角身上も直らぬ道理只今お咄申しましたは愚老年來極懇のもので最前歸嫁た家の亭主は大分の商人であつたが色狂ひから身上を躰無にして仕舞た故據なく離縁になつて夫に懲りて其後は別に再嫁といふともせず寡婦て暮して居

つたもので心掛のよいことは又とあるまいと思ひます此方のことをも薄々知つて左様云ふお人であつたあら是非一所に稼て見たいと先方と咄は疾に極つて居ますが丁度よい御縁じや堀出物と云たなら京庵口のと御掛念もあらふが夫は舊來の御懇意から老人万々受合ますと頻に勸めて止まざるに室藏も持余まし扨も濃厚老人かな此樣な者に見込まれては雷鳴でも離しはしまいと心のうちに閉口しながら御敎諭は身にしみゝゝ感じましたが拙生が放埓から罪科もない女房に現在苦勞もさせまして去狀持せて歸して遣り今更勝手に女房とは出來たことでもありませず如何に拙生のやうなものでも何分心に落ちませんのでと今回は事故を一寸と製造て何卒御免を蒙りたしと斷乎云ふを老人はなる程と頷ひて夫は御尤のとじや夫ては貴君のは心障りは此とばかりと云ふもので外には何もありますまいねと念を推されて室藏は何たか薄氣味はよからねと今更唇の乾く間もなく男の口から急に變更もなり兼て全く左樣で御座りますと返詞をなせり。

（第　三　章）

サア〳〵室藏君居なさるかオヤ是は失敗かし店の張札何の間に何處へ引越されたか去とは不都合千萬なと溝板に杖突掛て當惑顏に立て居るを隣家の老婆が火を焼きながらもし貴老室藏君なら遂一軒さきですよと云れて始て心附なる程棟續きの一戸長家間口のさまも仝じければ是ではれのが家を違へ隣家の女房を張倒しおのが女房に伏るやうな間違の出來ぬともあるまいと我ながらおかしくて是は粗忽とソコヽヽ

に立退き室藏が家の雨戸に手を掛け力を極めて引明る機會に雨戸は内に外れ吾身もひとつに轉び込み倒れんとして壁に寄りヨロメキ乍ら立留るをヤア危ないと室藏が驚く面と顔を合はし是は失敬イヤ本町の御老人何ぞ急な御用でと云れて少々極り惡くでも御坐りませんがと苦笑ひして頭巾取て挨拶し室藏君早速のお話ですが此間の緣談ヿ先方でも是非御相談を致したいと達ての頼でありますし貴公にも今一應お打合をもした上と心では存じながら此程から商用で豚兒が大坂へ旅行の準備其混雜に取紛れ未だ撿べて置なんだがと今朝始て暦冊を開れバ本日が黄道吉日で今年は此先善日がない來春と云つては延過ぎやう除引ならぬ今日の始末不意玉の嫁入は如何にも感心されまいが媒妁役に負て貰い先づ此事を聟殿の室藏君に注進してと息を切て參つた處嫁御も程なく參るで御座らう何はなくとも此儘ではと先に立て尻引からげ其處等に落散る古足袋脚半拾ひ集めて忙敷屛風の陰に踞ねたる事故の動靜尋常ならず今燒て來るばかりの騷ぎに室藏は呆れ返りて物も云はず彼時女房を貰ふといふとアノ樣に肝煎て切角老人が進めたを直にも斷り惡い故生返詞して置たのは重ねて堅く斷る積り彼后何の音沙汰なく其まゝに打過たれば最早此方は取消しと忘れて居つたは不念であつたかこは叶はし涌て出た押掛嫁老人の深切にも程がある飛んだあり難迷惑だ遲蒔ながらいつそのと一擧斷乎鎖港付てと思案して見たものゝ何を云ふにも老人がイソ〳〵して彼是と差圖するに今更異狀も云出し兼ね煙に卷れて茫然たるを老人はもどかしがりて室藏君今夜は若返りのれ聟君だ其頭は如何したもの雀の巢も今ではいつか通り越して鳶か烏も住みそうなさま今

から床屋に往なされて歸りに一風呂這入たなら其襟許の黑澤些とは見らるゝとでおらう老人が此處は引受ますとはや追立らるゝ次第に至り項垂れし首やう〳〵揚て據なく手拭引き下げ到頭湯沐に出掛たり跡で老人は其處ら掃出しやれ〳〵商賣にかまけることとは云ひながら如此掃除がかへないでは貧乏神が動もすれば此處に御神輿をも据る道理序にこゝをも如此してと棚の隅から流しの下迄舊より猫の額程の領分チヨコヽヽと片付てサア是でよい一服と煙草燻らして居る處へヘイ表の内田て御座りますれ誂をと御用が一升樽置て行く入違ひに室藏は香水をプンとにほはせて何年振でかの光澤のある頭髮額や鼻の先テカヽヽと光らしながら歸り來る了得は昔の道樂の面影何處やらに殘りてか萬皿な男子とも見へぬのは是も遣ひ果した遺物なるべし何處でも最燈火の點く頃ドリヤ嫁御の出迎ひに途中までもと老人はマメ々々敷出掛しか頓て二三人の音足して此處だ々々々と先に立て老人は入來り風呂敷包み車夫の手から請取御苦勞ですといふを合圖に祝義とも附かず骨折とも云はず幾干か攫ませて車は引取らせ立替て入來るは是ぞ嫁御寮と見るは僻目の紛ふ方なき當の敵なり老人は手を取らぬばかり此方へと云ふ差圖に從ひ間の惡そうにモヂヽヽして老人を楯に取りて火影に座るは緣日などで植木屋が未た見世を開かぬ先に如何な美敷菊花が來たものかと荷を搔分て見たきさま女は女幾歳になつても嫁と云れていと耻敷風姿の見ゆるは是又理なき情なるべし土瓶のツル流しのカメ松薪と火吹竹で島臺の名目丈は揃ひたり白髮は刺身の妻に見せオゴは昆布の代表者となり鰹節のかたい處に目出たい種をまきするめと些古事附の茶番め

きたり昔時の身代で嫁貰ふと云つた日には見合とか結納とか半年も前からの仕度に双方の親類が入替り立替りれめで度の百遍も云つての揚句いよ婚禮といふ時は隣町のもの迄が打揃ふての出迎に町内は弓張灯燈で白晝の様横町へ入てわづかに暗夜を見付て丁稚が立喰をする程てあつたが漫に以前をも思ひ出せど又ズット古昔を考へて見れば彼豐太閤が尾張國中村の一百姓であつた時破缸敗席で婚姻の式を濟ませしといふ戰國に比ふれば太平の御世の有難さ是も過分の至りと彼是と只觀念するのみのとなり老人はイヤれ目出たい三々九度もわざと形はかりにして四海波ゑづがふせ家の寝ものがたり跡はゆる々々御勝手の明日の朝の飯拵へ御如才もないとながら何から何迄女房の役萬端宜く賴みますぞへイヤ未だ忘れた酒屋も八百屋も魚屋も代ひは先刻渡てあります間違はぬ樣ゑて下されドリヤ老人はれ開きと茶碗で傾る酒機嫌一盃々々又しても老人堅氣の無一酷此方のことは耳にも掛ずおのが云事いひ盡して尻引からげて杖輕く頓て其まゝ立去りぬ室藏夫婦は老人を門まで見送り禮謝を述べ別れて再び立戻る折に始て室藏ハ女房の顔面を熟々見て是は々々と膽を潰ぶしヤアお前は舊の女房じやないか道理こそ見たやうなと先刻から不審してあつたよもやれ前がわしの家へ戻つて來やうと夢にも知らず能く似た婦女がゐるものだ解めぬことと思つて居たが幾多苦勞しやつた故か年が寄つて何處となく面勞がしたものでフト見違ひはしたものゝ無事であつたは目出たいこと彼老人の世話とは云へ如此して再縁して來るには定めし譯のあろうもの委敷咄して貰いたいと云には女房は膝を進め胸の邊へ手を添へツヽ襟元一寸くつろげてアノ貴君が放蕩

を見世の者がよいとに番頭始め手代までテンヤワンヤの不始末で破産したのを見るにつけ一旦去られた女房でも悔しいとは諦められず如何にかして細くとも行末煙りの絶へぬ樣再興してと思込み女の力に彼是と心の丈は焦思ども第一に貴公の身の置所夫さへに分らぬ次第誰を相手に談合ひ苦樂を分んやうもなくなさけない身の上と日比歎ひてありましたがアノ本町の御老人態々尋ねて下さいまして疾から搜し尋ねて居ました室藏君の居所も是々とたしかに分り段々近所で檢索て見れば室藏君は商賣に朝から晩まで間隙なく脇眼も振れず稼ぐ事舊の室藏君でない今は打て變りし樣子愚老も感服致ました是では身上も保てませう處でれ話を致たいとがありますが室藏君の身代が潰れて片無になつた折道具諸式夥敷拂ひ物になりました其中に古い掛硯が一箱あつて光琳風の青貝蒔繪愚老は何も分らぬが一寸形容のれ面白ので愚老が是を買ひませうと道具屋に分金出して賣て貰ひ持て還つて引出しを明て見やうとした處が鍵が後家で役に立ず何ゃ來る錠前直しなせか今日は合惡見ねずと樣々にひねくり廻し火箸取て氣永にこぢヤットのこと明て見ると不審や白紙に包である封じたまゝの上書に大升の當り無盡と認てあるは室藏君の正な手跡大升の賴母子講は愚老共も這入てをつたが百圓取て滿會なり了得は大家此大金硯箱へ仕舞込で其ままにしてありしと見ゆと打驚ひて其金を直ぐれ返しをと思ふにも貴公の行方も知れず獨り困つて居られましたが室藏君も斯々で今は特の外の稼手故是非今一回夫婦と成て供稼に稼だなら必す仕出すとであらうれ預り申して置た此百圓利分添へて三百圓是をれ前に渡す程に嫁入してれ遣りなさいと夫は〳〵

深切なお言葉妾もシミ々々涙にくれ此世の中は人の物懐へ手を入れて取らぬばかりの心情なるを如何に舊の懇意であるとも買取た品物から湧て出たこのお金利子迄多く附てれ返し下さるは有難いお方じやと手を合はして拜みましたと懐中搜り胴卷解て三包の紙幣目の前へ押並べたり室藏はヒタと呆れてか組だ腕を解もせず首を垂れて思案顔女房はツクヽヽ覗き込みお前さんマア其樣な譯で以前の身上に競べては指たるれ金ではありませぬが今日の百圓ハ昔時の一力にも增ると云ふもの是から此お金を資本にして何歟一商賣始めたなら些は樂にも成ませうと鄭重に進めしに枯木ヾ花を開かしたる春ハとくこそ此家に一陽來復を催せしと思ふばかりの有樣なるを室藏は何思ひけん其紙幣は只一瞥視しのみにしてイヤ切角の厚意なれども此金は資本に回ハすとは出來ない。

《第四章》

怪力山岳を拔く蓋世の英雄も亦夢の間の一炊飯の粟津の腹が減ては流石に騅も逝なやみ叱咤三軍を麾て獰猛天下を動かせし豪傑も城山一片の露と消ては鬼百合の花只秋風に靡くのみ如何に昔日は大分限に活計とは云へ一敗既に地に塗れては降軍の將校亦幾許の直打もなく湊川浮寐の床の伸あくび嗚呼とばかり歎息の聲を殘すも墓なきためし元より細大の差別はあれど室藏が一身の上一家の事に比較てはおなじ地位に立つといふべく今は天秤棒一本に三寸の息を繫ぎ吾身ひとつの外に何もなつ豆賣のあはれな有樣を斯る零落をば見兼てや親切にも女房迄世話をして一旦取失ふた大金を格別の利分を添へて返して呉れ

たのは昔時は知らず此末世他人の物をも奪ふと云ふ不道徳に競べて見れば稀特にも又ない咄し何は兎もあれ此極貧の苦しい中震へ付ても手を出すは愛憎氣のない女生徒の頭髪結はねど知れた束髪と室藏は思ひの外に首を捻り彼是不承知を云ふものから女房もひたと呆れ返り切角是程迄にして呉れた彼老人夫では何とも云譯がありますまい串戯にも程があると疊叩て意見云はうとはして見たが克思案した時には是は何でも本氣ではない餘り貧乏に暮して居たのが俄かに大金を見たもの故万一として神經の狂ひの出たのではあるまいかはて困つた飛んだ事に成たワイと女房は大心配亭主の顔ばかり見詰ておつてオロ々々してはや涙組むを室藏は徐に諭して此樣に心に掛て下された有難い金員の事資本には出來ぬと言ふも餘りすげない申分身の程知らずの暴言と一も二もなく言はれもせうが是には少し譯のあると實は以前の拙子が身の上又今日の此身體世間の人に云はして見たなら如何評判をされやうか思い當るともあれば纎悔咄のやうなれど今打明て談した上此金の計ひ方其折如何ともせうものと温湯に口を濡ほしながら拙子の素性は内君にも豫て申して置た通り中國の西の果のものであつたが維新以來國許の城下は殘らず衰微して是迄立派に暮したものさへ立行方も出來ぬ有樣況てや其日暮しのものは幾許齷齪思ふても人力車を挽くには乘人なく見す々々口の干上るばかりコリヤ堪らぬと一趣向一人ものゝ氣安さを田畑一枚持たぬ身は些の雜具を賣却し路用の足しにすほうなる故郷を後に旅立て先づ大坂に着て後何がな商賣をと心掛け内々種々探て見たが一旦大層に取立た東西の紡績所今日は次第に衰へて其他の工業何一ッ殆振ハ

ぬ大不景氣斯と聞ては捨小舟取付く島もなか〳〵に鼻の下も倍々干きて果は旅路の草枕野末の露と消やせん油斷のならぬ身の上なり早此上は東京で一工夫して運拙くは海川に身を沈めても都の土とならうものと覺悟を極めて來て見れば此地もおなじ不印で資金を握て居るものさへ此不景氣には行詰り手足も出ぬと云ふ事故田舍者の文なしが何で世過が出來やうかと此に始て國を出た大失策を悟れどもモウ遲まきの唐辛しからい浮世に住む仲間紙屑買でもして見やうと銀坐通の夜店を渉り古い籠に直を付て明日こそ屑は五左衞門と改名もしやう所其折此處を通り掛たは以前古鄕に住だ時舊藩の武臣で匹田樣と云ふお方親の代から一方ならず御懇意も下されて今と違ひ其頃は此方の身上も都合のよい折匹田樣が勤番で江戸へ往來なさるには御用立た金子さへ證文ばかり四五通は親からも讓られたが瓦解此方貸借も其儘棄捐となつて仕舞今更彼是云ふではないが現在事由も分つて居ると何とか振も附そうな手寄りて見んと思へども先は一向知らぬ樣子殊に身裝も大分立派此往還で言葉を易はし外見にも拘るやうではと匆々に其場を外し密に跡を尾て往ば邸は築地の町離れに練瓦造りの壯大搆へ短葉松の植込み玄關前から髭を生し如何にも堂々たる官員さまとは知られたり門の柱に打付てある名札街燈の影に透し見ば從何位匹田 某 と讀れぬ、テモ彼人が如何して此出世一躰小才氣はあつたなれど別に是と云ふ技術はなし云ゝ平々凡々たる人物扨も世の中は何でもないもの己が才を量りて遠慮するは馬鹿氣た譯何でも人間の利益は平等天から授かつて居るもので夫を分配さるゝのも申さば株金の利子を貰ふやうなものと此時から忽ち眼が暗く

なつて無闇無性に世の境界羨敷なつたのが今更思へは身の誤りサ此處で其の儘門から戻つて夜の明るを待兼て直に駈出して其家に至り勝手口から腰を屈めて此方の名前を申し出て下女に取次で貰はうとしたが下女はチョッと此方の擧動を一目みて怪敷思ひ中々取次さうにもせず書生と狐鼠々々相談して退去でも申付ろうな劍幕であつたのが折克主人公が來客を送て玄關迄出て來たので端なく顏を見合せて大層驚た樣子であつたが書生を呼で何やら云付早速一間の座敷に通し美敷羅氈布詰め名も知らぬ窓掛引き渡し遂ぞ見たともなきわりさまに肝を潰して扣て居るを主人は卷煙草薫らせながらヤア久々でお目に掛ります實は先頃も歸省の折に色々お尋ね申したなれど國許はやお立退で正しかなとか分らんで殘念ながら打過ましたが其後は何如なされたかお尋ね致さんやうもなく心には掛けながらと如才なく說き付られ震動り出してと思の外云ひ出し兼てあつたのを匹田は夫と知るものから時に貴公拙者も當時某省へ出仕して用度其他の事務を預り其の筋の商人から色々の買揚物取扱ふが役目であるが貴公もナント仲間に入り買揚物のある時に入札をして見たがよいナニ資本か夫は都合もあると故一時に納るものでもない金は其內三分一でも才覺すれば濟むとだ夫も拙者がよい樣に最初の分は前金同樣下金を計ふから何も心配には及ばない尤拙者の下役に兩人程の掛りがある是には跡で此位と手眞似をしての內證咄し實は以前の恩借金如何に此如な時勢でも決して不義理は致さぬが見らるゝ通り相應の構は張て居るものゝ內幕ハ中々の困難で弱り切てある處今何程と申しては返濟も致し兼るが此一條が首尾克出來れは夫を何卒返

金とも酬報とも見て下されと何もかも打明ての相談此方も困しい折柄ゆゑ何がなしに承知して宜う御座いますと云切て其日は分れ立歸りしが四五日立て知らせて來たは入札觸言はれし通り鐵面皮當日出て入札せしが果して落札に成たのは全く例の匙加減何もかもよい都合にお下金もあつた故色々入費を差引て一寸利益も見へたので夫から追々匹田に縋り入札と言ふ入札を手廣くやつて見た處固より内證も知れて居りトン〻拍子に利益が付き夫にはズット上の方に手蔓を求めて此處彼所地所家作の拂下定期米の賣買込夫々に手を廻し殘るとなく買廻ればわづか二三年立か立ぬに數十万の大分限御用達の何某とて一寸道上で往逢ふても彼がと云ふて人に顔見らる〻迄になつたのも舊ハと云へは止むを得ぬ苦し紛れに出たなれども他人に縋り手くらうがましき此仕業男子にハ又あるましき卑劣手段是が當時と云ふものであるかは知らぬが扨も〳〵見下げ果た世の中じや信用を吾から落す商人社會天道樣はおめこぼしが御座らうが室咲の梅の花實の成たためしのない無理かあつては永存はない道理何ても骨折た汗水から清淨な金銀は涌て出る拙子が一時大分限になつたのも舊の貧乏にあつたのも別に不思議はない咄し如此觀念して見た時ハ切角の厚意から贈られた金ではあるが舊を云へば是も矢張り一ツ身上から割出したのであるゆゑ今日拙子が正直正路に如此稼て居る身上の資本に組込む譯にはゆかぬ其處でひとつの考がへ拙子の胸に浮んだ。

（第五章）

時計の轢る聲チョン〻〻〻〻〻履の音コト〻〻〻洋漆塗の門の柱に下谷警察署と筆太に記してある表札を目當にして彼處からも此處からも建築屆や盜難屆受付に輻輳するを掛のものは受取て逐々調て銘書し是は何掛是は何掛と振分を付る中に。ナンダ。米金施行屆。イヤ。是は如何云ふ譯か米や金を施すのだナ。ナニ金が百圓米が六十俵近頃珍しい奇特なとだ誰だナ。コート當區内て施しても出そうと云ふのは先ヅ三四軒だが多分其内だらう。ヲヤ。ハテナ聞たとのない人名だが室藏と云ふは一躰何だらう中々の分限者と見えるが淨々知らなんだ書面には何とあるヱー近來世上不景氣云々私所有之米金前書之通り施行仕候依て日限中取締之爲巡査貳名現場御出張被成下度併て此段奉願候也ハヽア是も分つたが如何も不審なのは彼が本人と見ゐるが到底も施行など出しそうな人物てない併受付の權限外だ何しろ掛へやつて見ろと其まゝに出して見たが矢張此處ても議論がわつて何に致せ今迄一寸も聞たとのない人物克糺してと云とから室藏は控所より呼出され恐る〻〻首を垂るを掛は先ヅ其体を見るに汚れ切た綿衣一枚に汚れた小倉の帶一すじ猫ぢやらしに結だ處迚も施しなどは思ひも寄らず若施行てもわつた時には先陣掛て貰ひに出そうな人物故掛りは一層呆れ返り是は無益だ瘋癲だろう厄介なものが舞込だとは思ひながら其方が室藏といひますか。ハイ私室藏に御座りますと答ふるさま未だ正實の狂人とも見定め兼て掛は金百圓と米六十俵を施したいと云ふ書面て如何にも奇特な筋てはあるし且區役所へは屆濟にもなつたと云ふと旁何も當役所て別段彼是申す譯てもないが一躰商買は何をなさるゝか財産は何

程あるか是迄姓名も聞かんので何分委細のことは知らぬが莫大な米金今日施行したとても明日他人の厄介になる樣ては實に益もないことだがと云ふを例の室藏が身裝から不審起しての云分とは知られたり室藏は肩をつぼめヘイ御尋を受まして何とも恐れ入りました私は日々納豆を賣まして活計を立て居りますもの然るに近日子細ありて私が舊商賣を手廣く致しました比他人に預け置きました金子が圖らず手に入りまして全く不時の涌物故箇樣に思立まして。ハヽア左樣か。じやが凡そ施行でも致ものは區內でも先は大分の財產をも所持して十分商業も出來得るものであるが今聞く所では納豆を賣て居るとのこと元より身薄極まつた稼業じやのに切角出來た大金何も其樣に散さずとも夫を資本にして利益た上追て施行をもする方か順序と申すものではないか今回は思ひ止りて重て趣向したかよからふと職務離れての深切な說諭室藏は押返して實は區役所でも此事は御掛念にもなされまして色々御談も下さゐましたが折角思ひ立ました事何卒御採用を願ひます全躰指して御屆も致さぬ筈では御座りましたか元より身元もなきものか不相應な事であると御不審も御座りませうかと夫是兼て此旨を御屆申し上ますのてと思ひ入ての云分に左樣か夫ては據ないとは云ひ放てど尚心の內には納豆賣の癖に何の氣まぐれか切角授かつた大金を施などゝは片腹いたいよせばよいに馬鹿なことよと云はぬばかりのさまに見られぬ室藏ハ大喜ひにて飛んで歸り女房に向ひ瘦ても枯ても此拙子か眞の商人と云はるゝにはアノ金員を一文でも身に附ては如何ても心に落ぬのでおまゑとも相談して殘ず施行に向ることに先つ其筋の屆も濟だかサア是からは米の

買付夫も大方談してあるから明日は必ず引込む筈幸ひ隣家が明て居るから大屋さんに頼んだ處左樣云ふ事であるならば何も遠慮はいらぬと使ふがよいと云れたから米は此處へ積入として量り立の場所はコーと向ふの明地へ莚を敷て長屋中の方にお頼み申して手傳をして貰ふとし本町の老人にハ深切を無にするやうで申譯もないとながら事理を委敷噺した上是非出張して惣躰の取締をして呉るやう折入て頼んだ處老人も一旦は大不承知であつたものゝ段々此方の存意を嚙分て夫は妙だ大出來だ實に見上た計ひに行末が頼もしいと大層に感心して何ハ兎もあれ新聞の廣告が第一だ夫ハ老人が引受た當日は店の手代貳人と子僧を添て手傳に上ると云から夫では手代の方々には金錢の出方を一切願ひませうと云つて置たが是で何もかも役割が出來て安心だマテゝゝ未だ店請の處へ屆て置くのを忘た夫は妾が翌の朝坂本迄行く序に一寸寄て參ませうと夫婦は種々相談して頓て施行の當日にもなれば新聞紙や其他の廣告市中に發と廣まりしを傳へ聞て多く者の苟にも貧民部分に籍を留其活計に困む輩幼を抱き老を扶け明るをまたて押掛來りヤア施しを出しなさると聞て參りましたがコリアー何處のお邸でありますか番地に違ひはありませんが幾ら先刻から捜しても何だか一向に分りませんヲヤ妾も拙子もと胡亂々々麻古々々するも道理九尺貳間の裏長屋入口に云々と記てあるを追々に目付出しソレ々々御覽なさい此裏屋へ大分衆人が這入る樣子何か札に書てある米金施行但し午前五時より午後四時迄納豆屋室藏コゝダゝゝと左ながら潮の涌がとく狹き路地も一杯に黒き人の山をなし混雜譬ふるにものもなく金杉坂本の通りより此方ハ谷中の邊ま

でもドヤヽヽと押行さまは酉の市も及ばぬ賑ひ是を見掛て思ひ付に一山一錢の蜜柑路端へ並て賣もあり團子鹽煎餅俄に戸板出して開店する老婆あり施行場は錐を立べき寸地もなく一時は互に押まヽに老人が二人子供が一人踏れて怪我をもする處やつとのとで巡査が制し如何やら無事て濟だのは芽出度事であつたとは云へ再囘危いとのないやう二日目からハ注意して青竹の手欄を設け人數を量つて入れた故此日も既に何事なく第三日目の夕方は米金全く施し切り俵の底桝の角最早一粒半錢を餘すとなくなりたれば室藏が望既に足り今は雲ゐの月清く心よ何の隈もなく是は寧そサバヽヽしたと本來の無一物何れの處に塵埃の掛る姿も禪僧に因みも深き納豆賣納豆々々と呼びなから悠然として賣歩行を彼が三百圓の施しをした納豆賣よヲヤマア彼人が感心なとねへ妾は納豆は大嫌ひだが左樣云ふ人の賣るのなら一ッ買て遣りませう納豆屋さん〳〵と此處でも彼處でもと評判次第に高くなり果は慈善納豆とか名を附て室藏が來るのを待受け買はぬものもない程なれは室藏が納豆ハ實に非常の賣高にて是迄の殆と二三十層の上に及ひ又琉球まんぢうは女房が一切受持て小店を張て商ふに是さへ餘程評判よく横町の燒芋屋の婆さんはよくない芋を賣るくせにアノ一酷は惡むべしだ有名の大福餅も壹錢は些と有難くない寧そ琉球まんぢうに限る夫に名體い慈善家だ買てやらんではと江戸子の氣追肌も幾許か助けて半年も立か立ぬに大分の利益か上り算盤取て見た處ザット四五百圓は慥に殘り例の施しから世間へ名を賣り追々懇意のものも殖へ信用も亦出來たれは此處か第二の身上に取付時と思案して女房とも相談し湯島にある麹や味噌の問屋

の賣家土藏附で千圓なるを有金に他借の金加へて買受此處に移れば評判の慈善納豆が開店したとて一層の大繁昌東京中の問屋の株三分の一は持た位身上はメキヽヽと延ひて隣の明地圍ひ込で土藏も家作も立足す次第手代小僧も店には置ど主人は毎日闇いから出て納豆賣る始末ゆゑ暮向は以前に左のみ變るとなく金ばかりが差引居すくまりになる道理されどそれは商賣で公債やら株券やら此處彼處に出して一時間でも金遊はするとはなく南京鼠の節季前といふ振て隨分みゝちく操り廻せば此方でも利益ハ元より餘る程なり地面も安い時に手に入れたのが多く近來の上りを見て山の手邊の分は除々賣り出す位のこと何から何迄割のよい處へは手を出さぬともなく手を出した處は利益ぬといふともない氣運に當れど何ッ迄も是が續くものでもない此邊等が丁度見切り時と追々に手を縮めて近頃は何もかも廢て始舞貸金も大躰取立極々堅いものばかりに方法を仕替たれと夫でも是でも貴族院の議員知らぬ顏稅額には迚も六ヶ敷と見受られぬと他人の寳を數ふる近所の評判ナントゑらいものではありませんか世に長者二代なしとは申しますか一代に身代を二回迄作り出したのはまづ彼人に限るやうに思ひます明治紳商傳明治巨商傳其外にも今日の大賈豪商と云はるゝ人の一代記さも立派らしく記立たものも澤山にありますか表と裏とは大違ひで多くは政府の擧動を考へ昏暮に貴權の門を叩きイヤハヤ鼻持もならぬ苦しい境界、元來商人は錙銖の利を爭ふて算盤珠から數へ上たが當然で有名の紀文でも此原則は免れなかつたが今日の先生達は卑劣手段で掻廻しチョコヽヽヽと身代を作り上げ他から紳商とか豪商とかはやし立ればよい氣になりれのれ

も得々然たるは何と商人社會も闇黒世界になつたではありませんか此納豆賣などが實に明治聖代の眞商でかなありませう。

短篇小說　明治文庫第十五編　終

版權所有

明治廿六年八月三十日內務省許可
明治廿七年八月七日印刷發行

明治文庫定價	
一冊(二百頁)	金拾五錢
六冊	前金八拾五錢
十二冊	前金壹圓六拾錢
廿四冊	前金三圓拾錢
郵稅一冊六錢	

編輯兼發行者　大橋新太郎
日本橋區本町三丁目八番地

印刷者　曲田成
京橋區築地二丁目十七番地

印刷所　株式會社東京築地活版製造所
仝所

發兌元　博文館
東京日本橋區本町三丁目

世界文庫目次

獨逸アイヘンドルッフ男爵原著
阪田霧山人君譯

なまけもの

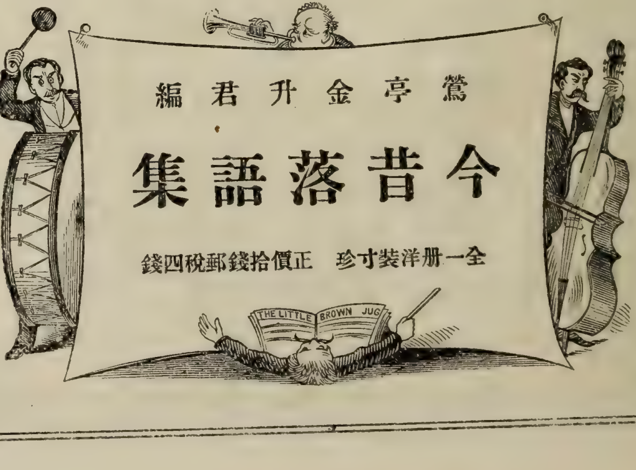
全一冊　洋裝大判　正價拾五錢　郵稅六錢

獨國文壇有數の詩人アイヘンドルッフ男が幽邃なる詩想と艶麗なる筆とを以て、畫かき出せる「なまけもの」趣向斬新奇妙神變不可思議、庭師となり、收稅吏となり、道を失ふて友を得、友を失ふて金を得、古城に身命を危くして、公園に名譽を博し、貴女に辱められて羅馬を去り、畫工に伴はれて維納に歸り、結局藝が身を助けて、戀人と偕老の契を遂ぐ、其間密かになまけものゝ實用を穿ちて、或は空想に神を飛はし、或は夢現に魂を迷はすなど、叙し去り叙し來て餘す處なく、滑稽洒落の中に、自然眞率の意を含み、縦橫無盡に寫し出せる好小說、三伏の炎熱一身を溶かすの折から、一本を求めて窓下に繙き給はゞ、讀一讀妙味愈深く、以て半日の暑を忘るに足るべし

- ●闇黑亞弗利加　六冊　一冊拾五錢　郵稅六錢
- ●大氷海　全　正價拾五錢　郵稅六錢
- ●コサァク兵　全　正價拾五錢　郵稅六錢
- ●鈍機翁冒險譚　二冊　一冊拾五錢　郵稅六錢
- ●(ロビンソンクルーソー)絕島漂流記　三冊　一冊拾五錢　郵稅六錢
- ●めをと　全　正價拾五錢　郵稅六錢
- ●大寶窟　二冊　一冊拾五錢　郵稅六錢

かはり合ひまして、かハりばひのあるや否やは、今こゝにいうを須ゐず、奇想は天外より落ち、妙思地下に湧く、來年のとならねど鬼も笑ふべく、詞は上品なれど佛も相好を崩すべし、かつて讀賣新聞に劇場の逸話をのせて、大喝采を博したる松葉子、今また少年諸君のために、這の好笑話を纂む、讀まん人まづ頤の外づれ、臍の落ちぬ、要心してかゝるへし

落し話の世にもて囃さるゝ久しけれど、未だ大集の書無りしに、本書は昔〳〵爺さ婆さの洗濯より洗ひざらひ拔萃し來り、安樂庵策傳、露の五郎兵衛、鬼の武左衛門等の作に係る笑話は言ふも更なり、下りて三笑亭可樂、朝寢坊むらく、林家正藏を初め、三馬、一九其他の滑稽家が、年々作り出せし落語百部中より、殊に面白きものを網羅し一々滑稽評を附し、ポンチ畫を挿入したる美麗の珍書なれば、普通赤本の比にあらず、尙閼根默庵君の序談洲樓燕枝君より編者へ送られし書狀共に錦に花を添へ、一讀抱腹絕倒頤を紛失させ臍に茶を沸さしむるの奇書と言ふ可し。



短篇小説

明治文庫

毎月二回發兌◎前篇讀切◎彩色密畫挿入◎洋装大判美本

正價一冊(二百頁)拾五錢◎六冊前金八拾五錢◎二十冊前金壹圓六拾錢◎郵税一冊六錢

◉第壹編目次

嚴谷漣山人著　辻占飴　黒衣鷺　山時鳥

武内桂舟密畫　秋の蝶　白面鬼　京自慢

けながさ　梢上月　花の旅

◉第貳編目次

雪折竹　福の神　佛覽一紙　薄命の鈴子　姥く櫻　鷺鷗

小林永興密畫　川上眉山著　村井弦齋著　廣津柳浪著　嵯峨の屋著　石橋思案著　江見水蔭著

◉第參編目次

江見水蔭著　劍客　骨武者　信天翁　漁郎　一夜の宿

武内桂舟密畫　初嵐　畫師　初楓　わかれ霜　雲烟過眼

疳癖太守　斷絃　故家水　書師の妻

◉第四編目次

縁外縁　媒介人　新學士　風流狂言記　隅田川の秋　庭の教子　都土產

小林永興密畫　幸田露伴著　嚴谷漣著　多田漁山著　川上眉山著　田山花袋著　嵯峨の屋著　渡部乙羽著

◉第五編目次

山田美妙齋著　みゝすはれ　紅墻記　大龍王　くされ縁　春の花鳥　都門雑興

三島蕉窓密畫　曙の春　頼朝の墓　田舎聖者　ゐなか娘　鴉の道行

月花の見立　雪折れ竹　古切手　母のなさけ　戸隱山紀行

◉第六編目次

忠義お安　當世二人女婿

武内桂舟密畫　櫻痴居士　學海居士

◉第七編目次

中村花瘦著　俄長者　俠魂

三島蕉窓密畫　狂蝴蝶　片時雨

合歡花　破鏡

◉第八編目次

村上義光　若水　國民大帝　廿日月　滑稽二人男　夜行汽車　江戶舞踏會　青春夢

富岡永洗密畫　山田美妙著　嚴谷漣著　嵯峨の屋著　田山花袋著　西森骨皮著　松華庵著　眼花道人著　原抱一庵著

◉第九編目次

渡部乙羽著　浮田一蕙　戀の今樣　神田七不思議　故郷の錦繪

寺崎廣業密畫　拾扇　京屋娘　新奥の細道　吉野初瀬花摺衣

邪正一如　こぼれ梅　玉川河童泳記

◉第十編目次

僞稱紳士　評判一人娘　母心　鏡花縁　銃獵　薄暮山

富岡永洗密畫　櫻痴居士著　漣山人著　嵯峨の屋著　松居十八公譯　松華庵著　田山花袋著

◉第十一編目次

遲塚麗水著　月雪花物語　心字池　偕樂園梅

寺崎廣業密畫　懸想文賣　寶刀　啼美人

餓鬼　書師　新佐世姫

◉第十二編目次

思案外史著　羽拔鳥　青大將　美人車

武内桂舟密畫　わが戀　斷腸花　片破月

禿木魚　可愛い子

◉第十三編目次

吉野拾遺名歌譽　世の中　未開紅

水野年方密畫　依田百川著　嵯峨のや著　幽芳女史作　南翠外史補

◉第十四編目次

宇田川文海著　爪の痕　滑稽演劇犢鼻褌　萬金丹

水野年方密畫　和氣清麿　胸算用　院本信夫摺

藤袴　竹生島　葉末の露

◉第十五編目次

迷霧　裸美人　片時雨　星　加利保留尼亞　若木櫻　香の雪　納豆賣

幸田露伴　尾崎紅葉　漣山人　小金井喜美子　村井弦齋　柳園主人　廣岡柳香　睡花亭主人

版權所有

巖谷漣山人編

日本昔噺（にほんむかしばなし）

一名昔々文庫

毎編有名畫工之密畫挿入

桃太の遠征、猿蟹の戰爭、兎の功名、雀の報恩、是等はお伽ばなしの傑作と仰がれて幾百年來幼年諸君に謹聽せられ、秀吉も家康も西郷も木戸も、皆一たびは是等の談を無上の講話とも小説ともして喜びたりき、されど錦の衣裳も目馴れては麗はしからずと、幼年文學の大手筆たる巖谷漣山人が、敏妙無類の奇想を凝らし快筆を揮ひ、古搆に就て新案を立て一層面白くして有益なるやう綴らるゝに、畫は當代十二名家を撰びて毎冊各家の精妙なる繪畫を加へ、全部十二冊として毎月二回發行するもの、即天下無双の昔噺文庫なり

日本昔噺目次

第一編　桃太郎
第二編　玉の井
第三編　猿蟹合戰
第四編　松山鏡
第五編　舌切雀
第六編　大江山
第七編　花咲爺
第八編　俵藤太
第九編　かちかち山
第十編　瘤取り
第十一編　文福茶釜
第十二編　物臭太郎

第二編　玉の井（八月五日發兌）

尾崎紅葉山人序文　巖谷漣山人編
佐々木信綱先生唱歌　小林永興氏畫

全部拾二卷
毎月二回發兌
洋裝大判美本

本誌定價
全一冊金　五錢
六冊前金　廿七錢
十二冊前金五拾錢
郵税一冊金　二錢

株式會社東京築地活版製造所印刷

正價一册拾錢 全十二册壹圓八錢 郵稅一册二錢

幼年全書

全部拾二卷 出版完成 每編密畫數個挿入和裝

全部出版完成目次

永江正直君編

繪入日本歷史

紀元々年神武天皇御即位より明治二十三年帝國議會開會に至る迄二千五百餘年の事蹟、その要を摘みて簡にして遺らさず、幼兒をして國躰を知らしむべし

佐々木信綱君編

繪入幼年唱歌

唱歌の人を感化する其力や大なり、從て切に歌の善惡を選ばざるべからず、此書は佐々木先生が自他の作の尤も幼年の唱歌に適したるものを選集せられしなり

坂下龜太郎君編

繪入幼年歷史

日月の經過は一生の歷史なり、幼年の時は建國の時代に同し、一事一物皆一生の歷史の端緒を開く、此書は一生の創業歷史の事實を徴するに不可缺の要書なり

鈴木倉之助君編

繪入修身讀本

已に我身ある即父母兄弟姉妹あり、君臣あり、夫婦あり、國家あり、即ち此等の關係に處する一定の道あり、即修身是なり、此書を讀まば罪惡の人たるを免れん

鎌田勝之進君編

繪入日本地理

日本に住みて日本の地理を知らざれば、恰も已が家の廣狹所在を知らざるが如し、此書を讀まば一室中にありても、日本國中を漫遊するに勝れる智識を得べし

坂下龜之郎君編

繪入幼年讀本

兒童家庭の讀本は面白くして有益なるを要す、此書は此目的を以て尤も興味ある種々の談話を春夏秋冬に配して記したれば快樂の中に智識を開くこと大なり

田中勇吉君編

繪入作文大意

筆もて思を述ぶるを文と云ふ、人もし文を作るを知らざれハ殆んど啞と異ならず、此書ハ幼兒に作文を教へんがため極めて簡易に有用なる方法を示したる者なり

坂下龜太郎君編

繪入幼年遊戯

遊戯の幼者に必要なるは殆ど飲食と等しき者なり、遊戯の種類極めて多きも善きあり惡きあり、選ばざるべからず、此書に尤も有興有益なる遊戯のみを集む

坂下龜太郎君編

繪入理科讀本

日、月、星、地球、空氣、人、動物、植物、鑛物、器機、雨、風、雷、地震、何を以て然るか、如何にして生存し發動し顯出し消長するか、此書を讀むべし

坂下龜太郎君編

繪入遊戯算術

算術は尤も必要なる學科なり、此書は其必要高妙なる數理を遊戯快樂の中に能く習得せしむるが爲にす、如何なる難問も讀みもてゆかばナいル樣さ合點すべし

加賀喜一君編

繪入萬國歷史

世界萬國あるを知るも、古來何處に於て何人か何事をなしたるか其大要を知るもの少なし、此書を見は古今萬國重要の事蹟は一目瞭然として明らかなるべし

坪谷善四郎君編

繪入商業讀本

商業の大要は商人のみの學ふべき者にあらず、賣る人買ふ人賣らざる人買はざる人、荷くも社會に生存する人の知り居るべき實地經濟の大要を教ふる書なり

圖書出版
東京博文館